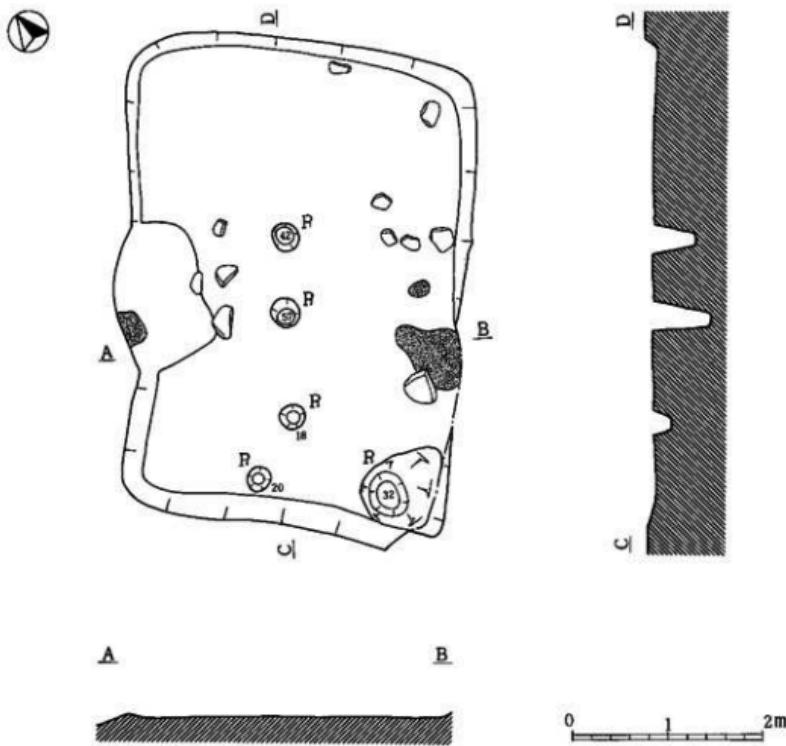


土器観察表

No.	種別	器形	寸法(cm)			色調		成形・調整の特徴	備考
			口径	底径	高さ	外面	内面		
1	土器	环	12.4	6.4	3.8	蒼白	黒	クロナデ 体削内削ミガキ 回転木切り	
2	"	"	6.0	"	"	"	"	"	"
3	"	"	9.2	"	"	"	"	"	"
4	"	"	12.2	5.0	4.0	"	"	"	滑走ヶズリ
5	須志	"	13.6	"	"	灰青	灰青	"	
6	"	"	6.8	"	"	灰白	灰白	回転木切り	
7	"	"	8.8	"	"	灰青	灰青	"	回転ヘラヶズリ

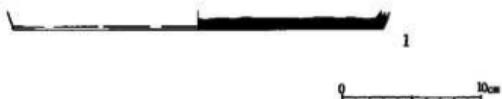


第165図 第38号住居址

第38号住居址

遺構 C—5区にあり、東側が37号住居址と重複している。

東西364cm、南北503cmの細長い隅丸方形プランを呈する。37号住居址と重複した東側の一部以



第166図 第38号住居址出土土器

土 器 觀 察 表

No.	種別	器形	寸 法 (cm)		色 調		成 形・調 整 の 特 徴	備 考
			口径	底径	器高	外面		
1		内耳	26.0		略高	略高		須恵質

外は遺存状態は比較的良好。壁は、傾斜をもって掘り込まれ、壁高は、東壁23cm、西壁8cm、南壁6cm、北壁14cmを測り、南、西壁が浅い掘り込みとなっている。床は、中央部が平坦、堅緻で良好であるが、壁周辺は起伏が著しい。東壁沿いには扁平な礫が床面上に散乱している。カマドは西壁中央に設けられている。150×100cmの広い範囲にわたって粘土が散布し、一部には焼土も存する。カマド前面には長さ30cm前後の扁平な礫があることから石組み粘土カマドの可能性もある。柱穴ピットは、長軸線上に4穴、南東コーナーに1穴ある。長軸線上のものは、P₁(30×26cm、深さ42cm)、P₂(30×24cm、深さ57cm)、P₃(27×25cm、深さ18cm)、P₄(24×24cm、深さ20cm)で、南東隅のP₅は、擂鉢状の落ち込みの底面に47×40cm、深さ16cmのピットが掘り込まれている。

遺物 本址の出土遺物は大変少なく、内耳(1)が1点出土したのみである。(1)は底部のみで、胴部の破片が確認されなかつたため器形は判然としない。須恵質のつくりで、焼成は良好である。

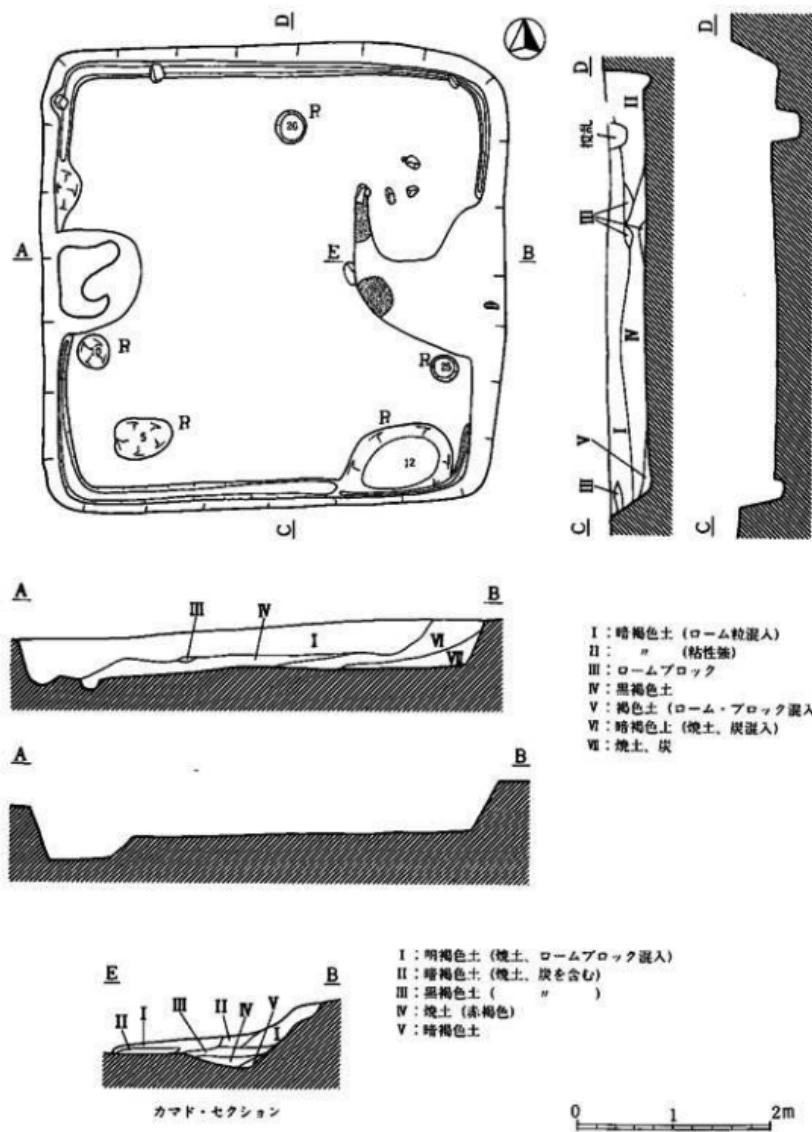
本址の所属時期はカマドから出土した内耳土器の存在から中世に属すると考えられる。

第39号住居址

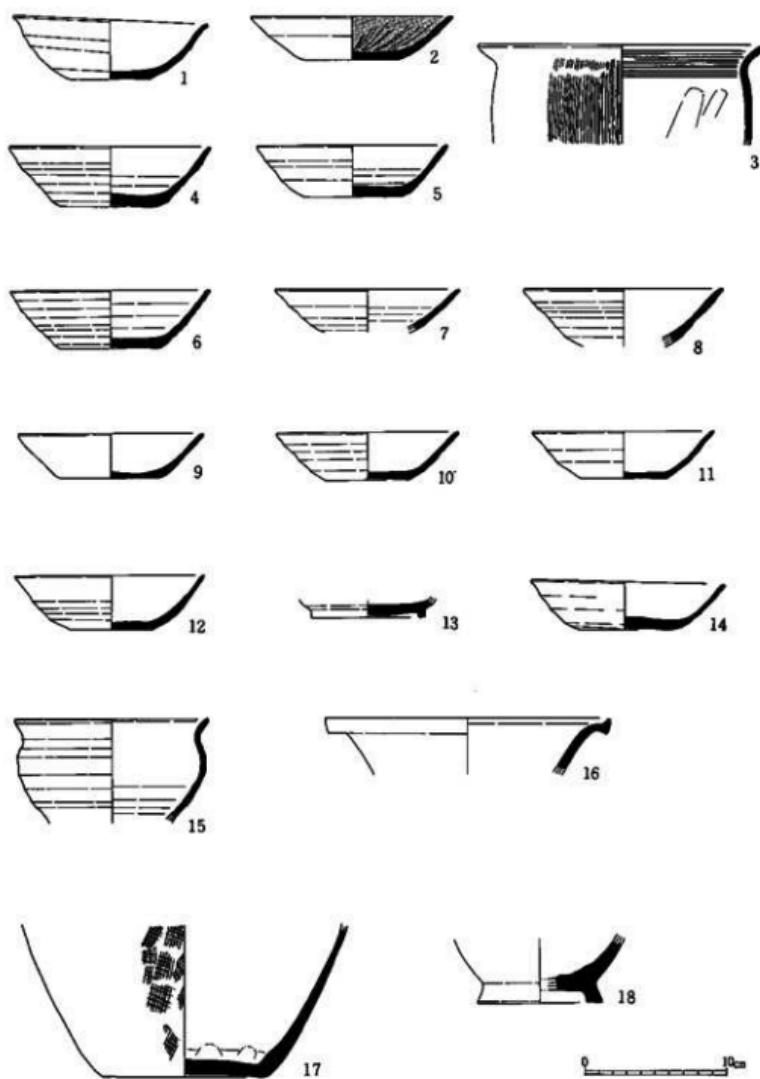
遺構 C・D—6・7区にあり、南は40号住居址に、北側は35~38号住居址にそれぞれ隣接している。

遺存状態の良い住居址で、礫混りのローム面への掘り込みによって構築されている。覆土は、上から順にローム粒を混入する暗褐色土、暗褐色土、黒褐色土となっている。

東西490cm、南北480cmの方形で、整ったプランを呈する。壁は、垂直にきれいに掘り込まれ、壁高は、東壁72cm、西壁40cm、南壁37cm、北壁50cmと本遺跡検出の住居址の中では深い。周溝はカマドの部分を除きほぼ全周する。幅20cmと幅広で、深さ10cmと深さも深目である。床は平坦で良く踏み固められ堅緻である。ピットは、P₁~P₅の5箇所があるが、柱穴と考えられるものはP₁(34×30cm、深さ26cm)のみである。カマドは、東壁中央に設けられている。カマド内には礫はないが、カマド前面に礫が散乱しているので、石組み粘土カマドの可能性も強い。粘土の散布は幅160cm、奥行160cmの範囲で、大きなカマドと思われる。このカマドの反対側の壁、西壁中央にカマドの痕跡と考えられる掘り込みがあり、カマドの付け替えがなされた可能性が高い。南東隅に



第167図 第39号住居址



第168図 第39号住居址出土土器

第Ⅳ章 調査遺跡

土器観察表

No.	種別	器形	寸法(cm)				色	調	成形・調整の特徴			備考
			口幅	底径	器高	外徑						
1	土師	壺	13.3	5.6	4.5	赤褐色	赤褐色	黒	ロクロナデ 回転糸切り			
2	*	*	14.2	6.6	3.0	暗褐色	黒	*	体部内面ミガキ 回転糸切り			
3	*	甕	20.0			明褐色	明褐色	明褐色	体部外面ハケメ 内面ヘラナデ 口縁内面カキメ			
4	須恵	壺	14.2	6.8	4.2	茶灰	茶灰	茶灰	ロクロナデ 回転糸切り			
5	*	*	13.4	6.8	3.6	*	*	*	*			
6	*	*	14.0	6.8	4.0	灰褐色	灰褐色	灰褐色	*			
7	*	*	13.0			暗灰	暗灰	暗灰	*	底部ヘラケズリ		
8	*	*	14.0			*	*	*	*	回転糸切り		
9	*	*	13.0	6.4	3.1	灰	灰	灰	*	*		
10	*	*	12.8	6.0	3.4	灰白	灰白	灰白	*	*		
11	*	*	12.8	6.0	3.3	*	*	*	*	回転ヘラケズリ		
12	*	*	13.2	7.5	3.9	明褐色	明褐色	明褐色	*	*		
13	*	*	8.0			暗灰	暗灰	暗灰	*			
14	*	*	13.0	6.2	3.5	灰白	灰白	灰白	*			
15	*	体	13.6			灰	灰	灰	*			
16	*	甕	20.0			暗褐色	暗褐色	暗褐色	*			
17	*	*		11.6		暗灰	暗灰	暗灰	タタキ 底部外面ヘラナデ 内面指圧痕			
18	*	甕		8.6		紫	紫	紫	ロクロナデ			

あるP₄は、110×65cmの精円形を呈し、深さ12cmの擂鉢状の掘り込みで、貯藏穴的性格を有するものであろう。

遺物 本址の出土遺物は須恵製品を中心に図示できるものだけで18点を数える。須恵器の壺は11点の出土をみた。高台を有するのは(13)のみで、他は同一の形態をもつ。ロクロナデによって成形されている。底部は回転ヘラケズリが(9)に認められる以外はいずれも回転糸切りによる。鉢(8)、壺(10)もロクロ成形による。(10)には紫色の自然釉がかかっている。甕(11)は調部下半が出土したのみである。調部外面はタタキメ、底部付近はヘラケズリによって調整されている。底部内面には指圧痕が認められる。

これらの遺物の様相から、本址は9世紀前半に属するものと考えられる。

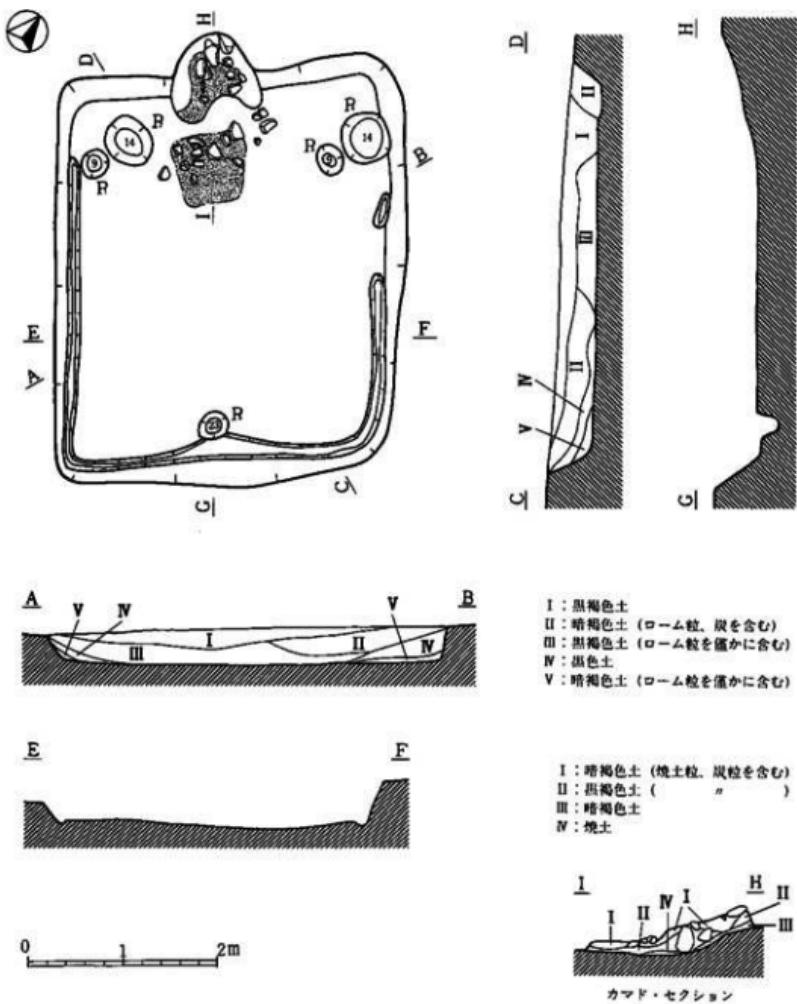
第40号住居址

遺構 C・D-7・8区にある。

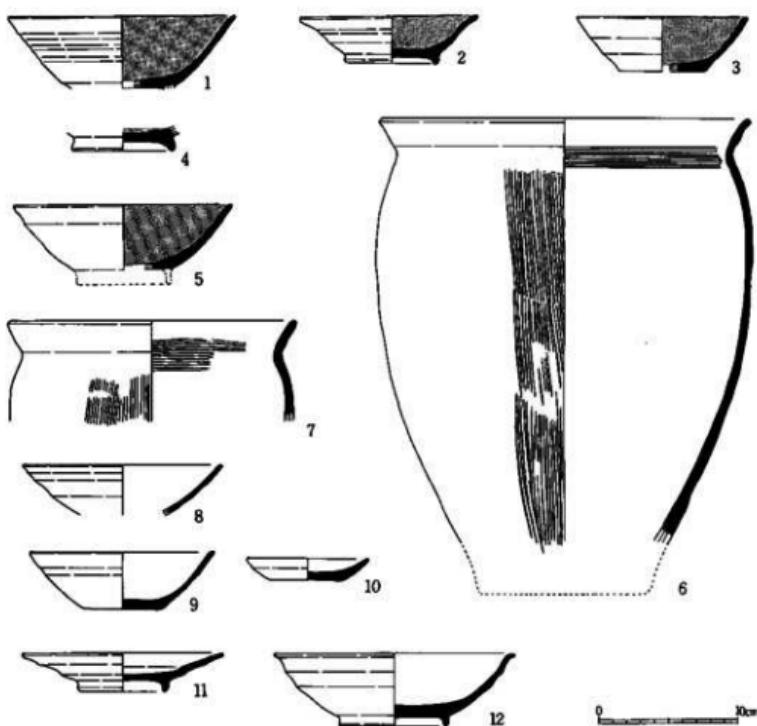
覆土の状態は、上から順に黒褐色土、暗褐色土、黒色土がレンズ状に堆積し、壁際にはローム粒をわずかに含む暗褐色土が入り込んでいる。自然堆積の状況を良く示し、攪乱は入っていない。

四壁は完存し、遺存状態は極めて良い。530×460cmの方形プランを呈し、壁の掘り込みは垂直のきれいな立ち上がりを示している。壁高は、東壁42cm、西壁66cm、南壁50cm、北壁30cmを測る。周溝は、東、南、北壁下にあり、幅13cm、深さ1、2cmと極めて浅い。床は、中央部からカマドにかけての部分が良く踏み固められ堅緻であるが、壁周縁は中央部より幾分高く、軟弱である。カマドは、西壁中央に設けられている。幅95cm、奥行80cm、壁外に造り出されている。カマド前面の床上には、カマドに用いられたと思われる礫が散乱し、カマド部分にも礫、粘土がみられる事から石組み粘土カマドであったと思われる。カマド内および焚口周辺には焼土が頭著である。柱穴と思われるものは東壁沿いにあるP₁(30×25cm、深さ23cm)のみであるが、他にカマド周辺にP₁、P₂、P₃、P₄の4穴がある。ともに10cm前後の浅いものである。

遺物 本址の出土土器のうち図示できるものとして土師器の壺、甕、須恵器の壺、灰釉の皿、



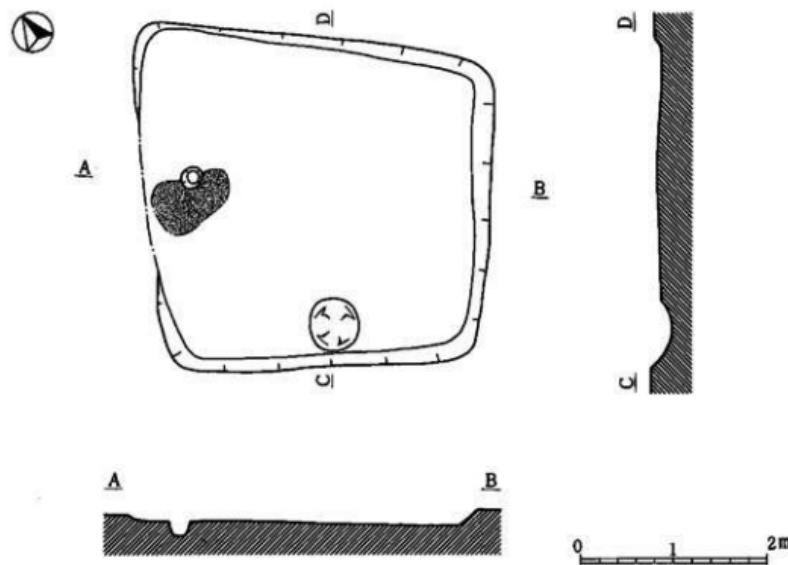
第169図 第40号住居址



第170図 第40号住居址出土土器

土器観察表

No.	種別	器形	寸法(cm)		色調		成形・調整の特徴	備考	
			口径	底径	高さ	外面			
1	土器	环	16.0			赤褐	暗褐	ロクロナデ 体部内面ミガキ	黒色処理
2	x	x	12.6	6.4	3.9	赤褐	黒褐	x x 圆軸系切り	黒色処理(不完全)
3	x	x	12.0	6.2	3.8	#	黑	x x	# カマド内出土
4	x	x			7.0	赤褐	#	x x	#
5	x	x	15.4			暗褐	#	x x	#
6	x	腹	25.6			#	茶褐	体部外面ハケメ 口縁内面カキメ	カマド内出し
7	x	x	20.0			赤褐	赤褐	x x	#
8	須恵	环	14.0			灰	灰	ロクロナデ	
9	x	x	13.0	5.4	3.9	灰白	灰白	x 因野系切り	山里?
10	x	x	8.5	4.8	1.5	暗灰	暗灰	x x	
11	灰胎	腹	14.2	6.2	2.7	灰白	灰白	x x	カマド内出土
12	x	腹	17.0	7.2	5.1	#	#	因野ヘラケズリ	



第171図 第41号住居址



第172図 第41号住居址出土土器

土 器 觀 察 表

No.	種別	器形	寸 法 (cm)		色 調		成 形・調 整 の 特 徴	備 考
			口径	底径	體高	外 面		
1	土器	小型器	14.4			茶褐色	茶褐色	ロクロナデ カキノ

第41章 調査遺跡

壇があげられる。土師器の壺はいずれもロクロ成形により、底部には回転糸切り痕が認められる。また体部内面には黒色処理が施されている。(2)、(3)はカマド内出土である。甕(6)、(7)もカマド内出土である。两者とも胴部外面は目のこまかいハケメによって調整されており、頭部内面にはカキメが認められる。灰釉陶器は皿と壺の二形態が出土した。皿(1)の内面には重ね焼痕が認められる。(9)は混入品である。中世の山皿ではなかろうか。

これらの遺物の様相から、本址は9世紀後半に属するものと考えられる。

第41号住居址

遺構 本址はII地区北端に位置し、B-1グリッドに存在する。隣接する遺構は存在せず南側約5mはなれた位置に第54号小竪穴がある。遺構検出面において隅丸方形プランを有する黒褐色土の落ち込みが明瞭であったため、住居址の存在は当初より容易に把握された。しかし、検出面からの掘り込みが大変浅く、西壁は搅乱を受け確認できなかったため住居址の確認はやや遅れた。東側の底面を精査中、カマドと焼土が確認されたため住居址と断定した。

プランはやや北側に張り出してはいるものの方形に近い隅丸方形を呈している。平面規模は南北3.85m、東西3.45mを測る。

壁は穏やかに傾斜しており、北壁10cm、南壁20cm、東壁17cmを測る。保存状態はあまり良くない。西壁は搅乱を受けているため存在しない。

床面は平坦で、ほぼ水平を保つ。柱穴、周溝は検出されなかった。南側に階級状の落ち込みがあるが、本址に付属するものは判然としない。

カマドは粘土カマドで、西壁中央に設置されているが、搅乱を受けているため崩壊が著しく、規模は判然としない。カマド周辺には焼土が残っている。

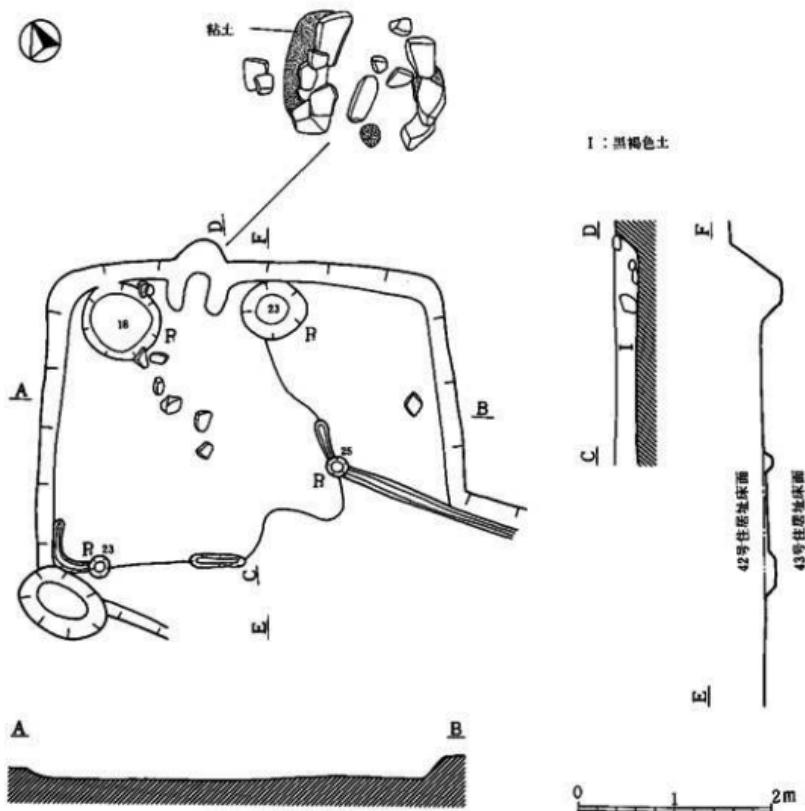
遺物 本址の出土遺物は大変少なく、土師器の小型甕1点が図示可能であったのみである。胴部外面、口縁部内面はロクロを用いたカキメによって整形されている。

時期判定は出土遺物が少ないと難しいが、9世紀代のものであろう。

第42号住居址

遺構 F-8・9区にあり、43号住居址と重複している。

南側と43号住居址と重複しているため、正確な規模・プランは伝えられない。遺存している東西壁間が451cmがあるので、南北も同規模の方形を呈していたと推定される。壁は、北壁と東・西壁の一部が残存している。壁高は、北壁30cm、東壁22cm、西壁9cmで、掘り込みは傾斜をなす。床は43号住居址の一部の上面に黒色土の貼床を施し構築している。東側に低く、西に向かうに従い漸高する。カマドの前面、西寄り中央にはカマドに使用されていたと思われる礫が床上に散乱している。カマドは、北壁中央や西寄りに設けられている。石組み粘土カマドで、石組みは比較的良く残っている。焚口幅80cm、奥行120cmである。カマドの左・右には貯蔵穴と思われるピットがある。東側のものはP₁(66×60cm、深さ23cm)、西側のものはP₂(80×75cm、深さ18cm)の



第173図 第42号住居址

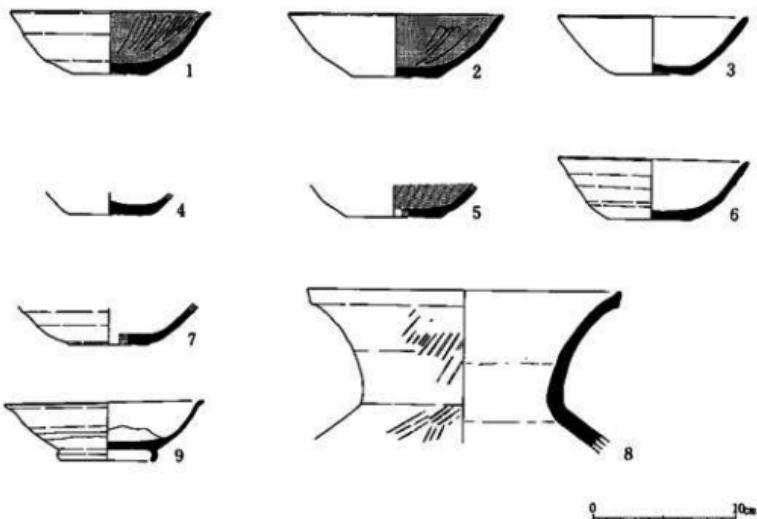
ともに円形・擂鉢状の掘り込みである。

遺物 本址の出土遺物のうち図示できるものとして土師器の壺、須恵器の壺、甕、灰釉の壇があげられる。壺および壇の類はいずれもロクロ成形により、底部には回転糸切り痕が認められる。土師器の壺(1)、(2)、(3)、(5)の体部内面にはミガキが施されており、また(1)、(2)、(5)は黒色処理されている。須恵器の甕(8)はタタキの後、口縁部はロクロナデによって調整されている。

これらの遺物の様相から、本址は9世紀後半に属するものと考えられる。

第43号住居址

造構 F・G—9区にあり、東壁と南壁とのコーナーは45号住居址と重複している。また北壁



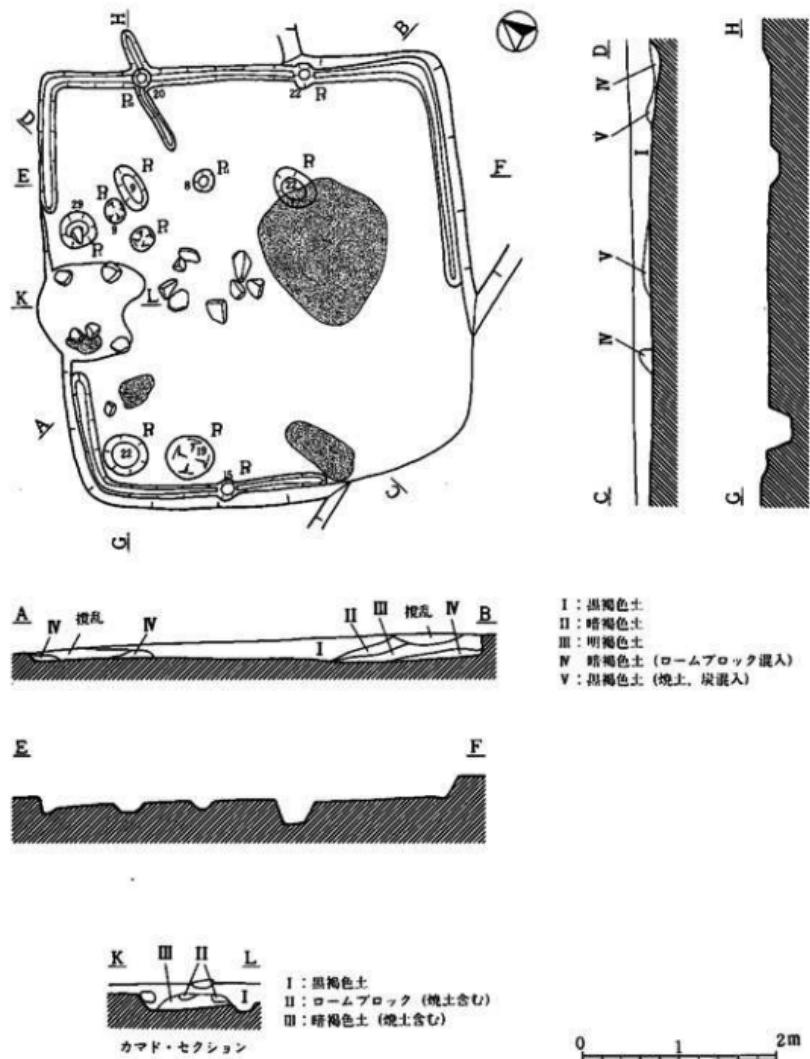
第174図 第42号住居址出土土器

土器観察表

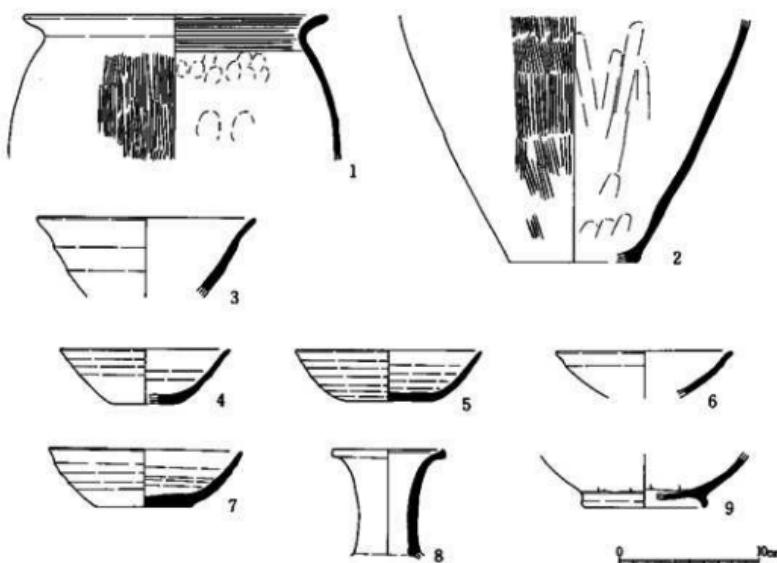
No.	種別	器形	寸法(cm)			色調		成形・調整の特徴			備考
			口径	底径	高さ	外面	内面				
1	土器	序	14.0	5.2	4.3	茶褐色	黒	ロクロナゲ 体部内面1ガタ 回転糸切り			黒色処理
2	*	*	15.0	6.0	4.3	〃	〃	*	*	*	〃
3	*	*	13.4	5.2	4.0	茶褐色	黒褐色	*	*	*	
4	*	*	—	5.4	—	〃	暗褐色	*	*	*	
5	*	*	—	6.4	—	明褐色	黒	*	*	*	
6	須恵	*	13.4	7.6	4.3	灰白色	灰白色	*	*	*	黒色処理
7	*	*	—	5.6	—	暗灰	〃	*	*	*	
8	*	甕	22.0	—	—	赤灰	赤灰	外表面タタキ 内面横ナゲ			
9	灰胎	甕	14.0	6.6	4.2	灰白	灰白	ロクロナゲ 回転糸切り			

は42号住居址と重複している。

東西463cm、南北445cmの方形プランを呈する。壁は、東、西、南、北壁とも部分的に残されているのみであるが、ともに掘り込みはきれいである。残存している部分の壁高は、東壁18cm、西壁13cm、南壁15cm、北壁27cmである。周溝は、45号住居址との重複部分およびカマド部分を除き全周しており、幅10cm、深さ4cmを測る。床は45号住居址重複部分に貼床を施し構築し、平坦であり、中央やや南寄りに広範囲に焼土の散布が認められる。柱穴は、P₁(49×25cm、深さ9cm)、P₂(48×36cm、深さ22cm)の2本で、他に周溝内にP₃、P₄、P₅の小穴がある。カマドの左右にもP₆、P₇があるが性格ははっきりしない。カマドは、北壁中央に設けられている。カマド内およびカマド前面に礫が散乱し、粘土もあることから石組み粘土カマドであろう。幅105cm、奥行120cmで、部分的に焼土が堆積している。



第175図 第43号住居址



第176図 第43号住居址出土土器

土器観察表

No.	種別	器形	寸法(cm)			色調	成形・調整の特徴	備考
			口径	底径	器形			
1	土師	甕	21.0	9.0	茶褐	茶褐	朝鮮外面ハケメ 内面指圧痕 口縁内面カキメ	2と同一個体?
2	"	"	"	"	"	"	" 内面ヘラナナ	
3	須恵	环	15.4	"	暗灰	"	ロクロナデ	
4	"	"	12.0	4.0	3.8	苟灰	" 回転糸切り	カマド内出土
5	"	"	13.0	5.8	3.5	灰	"	
6	"	"	12.4	"	"	灰白	"	
7	"	"	13.6	6.6	4.2	暗灰	暗灰	
8	長頸瓶	甕	7.8	3.4	灰白	灰白	ロクロナデ	カマド内出土
9	灰釉	甕	"	"	"	"	"	

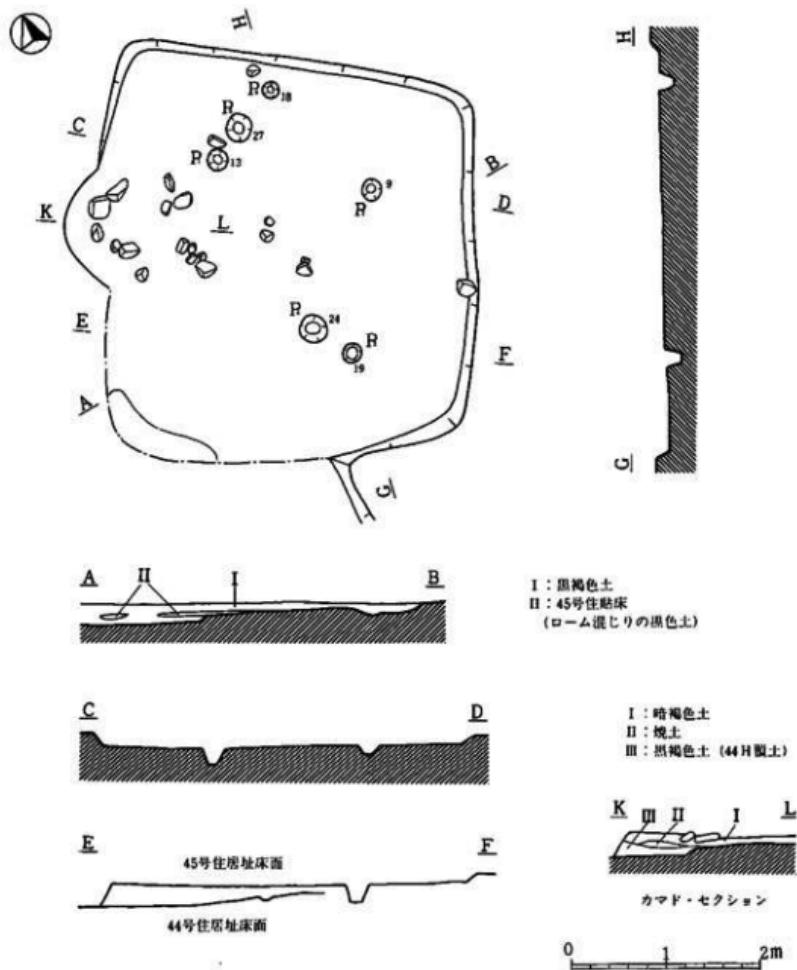
遺物 本址の出土遺物のうち図示できるものとして土師器の甕、須恵器の环、長頸瓶、灰釉の甕があげられる。甕(1)と(2)は同一個体であろう。調部外面は目のこまかいハケメ、口縁内面はロクロを用いたカキメによって調整されている。(1)の内面には輪積みの部分を中心に指圧痕が認められる。須恵器の环は5点確認された。いずれもロクロ成形で、底部には回転糸切り痕が認められる。(4)、(7)はカマド内出土である。(8)は長頸瓶の頸部である。ロクロナデによって成形されている。灰釉の甕(9)は他の遺物との比較より混入品と考えられる。

出土遺物の様相から、本址は9世紀前半に属するものと考えられる。

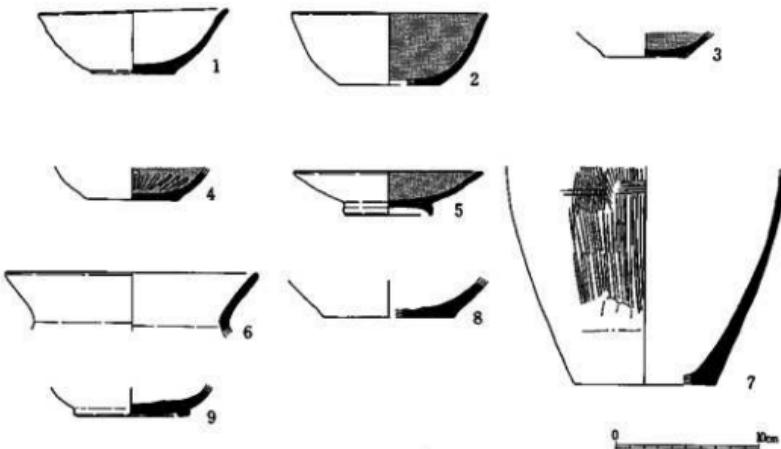
第45号住居址

遺構 G—9区にあり、西側を44・50号住居址と重複している。

東西395cm、南北435cmの方形プランを呈する。壁は、東・北壁は残存するが、南・西壁はその一部分を残すのみである。掘り込みの状態は比較的良好く、壁高は、東壁5cm、南壁13cm、北壁8cmと浅い。床は、小礫混りローム面に構築され、起伏があり、軟弱である。44号住居址その重複



第177図 第45号住居址



第178図 第45号住居址出土土器

土器観察表

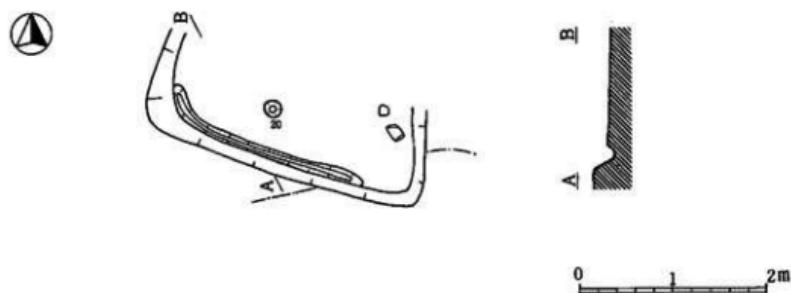
No.	種別	器形	寸法(cm)			色調		成形・調整の特徴	備考
			口径	底径	器高	外面	内面		
1	七郎	环	13.2	5.8	4.5	茶褐	茶褐	ロクロナデ 体部内面ミガキ 回転糸切り	カマド内出土
2	*	*	13.6	7.0	5.0	*	黒褐	*	黒色処理(不完全)
3	*	*	5.6			明褐色	黒	*	*
4	*	*		6.4		*	茶褐	*	*
5	*	*	13.2	6.0	3.1	*	黒	*	*
6	*	甕	17.6			茶褐	茶褐	横ナデ	
7	*	*		9.8		暗褐色	暗褐色	胴部外面ハケノヘラナデ 内面ヘラナデ	外面スス付着
8	須恵	环		8.2		灰	灰	ロクロナデ 回転ヘラケズリ(?)	カマド内出土
9	*	甕		9.2		茶褐	茶褐	*	回転糸切り 回転ヘラケズリ

部分は貼床が施されている。柱は、3本主柱で、P₁(20×21cm、深さ13cm)、P₂(21×21cm、深さ9cm)、P₃(22×18cm、深さ19cm)がこれにあたる。他にP₄、P₅、P₆の3箇所のピットがあるが、性格は不明。カマドは、西壁中央に設けられ、幅110cm、奥行150cmの範囲に礫が散乱しているため石組みカマドであろう。

遺存状態は余り良くないが、柱、カマドなど住居に伴う施設は比較的明瞭である。

遺物 本址より土師器の环、甕、須恵器の环が出土した。土師器の环はいずれもロクロ成形され、底部には回転糸切り痕をもつ。体部内面にはミガキが施されており、(1)以外は黒色処理されている。甕(7)はカマド内出土である。胴部外面はハケメ調整されており、一部ヘラナデ痕も認められる。内面は縦方向のヘラナデによって調整されている。

これらの遺物の様相から、本址は9世紀中頃に属するものと考えられる。



第179図 第49号住居址

第49号住居址

遺構 F—5区にあり、34号住居址を切って構築されている。台地端に立地しているため、北側の3分の2ほどは流失している。

東西300cmを測ることから、南北も同規模の比較的小形の方形プランを呈すると推定される。残存している壁の状態は垂直できれいに掘り込まれており、壁高は、東壁9cm、西壁25cm、南壁15cmを測る。床は平坦である。周溝は南壁下にあり、幅12~15cm、深さ3cm。カマドは、東壁中央にあり、礫および粘土が遺存することから石組み粘土カマドと考えられる。柱穴と思われるピットは1箇所だけ発見され、21×18cm、深さ20cmである。

遺物 本址の出土遺物は大変少なく、図示できるものはなかった。

第4章 調査遺跡

第9表 中央遺跡住居跡一覧表

縦文時代中期

住居	グリッド	平面形	方向	規模	壁高	床面	炉構造	位置	周溝	柱穴	切り開削	備考
46	H, F-G-10	不規則形	N-80°-E	503×(420)	13·8·17·—	石 路	中央	なし	(6)	—44H		
48	H, F-F-5	円 形	—	(360)×(360)	6·—·13·—	堆肥炉	中央	なし				
50	H, G-9-10	—	—	—	—	堆肥炉	—	—	—	—44H	堆肥炉のみ	

弥生時代

住居	グリッド	平面形	方向	規模	壁高	床面	炉構造	位置	周溝	切り開削	備考
8	I, A-B-17	楕円方形	N-12°-W	556×(380)	—·12·12·5	複数炉	北西中央	なし			
26	I, E-28	楕円方形	N-85°-W	615×(352)	16·17·—·23	石圓柱壁炉	北側主柱間	なし			
28	I, C-D-31	長方形	N-76°-W	710×540	16·10·22·9	複数炉	西主柱大間	一部			

古墳時代

住居	グリッド	平面形	方向	規模	壁高	床面	炉構造	位置	周溝	切り開削	備考
16	I, C-D-E-5-6	方形	N-75°-E	940×928	17·13·1·11	「塙り込み」	(中央)	一部欠	—17H	大型住居	
18	I, B-C-D-2-3	方形	N-55°-E	706×684	36·20·28·21	粘 土	西壁中央	一部欠			大型住居
30	I, C-D-33	楕円方形	N-55°-E	500×472	20·2·9·15	塙り込み	中央	全層			
34	II, F-G-5-6-7	楕円方形	N-53°-E	870×824	43·12·25·32	—	—	—	—	—	大型住居
44	II, F-G-9-10	方形	N-7°-W	550×545	11·6·30·9	石 粘 土	西壁中央	半層			
51	I, A-B-17	—	—	—	—	—	—	—	8日直上	遺物のみ	

平安時代

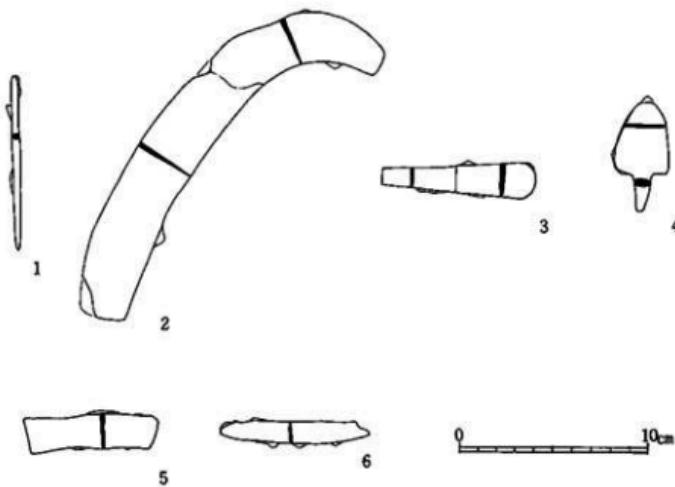
住居	グリッド	平面形	方向	規模	壁高	床面	カマド構造	位置	周溝	切り開削	備考
1	I, E-14-15	楕円方形	N-S	360×330	16·16·24·14	石 粘	北壁東寄	なし			
2	I, D-E-14	楕円方形	N-13°-W	364×320	6·9·9·9	—	—	なし			
3	I, E-13	楕円方形	N-79°-E	363×(320)	4·1·—·3	石 粘 粘 土	東壁中央	—			
4	I, C-12	楕円方形	N-87°-W	445×386	6·7·9·6	石 粘 粘 土	西壁中央	なし			
5	I, A-B-13	楕円方形	N-S	450×(250)	7·6·5·15	粘 土	東壁南寄	なし	—10H		
6	I, D-E-8	楕円方形	N-15°-W	365×350	20·12·17·17	粘 土	西壁中央	一部			
7	I, B-C-8	楕円方形	N-2°-W	425×382	20·21·22·16	石 粘 粘 土	北壁東寄	一部			
9	I, E-16-17	楕円方形	E-W	370×350	8·8·—·8	石 粘	東壁中央	—			
10	I, A-13	楕円方形	N-S	353×(5.8)	10·14·12·—	—	—	—	5H→		
11	I, C-D-15	長方形	N-7°-E	506×428	9·4·7·8	—	—	なし			
12	I, A-B-7-8	楕円方形	N-S	434×(224)	18·18·15·—	粘 土	西壁中央	なし			
13	I, A-B-10-11	楕円方形	N-65°-E	—	—·27·22·—	—	—	(全周)			
14	I, B-14-15	楕円方形	N-25°-W	350×(330)	11·2·6·4	粘 土	北壁中央	なし	4号方面→		
15	I, A-B-14	楕円方形	N-70°-E	445×(236)	—·6·15·—	—	—	—			
17	I, B-C-5-6	楕円方形	N-82°-E	486×(416)	11·5·8·9	粘 土	東壁中央	半周			
19	I, D-E-2	楕円方形	N-70°-E	345×330	11·10·17·11	—	—	なし			
20	I, A-B-1	楕円方形	E-W	(615)×(222)	19·—·29·—	—	—	—	一部		
21	I, A-B-3-4	楕円方形	V-S	447×(223)	21·19·16·—	—	—	—			
22	I, C-D-17-18	方形	N-10°-W	525×(280)	—·8·12·—	地 壁 炉	南北	—			

第2節 中 换 遺 跡

位置	グリッド	平面形	方向	規模	壁高	床面	カマド構造	位置	周溝	切りい關係	備考
23	I. D-26	隅丸方形	N-80°-E	370×362	20・23・23・18		石 稚 砂 土	西壁中央	なし	I号方同一	
24	I. C-27	方 形	N-S	403×383	14・12・15・18		石 稚	西壁中央	一部		
25	I. C-D-28	方 形	N-80°-E	470×420	14・18・13・10		石 稚 砂 土	東壁中央	一部		
27	I. B-31・32	隅丸方形	N-15°-W	478×456	29・26・24・19		石 稚 砂 土	東壁中央	全周		輪替
29	I. B-33	方 形	N-12°-W	360×—	10・—・20・9		—	—	なし		
31	I. D-E-35	隅丸方形	N-2°-W	370×360	20・22・33・16		石 稚 砂 土	東壁中央	全周		
32	I. D-E-38・39	方 形	N-2°-W	455×447	6・12・15・18		石 稚 砂 土	東壁中央	一部		
33	I. C-39	方 形	N-7°-W	540×485	56・46・46・27		石 稚 砂 土	東壁中央	全周		
35	II. E-5・6	隅丸方形	N-25°-E	525×489	37・26・25・18		粘 土	西壁中央	半周		
36	II. D-5	隅丸方形	N-45°-E	350×333	25・20・21・17		粘 土	東壁中央	半周		
37	II. C-5	隅丸方形	N-45°-E	360×349	21・—・11・20		粘 土	西壁中央	なし	→38H	
39	II. C-D-6・7	方 形	N-88°-E	490×480	72・46・37・50		粘 土	西壁中央	全周		
40	II. C-D-7・8	方 形	N-42°-W	530×460	42・66・50・30		石 稚 砂 土	西壁中央	半周		
41	II. B-1	隅丸方形	N-42°-E	385×345	17・—・20・10		粘 土	西壁中央	なし		
42	II. F-8・9	方 形	N-47°-W	451×—	22・9・—・30		石 稚 砂 土	北壁中央	一部		
43	II. F-G-9	方 形	N-42°-E	463×445	18・13・15・27	一部貼壁	石 稚 砂 土	北壁中央	一部欠	42H-44H 45H-	
45	II. G-9	方 形	N-42°-E	435×395	5・—・13・8	一部貼壁	石 稚	西壁中央	なし		
47	II. E-4・5	長 方 形	N-45°-W	600×480	14・16・19・5		—	—	なし		
49	II. F-5	方 形	E-W	300×—	9・25・15・—		石 稚 砂 土	東壁中央	一部		

中世

位置	グリッド	平面形	方向	規模	壁高	床面	カマド構造	位置	周溝	切りい關係	備考
38	II. C-5	隅丸方形	N-45°-E	503×364	23・8・6・14		粘 土	西壁中央	なし	→37	内耳土器出土



出土鉄製品一覧表

No	出土遺構	製品名	遺存状態	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
1	第9号住居址	不明		9.0	0.4	0.4	9	
2	第27号住居址	鎌	ほぼ完存	20.5	3.2	0.3	76	
3	第33号住居址	刀子?	先端部を欠損	(8.5)	2.0	0.3	(15)	
4	第36号住居址	鎌	ほぼ完存	5.5	2.8	0.2	17	
5	遺構外	刀子?	先端と茎を欠損	(7.2)	1.8	0.2	(12)	
6	"	"	"	(7.8)	1.3	0.1	(10)	

2) 建物址

本遺跡において掘立柱建物址が1棟、I地区東区D、E-35、36グリードより掘出されている。本址は、東西方向4間×南北方向3間の規模を有し、柱間寸法は、東西180cm、南北220cmを測る。柱穴は長径20cmから50cmの円形を呈し、深さ16cmから34cm程度である。柱穴の中に柱大の礫が認められたものが3箇所ほどあった。棟方向はN-10°-Sである。本址の北側には2箇所、柱穴の張り出しが見られ、性格は判断し難いが、棟方向に一致しており、本址に付随するものであろう。

尚、本址は南西部分において、31号住居址と重複しており、南西隅の柱穴は、31号住居址の床面下まで達して掘り込まれていたが、その北側の柱穴は、住居址覆土中でとまっており、確認できなかった。

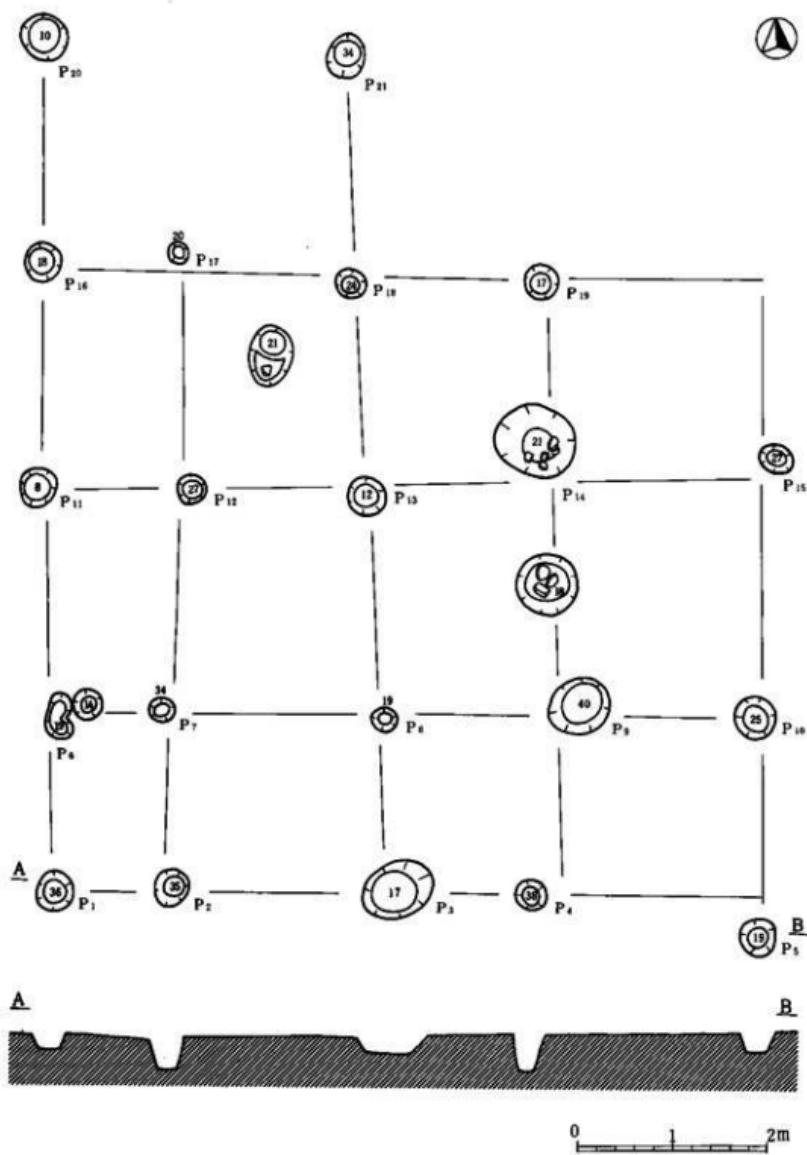
本址柱穴中の1基より、開元通宝（初鑄621年）、聖宋元宝（初鑄1161年）各1枚が出土しており、本址の年代を考える上で参考になろう。

3) 方形周溝墓

本遺跡I地区東区に3基検出された。1号墓はD、E-23、24、25グリッドに、2号墓は、そ

第10表 建物址ピット一覧表

柱穴No.	平面形	規 模 (cm)	深さ (cm)	備 考
P ₁	楕円形	43×38	36	
P ₂	楕円形	41×36	35	
P ₃	楕円形	77×55	17	
P ₄	円形	33×33	38	
P ₅	円形	40×39	19	
P ₆	不整形	38×30	19	
P ₇	円形	28×28	34	
P ₈	楕円形	28×25	19	
P ₉	楕円形	66×58	40	
P ₁₀	円形	45×45	25	
P ₁₁	楕円形	41×39	8	
P ₁₂	円形	31×31	27	
P ₁₃	円形	41×39	12	
P ₁₄	楕円形	83×72	21	礫数個出土
P ₁₅	楕円形	37×30	27	
P ₁₆	円形	40×39	18	
P ₁₇	円形	23×23	20	
P ₁₈	円形	33×32	24	
P ₁₉	円形	36×36	17	
P ₂₀	楕円形	50×47	10	
P ₂₁	楕円形	47×38	34	



第181図 建物址

の西側、C、D-20、21グリッドに 3号墓は2号址の南側E-20、21グリッドにそれぞれ検出されている。また西区B-15グリッドにおいて4号墓が検出された。

(1) 第1号方形周溝墓

平面形 東溝を23号住居址によって切られてはいるが、東西方向11.6m×南北方向11.2mの隅九方形プランであると言える。主軸方向はN-70°-Eを示す。周溝で囲まれた内側は平坦で封土は確認できなかった。

周溝 東溝は幅92cm、深さ34cmを測り、掘り込みは、若干傾斜を示し、底面は平坦である。北溝は幅108cm、深さ21cmを測る。掘り込みは、ほぼ垂直で、底面は平坦である。南溝は、最大幅170cmと他に比べて比較的幅広い。深さも48cmと比較的深い。掘り込みは傾斜を示し、底面は平坦である。西溝は、中央やや北寄りで途切れ、幅120cmの陸橋を形成している。溝幅は、南側で幅広く190cm、北側で狭く150cmを測り、深さは20cm程度である。

尚、溝中より無文土器片が出土しているが詳細については判断し難い。

主体部陸橋部から主軸線に沿って構築されており、その結果、中央よりやや北寄りに位置する。2.6m×1.2mの長方形を呈し、掘り込みは、ほぼ垂直である。深さは22cmを測る。また、主体部短辺沿いに溝状の掘り込み（ホロ穴）がみられ、木棺の存在が想起される。

周溝内より甕の破片が2片検出された。(1)は口縁部である。外面は全面に波状文が施されている。(2)は頸部の破片である。波状文が認められる。内面はいずれもミカキ調整されている。両者とも弥生時代の後期のものであろう。

(2) 第2号方形周溝墓

平面形 東西南北溝ともに幅96cm程度であり、掘り込みもほぼ垂直で大差はない。深さは東、南溝で20cm程度、西溝7cm、北溝15cmと比較的浅い掘り込みである。底面は平坦である。尚、北東隅にピットが確認されたが、本址との関連はないと思われる。主軸方向はN-5°-Wを示す。

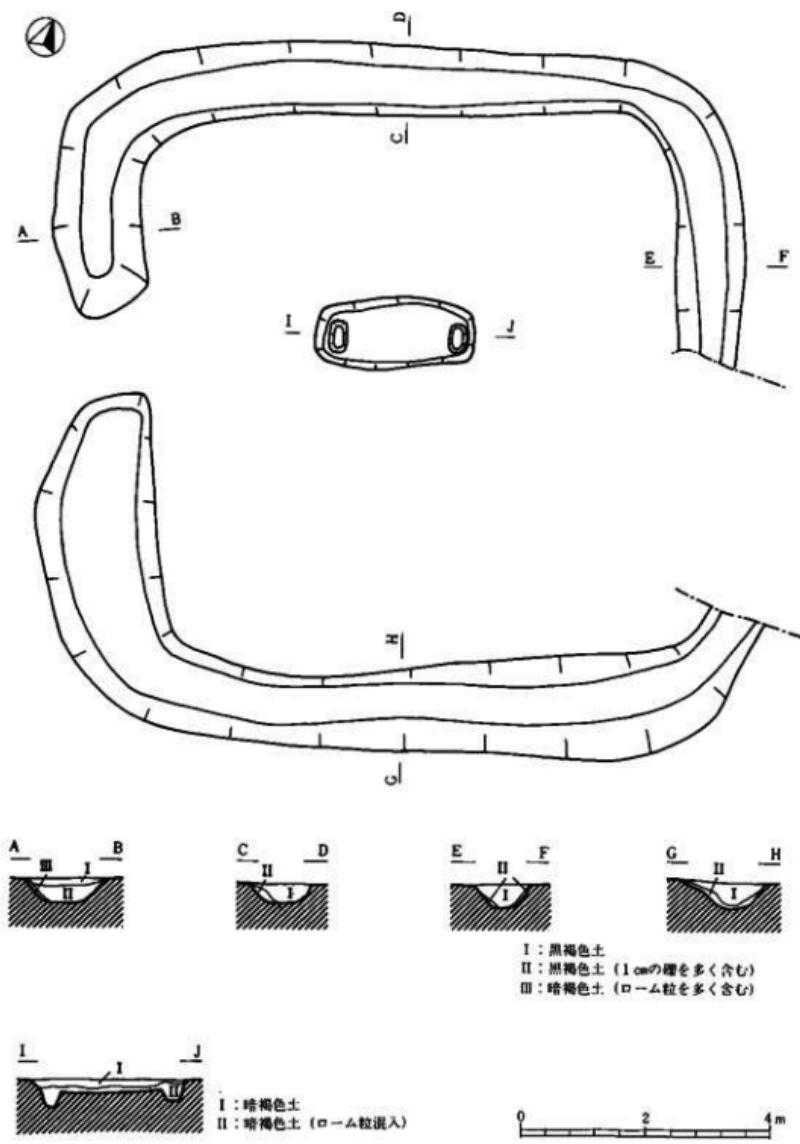
主体部中央やや北寄りで検出され、1.7m×0.8mの隅丸長方形を示す。深さは23cmを測り掘り込みは、ほぼ垂直であり、底面は平坦である。

本址からは無文土器破片が若干出土している。

(3) 第3号方形周溝墓

本址はその3分の2程が調査区域外れにあたり未調査であるため規模は判断しかねるが、平面形は他址と同じく隅丸方形を呈すると推測される。

周溝 確認されている北、東溝は幅130cmを測り、東溝は、段々細くなり最小幅50cmを測る。深



第182図 第1号方形周溝墓



第183図 第1号方形周溝墓出土土器

土 器 觀 察 表

番号	器形	部位	文様構成要素	器 面 調 査	胎 土	備 考
1	甕	口縁	波状文	ミガキ	石英(少) 霧母(少)	周溝内出土
2	"	東部	"	"	石英(少) 霧母(少)	"

さは30cm程度であり底面は平坦である。

主体部 2分の1程度未調査ではあり、長径は推測で3m程度、短径1.3mの橢円形を呈する思われる。掘り込みは、ほぼ垂直であり底面は平坦である。深さは10cmと比較的浅い。

遺物の出土はない。

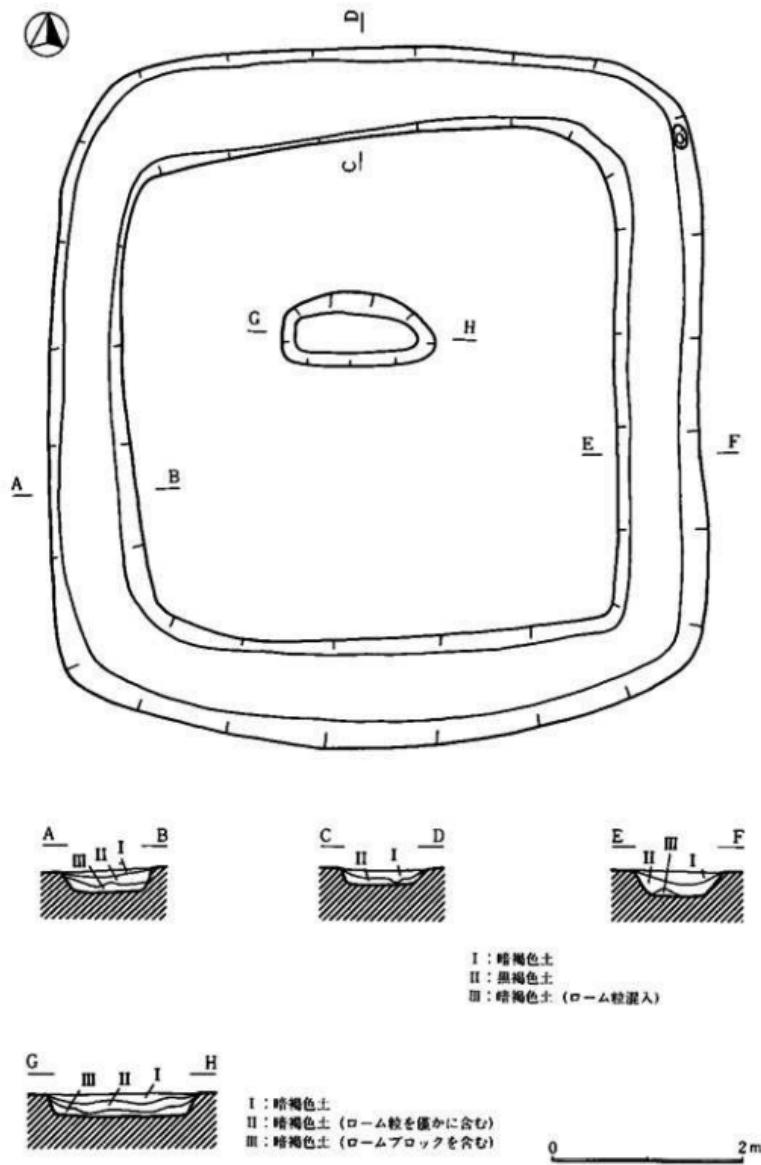
(4)第4号方形周溝墓

2号址の西方約25m離れて位置する。

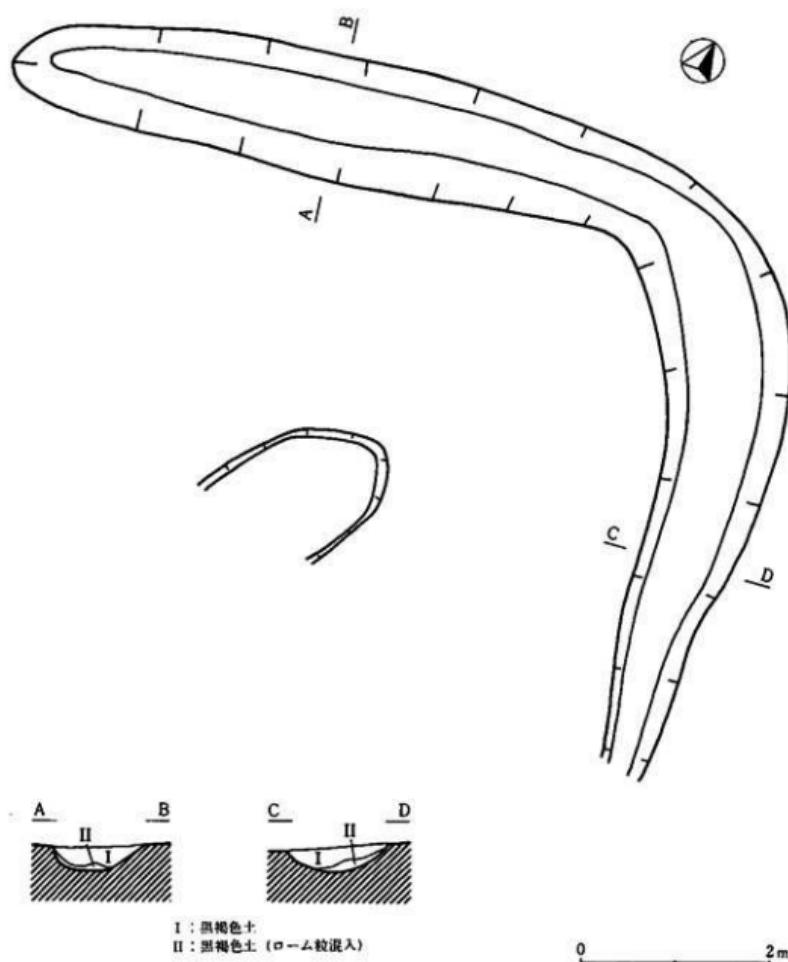
平面形 5.8m×5.5mの隅丸方形を呈する。周溝に囲まれた内部は平坦であり、主体部の痕跡は全く残っていなかった。これは主体部の掘り込みがローム面まで達しておらず、耕作中に削平されてしまったためと思われる。主軸方向はN—8°—Eを示す。

周溝 陸橋を形成しないで完全に巡っている。幅は一様に150cm程度であり、掘り込みはほぼ垂直を示し、底面は平坦であるが、一部南西部は10cm程度一段低くなっている。また西溝中央には180cm×100cm、深さ20cmの橢円形の凹みを有している。北東隅に直径40cm、深さ19cmのピットが掘り込まれていた。

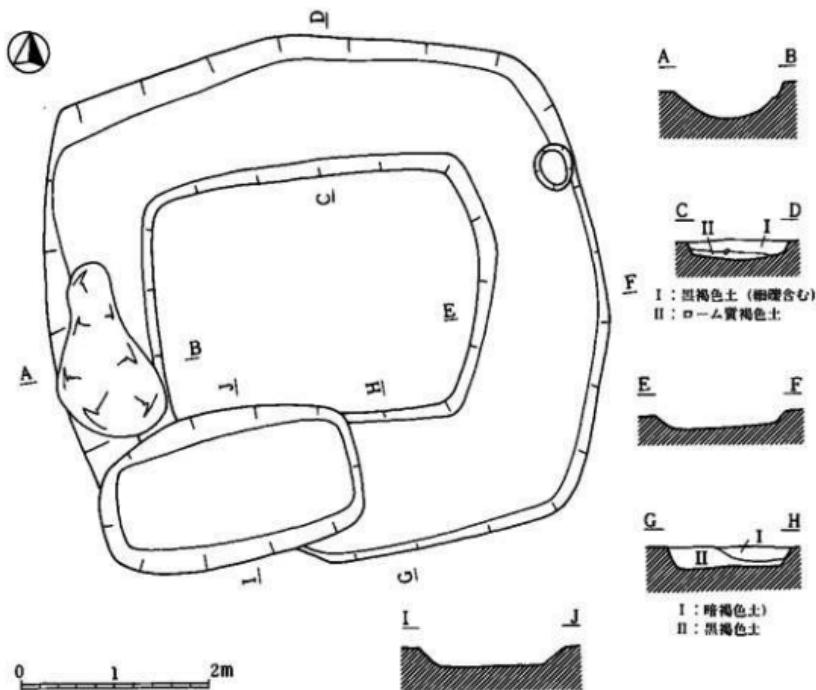
遺物出土品はない。



第184図 第2号方形周溝墓



第185図 第3号方形周溝基



第186図 第4号方形周溝墓

4) 小豎穴

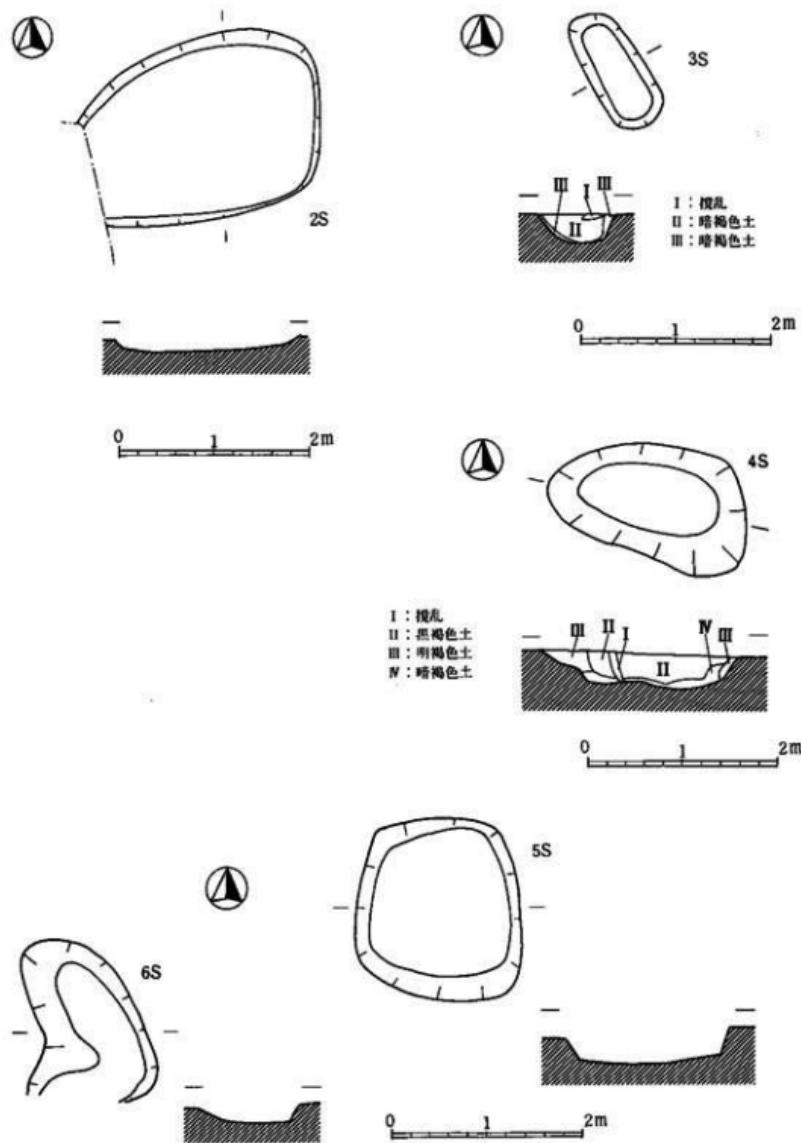
今回の調査では全部で62基の小豎穴が検出された。分布はほぼ調査区全域にわたるが、とりわけI地区東区の中央、すなわち第1号方形周溝墓の東側に密集箇所が認められる。

規模は最大330×138cmから最小65×60cmに至るまで多岐にわたるが、全般的には150cm前後の大さきのものが主流をなす。

形状は平面形態が円形、橢円形、方形、長方形で、断面形はタライ状、擂鉢状、袋状を呈するが、このうち円形もしくは橢円形でタライ状のものが最も一般的である。

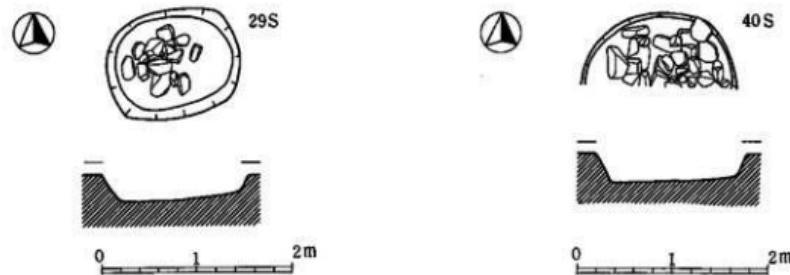
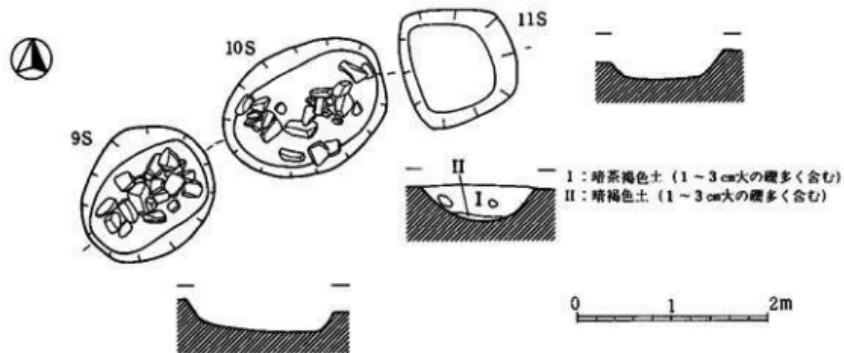
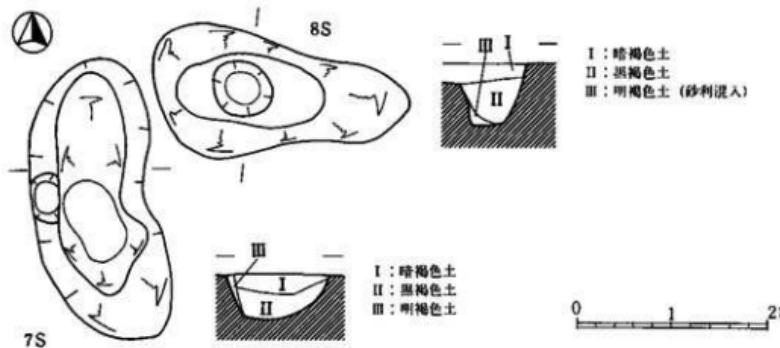
出土遺物の中では、第28号小豎穴から出土した刀子が特筆される。この小豎穴は第5・6号口ムマウンドの間に位置し、両者を掘り込んでいた。刀子は小豎穴の南壁斜面から出土し、刀部を下へ向けていた。

本遺跡から検出された小豎穴を概観して特に注視されることは巨礫を大量に含む小豎穴群である。該当になるのは第9、10、14、29、33、34、40、46、47号小豎穴の9基で、全てI地区東区

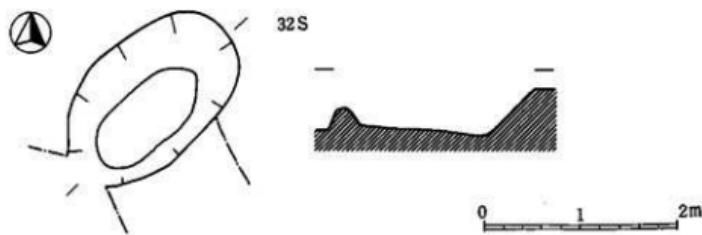
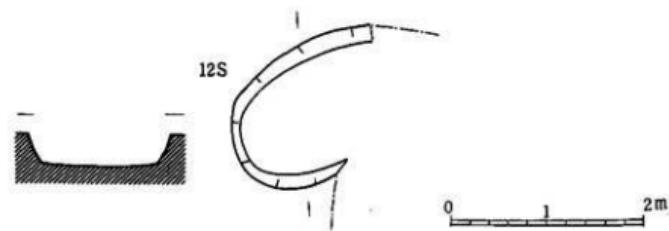
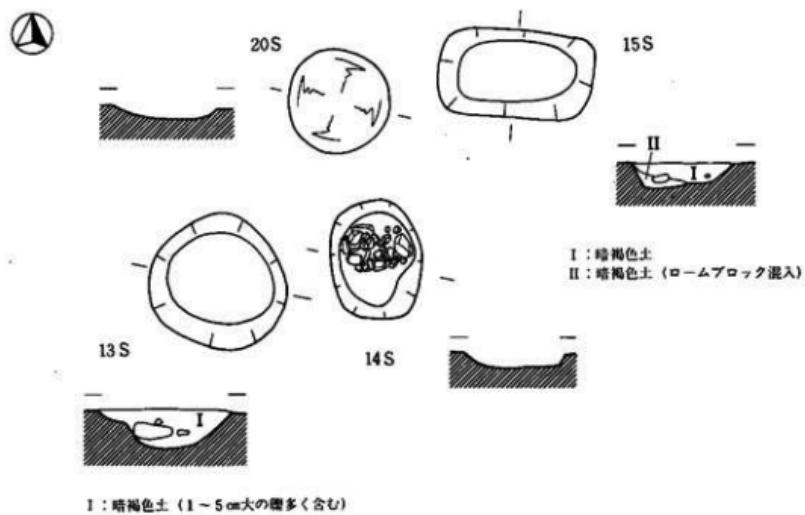


第187圖 小型穴群(1)

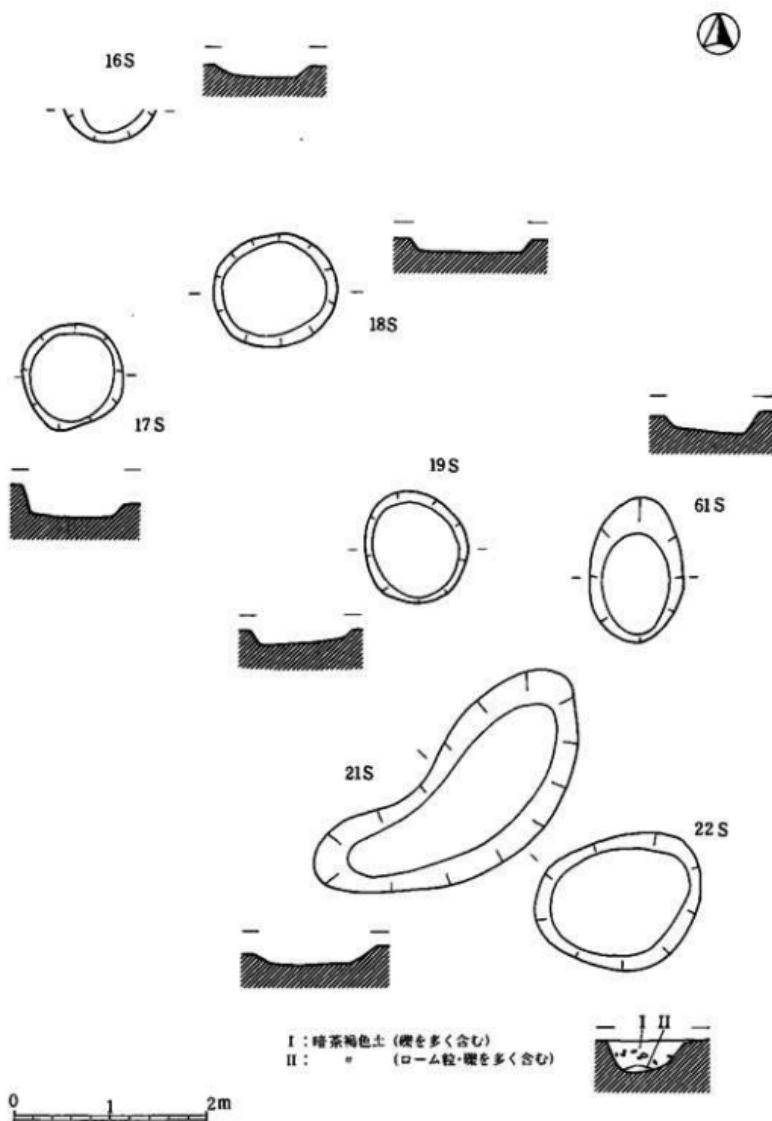
第三章 調査遺跡



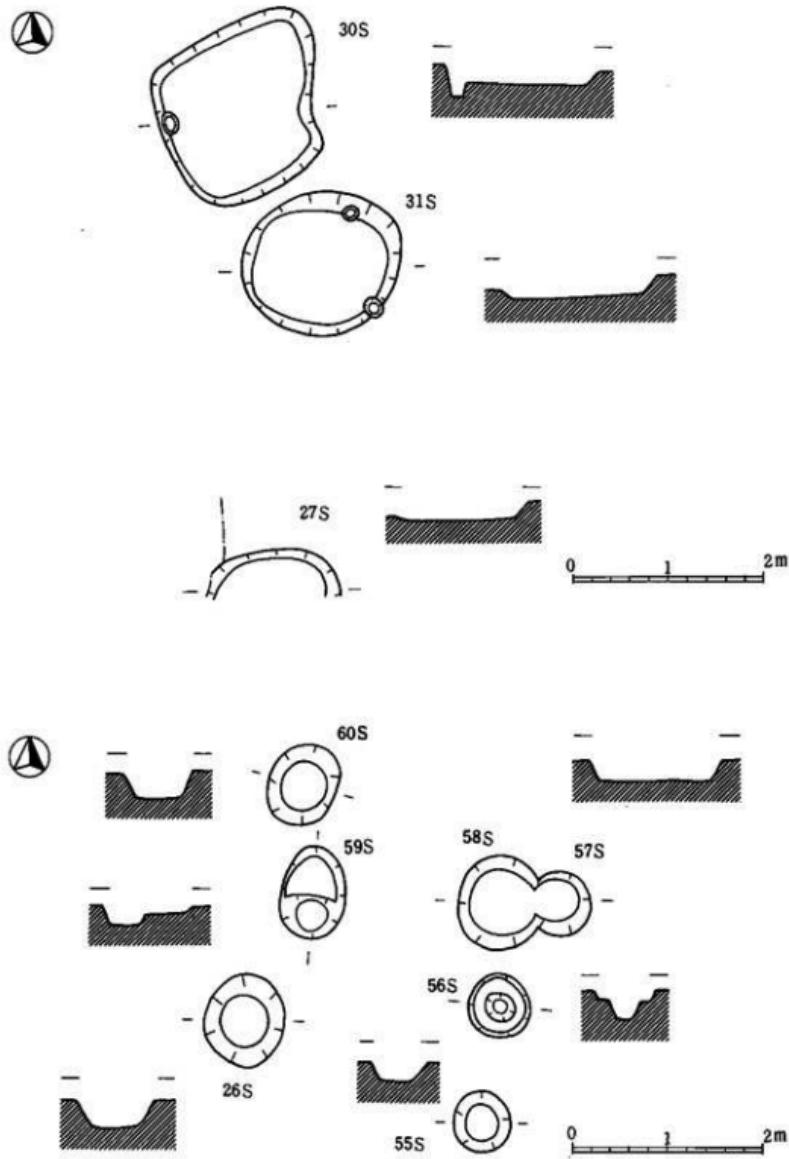
第188図 小竪穴群(2)



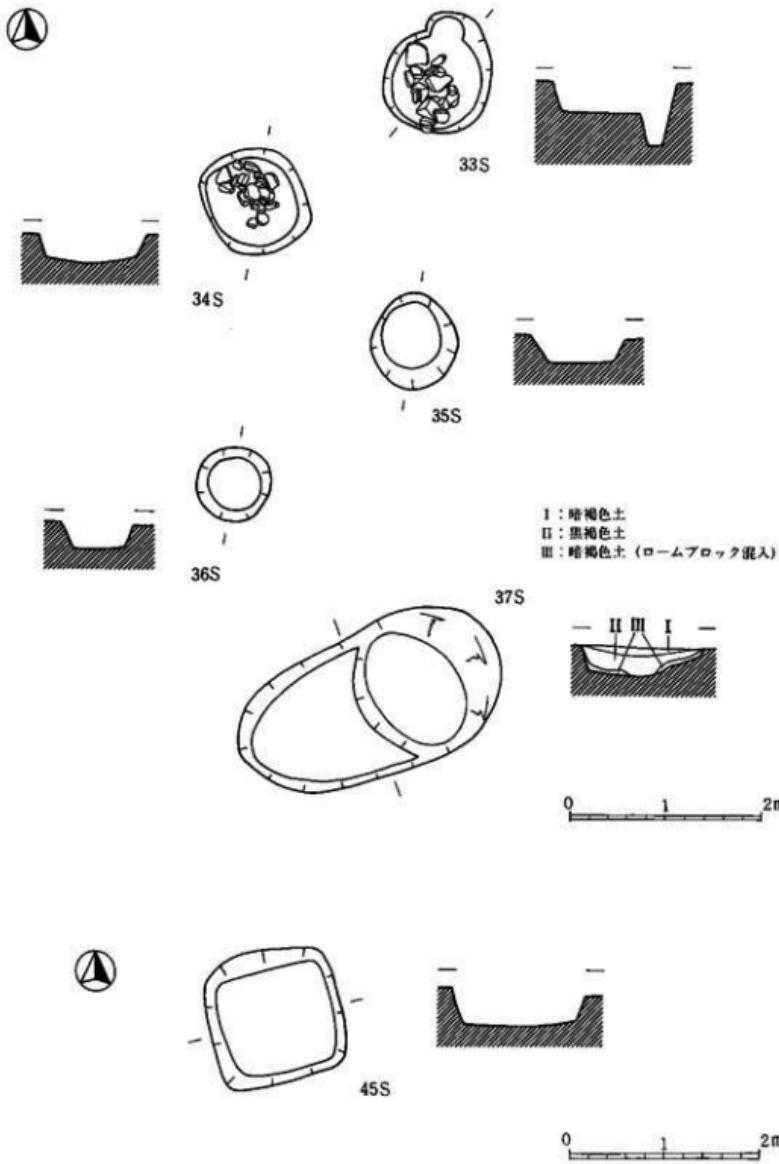
第189図 小型穴群(3)



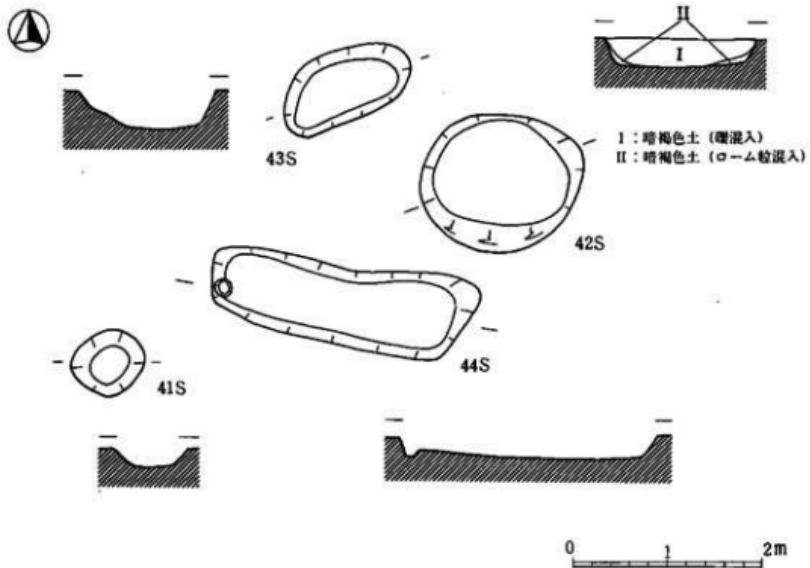
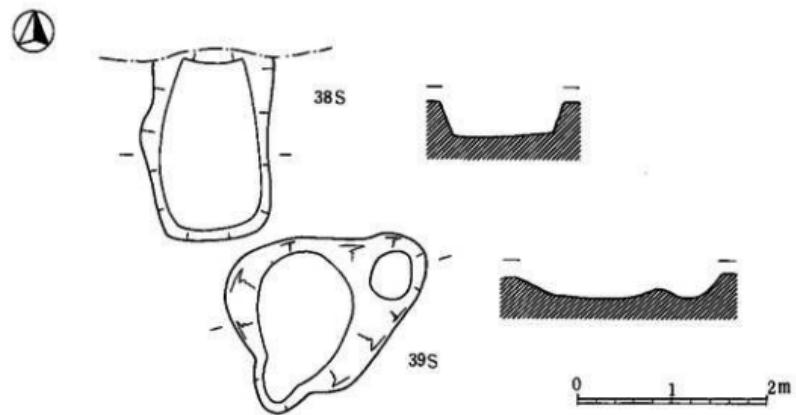
第190図 小竪穴群(4)



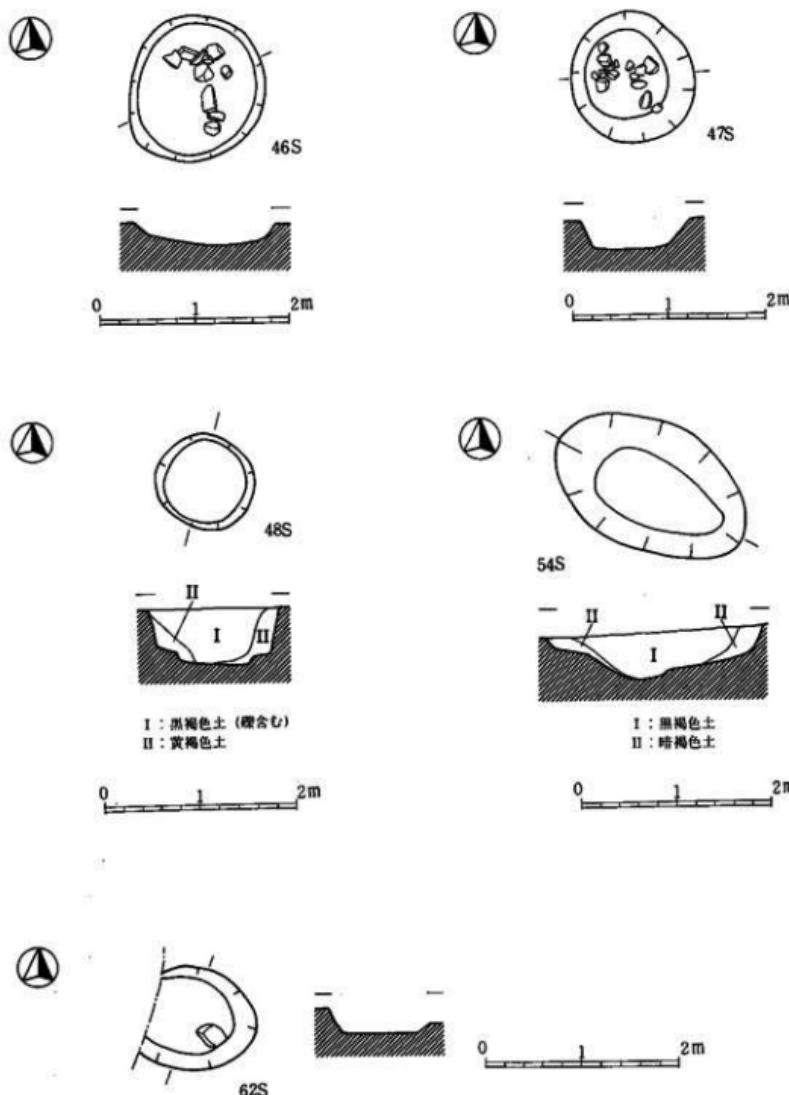
第191図 小堅大群(5)



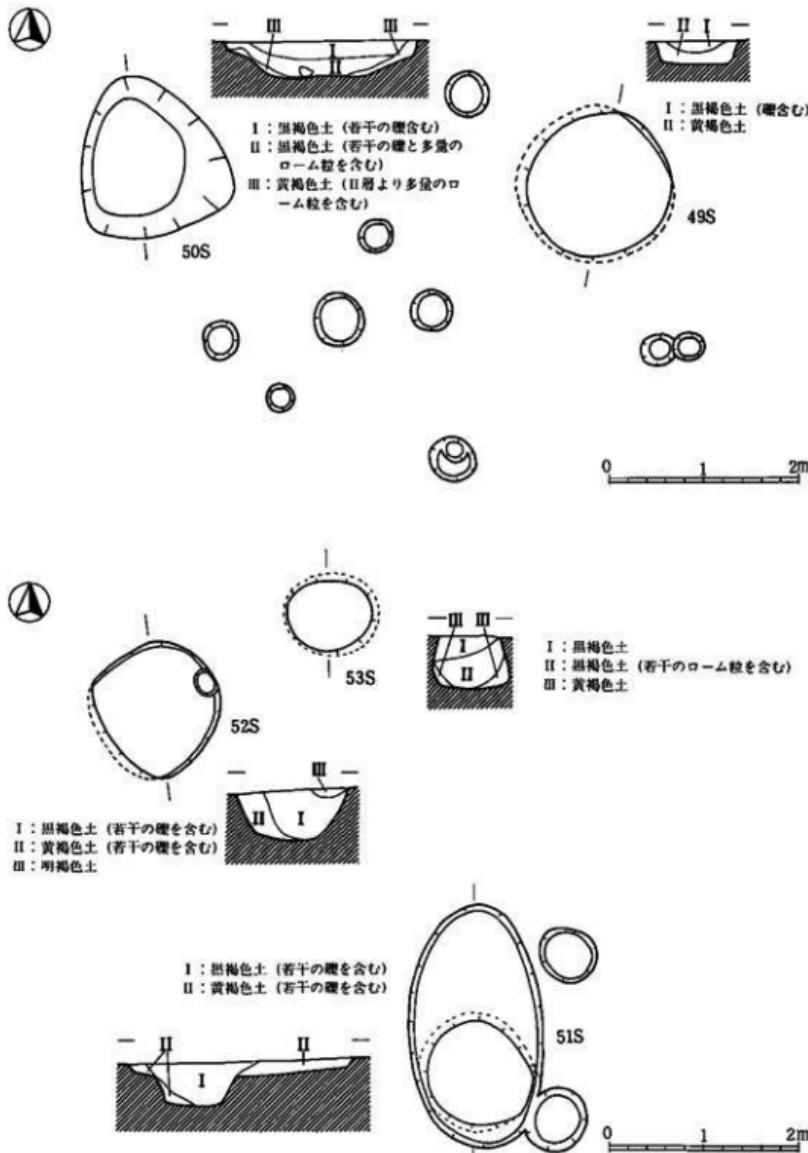
第192図 小型六群(6)



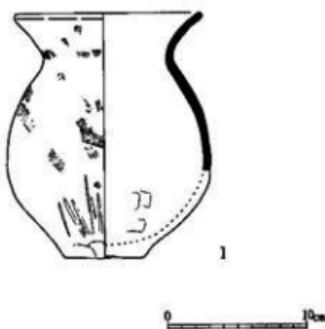
第193図 小竪穴群(7)



第194図 小竪穴群(8)



第195図 小型穴群(9)



第196図 第1号小豎穴出土土器

土 器 観 察 表

番号	器種	器形	寸 法 (cm)			色 調	成 形・調 整 の 特 徴	備 考
			口径	底径	高さ			
1	土陣	壺	13.0	5.6	16.9	黄褐色	外面ハケ調整の後ヘラミガキ、内面ヘラミガキ、ナデ	15出土

に集中している。難の出土に特徴はみられず、出土遺物の皆無のため小豎穴の性格づけは難しい。

第1号小豎穴 本址より土師器の壺(1)が完形で、横たわった状態で出土した。壺(1)は大変丁寧なつくりをしており、外面はハケメ整形の後、口縁部は横ナデ、胴部はヘラミガキによって調整されている。底部付近の外面にはヘラケズリ痕も認められる。胴部内面もヘラミガキ調整されている。「く」の字に外反した口縁部をもち、胴部は丸味をおびている。

本址は出土物から見て、五領期に属するものと考えられる。

第11表 中挟遺跡小豎穴一覧表

No	確認規模	平面形	主軸方向	断面形	底面規模	底面	深さ	備考
1	(149) × 100	(楕円)	N - 15° - W	タライ形	132 × 74	平坦	19	
2	(247) × 187	楕円	N - 73° - E	タライ形	(240) × 168	平坦	19	
3	134 × 60	楕円	N - 33° - W	タライ形	108 × 38	平坦	29	
4	212 × 121	楕円	N - 77° - W	タライ形	150 × 70	平坦	34	
5	215 × 188	方形	N - 40° - W	タライ形	166 × 166	平坦	38	
6	(195) × 140	楕円	N - 30° - W	タライ形	(150) × 98	平坦	20	
7	290 × 80	楕円	N - 10° - W	タライ形	228 × 90	二段	48	
8	257 × 87	楕円	N - 84° - W	タライ形	156 × 70	二段	62	
9	150 × 130	円形	N - 52° - E	タライ形	134 × 84	平坦	32	集石
10	182 × 134	楕円	N - 57° - E	擂鉢形	160 × 94	丸底	37	
11	138 × 133	方形	N - 60° - W	タライ形	107 × 93	平坦	30	
12	160 × (130)	(楕円)	N - 65° - E	タラ形	125 × (120)	平坦	34	
13	146 × 137	楕円	N - 80° - W	擂鉢形	114 × 94	丸底	40	
14	125 × 99	楕円	N - 78° - W	タライ形	98 × 80	平坦	17	集石
15	162 × 93	長方形	N - 85° - W	タライ形	123 × 63	平坦	25	
16	(96) × -	円形	-	タライ形	(65) × -	平坦	10	
17	115 × 110	円形	N - 50° - E	タライ形	94 × 88	平坦	33	
18	132 × 117	円形	N - 88° - E	タライ形	108 × 94	平坦	14	
19	118 × 109	円形	N - 25° - W	タライ形	100 × 86	平坦	18	
20	110 × 107	円形	N - 78° - W	タライ形	-	平坦	15	
21	330 × 138	楕円	N - 50° - E	タライ形	266 × 84	平坦	22	
22	178 × 140	楕円	N - 67° - E	擂鉢形	150 × 113	丸底	32	
23	137 × 84	長方形	N - 42° - E	タライ形	120 × 65	平坦	14	
24	118 × 92	長方形	N - 57° - E	タライ形	91 × 67	平坦	31	
25	133 × 107	長方形	N - 70° - E	タライ形	114 × 95	平坦	24	
26	99 × 84	円形	N - 6° - W	タライ形	54 × 51	平坦	28	
27	(140) × (50)	(円)	N - 87° - E	タライ形	(114) × (38)	平坦	20	
28	65 × 50	円形	N - S	タライ形	-	平坦	35	刀子出土
29	140 × 114	楕円	N - 70° - E	タライ形	124 × 92	平坦	28	集石
30	175 × 174	楕円	N - 65° - E	タライ形	147 × 147	平坦 (小穴1)	20	
31	174 × 149	楕円	N - 66° - E	タライ形	148 × 130	平坦	22	
32	(210) × 130	楕円	N - 46° - E	タライ形	133 × 62	平坦	49	
33	128 × 112	楕円	N - 18° - E	タライ形	118 × 93	平坦 (小穴1)	65	集石
34	125 × 112	円形	N - 70° - W	タライ形	103 × 89	平坦	23	集石
35	100 × 92	円形	N - 9° - E	タライ形	68 × 63	平坦	28	
36	78 × 76	円形	N - 10° - E	タライ形	56 × 54	平坦	26	
37	287 × 160	楕円	N - 67° - E	タライ形	120 × 137	平坦	24	
38	198 × 134	長方形	N - S	タライ形	173 × 103	平坦	37	
39	217 × 190	楕円	N - 75° - E	擂鉢形	160 × 100	二段	25	

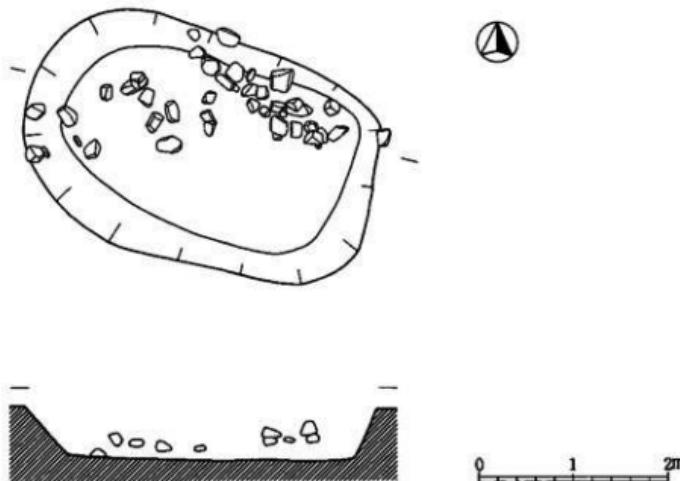
第四章 調査遺跡

40	166×(78)	(円形)	N-85°-E	タライ形	150×(60)	平坦	25	集石
41	77×70	円形	N-83°-E	タライ形	43×41	平坦	18	
42	175×155	円形	N-70°-E	タライ形	135×135	平坦	30	
43	145×76	横円	N-67°-E	タライ形	112×51	平坦	42	
44	271×95	長方形	N-82°-W	タライ形	240×70	平坦	24	
45	141×141	方形	N-77°-W	タライ形	120×110	平坦	41	
46	158×140	円形	N-41°-E	タライ形	134×129	平坦	23	集石
47	137×129	円形	N-85°-E	タライ形	95×91	平坦	32	集石
48	105×97	円形	N-83°-W	タライ形	95×84	二段	60	
49	153×150	円形	N-73°-W	袋状	168×164	平坦	24	
50	170×162	椭形	N-5°-W	タライ形	122×98	二段	38	
51	256×140	横円	N-4°-W	タライ形	242×130	二段	44	
52	130×125	方形	N-40°-W	擂鉢形	130×120	丸底	54	
53	101×86	横円	N-93°-W	袋状	101×86	平坦	53	
54	218×135	横円	N-62°-W	擂鉢形	140×70	丸底	40	
55	65×61	円形	N-12°-W	タライ形	38×34	平坦	19	
56	67×66	円形	N-10°-W	タライ形	58×55	二段	30	
57	67×(60)	円形	N-20°-W	タライ形	(46)×43	平坦	22	
58	97×(96)	円形	N-17°-W	タライ形	70×67	平坦	23	
59	96×(69)	横円	N-5°-E	タライ形	78×54	二段	20	
60	87×(73)	横円	N-27°-E	タライ形	52×49	平坦	21	
61	150×98	横円	N-S	タライ形	105×70	平底	25	
62	(110)×107	(横円)	N-75°-W	タライ形	(86)×77	平坦	24	巨礫1ヶ

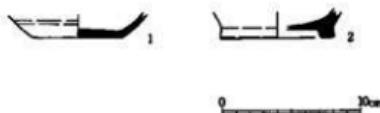
5) 特殊遺構

本址はI地区西区E—6グリッドにおいて検出された。東西380cm×南北240cmの楕円形を呈す。掘り込みは傾斜が著しく、床面は疊混じりのローム土であり、ほぼ平坦である。深さは52cmを測る。

本址は、北側を中心に東西にのびる帯状の集石がなされており、その性格は判然としないが、特殊な在り方を示している。集石内には振り切り工程を終えた原石のほか、須恵器の杯、壺が出土している。両者ともロクロ形成による。



第197図 特殊遺構



第198図 特殊遺構出土土器

土器観察表

No.	種別	器形	寸法(cm)		色調		成形・調整の特徴	備考
			口径	底径	器高	外面		
1	須恵	平壺		6.3		灰	ロクロナデ 亂刷糸切り	
2				4.0		灰	"	

第Ⅳ章 調査遺跡

6) ロームマウンド

本遺跡Ⅰ地区東区において7基のロームマウンドが検出された。東区東側に1号から4号、西側に5号から6号が近在している。

(1) 第1号ロームマウンド

D-37、38グリッドで検出された。落ち込みは、長径380cm、短径300cmの楕円形を呈し深さ73cmを測る。断面形状は擡体状を呈し、すぐ東側に位置する62号小竪穴を切って存在している。検出面における再堆積ローム土は260cm×140cmの楕円形プランで検出され、本址の東側に偏って存在していた。

尚、本址より、縄文中期土器片、土師器杯、甕の細片が出土しているが、本址の性格は言及し難い。

(2) 第2号ロームマウンド

B-36グリッドで検出された。直径240cmのほぼ円形を呈し、深さ28cmと比較的浅い。再堆積ローム土は、検出面において本址中央に170cm×90cmの南北楕円で検出され、まわりを黒色土がドーナツ状にとり囲むのが認められた。

本址より土師器杯、甕の細片が出土している。

(3) 第3号ロームマウンド

本址は2号ロームマウンドのすぐ西側に位置しており、北側は調査区域外であり確認されていない。よってプランは判断しかねるが、確認された最下径は250cmを測り、深さは22cmを測る。再堆積ローム土は、本址の中央に検出されている。

遺物の出土はない。

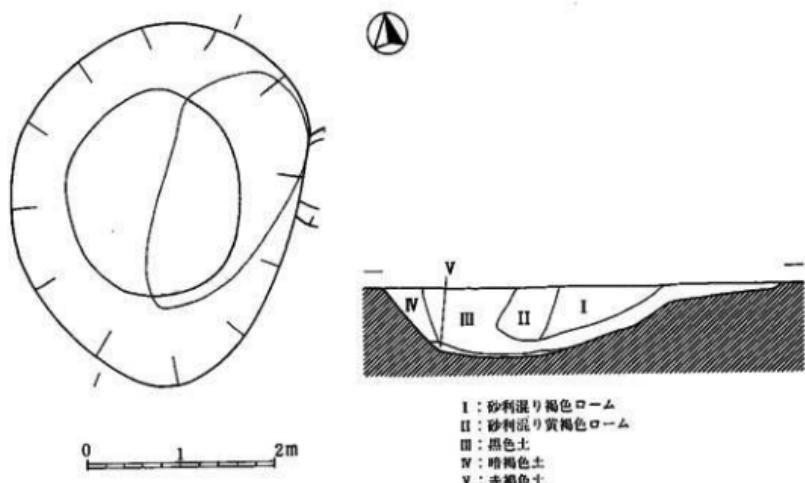
(4) 第4号ロームマウンド

3号ロームマウンドのすぐ西側に位置する。本址もまた北側の一部を調査区域外のため確認していないが、直径240cmの円形プランを呈すと思われる。深さは34cmを測る。再堆積ローム土は、中央やや南より検出され、120cm×90cmの楕円形を呈す。

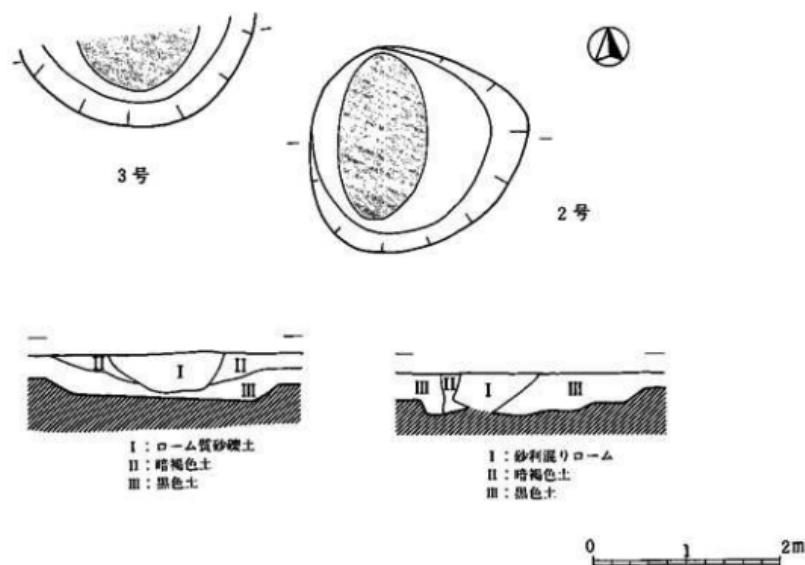
遺物の出土はない。

(5) 第5号、6号ロームマウンド

D-23グリッドに5号ロームマウンド、その西側に隣接して6号ロームマウンドが検出されており、その接点にあたる所を、後世に28号小竪穴が掘り込まれている。5号は1号方形周溝墓によって東側の3分の2程度、切られていて、正確な規模は確認できないが、直径320cm程度の円形プランを呈するであろう。しかし底部は、本址の西側に偏っていることが確認され、東側の壁は



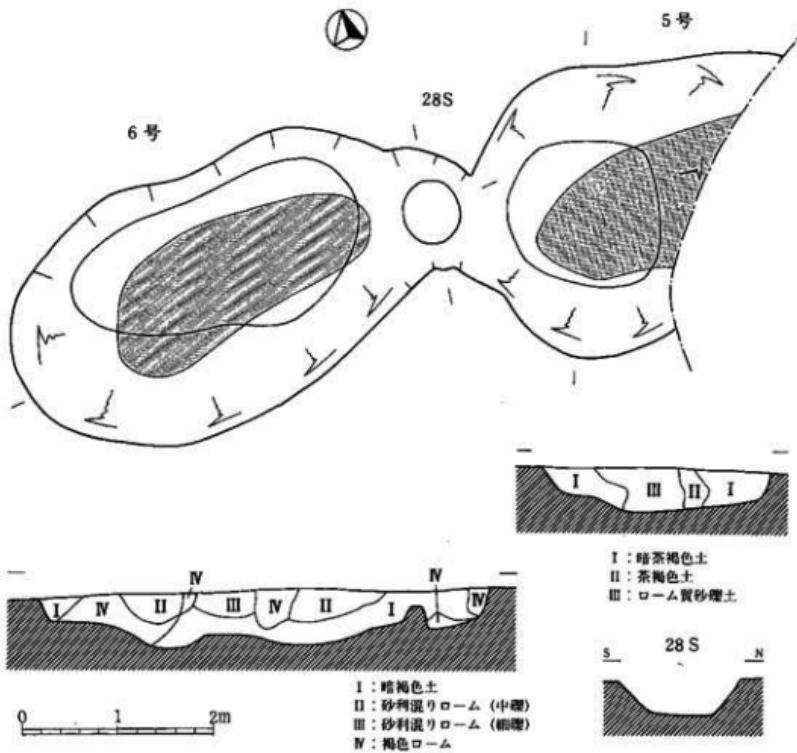
第199図 第1号ロームマウンド



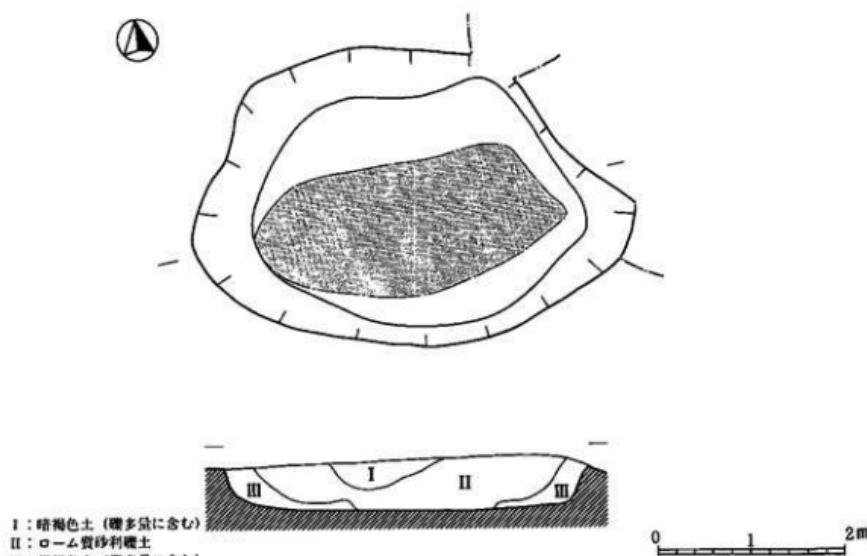
第200図 第2・3号ロームマウンド



第201図 第4号ロームマウンド



第202図 第5・6号ロームマウンド



第203図 第7号ロームマウンド

なだらかであったろうと推測される。深さは50cmを測る。再堆積ローム土は本址のほぼ中央に検出された。

6号は420cm×250cmの東西に長径を持つ楕円形であり、深さは47cmを測る。本址の再堆積ローム土も、ほぼ中央に、20cm×120cmの楕円形で検出された。

両址とも遺物の出土はない。

(6)第7号ロームマウンド

E—23、24グリッドより検出された。東側の一部を1号方形周溝墓によって切られている。450cm×320cmの東西に長径を持つ楕円形プランで、深さ45cmを測る。再堆積ローム土は、本址のほぼ中央に、320cm×140cmの東西楕円形を呈して検出された。

尚、本址より黒曜石剥片1点が出土している。

第12表 ロームマウンド一覧表

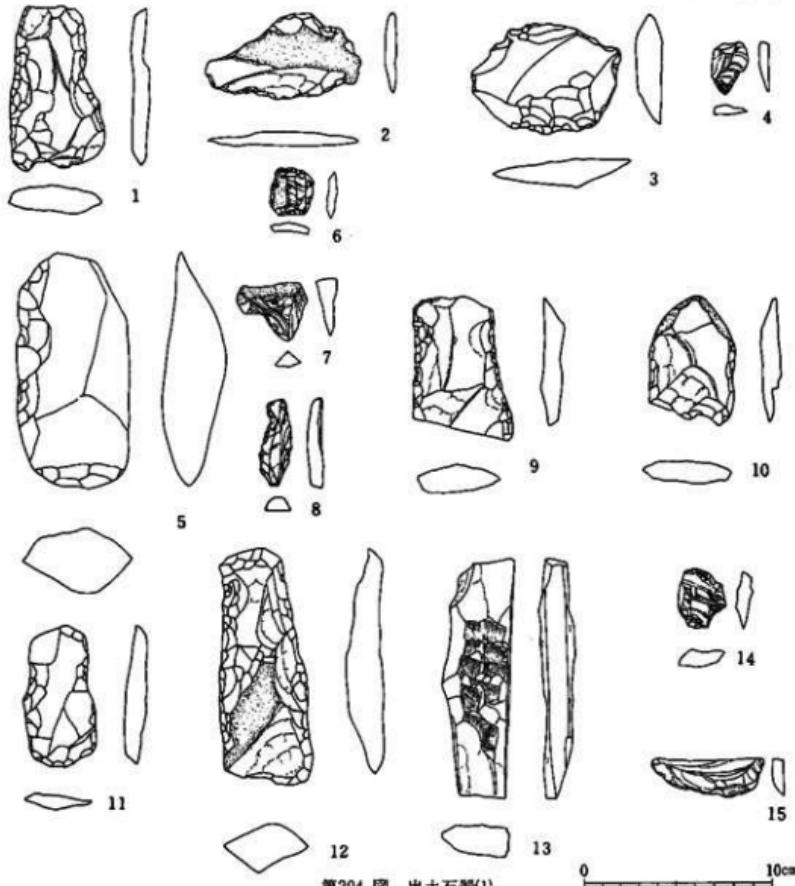
ロームマウンド番号	マウンド部			下部構造			マウンド部 裏側方向	土層	備考
	長軸	短軸	高さ	長軸	短軸	深さ			
1号	260	140	55	380	300	73	N-25°-E	マウンド部砂利混じりローム。底部に赤褐色土が薄く堆積し、その上に角の黒色土がマウンド部を包む。	
2号	170	90	41	240	240	28	N-7°-E	マウンド部砂利混じりロームが中央底部まで続く。暗褐色土と黒色土が界面を認む。	
3号	130	(60)	40	250	(50)	22	-	マウンド部ローム質砂礫土。下部構は下位から黒色土、暗褐色土が堆積し、マウンド部は黒色土上部まで通する。	北半部は開発区外
4号	120	90	51	240	(240)	34	N-75°-E	マウンド部のローム質砂礫土が溝底部まで続く。暗褐色土、黒色土、赤褐色土が界面を認む。	
5号	(220)	160	50	320	(225)	50	N-85°-W	マウンド部のローム質砂礫土は柱状に中央底部まで続く。暗褐色土、赤褐色土が界面を認む。	第1号方形周溝墓と 第28号小型穴が認る
6号	280	120	48	420	250	47	N-85°-W	マウンド部褐色ロームと砂利混じりローム。暗褐色土が界面を認む。	第28号小型穴が認る
7号	320	140	55	450	320	45	N-84°-E	マウンド部のローム質砂礫土が中央底部まで続く。黒褐色土が界面をかこむ。	

7) 遺構外遺物

弥生時代 本遺跡からは少量ではあるが遺構外から弥生時代に属する土器が検出された。(1)は壺の口縁部の破片である。縄文時代晚期終末から弥生時代初頭に属するものである。在地のもので、内外面ともモミガキによって調整されている。2~8は弥生時代後期の甕、小型甕への破片である。1号方形周溝墓、および第8号住居址付近に集中していたため、これらの遺構に付属するものであろうか。いずれも波状文、縞状文が施されており、ミガキ調整されている。

古墳時代 今回の調査で古墳時代に属する須恵器は、遺構外から1点確認されたのみである。(1)は高杯の脚部である。ロクロナデによって整形されており、二本の凸線を有する。所属時期は6世紀代であろう。

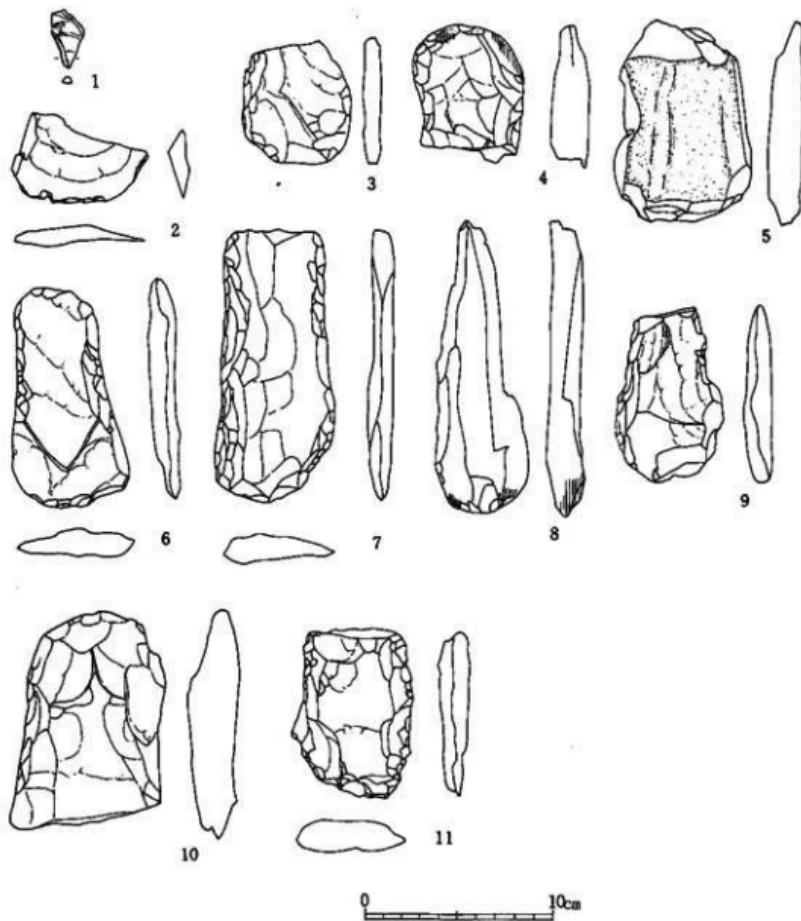
第2節 中核遺跡



第204図 出土石器(1)

石器観察表

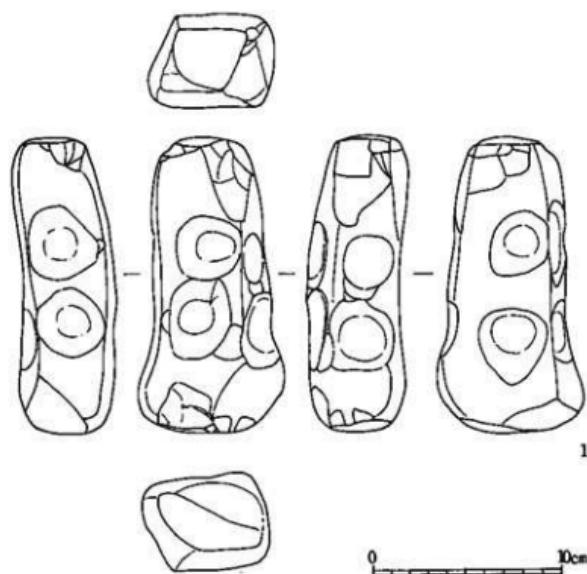
番号	遺構	種別	石質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	特徴
1	16号住	打製石斧	ホルンヘルス	86	50	14	80	
2	16号住	磨刃型石器	頁岩	42	82	8	20	
3	15号住	"	硬砂岩	58	79	15	75	
4	13号住	石錐	黑曜石	37	19	5	2.5	
5	19号住	打製石斧	ホルンヘルス	92	58	35	250	
6	16号住	ピーエス	黑曜石	24	22	5	4.2	
7	16号住	不整形	"	30	37	7	11	
8	27号住	石點	"	45	15	8	4.5	
9	33号住	打製石斧	頁岩	14	53	15	75	
10	33号住	"	頁岩	65	45	11	50	
11	35号住	"	細粒砂岩	72	38	7	33	
12	35号住	切	頁岩	88	47	25	130	
13	特構	磨擦石器	熱板岩	123	36	16	90	
14	33号住	不定形	黑曜石	31	25	9	6.5	
15	43号住	"	"	58	19	6	9.6	カマド内出土



第205図 出土石器(2)

石器観察表

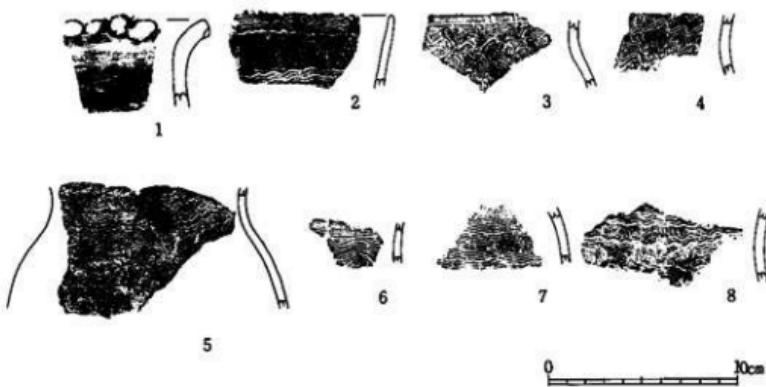
番号	遺構	種別	石質	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	特徴
1	42号柱	石斧	黒曜石	29	17	3	1.5	
2	40号柱	横刃型石器	硬砂岩	47	70	10	20	
3	G-13	打製石片	硬砂岩	64	56	10	41	
4	G-13	"	頁岩	72	57	20	95	
5	G-13	"	頁岩	105	72	18	148	
6	B-38	"	細粒砂岩	114	61	15	70	
7	B-38	"	頁岩	140	52	16	210	
8	C-11	"	珪質頁岩	152	49	19	120	
9	C-15	"	頁岩	90	55	15	85	
10	D-12	"	硬砂岩	116	75	26	270	
11		"	頁岩	87	62	17	115	



第206 図 出土石器(3)

石 器 観 察 表

番号	遺構	種別	石 質	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	特 殊
1	8号柱	凹 石	細粒砂岩	154	76	5	815	両端打痕



第207図 遺構外出土弥生土器

土器観察表

番号	出土地点	器形	部位	文様構成要素		器画 背面	胎 土	備 考
				口縁	口縁に連続押任 波状文 口縁に割み # 壁状文			
1	B-3	壺	口縁		# ガキ	長石 砂粒		
2	A-18	"	"	波状文	# 長石(少)	雲母(少) 長石(少)	摩耗激しい 8H付近	
3	37H	"	頸部	# 壁状文	内面ミガキ	"		
4	23H	"	"	"	内面ナデ	"	1号方形袋溝器 東側	
5	"	小型甌	"	"	"	雲母	"	スヌ少々付着
6	39H	甌	頸部	# 壁状文	"	"		
7	23H	"	"	"	内面ミガキ	石英(少) 長石(少)	1号方形袋溝器 東側	
8	A-18	"	"	"		石英 長石(少)	摩耗激しい 8H付近	



第208図 遺構外出土須恵器

土器観察表

No.	種別	器形	寸法(cm)		色 調		成 形・調 整 の 特 徴	備 考
			口径	底径	器裏	外面		
1	須恵	高环	11.4		暗灰	暗灰	ロクロナデ	

6 成果と課題

1) 方形周溝墓

昭和57年7月、塩尻市広丘野村の丘中学校遺跡において、松本平では初めてといえる方形周溝墓の確実な発見例があった。以後、今年度に至る僅か5年の間に中央道、バイパス、圃場整備と大型事業が激増する中で発掘調査もラッシュを迎えて、数々の貴重な発掘成果を上げてきたが、方形周溝墓においても例外ではなく表に示されるごとく急激な資料の増加を供した。その分布をみると1例を除き松本平南半域に集中しており、しかも從来より松本平でも有数の弥生集落稠密地帯とされてきた田川流域に発見されたのである。これによってこれまで該期の文化圏にやや空白の念を感じていた当地域にも、田川上流域の大門柴宮から出土した銅鐸、あるいはまた下流域の中山丘陵突端に在する4世紀築造の前方後方墳である弘法山古墳などで予想された弥生時代から古墳時代にかけての大きな流れが確実に露呈され始めた。

松本平における方形周溝墓

焼町遺跡 松本平においてこの類の遺構が最初に検出されたのは昭和44年にさかのぼり、塩尻市上西条に所在する焼町遺跡の発掘調査において、報告書では「溝状遺構」として報告されてい

第13表 松本平の方形周溝墓

番号	遺跡名	所在地	周溝		主体部		出土遺物	立地	発現
			風	積	方	向			
1	焼町	塩尻市上西条	14.0×12.0	N-35°-W	北	西	横	河岸段丘	44
2	丘中学校	塩尻市広丘野村	13.4×12.9	N-S	西	西	横	河岸段丘	57.7
3	白神塚1号	松本市舟舟	8.0×7.4	N-69°-W	西	西	横	山丘尾根	59.5-9
4	= 2号	*	9.3×7.9	N-20°-E	西	西	横	*	*
5	= 3号	*	6.8×6.2	N-25°-W	北	西	横	*	*
6	殿村	山形村上竹田	10.0×9.6	N-28°-E	西	西	横	層状地	59.7-9
7	大原1号	塩尻市片丘	7.2×—	—	東	東	横	古墳	60.4-6
8	= 2号	*	—	—	—	—	—	*	*
9	向陽台	塩尻市桂樹	11.3×11.2	N-17°-W	西	西	横	古墳	60.4-6
10	君石	塩尻市片丘	10.0×9.5	N-5°-W	—	—	—	層状地	60.7-8
11	宮側本村	松本市宮側本村	9.2×8.0	N-63°-W	東	東	横	自然堤防	61.5-8
12	中換1号	塩尻市桂樹	11.6×11.2	N-70°-E	西	西	横	河岸段丘	61.4-7
13	= 2号	*	7.3×7.0	N-5°-W	な	し	1.7×0.8	N-88°-E	*
14	= 3号	*	8.9×—	—	—	—	—	N-26°-E	*
15	= 4号	*	5.8×5.5	N-85°-E	な	し	—	—	*
16	和平1号	塩尻市広丘高田	8.6×—	—	—	—	2.5×1.2	N-70°-W	河岸段丘
17	= 2号	*	11.0×—	—	西	西	横	—	*
18	= 3号	*	—	—	—	—	—	—	62.4-6

第Ⅲ章 調査遺跡

るもののがこれにあたり、その後、調査員の一人である宮坂光昭氏は、「方形周溝墓の研究と現状」(宮坂 1978)の中で、方形周溝墓の一例として使用している。焼町遺跡が調査された昭和40年代中頃はまだ県内に発見例がほとんどなく、この種の遺構に対する認識が浅い時期であった。こうした状況の中で焼町遺跡も方形周溝墓と断定できなかつたのではないかと述べられている(小林 1983)。焼町遺跡は現在の市住松原団地を中心に展開しており、台地続きの約500m西方には弥生後期に限れば松本平では最大級の40軒の住居址が確認された田川端遺跡が存在する。

丘中学校遺跡 丘中学校体育馆建設に伴う発掘調査によって確認されたもので、前述のように確実な発見例としては松本平で最初のものとなった。付近は塩尻市の東と西を北流する田川と奈良井川の二河川によって形成された河岸段丘のうち、両河川に挟まれた高位段丘面で、現在の塩尻市街地が展開する桔梗ヶ原面の北端段丘縁に位置する。段丘は西側の奈良井川側が東側の田川側に比して差別的に隆起したために北端の平面形態は尖頭状となり、あたかも松本平に張り出した岬の先端のような形状を呈している。このような場所に立地する方形周溝墓からの展望は良好で、北側の広丘北部域を広く臨んでいる。本遺跡を北端とする高出遺跡群には弥生後期の遺跡も多く、住居址が数件検出されている。また北側の台地下にはやはり同時期の花見遺跡が存在する。主体部の掘り込みは二段構造となっており、かなり大型のものである。鉄釧1、ガラス小玉106、管玉5が出土している。

白神場遺跡 赤城山丘陵のは場整備に伴い南向きの緩斜面と後方の山丘尾根において発掘調査がなされた。方形周溝墓3基の他、縄文前期、弥生、古墳時代の遺構がそれぞれ検出されたが、周溝墓の時期を示す遺構、遺物は確認されなかった。方形周溝墓の複数出土は当時、松本平では初めてであり関心を集めましたが、田川の河岸段丘とともに弥生遺跡の稠密地帯として知られる赤城山としてはむしろ漸くという感があった。立地環境としては他とやや異なり特異性をもち得ているといえよう。

殿村遺跡 田川より約10km西方の山形村上竹田にあり、松本平西部地域では唯一の発見例となっている。付近は三間沢川と唐沢川によって形成された扇状地の縫合線上にあり、南東へ僅かに傾斜している。遺跡はやはり縄文中期、平安、中世の複合遺跡であるが、周溝墓の時期の集落址は確認されていない。方形周溝墓はかなり削平されており、主体部も消滅している。東西両中央に陸橋を有する平面形態を呈しており、県内でも極めて珍しい形態といえよう。

犬原遺跡 田川の支流、大沢川によって開析された台地の縁辺部に位置し、北西方向に緩く傾斜している。中央道長野線用地内の発掘調査により2基検出されたが、ともに半分以上が調査区外にかかってため全体像を明らかにすることはできなかった。本遺跡からは依然、弥生時代の住居址が2軒確認されており、また隣接の上木戸遺跡からもやはり中央道用地内発掘により該期の住居址が16軒検出されている。検出された方形周溝墓をこれらの集落址の墓域として位置づけることに無理はないと思われる。

君石遺跡 現在の県住君石団地の東側に位置し、西向きの緩斜面をなしている。ここは大沢と小場ヶ沢川によって形成された広範囲の複合扇状地上にあり、湧水面が高いため降雨時には地表

流水として幾筋もの小川が発生し、周溝墓もややその浸食、削平を受けている。断片的な周溝、立地の不自然さなどから方形周溝墓に対する疑問視さえあったが、中央部に主体部と思われる土壙を有するなど全容から方形周溝墓としたものである。田川を挟んで対岸のはば同じ高さに前述の丘中学校遺跡の方形周溝墓が対峙している。

宮渕本村遺跡 松本市北方の奈良井川右岸の自然堤防上にあり、松本平北半城では初現となつた。柴宮銅鐸が発見されるまでは県内で唯一の銅鐸片を出土した遺跡として有名であり、今回の発掘調査でも弥生中、後期の住居址が60軒検出され、現在のところ松本平では最大級の弥生集落址である。方形周溝墓は集落のはば中央に位置し、弥生中期後半～後期の住居址4軒を切って構築している。周溝の西側は陸橋のある東側に比して最大で約1.1m高く、わざわざ傾斜地を選んだことに特異性を見いだすことができる。時期は周溝内から土師器が出土したことから古墳時代前期と推定されている。

以上、これまで発見された方形周溝墓について、経過と立地を簡単に触れてきた。そしてこのような状況の中で、一部相前後するが今回のバイパス関連遺跡の発掘調査があり、3遺跡8基の方形周溝墓が新たに発見されたのである。

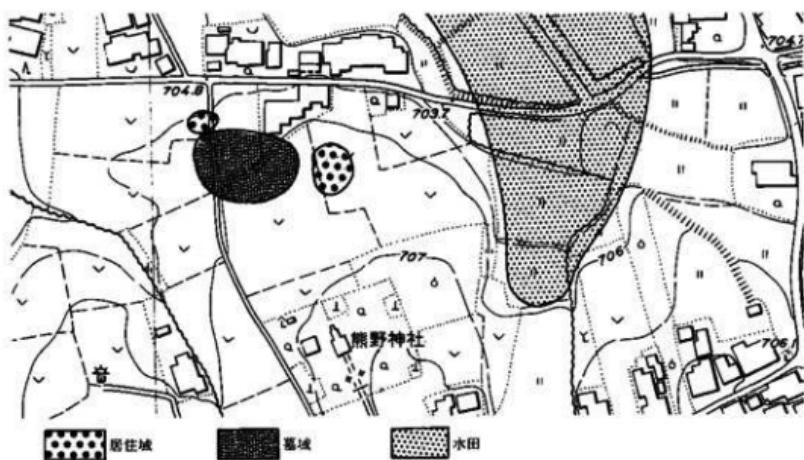
方形周溝墓の立地

方形周溝墓は畿内より他地域へ伝播していく過程で、それぞれの在地性の特徴を生かしながら発展しており、立地面でも各地域の地理的要因、規制に基づき多様な展開を示している。松本平の方形周溝墓はほとんどが田川流域から発見されているが、それぞれの地形環境は多少異なる。そこで立地の分類方法としてここでは地形の成因による区分が最も適切であると考え、次のような5つの分類を試みた。

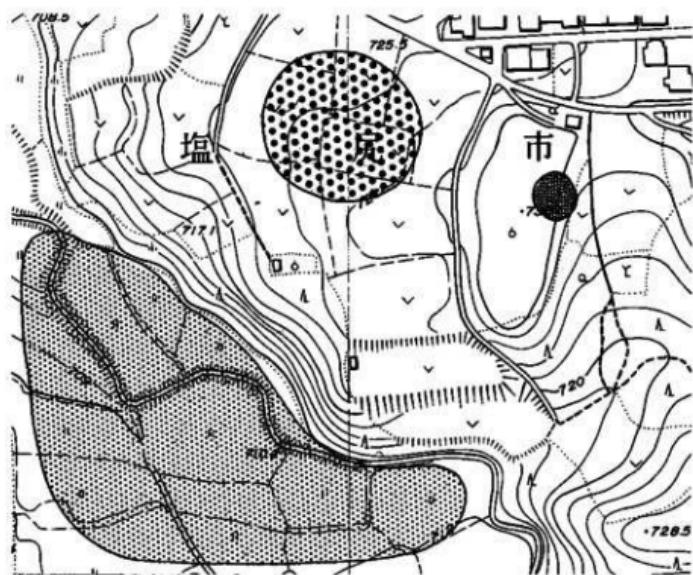
- A. 自然堤防上—宮渕本村
- B. 河岸段丘上—焼町、丘中学校、中挾、和手
- C. 稲作地上—殿村、君石
- D. 台地上—大原、向陽台
- E. 山丘尾根—白神場

AとBは田川本流の運搬域と堆積域による区分で、両者はおおよそ丘中学校付近を境とする。CとDは田川へ流入する小河川によって形成されたもので、C（殿村を除く）は片丘丘陵裾部に形成された複合扇状地上である。またDは片丘丘陵が小河川によって両側を開析され舌状台地状になったものである。なお殿村は奈良井川流域の小河川によって形成された複合扇状地上にある。Eの白神場は寿赤城山の尾根上にあり、從来、平出、根ノ神、弘法山古墳に代表されるように古墳の築造場所とされていた立地である。

これまで方形周溝墓の立地分類としてはむしろ自然堤防上、台地上、低地上、山丘上、丘陵上といった分類が一般的であった。しかし松本平に限っていえば、自然堤防と低地の区別や台地と丘陵の区別がやや不明瞭であり、また殿村遺跡に該当する分類が見あたらないなどやや使用に困



第209図 中浜遺跡弥生集落概念図



第210図 向陽台遺跡弥生集落概念図

難をきたす面があるところからあえて上記のような分類を試みた訳である。本報告ではこの分類をまた集落立地の時代別変遷にも適用している(553P)。

方形周溝墓と集落

今回のバイパス関連遺跡では3遺跡から方形周溝墓の検出をみた。ここではそれらの構築場所について考えてみたい。なお、和手遺跡については1号と2号がバイパス用地外の別調査による所産であり、現在、整理中のため集落の全体の検討は次回に譲ることとした。

中挾遺跡 方形周溝墓4基と該期の弥生後期住居址3軒が検出されている。方形周溝墓はI地区のほぼ中央に集中しているが、検出状況からみると南北両側へさらに分布域が広がる可能性がある。その一例として浮かび上がるのが「過去の調査経過」で前述した小沢芳市氏所蔵の玉類である。出土場所は明確ではないが本人の証言によればりんごの木の根元を掘った際「穴」のような所から発見したということであり、ちょうど第10号住居址の北隣りあたりに相当すると思われる。もし仮りにこの穴が方形周溝墓の主体部とすれば第4号方形周溝墓ともさして離れてはいないことになり、出土品や位置的な立証から方形周溝墓の存在が伺えるのである。一方、住居址の分布をみると2軒が方形周溝墓群の東側に位置し、残る1軒(第8号住居址)は第4号方形周溝墓の東隣りに存在する。1軒のみ方形周溝墓の中に位置し、やや奇異を感じるものであり、第8号住居址が何らかの特殊性を持っているものと思われる。中挾の弥生集落にとって水田可耕地はI地区とII地区の間にある浅谷域であり、ここは現在も水田に利用されている。従って東側から水田、住居域、墓域という位置関係が成り立ち、後述する向陽台遺跡の位置関係とは逆になっていることが注目される。あくまでも推測の域を出ないが、隣接する向陽台集落を意識しての対座関係になったことも考えられる。住居域については2軒という寂しい数であるが、これはバイパス用地幅内での検出数であり、可能性としてI地区東区の北側にかなり住居址が存在していることが伺える。

向陽台遺跡 方形周溝墓1基と弥生後期の住居址6軒が検出された。方形周溝墓は弥生集落を見降ろす高台にあり比高差5mを有する。陸橋も西側にあり、明らかにこの集落を意識したものである。弥生住居址群の東側、すなわちI地区とII地区の間は土取りにより現在、確認ができないが、おそらく弥生集落の続きがあったものと推察され、墓域の眼前にかなり大規模な集落があつたことが伺える。方形周溝墓と居住域のセットは大原、中挾遺跡でも検出されているが、まだ位置関係は推測の域にとどまっている。本遺跡の明確な位置関係は極めて貴重なものであり、今後多くの示唆を与えるものであろう。水田可耕地は台地下の鎧物師屋川周辺に限られるとともに畠地は方形周溝墓後背の尾根上部という現在の土地利用が、やはり当時も成り立っていたものと考えられる。

松本平の方形周溝墓については冒頭にも述べたように近年、急激に発見例が増加し、資料の充実をみた。しかし新資料の大半は主体部を欠いたり、削平により形態が今一つ不確実なものであり、「丘中学校遺跡 1983」で小林康男氏が形態や副葬品について検討した分野ではあまり前進が

第三章 調査遺跡

みられない。そこで本稿では方形周溝墓の立地を検証していくことにより、今回発見された方形周溝墓の築造位置関係を明らかにしてみた。バイパス用地幅という限られた区域での検証であり該期の集落構造の全容は把握できなかったが、集落の墓域、住居域、耕作域の関係を表わす1例を示すことはできたであろう。

参考文献

- 1970 塩尻市教育委員会：『長野県塩尻市焼町遺跡発掘調査報告書』
1978 宮坂光昭：『方形周溝墓の研究と現状』『中部高地の考古学I』
1983 塩尻市教育委員会：『丘中学校遺跡』
1985 松本市教育委員会：『白神場遺跡』『松本市赤木山遺跡群I』
1987 山形省教育委員会：『般村遺跡』
1986 長野県埋蔵文化財センター：『大原遺跡』『長野県埋蔵文化財センター年報2、1985』
1986 塩尻市教育委員会：『君石遺跡』
1987 松本市教育委員会：『松本市宮渕本村遺跡II』
1981 山岸良二：『方形周溝墓』考古学ライブライマー8

2) 集落の変遷

田川の河岸段丘上に立地する中挿遺跡は今回の調査で縄文時代から中世に至る造構、遺物が検出され、断続的にではあるが遠い昔から集落が営まれ、人々の生活の場であったことが確認された。また、当遺跡の東側に位置する向陽台遺跡、田川をはさんで西側に位置する和手遺跡も含めて考えるとこの地域における人々の営みは1万年以上前にさかのばるであろう。しかし、今回の調査は道幅分という限界があり、この調査地域での結果をもって中挿遺跡の全体像にせまるには大変不充分である。

ここでは、限られた範囲の中ではあるが、中挿遺跡の集落の構成やその発展、推移について、時代をおって検討を加えてみたい。

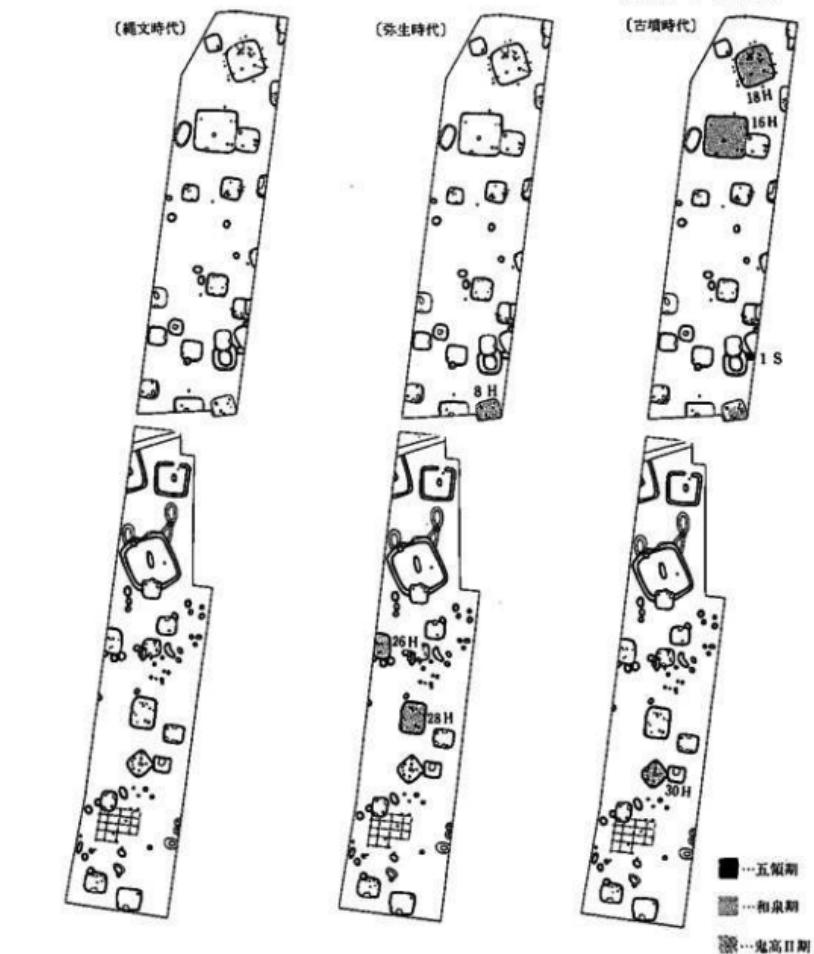
〔縄文時代中期〕

第46、48、50号住居址の3軒が相当する。3軒とも小台地状であるII地区において検出され、いずれも中期初頭に属するものである。第46号と第50号住居址は重複関係にあるため、この時期は多くて2軒、少なくみれば1軒という極めて小規模の集落であったことがうかがえる。また、平出遺跡、畠原遺跡など当時の換点的で水統的な集落に対し、独立的で、そして一時的な生活の場であったと思われる。

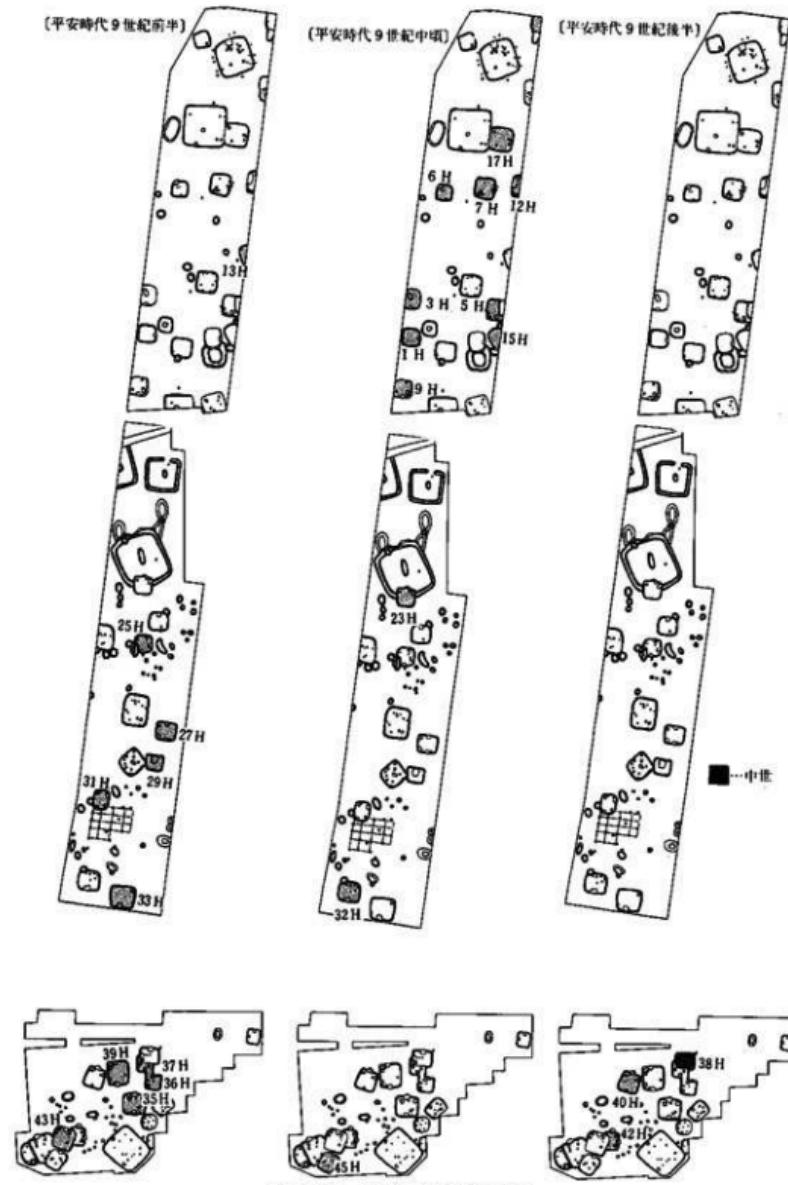
〔弥生時代後期〕

第8、26、28号住居址の3軒が相当する。住居と方形周溝墓が隣接しているため、一見、3基

第2節 中挾遺跡



第211 図 中挾遺跡集落変遷図(1)



第212図 中核遺跡集落変遷図(2)

の方形周溝墓を取り囲むようにして住居が立地しているようにみえる。当遺跡の東側の台地上に位置する向陽古遺跡のように住居域に対し墓域がやや離れた場所に設けられるという区別、あるいは片丘南熊井地籍に所在する上木戸遺跡の様に住居域と墓域を区画する遺構は調査区域がかぎられていたこともあり認められず、住居と方形周溝墓との関係は判然としない。住居址の切り合ひ関係はないため集落の存続期間は短かかったと思われる。また、出土土器が大変少なかったため集落の編年的分離は不可能であり、集落の変遷は判然としない。

当遺跡の周辺の調査はまだなされていないが、当遺跡に隣接する畠からは弥生式土器、勾玉、細形管玉、小玉などの出土が確認されている。しかし、現段階において当遺跡の弥生集落の様相を明らかにすることは不可能である。今後なされるであろう調査によって、この集落の様相、推移、そして方形周溝墓との関係は明らかになっていくだろう。

(古墳時代)

当遺跡からは古墳時代初頭の五領期から鬼高II期までの遺構が検出され、これらに伴って様々な遺物が出土した。この地域における古墳時代の遺構の検出例は当遺跡がはじめてであり、継続的にではあるが古墳時代の集落がこの地域においても営まれていたことが判明した。以下では、当遺跡の集落を時期を負って検討してみたい。

○五領期 第1号小竪穴が相当するのみで、住居址は検出されなかった。そのため、この時期における集落の様相は不明である。しかし、当遺跡の空白の4世紀代をうめる唯一の資料であり、古墳時代初頭において、この地域で集落が営まれていた可能性をも示す。

○和泉期 第16、18、30、34、47、51号住居址の6軒が相当する。住居址は調査地区的全域に分布するが、I地区の西端に位置する第16、18号住居址グループ、浅谷地形をへだてたII地区に位置する第34、47号住居址グループの2つにグルーピングできる。第30号住居址と第51号住居址は2つのグループから離れた場所に孤立して存在する。しかし、今後の調査によってその様相はかかるかもしれない。第16、18号住居址グループは大型住居同士が隣接し合い、第34、47号住居址グループは大型住居と小型の住居が隣接し合っている。大型住居址が集落における中核的な住居ならば第16、18、34号住居址のまわりから、さらに小型の住居址が今後の調査によって検出されるであろう。また、住居址の切り合ひ関係は認められなかったため、一時的な集落であったことがうかがえる。塩尻におけるこの時期の集落の検出例は平出遺跡に次いで2例目であり、大きな成果であった。

○鬼高II期 第44号住居址が1軒相当するのみである。よって集落の様相は判然としない。しかし、この時期、平出遺跡において大集落が構成されていたにもかかわらず、当遺跡でこの時期の住居址が検出されていたことは注目に値する。

(平安時代)

今回の調査によって37軒の住居址が調査地区全域にわたって検出された。37軒中、時期の判明

第Ⅳ章 調査遺跡

したものは26軒あり、これらはいずれも9世紀代に属するものであり、さらに前半、中頃、後半の3時期に細分できる。このように、中挾遺跡は9世紀代において生活の場として継続的に集落が営まれていたことがうかがえる。以下では集落の推移を3時期にわけて検討するとともに、出土した多くの遺物についてその推移について若干の考察を加えたい。なお、土器の出土が少なく、時期決定が判然しないものについては考察の対象から除外した。

○前半 第13、25、27、29、31、33、35、37、39、43号住居址の11軒が相当し、時期決定できた住居址の42%を占め、この時期の集落の発生、発展の時期にあたると思われる。住居址はI地区の東側とII地区に5、6軒の2つのグループを形成し、I地区西側に第13号住居址が孤立して存在するといった状態を示している。I地区東側のグループは建物址をとりこむように位置しているが、このグループと建物址との関係は判然としない。

この時期の出土土器に関しては、供膳形態としては須恵器を中心で、その多くを無高台の杯が占める。底部はほとんどが回転糸切り手法によるが、ヘラケズリによるものも若干はじまる。高台付杯は量的には多くないが出土しており、底部はいずれも回転ヘラケズリによる。その他須恵製品としては蓋、長頸瓶、四耳壺が出土している。土師器の杯に関しては相対的に量は少ないが出土しており、そのほとんどが無高台である。体部内面はミガキ、黒色処理されているものが多い。底部は回転糸切りによるものがほとんどであるが、静止ケズリのものも出土している。第31号住居址からは甲州型杯が出土している。

代表的な住居址として第33、35号住居址があげられる。

○中頃 第1、3、5、6、7、9、12、15、17、20、23、32、45号住居址の13軒が相当し、時期決定できる住居址の50%を占める。集落の中心は前の時期において住居址が1軒しか検出されなかった調査区の西側に移動し、II地区において前の時期5軒存在した住居址は1軒に減少した。またI地区東側のグループも消滅している。I地区西側に1グループ4、5軒の2つのグループが形成され、さらに細分できる可能性もある。第20、23、32、45号住居址は1軒1軒が孤立して存在する形態を示している。第32号住居址は建物址の東側に位置するが両者の関係は判然としない。

この時期の出土土器をみてみると、供膳形態として須恵器の杯が急減し、そのほとんどを土師器の杯が占めるようになる。土師器の杯は内面が黒色処理されているものが多くを占め、底部は回転糸切りによる。また、高台付の杯も普及はじめめる。甕に関しては、胴部外面にカキメを用いたものが出現はじめめた。大型の甕と小型甕の二形態が出土している。須恵器としては四耳壺、灰釉陶器としては短頸壺、長頸瓶が出土している。

○後半 第40、42号住居址が相当する。住居数は2軒に激減し、当遺跡における、平安集落は終末期をむかえた。住居はII地区において検出されたのみで、再び集落は東側に移動していき、小規模な集落が営まれたと考えられる。

出土土器に関しては、2軒しか住居址が検出されていないため不明な点もあるが、この時期より灰釉の壺、皿が普及はじめたと思われる。しかし、量的には少ない。土師器の壺は高台付で

内面は黒色処理されている。

(中世)

第38号住居址が1軒相当するのみで、出土遺物も内耳1点を数えるのみで大変少なかったためいつ頃、どの程度の集落が営まれたかは不明である。しかし、塩尻における中世の住居址の検出例ははじめてであり、今後の調査に期待がもたれる。

7まとめ

中挟遺跡は、鉄物師屋川と田川の両河川にはさまれた台地上に立地し、田川をはさんで和手遺跡と、鉄物師屋川をはさんで向陽台遺跡とそれぞれ対峙する。

本遺跡は、地元の小沢芳市氏によって弥生時代の玉類が一括して採集されたことから弥生時代の重要な遺跡として著名であった。今回の調査では、遺跡地を東西に300m、幅25mにわたって横断する調査区が設定された。調査の結果は縄文中期～中世にかけての大集落であることが判明した。

縄文中期の住居は、鉄物師屋川に臨むII地区にのみ構築されている。3軒の住居はともに中期初頭に属し、周辺では類例に乏しい資料である。縄文中期の遺跡は本遺跡のような比較的低平な地帯には痕跡が少なく、より高位の山麓に分布の中心をもっている。高出遺跡群の一区座でも中期初頭の遺構、遺物が得られており、こうした状況をみるとこの時期に低平地への一時的な進出がなされたのかもしれない。

弥生時代の遺構は、住居址、方形周溝墓がI地区のみから検出され、II地区には全く痕跡が認められない。後期箱清水期に属するこれらの遺構は、方形周溝墓を取り囲むように住居が配列しているように受けられる。小沢氏が玉類を採集した地点は4号方形周溝墓の北側で、あるいは方形周溝墓の副葬品であったかもしれない。松本平では最近多くの方形周溝墓が検出されつつあるが、1遺跡4例は最多であり、しかも住居群との関連で把えられたことも重要である。さらに隣接する向陽台・和手両遺跡でも住居と方形周溝墓とがセットで発見されており、この地域の後期弥生文化充実に大きな役割を果すものとなろう。弥生時代の集落立地を考える場合、生産地域を想定し、集落復元する必要がある。中挟遺跡の場合、鉄物師屋川をはさんで向陽台遺跡と対峙していることから、鉄物師屋川を越えて東側にまで侵出している可能性は薄く、おそらく川の西側の低平地を水田地帯としていたものと思われる。

古墳時代になるとI・II地区に住居域が拡大し、5軒の住居址が発見されている。住居規模は概して大形で豊富な遺物が出土した。古墳時代の集落は平出遺跡が著名であるが、平出調査後は資料の増加がはかられず、その実態は不明瞭な部分が多い。今回のバイパス関連の調査では和手遺跡でも多くの資料が得られたことからようやく該期検出の基礎資料がそろってきたといえよう。

平安時代では、I・II地区にまたがり39軒の住居が発見された。この時期には、平出、吉田向井、吉田川西など低平地に大集落が出現する。本遺跡もそうした遺跡の1つで、拠点的集落であっ

第四章 調査遺跡

たといえよう。本遺跡から東方の山間地には、高山城、樋口、栗木沢など山間地集落が点在しており、今後、両者の関連性追求が大きな課題となろう。また遺跡南方には五日市場という字名をもつ同時代遺跡があり、近辺を通過していたとされる東山道との関りも重要課題である。

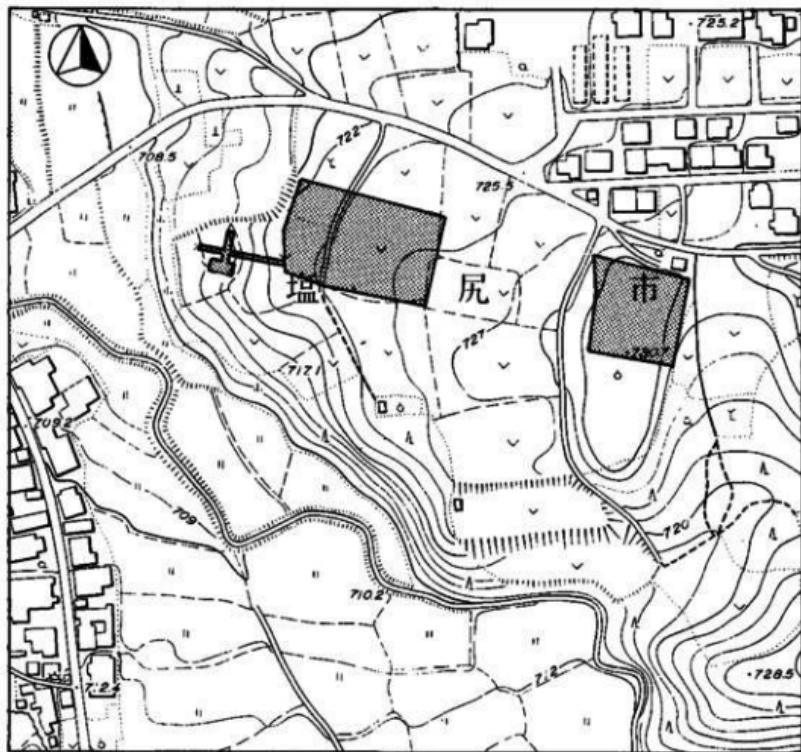
また、一軒のみであったが35号住居からは内耳土器が出土し中世の竪穴住居であることが判明した。市内で明確な中世竪穴住居の検出は初めてであろう。今後の研究の糸口を提供するものとして重視される。)

以上のように本遺跡は、長期にわたる集落遺跡で、その時期ごとの拠点的集落であった。この地域の古代史解明に果す役割は極めて大きい。

第3節 向陽台遺跡

1 位置と地形

向陽台遺跡は、塩尻市大字桙數字入道地籍に所在する。高ボッチ山系の西麓斜面には、山麓から流下する群小の河川による開析と、複合扇状地の形成による複雑な地形が、塩尻市街東方の小坂田付近から松本市寿付近に至る東西2km前後、南北10kmにわたって展開している。この放射状に発達した、西へ向かって細長く尾根状に延びる幾筋もの台地上には数多くの遺跡が存在し、いずれも眼下に松本盆地の平を臨み、遠く北アルプスの峻嶺を一望する日当たりのよい好条件の立



第213図 向陽台遺跡調査地区図

第三章 調査遺跡

地環境にある。

向陽台遺跡もこうした尾根上の先端部に立地し、北側と南側を深く開析された舌状台地となっている。台地上北側を市道が走り、ここを境に北側は大字片丘地籍となって向陽台団地が造成されている。台地先端部から180m東方で、小規模ながら南北に尾根を切断する形で谷の形成がみられ、遺跡の東限をなすと考えられる。遺跡の立地する台地上は標高720~730mを計り、南北130m、東西180mである。ただし今回の調査の結果台地が西に急傾斜する斜面上において集石炉の発見がなされ、遺跡の範囲は東西約210m、標高716~730mの間と判明した。

台地下には田川の支流「鉢物師屋川」が臨まれ、この潤いを得て水田地帯が広がっている。台地上との比高差は12mを計る。70m西方を南北に「五千石街道」が横切り、ここから南西方向に桟敷の集落が広がっている。鉢物師屋川の西側、桟敷集落北側の畠地帯には、縄文中期、弥生、古墳、平安時代の集落が発見された中核遺跡が存在し、鉢物師屋川を挟む形で向陽台遺跡と対峙している。また、同一尾根上東側には200mを隔てて北原遺跡が存在し、比高差15mを計っている。塩尻バイパスは、この尾根を掘り割りで西下した後、1.2km先で国道20号線終点と合流する。

2 調査概要

今回の調査は、塩尻バイパス建設が向陽台遺跡の立地する舌状台地中央部を切断する形で計画されたことに伴い実施された。調査区は、台地上先端部分にII地区、東へ70m隔ててI地区が設定され、II地区の西先端部分からの斜面ではトレンチ調査を行なった。

造構は、縄文時代早期の住居址4軒、同期の集石炉4基、縄文時代前期の住居址4軒、弥生時代後期の住居址6軒、方形周溝墓1基、小竪穴30基が検出された。いずれもローム層内に深く掘り込まれ、遺存状態は良好であった。

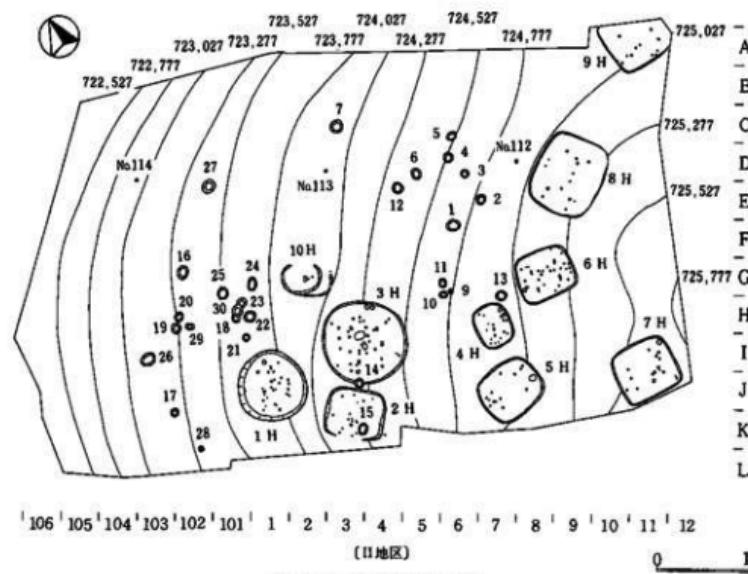
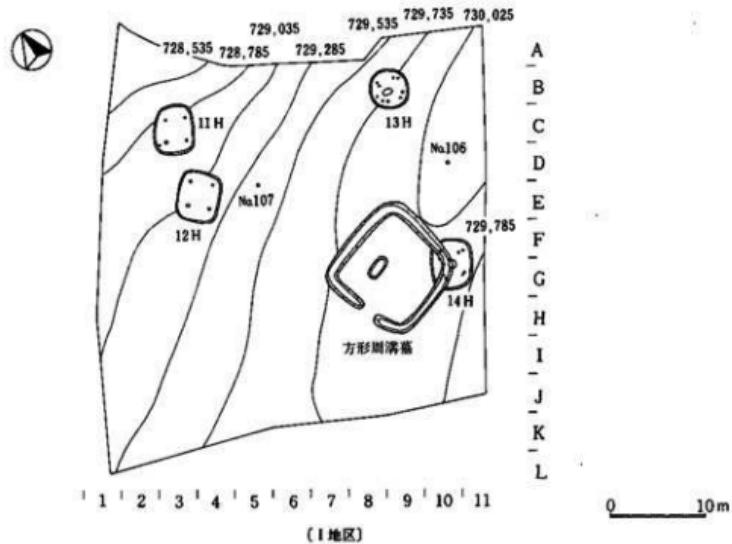
縄文早期の住居址4軒は、II地区西半、換言すれば台地先端部付近に集中して検出された。円形プランを呈し、中でも3号住居址は直径9mの大型住居址であったため注目された。土器は、沢式の山形押型文土器と厚手の無文土器が大量に出土した。石器類も、石鎌、不定形石器、礫器、砥石、特殊磨石、石皿、凹石等、該期の資料が多く得られた。

集石炉4基はいずれも、台地先端部から一段下がった小テラス部から、トレンチ調査によりまとまって発見された。4基とも、円形の掘り込みの中に赤褐色に焼けた礫と焼土、炭化物を伴っていた。炉周辺からは、沢式土器とともに、台地上ではみられなかった細久保式の楕円押型文土器が多く出土した。

縄文前期の住居址4軒は、いずれも台地先端部から離れたI地区において検出された。中越期に比定され、尖底深鉢土器の一括出土のほか、壺型土器、平底底部などが出土した。石器類は、石鎌、不定形石器、石匙、石盤、石皿、磨石、敲石、凹石、打製石斧、磨製石斧、有抉頭磨石器などが大量に出土した。

弥生時代後期の住居址6軒は、すべてII地区東半部において確認された。箱清水期に並行し、2軒は焼失家屋であった。埋甕炉以外の土器では、壺、甕、高杯が出土し、石器類では、打製石

第3節 向陽台遺跡



第214図 向陽台遺跡全体図

第三章 調査遺跡

斧、石庖丁、砾石等が検出した。これらの住居址に伴うと思われる方形周溝墓は、やや距離を隔てたⅠ地区の東側で検出された。これに伴う出土遺物はない。

小堅穴は、すべてⅡ地区で確認されている。7号小堅穴からは、縄文中期初頭の深鉢が出土したが、大部分については時期、性格ともに不明である。

遺構外遺物としては、先土器時代のナイフ形石器と、両端に頭を有する小型の石棒が出土した。ナイフ形石器は、第10号住居址の覆土中から出土した。このため、早期集落域で遺構の検出されなかったローム層面に、先土器時代調査を目的としたグリッド10ヶ所を設定し掘り下げを行なったが、関連する遺構、遺物は得ることができなかつた。

3 発掘区の設定

東山山麓から放射状に西斜する幾筋もの尾根の1筋に、向陽台遺跡は立地する。地形的には、尾根先端部にあって舌状台地をなし、眼下に臨まれる鉢物師屋川との比高差は12mを計る。台地上平坦部については、東西約180mの間に遺跡は展開していると考えられた。このうち、ほぼ中間にある東西約60mの畑地では、以前にローム土の採取を目的とした土取りが行なわれたため一段低くなっている、遺構はすでに破壊されていると思われた。このため、この地域は調査区から除外することとした。また、昭和60年度においては、建設省による用地取得が、台地先端部から20m東を南北に走る農道以東であったため、この区域について調査区を設定し、同年発掘調査を実施した。この結果、調査区の最西端まで遺構が確認されたため、建設省と協議を行ない、翌61年度、台地先端部に残されていた畑地部分と西側斜面について調査を実施した。

調査区は、東側をⅠ地区、西側をⅡ地区とした。発掘前の現地踏査では、Ⅰ地区においては、石鏃、黒曜石フレーク、打製石斧等の石器類が多く採集され、Ⅱ地区では、縄文中期土器、打製石斧のほか、縄文早期山形押型文土器が1片得られた。試掘調査では、Ⅰ地区が20~30cm、Ⅱ地区が40~50cmの暗褐色土堆積下に褐色のローム層を抱えることができた。

調査は、バックフォーおよびブルトーザーによる表土除去を行なった後、4×4mのグリッドを設定した。グリッドは、Ⅰ地区が西から東へ1~11、北から東へA~L、Ⅱ地区が、1年次は西から東へ1~12、北から南へA~Lで、2年次は東から西へ101~106とし南北は1年次と同一にした。西側斜面については、J区を延長する形で1m幅トレンチを設定し、Aトレンチとした。台地上と同じく4mのグリッドを設定し、西端はJ-115区となった。またこれに直交する形で、畑地として利用される小テラス上のJ-113区に1m巾トレンチ20cmを南北に設定、Bトレンチとし、この南半において集石炉が検出されるに伴い、4×10mのCトレンチをBトレンチ南端に直交させる形で東西に設定した。先土器時代調査グリッドは、早期集落域の遺構未検出部分について、2×2mで10ヶ所を設定し、それぞれ約60cm掘り下げた。設定区は、H-1、2、I-101、J-101、102、K-101、1、2である。

発掘調査総面積は、4,500m²を計った。

4 土層

層序は、I地区とII地区で差異があり、地山ローム土層上の堆積も、I地区で20~30cm、II地区で40~50cmと明らかな隔たりを示している。

I地区の基本層序は、上位から暗茶褐色土層、暗褐色土層、暗黒褐色土層、ローム土層に識別される。遺構の掘り込みは、ローム土層になされ、暗褐色土が基本的な覆土となっている。暗茶褐色土層は、耕作土層にある。いずれの層内にも砂礫の混入はほとんどみられず、流水による影響もない良好な自然堆積状態を示している。

II地区の基本層序は、上位から暗茶褐色土層、暗褐色土層、黒色土層、暗黒褐色土層、ローム土層に識別される。I地区ではみられなかった黒色土層が層位中で明確にえられる点で、同一台地上にもかかわらず、異なる環境の中で堆積が進行したことを示していると思われる。遺構の掘り込みはローム土層になされ、黒色土と暗黒褐色土が基本的覆土となっている。これら2層は、遺構検出時における指標土として利用され、また遺構外においても遺物包含層として認められた。最上層は耕作土層にある。いずれの層も砂礫の混入はほとんどみられず、流入による影響も良好な自然堆積として確認できた。

5 遺構・遺物

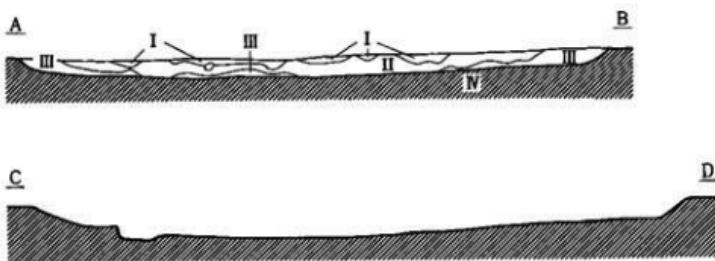
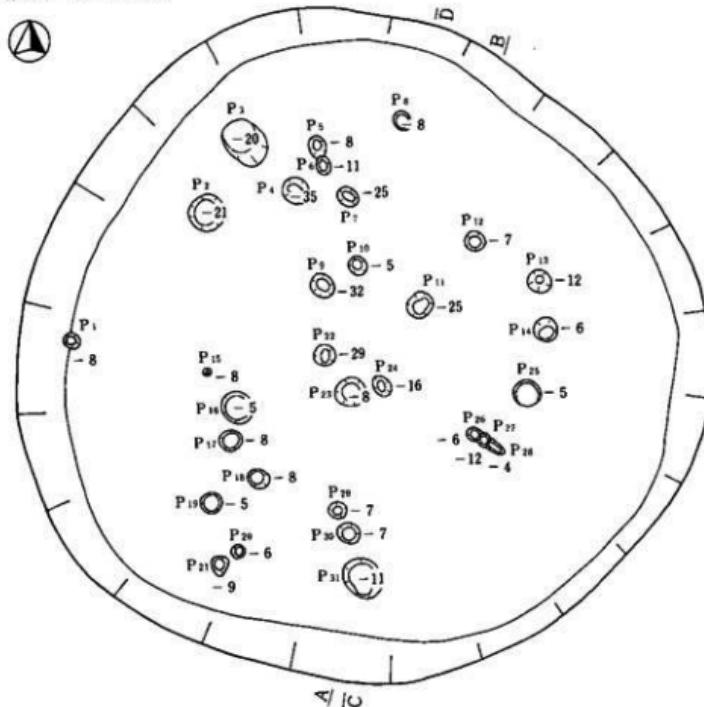
1) 繩文時代

(1) 繩文時代早期住居址

第1号住居址

遺構 IJK-101、1、2グリットにかけて検出された。押型文期の4軒の住居址中、最も崖端に近く、崖端から20m内奥に位置している。擾乱も入らず遺存状態の良い住居である。

住居の掘り込みはローム面になされており、覆土は中央部に薄く黒色土が堆積し、黒色土下には褐色土が10~20cmの厚さで流入しており、一部は床面上まで達している。壁際および一部の床面上に暗褐色土がみられる。褐色土中に根痕が若干入っているが、各層とも安定した状態を示している。プランは直径7.3~7.1mのほぼ円形を呈し、該期としては大形に属する。壁は緩やかに立ち上がり、壁高は東壁23cm、西壁13cm、南壁26cm、北壁22cmを測る。床面はローム層中に形成され、西に向かって若干傾斜している。床面は軟弱で、踏み固められた形跡は認められない。ピットは大小あわせて31個検出されている。径10~30cm前後、深さ10cm内外を主体とする。前期以降の住居にみられる径20~30cm、深さ40~50cmにも達するしっかりした柱穴とは異なり、しかも検出が難しかったため全てのピットが本址に伴うとは限らない面もあるが、他の住居例を参考とすれば、その大半は柱穴痕と認めてよさそうである。配列は、中央に径1m程の円周上にのるP₁、P₁₀、P₁₁、P₂₂、P₂₃、P₂₄の6柱穴と、径4mほどの円周上にのるP₂、P₄~P₇、P₁₆~P₁₉、P₂₄、P₃₀がある。対応関係は不規則であり明確さを欠いている。壁ぎわにはほとんど存在しない。本址は、床面を精査したにもかかわらず炉址の痕跡を見い出すことができなかった。また周溝も検出されていない。



I : 暗色土 (粘性・しまり弱・他の住居址の覆土上層にも共通して認められる層)
 II : 黒褐色土 (粘性弱・しまり有・ローム粒子混入・個所に根痕が入り乱れが多い)
 III : 暗褐色土 (粘性・しまり有・ローム粒子多量混入・住居址の覆土)
 IV : ローム層

第215図 第1号住居址

第14表 第1号住居址内ピット一覧表

ピット	規 模	深さ	平面形	備 考	ピット	規 模	深さ	平面形	備 考
P ₁	19×19	8	円 形		P ₁₇	25×22	8	楕 円 形	
P ₂	39×39	21	"		P ₁₈	24×20	8	"	
P ₃	52×40	20	楕 円 形		P ₁₉	24×22	5	"	
P ₄	30×26	35	"		P ₂₀	15×15	6	円 形	
P ₅	(22)×18	8	"		P ₂₁	20×20	9	不整円形	
P ₆	20×15	11	"		P ₂₂	23×21	29	楕 円 形	
P ₇	24×18	8	"		P ₂₃	23×21	29	"	
P ₈	21×18	8	"		P ₂₄	24×18	16	"	
P ₉	26×23	32	"		P ₂₅	29×28	5	円 形	
P ₁₀	20×18	5	"		P ₂₆	14×(13)	6	楕 円 形	
P ₁₁	28×24	25	隅丸長方形		P ₂₇	15×13	12	円 形	
P ₁₂	22×21	7	円 形		P ₂₈	(19)×12	4	楕 円 形	
P ₁₃	26×22	12	楕 円 形		P ₂₉	19×18	7	円 形	
P ₁₄	25×25	6	円 形		P ₃₀	25×20	7	楕 円 形	
P ₁₅	10×9	8	"		P ₃₁	45×38	"	"	
P ₁₆	35×32	5	楕 円 形						

土器 出土した土器破片総数（細片を除く）は296点、そのうちわけは押型文93、無文203である。押型文はすべて山形文であり、それらは山形文Cタイプという単純な在り方を示している。

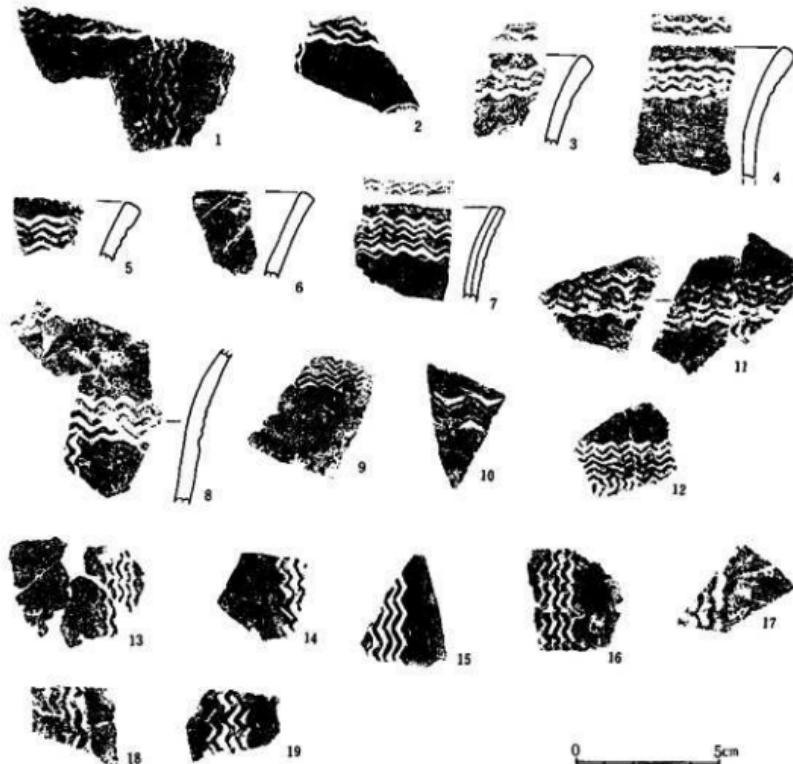
山形文Cタイプの細別では、黒船を含むCタイプ2が大部分を占め、黒船を含まないCタイプ1およびCタイプ3は極くわずかである。

山形文土器の様相は、3号住居址のものと大きな相違は認められない。

無文土器も同様に3号住居址の内容と大差なく、口縁部が緩く内湾するAタイプと緩く外反するBタイプが主にあるが、口縁部破片が少ないためその比率は明確ではない。

1点だけ注意すべき無文土器がある。27の口縁に垂下する隆帯を添付した例である。本遺跡では唯一の出土である。

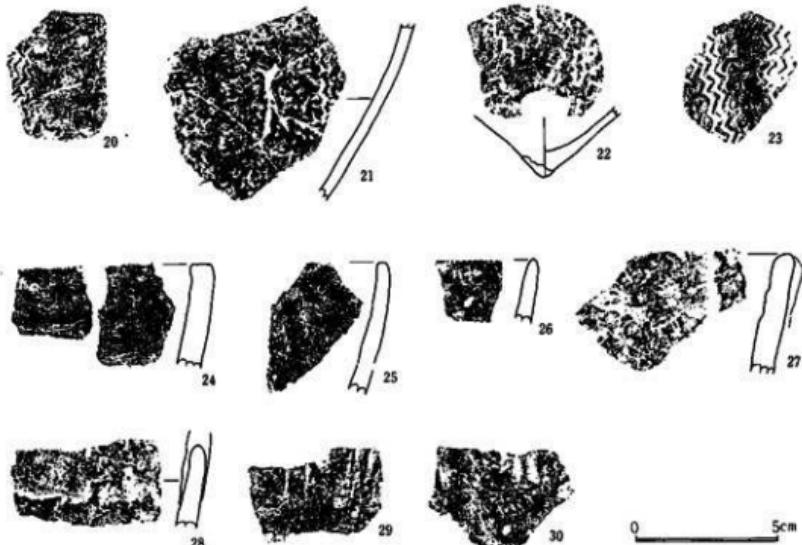
石器 本址から出土した石器は、黒曜石、チャートを素材とした石錐2、石錐2、不定形石器26、ピエス・エスキュ5、石核7、石片119、黒曜石以外を素材とした特殊磨石4、凹石1、砥石2、不定形石器7、横刃型石器2がある。砥石の一つは、細粒凝灰岩で表面に研磨痕をわずかに残す。またもう一つは撥形を呈する定形品で、前面を研磨している。側面は弧状になり、対象物の先端を研磨したためか細長い面を形成している。石材は中粒砂岩を用いている。磨石類の出土点数7点のうち、磨石、凹石はいずれも定形品が5点と1点、計6点が出土、これに対し特殊磨石（穀擦石）の2点は%～%の破損品である。3号住居に比べ1/5の量で、特別に特長的な在り方は示さないが、特殊磨石の比率が低い点はやや状況が異なる。



第216図 第1号住居址出土土器(1)

土器観察表

No.	層位	分類	条数	単位	原体径・高	端部	文様	文様	口唇	地	土	形状	遺物	No.	層位	備考
1	山野文C1	3?	2?		6.9-	2(1)	山2	C		2(1)	1-2	21-1H-7			頂上部	
2	"	2	5.5-			2(2)	山2			2(1)	1-2	"	312	"		
3	山野文C2	2	2	5.6-10.0		1(2)	山1	C	1	1(3)-4	1-1	"	49	口縁部		
4	"	3	2	4.0-12.7		1(2)	山1	C	1	1(1)	1-2	"	1	"	内面山野色	
5	"					1(2)	山2	C	1	1(4)	1-1	"	265	"		
6	"						C5	2	1(4)	1-1	"	270	"		河野文土器の無文部	
7	"	4	2	4.4-14.0		2(2)	山1	C	2	1(4)	1-1	"	257	"		
8	"	3	2	5.2-15.0		2(2)	山1	C1		1(4)	1-1	"	69	荒筋	遺物117と併合	
9	"	4				2(1)	山1	C		1(2)	1-1	"	197	"		
10	"	4				2(1)	山2	C		1(3)	1-1	"	55	"	1山の剥みか	
11	"	3	2	5.1-		1(2)	山1	C1		1(1)	1-1	"	70	"	遺物164-314-344と同一	
12	"	5	2	4.3		2(1)	山1	C1		1(3)	1-1	"	160	"	内外面山野色	
13	"	3	2			2(1)	山1	C		1(4)	1-1	"	12	脚部		
14	"					2(2)	山1	C		1(4)	1-1	"	68	"		
15	"	3	2	6.3-13.6		2(1)	山1	C		1(4)	1-1	"	157	"		
16	"	3?	2			2(2)	山1	C		1(4)	1-1	"	116	"		
17	"					1(2)	山1	C		1(3)	1-1	"	58	"		
18	"	3				2(1)	山1	C	1(1)	1-1	"	41	"			
19	"	3	2	4.9-16.0		2(1)	山1	C		1(4)	1-1	"	61	"		



第217図 第1号住居址出土土器(2)

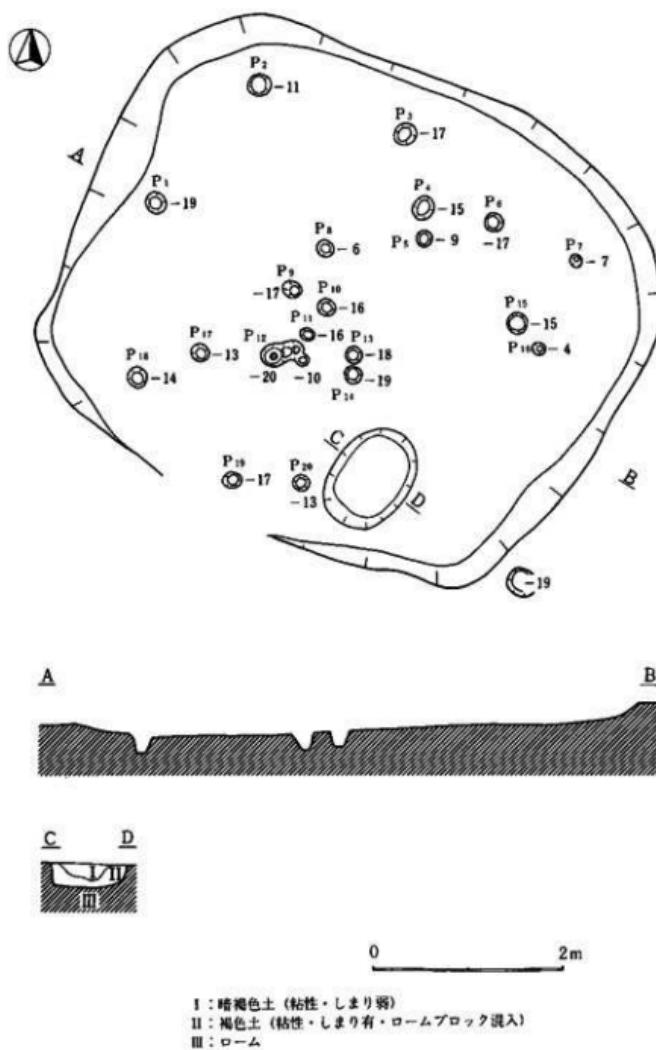
土器観察表

No.	層位	分類	全数	所持種・量	破部	文様	文様	口容	胎	土	變形	追物	No.	部位	備考
20	山形文C2				山1	C		1(1)	1-2	21-1-H	242			底下部	因No.338と接合
21	"				山1	C		1(1)	3-1	"	8				内外面に良化物付有
22	"				山1	C		1(3)-	1-1	"	253				
23	山形文C3	4	2	山	4.1-			2(2)	1-1	"	80			底下部	
24	無文A				平			1(1)	1-1	"	6			口縁部	
25	"				九	2(4)		1-2	"	322					小形土器か
26	"				尖	3		1-2	"	62					*
27	無文B				九	2(2)		1-1	"	77				底盤垂下	
28	無文				3(3)	1-1-		"	"	65				疑似口縁状の変形痕	
29	"					1(1)		2-1	"	111				構成を残す	
30	"					1(1)		2-1	"	193				所持四輪車か	

第2号住居址

遺構 JK-2、3、4グリットにかけて検出された。早期押型文期の住居址の中では南に偏しておらず、3号住居址に接している。

規模は6×5.1mを測り、東西方向に長軸を向ける隅丸長方形を呈する。壁は南壁の一部が、傾斜によって失なわれている他はよく残されている。壁の掘り込みは緩やかに傾斜をもって立ち上がり、壁高は東壁16cm、西壁7cm、南壁14cm、北壁8cmと浅い。床面はローム層面に設けられ、西に向ってやや傾斜している。床面は軟弱で、踏み固められた様子は認められない。ピットは住居内から20ヶ所検出されている。ともに径20cm前後の円形で、深さ10~20cmを一般としている。他の3軒の住居址から検出されたピットに比べ、比較的整った掘り込みである。これら全てのピットが柱穴に該当するかは疑問であるが、配列状況、規模からみてその大半は柱穴とみて差しつかえないであろう。配列は1号住居址と類似し、床面中央にあるP₅、P₆、P₇、P₁₂~P₁₄と、壁か



第218図 第2号住居址

第15表 第2号住居址内ピット一覧表

ピット	規格	深さ	平面形	備考	ピット	規格	深さ	平面形	備考
P ₁	23×23	19	円形		P ₁₃	16×13	16	楕円形	
P ₂	25×23	11	楕円形		P ₁₄	46×23	20	楕円形	
P ₃	25×23	17	"		P ₁₅	17×17	18	円形	
P ₄	26×22	15	"		P ₁₆	19×19	17	"	
P ₅	17×16	9	円形		P ₁₇	23×23	15	"	
P ₆	20×20	17	"		P ₁₈	14×14	4	"	
P ₇	14×14	7	"		P ₁₉	20×19	13	"	
P ₈	19×17	6	楕円形		P ₂₀	21×21	14	"	
P ₉	21×17	17	"		P ₂₁	21×17	17	楕円形	
P ₁₀	20×18	16	"		P ₂₂	18×16	13	"	

ら一定の間隔をもって配列する P₁～P₃、P₆、P₇、P₁₅、P₁₆、P₁₈～P₂₀とがある二重の在り方を示している。

住居内には炉は発見できなかった。また周溝も認められなかった。

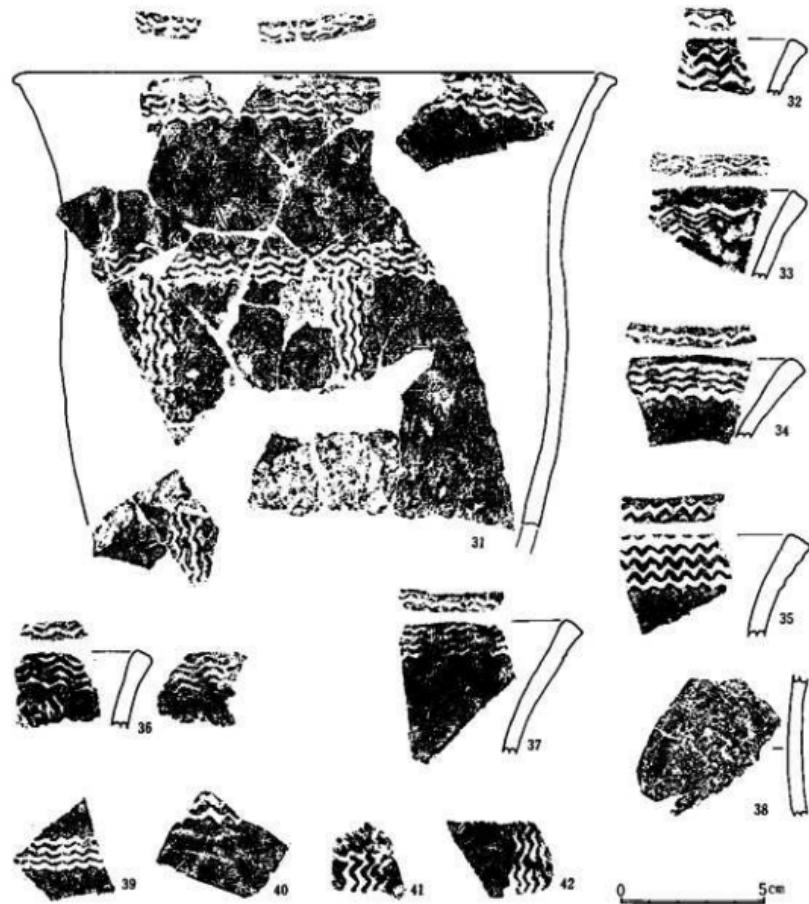
土器 山形文土器の中では最も大きく破片の接合した例が31の土器である。口縁が強く外反し頭部がくびれて胴上部で緩くふくらむ器形は、これまで福沢遺跡、沢遺跡において復原された類例と何ら変わることろがない。文様構成はC 1であるが、口縁内側の施文はない。黒鉛を多く含み胎土は黒色であるものの、内外面とも暗褐色である。器壁は非常に薄手に作られ、粘土貼り付けによる成形（第4手法）をとるらしく、外面の剥落が著しい。山形文Cタイプ2の典型である。本址の押型文は細片を除いて59片、大部分がCタイプ2の破片であり、文様構成もC 1に主体をおく。

無文土器は211片（細片を除く）が出土している。口縁破片をみると緩く内湾して開くAタイプが多く、口唇端部は丸味のあるものがほとんどである。48、49は成形技法を知る好例である。

押型文・無文土器とも他住居址の内容と大きな差異はない。

石器 本址からは、黒曜石、チャートを素材とした石錐5、石錐1、不定形石器2、ビエス・エスキュー1、石核7、石片61、黒曜石、チャート以外の石材を用いた砥石2、不定形石器8、横刃型石器1が出土した。出土石器量は他の押型文期住居に比べ少量である。

砥石は2点あり、不整形な大型のものと表面を滑らかに研磨した小型のものがある。黒曜石以外の大型の不定形石器は8点あり、横刃型状になるもの1点、両方向からの大きな剝離で槍先形の先端を作出したものが1点あり、他は大きな剝離を有するものである。

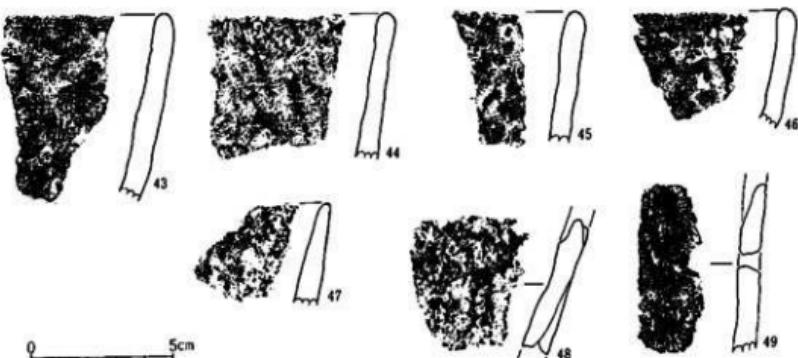


第219図 第2号住居址出土土器(I)

土器観察表

単位:mm

No.	層位	分類	枚数	単位	原体径・長	端部	文様	文様	口唇	底	盤形	直 径	No.	層位	備考
31	山野文C2	3	2	4.0 - 12.0	2(1)	山1	C1	2	1(3)×	1 - 2	21 - 2 H -	17	口一側	12片が複合、内外面暗褐色	
32	"	2	2	5.9 - 13.3	2(1)	山2	C	1	1(1)	1 - 2	"	93	口縁部		
33	"	4			1(1)	山2	C	1	1(1)	1 - 1	"	8	"		
34	"	3	2	4.5 - 13.0	2(1)	山1	C	1	1(1)	1 - 1	"	42	"		
35	"	3	2	3.6 - 16.0	2(1)	山1	C	1	1(1)	1 - 2	"	19	"		
36	山野文C1	3		- 11.5	2(1)	山2	C2	1	2(1)	1 - 1	"	- 16	"	表面多く含む	
37	"	C2	3	2	3.6 - 10.3	2(1)	山2	C	1	1(1)	3 - 1	"	119	"	内面一部褐色
38	"	"					C		1(1)	3 - 1	"	- 15	東 部		
39	"	"	3	?	11.2	2(1)	山1	C	1(3)×	1 - 1	"	101	"	背野土と同様文様	
40	"	"				2(1)	山1	C	1(1)	1 - 1	"	138	"		
41	"	"	3			1(2)	山1	C	1(3)×	1 - 2	"	104	"		
42	"	"	3			1(2)	山1	C	1(3)×	1 - 2	"	144	明 部		



第220図 第2号住居址出土土器(2)

土器観察表

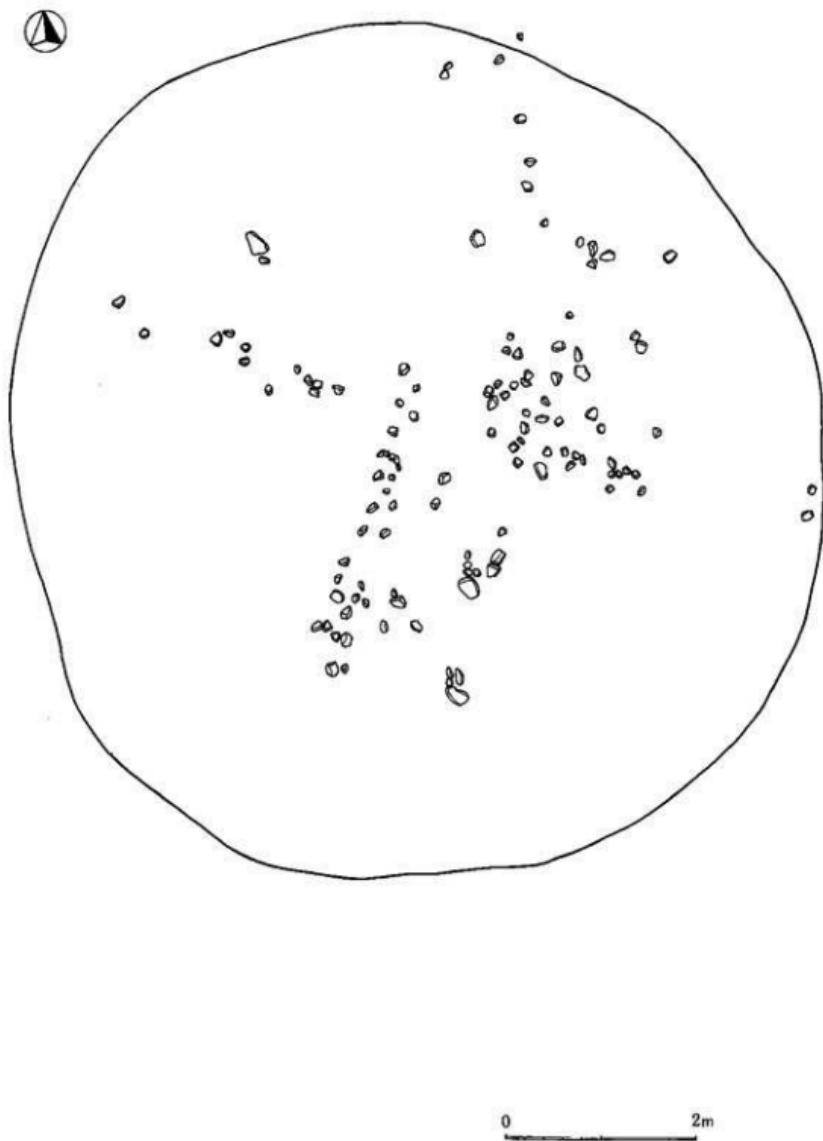
No.	部位	分類	形数	単位	基体・性質	環部	文様	口縁	胎土	用途	造物 No.	部位	備考
43	施文A							丸	1(1)	2・1	21・2 H・166	口縫	
44			*					丸	3	1・2	*	123	*
45			*					丸	3	1・2	*	145	*
46			*					丸	3	1・2	*	一折	*
47	施文B							丸	3	1・2	*	111	*
48	施文		*					3	2・1	*	155	底下部	
49								1(1)	1・1	*	85		

第3号住居址

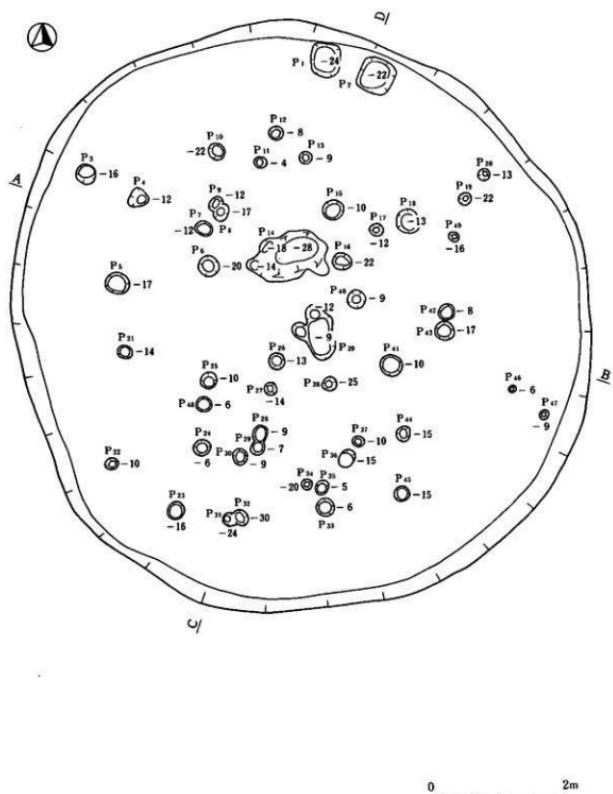
造構 H-1、J-2、3、4、5グリットにかけて検出された。南側を2号住居址と接し、西側には1号住居址が、北側には10号住居址がそれぞれ配置し、ちょうどこの3軒の住居址に取り囲まれるような位置にある。

住居覆土は、黒褐色土が20cmの厚さで堆積し、その下位に一部床上面に達する暗褐色土がある。覆土中には、多量の焼灰が他の遺物とともに含まれていた。

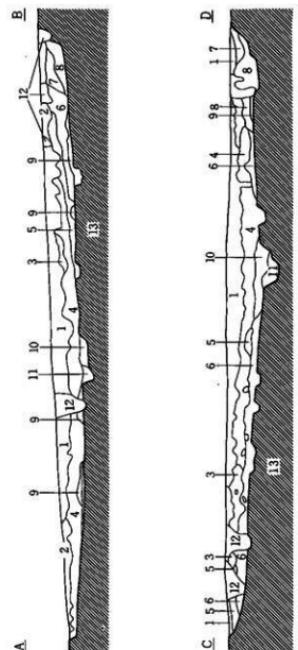
規模は8.84×8.56mの大形で、ほぼ円形プランを呈する。壁は全体に緩やかに立ち上がるが、東側のみ垂直に近い掘り込みとなっている。壁高は、東壁36cm、西壁10cm、南壁16cm、北壁20cmを測り、他の3軒に比較し、やや深い。床面は、壁ぎわで高くなる様やかな階鉢状を呈する。全面軟弱で、踏み固められた様子は認められない。ビットは49ヶ所検出されている。径20~30cm、深さ10~20cmのものを一般とする。配列は壁からやや内側、径5m程の円周上に乗るP₁、P₂、P₂₁~P₂₂、P₂₁~P₂₃、P₂₂~P₂₄、P₁₃、P₁₂、P₁₀と、その内側に小ビットが散在している。内側の小ビットも円周上に並ぶように見受けられることから、1・2号住居と同様の柱穴状況を示すと考えられる。北壁際には、P₁、P₂の方形を呈するビットが2基並列して存在する。北西部の床面上に焼成を受けて赤色化した部分が認められるが、非常に薄く、炉とは考えられない。床面中央やや北寄りに122×73cm、深さ28の不整形を呈する掘り込みP₁₄と、85×37cm、深さ9cmの不整形を呈するP₂₀とが存するが、炭、焼土など炉を関連するものは全く検出されず炉とは考えられなかった。また周溝も未検出であった。



第221図 第3号住居址遺跡出土状態



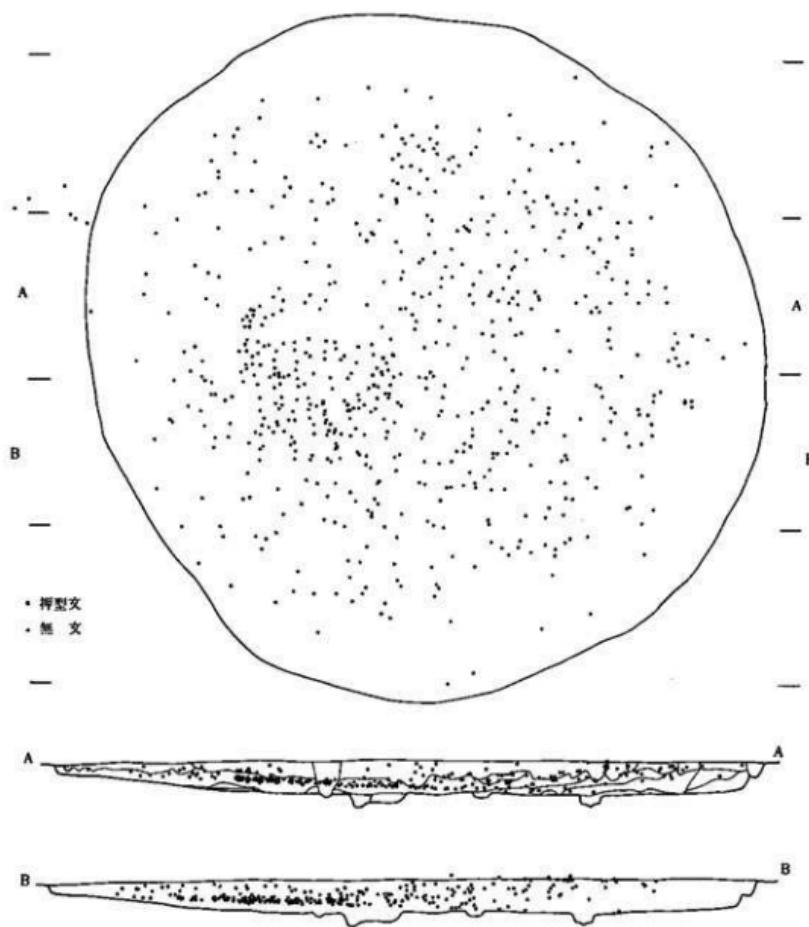
第222図 第3号住居址



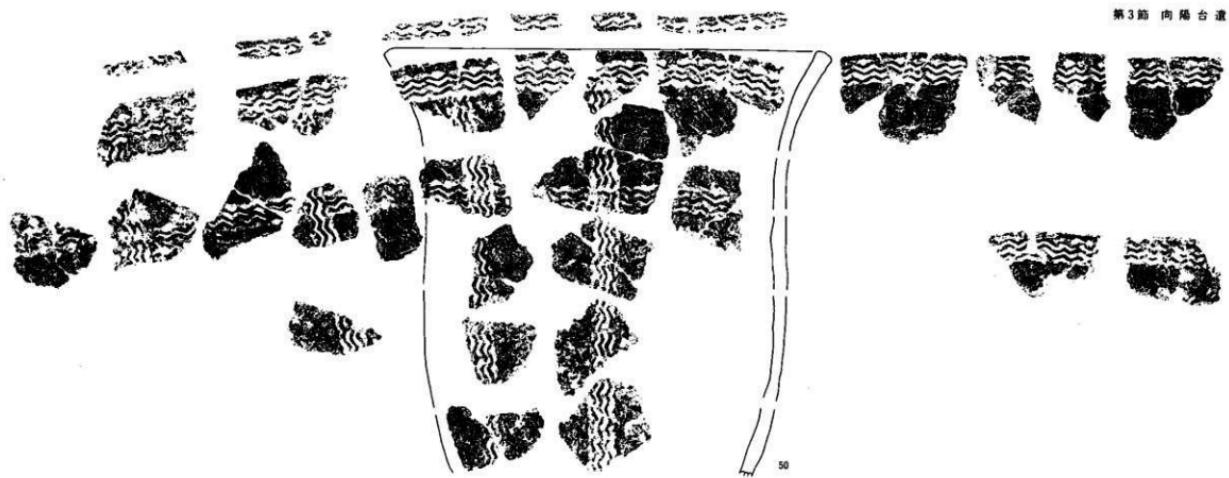
- 1: 黒色土(粘性・しまり非常に弱、粒子細かく炭化物粒子を微量混入、根柢が多く入る)
- 2: 紫褐色土(粘性強・しまり非常に弱、第1層に発達するが風味は弱くなる)
- 3: 赤色土(粘性弱・しまり有)
- 4: 黑褐色土(粘性弱・しまり有、炭化物粒子を微量混入、硬の混入が顕著)
- 5: 灰褐色土(粘性弱・しまり有、ローム・ブロックの量が増す)
- 6: 黄褐色土(粘性弱・しまり有)
- 7: 明褐色土(粘性弱・しまり有、ムラ子を多く混入)
- 8: 粉褐色土(粘性弱・しまり若干弱い・ローム・ブロックを少數混入)
- 9: 明褐色土(粘性弱・しまり強・ローム・ブロック混入)
- 10: 粉褐色土(粘性弱い・しまり強・炭化物粒子微量混入)
- 11: 黄褐色土(粘性強い・しまり強・第10層より明るい)
- 12: 深乱層
- 13: ローム層

第16表 第3号住居址内ピット一覧表

ピット	規 模	深さ	半面形	備 考	ピット	規 模	深さ	平面形	備 考
P ₁	50×44	24	隅丸方形		P ₂₈	25×24	13	円 形	
P ₂	51×51	22	"		P ₂₉	19×18	14	"	
P ₃	31×30	16	円 形		P ₃₀	(25)×20	9	横円形	
P ₄	30×28	12	不整円形		P ₃₁	(20)×20	7	円 形	
P ₅	36×31	17	横円形		P ₃₂	25×22	9	横円形	
P ₆	31×30	20	円 形		P ₃₃	20×(18)	24	"	
P ₇	28×23	12	横円形		P ₃₄	25×(18)	30	"	
P ₈	27×(20)	17	横円形		P ₃₅	28×28	6	円 形	
P ₉	25×(15)	12	"		P ₃₆	15×15	20	"	
P ₁₀	25×23	22	"		P ₃₇	24×29	5	横円形	
P ₁₁	19×17	4	"		P ₃₈	20×21	15	"	
P ₁₂	22×21	8	円 形		P ₃₉	19×17	10	"	
P ₁₃	22×21	8	円 形		P ₄₀	19×17	10	"	
P ₁₄	122×73	28	不整形		P ₄₁	85×37	12	不整形	
P ₁₅	32×30	10	円 形		P ₄₂	28×28	9	円 形	
P ₁₆	29×25	22	横円形		P ₄₃	33×31	10	"	
P ₁₇	21×19	12	"		P ₄₄	25×24	8	"	
P ₁₈	36×35	13	円 形		P ₄₅	29×27	17	横円形	
P ₁₉	20×19	22	"		P ₄₆	23×21	15	横円形	
P ₂₀	19×18	13	"		P ₄₇	24×24	15	円 形	
P ₂₁	23×19	14	横円形		P ₄₈	7×6	6	"	
P ₂₂	21×18	10	"		P ₄₉	15×13	9	横円形	
P ₂₃	26×26	16	円 形		P ₅₀	24×23	6	円 形	
P ₂₄	27×25	6	横円形		P ₅₁	17×15	16	横円形	
P ₂₅	25×25	10	円 形						



第223図 第3号住居址土器出土状態



第224図 第3号住居址出土土器(1)

土器 出土した土器片の総数は約1800点(細片は除く)、押型文と無文がすべてを占め、その比は1:3程度である。これ以外の文様をもつ破片は縄文、沈線文など11片があるが、胎土、器形から大半は中期初頭土器片である。

なお、若干の弥生土器が含まれていたが、胎土の差が明確であり除外してある。

押型文器：全体の70%が黒鉛を含む山形文の土器である。黒鉛の含まれない押型文土器の量は、文様のない無文部破片に無文土器と区別しにくい一群(Cタイプ1)があり、若干の正確さを欠く。

破片数は細片を除いておよそ480片であるが、接合資料は少なく、復原完形はおろか、1個体にもよばないほどまとまりがない。それでも同一個体破片としてある程度のまとまりを見せたものが6例あり、第224図50・51、第225図58、第227図71・72に図上復原を試みた。

押型文土器の文様構成は、これら図上復原された土器及びその他54片の口縁部破片から見て、C種(第文様構成図)がすべてである。あるいはB種かと思われるものが3片あるが、これもC種(4)であると見ることもできるので、極めて単純な構成を示していることになる。

C種の中の細分類ではC種(1)が大部分を占め、C種(2)が次いで多く、C種(3)、C種(4)が少量ある。なお、これまであまり注意されていなかった無文帯を口唇直下に巾広く持つ例(C種(5))が追加された意味は大きい。

次に施文原体であるが、原体の長さ最小は10.0mm、最大は19.4mm、径の最小は3.3mm、最大6.0mmとかなり大小巾がある。これまで考えられていた插沢式土器の古いタイプは原体が短く細いという傾向からややはざれでいるといつてよい。

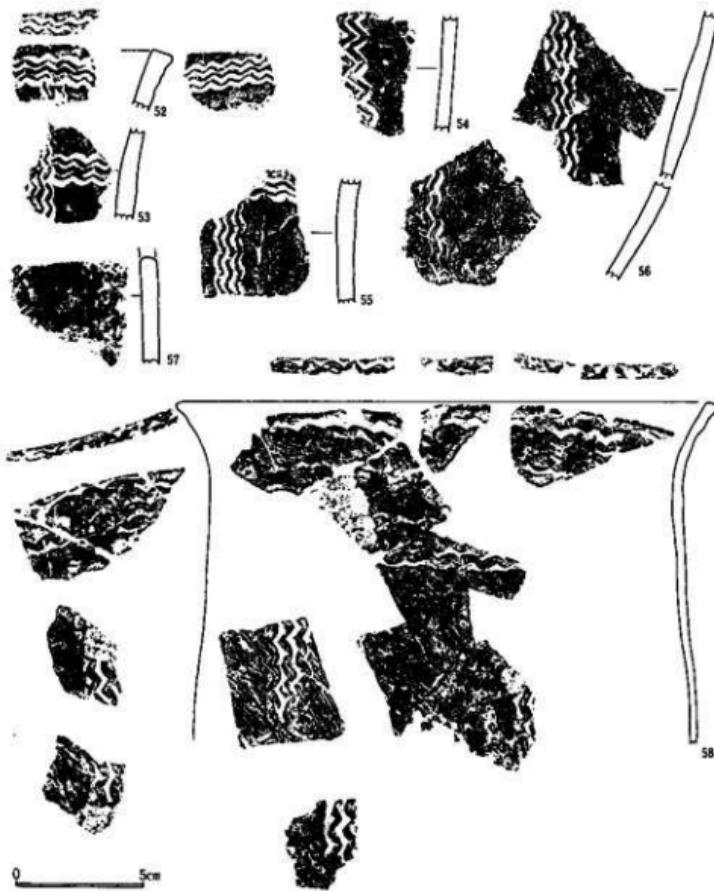
山形文の形状は、第1種(第6項参照)が黒鉛を含む土器に圧倒的に多く用いられているが、第2種のように大きい山形文が黒鉛を含むCタイプ2の土器に施文されている例(第225図58)や、第1種と2種の中間的な大きさの山形文が黒鉛を含まないCタイプ1に施文されるなど、ここにも非齊一性を見せていく点は重要である。これらについては後章で詳述する。

無文土器：破片総数1340点(細片を除く)、口縁部の大小破片149片と底部14片を除けばすべて頭部から胴部の破片であるが、器形の変化に乏しく、また、同一個体片の抽出がむずかしく、そのため接合資料、一括資料がほとんどないため、図上復原による器形推定にまで至っていない。

無文土器は口縁部破片の断面形状から、A・B・C 3タイプに大別し(第233~236図)、口唇端部の整形から丸・平・尖端口縁の細分を加えた。それによると口縁内湾して緩く開く無文土器Aと外反気味に緩く開く無文土器Bが同率で90%を占め、口縁部で強く開くCタイプは少量である。

口唇直下に沈線らしきものが1条入る破片が1点ある以外に、文様と明確に捉えられるものは全くない。擦痕、整形痕が沈線、凹線文風に残る例もわずかに20片ほどであり、問題外の量である(第236図)。

無文土器の胎土は、大部分が石英・長石・雲母・角閃石・岩片を多量に含み、内面が剥落したようなザラザラ面を残す。また整形痕の凹凸が強く残り、押型文の黒鉛を含む土器とは極端な相違をみせている。



第225図 第3号住居址出土土器(2)

土器観察表

No.	部位	分類	形態	単位	原体径・長	標題	文様	文様	口唇	地土	體形	通 号	No.	部位	備考
50	山形文C1	3	2	5.7 - 14.0	1(2)	山2	C3	1	2(1)	1 - 1	21 - 3月	344	口 - 鋸	岐28片 黒一褐色を呈す	
51	x	3	2	5.0 - 12.2	2(1)	山2	C5	2	2(1)	2 - 1	x	460	x	7片同一の標題か、①-③は若文土器の色調が異なる	
52	山形文C1	3	2	5.1 - 12.4	1(2)	山2	C3	1	2(1)	1 - 1	x	417	口様部	若文土器の地土1(1)に同じ	
53	x	3	2	-	1(2)	山2	C3	2(1)	1 - 1	x	98	類 部	” 直37と同一個体か		
54	x	-	17	3.4	-	1(2)	山2	C	2(1)	1 - 2	x	1154	頭 部	"	
55	x	3	2	5.6 -	2(1)	山2	C	2(1)	1 - 2	x	159	頭 部	無文土器の地土1(1)に同じ		
56	x	3	2	5.8 -	-	山2	C	2(1)	1 - 1	x	611	胸下部	地土41と結合、344と同一個体		
57	x	-	-	-	-	山2	C	2(1)	1 - 2	x	706	胸 部	”		
58	山形文C2	3	2	6.0 - 19.4	2(2)	山1	C1	1(1)	1 - 2	x	637	口 - 鋸	6片合計27片同一個体		

第3節 向陽古遺跡



第226図 第3号住居址出土土器(3)

土器観察表

No.	部位	分類	枚数	単位	厚径・直	塊種	文様	文様	口面	胎土	形態	遺物	No.	部位	備考
59		山形文C 2	3	2	4.5 - 12.1	2(1)	山1	C 4	1	1(3)~	1-1	21 - 3 H	388	口縁部	文様模様B しきぞられる
60		"	3-4	-	-	3	山3	C 4	2	1(3)~	1-1	"	266	"	暗褐色
61		"	-	2	4.8 -	-	山1	C 4	1	1(2)	3-2	"	82	"	
62		"	-	-	-	-	山3	C	1	1(2)	3-1	"	1143	"	文様模様C 4とC 5
63		"	-	-	-	-			1	1(3)~	1-1	"	958	"	暗褐色
64		"	-	-	-	-			1	1(3)~	1-1	"	162	"	"
65		"	3	2	4.6 - 12.3	2(2)	山1	C 1	1	1(2)	1-2	"	-16	"	内外暗色アザラシ
66		"	4	1?	4.6 - 14.8	2(1)	山2	C	1	1(2)	3-2	"	771	"	遺物2と同一形状
67		"	-	-	-	-	-	C	1	1(1)	1-2	"	311	"	内面褐色
68		"	-	-	-	-	-	C	1	1(2)	-	"	1067	"	内面褐色
69		"	3	2	5.2 - 15.0	2(1)	山1	C	2	1(1)	1-1	"	1055	"	外表面褐色
70		"	4	2	4.6 - 10.0	2(2)	山1	C	1	1(2)	1-2	"	40	"	

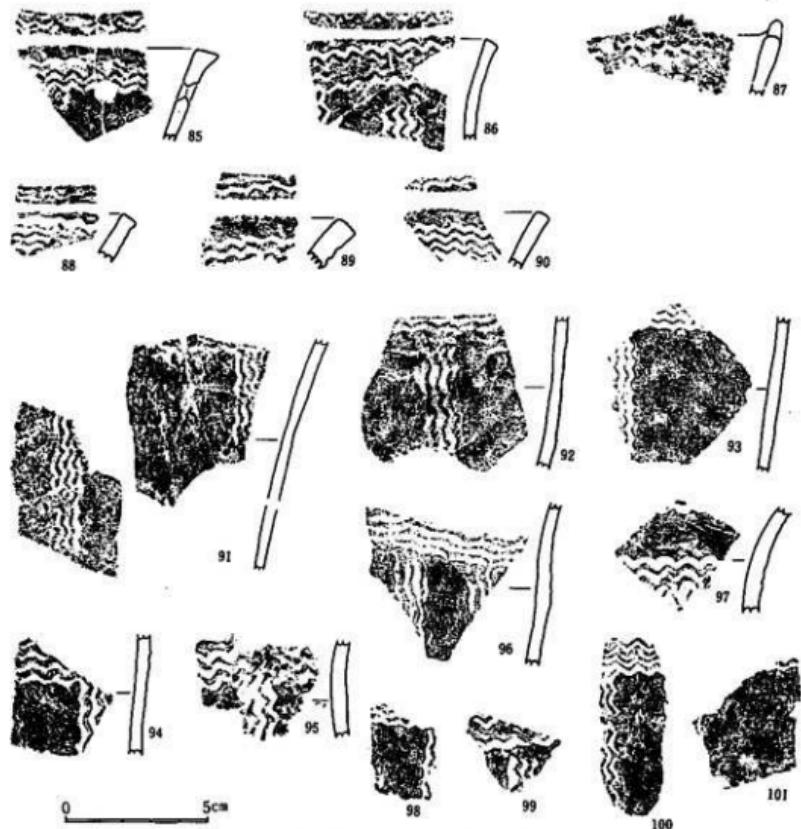


第227図 第3号住居址出土土器(4)

土器観察表

No.	層位	分類	角度	単位	周体幅・長	器種	文様	文柄	口唇	胎	土	形態	遺物	No.	部位	備考
71	山形文C2	3	2	5.4-	2(1)	山1	C1	1	1(4)	1-1	21・3号	549	口-頂	造4-127-970-22と同一		
72	"	3	-	- 12.1	2(1)	山1	C	1	1(3)†	1-1	"	331	"	造938-414と同一	褐色	
73	"	3	-	- -	2(1)	山1	C	2	1(3)†	1-1	"	-	一括	口縁部	口沿部褐色文不明確	
74	"	3	2	3.5-13.6	2(1)	山1	C	2	1(1)	1-1	"	999	"			
75	"	3	2	3.3-13.0	-	山1	C	2	1(3)†	1-1	"	781	"		内面圓筒吹色	
76	"	-	2	4.7- -	1(2)	山1	C	1	1(3)†	2-1	"	564	"		外表面褐色 内面青褐色	
77	"	3	2	5.4-15.0	2(1)	山1	C	1	1(3)†	3-2	"	1295	"		外表面褐色 *	
78	"	3	2	4.5-15.5	2(2)	山1	C	1	1(2)	3-1	"	453	"		内面褐色	
79	"	3?	-	- - -	-	山1	C	1	1(1)	1-1	"	936	"			
80	"	2-3	-	- - -	2(1)	山1	C	1	1(1)	1-1	"	633	"			
81	"	3	2	5.2-14.0	2(2)	山1	C	1	1(2)	1-2	"	644	"			
82	"	3	-	- -	2(2)	山1	C	1	1(1)	1-2	"	224	"			
83	"	3	-	- - 13.5	2(2)	山1	C	1	1(2)	1-1	"	99	"			
84	"	3	2	4.8-12.6	1(2)	山1	C	1	1(1)	1-1	"	1165	"			

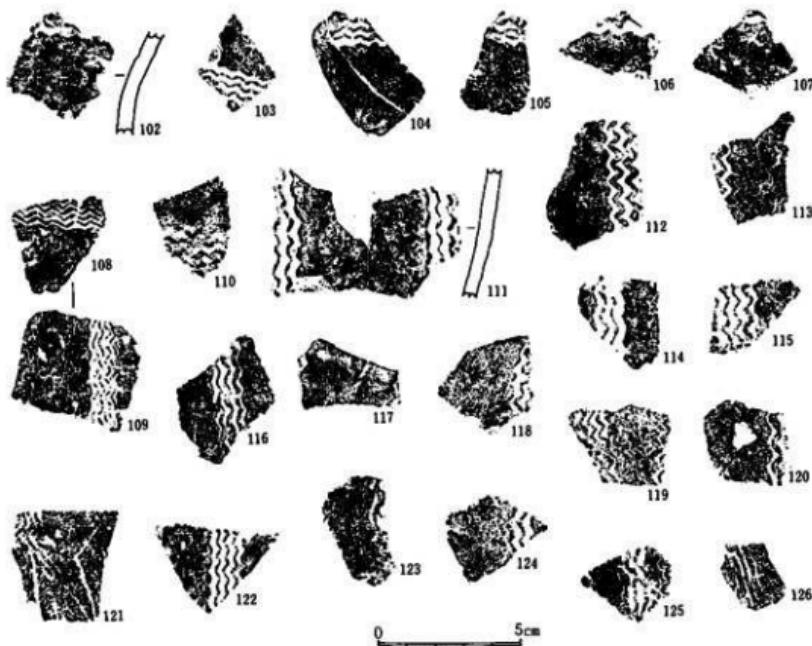
第3節 向陽台遺跡



第228図 第3号住居址出土土器(5)

土器観察表

No.	層位	分類	件数	単位	底径・高	縞模	文様	文鏡	口縁	胎土	形態	追加No.	部位	備考
85	山形文C2	3	2	4.7 - 11.6	1(2)	山1	C	1	1(1)	1-1	21 - 3 H - 733	口縫部		
86	e	3	2	4.6 - 15.0	1(2)	山1	C	2	1(1)	1-1	"	768		
87	e	-	-	-	-	山1	C	2	1(3)レ	1-1	"	499		
88	e	3-4	-	-	-	2(2)	山1	C	2	1(1)	1	"	693	
89	e	-	2	4.5	-	1(2)	山1	C	1	1(1)	1-1	"	1082	
90	e	3-4	2	4.0	-	2(2)	山1	C	2	1(1)	1-1	"	456	
91	e	3-4	-	-	-	—	山1	C1	1(2)	3-2	"	457	肩上部	
92	e	3	2	5.3 - 14.0	-	—	山1	C1	1(2)	1-2	"	703	"	
93	e	-	2	3.4	-	2(1)	山1	C	1(1)	1-1	"	213	"	
94	e	3-4	-	-	-	2(1)	山1	C	1(3)	1-2	"	894	長辺や多く全身	
95	e	2	2	5.0 - 15.6	-	—	山1	C	1(3)レ	1-1	"	619	外延褐色 内面青灰色	
96	e	3	2	4.4	-	2(2)	山3	C1	1(1)	1-1	"	784	追跡と併合 断面色	
97	e	-	-	4.9	-	1(2)	山1	C1	1(1)	3-2	"	—	"	
98	e	-	-	-	-	2(1)	山1	C1	1(3)レ	1-2	"	227	側上部	
99	e	-	-	-	-	2(2)	山1	C1	1(4)	1-1	"	563	端部不明確	
100	e	4	2	4.7	-	1(1)	山1	C1	1(4)	1-1	"	1207	含有物少なし	
101	e	-	-	-	-	—	山1	C	1(1)	1-2	"	463	"	

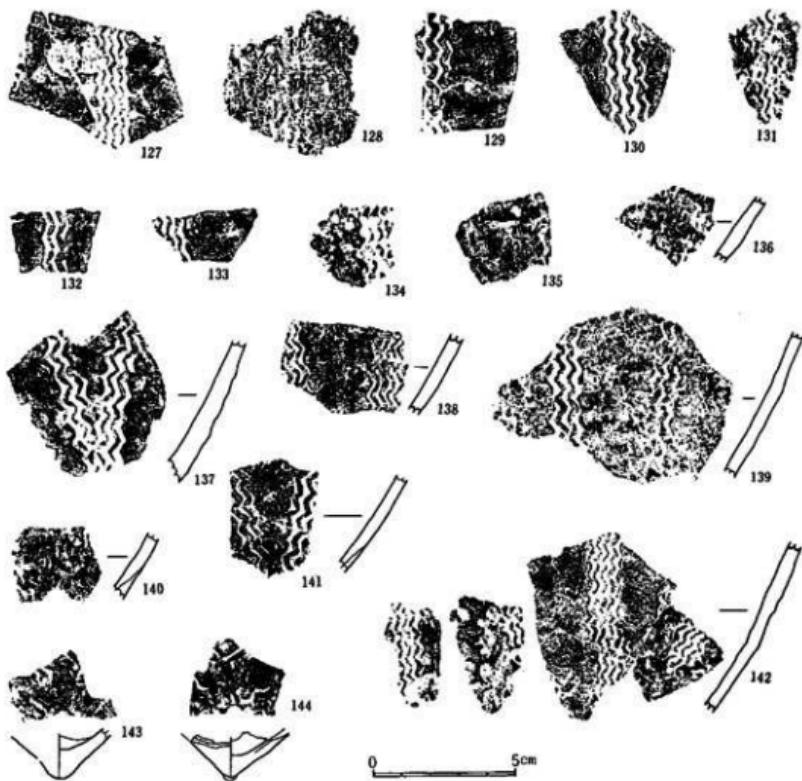


第229図 第3号住居址出土土器(6)

土器観察表

No.	層位	分類	形態	単位	裏体径・長	壁厚	文様	文柄	口部	地	変形	底	物	No.	部位	備考
102		山形文C2	—	—	—	—	—	山1	C	1(3)4	1・2	21・3H・415	瓶	内外面赤色		
103	x	3	2	3.3	—	—	2(2)	山1	C	1(1)	1・1	x	81	x	若干赤色	
104	x	3	2	3.6	—	—	(2)1	山1	C	1(3)4	1・1	x	154	x	外腹茶褐色 内とのそり有	
105	x	—	—	—	—	—	2(1)	山1	C	1(1)	1・1	x	227	x		
106	x	—	—	—	—	—	—	山1	C	1(3)4	1・2	x	4	x	外腹山吹色 内腹青白色	
107	x	—	—	—	—	—	—	—	C	1(3)4	2・1	x	99	x	外腹赤色 内腹山吹色	
108	x	4	2	4.4	—	—	2(1)	山1	C	1(3)9	1・1	x	1166	x	外腹山吹色 手	
109	x	—	—	—	—	—	2(1)	山1	C	1(3)9	1・1	x	778	x	同上形	
110	x	—	—	—	—	—	—	山1	C	1(3)9	1・1	x	673	x	内腹茶褐色 黑點多見	
111	x	—	2	4.5	—	—	2(1)	山1	C	1(1)	1・1	x	56	x	追加記合	
112	x	—	2	4.0	—	—	2(2)	山1	C	1(3)	1・1	x	525	x	外腹山吹色 内腹青白色	
113	x	—	—	—	—	—	2(1)	山1	C	1(1)	1・1	x	165	x	手打ち風色	
114	x	3	2	5.3	—	—	1(2)	山1	C	1(1)	1・1	x	1044	x	内腹堅凸感	
115	x	3	2	4.6	—	—	2(2)	山1	C	1(1)	1・2	x	445	x		
116	x	3	2	4.4・12.9	—	—	2(1)	山1	C	1(1)	1・1	x	1185	x		
117	x	—	—	—	—	—	—	山1	C	1(1)	1・1	x	1132	x		
118	x	—	2	3.9	—	—	2(1)	山1	C	1(1)	2・2	x	689	x		
119	x	—	—	—	—	—	—	山1	C	1(2)	1・2	x	57	x		
120	x	—	2	5.5	—	—	2(1)	山1	C	1(1)	1・1	x	619	x		
121	x	—	—	—	—	—	—	山1	C	1(2)	3・2	x	496	x		
122	x	3	2	3.3・12.0	—	—	2(1)	山1	C	1(1)	1・1	x	47	x		
123	x	—	—	—	—	—	—	—	C	1(1)	1・1	x	312	x		
124	x	—	—	—	—	—	—	山1	C	1(1)	1・1	x	224	x		
125	x	—	—	—	—	—	—	—	C	1(3)9	1・1	x	92	x	内外茶褐色 山形文第3種	
126	x	—	—	—	—	—	—	—	C	1(1)	1・1	x	615	x		

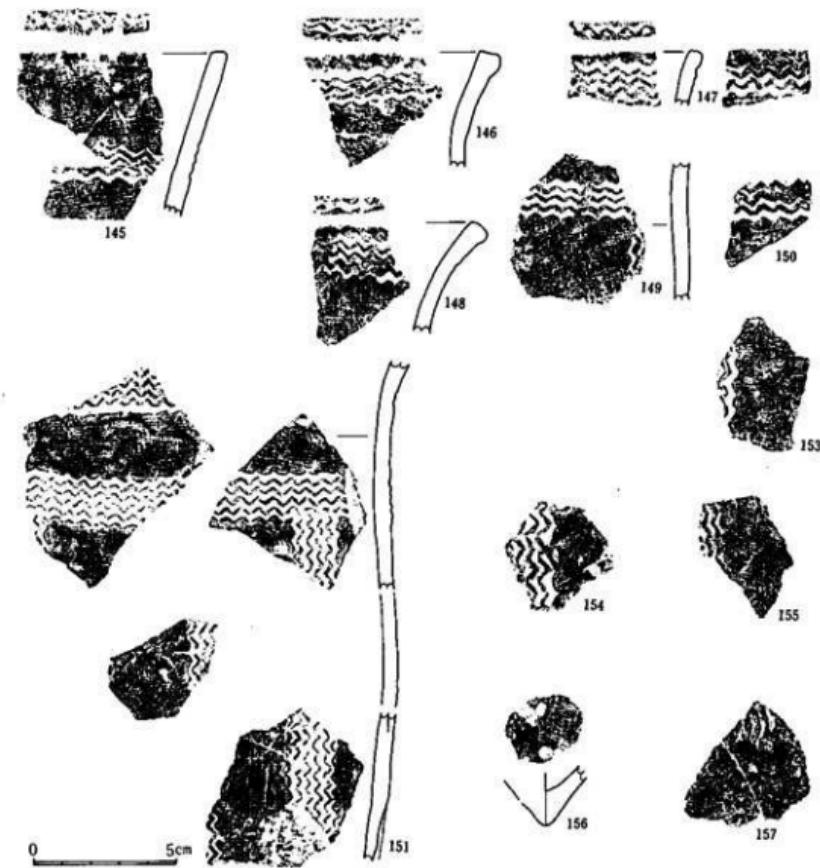
第3節 向陽台遺跡



第230図 第3号住居址出土土器(7)

土器観察表

No.	層位	分類	大きさ	単位	断面・長	幅	器種	文様	口留	胎土	整形	追物	No.	部位	備考
127	山科C2	3	2		3.4 - 12.4	2(1)	山1	C	1(3)□	1 - 2	21 - 3H	29	斜下部	外表面褐色 内面白色	
128	"	-	-		-	-	山1	C	1(3)□	1 - 2	"	707	"	外表面褐色 内面深山色	
129	"	-	2		4.4 -	-	山1	C	1(1)	1 - 1	"	793	"		
130	"	3	2		4.4 -	2(1)	山1	C	1(3)△	1 - 1	"	1189	"	内外側山色	
131	"	-	-		-	-	山1	C	1(3)△	1 - 2	"	328	"	山色	
132	"	-	-		-	-	山1	C	1(1)	1 - 2	"	677	"	内褐色	
133	"	-	-		-	-	2(1)	-	C	1(4)	1 - 1	"	598	"	内外表面色が強い
134	"	-	-		-	-	山1	C	1(3)△	1 - 2	"	125	"	外褐色 内表面山色	
135	"	-	-		-	-	山1	C	1(3)△	1 - 1	"	116	"	外表面灰褐色 内表面黑色	
136	"	-	-		-	-	-	C	1(1)	1 - 2	"	1164	"	支撑下端	
137	"	3-4	2		5.3 -	-	山1	C	1(3)△	1 - 2	"	1074	"	外表面灰色 内面有黑色	
138	"	-	-		-	-	-	C	1(4)	1 - 1	"	806	"	断面灰と同一層由来	
139	"	3-4	2		4.4 -	-	山1	C	1(2)	3 - 1	"	555	"		
140	"	-	-		-	-	山1	-	1(1)	1 - 1	"	544	底 部	外表面褐色 内面白色スリガ	
141	"	-	2		4.5 -	-	山1	C	1(4)	1 - 1	"	367	"		
142	"	-	4		3.6 -	2(2)	山1	C	1(1)	1 - 2	"	32	"	表面灰と結合 329-90と同一	
143	"	-	-		-	-	山1	-	1(1)	1 - 2	"	49	"	内褐色	
144	"	-	-		-	-	-	C	1(4)	1 - 1	"	381	"		

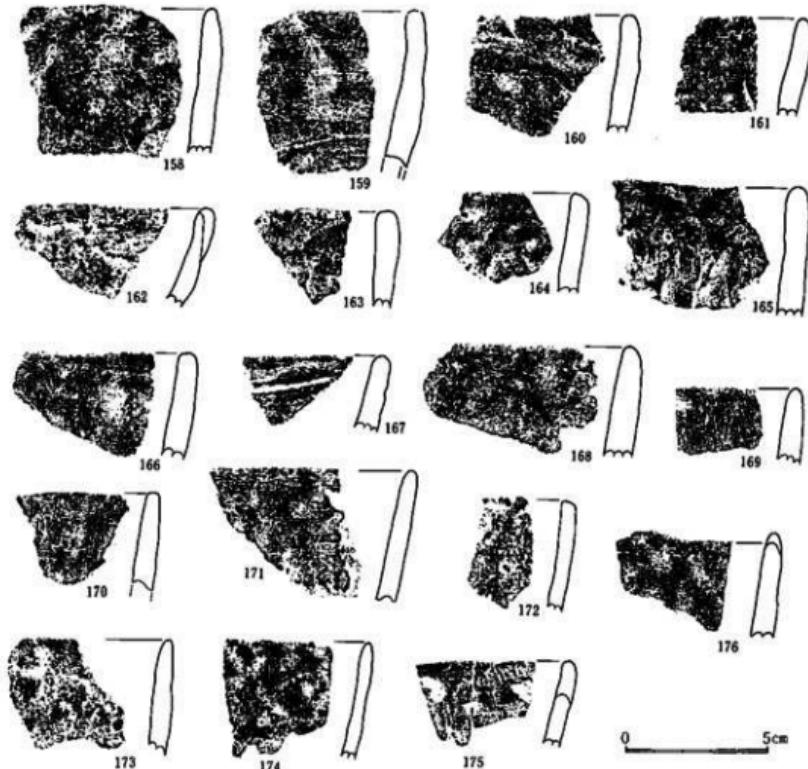


第231図 第3号住居址出土土器(8)

土器観察表

No.	層位	分類	各數	単位	直径径・長	幅部	文様	文様	口径	胎土	整形	造物	No.	部位	備考
145	山形文C3	3	2	5.4 - 13.8	2(1)	山1	C S	2	2(2)	1 - 2	21 - 3 H - 745	口縁部			外周面ナット面の凹凸が残る
146	x	3	2	4.1 - 12.8	2(1)	山1	C	1	1(1)	1 - 1	x	547	x	内周面褐色 漆船若干入るか	
147	x	3	2	4.6 - 14.0	2(1)	山1	C	2	2(2)	1 - -	x	682	x	しない	
148	x	3	2	4.0 - 15.0	1(1)	山1	C	1	2(1)	1 - 2	x	692	頂部	もろい	
149	x	3	2	3.9 - 13.5	2(2)	山1	C		2(2)	1 - 2	x	115	x	無土器層地に限る	
150	x	-	2	4.3 -	—	1(1)	山1	C	2(1)	2 - 1	x	424	頂一輪	若干漆跡を含むか	
151	x	4	2	3.6 - 16.8	2(1)	山1	C 1		2(1)	2 - 2	x	78	x	漆13-10と同一か	
152	x	-	2	4.4 -	—	2(1)	山1	C	2(1)	1 - 1	x	674	x	若干漆跡を含むか	
153	x	-	2	4.9 -	—	2(1)	山1	C	2(1)	1 - 2	x	1073	x		
154	x	-	—	— - -	—	2(1)	—	—	2(1)	1 - 2	x	338	x		
155	x	-	—	— - -	—	2(1)	—	—	2(1)	1 - 2	x	98	底 隅		
156	x	-	—	— - -	—	2(1)	—	—	2(1)	1 - 2	x	226	頂 隅	山形文第3種	
157	x	-	—	— - -	—	—	—	—	2(1)	1 - 2	x				

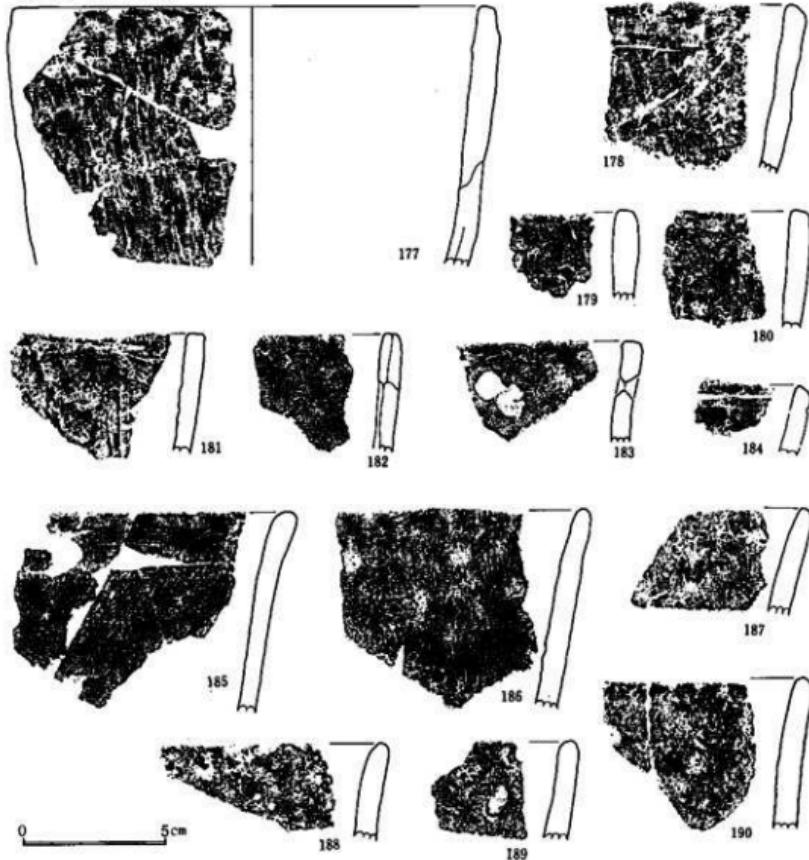
第3節 向陽台遺跡



第232図 第3号住居址出土土器(9)

土器観察表

No.	層位	分類	条数	単位	原体	様式	細部	文様	文様	口唇	胎土	断面	高さ	No.	性状	備考
158		無文A								丸	1(1) 1-1	21・3 H - 1097	口縁部		外側に山吹色	
159										丸	1(2)			1076	"	
160										丸	1(1) 1-1			461	"	邊縫と後縫 外面に山吹色
161										丸	1(1) 1-1			818	"	
162										丸	1(1) 1-1			767	"	外側に山吹色
163										丸	1(1) 1-1			339	"	外側黒褐色 内側褐色
164										丸	1(1) 1-1			284	"	外側黒色
165										丸	1(2) 3-1			1046	"	邊縫と同一色
166										丸	1(1) 1-2			271	"	内外側茶褐色
167										丸	1(1) 1-1			669	"	外側に山吹色、内側褐色
168										丸	1(1) 1-1			1036	"	
169										丸	2(4) 1-1			562	"	外側に山吹色、内側褐色
170										丸	2(4) 2-1			362	"	
171										丸	1(1) 1-1			492	"	圓平、内側黒色
172										丸	3(3) 1-2			615	"	周山吹色
173										尖	1(1) 1-2			820	"	外側山吹色 内側黒褐色
174										尖	2(3) 1-2			634	"	内側に山吹色
175										尖	2(4) 2-1			117	"	凸起があり 山吹色
176										尖	1(1) 1-1			786	"	

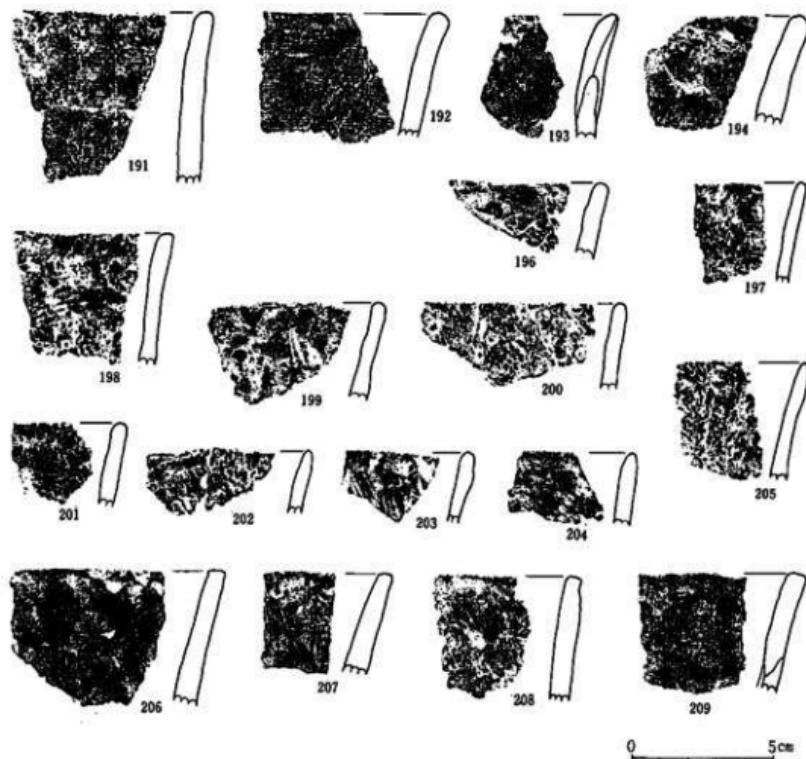


第233図 第3号住居址出土土器群

土器観察表

No.	部位	分類	形態	単位	厚体・薄長	端部	文様	文様	口部	地土	變形	直物	N	部位	備考
177		無文A							平	1 (2)	3 - 1	21 - 3 H	871	口縁部	大粒の砂片を多量に含む
178		x							平	1 (1)	1 - 2	x	114	x	内外側凹凸無し
179		x							不	1 (1)	1 - 2	x	510	x	口唇なめらかにナデ
180		x							平	1 (1)	1 - 2	x	245	x	
181		x							平	1 (1)	2 - 2	x	114	x	口唇を削りて平底を作り出す
182		x							平	1 (1)	1 - 2	x	306	x	口唇ナデ
183		x							平	1 (1)	1 - 2	x	245	x	口唇内側はでなめらかにナデ
184		x							平	1 (1)	1 - 1	x	652	x	洗面式-洗顎式の大きさが不明瞭
185		B							丸	1 (1)	1 - 2	x	1098	x	外表面-底面色 内面褐色
186		x							丸	1 (1)	1 - 2	x	614	x	外表面若干凸多い、炭化物有
187		x							丸	1 (1)	1 - 2	x	586	x	
188		x							丸	1 (1)	1 - 2	x	1090	x	
189		x							丸	1 (1)	1 - 2	x	921	x	もろく、倒置する
190		x							丸	1 (1)	1 - 2	x	658	x	

第3節 向陽台遺跡

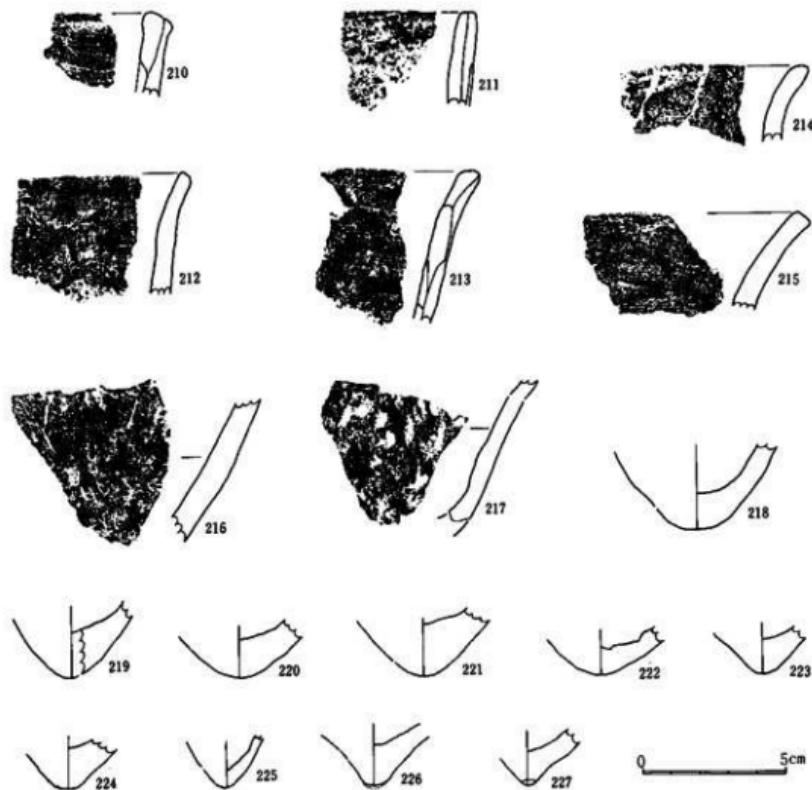


第234図 第3号住居址出土土器

0 5cm

土器観察表

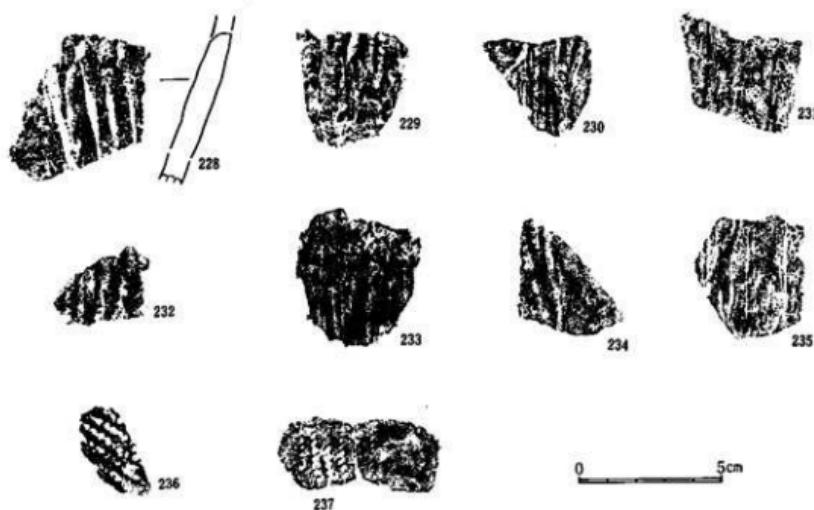
No.	部位	分類	形	角数	単位	底体径・長	端部	文様	文様	口部	治土	整形	追	物	No.	部位	備考
191		無文B								丸	1(1)	1-2	21・3H	819	口縁部	内外面こげ茶色	
192		+								丸	1(1)	1-2	*	498	*	*	
193		+								丸	1(1)	1-2	*	449	*	*	外側こげ茶色
194		+								丸	3	1-1	*	466	*	*	
195		+								丸	1(1)	1-1	*	108	*	*	外側こげ茶色
196		+								丸	1(1)	1-2	*	357	*	*	口唇なめらかにナメ、外側茶色
197		+								丸	3(3)	1-1	*	607	*	*	黒色ないしこげ茶色
198		+								丸	1(1)	1-2	*	826	*	*	外側黒色、内面褐色
199		+								丸	3(3)	1-2	*	601	*	*	凸出強く残る
200		+								丸	2(4)	1-1	*	307	*	*	
201		+								尖	3	2-2	*	150	*	*	内外面赤褐色
202		+								尖	2(4)	2-2	*	845	*	*	縫口跡の可能性有り
203		+								尖	2(3)	1-1	*	889	*	*	
204		+								尖	3	1-1	*	556	*	*	外側こげ茶色 内面茶褐色
205		+								平	1(1)	1-1	*	885	*	*	口唇押しつぶしてナメ、灰褐色
206		+								平	2(4)	1-1	*	152	*	*	唇母少ない 灰褐色
207		+								平	1(1)	1-2	*	213	*	*	唇母の大きさ粒目立つ
208		+								平	1(1)	1-2	*	45	*	*	口唇なめらか
209		+															



第235図 第3号住居址出土土器02

土器観察表

No.	基位	分類	件数	単位	底径・足	底部	文様	文様	口部	胎土	形態	遺物	No.	部位	備考
210		無文B	1			平	2(4)	2-1	21・3 H	688	口縁部				外側にこげ茶色
211		*				平	1(1)	1-2		653					口唇なめらかにナデ
212		無文C	1			丸	3(1)	1-1		571					内外面荒ないしこげ茶色
213		*				丸	1(1)	1-2		177					
214		*				丸	3(3)	1-1		494					内外面ともなめらか、深褐色
215		*				平	1(1)	1-1		115					
216		無文	1			平	2(4)	2-2		912	底 部				内面凹凸強く残る
217		*				平	2(4)	1-2		—					底凸部分を残る
218		*				平	2(2)	1-2		65					底面つぶれて平坦 内面茶色
219		*				平	2(2)	1-2		881					内外面茶色 外面赤褐色
220		*				平	2(2)	1-2		1066					外側茶色
221		*				平	3(3)	1-2		422					内外面茶色
222		*				平	1(1)	1-1		315					茶褐色 もろい
223		*				平	1(1)	1-1		860					こげ茶色
224		*				平	3(3)	1-2		816					褐色
225		*				平	2(4)	1-2		689					小形土器
226		*				平	1(1)	1-1		149					外側暗褐色 内面黑色
227		*				平	3(3)	1-2		951					外側黑色 内面茶色



第236図 第3号住居址出土土器(3)

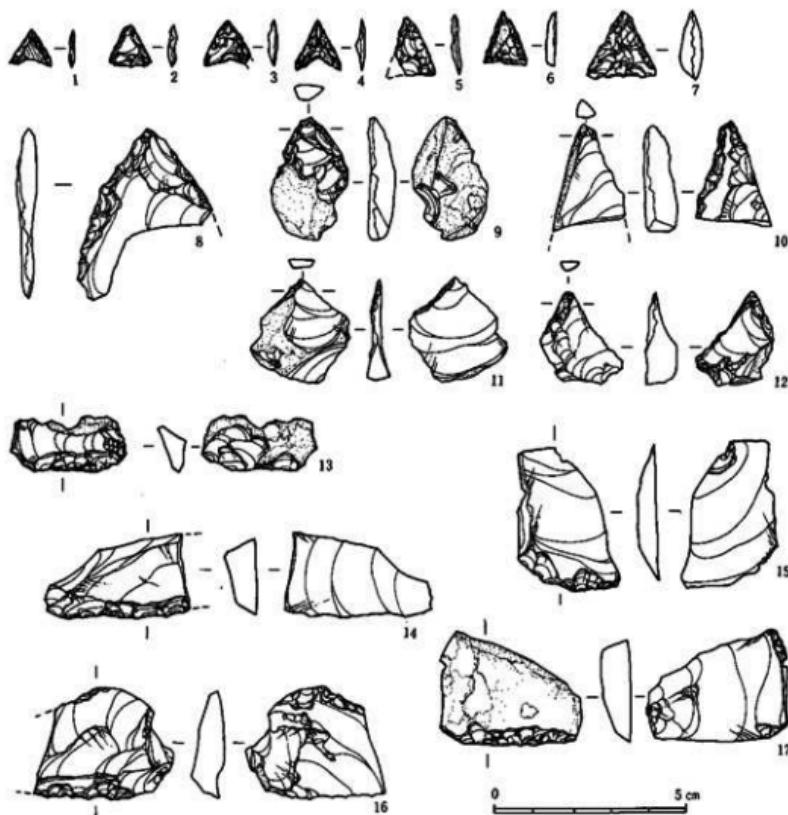
土器観察表

No.	層位	分類	条数	単位	形体・様式	端部	文様	文様	口留	胎土	腹形	造物	No.	部位	備考
228		無文								1(U)	1-2	21・3H・586		腹部	凹線文か不明
229		*								1(U)	2-1	x	770	頭部	斜形机か凹線文か不明
230		*								1(U)	1-1	x	414	頭下部	x
231		*								1(U)	1-1	x	201	頭部	x
232		*								2(6)	1-1	x	1157	x	x
233		*								2(3)	3-1	x	554	x	x
234		*								1(U)	1-1	x	296	x	x
235		*								3	1-1	x	2	x	ヘラによる削刮痕か
236	陶文 陶文C											x	380	x	貝石を多く含む
237												x	184	x	造447と接合

このように、全く相入れない文様、整形、胎土の押型文土器と無文土器が、先述したような状況で覆土中に遺存していたことは、向陽台遺跡では、両者が共用されていた生活用具として理解しなければなるまい。樋沢遺跡、福沢遺跡でも無文土器の存在はすでに指摘されているところであるが、押型文土器と無文土器以外には全く他の土器はないといつてもよい状況下で確認された3号住居址の在り方は、今後の押型文土器文化の理解の上で大きなウエイトを占める資料となるであろう。

石器 3号出土の石器には、黒曜石、チャートを素材とした石鎌10、石錐6、不定形石器64、ピエス・エスキーユ23、石核68、原石8、石片709、これ以外の石材を用いた特殊磨石21、磨石7、凹石6、打製石斧2、砥石20、不定形石器22、横刃形石器10、擦り切り用石器1、石片374が出土した。

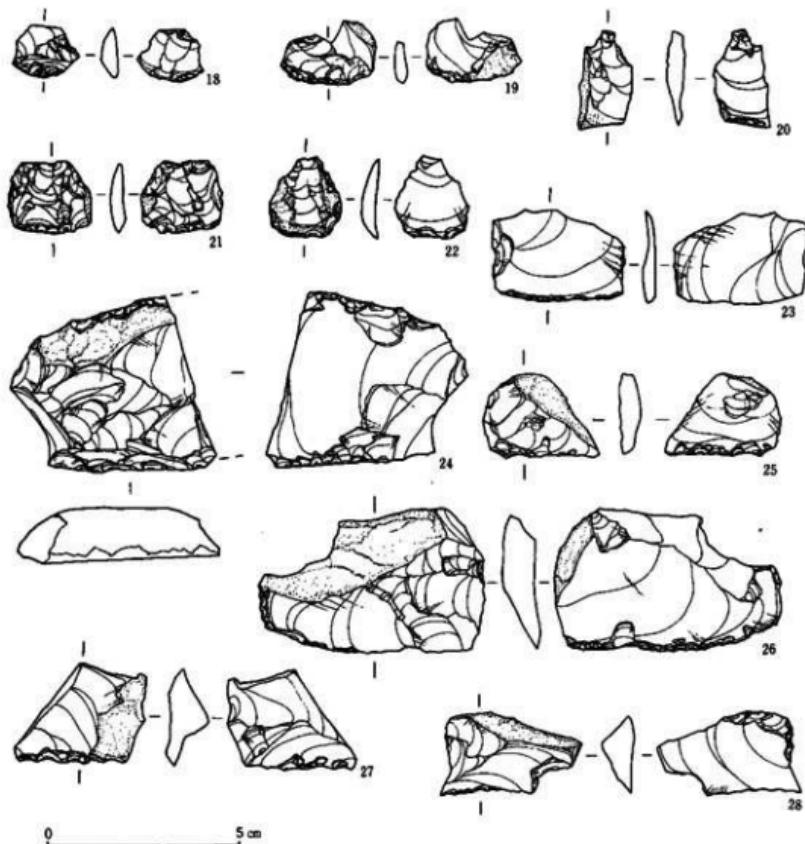
本址出土の黒曜石、チャート石材による石器、石片は総数858点の多きにわたる。それ等は一貫して小形のものが主体を占め、原石、石核、石器、石片にはある相関した大きさが認められる。このことはこの場における石器製作を予想させるもので、非常に興味深い。石鎌は小形の正三角形状を呈するが、1点だけ局部磨製石鎌を含んでいる。本址出土の石器の中で特に注目されるものに大小あわせて21点出土した砥石がある。置き砥石と思われる大型のものが4点、手持ち砥石と思われる小型のものが17点あり、小型のものは厚さ3mm~31mmの偏平な素材を利用している。石材は1点が燧灰岩のほかは全て砂岩である。破損品が多いため形状は明らかではないが長方形のものが多く、糸巻き形を連想させるものも含まれている。表裏面、側面とも良く研磨されたものが多く、浅い溝をもつた有溝砥石も5点みられる。黒曜石以外を素材とした大型の不定形石器は22点が出土している。石材は頁岩が多く17点、砂岩4点、燧灰岩1点である。247図123のように細長い剥片を利用した縦長い不定形石器が1点あるほかに、素材の縁辺に両方向の大きな剥離がみられるものがある。この中には247図127のように打製石斧に類似する形態をもち、ある程度明確な打点と微調整のある石器もみられるが、多くは打点や使用痕が不明確である。横刃型石器は、素材の長辺側縁に細かい調整がみられる。擦り切り用石器243図88は、磨製石斧の転用と思われる。砂岩製で、擦った面は0.1mm幅の平坦な面が観察される。磨石類は34点という多数にのぼっている。内訳は特殊磨石（穀摺石）21と多数を占め、他の二者は磨石7、凹石6と少ない。特殊磨石の完形品はわずかに2点、この他に接合による定形品が2点ある。21点のうち15点は極めて特長的な断面三角形の細長い形を示す。使用面の数は、1~2面にあり、3辺の稜を使用した結果、断面六角形になる例は1点もない。磨石はツルツルに光沢を持つほどに磨耗したものは少ない。形態のうえでは偏平小判形のセッセン形を呈する典型的なものは出土していない。凹石は、他機能で使われたものはない。特殊磨石は、磨石、敲石、凹石の機能のどれかと併用されており、特殊磨石だけの単一機能のみのものは2点だけである。



第237図 第3号住居址出土石器(1)

石器観察表

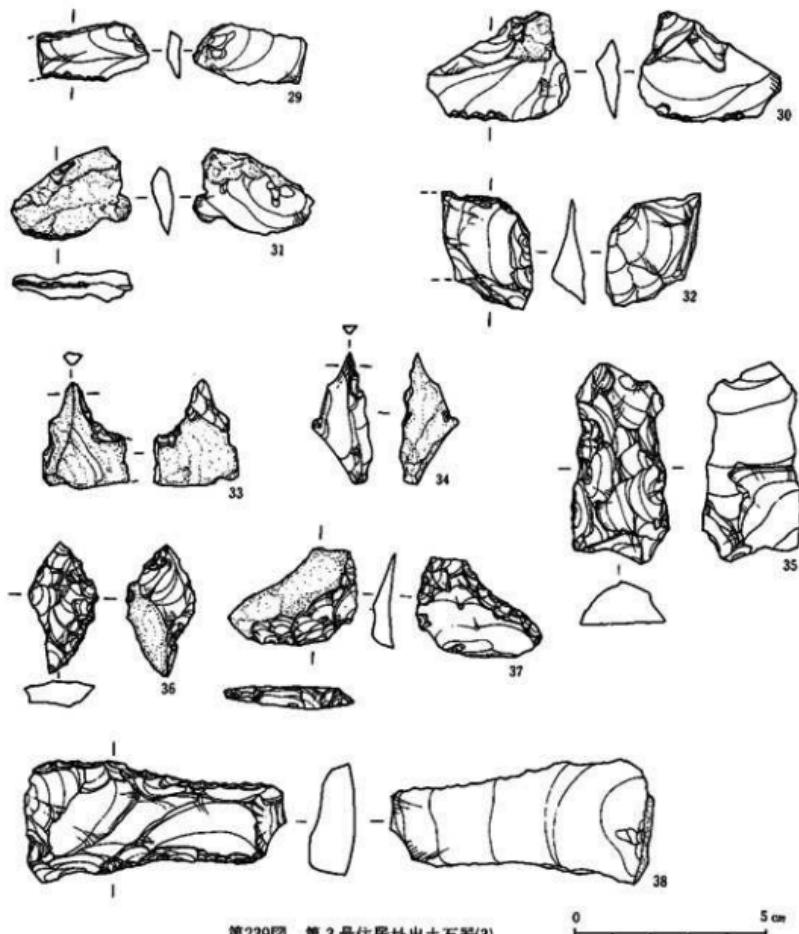
No.	分類	細分類	石種	遺物No.	備考
1	石器	-	黒曜石	21・3H・528	周縁磨製石器。裏面は基部を磨いた後調整。裏面は開口後周縁に削片を用いる。周縁のみ調整
2	石器	-	〃	21・3H・200	周縁磨製石器。裏面は基部を磨いた後調整。裏面のみ調整
3	石器	-	〃	21・3H・609	
4	石器	-	〃	21・3H・528	
5	石器	-	〃	21・3H・505	
6	石器	-	〃	21・3H・956	急角度で縫迹を切りとるようにして、片面のみ調整
7	石器	-	〃	21・3H・1017	
8	石器	-	チャート	21・3H・304	大形石器或いは未製品。裏面は周縁を部分的に調整
9	石器	-	黒曜石	21・3H・-	
10	石器	-	チャート	21・3H・967	
11	石器	-	黒曜石	21・3H・1080	裏面に開口側端片を用いる。一開口は周縁打刃法による打削跡を使用
12	石器	-	〃	21・3H・755	
13	不定形石器	①A	〃	21・3H・195	
14	不定形石器	〃	チャート	21・3H・760	
15	不定形石器	〃	〃	21・3H・-	
16	不定形石器	〃	〃	21・3H・901	裏面は削片であるが、残された自然面より軽石を利用したもの
17	不定形石器	〃	黒曜石	21・3H・468	



第238図 第3号住居址出土石器(2)

石器観察表

No.	分類	細分類	石材	遺物名	備考	
18	不定形石器	①B	黑曜石	21・3H-1枚	岩村に両側削離の碎片を用いる	
19	不定形石器	*	#	21・3H-		
20	不定形石器	*	#	21・3H-388		
21	不定形石器	*	チート	21・3H-480	両側削離後、二期縦を調整	
22	不定形石器	*	黑曜石	21・3H-1030	岩村に両側削離片を用いる	
23	不定形石器	*	粘板岩	21・3H-767		
24	不定形石器	②+①	チート	21・3H-796		
25	不定形石器	②	黑曜石	21・3H-821		
26	不定形石器	②+③	チート	21・3H-		
27	不定形石器	③	黑曜石	21・3H-		
28	不定形石器	*	#	21・3H-		



第239図 第3号住居址出土石器(3)

0 5 cm

石器観察表

No	分類	組分類	石材	遺物No	備考
29	不定形石器	④	黑曜石	21・3 H - 368	
30	不定形石器	"	チャート	21・3 H - 145	
31	不定形石器	⑤	黑曜石	21・3 H - 314	
32	不定形石器	③+④	チャート	21・3 H - 813	素材に石核を用いる 火を受けている
33	不定形石器	⑦	黒曜石	21・3 H - 625	
34	不定形石器	"	"	21・3 H - 一括	
35	不定形石器	⑥	チャート	21・3 H - 一	全埋⑥調整
36	不定形石器	"	黒曜石	21・3 H - 466	
37	不定形石器	"	"	21・3 H - 291	素材に板状の砸石を用いる 二面錐に⑥調整
38	不定形石器	"	チャート	21・3 H - 13	

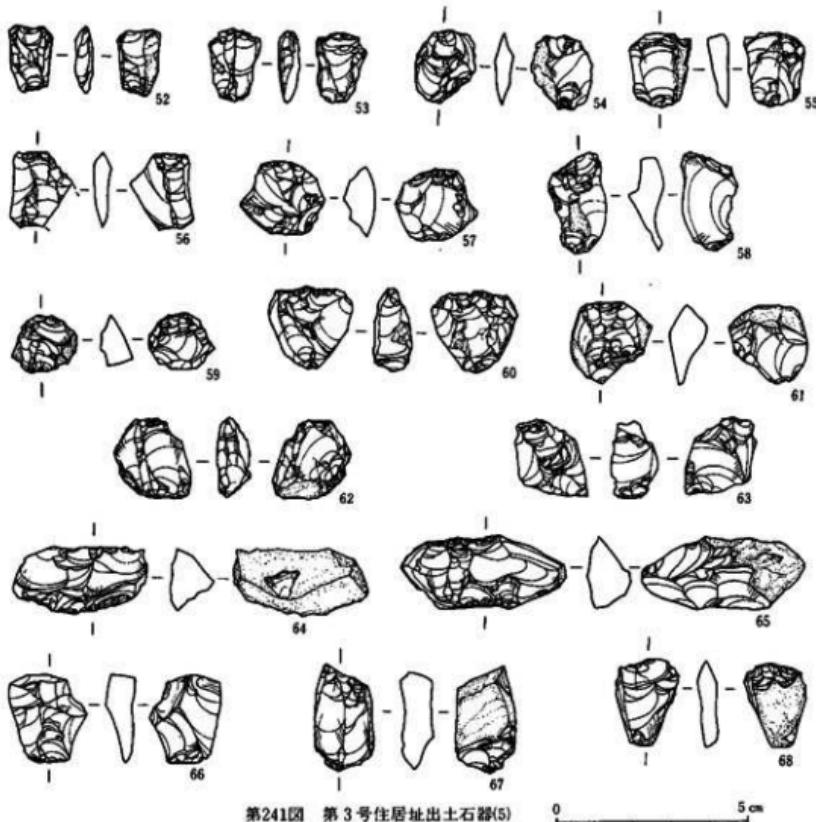


第240図 第3号住居址出土石器(4)

石 器 觀 察 表

名	分類	細分類	石 材	道 物 No	備 考
39 不定期石器	①	チャート	21・3H・622	三側縁に①A削離	
40 不定期石器	②	麻績石	21・3H・301		
41 不定期石器	×	チャート	22・3H・1198	紫材に両極剥片SVAを用いる	
42 不定期石器	×	×	21・3H・644		
43 不定期石器	×	黒曜石	21・3H・—		
44 不定期石器	③	チャート	21・3H・478		
45 不定期石器	×	チャート	21・3H・232		
46 ピエス・エスキーユ	I A a	麻績石	21・3H・230		
47 ピエス・エスキーユ	I A b	ニ	21・3H・—	裏方向に古い両極剥離あり	
48 ピエス・エスキーユ	II	ニ	21・3H・163	裏方向に古い両極剥離あり。紫材に剥片を用いる	
49 ピエス・エスキーユ	II A a	ニ	21・3H・70	裏方向に古い両極剥離あり	
50 ピエス・エスキーユ	II A a	ニ	21・3H・206		
51 ピエス・エスキーユ	II A b	ニ	21・3H・874		

第3節 向陽台遺跡

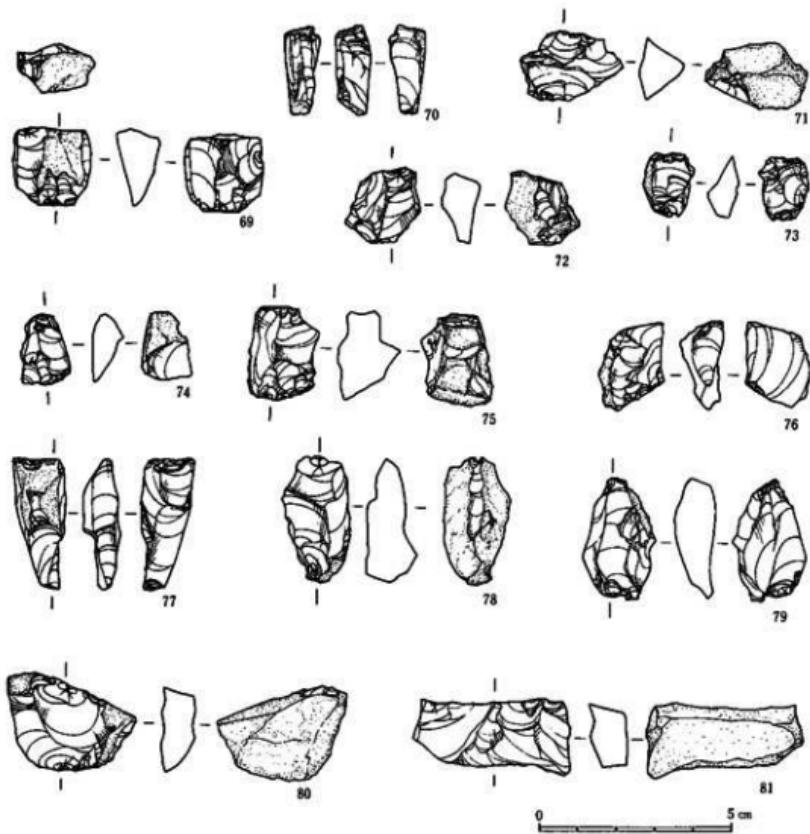


第241図 第3号住居址出土石器(5)

0 5 cm

石器観察表

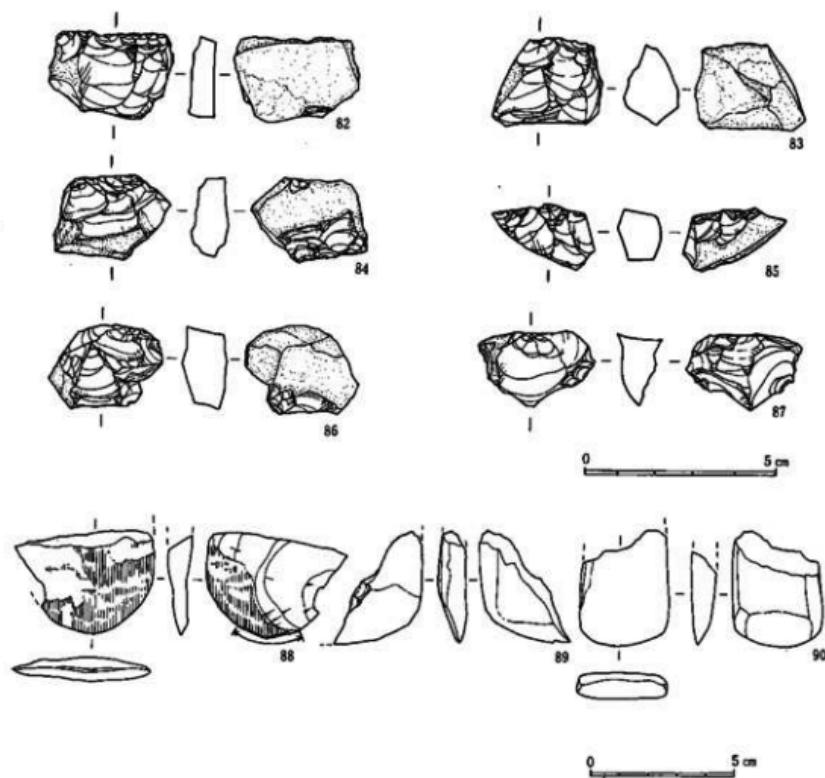
名	分類	組合類	石材	遺物No.	備考
52	ビエス・エスキース	III A b	泥岩	21・3H・163	
53	ビエス・エスキース	III A c	×	21・3H・641	葉材に剝片を用いる
54	ビエス・エスキース	III A d	×	21・3H・—	
55	ビエス・エスキース	III B d	×	21・3H・—	葉材に剝片を用いる
56	ビエス・エスキース	IV A c	×	21・3H・499	葉材に剝片を用いる
57	圓板石核	I A a	×	21・3H・146	葉材に剝片を用いる
58	圓板石核	I B a	×	21・3H・520	葉材に角レキ状の原石を用いる
59	圓板石核	II B a	×	21・3H・638	
60	圓板石核	III A a	×	21・3H・499	葉材に石核を用いる
61	圓板石核	III B a	×	21・3H・497	葉材に角レキ状の原石を用いる
62	圓板石核	III B c	×	21・3H・1023	葉材に角レキ状の原石を用いる
63	圓板石核	III C d	×	21・3H・319	葉材に角レキ状の原石を用いる
64	圓板石核	III C a	×	21・3H・—	葉材に石核を用いる
65	圓板石核	III C a	×	21・3H・—	葉材に石核を用いる
66	圓板石核	IV B c	×	21・3H・692	葉材に角レキ状の原石を用いる
67	圓板石核	IV B d	×	21・3H・627	



第242図 第3号住居址出土石器(6)

石器観察表

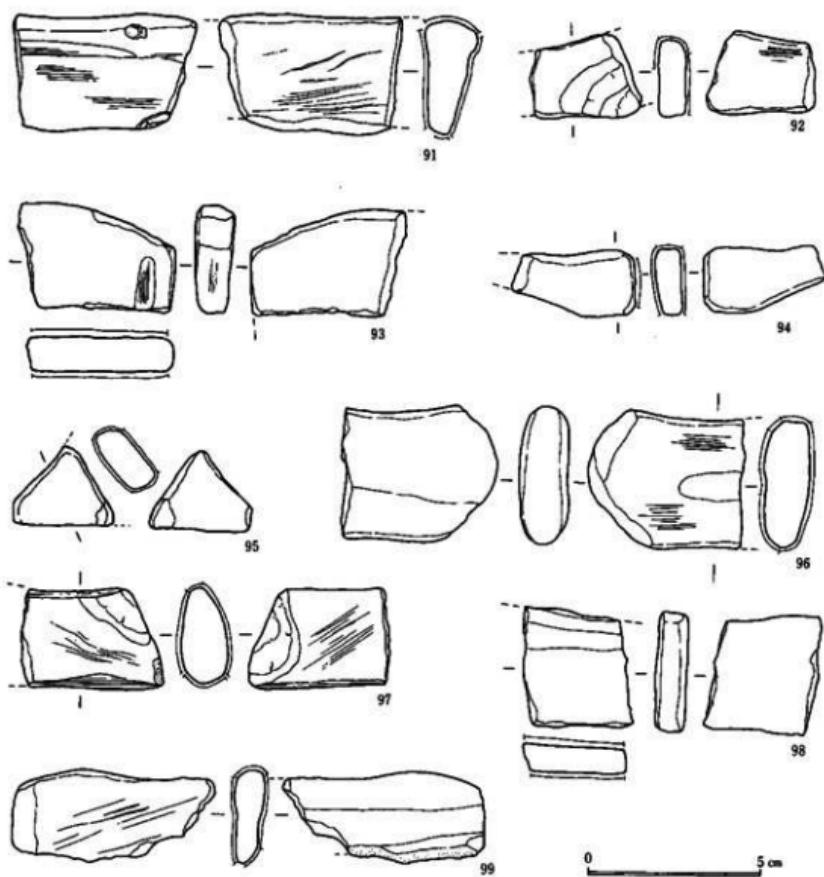
No.	分類	種分類	石 材	道 務 No.	備 考
69	両側石核	N C e	出露岩	21・3H・174	素材に石核を核を用いる
70	両側石核	N C a	*	21・3H・266	
71	両側石核	N C a	*	21・3H・—	素材に角レキ状の原石を用いる
72	両側石核	N C c	*	21・3H・259	素材に角レキ状の原石を用いる
73	両側削面有す石器	I B a	*	21・3H・—	
74	両側削面有す石器	I B b	*	21・3H・372	素材に剥片を用いる
75	両側削面有す石器	N C a	*	21・3H・500	
76	両側削面有す石器	N B b	*	21・3H・1203	素材に剥片を用いる
77	両側削面有す石器	N A b	*	21・3H・479	素材に核状の原石を用いる
78	両側削面有す石器	N B a	*	21・3H・34	素材に角レキ状の原石を用いる
79	両側削面有す石器	N B b	*	21・3H・192	
80	両側削面有す石器	N C d	*	21・3H・625	素材に角レキ状の原石を用いる
81	石 棒	I b	*	21・3H・304	素材に核状の原石を用いる。長軸線に連続する打面を有す



第243図 第3号住居址出土石器(7)

石器観察表

No.	分類	細分類	石材	通地 No.	備考
82	石核	I b	麻理石	21・3H・454	長圓錐に連続する打点を有す
83	石核	I c	*	21・3H・281	長圓錐に連続する打点を有す
84	石核	II A b	*	21・3H・301	両長圓錐に連続する打点を有す
85	石核	II A c	*	21・3H・299	長圓錐に連続する打点を有す
86	石核	II B c	*	21・3H・641	全縁邊に単一の打点を有す
87	石核	III	*	21・3H・259	縫邊に單一の打点を有す
88	櫛り切り用石器	—	*	21・3H・66	矢印は角度の異なる幅1mmの平行な二面を示す。邊界の転用か?
89	磨製石斧	—	*	21・3H・1141	
90	磨製石斧	—	*	21・3H・632	

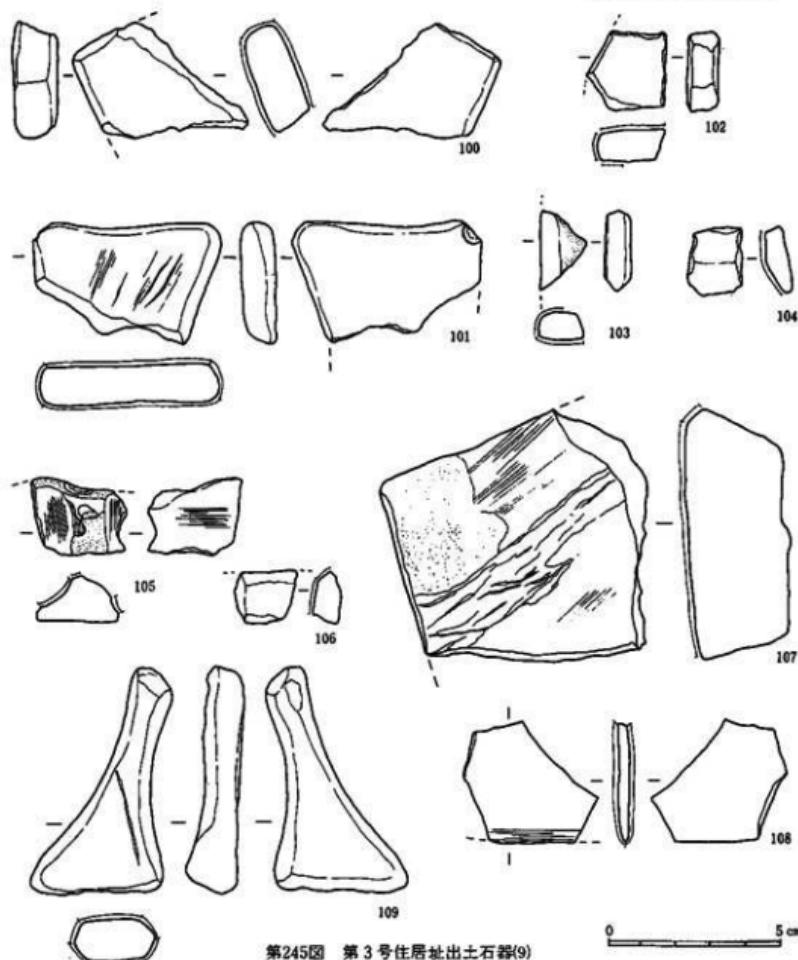


第244図 第3号住居址出土石器(8)

石器観察表

地	分類	細分類	石 材	遺 墓 号	備 考
91	砾 石	—	粗粒砂岩	21・3 H - 277	有溝
92	砾 石	—	細粒砂岩	21・3 H - 312	無底
93	砾 石	—	”	21・3 H - 一	有溝
94	砾 石	—	中粒砂岩	21・31 H - 626	側面弧狀
95	砾 石	—	粗粒砂岩	21・3 H - 725	”
96	砾 石	—	中粒砂岩	21・3 H - 1114	有溝、側面弧狀
97	砾 石	—	粗粒砂岩	21・3 H - 805	側面弧狀
98	砾 石	—	細粒砂岩	21・3 H - 320	有溝
99	砾 石	—	中粒砂岩	21・3 H - 408	有溝

第3節 向陽台遺跡

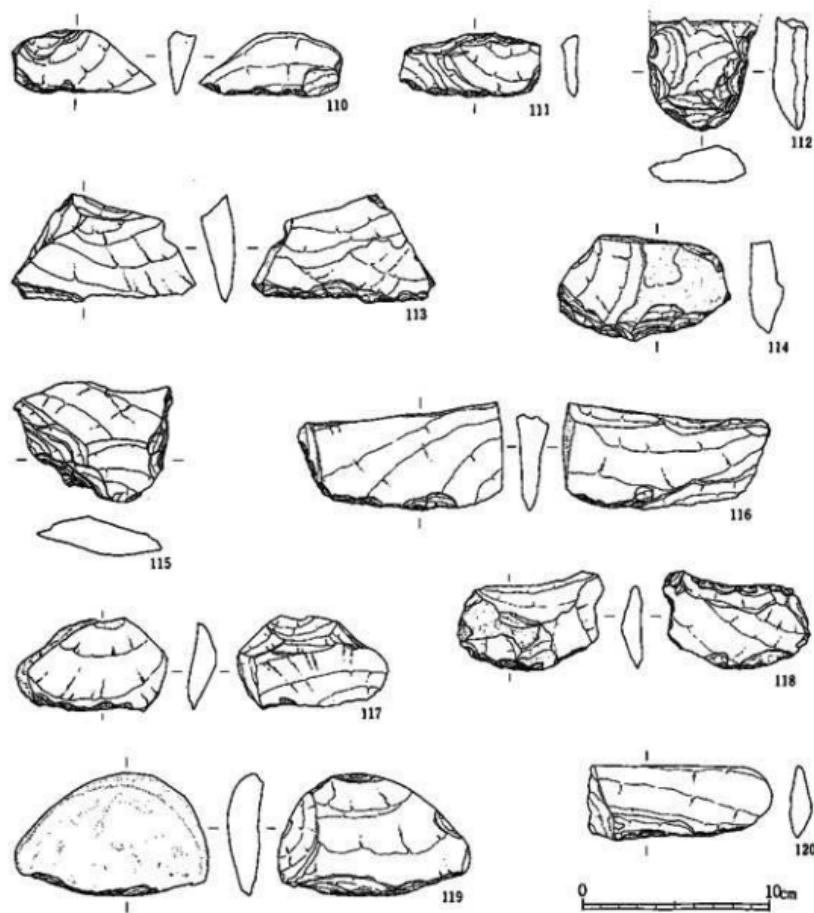


第245図 第3号住居址出土石器(9)

石器観察表

No	分類	細分類	石材	直 備 No	備 考
100	砾石	-	粗粒砂岩	21・3 H・289	
101	砾石	-	"	21・3 H・420	雙面弧狀
102	砾石	-	"	21・3 H・46	
103	砾石	-	中粒砂岩	21・3 H・320	
104	砾石	-	細粒砂岩	21・3 H・423	
105	砾石	-	"	21・3 H・459	
106	砾石	-	粗粒砂岩	21・3 H・一延	
107	砾石	-	"	21・3 H・—	
108	砾石	-	粗粒砾灰岩	21・3 H・359	
109	砾石	-	中粒砂岩	21・1 H・218	

第Ⅳ章 調査遺跡

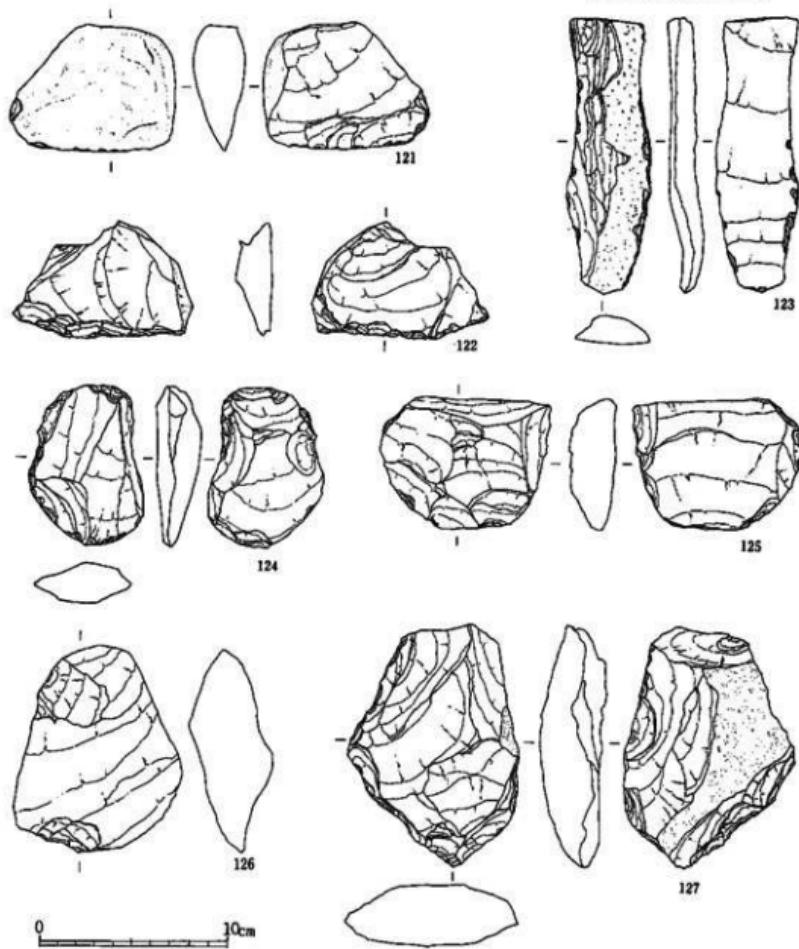


第246図 第3号住居址出土石器

石器観察表

地	分類	細分類	石材	遺物No	備考
110	不定形石器	—	頁岩	21・3H・661	鐵刃
111	不定形石器	—	*	* —	鐵刃
112	打製石斧	—	*	* 6	
113	不定形石器	—	*	* 1136	鐵刃
114	不定形石器	—	綠色變質岩	* 1161	
115	不定形石器	—	頁岩	* —	
116	不定形石器	—	*	* 1183	鐵刃
117	不定形石器	—	*	* 1170	
118	不定形石器	—	*	* 37	鐵刃
119	不定形石器	—	*	* 956	鐵刃
120	不定形石器	—	*		

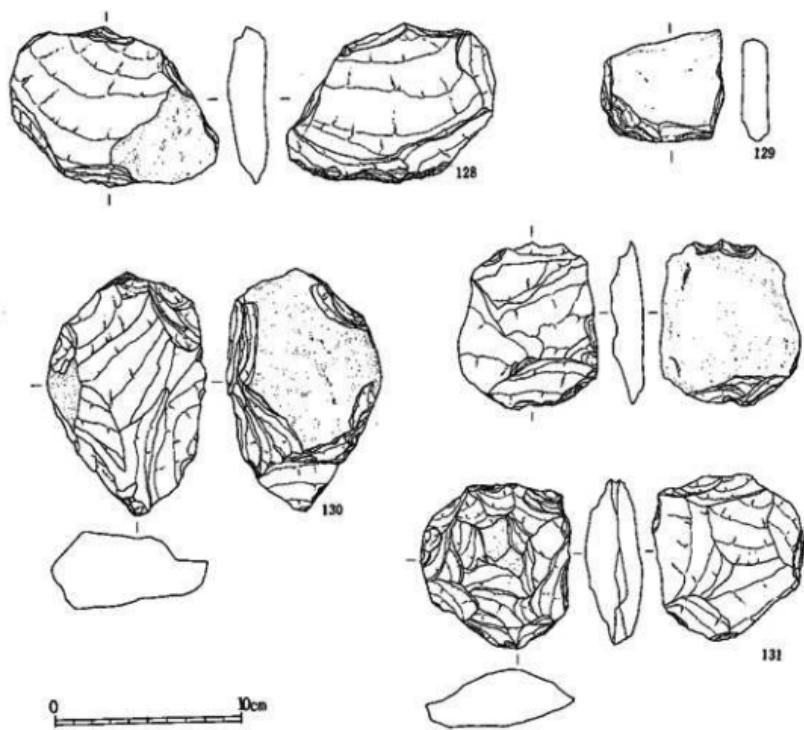
第3節 向陽台遺跡



第247図 第3号住居址出土石器(1)

石器観察表

No.	分類	細分類	石種	遺物編	備考
121	不定形石器	—	砾粒砂岩	21-3H-627	
122	不定形石器	—	頁岩	—	428
123	不定形石器	—	—	—	
124	不定形石器	—	—	—	
125	不定形石器	—	—	755	
126	不定形石器	—	砂質凝灰岩	—	536
127	不定形石器	—	頁岩	—	18

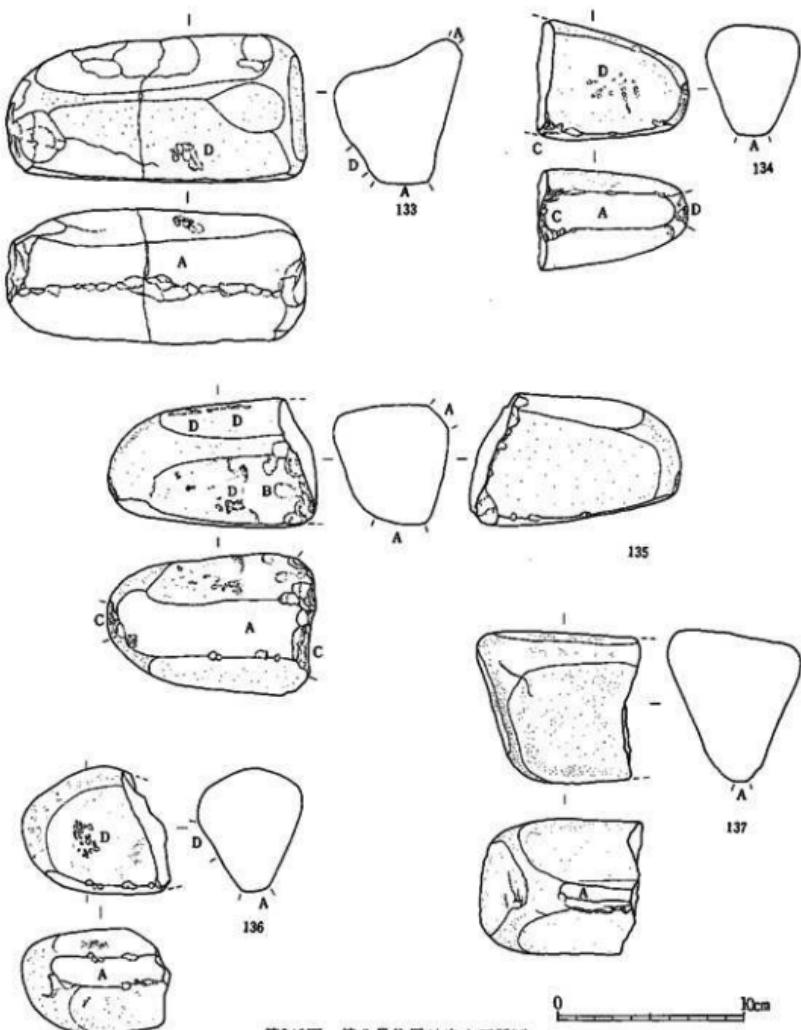


第248図 第3号住居址出土石器02

石器観察表

No.	分類	細分類	石材	遺物No.	備考
128	不定形石器	—	頁岩	21-3H-534	
129	不定形石器	—	中粒砂岩	—	
130	不定形石器	—	頁岩	—	
131	不定形石器	—	頁岩	364	
132	不定形石器	—	頁岩	512	手打・刃長6mm

第3節 向陽古遺跡

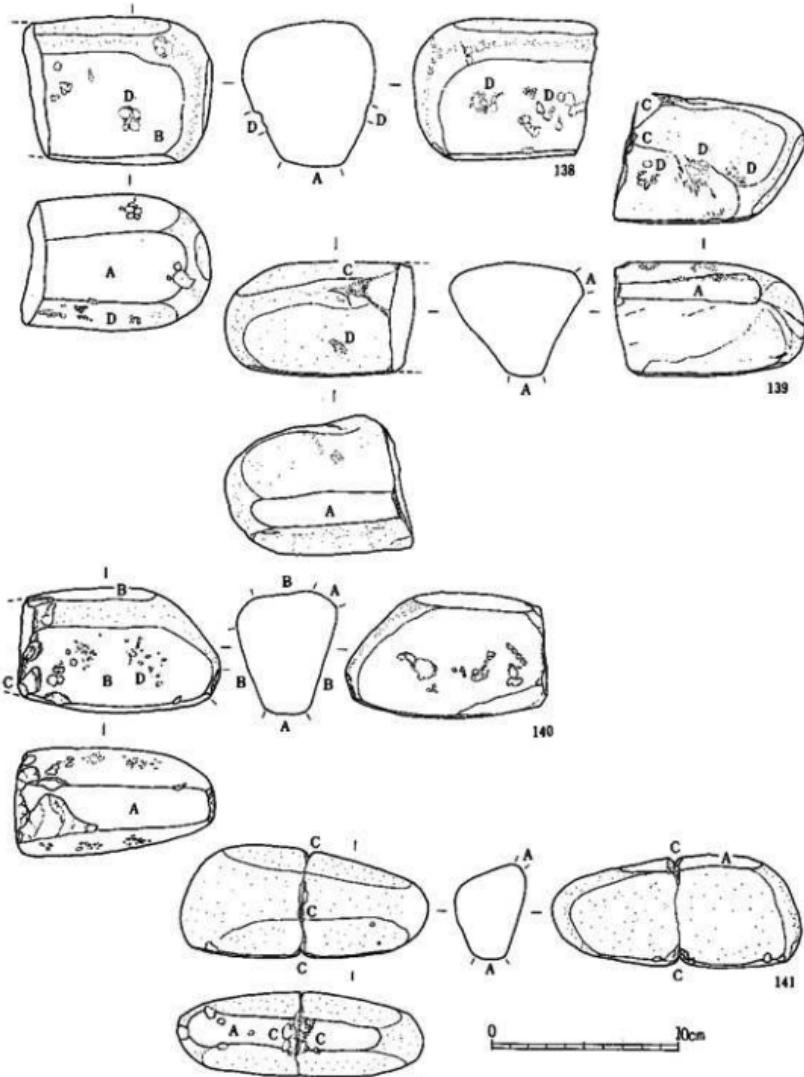


第249図 第3号住居址出土石器03

石器観察表

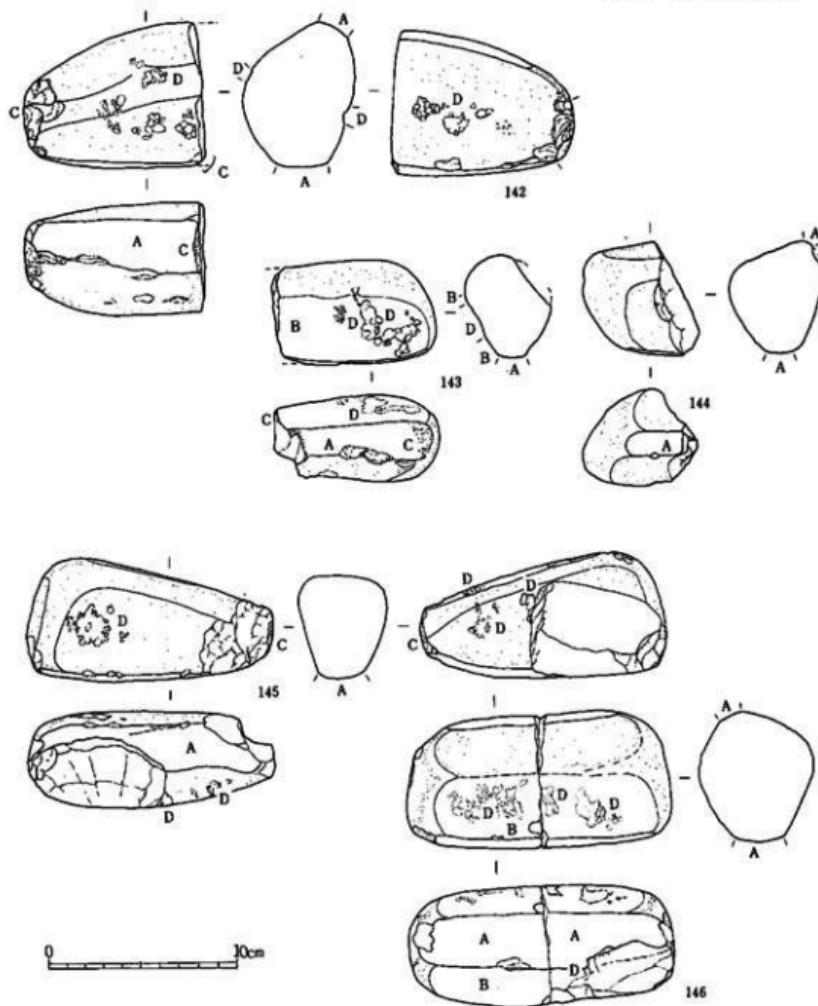
No.	分類	細分類	石材	遺物No.	備考
133	磨石類	研磨石I A	板状砂岩	21-3 H-1118	遺物No. 21-3 H-1120と複合。わずかに敲打部と凹みが併存
134	磨石類	×	細粒砂岩	×	1182 わずかに敲打部と凹みが併存
135	磨石類	×	×	×	1116 敲打部の使用が著しい
136	磨石類	×	板状砂岩	817	凹みが併存
137	磨石類	×	細粒砂岩	503	

第三章 調査遺跡



第250図 第3号住居址出土石器40
石器観察表

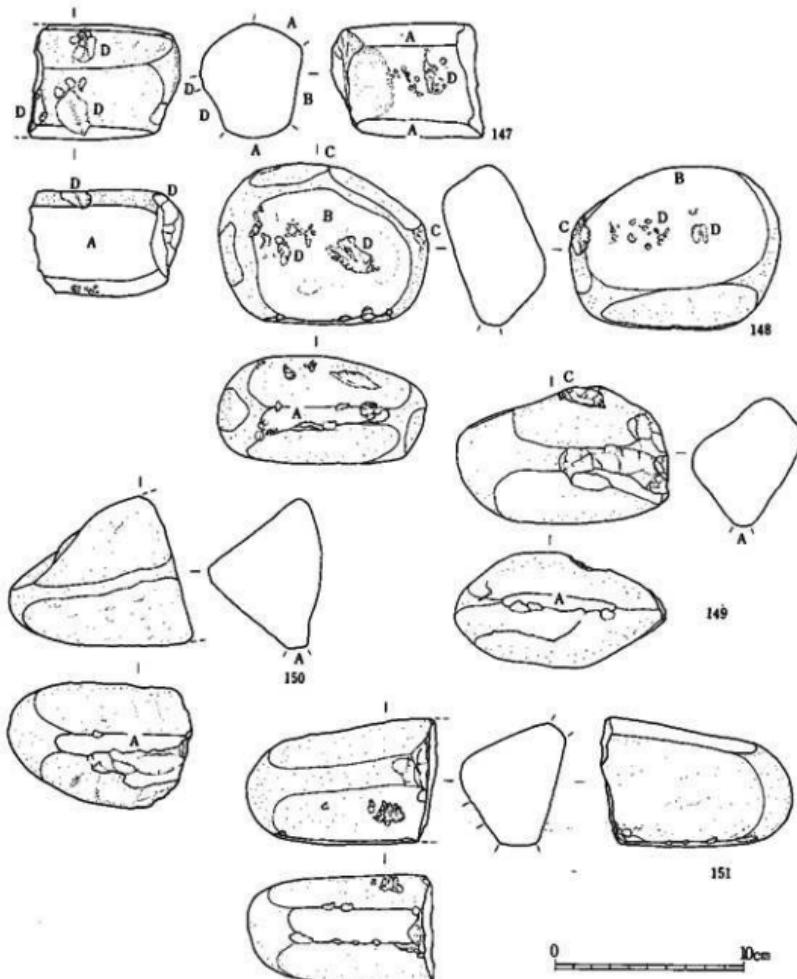
No.	分類	細分類	石材	遺物名	備考
138	磨石類	敲打石 I A	颗粒砂岩	21・3H・434	わずかに敲打部と凹みが併存
139	磨石類	x x	x	216	凹みには大きな打痕と小さくて方向性を持つ斜つ打痕有り
140	磨石類	x x	x	661	最少であるが、磨耗面Bと敲打部と凹みが併存
141	磨石類	x IB	砾岩	1113	遺物名・21・3H・1011と複合・敲打部が併存



第251図 第3号住居址出土石器6

石器観察表

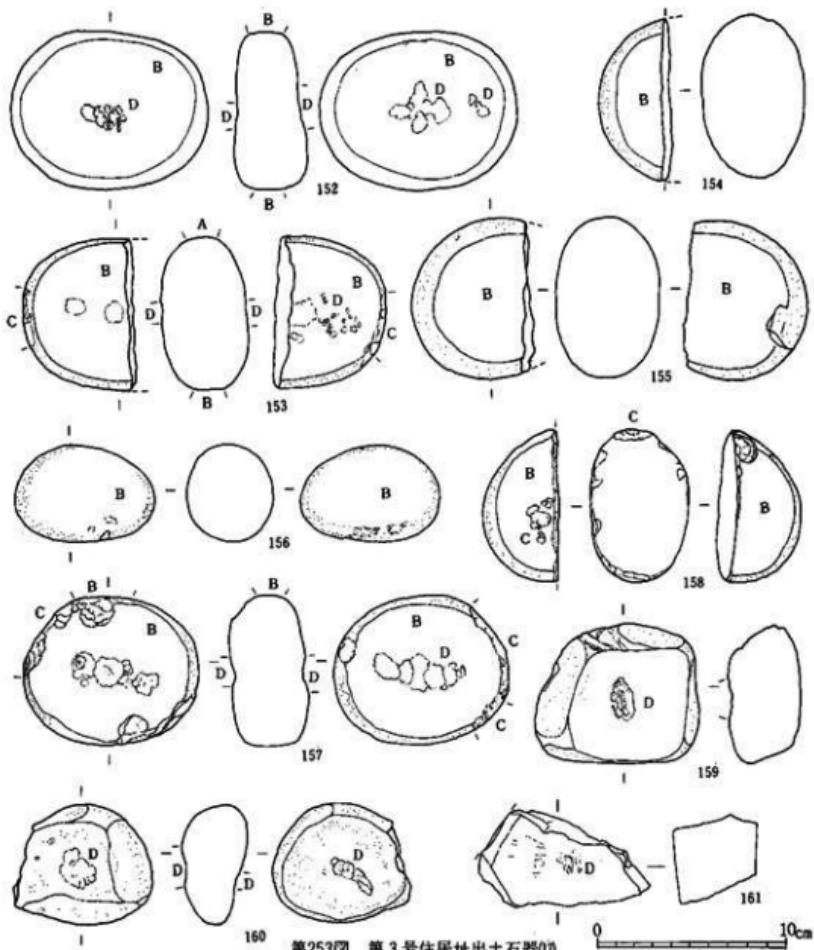
地	分類	細分類	石 材	遺 跡	備 考
142	磨石類	敲打石 I B	細粒砂岩	21・3 H・753	敲打部と凹みが保存
143	磨石類	〃	〃	625	敲打部が保存
144	磨石類	〃	粗粒砂岩	730	
145	磨石類	〃	細粒砂岩	—	敲打部と凹みが保存
146	磨石類	II A	安山岩	226 遺物No. 21・3 H・56と後合、磨耗面Bと凹みが保存	



第252図 第3号住居址出土石器(6)

石器観察表

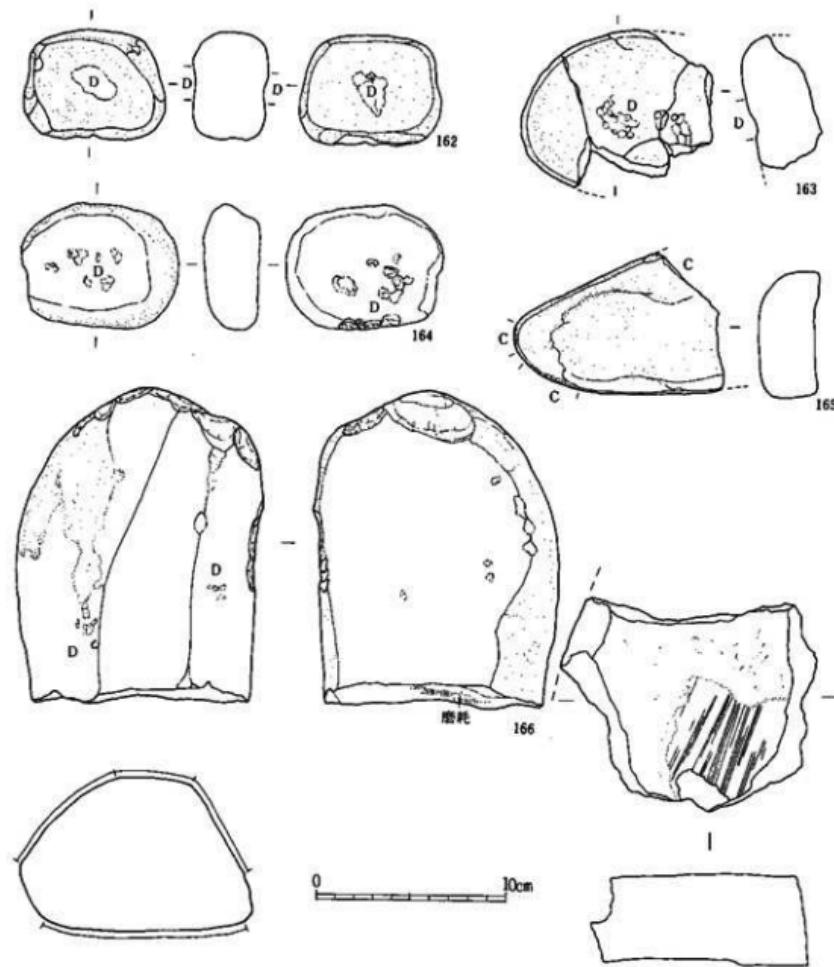
No.	分類別	組分類	石材	遺物 No.	備考
147	磨石類	双刃石A	安山岩	21・3H・915	磨耗面Bと凹みが併存
148	磨石類	# III B	細粒砂岩	1013	磨耗面Bと敲打跡と凹みが併存
149	磨石類	# WC	安山岩	790	敲打跡と凹みが併存
150	磨石類	# -	粗粒砂岩	-	
151	磨石類	# IA	#	690	凹みが併存



第253図 第3号住居址出土石器(II)

石器観察表

地	分類	細分類	石材	追物 No.	考	備考
152	磨石類	磨石	細粒砂岩	21・3H・1012	凹みが深く	
153	磨石類	"	粗粒砂岩	" 538	鋸刃部と凹みが深く	
154	磨石類	"	安山岩	" 1197		
155	磨石類	"	砂岩	" 1123		
156	磨石類	"	細粒褐灰岩	" 570	敲打部が深く	
157	磨石類	"	粗粒砂岩	" 1125	敲打部と凹みが深く	
158	磨石類	"	硬砂岩	" 779	敲打部と凹みが深く	
159	磨石類	磨石	粘板岩	" —	敲打部が深い	
160	磨石類	"	安山岩	" 538		
161	磨石類	"	粗粒砂岩	" 1008		



第254図 第3号住居址出土石器等

167

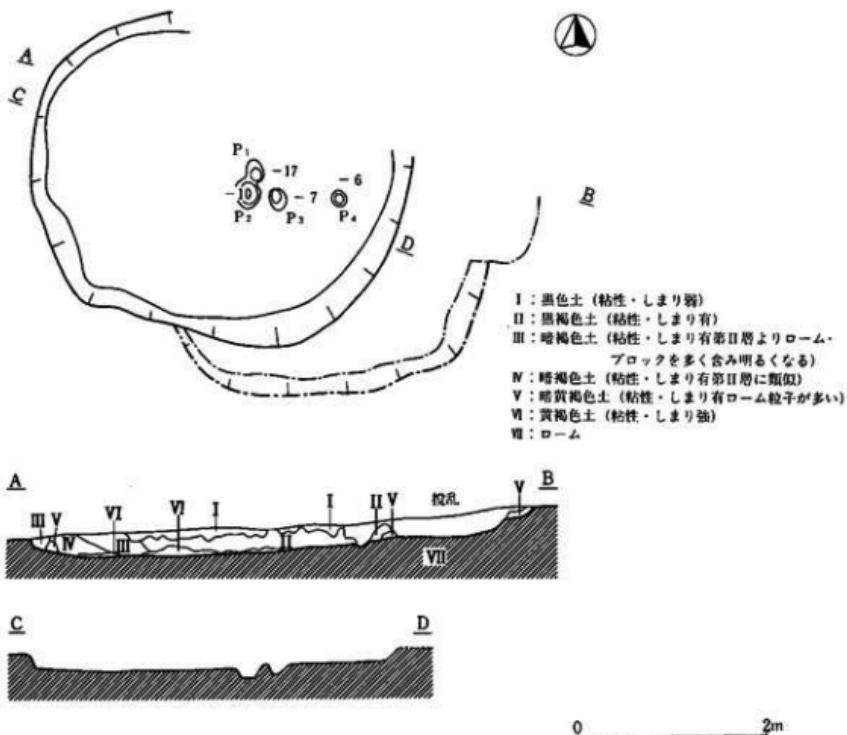
石器観察表

No.	分類	細分類	石 材	遺 物 号	備 考
162	磨石類	凹石	砂質礫灰岩	21-3H-188	
163	磨石類	"	板灰質砂岩	x 659	
164	磨石類	"	安山岩	x -	
165	敲 石	圓平	粒狀砂岩	x 1009	
166	敲 石	-	細粒砂岩	x 3034	
167	敲 石	-	中粒砂岩	x -	

第10号住居址

遺構 G 1～G 2 グリットにかけて検出された。4軒の住居中北のはずれにあり、3号址に隣接する。耕作により北側および東側を失っており、遺存状態はよくない。

東側は擾乱により2段の掘り込み状態を示すが、規模は4.02×3.7mを測る楕円形を呈するものと思われる。壁は、北、東壁が失われているが、他の南壁12cm、西が壁9cmは緩やかな立ち上がりを呈している。床面はローム層中に構築されており、ほぼ平坦である。堅く踏み固めた床ではなく、軟らかな状態を示している。ピットは、中央や東側に4ヶ所検出されたのみである。径20cm前後、深さ10cm内外の浅いものである。柱穴になるかは疑問である。炉、周溝は認められなかった。住居規模が小形であること、柱穴が殆どみられないことなど、他の3軒の住居の在り方とは若干異なった状態を示している。

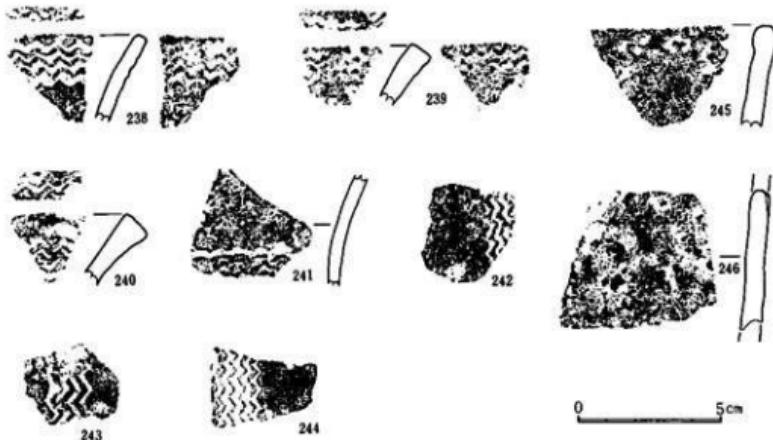


第255図 第10号住居址

第10章 調査 遺跡

第17表 第10号住居址内ピット一覧表

ピット	規 模	深さ	平面部形	備 考	ピット	規 模	深さ	平面部形	備 考
P ₁	(24) × 20	17	楕円形		P ₂	23 × 17	7	楕円形	
P ₃	(30) × 26	10	"		P ₄	16 × 15	6	円 形	



第256図 第10号住居址出土土器

土 器 觀 察 表

単位: mm

No.	層位	分 類	角数	単位	原体径・長	埋置	文様	文様	口縁	地 土	變形	追跡	No.	部 位	備 考
238	山形文C2	3	2	4.6 - 15.2	2(1)	山1	C	2	1(3)×	1 - 1	21 - 10H -	-	口縁部	表面端部下方を丸むるか	
239	"	-	-	-	-	山1	C	1	1(1)×	1 - 2	"	-	"	"	
240	"	3 - 4	-	-	-	山1	C	1	1(4)×	1 - 1	"	31	"	表面炭化物付着	
241	"	-	-	-	-	山1	C	1	1(1)×	1 - 1	"	-	東 部		
242	"	-	-	-	-	山1	C	1	1(4)×	1 - 1	"	1	側 部		
243	"	-	-	-	-	山1	C	1	1(3)×	1 - 1	"	16	"		
244	C3	4	2	3.9 - 16.7	2(1)	山1	C	丸	2(2)×	1 - 1	"	9	"	内面炭化物付着	
245	無文A	-	-	-	-	山1	C	丸	1(1)×	1 - 1	"	13	口縁部	外縁二行茎色 内面褐色	
246	無文	-	-	-	-	山1	C	丸	2(2)×	1 - 2	"	17	側 部	凹凸が強く現れる	

土器 出土した土器は総数わずかに70片と最も少ない出土量である。破片も小片が多く、それらから傾向をつかむことは無理であるが、押型文土器では口縁内面に施文のあるCタイプ2がわずかに2片ではあるが注意をひく。Cタイプ1は1片も入っていない。

石器 本址からは黒曜石、チャートを素材とした石錐1、不定形石器15、ビエス・エスキュー3、石核8、石片40、それ以外の石材の磨石1、砥石1、不定形石器2がある。住居の1部が耕作により破壊されていたことも関係して、押型文期4軒の住居址中、最も石器の出土が少ない。砥石は厚さ10mmの偏平な素材を用い、表裏面は平らに、側面は弧状に研磨している。表面には3本の溝を持ち、裏面には明確な擦痕が観察される。細粒凝灰岩を用いた不定形石器は素材の縁辺に丹念な調整を施している。頁岩製の物は、わずかに調整を施したのみの粗雑品である。

第18表 縄文時代早期石器一覧表

石器の種類 追査名	黒曜石・チャート石材							黒曜石以外の石材										
	石頭	尖頭	石斧	不定形石	ビエスキュー	石核	原石片	鉋	磨石	凹石	打磨石	磨石	研磨石	石器	不特定石	横刃型石	擦り切り用石器	黒曜石以外の石片
	鋸	鋸	鋸	鋸	鋸	鋸	鋸	鋸	鋸	鋸	鋸	鋸	鋸	鋸	鋸	鋸	鋸	
1号住	2	2	26	5	7	0	119	2	4	1				2	7	2	不明	
2号住	5	1	2	1	7	0	61							2	2	1	不明	
3号住	10	6	65	23	68	8	709	21	7	6	1	2		21	1	22	374	
10号住	0	1	15	3	8	0	40	1	1	4			1	1	2	10	1	不明
追査外	3	4	19	3	11	0	79	2				2	4	2	2		不明	

(2) 縄文時代早期集石炉

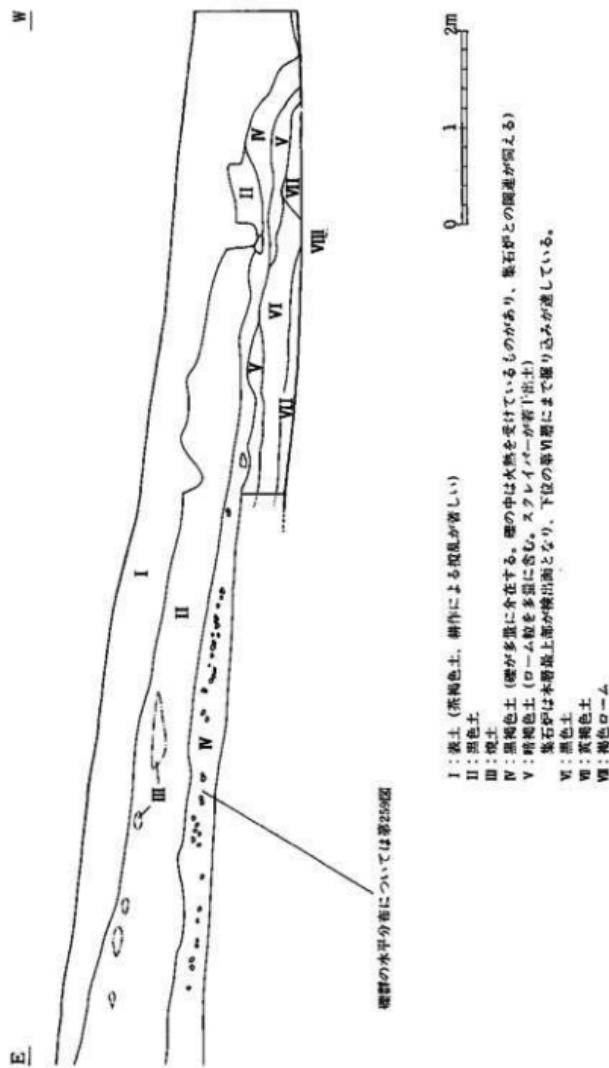
経過 計4基が検出された。遺跡の立地する台地西側は、平均斜度14°をもって西斜し、中央部に斜度7°のやや緩やかな小テラスがあり、畠地として利用されていた。当初、斜面における遺物の散布状態を調査するため、斜面に沿って長さ40mのAトレーナー、テラス上を南北に切る形で長さ20mのBトレーナーを、それぞれ1m巾で設定した。両トレーナーは、深さ1~1.5mで砂礫質の地山ローム層が検出され、流れ込み状態で縄文早期、縄文中期の遺物が散見された。

集石炉はBトレーナー南端から4.5m北寄りにまず1号が検出された。1号集石炉上層部からBトレーナー南端にかけて、熱により赤化したと思われる3~10cm大の角礫が多量に出土したため、この部分を拡張する形で東西10m、南北4mのCトレーナーを設定し掘り下げた。Cトレーナー東側3分の2ほどの範囲で、深さ1~1.1m以下から赤化した角礫を多量に包有する黒褐色土層となり、礫を圓化しつつ掘り下げたところ、この下部において2~4号集石炉が検出された。集石炉検出面は、東西に比高差30cm、斜度3°で、台地上の早期住居址検出面からは比高差8mを計る。

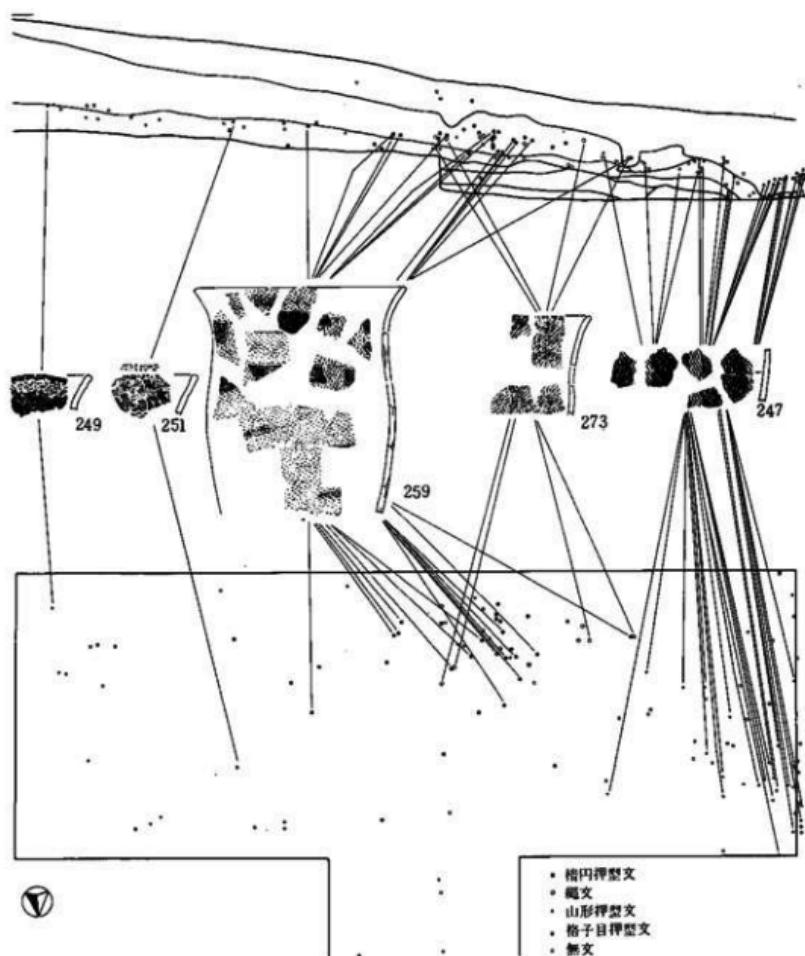
土層と遺物 集石炉が検出されたCトレーナーの南壁における層位と、これに伴う遺物の分布状況は以下のとおりである。

第I層 最上層にあたり、畠地の耕作土を示す。斜面下方西側へ向かって押し出したような形をとる。全体的に茶褐色土からなるが、著しい搅乱がみられる。横円押型文土器と縄文早期に比定されると思われる無文土器が少量出土したが、耕作による下層からの混入と考えられる。

第II層 黒色土。台地上で検出された縄文早期住居址の、覆土上層に厚く確認された黑色土と同様の色調をなす。集石炉が検出された部分では、50~95cmの層厚を示すが、西下方へ向かう途中で突然消滅し、自然ないし人為的の搅乱による影響と思われる。Cトレーナーが設定された小テラス東側の、斜面が台地上へ向かって急に立ち上がる部分においてより多くの堆積がみられるところから、当該層堆積期に台地上からの流れ込みがかなりあったと考えられる。当該層では、Cトレ



第257図 Cトレーナン壁東西セクション



第258図 Cトレンチ遺物出土状態

第Ⅳ章 調査 遺跡

ンチ中央部を中心に多くの遺物が出土した。遺物は、台地上では一片も得られなかった細久保式楕円押型文土器を中心に、縄文施文土器、山形押型文土器、格子目押型文土器、無文土器が少量得られた。

第Ⅲ層 第Ⅱ層中の上部で、黒色土が熱により赤化した焼土が部分的に検出された。遺物の出土もなく、時期、性格は不明である。

第Ⅳ層 第Ⅱ層下に続き、黒褐色を呈すが第Ⅱ層とほとんど差異はない。熱により赤化した3~10cm大の角礫と炭化材細片が多量に介在し、部分的に焼土も確認された。当該層東半の最下部において4基の集石炉が検出された。多量に出土した礫と、集石炉に使用されていた礫が統一様相をなすことから、当該層が集石炉に伴う層と考えられる。第Ⅱ層とともに遺物包含層となっている。遺物は、沢式の山形押型文土器、無文土器を主体として、少量の楕円押型文土器、格子目押型文土器、縄文施文土器が出土した。

第Ⅴ層 暗褐色土を呈する。集石炉の掘り込みが確認された層で、ローム粒の混入がみられ、礫はまったく含まれていない。層厚20cm前後を計り、上層第Ⅳ層で確認された礫の分布範囲とは同一範囲をもって西側で一旦消滅し、再度現われて西斜面に沿って落ち込んでいる。遺物は、黒曜石スクレイバー等が若干出土した程度である。

第VI層 第Ⅱ層と同様な黒色土を呈する。礫の混入はみられない。集石炉調査後の掘り下げにより当該層の存在が確認され、集石炉の掘り込みが地山ローム漸位層になされたものではないことが判明した。東へ向かってやや厚くなり、集石炉検出下で層厚20~30cmを計る。第2、3、4号集石炉の掘り込みは、当該層に達する。トレンチ東半の集石炉検出面下での掘り下げでは、遺物は1点も確認されなかった。

第VII層 黄褐色を呈し、地山ローム漸位層に相当する。

第VIII層 地山ローム層。同時に調査された同一テラス上のA、Bトレンチでは、粒土質の砂礫ロームが検出されたが、Cトレンチについては、台地上と同様の礫を含まない褐色ローム土の存在が確認された。

以上のように、斜面における層位の観察ではあるが、出土遺物と層位との関連性は比較的明瞭に指摘できよう。すなわち、Ⅱ層では細久保式を主体とする楕円押型文、縄文施文土器が主体をなし、その下位のⅢ層では沢式を主とする山形押型文を中心としていた。出土遺物の量が少量であり不確定さは存するが、沢式、細久保式の前後関係を示していよう。

第1号集石炉

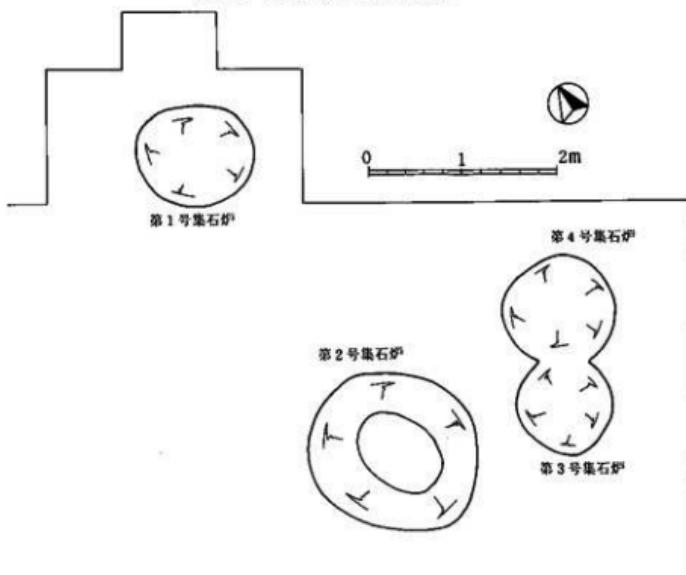
Bトレンチ南端から4.5m北寄りで検出された。2号集石炉と2.3m、3号集石炉と3.6m、4号集石炉と3.0mを隔てる。第Ⅳ層中の赤化した3~10cm大の角礫を取り上げつつ掘り下げたところ、10~25cm大の比較的大きな角礫が間隔を置きながら円形に確認され、その中に第Ⅳ層中の礫と同一状態の礫がぎっしりとつまって検出された。

検出面での礫は、周縁部の礫が掘り込みから礫半分ほど出た状態で、中側に比して若干高くなっ

第3節 向陽台遺跡



第259図 集石炉検出面直上の砾群

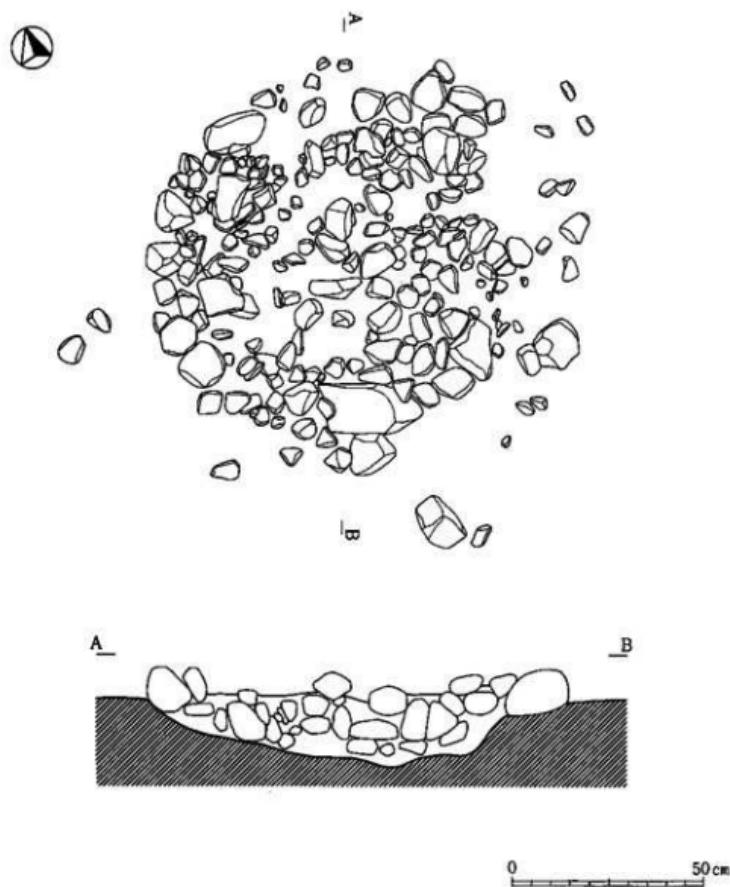


第260図 集石炉掘り方

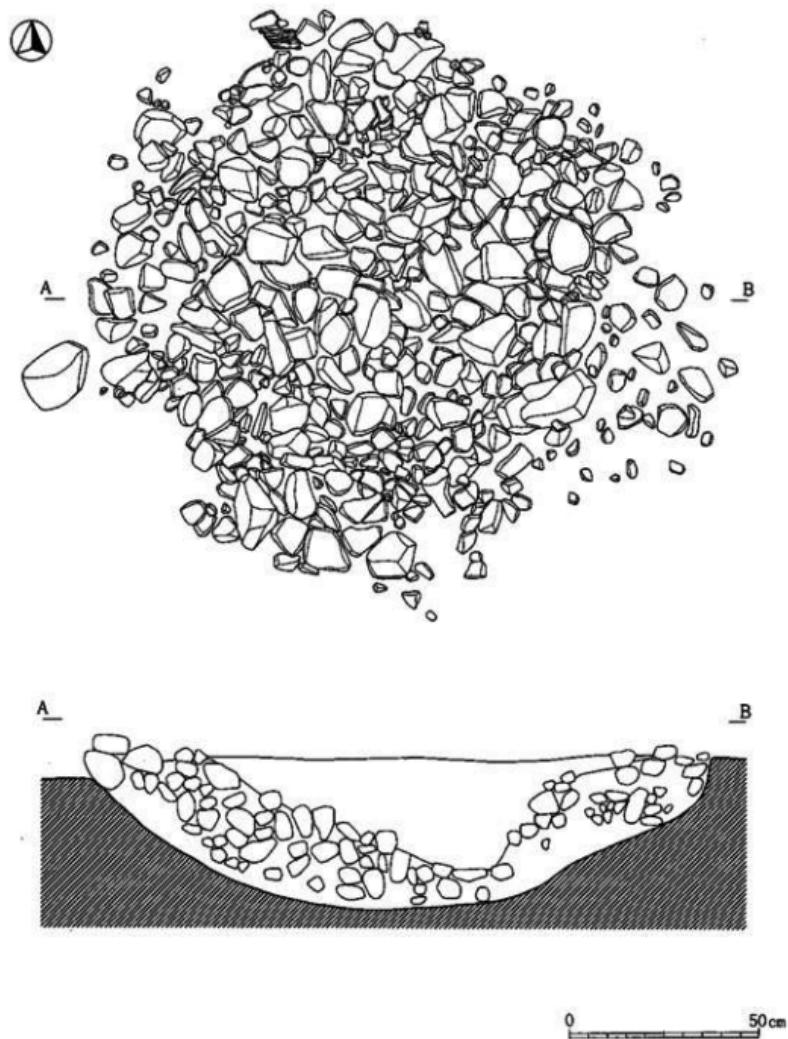
第四章 調査 遺跡

ているのが認められたものの、全体的にはほぼ平坦である。掘り込みは第V層になされ、平面形でやや橢円形の擂鉢状をなす。規模は、東西122cm、南北104cm、深さ25cmを計る。焼成された礫は底部まで稠密に入り、礫間を埋める暗黒褐色土中には、細片化した炭化材が多量に認められる。壁面は焼成された痕跡が何われる。

遺物の出土はない。



第261図 第1号集石炉



第262図 第2号集石塚

第III章 調査遺跡

第2号集石炉

Cトレンチ東半の南寄りに位置する。1号集石炉とは2.3mを隔てるが、3号集石炉とは46cm、4号集石炉とは84cmと隣接状態にある。第IV層を掘り下げたところ、3~20cm大の赤化した角礫が円形にぎっしりつまつて検出された。

周縁部の礫は、検出面から礫1個体分前後持ち上がり、中心部に向かって円錐状に落ち込んでいる。周縁部と中心部の礫上面比高差は30cmを計る。炉周辺部の第V層暗褐色土検出面は、赤く焼成された痕跡がみられ、特に南側で広範囲に顕著である。また、炉周辺部の礫下には、直径1~2cmの小枝状炭化材がまとまって炉外にはみ出した形に散見される。

掘り込みの規模は、長径185cm、短径164cm、深さ40cmで、やや楕円形のプランを呈する。底部は95×64cmの楕円形平坦面をなし、壁面は掘り込み上端から湾曲して底部へ続いている。検出された集石炉4基中、最も大きな規模をもつ。赤化した3~10cm大の角礫は底部まで稠密に認められ、その数は1,500個を数えた。黒色覆土中から底部面に至るまで、炭化材が多量に出土し、特に底部には小枝状炭化材が、敷き詰めたように顕著にみられる。底面から壁面にかけては、全面赤く焼成されている。掘り込みは、検出面の第V層暗褐色土から、第VI層黒色土にかけてなされ、壁部下半と底部が第V層中にある。

遺物の出土はない。

第3号集石炉

Cトレンチ東半の東寄りに位置する。北側が4号集石炉と重複し、西方46mを隔てて2号集石炉が隣接する。第IV層と第V層の境において、3~10cm大の角礫が円形に集中して検出された。周縁部に直径10cm前後のやや大きめの礫が比較的多く、この並びから、当該集石炉が4号集石炉を切っているように思われる。これらの礫は検出面よりやや高く位置し、中心部に向かって円錐状に落ち込んでいる。周縁部と中心部での礫上面比高差は、15cmを計る。

鐘鉢状の円形プランを呈し、直径103cm、深さ25cmを計る。検出された4基の集石炉中、最も小規模である。赤化した角礫が底面まで稠密に認められ、層厚は10cm前後ある。礫間を埋める黒色土中には多量の炭化材が混入し、底部には直径1~2cmの小枝状炭化材が層をなすかのように多量に堆積している。覆土の堆積状態から、当該集石炉が4号集石炉を切っていることが確認された。第VI層にまで達している掘り込み壁面は、全面赤く焼成されている。

遺物の出土はない。

第4号集石炉

Cトレンチ東半の北東寄りに位置する。南側を3号集石炉に切れ、1号集石炉と300cm、2号集石炉と84cmを隔てる。第IV層下から、3号集石炉とともにダルマ形に角礫が集中して検出された。周縁部では、5~10cm大の角礫が検出面より礫半分ほど出た形で認められ、中側は、南側3号集石炉に向かって傾斜し、礫検出面での比高差は20cmを計る。



第263図 第3・4号集石炉

第Ⅲ章 調査遺跡

掘り込みは、東西117cm、南北114cm、深さ25cmで、3号集石炉に比してやや大型の円形プランを呈する。棺体状に掘り込まれ、下部は第VI層に達する。赤化した礫は底部まで密に確認され、これを包含する覆土は、上下二層に識別される。上層は、炭化材の細片を混入する暗褐色土で、下層は、小枝状の炭化材および焼土を多量に混入する黒色土である。特に、下層下部においては、炭化材の堆積が著しく認められる。壁面は、掘り込みの上端に至るまでの全面が赤く焼成されている。

遺物は、礫間の覆土から撚糸文土器口縁部が1片出土した。

(3) 縄文時代前期住居址

第11号住居址

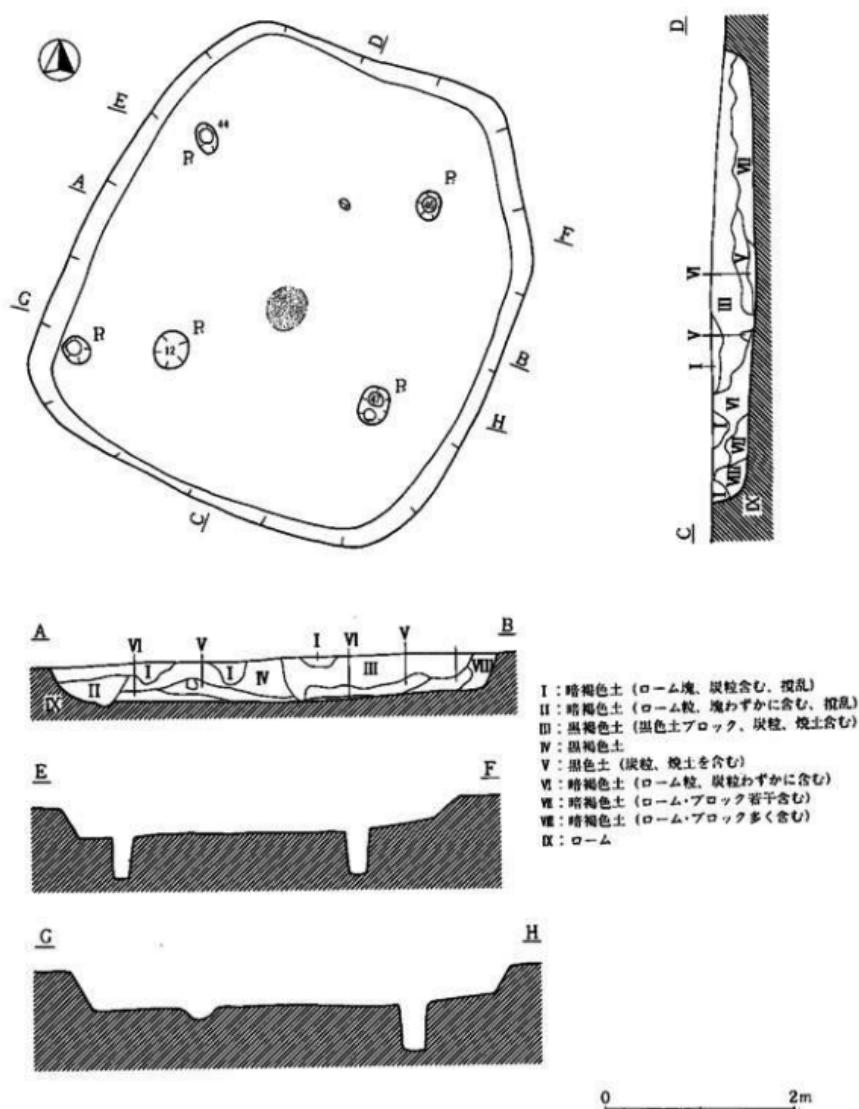
遺構 C—2、3区にあり、縄文前期中越期の住居址中、最も下位に位置する。12号住居址が南に隣接する。北側の崖端まで8mを測る。

東西450cm、南北495cmの規模を有し、プランは北側がやや乱れているが隅丸方形を呈する。壁は、やや傾斜のある掘り込みで、壁高は、東壁29cm、西壁38cm、南壁38cm、北壁23cmである。床は平坦で、堅緻。柱は4本主柱で、P₁(30×19cm、深さ44cm)、P₂(29×24cm、深さ40cm)、P₃(40×29cm、深さ50cm)、P₄(40×36cm、深さ12cm)がこれにあたる。P₃にあるいま1つの掘り込みとP₅とは何らかの対応を示すものかもしれない。炉は、床面中央からやや南に偏して設けられている。50×40cmの範囲に焼土が厚さ2cmほど堆積した地床炉である。周溝はない。

時期は、縄文前期中越期に属する。

遺物 遺物は覆土下層から多く出土し、特に土器の大形破片は住居中央の床面上に集中する。土器はおおよそ形態が知られるものが5個体、他に破片が少量ある。1～3は、山形の尖突起を四單位付するもので、ともに底部を欠くが、尖底を呈すると推定される。1は、口径27.5、推定器高31.5cm、2は口径19.7、推定器高21cm、3は口径20.4、推定器高22.5cmを測り、内外面に指圧整形痕を残す。文様はなく、3に補修孔がみられる。4は、わずかに底部を欠くが、口径32cmの平縁口縁、器高32cmの大形尖底深鉢土器である。やはり指圧整形痕を残すのみで文様は施されていない。5は、胴上半部を欠くが、くびれた胴部に刺突を一条施している。現存口径13cm、現存高10cmの山形尖底土器である。薄手堅緻で、内外面に指圧整形痕が顕著である。268図1～5は、縦縞格子目文を施し、5には垂紐貼付文の下端がわずかにみられる。9～12は、無文の口縁部で、山形小突起を呈する9、平縁の10～13があり、10、11は口唇部に刻み目を入れている。14は縄文施文土器で、繊維は含まれない。15は唯一の平底土器の底部で、図4の大形土器に隣接して出土している。

1～4および268図1～13は中越式(阿久II-B)に比定でき、5は清水ノ上IIに比定できよう。石器は、石鎌20、石匙9、異形石器2、有抉頭磨石器2、不定形石器27、ビーエスエスキュー1、石核石器1、打製石斧1、横刃型石器3、凹石3、磨製石斧1の計71点出土し、他に石核を含む多量の黒曜石片が得られている。石鎌1～20は、基部への抉り込みの浅いものが大半を占め、



第264図 第11号住居址

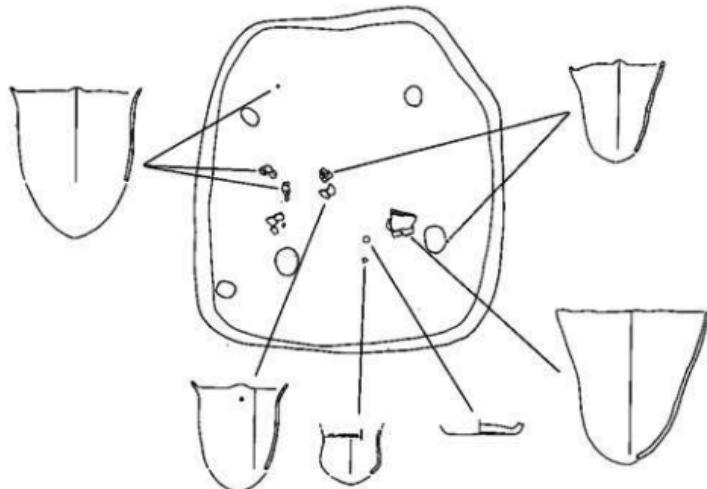
第III章 調査遺跡

作りは精巧である。19、20は重量もあり、尖頭状石器といえるかもしれない。異形石器21、22は石鎌状の形態をし、側縁に左右から抉り込みを施したもの。有抉顎磨石器23・24は、原石面を残す。石匙25～27は横型、28～35は縦型で、ともに作りは精巧。不定形石器36～44は、刀部に調整加工を施したものでスクレイパーといえるもの、45～57は余り調整を施さず使用痕を残すもの、58～60はノッチ状の抉りのあるものである。打製石斧65は、偏平で粗雑なもの。横刃型石器66、68は、刃部が直で、背部が山形を呈し、67は刃部がやや円味をもち背部は直となる。凹石69、70は打痕の集中による凹孔を有し、70は先端に打痕が残る。磨製石斧71は、小形で、刃部の一部を欠損している。

第12号住居址

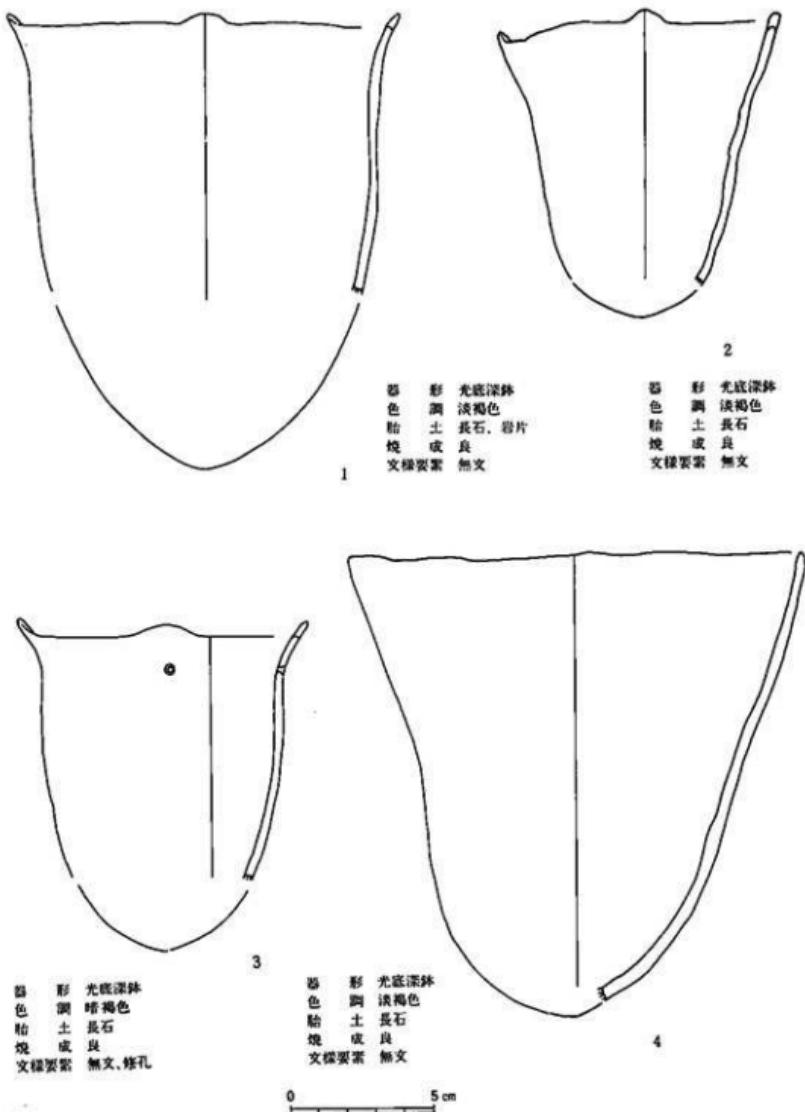
造構 E、D—3、4区にあり、北に11号住居址が隣接している。

東西485cm、南北490cmの規模をもち、東・西・北の各壁は直線状をなすが、南壁はやや張り出した弧を描き、若干不整形な隅丸方形プランを呈する。各壁の掘り込みはきれいになされており、壁高は、東壁39cm、西壁29cm、南壁37cm、北壁31cmを測る。床は平坦で、遺存状態は良い。柱穴は4本主柱でP₁ (58×46cm、深さ50cm)、P₂ (61×50cm、深さ51cm)、P₃ (66×36cm、深さ67cm)、P₄ (37×33cm、深さ40cm) がこれにあたり、P₃には深さ15cm、46×24cmのビットが重複している。掘り方は、傾斜が著しい。炉は、中央やや南寄りに設けられている。133×70cm、深さ4cmの地床炉で全面に焼土が堆積している。この炉中と、炉から13cmほどはずれた所に、径15cm、

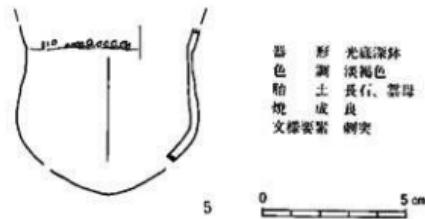


第265図 第11号住居址出土土器出土状態

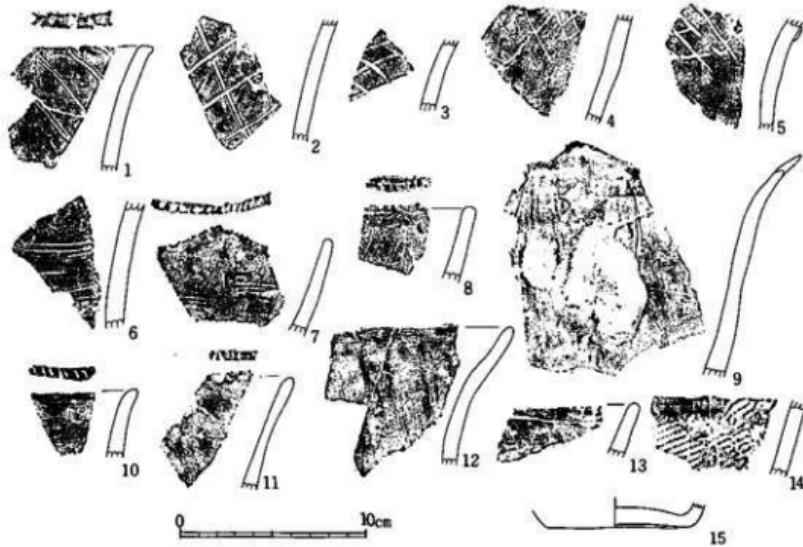
第3節 向陽台遺跡



第266圖 第11號住居址出土土器(1)



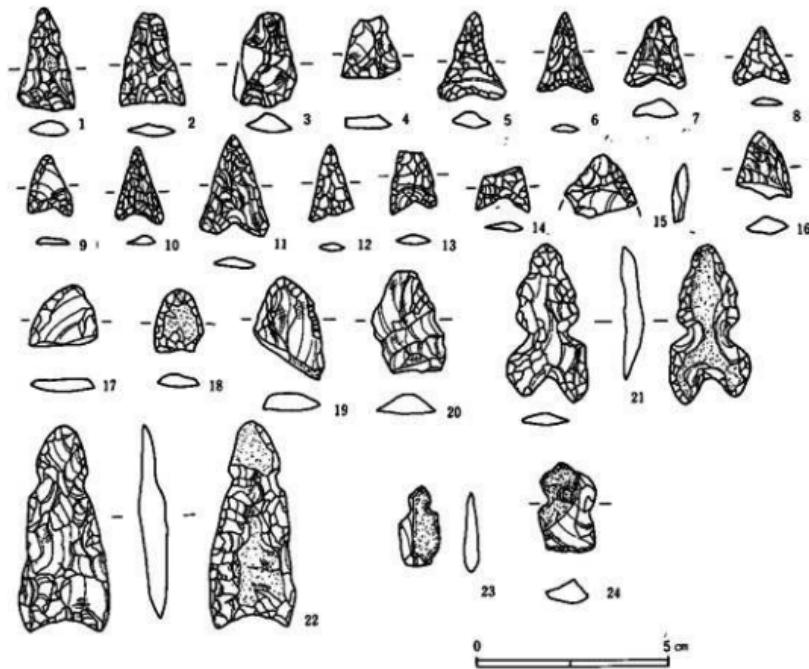
第267図 第11号住居址出土土器(2)



第268図 第11号住居址出土土器(3)

土器観察表

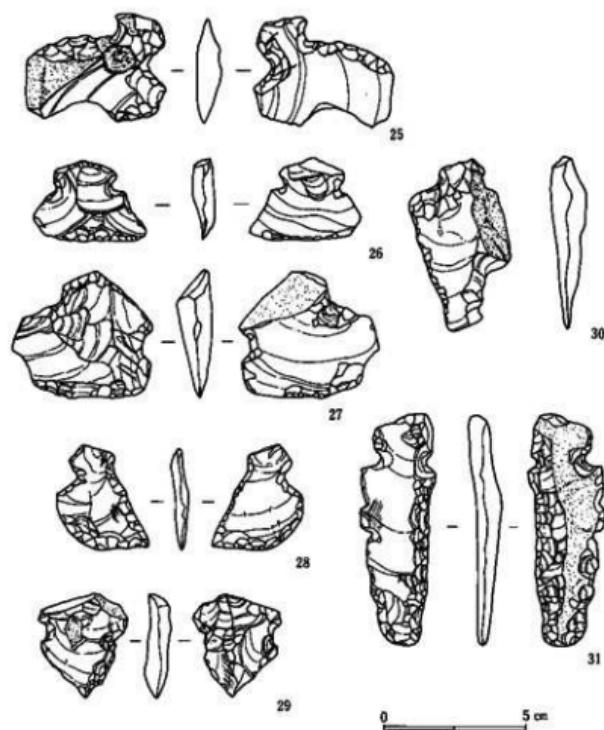
番号	遺構名	器形	部位	文様構成要素	鉢面調査 外/内	胎	土
1	11 住	深 体	口縁	波状格子目・刻目	ナデ/ナデ・霧庄	長石	
2	"	"	口 篓	"	ナデ・指圧/ "	"	
3	"	"	"	"	"	"	
4	"	"	"	"	"	"	
5	"	"	"	" - 贼付	粗/ " - 指圧/ "	"	
6	"	"	"	粗痕	"	"	
7	"	"	口 篓	刻目・粗痕	"	"	
8	"	"	"	粗波線	"	"	
9	"	"	"		"	岩片	
10	"	"	"	刻目	"	"	
11	"	"	"	"	"	"	
12	"	"	"	" /粗	"	"	
13	"	"	"	" /指圧	"	"	
14	"	"	"	粗文	" /粗	岩片, 石英	
15	"	"	底			長石, 岩片	



第269図 第11号住居址出土石器(1)

石器観察表

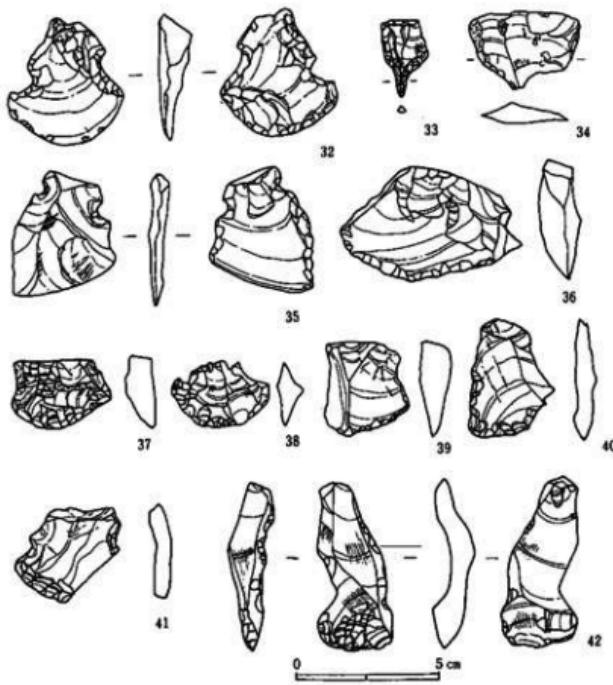
番号	造形	種別	石質	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	特徴
1	11住	石器	風磨石	26	15	4	2.3	
2	×	×	チャート	24	17	2	20	
3	×	×	風磨石	24	13	5	19	
4	×	×	%	16	15	3	0.8	
5	×	×	%	23	17	4	16	
6	×	×	%	20	15	2	0.6	
7	×	×	%	18	16	4	1.6	
8	×	×	%	15	15	2	0.7	
9	×	×	%	16	11	1	0.2	
10	×	×	%	20	13	2	0.3	
11	×	×	%	26	18	2	1.1	
12	×	×	%	20	12	2	0.4	
13	×	×	%	17	12	2	0.5	
14	×	×	%	12	14	2	0.1	
15	×	×	%	16	18	3	0.7	
16	×	×	%	17	14	4	0.7	
17	×	×	チャート	16	17		0.3	
18	×	×	風磨石	16	13	3	1.1	
19	×	×	%	26	18	5	2.6	
20	×	×	%	26	19	5	2.3	
21	×	異形石器	チャート	41	21	3	4.5	
22	×	有抉圓底	風磨石	54	24	7	8.3	
23	%		%	21	10	5	0.9	
24	%		%	21	14	6	2.5	



第270図 第11号住居址出土石器(2)

石 器 鋏 磨 表

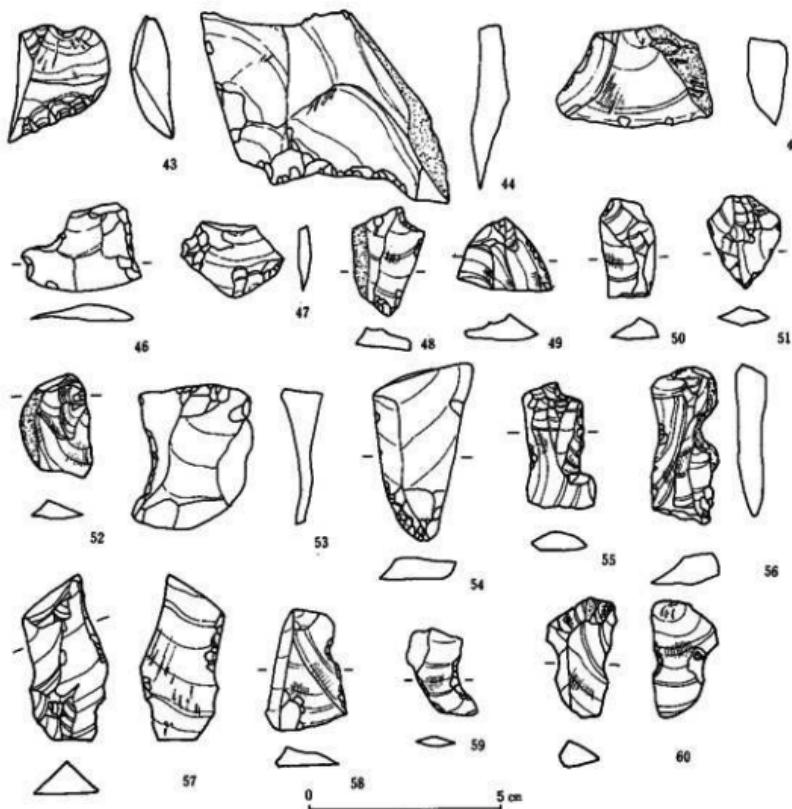
番号	遺構	種別	石質	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	特徴
25	11住	石 鮫	有抉削痕	36	44	9	14.2	横型
26	"	"	"	27	40	8	5.6	"
27	"	"	チャート	43	49	13	19.8	"
28	"	"	"	36	32	4	5.8	縱型
29	"	"	"	36	31	8	8.8	"
30	"	"	"	49	33	13	5.5	"
31	"	"	黑曜石	80	26	9	17.0	"



第271図 第11号住居址出土石器(3)

石器観察表

番号	遺構	種別	石質	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	特徴
32	11住	石鉈	チャート	43	41	11	11.6	複型
33	×	石鏨	黒曜石	16	26	2	1.8	
34	×	石鏨	?	25	33	7	5.7	
35	×	石鉈	チャート	56	36	7	10.1	複型
36	×	不定形	?	39	62	15	29.8	
37	×	?	?	24	35	10	9.4	
38	×	?	黒曜石	23	34	12	5.0	
39	×	?	チャート	33	29	10	8.7	
40	×	?	?	40	29	7	7.4	
41	×	?	?	32	38	6	7.7	
42	×	?	黒曜石	57	26	11	10.3	

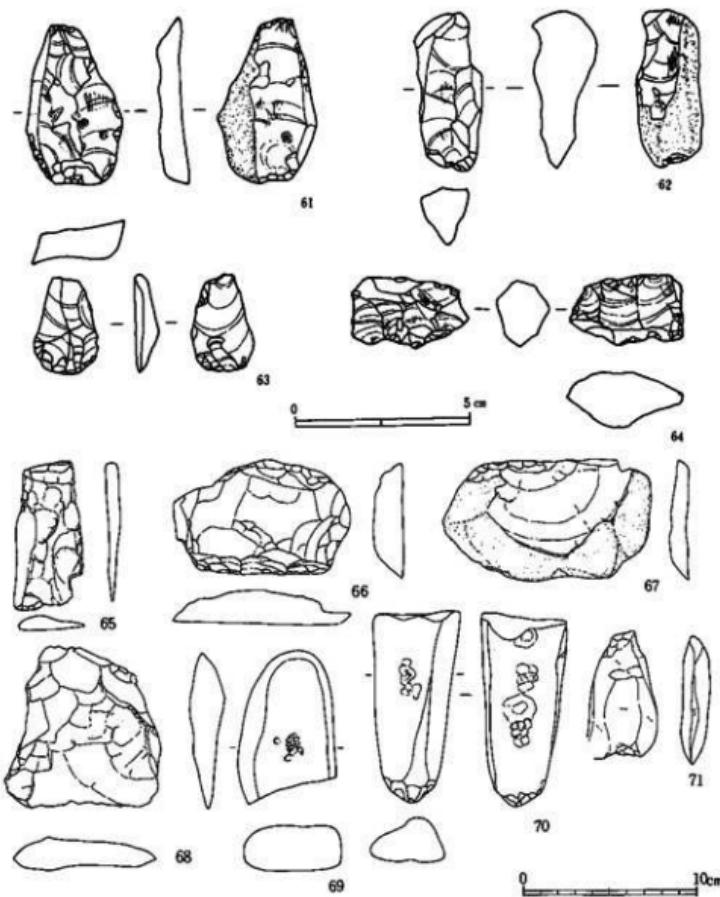


第11章 第11号住居址出土石器(4)

石器 銮表

番号	遺構	種別	石質	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	特徴
43	11住	不定形	チャート	30	27	10	7.2	
44	"	"	"	47	66	8	33.2	
45	"	"	黒曜石	25	42	10	9.0	
46	"	"	チャート	23	31	4	3.9	
47	"	"	黒曜石	20	27	3	2.0	
48	"	"	"	28	18	5	3.0	
49	"	"	"	19	25	7	2.5	
50	"	"	"	26	14	5	2.0	
51	"	"	"	24	19	5	2.1	
52	"	"	"	26	19	4	2.6	
53	"	"	チャート	37	29	10	8.9	
54	"	"	"	47	26	6	7.9	
55	"	"	黒曜石	22	18	5	3.2	
56	"	"	"	39	17	8	5.0	
57	"	"	"	42	21	8	7.3	
58	"	"	"	31	21	5	4.0	
59	"	"	"	23	14	2	1.5	
60	"	"	"	30	17	6	3.0	

第3節 向陽台遺跡



第273圖 第11號住居址出土石器(5)

石器觀察表

番号	遺構	種別	石質	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	特徴
61	11住	打製石斧	黑曜石	45	28	10		
62	#	不定形	#	44	18	16		
63	#	#	#	27	18	6		
64	#	石核	#	32	20	16		
65	#	打製石斧	頁岩	85	40	9	30	
66	#	擦刃型石器	#	66	102	19	140	
67	#	#	#	69	119	14	110	
68	#	#	#	92	89	18	130	
69	#	石	細粒砂岩	93	57	26	171	
70	#	#	#	109	50	25	180	打製磨中 下端打痕
71	#	磨製石斧	蛇紋岩	74	40	16	61.0	万歎欠

第三章 調査遺跡

深さ11cmのピットがあり、炉に関係した施設の一部と考えられる。

本址には周溝がなく、また建て直しもなく、東側にある13・14号住居がともに建て直しをし、周溝を有し、円形プランであることと極立った対照をみせている。

本址は、縄文前期中越期に属する。

遺物 本址からは土器、石器が出土しているが、出土状態は、東南寄りに多く、他の部分は比較的希薄であった。

土器は、ほぼ形態を知ることができる。図1・2の2個体と、275図の破片のはか、無文の土器片がわずかに出土している。1は、口径30.6、推定器高34.8cmの大形尖底深鉢形で、口縁は平滑な平縁、口唇部に刻みを入れ、胴部は無文である。褐色を呈し、焼成は良くしっかりした土器である。2は、口径12.4、推定器高12.2cmの小形尖底深鉢で、無文、暗褐色を呈する。275図1・2は、粘土紐を口唇部から口縁下に貼り付けたもので、小突起を呈す。外面はナデ、指圧整形痕が顕著である。焼成は良くない。3～5は、平口縁の破片で、3・4は口唇部に刻みを加えている。6・7は、細沈線による格子目文施文の頸部片で、量的に少ない。8～12は、縄文施文の土器で、織維の混入は認められない。

本址の土器は、平口縁、無文の尖底深鉢を主体とし、わずかな格子目文施文、縄文施文土器が伴う。

石器は、石鎌1、尖頭状石器3、石匙3、有抉頭磨石器1、石錐4、不定形石器29、ピーエスエスキュー3、打製石斧1、凹石5、敲石2、垂飾1の計53点が出土した。石鎌1は、基部への抉りの浅いもの。石匙5・6は縦型で、作りは雑。7・8は有抉頭磨石器で、7は肩部に、8は胴部にくびれを持つ。石錐9～12は、つまみ部の作出のないもので、概して作りは雑である。不定形石器13・14は、尖頭部を作り出したもの、15～17、30～32は二次調整を施したもの、19～29、33～41は加工を施すことなく剥片の鋭い縁刃を使用したもの。42～44はピーエスエスキュー。打製石斧45は、棒状を呈し、刃部を欠く。凹石46～48は、扁平な梢円形砾を用い、表裏面に打痕の集中によってできた凹孔を有する。49・50は、先端に顕著な打痕がみられる。52は側縁先端に打痕が残されている。装飾品53は、両側に刻みを入れ、先端に穿孔したもの。

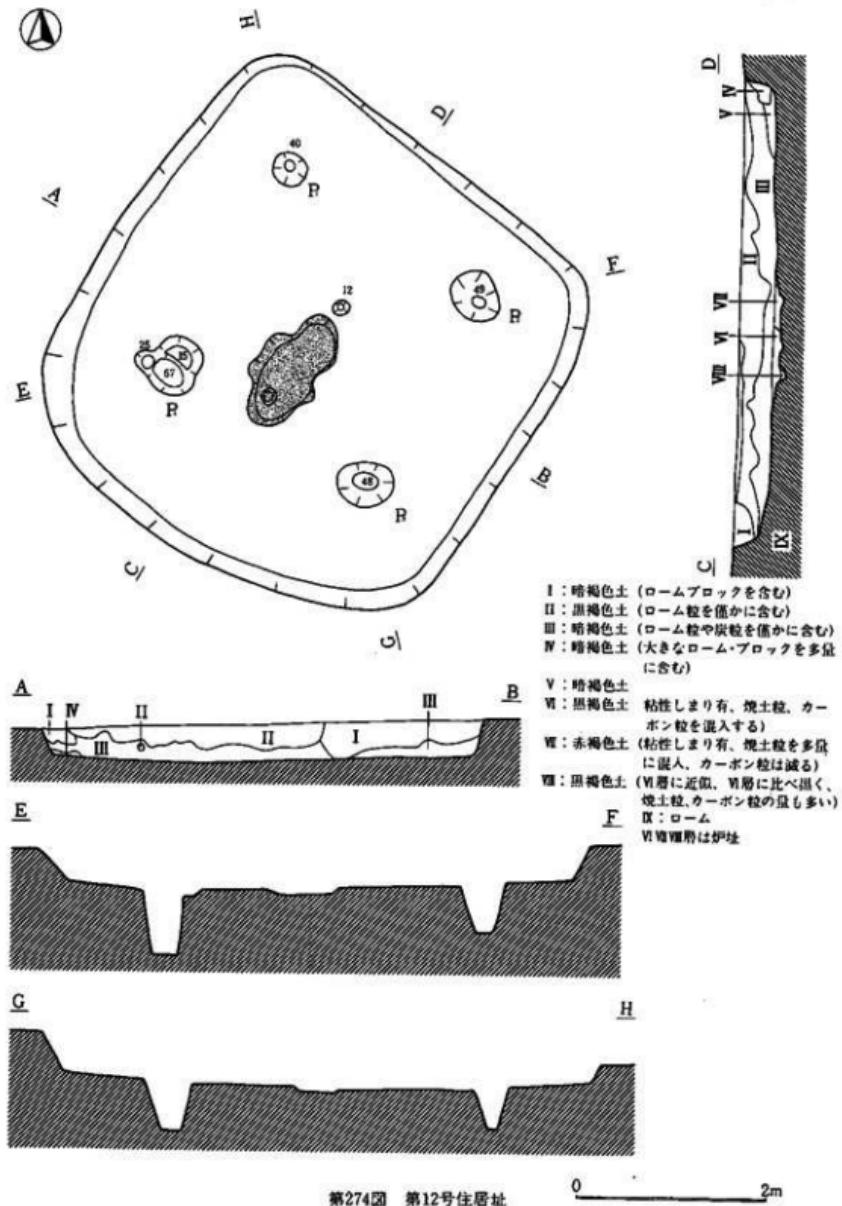
第13号住居址

遺構 B—8・9区で発見され、北側6mで台地崖端となる。南15mに14号住居址が、西側18mに11・12号住居址が位置する。

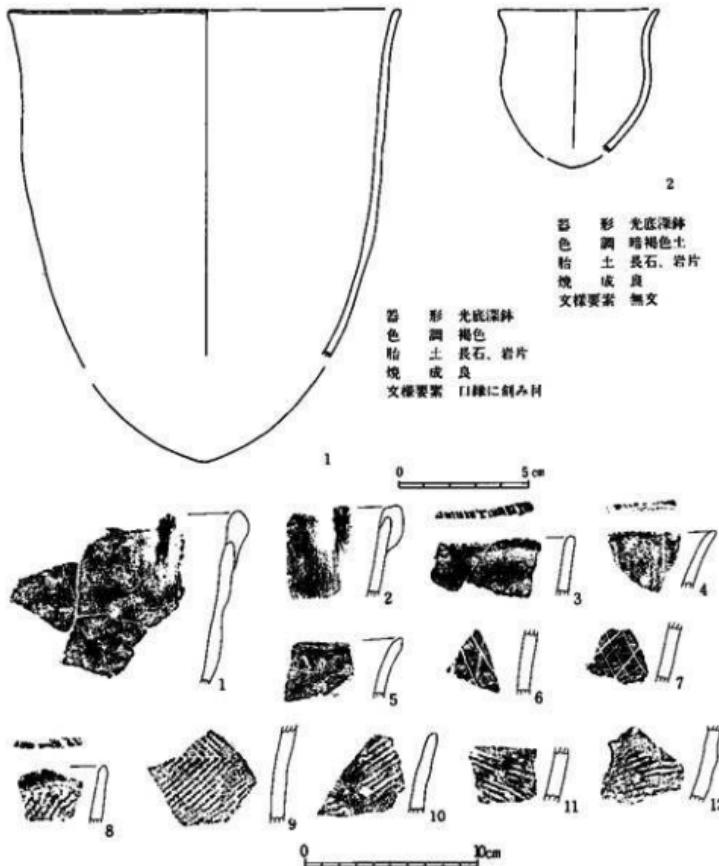
本址は、同心円上に一回建直しがなされているため、旧の住居からその概要を述べる。

旧住居は、新住居により壁が破壊されているため正確な規模は知り得ないが全周している周溝によっておおよそのプラン、規模を知ることができる。それによると東西403cm、南北405cmの円形を呈する。周溝は全周し、幅11～30cmで、概して幅広であり、深さは2～10cmと比較的浅い。柱穴は、P₁(24×22cm深さ48cm)、P₂(29×30cm、深さ60cm)、P₃(30×22cm、深さ46cm)、P₄(30×24cm、深さ58cm)の4主柱が旧住居のものと思われる。北側にあたるP₅、P₆は掘り込みが

第3節 向陽台遺跡



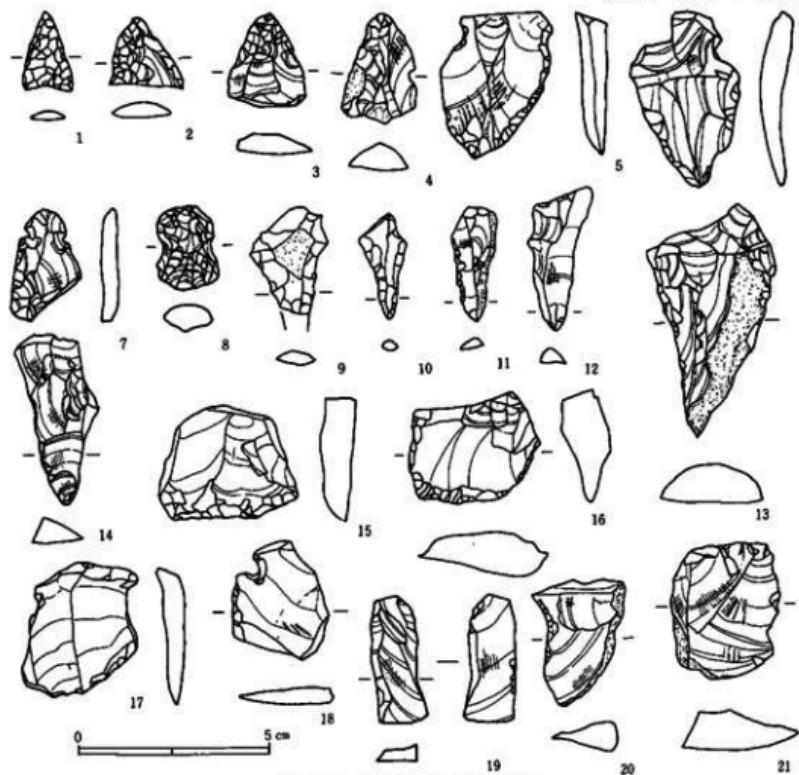
第274図 第12号住居址



第275図 第12号住居址出土土器

土器観察表

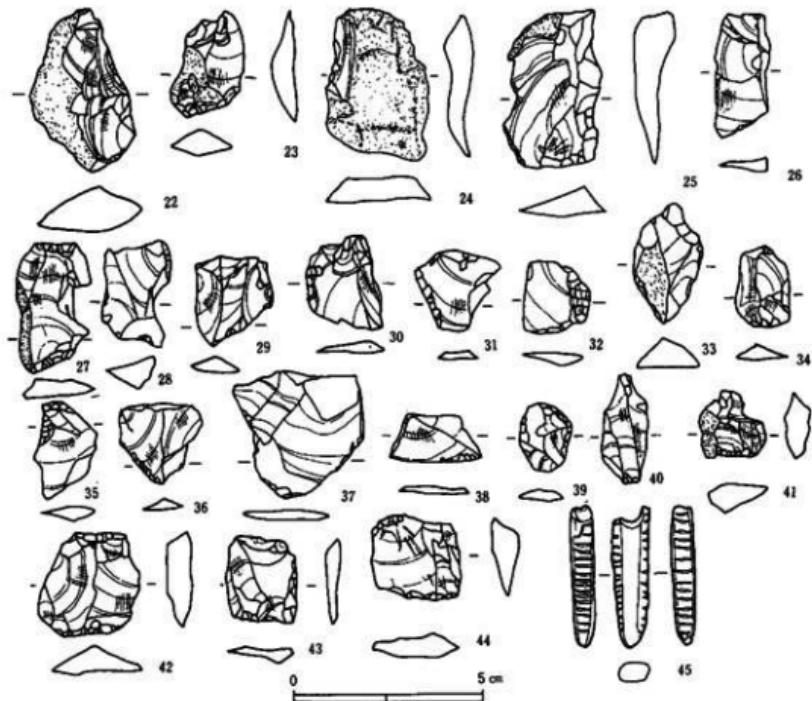
番号	遺構名	器形	部位	文様構成要素	器面調整	外/内	胎土
1	12 住	頸鉢	口縁	貼付	ナデ/指圧/粗	長石・岩片	
2	"	"	"	"	×	×	
3	"	"	"	削目	×/ナデ	×	
4	"	"	"	"	×	×・黒雲母	
5	"	"	"	"	×/板	×・岩片	
6	"	"	口縁	沈線擦子目	粗/ナデ	×	
7	"	"	"	"	ナデ/ナデ	×	
8	"	"	口縁	繩文	/ナデ	×・岩片	
9	"	"	腹	"	/ナデ	×	
10	"	"	口縁	"	/削付	×	
11	"	"	腹	"	/板	石英・長石・岩片	
12	"	"	"	"	/粗	×	



第276図 第12号住居址出土石器(1)

石器観察表

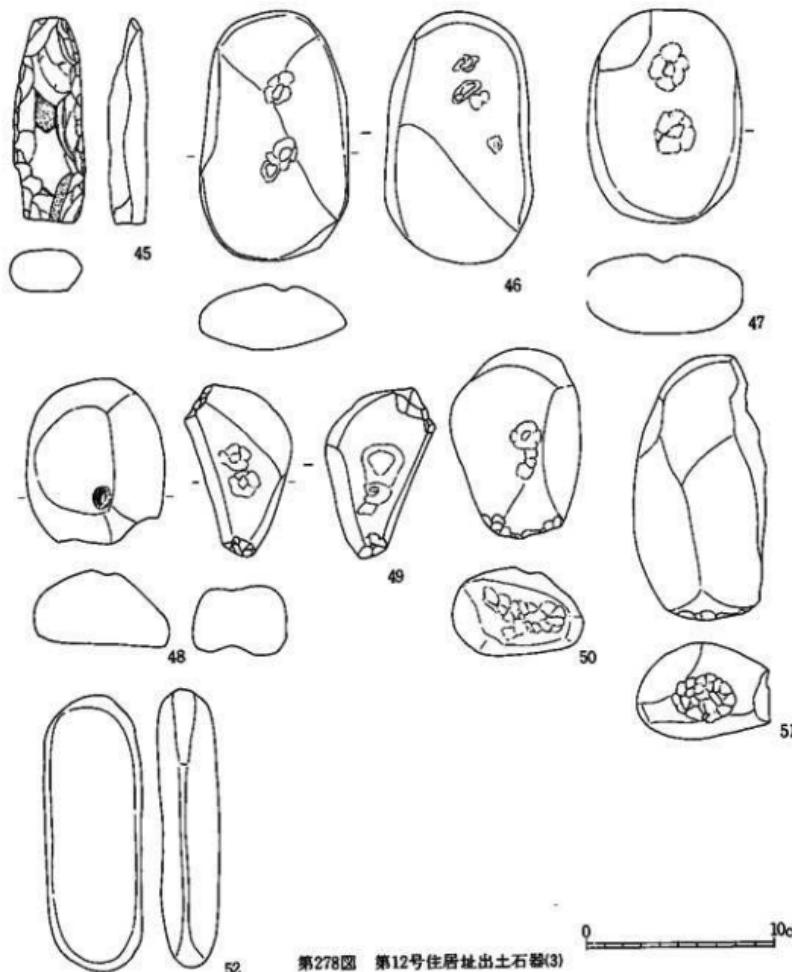
番号	遺構	種別	石質	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	特徴
1	12住	石鏟	黒曜石	21	13	2	0.6	
2	#	尖頭状石器	#	18	19	3	1.1	
3	#	#	#	24	21	5	1.8	
4	#	#	#	28	19	7	3.2	
5	#	石匙	チャート	38	28	8	6.5	
6	#	#	安山岩	45	29	7	7.0	
7	#	#	黒曜石	29	18	5	2.1	
8	#	有孔圓磨	#	22	17	7	2.6	
9	#	石鏟	#	27	22	3	3.3	
10	#	#	チャート	27	12	2	1.1	
11	#	#	黒曜石	30	11	2	1.1	
12	#	#	#	38	17	4	2.0	
13	#	不定形	チャート	60	33	10	13.3	
14	#	#	黒曜石	44	21	6	5.4	
15	#	#	チャート	20	36	9	12.3	
16	#	#	#	29	34	12	11.6	
17	#	#	#	35	30	5	5.7	
18	#	#	#	31	25	4	3.8	
19	#	#	黒曜石	33	14	4	2.3	
20	#	#	#	32	24	8	5.9	
21	#	#	#	46	28	10	7.9	



第2277図 第12号住居址出土石器(2)

石器観察表

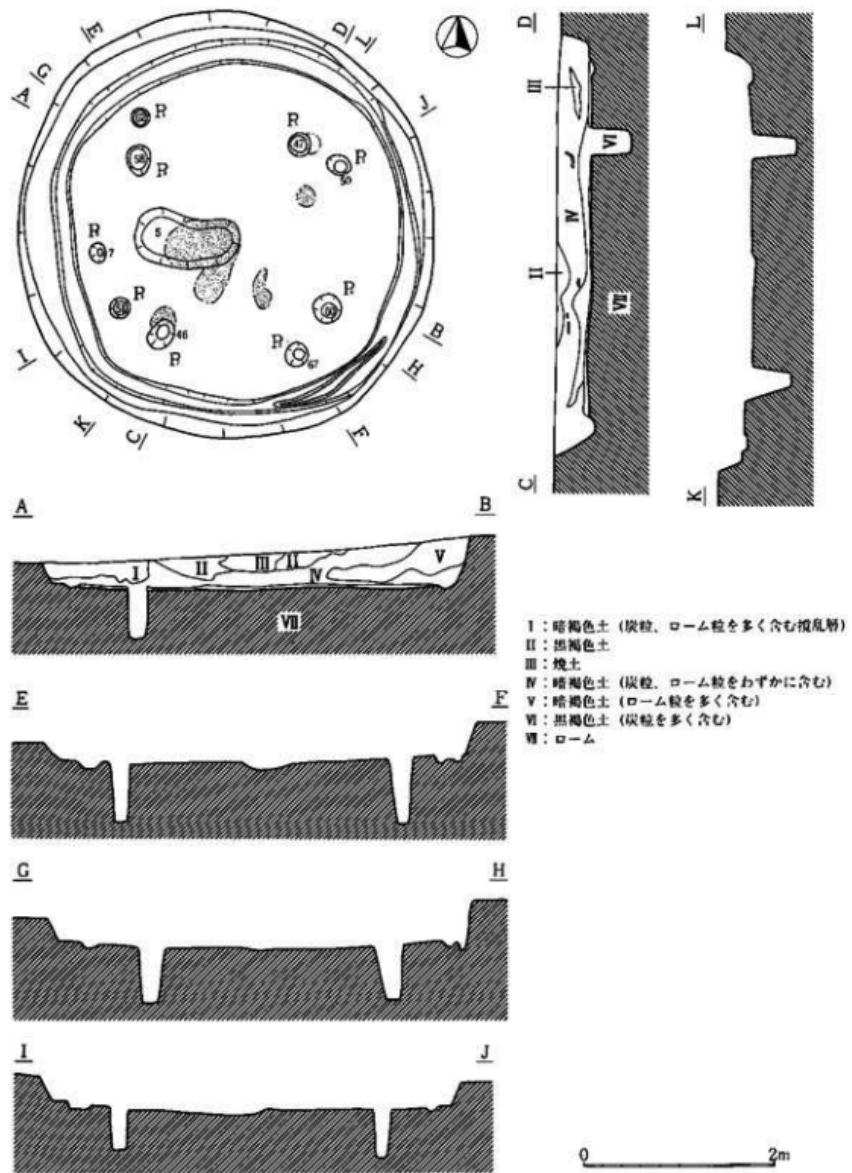
番号	遺構	種別	石質	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	特徴
22	12住	不定形	黒曜石	41	30	12	7.5	
23		"	"	27	18	7	2.2	
24		"	"	37	27	6	7.0	
25		"	"	39	25	5	7.5	
26		"	"	31	13	3	2.0	
27		"	"	33	18	5	3.0	
28		"	"	17	27	7	2.5	
29		"	"	24	20	5	2.4	
30		"	"	24	19	3	1.7	
31		"	"	21	22	2	1.2	
32		"	"	17	18	3	1.1	
33		"	チャート	31	27	8	3.5	
34		"	黒曜石	21	13	3	1.8	
35		"	"	16	24	3	1.1	
36		"	"	21	21	3	1.5	
37		"	チャート	32	37	3	7.8	
38		"	黒曜石	12	24	2	0.6	
39		"	"	3	17	3	0.7	
40		"	"	27	11	2	1.0	
41		"	"	16	12	6	1.5	
42	北、北東、東、	不定形	"	26	26	7	5.0	
43	北、北東、東、	"	"	22	18	3	1.7	
44	北、北東、東、	"	"	21	23	7	3.5	



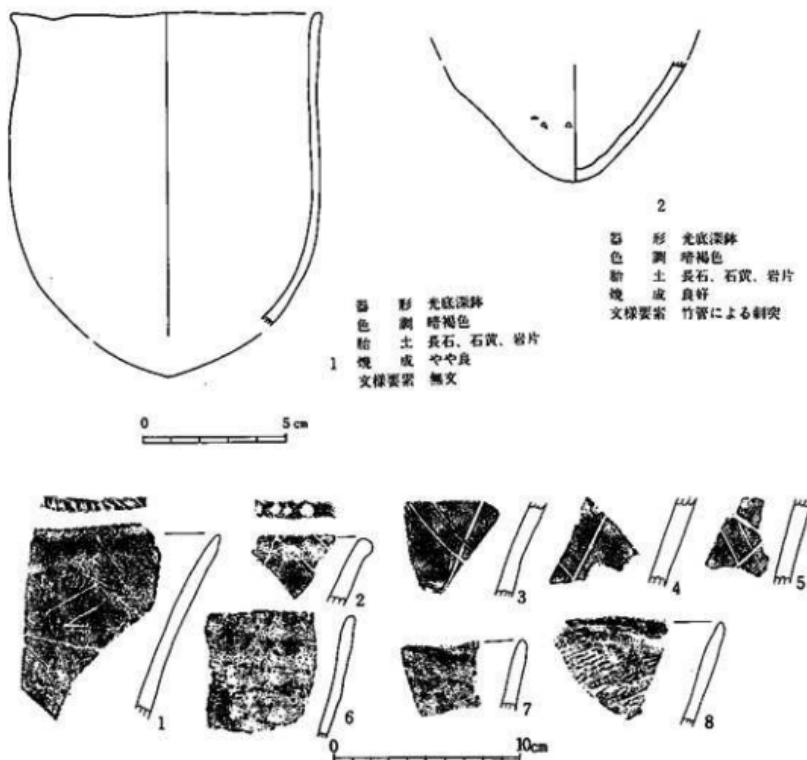
第278図 第12号住居址出土石器(3)

石器観察表

番号	遺構	種別	石質	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	特徴
45	12住	打製石斧	頁岩	106	37	22	115	刃部欠 打痕の集中
46	"	凹石	安山岩	130	78	34	440	
47	"	"	"	101	51	41	540	
48	"	"	"	86	72	38	300	
49	"	"	粗粒砂岩	89	56	36	205	両端打痕 下端打痕
50	"	"	粗粒砂岩	98	69	45	422	"
51	"	敲石	細粒砂岩	138	70	51	680	
52	"	磨石	硬砂岩	144	51	30	350	



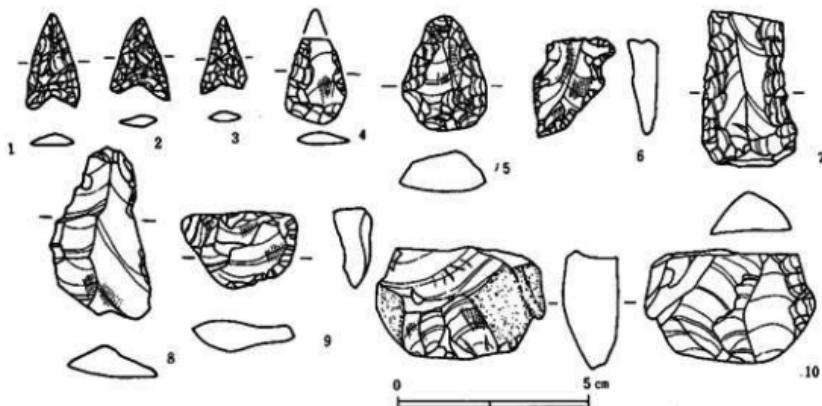
第279図 第13号住居址



第280図 第13号住居址出土土器

土器観察表

番号	造形名	器 形	部 位	文様構成要領	器面調整	外/内	胎 土
1	13 住	深鉢	口縁	沈線・割み	ナデ/ナデ	長石	
2		x	x	沈線折子目・割み	x	x	
3		x	x	x	x	x	岩片
4		x	x	x	x	x	x
5		x	x	x	x	x	x
6		x	x	無 文	擦圧/擦圧	x	石英・長石・黒雲母
7		x	x	x	ナデ/ナデ	x	長石・岩片
8		x	x	擦圧	x	x	長石・石英・繊維



第281図 第13号住居址出土石器

石 器 觀 察 表

番号	造構	種 別	石 質	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	特 徴
1	13住	石 烧	黒 増 石	24	15	3	0.8	
2	"	"	"	21	15	3	0.5	
3	"	"	"	20	12	3	0.4	
4	"	"	"	21	16	4	1.2	
5	"	"	"	30	22	10	5.8	
6	"	石 貼	"	24	21	7	2.7	
7	"	不定形	チャート	48	24	10	13.3	
8	"	"	黒 増 石	44	27	8	7.5	
9	"	"	"	20	30	8	5.0	
10	"	石 棱	チャート	28	44	15	21.0	

垂直であるのに対し、南側のP₁、P₂は傾斜のある掘り込みであった。炉は、新住居の炉と重複している深さ4cmの落ち込みがこれにあたると推定され、P₁、P₂の中間にその一部がかかっている。焼土は認められない。

新住居は、旧住居の同心円上に拡張して構築されている。覆土は、黒褐色土が中央部に、その周囲から壁まで暗褐色土が入り込み、床上には炭粒を多く含んだ黒褐色土が堆積している。床面は旧住居の床上に2~5cmの貼り床をして造られている。東西445cm、南北436cmの規模をもつ円形プランである。壁高は、東壁37cm、西壁23cm、南壁25cm、北壁20cmで、掘り込みは垂直できれいになされている。周溝は、旧住居のものを使用していると思われる。柱は、4本で、P₁(25×21cm深さ50cm)、P₂(22×24cm、深さ68cm)、P₃(20×20cm、深さ53cm)、P₄(20×20cm、深さ62cm)で、旧住居の柱穴に比較し径が小さく、深さが深い。新住居の柱穴は、旧住居の柱穴を50cmほど右回転して掘り込まれている。炉は地床炉で、住居中央にあり、旧住居のものを拡張して用いている。焼土が10cmの厚さで堆積している。

新、旧とも遺存状態の良い住居址である。

時期は、縄文前期中越期にあたる。

遺物 土器、石器が得られているが、4軒検出された中越期の住居中、最も出土量が少ない。

土器 図1は、唯一形態をうかがうことができるもので、口径21.8cm、推定器高25.2cmで、尖底深鉢形を呈する。文様はない。外面は火熱により部分的に黒変し、ボロボロであり、内面下半は黒変し、ボロボロしている。2は、尖底部の破片で、火熱により赤褐色を呈する。280図1は口縁部破片で、口唇部に刻みを施し、頸部に細沈線による格子目のくずれと思われる平行線がみられる。2は口唇部を肥厚させた口縁部で、口唇部には円形刺突、頸部に格子目文を施す。3~5は、格子目文を施した頸部破片。6・7は無文の口縁部で、6は薄手堅緻な焼成である。8は繊維を含んだ縄文施文土器。

石器は、石鎌5、石匙1、不定形3、石核1の計10点である。石鎌1~3は、基部への抉り込みの浅いもの、4・5は平基ないし凸基のもの。石匙6は、小形錐形。不定形石器7は、両側縁に丁寧な加工を施したもの、8は加工を施さず縁を刃部としたものである。

第14号住居址

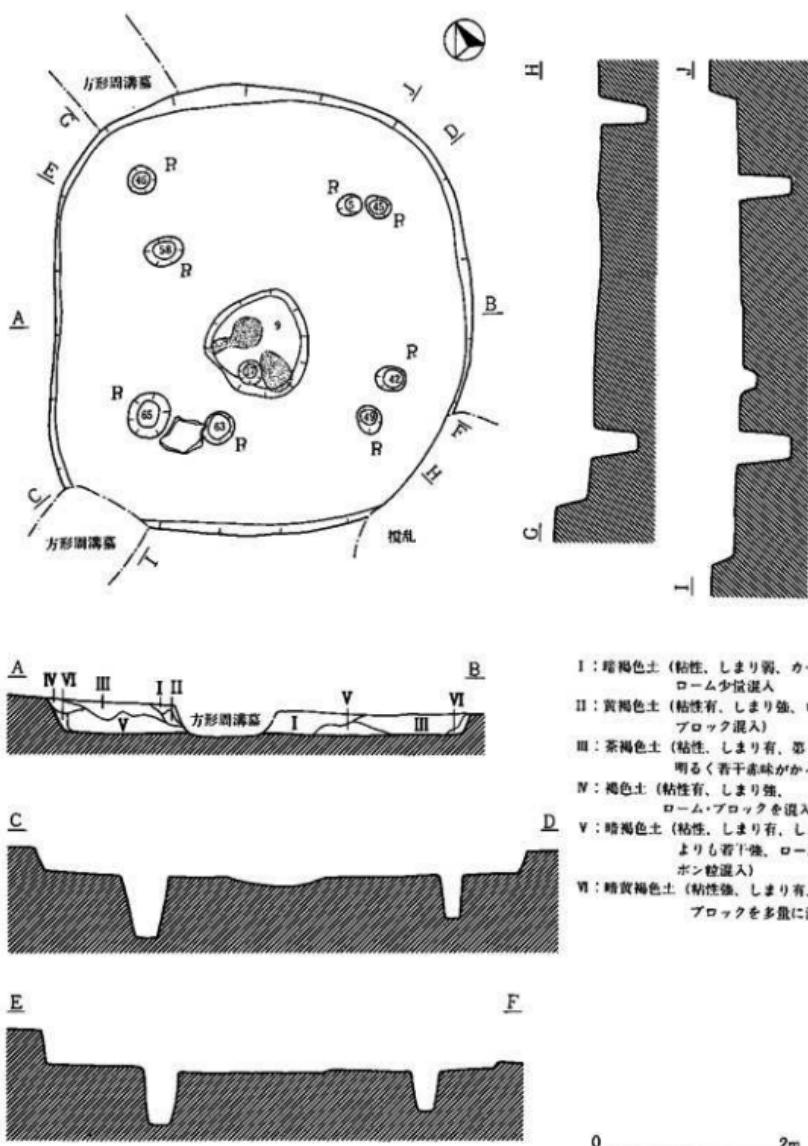
遺構 F、G-10・11区にあり、調査区域の最東端にある。方形周溝墓によって西側が切られている。13号住居址は北側15m、11、12号住居址は西側25mにそれぞれ位置している。

一度建て直しが行われていることと方形周溝墓の溝によって切られていること、また擾乱が入り込んでいることなどから、コーナーに当たると思われる部分が破壊されており、プランを明らかにすることを困難としている。残存している壁の形態からみると、方形気味の円形とでも言う形態で、方形から円形への変化の過程を示しているように見受けられる。東西437cm、南北468cmの規模を有する。壁の掘り込みは垂直にきれいになされ、壁高は、東壁27cm、西壁35cm、南壁29cm、北壁31cmである。床は平坦であるが、余り堅くない。柱穴は、P₁(26×24cm、深さ44cm)、P₂(31×24cm、深さ50cm)、P₃(50×43cm、深さ65cm)、P₄(29×29cm、深さ47cm)の4本が新の、P₅(25×21cm、深さ56cm)、P₆(31×26cm、深さ43cm)、P₇(36×30cm、深さ63cm)、P₈(42×26cm、深さ60cm)の4本が旧住居のそれぞれの主柱となると思われる。炉は、住居址中央にある地床炉で、110×110cm、深さ10cmの規模をもち、内部に焼土の散布が認められる。炉の痕跡は他には見当たらないので新・旧両住居とも同一の炉を使用したものと考えられる。柱穴P₁~P₄とP₅~P₈の前後関係は明確にできなかった。

本址の時期は、縄文前期中越期である。

遺物 遺物は、主として覆土下層から出土し、住居全面にわたるが、土器の大形破片は北東側に多い。

土器は、284図1・2、285図5のはば全形をうかがい知ることができる略完形品と、3・4の大形破形、そして285図の少量の破片とが得られた。1・2・5はともに底部を欠くが、尖底深鉢形を呈すると思われる。1は口径35.8、推定器高31.4cm、2は口径31.6、推定器高29.4cm、5は口径32.6、推定器高34.0cmを測る大形品で、ともに平縁口縁、口唇部に刻みを施している。体部へ



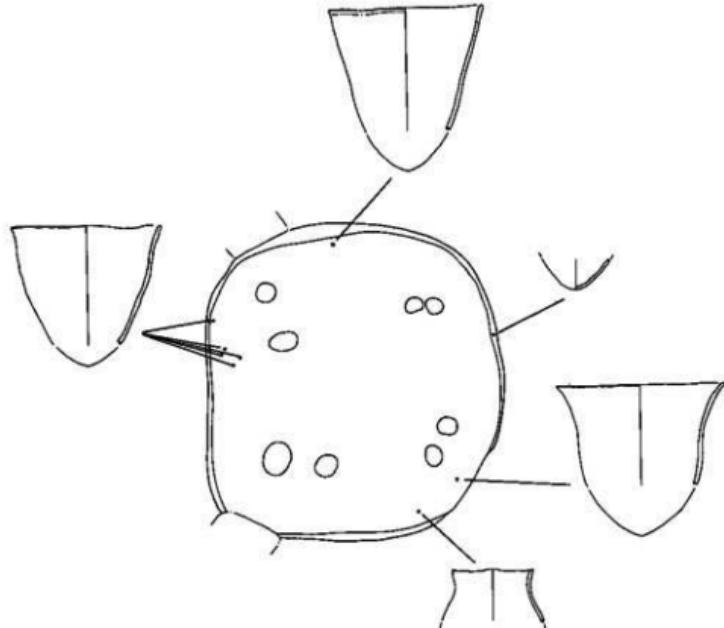
第282図 第14号住居址

第3節 向陽台遺跡

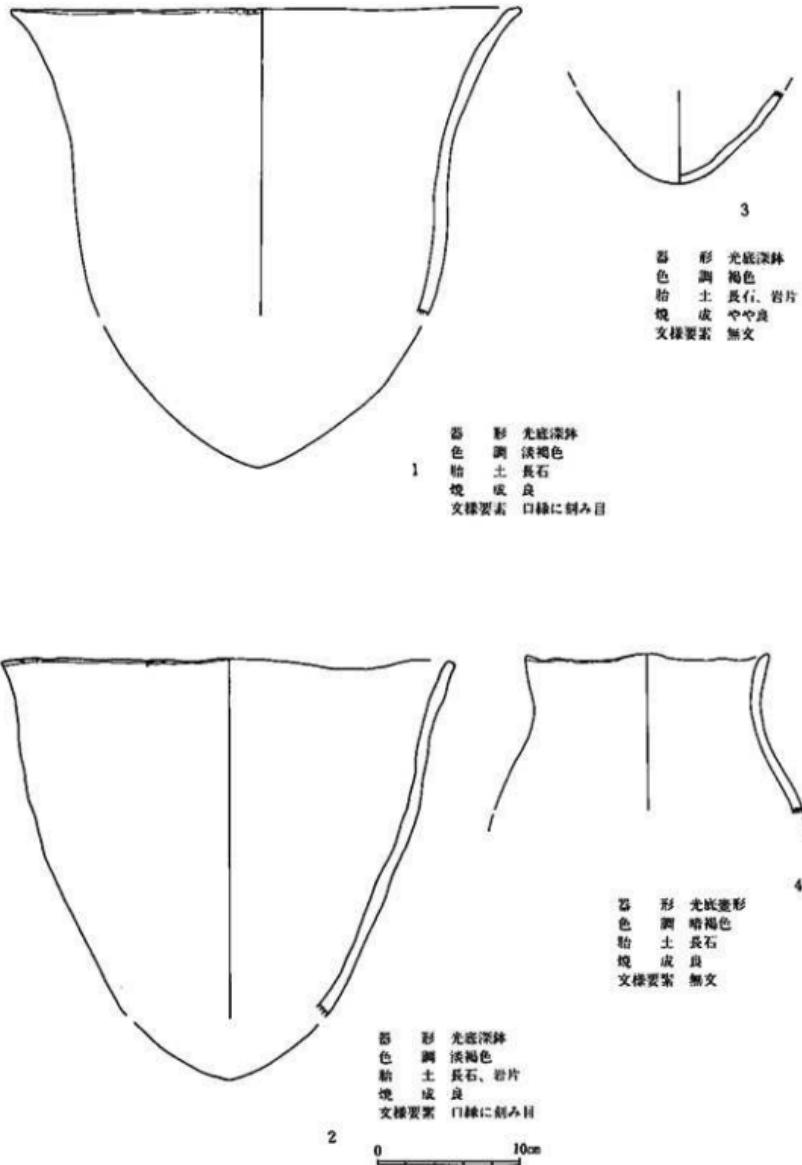
の施文はない。淡褐色を呈し焼成は良く、整形によるナデ、指圧痕が残されている。3は、尖底部分の破片で、薄手に整形され、内面は黒変している。4は、頸部がくびれる整形を呈するもので、胴下半部を欠いている。口縁部は整形時の起伏が著しく平滑でない。底部は尖底を呈するものと推定される。焼成は良く、胎土もしっかりしている。図1は、細沈線による格子目文施文の頭部破片、2・3は無文の口縁部破片、4・5は繊維を含む繩文施文の土器片である。

本址出土の土器は、以上のように平縁口縁で無文の尖底深鉢形が主体を占める。

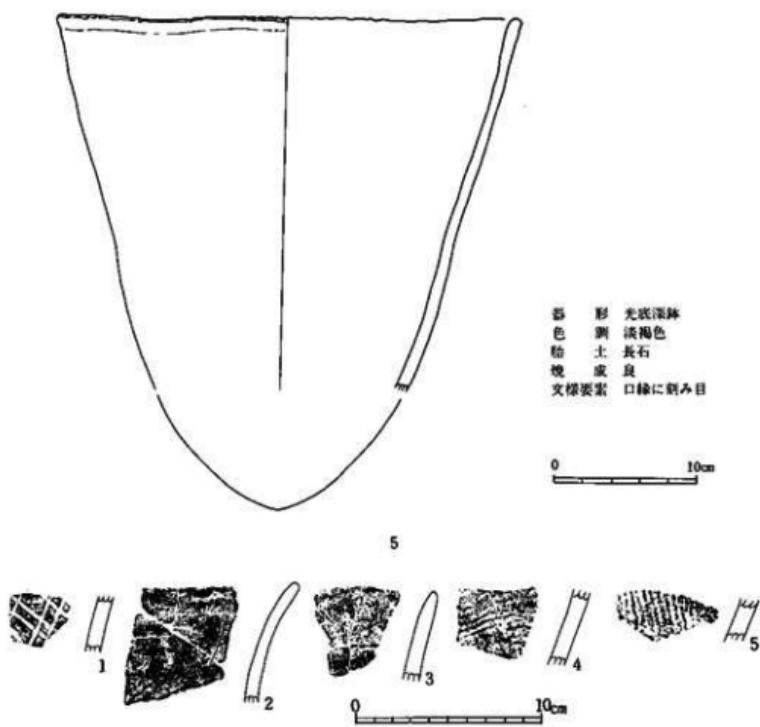
石器は、石鎌26、尖頭状石器4、石匙4、不定形石器22、凹石3、敲石1、石皿1、磨石1の計62点出土した。石鎌1~9は、基部への抉りの浅いもの、10~19はやや深いもの、20~23は深く抉り込まれたもの。概して長身のものが多い。26は、部厚く、作りも粗雑で、両側縁に抉りを入れた特異な形状を呈し、通常の用途とは異なった性格を有するものと考えられる。尖頭状石器27~30は、尖頭部を作出した石器で、重量のある刺突を目的としたもの。石匙31~33は錐形、34は横形で粗雑な作りである。不定形石器35~38は、剥片の周縁に丁寧な二次調整を施し、刃部を作出したスクレイパーである。38~40は、鋭角な尖頭部を有する。41~56は、剥片に二次調整を



第283図 第14号住居址土器出土状態



第284図 第14号住居址出土土器(1)

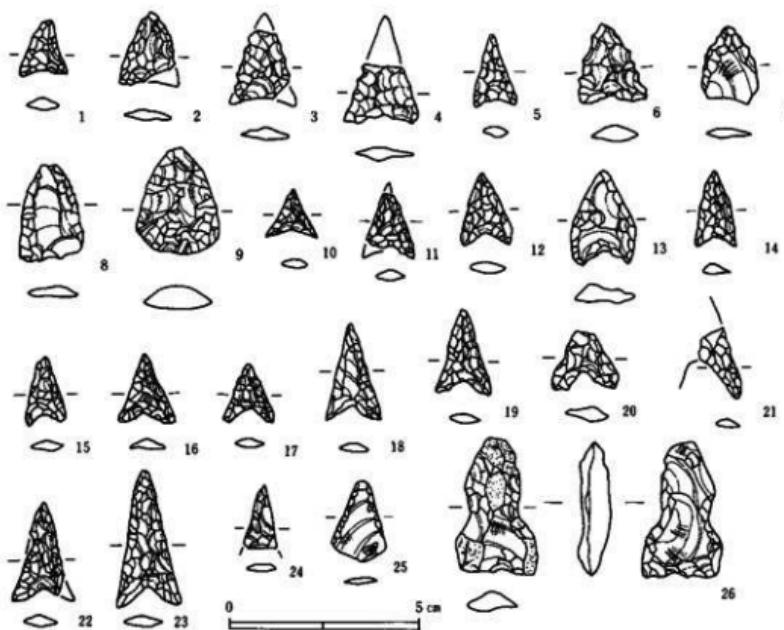


第285図 第14号住居址出土土器(2)

土器観察表

番号	遺構名	器 形	部 位	文様構成要素	器面調性	外/内	胎 土
1	1 住	深鉢	頭	波線格子目	ナデ/ナデ		長石
2	"	"	口縁	無文	"		"・岩片
3	"	"	"	"	"		"
4	"	"	頭	織文	粗	/ナデ	織維・長石・石英
5	"	"	"	"	/ナデ		"

加えずその鋭利な縁刃を刀部として用いたもので、使用痕が認められるもの。42~44はピーエスエスキューである。凹石57・58は打痕の集中による小さな凹みが残されたもの。敲石59は、両先端に顕著な打痕を有し、両面にも打痕集中部が認められる。石皿61は、縁が作り出されない平板なもので、磨耗痕は顕著でない。磨石62は、表裏両面に研磨痕が認められる。

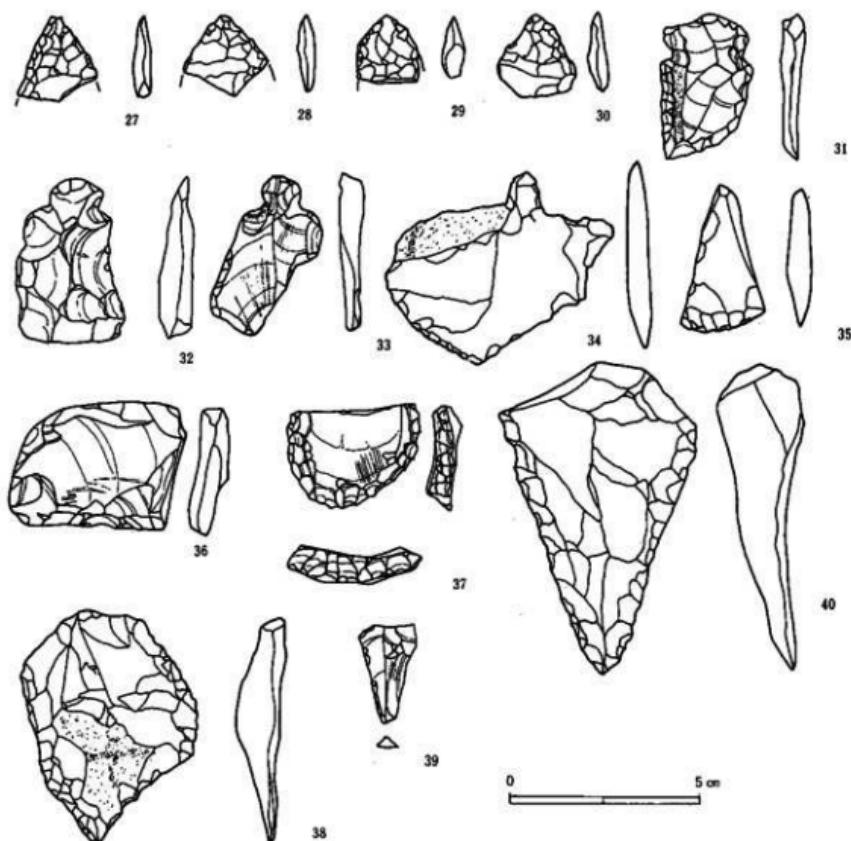


第286図 第14号住居址出土石器(1)

石器類表

番号	遺構	種別	石質	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	特徴
1	14住	石頭	黒曜石	15	13	3	5	
2	〃	〃	チャート	19	15	2	8	
3	〃	〃	黒曜石	13	14	3	7	
4	〃	〃	〃	15	16	3	10	
5	〃	〃	〃	19	11	2	6	
6	〃	〃	チャート	20	18	4	13	
7	〃	〃	黒曜石	19	14	2	7	
8	〃	〃	チャート	25	17	2	18	
9	〃	〃	黒曜石	28	21	6	4	
10	〃	〃	〃	12	13	2	0.3	
11	〃	〃	〃	19	13	2	0.5	
12	〃	〃	〃	19	14	3	0.7	
13	〃	〃	チャート	24	17	5	1.9	
14	〃	〃	黒曜石	20	10	3	0.4	
15	〃	〃	〃	17	10	2	0.4	
16	〃	〃	〃	18	15	2	0.5	
17	〃	〃	〃	15	13	2	0.4	
18	〃	〃	チャート	25	14	2	0.7	
19	〃	〃	黒曜石	21	14	2	0.6	
20	〃	〃	〃	15	17	4	0.6	
21	〃	〃	〃	23	11	1	0.4	
22	〃	〃	〃	25	16	0.3	0.8	
23	〃	〃	〃	36	17	2	13	
24	〃	〃	〃	26	13	1	0.5	
25	〃	〃	〃	21	14	1	0.5	
26	〃	〃	〃	35	21	5	4.8	

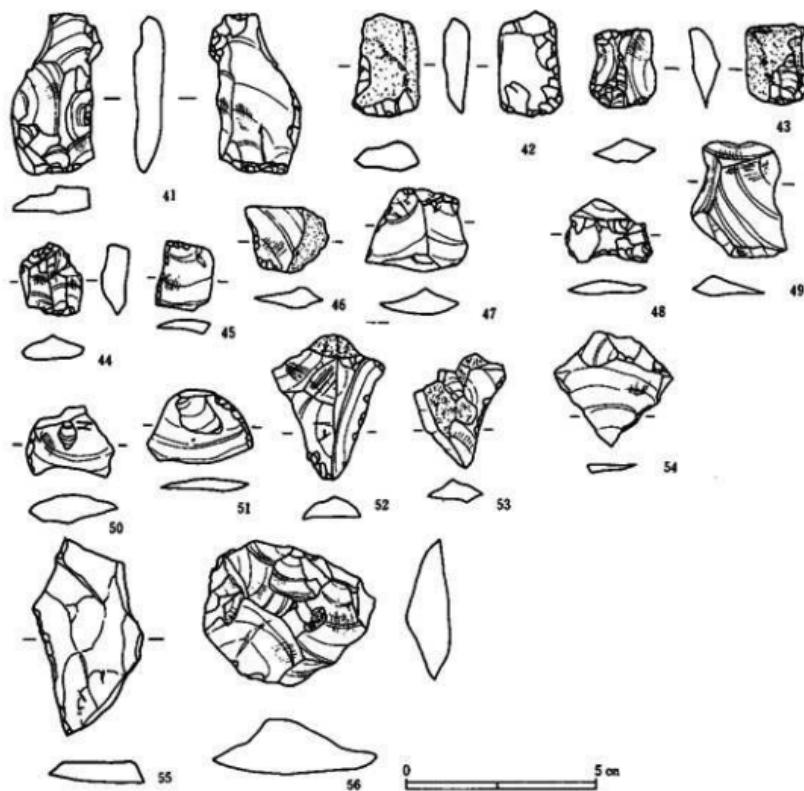
第3節 向陽台遺跡



第287図 第14号住居址出土石器(2)

石器観察表

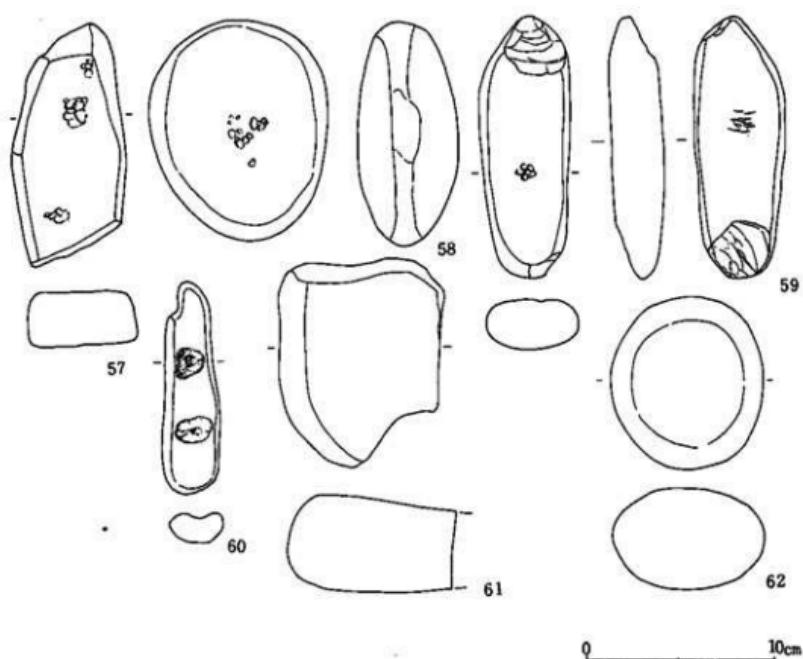
番号	造形	種別	石質	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	特徴
27	14住	尖頭状石器	黒曜石	23	22	4	1.8	
28	"	"	"	21	22	5	1.3	
29	"	"	"	17	16	6	1.6	
30	"	"	"	21	20	5	1.6	
31	"	石器	チャート	37	23	5	6.6	
32	"	"	"	43	37	9	8.3	
33	"	"	黒曜石	40	30	6	4	
34	"	"	"	51	40	11	21	
35	"	不定形	チャート	37	22	7	58	
36	"	"	硅灰石	34	45	7	14.5	
37	"	"	チャート	26	32	8	10.1	
38	"	"	黒曜石	61	46	11	24.6	
39	"	"	"	25	24	2	1.5	
40	"	"	チャート	61	51	22	53.6	



第288図 第14号住居址出土土器(3)

石 器 觀 察 表

番号	遺構	種別	石質	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	特徴
41	14住	不定形	黒曜石	41	21	7		
42	"	"	"	26	16	6	3.6	
43	"	"	"	19	17	6	2.5	
44	"	"	"	17	16	6		
45	"	"	"	17	14	3	0.9	
46	"	"	"	22	16	6	1.8	
47	"	"	"	21	26	7	5.3	
48	"	"	"	16	12	3	1.3	
49	"	"	"	20	23	5	2.5	
50	"	"	"	17	22	6	2.1	
51	"	"	"	19	27	2	1.6	
52	"	"	"	48	28	6	6.7	
53	"	"	"	30	24	5	3.8	
54	"	"	"	30	31	2	3.4	
55	"	"	チャート	51	28	6	10.4	
56	"	"	黒曜石	45	37	12	18.5	



第289図 第14号住居址出土土器(4)

石器観察表

番号	遺構	種別	石質	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	特徴
57	14住	凹石	粗粒砂岩	128	60	28	335	打痕集中
58	"	"	"	115	54	53	700	"
59	"	敲石	頁岩	136	48	26	260	" 凹石を用意
60	"	凹石	硬砂岩	111	30	15	86	
61	"	石皿	中粒砂岩	108	84	49	710	
62	"	磨石	燧灰岩	91	80	53	405	

第三章 調査 遺跡

(4) 縄文時代小竪穴

第1号小竪穴

II地区、F—6区で検出され、II地区の中央部やや東寄りに位置する。東端部と西端部を耕作により搅乱されている。覆土は、ローム粒を混入する暗褐色土が占める。東西116cm、南北97cmで、不整形な横円形を呈する。底面は平坦になっているが、壁は垂直部分と緩やかな部分が不規則に掘り込まれている。このため底面形は一定していない。深さは18cmを計る。

第2号小竪穴

II地区、E—7区にあり、II地区中央部やや北東寄りに位置する。東側に4.5m隔てて8号住居址、北側2.2m隔てて3号小竪穴がある。東部分に耕作による搅乱が入る。

覆土は、上層に黒褐色土、下層に黒色土が堆積し、ローム土に深く掘り込まれている。平面形は、東西88cm、南北72cmの横円形をなす。壁は、垂直ないし一部袋状に掘り込まれ、底部は、平坦で堅くなっている。深さは35cmを計る。

第3号小竪穴

II地区、D—6区にある。調査区中央部北東寄りで検出された小竪穴群中にあり、南側2.2mに2号小竪穴、北側1.4mに4号小竪穴が隣接する。西側の一部に耕作による搅乱がみられる。

覆土は、ローム粒をわずかに混入する黒色土を主体として、ロームブロックを混入する黒褐色土ないし暗褐色土が、黒色土中に壁面から薄く楔形に堆積している。南北83cm、東西75cmの横円形を呈する。壁は、ローム土に鋭く垂直に掘り込まれ、底面は、平坦で堅くなっている。掘り込みは深く、底部まで49cmを計る。

第4号小竪穴

II地区、D—6区で検出された。調査区東半北寄りに位置し、南側1.4mに3号小竪穴、北東側1.2mに5号小竪穴、西側3.7mに6号小竪穴が隣接する。

覆土は、上層から黒色土、黒褐色土、黒色土が堆積し、上部東側にローム粒を混入する暗褐色土がみられる。平面形は、南北102cm、東西97cmの横円形を呈する。掘り込みは、深い袋状になってしまっており、深さ46cmを計る。底面は南北113cm、東西108cmの横円形を呈し、平坦で堅く踏み固められた状態を示している。

遺物は、覆土中から図1、2の土器片が出土している。縄文中期洛沢式の胴部破片である。

第5号小竪穴

II地区、C—6区にあり、調査区東半の北寄りに位置する。南側1.2mに4号小竪穴が隣接している。

覆土は、炭粒を混入する黒褐色土が主体をなし、東側壁寄りに暗褐色土が堆積する。規模は、

100×73cmで、楕円形を呈する。掘り込みは、深さ11cmの浅いタライ状をなし、ローム土層になされている。壁は緩やかに立ち上がっている。

第6号小竪穴

II地区、D—5区で検出された。調査区中央部やや北寄りに位置する。東側3.7mに4号小竪穴、西側1.3mに12号小竪穴が隣接する。

覆土は、ローム粒を混入する黒褐色土が主体をなし、これを取り囲む形でロームブロックを混入する暗褐色が壁との間に存在する。南北120cm、東西60cmの楕円形を呈する。掘り込みはローム土になされ、断面形は擂鉢状をなす。深さは33cmを計る。人か動物かはっきりしないが歯が覆土中より出土している。

第7号小竪穴

II地区、C—3区にあり、調査区の中央部北寄りで検出された。他の遺構からは、やや離れた位置にあり、最も近くに位置する12号小竪穴と8mを隔てる。

本址は、中央部やや西寄りを南北に耕作による擾乱が溝状に入っている。覆土は、大別して上下2層から成る。上層西側に暗褐色土、上層東側にロームブロックを多量に混入する暗褐色土があり、下層は少量のローム粒を混入する暗褐色土となる。底部西壁寄りには、黒色土の堆積がみられる。115×113cmの円形でローム土に掘り込まれている。壁は垂直で、底部は平坦、堅緻な状態を示している。深さ28cmを計るタライ状の小竪穴である。

遺物は、南壁に接するように横転して出土した295匁の略完形土器がある。胴部上半の破損が著しいが、器高26.7cm、口径19.7cmの深鉢形で、胴上半に縄文が施文されている。赤褐色を呈し、薄手で、焼成は良い。底部に網代痕が良く残されている。

第9号小竪穴

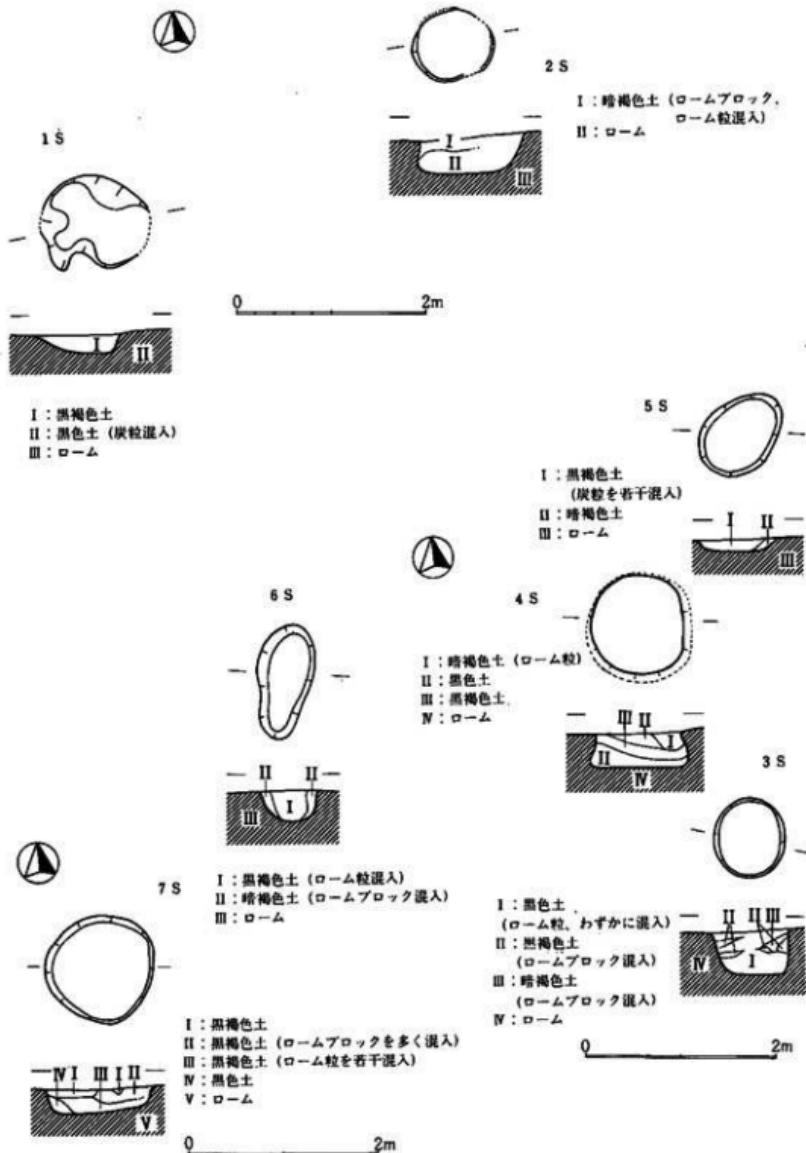
II地区、G—6区にあり、調査区の中央部南東寄りに位置する。西側に10号小竪穴、北側に11号小竪穴が隣接し、南側に3mを隔てて4号住居址があ。

覆土は、ロームブロックを混入した黒褐色土の一層により構成されている。南北65cm、東西50cmの平面楕円形を呈する。掘り込みは、緩やかに傾斜する擂鉢状をなし、深さ19cmを計る。

第10号小竪穴

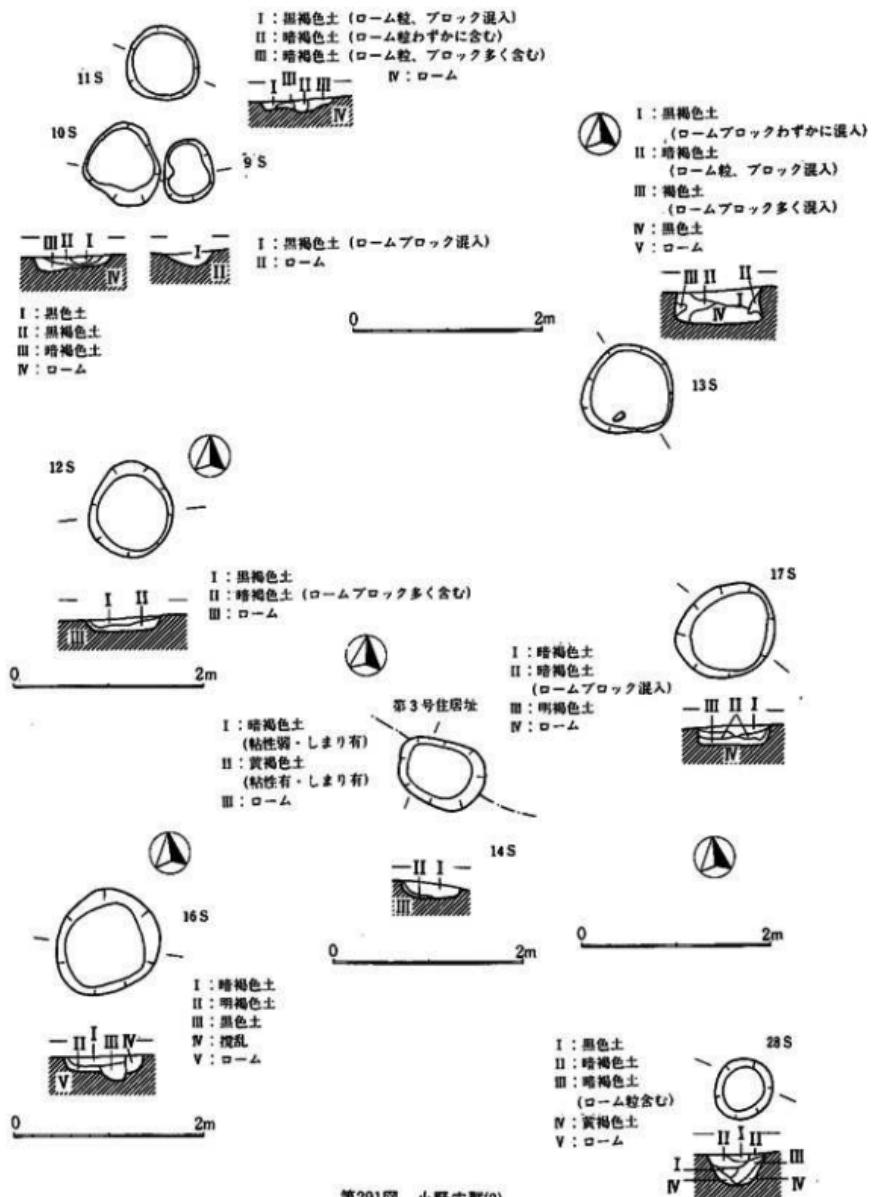
II地区、G—6区にあり、調査区の中央部南東寄りに位置する。東側に9号小竪穴、北側に11号小竪穴がそれぞれ隣接し合い、南東3.2mに弥生時代の4号住居址、西側4.8mに縄文早期の3号住居址が存在する。

覆土は、上層から黒色土、黒褐色土、暗褐色土が順次レンズ状に堆積している。平面形は、南北87cm、東西80cmの不整形な円形を呈し、ローム土に掘り込まれている。壁は、東、北、西側で

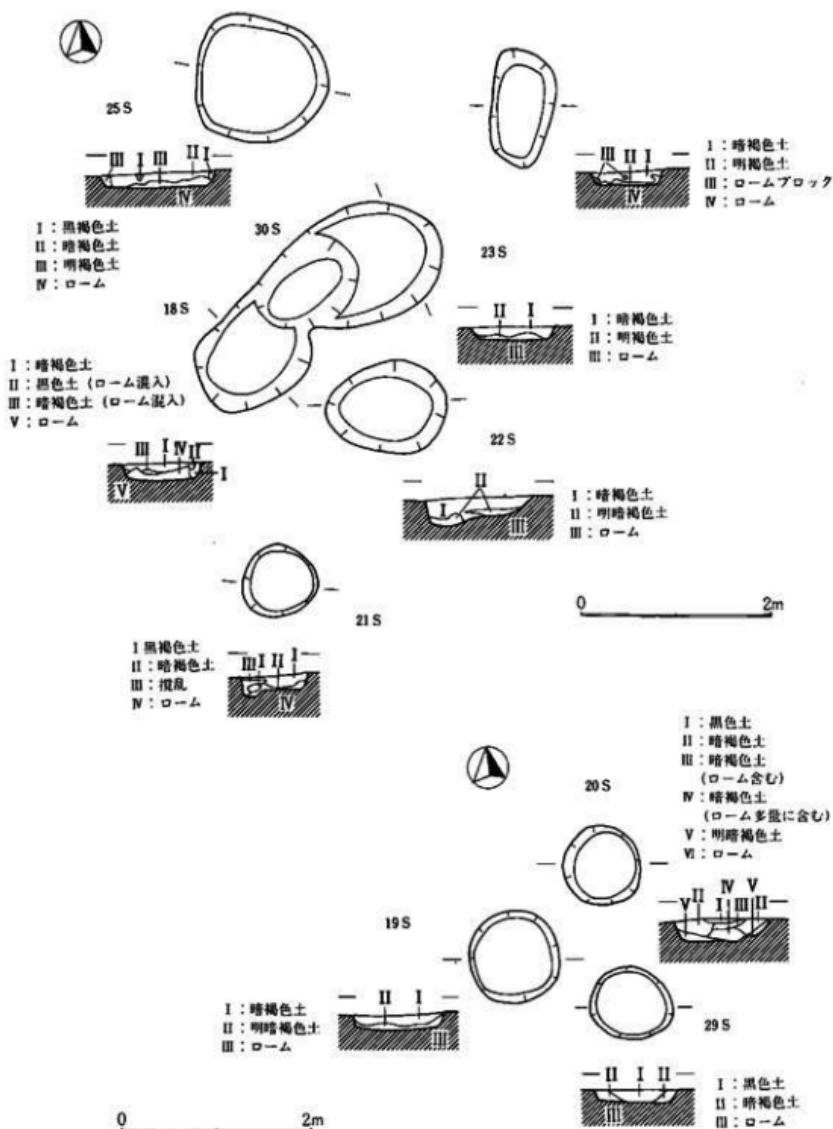


第290図 小型穴群(1)

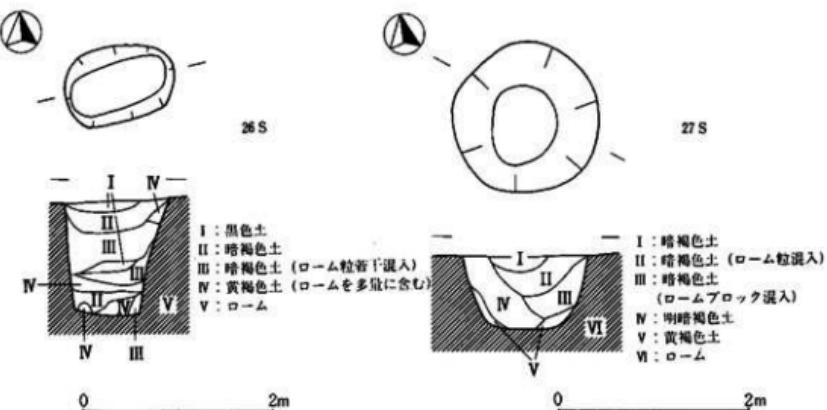
第3節 向陽台遺跡



第291図 小塙穴群(2)



第292図 小窯穴群(3)



第293図 小豈穴群(4)

垂直に掘り込まれ、南側でやや緩やかになっている。底部は平坦であるが堅くなく、南に向かって若干傾斜がみられる。覆土中から 図3・4の2片の土器片が出土している。3は、押型文土器に伴った無文土器に類似し、貫通していないが穿孔が施されている。4は縄文中期中葉に属するものである。

第11号小豈穴

II地区、G—6区で検出された。調査区の中央部南東寄りにあり、南側で9号小豈穴および10号小豈穴とそれぞれ隣接し合っている。

覆土は、西側に黒褐色土、東側に暗褐色土が堆積し、いずれもローム粒の混入がみられる。直形77cmの平面円形を呈する。壁は、ほぼ垂直にローム土へ掘り込まれているが、底面最深部までの深さ12cmと比較的浅い。底部は堅くなく、起伏をもつ。

第12号小豈穴

II地区、D、E—3、4区にあり、調査区中央部のやや北寄りに位置する。東側1.3mに6号小豈穴が隣接している。本址の東端部と西端部には、耕作による擾乱がみられる。

覆土は、上層に黒褐色土、下層にロームブロックを多量に含む暗褐色土が堆積する。平面形は、南北103cm、東西88cmの橢円形を呈する。ローム土に若干の傾斜をもって掘り込まれ、深さ18cmを計る。底部は平坦である。

第13章 調査遺跡

第13号小竪穴

II地区、G、H-7区で検出された。調査区の東半部南東寄りに位置し、今回調査された小竪穴の中で最も東寄りにある。南西側に4号住居址、東側に6号住居址が隣接している。

覆土は、上層にロームブロックを僅かに含む黒褐色土、下層に黒色土が堆積し、壁面から中心部へ楔形にロームブロックを混入する暗褐色土ないし褐色土が入り込んでいる。平面形は、直径97cmの円形を呈する。壁は、垂直に観るローム土に掘り込まれ、深さ41cmを計る。断面タライ状をなし、底面は平坦で堅い状態を示している。覆土中から 図13の石器が1点出土している。先端に磨耗痕が著しく残されている。打製石斧というよりスクレイバー的機能を有していたものと思う。

第14号小竪穴

II地区、J-3区にあり、調査区の中央部南側に位置する。北半部を3号住居址と重複し、南側に2号住居址が隣接する。

覆土は、黒褐色土が主体をなし、底部南側から壁面にかけて粘性の強い黄褐色がみられる。平面形は、93×68cmの楕円形を呈する。壁は緩やかな傾斜でローム土に掘り込まれ、底部はやや凹状をなし、断面タライ状を示している。

第15号小竪穴

II地区、K-3区にあり、調査区の中央部南端に位置する。縄文早期の2号住居址と重複する。

覆土は、上層に住居址覆土よりやや暗い暗褐色土、下層にローム粒を多量に混入する褐色土が堆積する。平面形は、113×82cmの楕円形を呈する。掘り込みは、ローム土に垂直になされ、断面タライ状をなす。床面は堅くはないが、平坦な状態を示している。覆土は住居址覆土とやや異なるものの、2号住居址に付属する設置の可能性を残す。

第16号小竪穴

II地区、G-102区で検出された。調査区内では、西半中央部に位置し、南側に小竪穴群が展開している。本址東部分に擾乱がみられる。

覆土は、上層に暗褐色土、下層に明褐色土が堆積し、中央部分に黒色土がみられる。平面形は117×116cmのほぼ円形を呈する。ローム土に垂直に掘り込まれ、断面タライ状をなす。底部は軟弱で、やや起伏をもっている。

第17号小竪穴

II地区、J、K-102、103区で検出された。調査区西半の南寄りに位置する。南側3.9mに28号小竪穴、北側に5.1mに26号小竪穴、東側6.4mに1号住居址がある。

覆土は、上層から暗褐色土、ロームブロック混入の暗褐色土、明暗褐色土が堆積する。平面楕

円形を呈し、南北108cm、東西96cmの規模をもつ。壁は垂直にローム土を掘り込み、底面は平坦になっている。深さ18cmで断面タライ状をなす。

第18号小竪穴

II地区、H-101区にあり、調査区西半の南寄りに位置する。北側部分で30号小竪穴と重複し、21、22、23、25号小竪穴に隣接する。

覆土は、上層に暗褐色土、下層に明暗褐色土が堆積し、2層間にロームブロックを混入する暗褐色土がみられる。重複のため規模は明確ではないが、短径103cm、長径約130cmの楕円形を呈すると思われる。掘り込みはローム土に垂直になされ、深さは17cmを計る。底部は平坦な状態を示し、断面タライ状をなす。覆土中から、縄文中期前葉の土器片294図5が1片出土している。

第19号小竪穴

II地区、H-102、103区にあり、調査区西半の南寄りで検出された。東側に29号小竪穴、北側に20号小竪穴がそれぞれわずか40cmほどを隔てて隣接する。

本址西部分には、耕作による小範囲の擾乱がみられる。覆土は、上層に暗褐色土、下層に明暗褐色土が堆積する。平面形は、99×95cmの円形を呈し、ローム土に掘り込まれている。壁は、ほぼ垂直で、底部は平坦になっている。断面形はタライ状をなす。

第20号小竪穴

II地区、H-102区にあり、調査区の西半南寄りに位置する。19、29号小竪穴に隣接する。

覆土は、上部に黒色土、最下部に明暗褐色土があり、この間を暗褐色土が、ロームブロック含有量の多寡により3層に識別されて存在する。平面形は、直径82cmの円形を呈する。壁は、ローム土に緩やかな傾斜で深め込まれ、底面はやや起伏をもつ。覆土中から縄文中期前葉の土器片294図6が1点出土している。

第21号小竪穴

II地区、I-101区で検出された。調査区の西半南寄りに位置し、南側1.2mに1号住居址、北側1.3mに18、22号小竪穴が隣接している。

覆土は、上層に黒褐色土、下層に暗褐色土が堆積し、西壁際に擾乱がみられる。80×77cmの平面形を呈し、ローム土に掘り込まれている。壁は垂直で、床面は起伏をもっている。覆土中から縄文早期押型文期の尖底部が一点出土している。

第22号小竪穴

II地区、H-1、101区にあり、調査区内の西半南寄りで検出された小竪穴群の1基をなす。北側に19、23、30号小竪穴、南側に21号小竪穴が隣接する。

第Ⅲ章 調査遺跡

覆土は、上層に暗褐色土、下層底面に明褐色土が堆積する。平面規模は、東西128cm、南北97cmで、楕円形を呈する。掘り込みは、ローム土に緩やかになされ、底面は軟弱で西に向かってやや傾斜している。深さ27cmを計り、断面タライ状をなす。

第23号小竪穴

II地区、H—101区で検出された。調査区西半の南寄りにあり、18号および30号小竪穴と重複する。周囲には、1mを隔てずに22、24、25号小竪穴が隣接している。

覆土は、上層に暗褐色土、下層に明褐色土が堆積する。平面形は楕円形を呈し、南北124cm、東西は重複のため明確でないが、約170cmほどと思われる。掘り込みは、やや緩やかな傾斜をもってローム土になされている。底面は、ほぼ平坦で深さ25cmを計る。覆土中から、294図8～10の黒船を含む山形押型文土器片が出土している。

第24号小竪穴

II地区、G—1、101区にあり、調査区西半のほぼ中央部に位置する。22、23、25号小竪穴と隣接し合い、東側3mには10号住居址がある。

覆土は、上部から暗褐色土が主体をなし、5cm大のロームブロックが散見される。下層、底面上には明褐色土が薄く堆積する。南北124cm、東西67cmの細長い楕円形にローム土に掘り込まれている。壁は、四方ともほぼ垂直に近い傾斜をなし、底面は平坦になっている。断面形はタライ状をなし、深さ19cmを計る。

第25号小竪穴

II地区、G、H—101区にあり、調査区内では西半やや南寄りに位置する。南東側に23、24、30号小竪穴が隣接している。

覆土は、上層に暗褐色土、下層に明褐色土が堆積し、暗褐色土中と東壁際に黒褐色土が、西壁際には明褐色土がみられる。平面規模は、東西140cm、南北130cmを計り、ほぼ円形を呈している。壁は緩やかに掘り込まれ、底部は平坦な状態を示している。断面はタライ状で深さ22cmを計る。

第26号小竪穴

II地区、I—103区で検出された。台地上で検出された遺構中、最西端に位置し、台地先端部まで12mを隔てる。

本址は、耕作による擾乱もなく、ローム検出面において黒色土の落ち込みが明瞭に認められた。覆土は、上層から黒色土、暗褐色土、若干ローム粒を含む暗褐色土、黒色土、若干ローム粒を含む暗褐色土、多量にローム粒を含む黄褐色土、暗褐色土、多量にローム粒を含む黄褐色土の順に堆積している。平面形は、東西118cm、南北80cmの楕円形を呈する。壁は、ほぼ垂直に鋭くローム土に掘り込まれ、特に東側と西側で急傾斜をなしており、底部までの深さは125cmを計る。底部

は、平面形が隅丸長方形を呈し、東西101cm、南北47cmの規模で平坦になっている。覆土から294図11の縄文中期土器片が出土している。

第27号小竪穴

II地区、D、E—101、102区で検出された。調査区内では、西半部北寄りに位置し、周囲に際だって隣接する遺構はみられない。

覆土は、西側に流れ込むような形で明暗褐色土があり、東側上層から暗褐色土、ローム粒を混入する暗褐色土、ロームブロックを混入する暗褐色土が堆積する。壁の立ち上がり付近を中心とした部分には黄褐色土がみられる。平面形は、 $156 \times 153\text{cm}$ の楕円形を呈し、深くローム土に掘り込まれている。壁は、やや湾曲した緩やかな傾斜をなし、底面は平坦で堅硬な状態を示している。

第28号小竪穴

II地区、K、L—102区にあり、調査区西半の最南端に位置する。3.9m北側に17号小竪穴が、5.8m東側に1号住居址がそれぞれ存在している。

覆土は、黒色土、暗褐色土、ローム粒を含む暗褐色土、黄褐色土が複雑に堆積している。平面形は、直径約60cmの円形を呈する。掘り込みは、ローム土に緩やかに湾曲してなされ、深さ32cmの半球状をなす。

第29号小竪穴

II地区、H—102区にあり、調査区の西半やや南寄りに位置する。西側40cmに19号小竪穴、北側65cmに20号小竪穴が隣接している。

覆土は、中央部に黒色土がレンズ状に堆積し、周囲を暗褐色土が取り巻いている。平面形は、 $87 \times 75\text{cm}$ の円形に近い楕円形を呈する。掘り込みは、ローム土にはば垂直になされているが、深さ13cmと比較的浅い。底面は平坦である。覆土中から294図12の縄文後期口縁部土器片が1点出土している。

第30号小竪穴

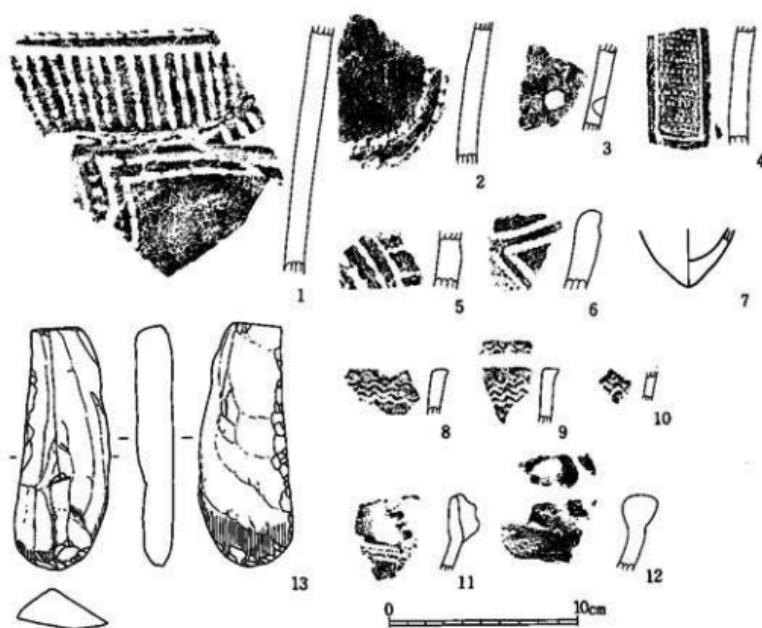
II地区、H—101区にある。中央区西半部のやや南寄りに位置する。18号および23号小竪穴と重複するが、当初は判別できず、18、23号小竪穴を掘削中に落ち込みが確認された。

本址全体が重複しているため、当初の規模は明確でないが、確認された範囲で $112 \times 97\text{cm}$ の楕円形を呈している。壁は、ローム土に緩やかに掘り込まれ、ローム検出面から底部までは63cmを計る。底部は、南に向かって若干傾斜がみられるものの、平坦な状態を示している。

第三章 調査遺跡

第19表 向陽台遺跡小豎穴一覧表

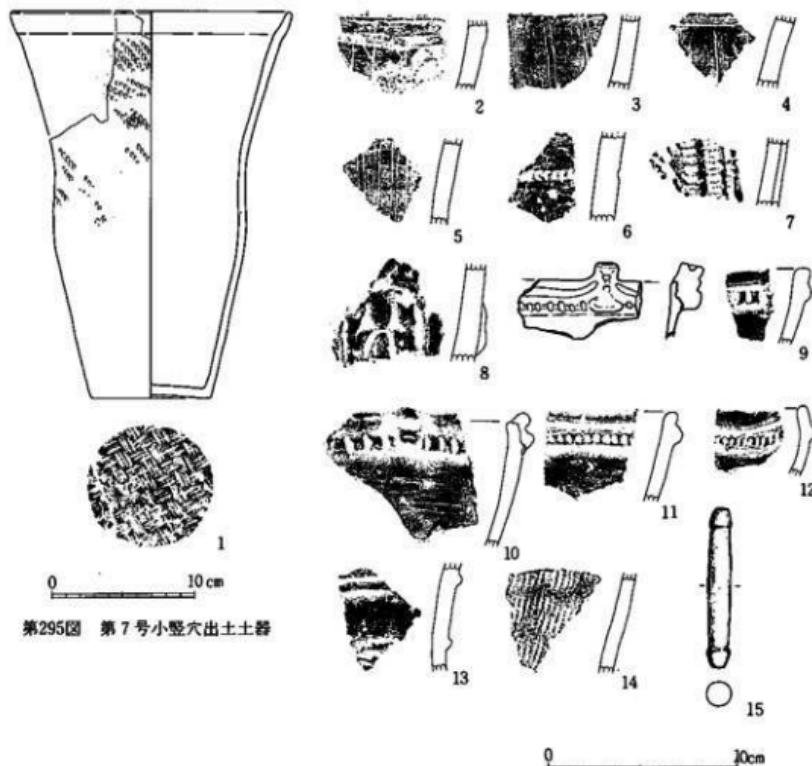
No.	確認規模(cm)	平面形	主軸白書	断面形	底面規模	底面	深さ	備考
1	116×97	不整橢円	N-58°-E	タライ状	102×97	平 坦	18	
2	88×72	橢円形	N-86°-W	"	80×73	"	35	
3	83×75	橢円形	N-7°-E	"	72×58	"	49	
4	102×97	円形	N-4°-E	袋状	113×108	"	46	
5	100×73	橢円形	N-54°-E	タライ状	95×64	"	11	
6	120×60	橢円形	N-20°-E	擂鉢状	52×40	丸 底	33	出土
7	115×113	円形	N-82°-W	タライ状	103×100	平 坦	28	土器出土
8	—	—	—	—	—	—	—	
9	65×50	橢円形	N-S	擂鉢状	44	丸 底	19	
10	88×80	不整円	N-84°-E	タライ状	87×80	平 坦	19	
11	77×77	円形	N-S	"	64×64	凹凸あり	12	
12	103×88	橢円形	N-S	"	79×74	平 坦	18	
13	97×97	円形	N-S	"	80×80	"	41	
14	95×68	橢円形	N-60°-W	"	93×68	やや丸底	26	
15	113×83	"	N-23°-E	"	85×64	平 坦	15	
16	117×116	円形	N-50°-E	"	95×82	凹凸あり	27	
17	108×96	橢円形	N-48°-E	"	93×75	平 坦	18	
18	103×—	"	N-67°-W	"	87×—	"	17	
19	99×95	円形	N-S	"	82×80	"	15	
20	82×82	"	N-83°-W	"	68×63	凹凸あり	24	
21	80×77	"	N-80°-W	"	66×62	"	20	
22	128×97	橢円形	N-87°-W	"	97×66	"	27	
23	(170)×124	橢円形	N-12°-W	タライ状	90×—	平 坦	25	
24	124×67	"	N-4°-W	"	95×47	"	19	
25	140×130	円形	N-72°-W	"	128×109	"	22	
26	118×80	橢円形	N-76°-E	コップ状	101×47	"	125	
27	156×153	円形	N-80°-W	タライ状	84×68	"	81	
28	60×58	円形	N-62°-E	擂鉢状	44×43	丸 底	32	
29	87×75	橢円形	N-64°-W	タライ状	74×65	平 坦	13	
30	112×97	"	N-63°-E	"	90×42	"	(63)	



第294圖 小竖穴出土遺物

土器觀察表

番号	出土小竖穴	器形	部位	文様構成要素	内面網目	地	
						土	号
1	4 S	直筒	腹	繩帶、押引	粗	長石	
2	?	?	?	?	?	?	1と同一類体
3	10 S	?	?	?	?	?	石英
4	?	?	?	?	?	長石	
5	18 S	?	?	押引	?	長石	
6	20 S	?	口縫	?	?	?	雲母
7	21 S	?	底		?	?	石英
8	23 S	?	口縫	山形押模文	?	長石、雲母	
9	?	?	?	?	?	?	?
10	?	?	?	?	?	?	?
11	26 S	?	口縫	波紋、纏繩	?	?	
12	29 S	?	?	?	?	?	



第295図 第7号小竪穴出土土器

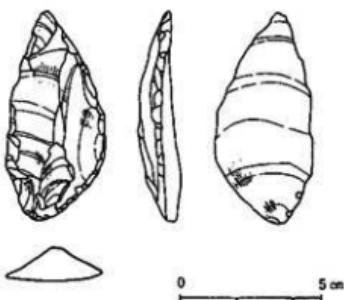
第296図 遺構外出土遺物

土器観察表

番号	遺構名	器形	部位	文様構成要素	器面調整 外/内	胎 土
2	S 住	深鉢	頸部	陸帯・沈線	/粗	
3	J-101	口	頸	沈線	/*	
4	"	"	"	"	/*	
5	C-4	"	"	"	/*	
6	S 住	"	"	押引き	/ナデ	
7	P-4	"	"	"・陸帯	/粗	
8	J-114	"	"	陸帯・沈線	/*	
9	6 住	"	口縁	"・刺突・小突起	/ナデ	
10	S 住	"	"	" "	/*	
11	J-110	"	"	" "	/*	
12	S 住	"	"	" "	/*	
13	S 住	"	"	" "	/*	
14	G-101	頸	"	沈線	/*	
15	J-114	"	"	縹文	/粗	

(5) 遺構外遺物

遺構外から出土した遺物は少ない。1点のみ出土があった先土器時代のナイフ形石器、縄文早期住居址群、集石炉群を中心とした地区から出土した押型文土器、石鎌、砥石、特殊磨石、黒曜石剝片、縄文前期住居址群周辺出土の中越式土器、そして弥生後期住居址群周辺出土の弥生土器片が主体を占め、他に縄文中・後期～晚期土器が少量得られている。縄文前期、弥生後期に属する遺物類は小片が多く、断片的であり、その良好な資料は各住居址の項で詳報されているのでここでは省略し、先土器、縄文早・中・後期に属する遺物について記述する。



第297図 先土器時代出土石器

先土器時代

先土器時代に属する遺物は、10号住居址覆土中から出土したナイフ形石器が1点ある。

縦長剥片を素材とし、打面部側を基部とする。長さ3.5、幅1.8、厚さ0.6、刃長1.6cm、重量3.2gで、黒曜石製。素材のもつ正面左辺の鋭い縁辺を刃部として残し、他の周縁に入念な調整をしている。

縄文早期の住居址周辺を中心に、先土器時代遺物の包含層確認のため40m²を60cm掘り下げたが、遺物の出土は全く認められなかった。松本平における先土器時代の遺跡は田川流域および筑摩山地山麓に集中している。向陽台での遺物の出土も当地域の先土器文化の様相を考えるうえで貴重な資料となる。

縄文時代早期

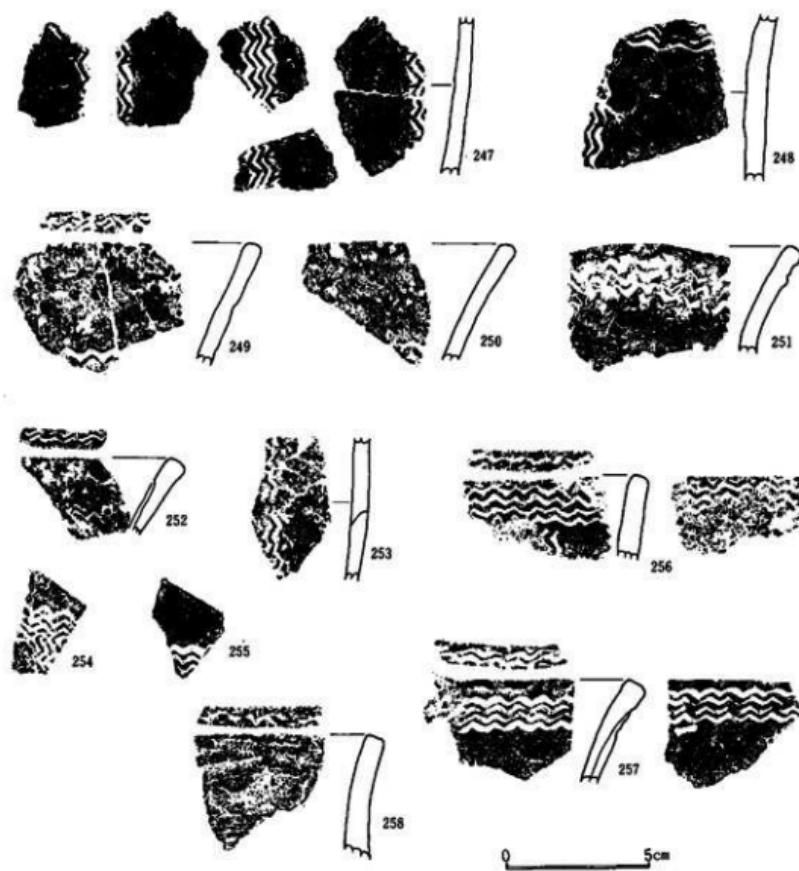
遺構外から出土した土器の量はたいへん少ない。別項で述べたように、小堅穴群の周辺と、Cトレンチ（C、T）にわざかながら集中し、層位的知見が示されている。

土器片総数323点 うちわけは押型文133、無文177、縄文・燃糸文13である。

押型文土器は下層（IV層）に山形線Cタイプ2が主体的に出土する。特異なものとしてはCトレンチに格子目文土器5点が検出されており、1点は（第199図261）帶状施文であるが、出土層位は下層から上層にわたっている。量的に少なく特定できない。

上層に出土した楕円文土器の一括資料は26片が同一個体片と思われるものの、接合は少なく、推定復原にとどまる。文様構成は口縁部及び頸部が横・縦位帯状施文、脇部は横位密接施文とやや特異である。極沢等周辺資料中には類例がなく、文様構成C亞種としておく。

その他に、最上層の2次堆積土（I層）中から黒鉛を含まない山形の一括資料（第298図247）が32片集中的に出土している。

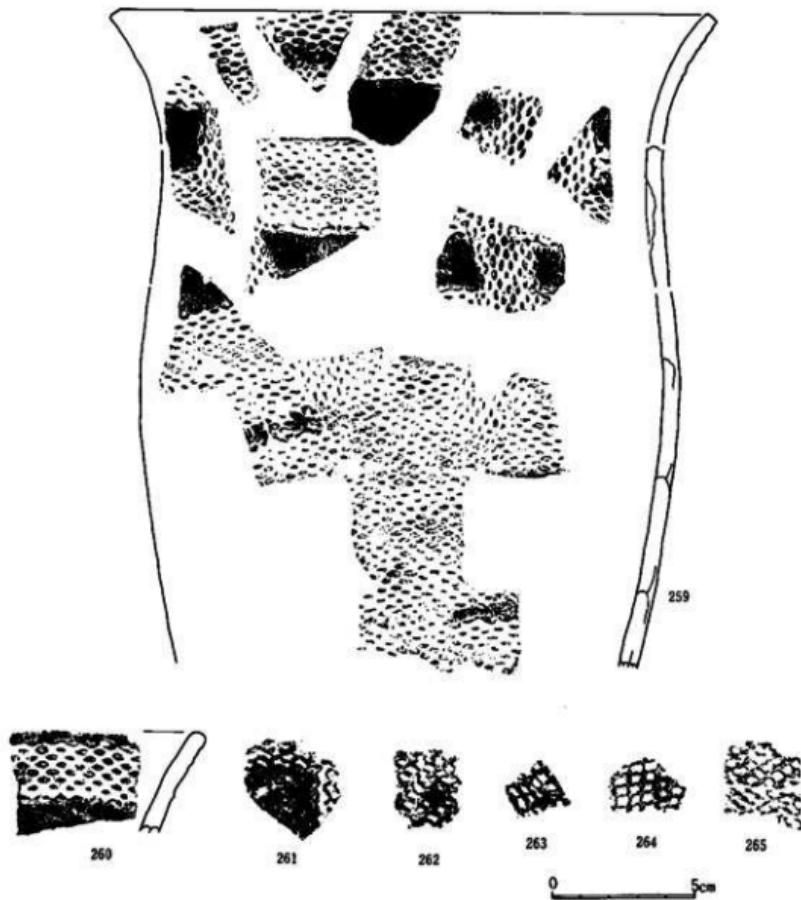


第298図 遺構出土縄文早期土器(1)

土器観察表

単位: cm

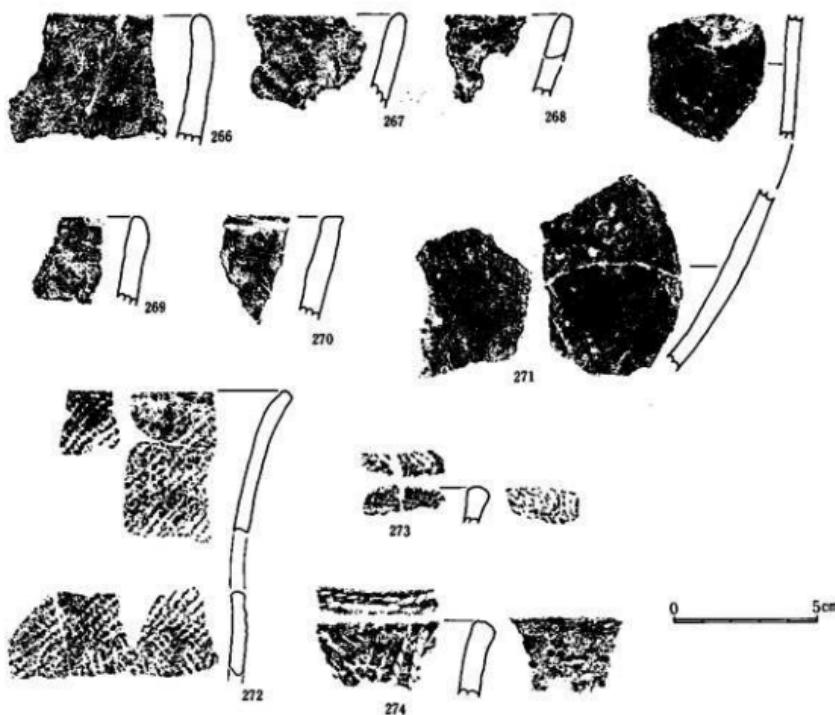
No.	層位	分類	各数	単位	原体径・長	縄部	文様	文様	口唇	胎土	整形	遺物 No.	部位	備考
247	山形文C 1	3	2	5.5 - 13.2	1(2)	山2	C			2(1)	1-2	38・B.C.194	頭部	同一個体片23有り 新文土器胎土に似る
248	"	-	-	-	-	山2	C			2(1)	1-2	"	C.T. 89	"
249	山形文C 2	-	-	-	-	2(1)	山1	C5	2	1(3)4	1-1	"	C.T. 166	口縫部
250	"	-	-	-	-	山1	C5	2	1(2)	1-2	"	B.K101-3	"	
251	"	2	-	-	12.0	-	山1	C	2	1(4)	1-1	"	C.T. 311	"
252	"	-	-	-	-	山1	-	-	1	1(3)4	1-1	"	B.K. 13	"
253	"	3-4	-	-	-	山1	C			1(1)	1-1	"	H102-25	網部
254	"	4	-	-	-	1(1)	山1	C1		1(3)4	1-1	"	C.T. 187	頭部
255	"	-	-	-	-	1(2)	山1	C		1(1)	1-1	"	" - 158	"
256	山形文C 3	3	2	4.7 - 13.5	2(1)	山1	C2			2(1)	1-2	"	C.T. 156	口縫部
257	"	3	2	5.3 - 12.0	1(2)	山1	C			2(1)	1-2	"	B.K102-1	"
258	山形文C	-	-	-	-	?	C5	2	2(1)	1-2	"	H101-14	"	新文土器胎土に似る 灰褐色 火照不規



第299図 造構外出土繩文早期土器(2)

土器観察表

No.	層位	分類	全数	単位	断体長・長	端部	文様	文様	口徑	胎土	形形	遺物No.	部位	備考
259	箱内大C层		6	-	3.9 - 28.7	2(1)	G型	2	2(2)	1-1	30・C.T. - 31	口-側	同一個体片27有り	
260	"		3	-	-	19.2	2(1)	G	2(2)	2-1	" C.T. - 137	口縁部		
261	箱子目文C						1(1)		1(1)	1-1	H103 - 7	腹部	灰色を呈す	
262	箱子目文								2(1)	1-1	" C.T. - 63	"		
263	"								2(1)	1-1	" C.T. - 34	"	同一個体か	
264	"								2(1)	1-1	" K112 - 5	"		
265	"								2(1)	1-1	" B.C - 169	"	C.T. - 182と接合	



第300図 遺構外出土繩文早期土器(3)

土器観察表

No.	層位	分類	表面	基位	腹体・底長	縫合部	文様	文様	口唇	神土	裏形	遺物 No.	形 位	備考
266	新文A						丸	1(1)	1-1	30-C.T.130	口縫部	透明の粒子多く含む		
267	*						丸	1(1)	1-1	F102. 8	*			
268	*						丸	1(1)	1-1	G101. 41	*	炭化物付着		
269	新文B						丸	1(1)	1-1	B. 2 H	*			
270	*						丸	1(1)	2-1	H102. 16	*			
271							平	2(2)	1-1	C.T.168	脚下部			
272	縹文									C.T.152	口一側	押型文土器脚土に似る		
273	*									C.T.154	口縫部			
274	新文									4号筆石炉I	*	内面も施文か		

押型文土器は、全体には黒鉛を含むCタイプ2の山形文が59片と46%を占め、黒鉛を含まないCタイプ3は一括資料はわずかに7片、Cタイプ3も3片と極めて少ない。

無文土器は177片があるが、Cタイプの強く口縁の外反する類は出土していない。

その他遺構外出土遺物に見られない土器としては、縹文11片、撚糸文1片がある。このうち縹文の1片（第300図273）は内面の口唇直下まで施文されている。また撚糸文1片（同274）も口唇部施文と剥落して不明瞭であるが内面横位の施文があったと思われる。

以上、住居址竪穴外から出土した土器は、縄文・撚糸文を除くと、押型文・無文の各土器の在り方は同じと見られる。層位的な知見で示されているように、横円文土器Cタイプ類似一括資料が、やや山形文・無文土器群に遅れて遺跡に持ち込まれたことが示唆されたことは、竪穴内出土土器に横円文が1片もないことと呼応した当然の知見であろう。

縄文時代中～晚期

第296図2～5は、半割竹管工具による平行沈線文を施文したもので、平出III Aに比定できる。6は押引き文を施したもの、7は隆帯をキャタピラ文と組み合せたもの。そして8は刻みを加えた隆帯が一条めぐる。9・10は口唇部から隆帯にかけて粘土縫によるこぶ状の突起を貼付け、突起上にも刺突を加えている。隆帯下は無文である。14は、隆帯を2条めぐらした調部破片。15は縄文施文の調部片である。9～14は、後期末～晚期初頭に位置づけられる。

16は、長さ8.3cm、両頭の小形石棒である。作りは極めて精巧で、優品である。後、晩期に属するものであろう。

縄文中期～晚期の遺物は、早期住居址と弥生後期住居址群とにはさまれた地区に分布の中心があり、小竪穴群の分布とほぼ一致する。

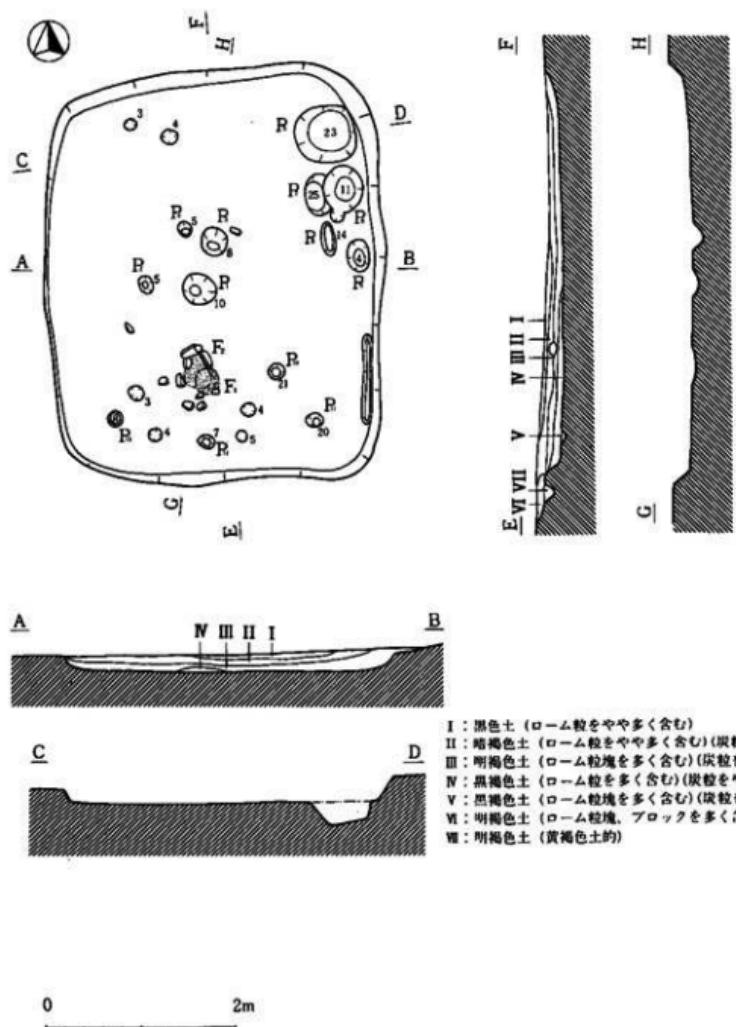
2) 弥生時代

(1) 住居址

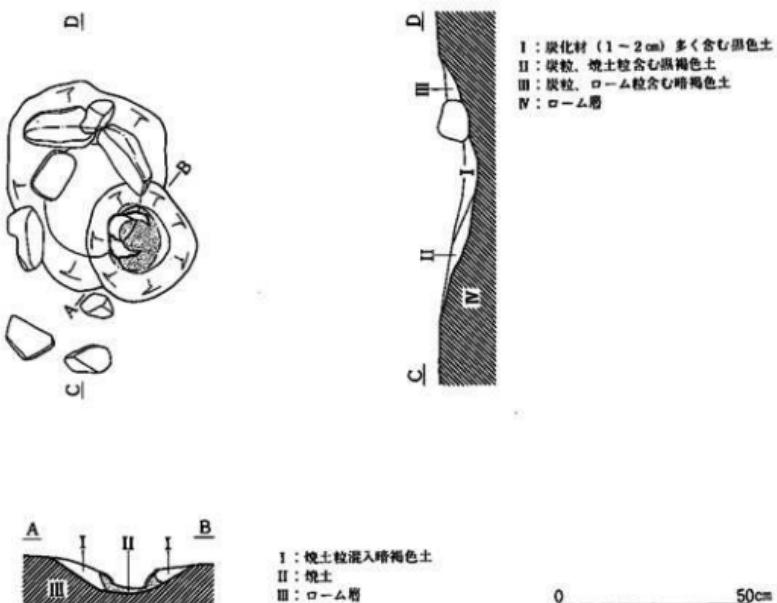
第4号住居址

遺構 本址は、今回の調査で検出された弥生時代の住居址群の中では西方の、最も標高の低い場所に位置し、南側には第5号住居址が、また東側には第6号住居址が隣接して存在する。遺構の確認は比較的容易に行われ、重機による表土削平後にローム面での検出を開始すると、長方形の暗褐色の落ち込みとなってプランが確認された。竪穴の掘り込みは浅く、約10cm程掘り下げると床面が現れ、覆土下層から土器片・石包丁等の若干の遺物の出土がみられた。住居址内南寄りからは綠石を伴う地床炉が現われ、更に精査を行うと、そのわずかに南寄りから、壺形土器頭部を利用した旧炉も検出された。また、住居址北東コーナー付近からは、第4号住に伴うと推定される貼り床の施されるビットが2ヶ所で検出された。

隅丸長方形プランを呈し、主軸はN—14°—W方向を示す。今回の調査で検出された弥生時代の住居址のなかでは最も小さな規模(4.3m²×3.6m)の住居址であり、主柱穴は確認されていない。竪穴は、ローム層を垂直に近く掘り込んでおり、壁は東側ほど高く、壁高は検出面より13～25cmを測る。床は平坦堅緻で、全体にタクキ状の良好な床面であるが、東壁下にややわらかな面が存在する。また、東壁下の南側には長さ0.9にわたる周溝状の溝状遺構も検出されている。ビットは数多く検出されているが、浅いものが多く、主柱穴とみられる配置も認められない。このうち、中央より検出されたP₁は深さ10cmを測り、ビット内南側の一部が焼け、赤化しているのが観察された。また、東壁下北寄りからは比較的多くのビットが検出されたが、このうちP₁(45×



第301図 第4号住居址

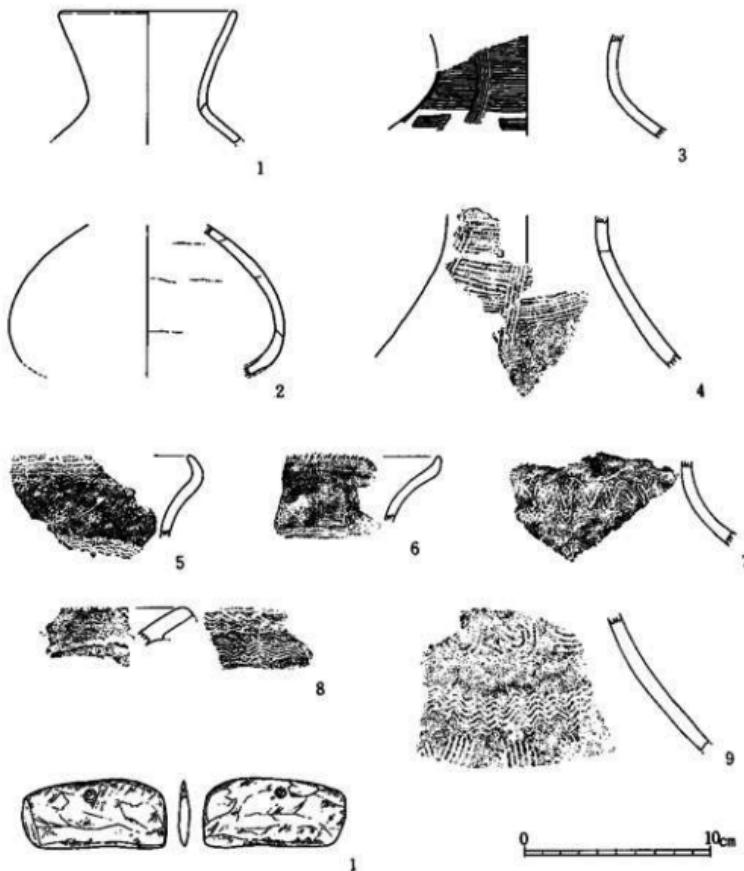


第302図 第4号住居址炉

30—25cm) と P₁ (65×58—23cm) は床下ピットである。炉址は、新・旧合わせて2基が検出された。旧炉 F₁ は、壺形土器頭部を逆位に埋設した炉であり、炉床および土器周辺の土は、加熱を受け赤化していた。また新炉 F₂ は、F₁ を廃棄した後にそれを埋め、新たに設けられたもので、炉内には、炭粒及び炭化材小片が充満していた。55×45—10cm の楕円の掘り込みの北側には、綠石として3個の石が配されており、それらの石には加熱を敷いた痕跡が認められた。

遺物 覆土下層を中心として土器片が少量出土しているが、器形を復元できるような土器は1点もみられない。石器としては、住居址中央付近の床面よりやや浮いた位置からほぼ定形の石包丁1点の出土をみている。

(1)(2)は、小型壺形土器の口縁部及び胴部で、両者ともヘラミガキを加えた後に赤彩が施される。(3)は旧炉 F₁ に使用された壺形土器頭部破片である。(5)(6)は壺形土器の口縁部で、両者とも口縁端部がやや内湾する形態をとる。(6)の口唇部には刻目も施される。(7)(8)は、壺形土器もしくは壺形土器の破片で、(7)にはシャープな櫛描波状文が、(8)には口縁内面の櫛描波状文が認められる。(8)の口縁外面には、剥落痕を残す。(9)は大型壺形土器の頭部破片で、波状文の上下に円弧文帯を有する。石器(1)は、今回の調査で出土した唯一の石包丁であり、ほぼ完存する。長方形を呈し、中



第303図 第4号住居址出土遺跡

土器観察表

図番号	器種	形状(cm)			色 調	形 態	成 分	風化腐食方法			備 考
		口幅	底幅	壁厚				外 面	内 面	方 面	
1	盤	9.5	—	—	白褐色	灰色	良好	ヘラミガラ	ナゲ	ナゲ	赤鉄
2	×	—	—	—	褐色	×	×	×	×	×	×
3	×	—	—	—	灰褐色	明褐色	ナゲ、褐描文	ナゲ	ナゲ	ナゲ	埋設炉(定位)
4	×	—	—	—	×	普通	×	×	×	×	×
5	盤	—	—	—	暗褐色	明褐色	良好	×	×	×	ナゲ
6	×	—	—	—	×	明褐色	×	×	×	×	ナゲ
7	盤?	—	—	—	×	×	×	×	×	×	口唇部剥落
8	盤?	—	—	—	×	明褐色	普通	ナゲ	ナゲ	ナゲ	口唇外周剥落
9	盤	—	—	—	明褐色	明褐色	普通	褐描文	ナゲ	ナゲ	ナゲ

石器観察表

図番号	種別	石質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備 考
1	石包丁	粘板岩	3.6	(7.6)	0.6	27	孔1+所(背面より)

央一か所に穿孔がみられる。粘板岩製であり、刃部中央付近には頻繁な使用による刃部のへこみも観察される。

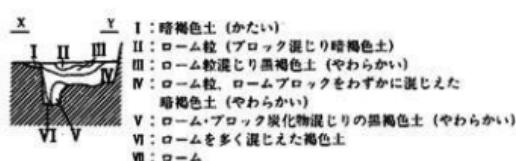
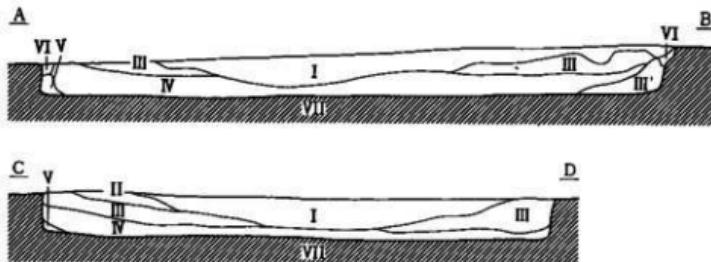
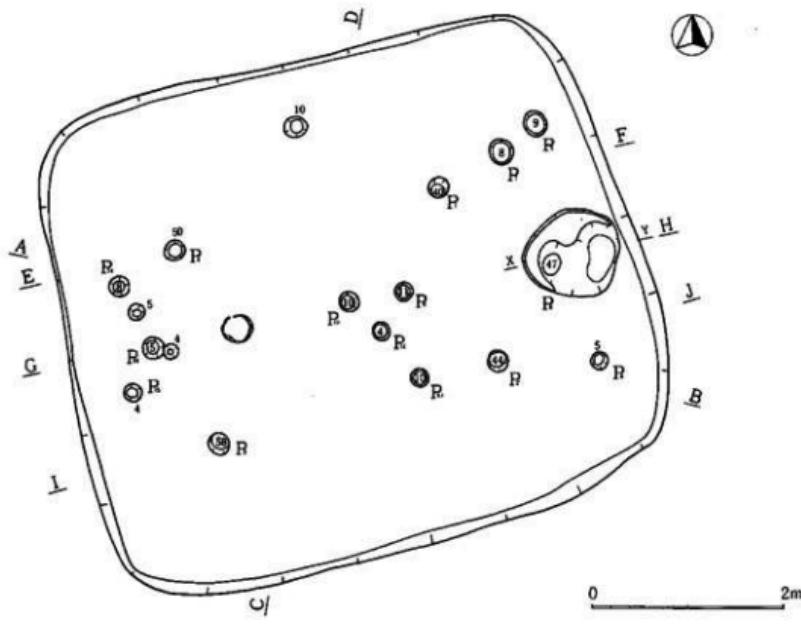
第5号住居址

遺構 本址は、第4号住居址の南側隣接地より検出された住居址である。重機により表土削平を行うと、楕円形の漆黒色土の落ち込みとして検出され、掘り下げ途中で隅丸長方形の住居址であることが確認された。豊穴は、ローム層を深く掘り込まれているため遺存状態は良好で、覆土は自然埋没の状況が観察される。遺物は、小型の壺形土器をはじめとする土器片が覆土内より少量出土しているが、そのほとんどは住居廃絶後の流れ込みに伴うもので、縄文時代の遺物の混入もみられた。床面精査により、埋甕炉と4ヶ所の主柱穴が確認されている。

6.2m×5.2mの隅丸長方形プランを呈する。主軸は、N-63°-E方向を示し、隣接する第4号住居址の主軸とはほぼ直交する。豊穴はローム層をほぼ垂直に深く掘り込んで構築されており、壁高は、東壁で最高50cm、西壁は約30cmを測る。床面は、壁際まで全面タキキ状の平坦堅質な床面が広がり周溝の存在は認められない。主柱穴はP₁～P₄が検出された。4本柱の住居址であり、各主柱穴は、いずれも径20cm前後で深さは平均60cmを測る。また、主柱穴の他に、深さ5cm程度の多数の小ピットが検出されている。このうちP₃とP₄、P₁とP₂は主軸に対して左右対称の位置にあり、またP₉、P₁₀、P₁₁は主軸ライン上に存在し、支柱穴として捉えられる。なおP₈については、壁から約1m内側に-47cmを測る最深部が存在し、梯子下端固定用のピット等の出入口施設に関連する遺構となる可能性を指摘できる。炉址は、住居址内内区西壁寄りから埋甕炉が検出された。2個体の壺形土器を二重に組み合せたものであり、外側に壺形土器胴下半部(1)が逆位に、内側に壺形土器胴上半部(2)が正位に埋設されていた。使用された土器は両者ともに二次焼成をうけ赤変しており、周囲の床面も部分的に赤化していた。また、炉内には炭粒を混じえた黒褐色土が充満していた。

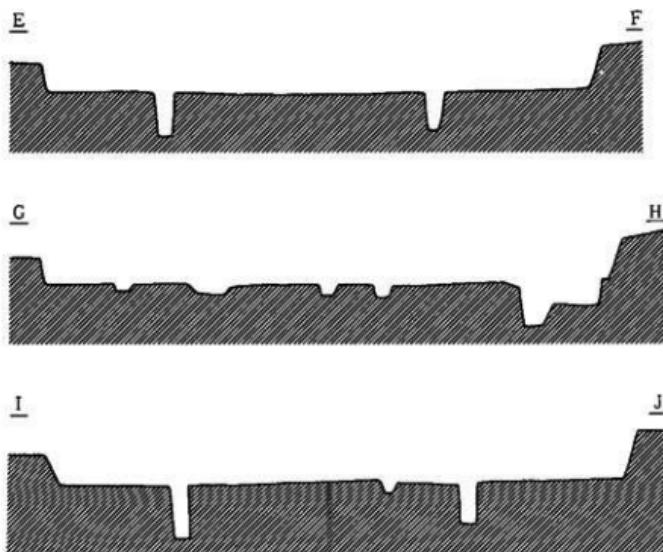
遺物 本址は、掘り込みの深いしっかりした豊穴にも関わらず遺物の出土は稀少であり、住居址廃絶後の凹地への遺物の廃棄はほとんどなかったと想定される。土器片や石器が少量出土しているが、埋甕炉に使用された土器以外は、廃絶後の流れ込みの遺物がほとんどである。

(1)は器高わずか6.0cmの小型壺形土器であり、覆土中層から出土した。ほぼ完形であり、外面には丁寧なヘラミガキが加えられる。(2)は内外面に赤彩の施される壺形土器口縁部で、頸部には横描縦状文が施される。また、(3)の高杯、(4)の内外面に赤彩が施される。(5)は口縁部が屈折し受口状をなす天竜川水系にみられる器形の壺形土器口縁部であり、その外面には横描波状文が施される。(6)(7)は壺形土器の破片で、(6)には波状文、(7)には縦状線、波状文が認められる。また、(8)、(9)は底部破片である。(10)は埋甕炉の内側に埋設されていた壺形土器で、頸部の縦状文を挟んで、その上下を波状文によって充填させている。横描文は右回りに施され、絶縁1回のみの中部高地型横描文である。(11)は、埋甕炉外側に配された壺形土器胴下半部で外面にはハケナデが加えられる。この他、石器としては、凝灰質砂岩製の打製石斧破片(1)と安山岩製の磨石(2)が出土している。

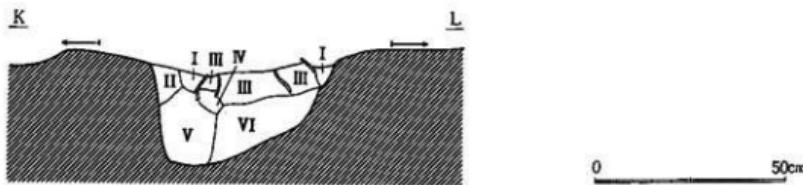
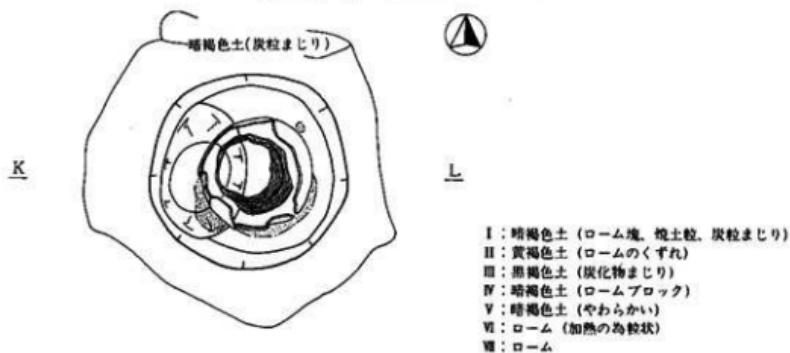


- I : 黒色土層（色調の濃さには若干のむらがある）
わずかに炭粒を含む
- II : 黒褐色土（I、田畠の中間層）
- III : 暗褐色土層（1cm大のローム粒を若干含む）
- III' : 暗褐色土層（非常にやわらかい；角堆さ
1cm大のローム粒を若干含む）
- IV : 暗褐色土層（1cm大のローム粒を若干含む
炭粒をごくわずかに含む）
- V : 黑褐色土層（やわらかい）
- VI : 脊面からの崩落ローム層
- VII : ローム層

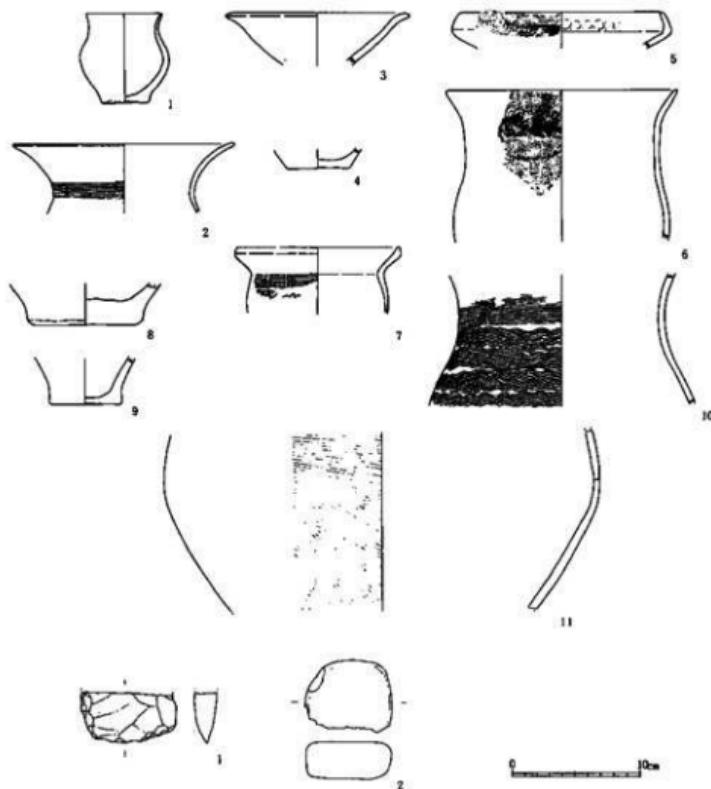
第304図 第5号住居址



第305図 第5号住居址エレベーション



第306図 第5号住居址埋甕炉



第307図 第5号住居址出土遺物

土器観察表

図番号	種類	径 (cm)			内 部	外 部	成形調製方法		備 考
		口径	底径	高さ			外 面	内 面	
1	盤	6.0	3.7	7.9	灰褐色	暗褐色	丸好	ナデ	
2	盤	17.3	—	—	赤褐色	赤褐色	*	ミガキ	ミガキ
3	高环	14.4	—	—	赤褐色	赤褐色	*	ミガキ、彌縫文	*
4	盤	—	4.9	—	赤褐色	赤褐色	*	ミガキ	*
5	盤	15.6	—	—	白褐色	白褐色	*	指オサエ、ナデ	
6	盤	18.0	—	—	暗褐色	暗褐色	彌縫	ナデ、彌縫文	ナデ
7	盤	12.6	—	—	赤褐色	赤褐色	*	*	
8	—	—	8.0	—	灰褐色	暗褐色	*	*	
9	—	—	5.5	—	白褐色	灰褐色	*	ナデ	
10	盤	—	—	—	暗褐色	暗褐色	丸好	*	指オサエ・彌縫文
11	—	—	—	—	*	*	ナデ、彌縫文	*	

石器観察表

図番号	種別	石質	全さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備 考
1	打製石片	燧灰質砂岩	(3.8)	7.5	1.8		
2	磨石	安山岩	(5.2)	6.8	2.8		

が、覆土からの出土のため、縄文時代の遺物の可能性も考えられる。

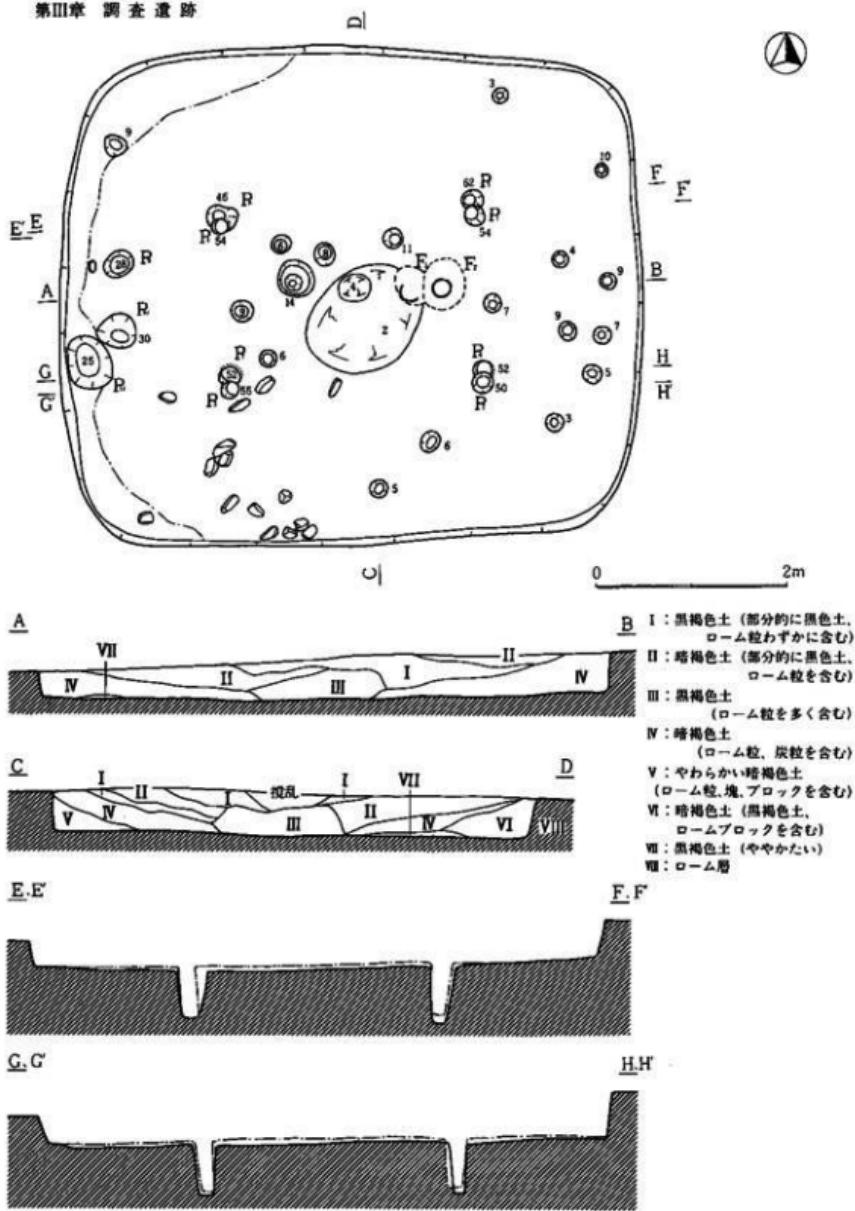
第6号住居址

遺構 本址は、第4号住東側隣接地より検出された住居址である。重機による表土削平後に、中央漆黒色、周辺部暗褐色の隅丸長方形の落ち込みとして検出された。第5号住居址と同様に、遺構の遺存状態は良好であるが遺物の出土はほとんどみられなかった。ただし、住居址南西側を中心として、覆土下層より10cm～20cm大の亜円礫、角礫が十数個集中して出土しており、他の住居址とはやや異質な覆土の堆積が観察された。なお、床面精査により、本址では、主柱穴及び埋甕炉の重複が確認されており、建て替えの行われている事実が判明した。よって、最後に住居址床面のたち割り作業を行ったが、床面の重複は認められなかった。

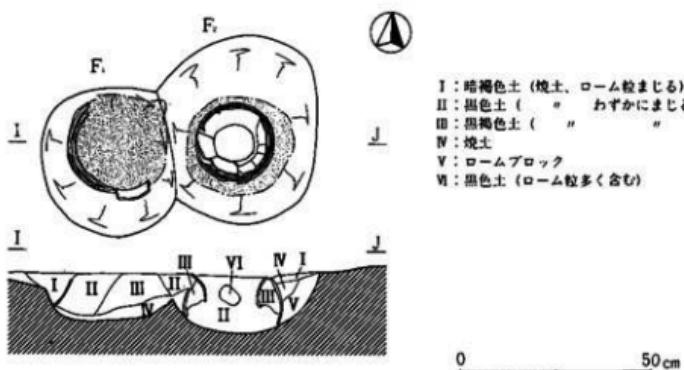
竪穴は隅丸長方形プランを呈し、6.15m×5.2mの規模を有する。主軸はN-74°-E方向を示し、第4号住の主軸とは直交し、第6号住居址の主軸とはほぼ並行する。壁は、ローム層を垂直に掘り込んで構築されており、壁高は、東壁で検出面から最高43cm、西壁で最低27cmを測る。床面は、西壁下をめぐるややわらかな面を除いて、ほぼ全面平坦堅密な床面として検出されており、周溝は存在しない。主柱穴は4本柱として検出され、P₁～P₄が建て替え前の主柱穴、P_{1'}～P_{4'}が建て替え後の主柱穴にある。いずれも径20cm前後、深さ50～60cmのしっかりした掘形をなす。また、主軸方向に対し左右対称の位置に存在するP₅とP_{5'}は、深さ約30cmを測り、かなりしっかりした支柱穴といえる。この2ヶ所のピットは、炉と反対の位置に存在し、かつ付近の壁ぎわの床面が比較的やわらかいことから、出入口施設の支柱穴となる可能性を指摘できる。なお、この他、5～10cm程度の小ピットが多数存在するが、このうちの多くは間仕切りなどに伴う支柱穴とされる。炉址は内区東寄りから新旧2基の埋甕炉が検出された。旧炉はF₁は変形土器頭部を正位に埋設して火壺としており、炉体の土器及び炉床のローム面は、ともに焼成をうけ赤化していた。また、新炉F₂は、F₁を廃棄した後に、その一部を破壊して東側隣接地に新たに設けたものであり、第5号住の埋甕炉と同様に2個体の土器を二重に重ね炉体としていた。外側には変形土器胴部(2)が正位に、内側には、壺形土器口縁部(1)が正位に埋設され、炉周辺の土は、加熱のため赤化していた。

遺物 本址からの遺物の出土は極めて少ない。埋甕炉に使用された土器以外には、拓本可能な土器もわずかで、それも覆土流れ込みの遺物ばかりである。ただし、特長的な遺物として、建て替え前の主柱穴P₅内部(掘形のはば中間の深さ)より砥石2点が重なって出土しており注目される。出土状況からみて、明らかに人為的に埋置したものであり、建て替えに伴う行為と推定すれば、砥石の埋置に何らかの意義が存在したものと推察される。

(1)は変形土器の口縁部から頭部にかけての破片であり、外面は縦方向、内面は横方向のヘラミガキが加えられている。埋甕炉(新炉F₂)に使用された土器で、(2)の内側に埋設されていた。(2)は口縁部と底部を欠損する変形土器で、頭部から胴上半部にかけて、4帯以上の櫛描波状文によつて飾られる。櫛描文は右回りで、3回以上の繰り返しを伴う。また、この土器には内外面ともハケメ



第308図 第6号住居址



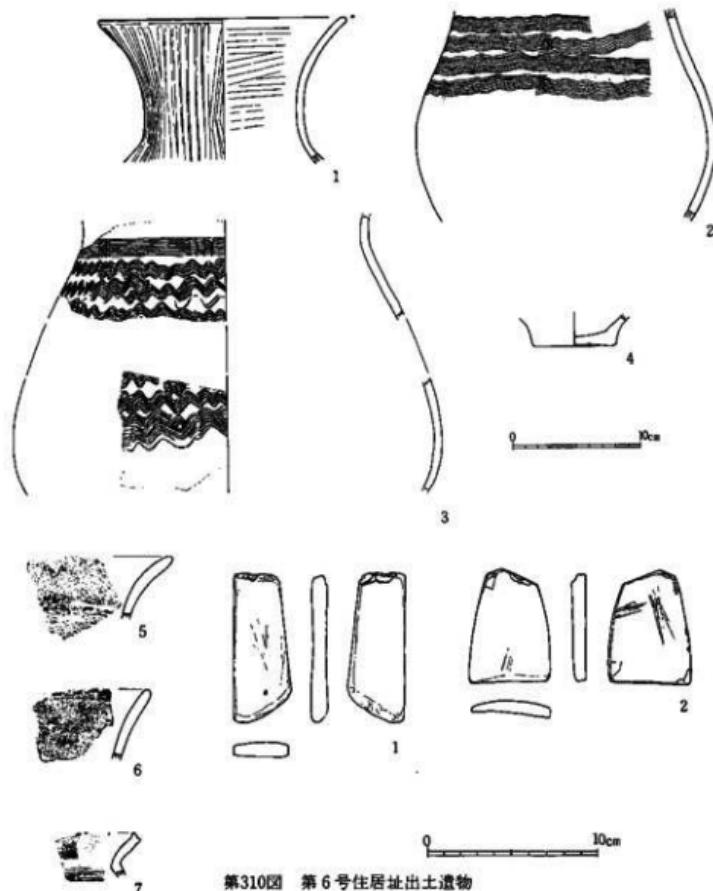
第309図 第6号住居址埋甕炉

が加えられている。(3)は旧炉F₁に使用された變形土器であり、頭部はほぼ全周し、この他頭部破片が数点存在した。頭部は簾状文が施され、その下には波状文がめぐる。横描文は、複数継続で右回りに施される。(5)～(7)は變形土器は口縁部破片であり、(7)の口唇部には刻目が施される。石器(1)(2)はいずれも砥石であり、粘板岩製である。両者とも側縁を含め光沢を帯びた磨面が広がり、擦痕はあまり認められない。

第7号住居址

遺構 本址は、II区の東南隅から検出された住居址である。重機による表土削平後に、隅丸方形の漆黒色の落ち込みとなって確認された。掘り下げを開始すると、焼土や炭粒、炭化材の存在が認められたため火災に遭った住居址であることが判明し、焼土や炭化材を残しながら丁寧な掘り下げを進めた。炭化材は、壁際及び床面よりやや浮いた位置に集中しており、焼土も同様な傾向を示す。炭化材の多くは直径5～10cmを測り、壁から中心方向に向かって横たわる材が多いことから、これらの炭化材の大部分は垂木材であると推定される。また、水平的に見れば、炭化材は、壁際ほどレベルが高く、中心に近づくにつれ下方に傾斜するといった傾向も看取され、焼失に伴う原位置倒壊が予想される。この他、壹材と想定される炭化材も一部に認められた。炭化材を取り上げ床面精査を行うと、主柱穴および埋甕炉が確認された。なお、本址は焼失住居であるためか、床面上を中心として比較的多くの遺物の出土をみている。

竪穴は隅丸長方形プランを呈し、規模は6.4m×5.5mを測る。主軸はN-72°-E方向を示し、第5号住、第6住とほぼ並行する方向に主軸を有する。竪穴は、ローム層をほぼ垂直に掘り込んで構築され掘り込みも比較的深い。壁は、東壁、南壁が良好に遺存し、検出面から壁は最高40cmを測る。しかし、西壁及び北壁は20～30cm程度でやや浅い。床面は、周辺部は堅いタタキ状の床面を呈するが、主柱穴に囲まれる内区は比較的やわらかで、特に炉の周辺の床面がやわらかい。



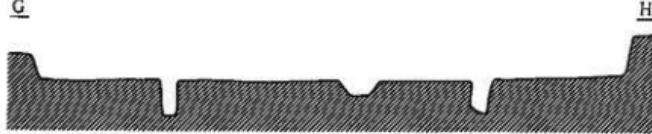
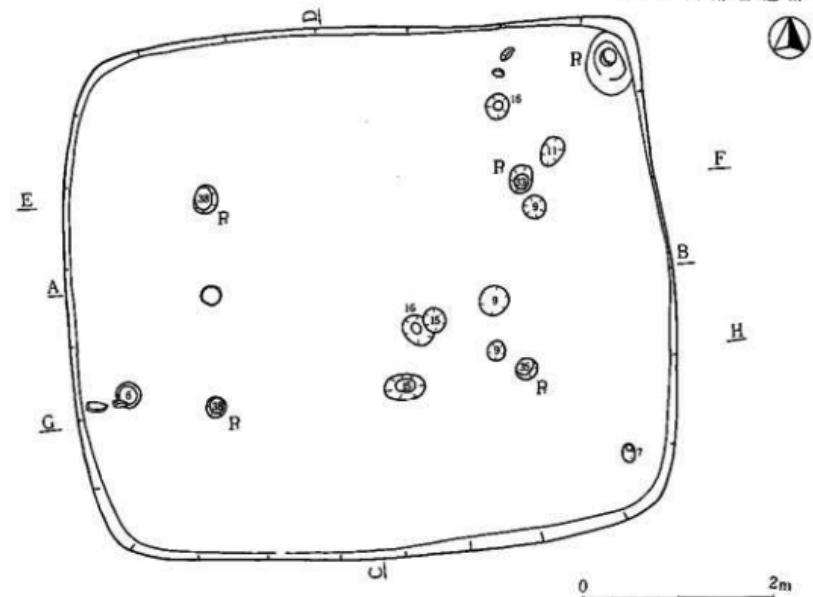
第310図 第6号住居址出土遺物

団番号	器種	生長(?)		色調		成形 焼成 外 面	成形 焼成 内 面	備 考
		口径	底径	鉢高	内			
1	盆	19.0	—	—	暗褐色	暗褐色	良好	ハラミガキ ハラミガキ 直腹板(新)
2	盤	—	—	—	—	—	普通	ハケノ・西様文 ハケノ
3	—	—	—	—	暗褐色	明褐色	普通	ナデ・西様文 ナデ
4	—	6.2	—	—	灰褐色	灰褐色	普通	ナデ
5	甕	—	—	—	暗褐色	暗褐色	×	ナデ・西様文
6	—	—	—	—	暗褐色	暗褐色	良好	ナデ
7	—	—	—	—	暗褐色	暗褐色	+	ナデ・西様文 ナデ

土器観察表

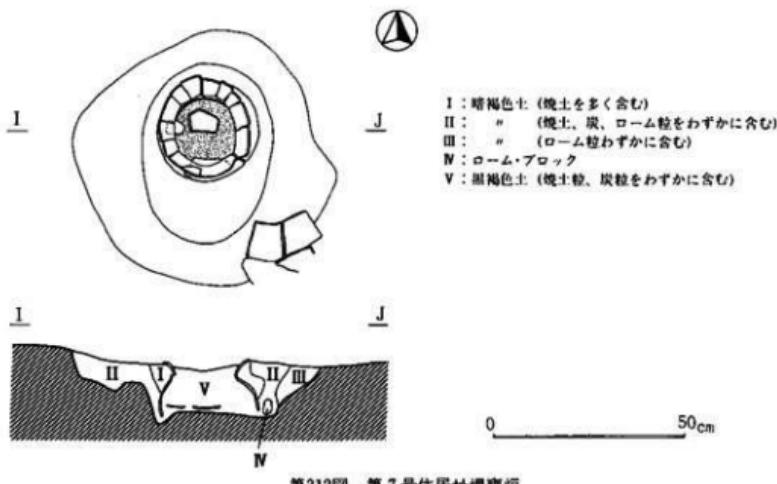
団番号	種別	石器		大きさ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備 考
		石斧	石刀					
1	砍石	粘板岩	—	8.5	3.4	0.9	44	
2	—	—	4.7	8.5	0.9	42		

第3節 向陽台遺跡

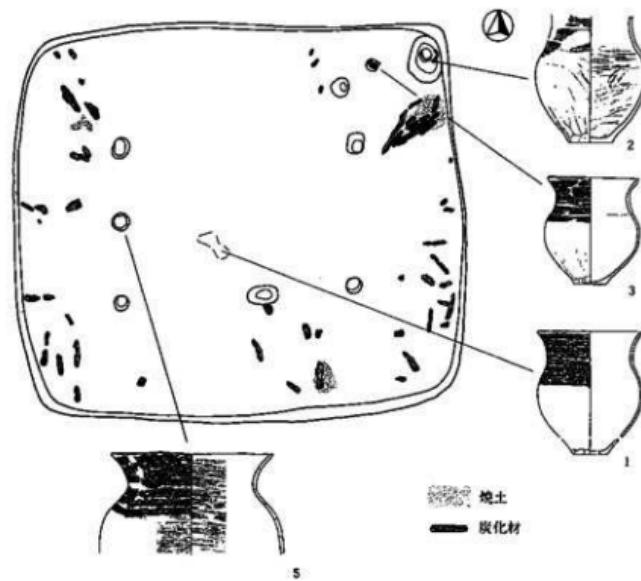


- I : 黒色土層
- II : 淡褐色土層
(細かいローム粒を含む)
- III : 暗褐色土層
(細かいローム粒を含む)
- IV : 暗色土混じり土層
- V : 黒褐色土 (細かいローム粒、炭粒を多く含む)
- V : 棕褐色土層
(炭粒をわずかに含む)
- VI : 炭化材を多く含む暗褐色土
(焼土も含む)
- VII : 棕褐色土層
- VIII : 塗壁層

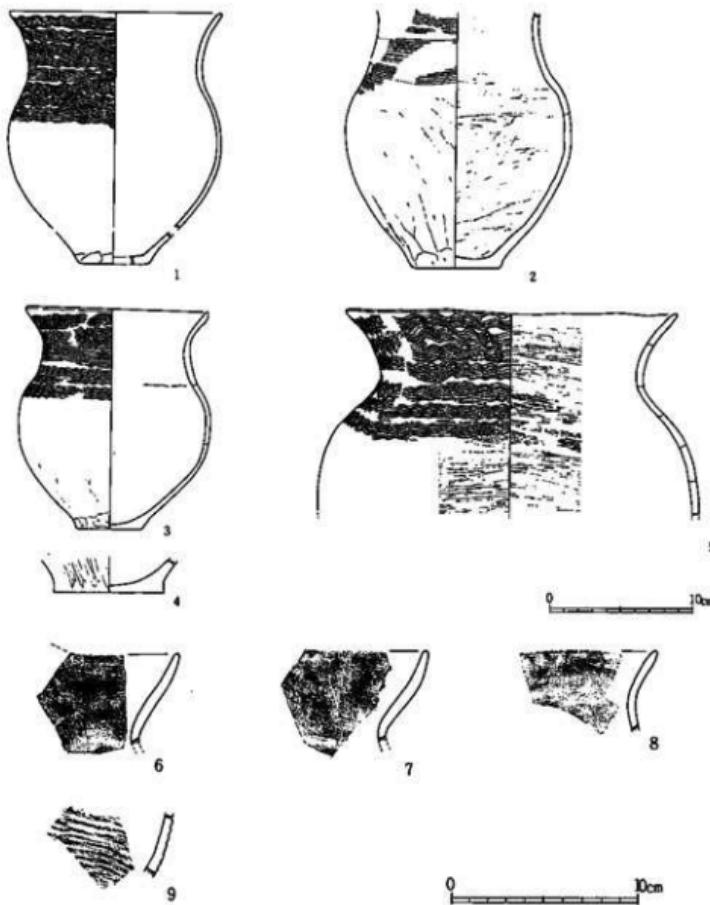
第311図 第7号住居址



第312図 第7号住居址埋甕炉



第313図 第7号住居址土器および炭化材・燃土出土状態



第314図 第7号住居址出土遺物

土器観察表

回収号	器種	深 度(cm)	色		被成	成形・開口方法		備考
			外	内		外	内	
1	瓶	15.0	4.6 (17.6)	暗褐色	普通	ナデ・擦接文	ナデ	
2	x	—	7.2	—	暗褐色	* ケズリ・ナデ・擦接文	ケズリ・ナデ	
3	x	14.0	5.6	15.5	褐色	良好	〃	
4	x	—	7.8	—	右褐色	* ナデ・イガキ	ナデ	
5	x	23.4	—	—	褐色	ハテノ・擦接文・イガキ	ハテノ・イガキ	埋藏炉
6	器?	—	—	—	灰褐色	* ナデ	ナデ	
7	x	—	—	—	明褐色	〃	〃	片口?
8	器	—	—	—	褐色	ナデ擦接文	ナデ	四一侧体
9	*	—	—	—	暗褐色	タタキ	〃	

第Ⅳ章 調査 遺跡

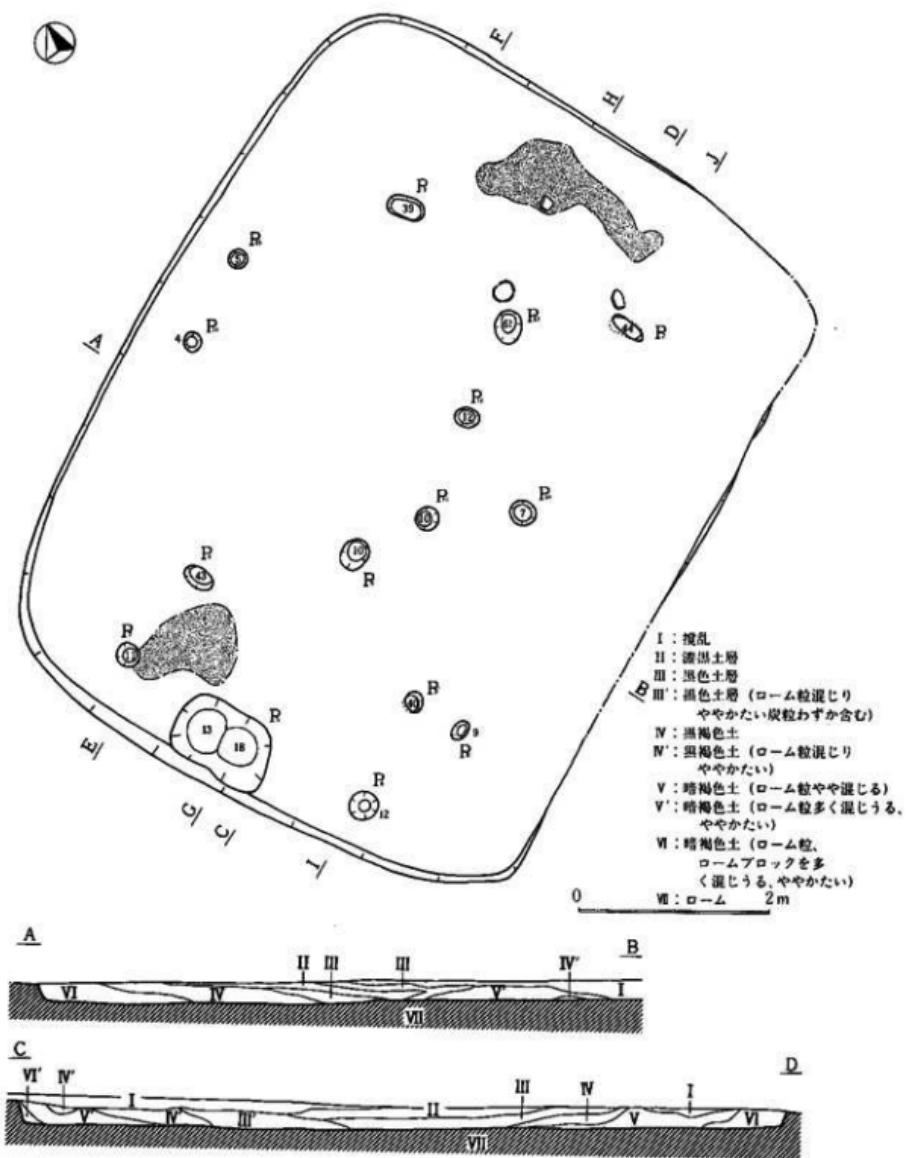
周溝が存在しないのは、他の住居址と同様である。主柱穴は、P₁～P₄の4ヶ所確認され、4本柱であったことがわかる。主柱穴の径は20cm前後であるが深さは—35cm前後で、他の住居址に比してやや浅い。この他、多数の小ピットが存在するが、支柱穴や出入口施設に伴うピットと明確に判断できるものは存在しない。ただし、北東コーナーに位置するP₅(55×50—35cm)は、内部から半完形土器(3)を出土しており、貯蔵穴の可能性を指摘できる。炉址は、住居址内西寄りの主柱穴を結ぶライン上上り埋甕炉が検出された。菱形土器の口縁部～胴上半部を正位に埋設して火壺としたもので、炉床には、10cm大の3片の土器片が散かれていた。使用された菱形土器は二次焼成をうけ赤変しており、炉床のロームもわずかに赤化していた。

遺物 本址は焼失住居であり、他の住居址に比して、比較的多くの遺物の出土をみている。遺物の多くは床面直上より出土したが、それでも完形、半完形土器の出土は埋甕炉を除くと3個体のみである。

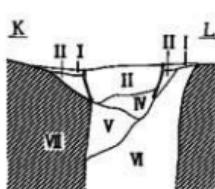
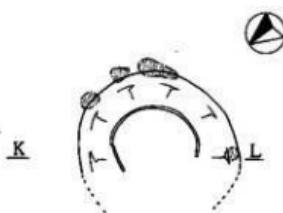
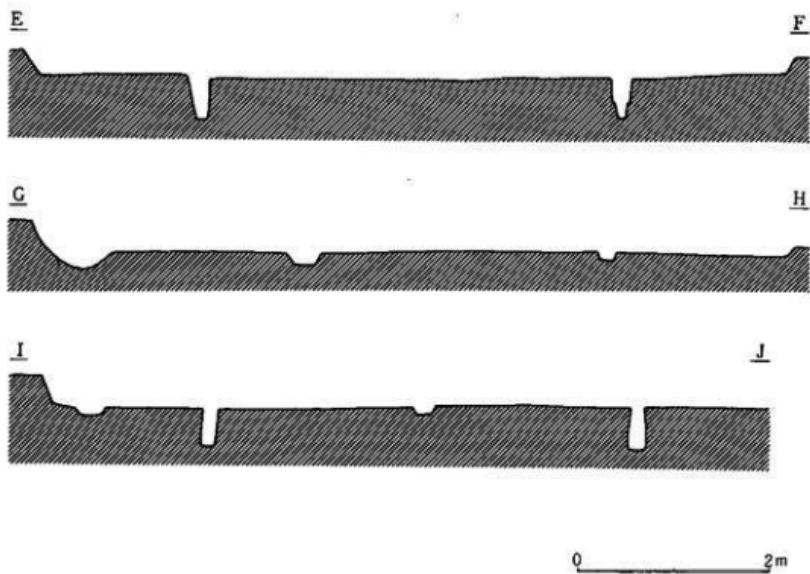
(1)は図上復元によって器高17.6cmと推定されるやや小型の菱形土器である。胴部最大径と口徑がほぼ同じで口縁部がゆるやかに外半する器形をとり、口縁～胴上半部にかけては櫛描波状文と纏状文によって飾られる。(2)(3)もやや小型の菱形土器であり、ほぼ(1)に近い器形をとる。両者とも口縁部から胴上半部にかけて櫛描文が施され、胴下半部にはケズリの痕跡を留める。このうち(3)に施される櫛描文は、4～5回の継続を伴う右回りの中部高地型櫛描文である。(5)は埋甕炉に用いられた菱形土器であり、胴下半部を欠損する。口縁部から頸部にかけ6帯の櫛描波状文で飾られ、櫛描文は右回りで3～4回の継続を伴う。内外面ともに横方向のヘラミガキが加えられ、部分的にハケメも認められる。(6)(7)は、口縁の一部に突起(片口か?)を有する同一個体の土器の口縁部破片であり、内外面ともに丁寧な横ナデが施される。(8)は菱形土器口縁部破片で、口縁には無文帯を有する。なお、(9)は外面にタタキ目の施される土器破片であり、菱形土器の破片と推定される。タタキ目の施される土器は、今回の調査では、この第7号住居址覆土より小片が2点出土したのみである。この他、図示し得なかったが、赤彩を施す大型壺形土器の胴上半部の破片も出土している。

第8号住居址

造構 本址は第6号住の北側に位置する住居址である。重機による削平後に暗褐色の落ち込みとして確認されたが、この辺りは長芋の耕作による擾乱が激しく、また、かつて削平を受けていたためプランの確認は容易ではなかった。このため、東西・南北両方向に十文字にサブレンチを設け床面及び壁の確認を行い、その後にはじめて掘り下げを開始した。覆土を掘り下げてゆくと、住居内北壁寄りと南西隅の2ヶ所に集中して焼土の堆積及び炭化材の存在が認められ、本址が焼失住居址であることが判明した。炭化材の残りは悪く、径5cm程の木材の炭化材がわずかに出土したのみであるが、焼土は2ヶ所に集中して分布しており、第7号住と同様、床面より少し浮いて存在した。また、床面上を中心として、比較的多くの遺物が散在して出土している。床面精査により、4ヶ所の主柱穴と埋甕炉が検出されているが、埋甕炉は深耕のため半分破壊を受け

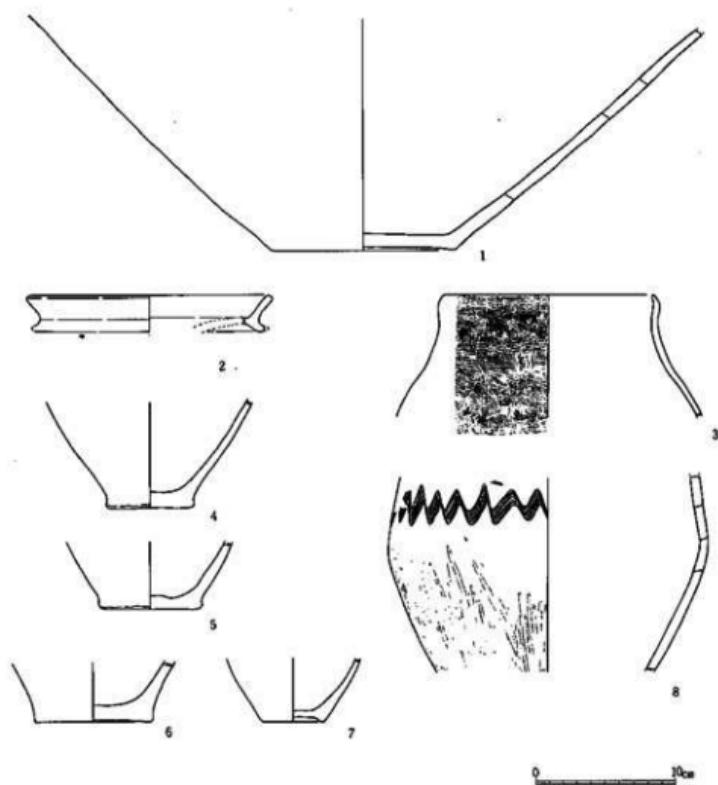


第315図 第8号住居址



I : 焼土 (炭粒含む暗褐色土)
 II : 焼土 (鮮赤色)
 III : 黒褐色土 (炭粒、焼土粒をわずかに含む)
 IV : 二次堆積ローム (上部赤色)
 V : 黑色土
 VI : ローム

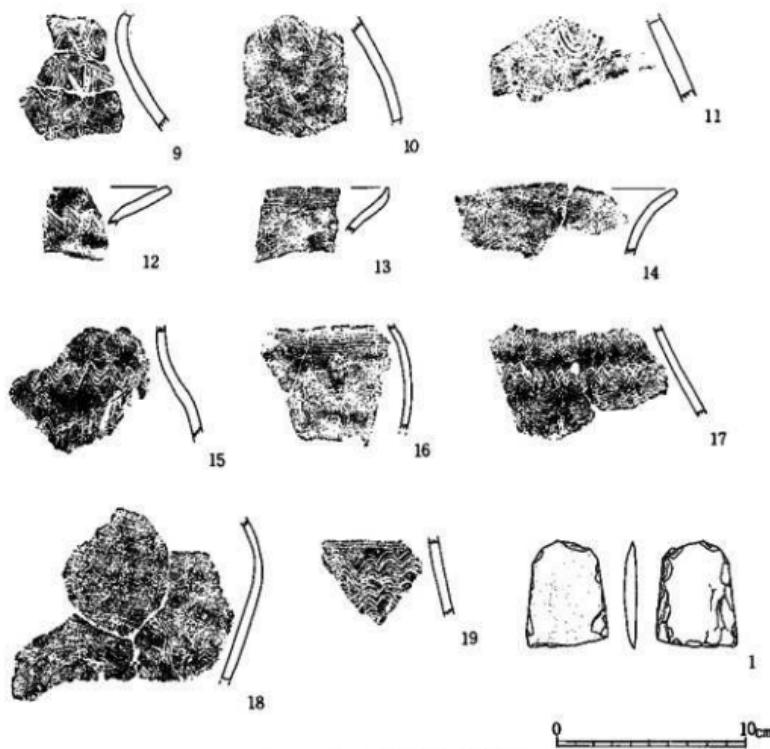
第316図 第8号住居址エレベーションおよび埋甕炉



第317図 第8号住居址出土遺物(1)

土器観察表

固番号	種類	油 種 (cm)			色 調		焼成	成形 制造 方法		備 考
		口幅	底径	高さ	内	外		外 国	内 国	
1	碗	—	13.6	—	茶褐色	褐色・茶色	良好	ハケナダ	ハケナダ	赤彩
2	臺	17.2	—	—	褐色	褐色	+	ミガキ	ナゲ	
3	盤	14.7	—	—	暗褐色	墨褐色	+	ナゲ・西様式	ナゲ	
4	—	6.2	—	—	褐色	褐色	普通	ナゲ	+	
5	—	7.2	—	—	暗褐色	褐色	良	+	+	
6	—	8.3	—	—	明灰褐色	明灰褐色	+	+	+	
7	—	4.3	—	—	白褐色	暗褐色	普通	+	+	埋蔵印
8	盤	—	—	—	暗褐色	—	良好	ナゲ・ミガキ・西様式	+	



第318図 第8号住居址出土遺物(2)

土器観察表

図番号	断面	形 品 (cm)			色 调	焼成	成形調整方法		備 考
		口径	底径	高さ			外	内	
9	▲	-	-	-	明褐色	明褐色	良好	ナデ・擦磨文	+
10	*	-	-	-	*	*	*	*	+
11	*	-	-	-	明灰褐色	明灰褐色	普通	ナデ・擦磨文	+
12	▲	-	-	-	灰褐色	灰褐色	良好	*	+
13	*	-	-	-	明褐色	明褐色	*	*	+
14	*	-	-	-	灰褐色	灰褐色	ナデ	*	+
15	*	-	-	-	*	*	ナデ・擦磨文	*	
16	*	-	-	-	明褐色	暗褐色	良好	*	+
17	*	-	-	-	灰褐色	灰褐色	中等	*	+
18	*	-	-	-	明褐色	明褐色	良好	*	+
19	*	-	-	-	明褐色	明褐色	*	*	+

土器観察表

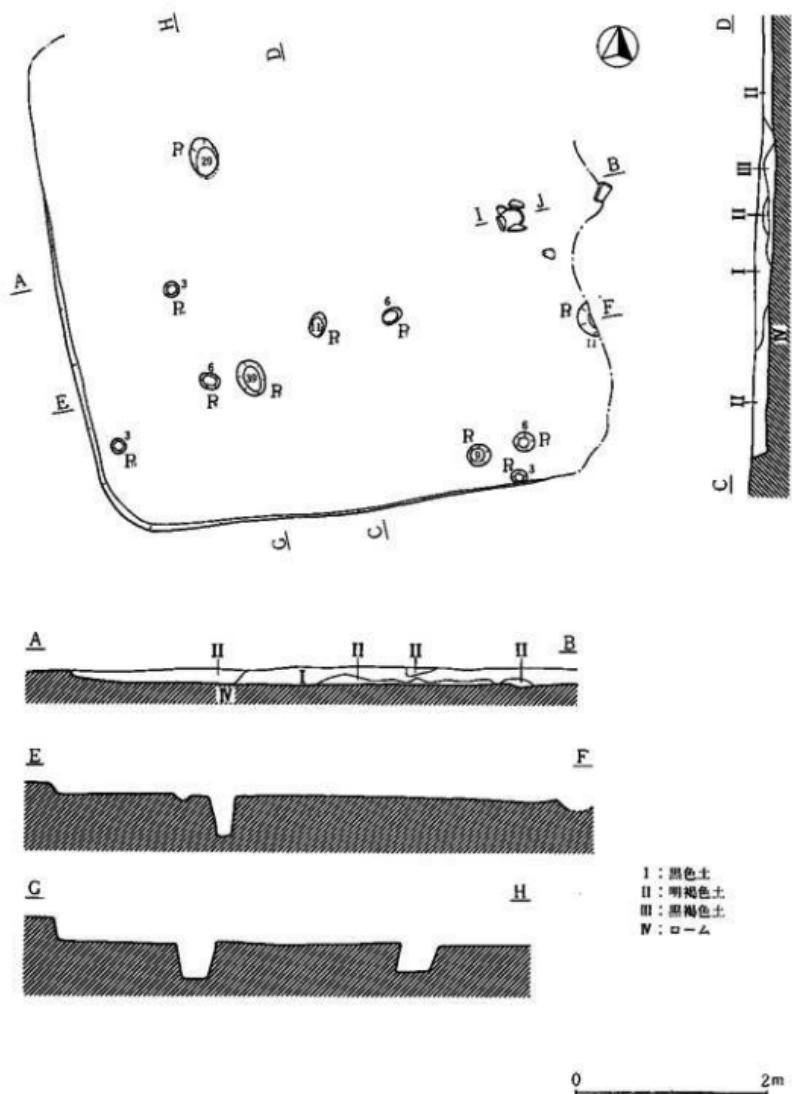
図番号	種 別	石 质	大きさ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備 考
1	打撲石斧	頁岩	5.5	4.3	0.6	24	

ていた。

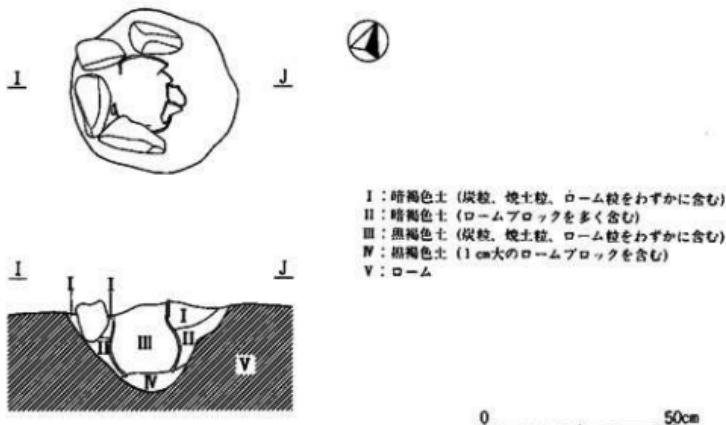
隅丸長方形プランを呈する住居址で、規模は今回調査された弥生時代の住居址の中では最大の $8.05 \times 6.35\text{m}$ の規模を有する。主軸はN-38°-E方向を示し、最小規模の第4号住と同じく、他の住居址とはやや異なる主軸をもつのは注目される。竪穴はローム層を垂直に近く掘り込んで構築されるが、後世の削平をうけているため壁の残りはあまり良好とは言えない。南壁及び西壁は検出面から約20cmの壁高を測るが、東壁、北壁の残りは悪く、東壁の一部には、既に床面まで削平の及んでいる場所もみられた。床面は、深耕による擾乱で破壊された部分もあるが、全面にわたって平坦堅緻なタタキ状の床面が確認され周溝は存在しない。主柱穴はP₁～P₄の4ヶ所で検出され、いずれも-40～-45cmのしっかりした掘形をなす。平面形は径20cm程の円形のもの(P₃)の他に、梢円形や長円形(P₂)の主柱穴もみられる。また、他住居址と同様、住居址内には-5～-10cm程の多数の小ビットが存在する。これらの多くは規則的な配列を示し、間仕切り等のための支柱穴として捉えられるものが多い。なお、南壁下中央より検出された深さ18cmを測る双円形のビットP₅は、埋土に明瞭な切り合いが認められなかつたため1つのビットとして扱った。出入口縁部施設に伴う造構の可能性も考えられるが判然としない。炉址は、北壁寄りの内区から埋甕炉が検出された。斐形土器胴部を正位に埋設して火壺としており、炉周辺の土は加熱により鮮やかに赤化していた。なお、炉内の土を持ち帰り、フリイにかけ洗浄を行ったところ、10粒程の炭化米が摘出された。

遺物 本址も第7号住と同様焼失住居址であるため、比較的多量の土器が出土した。ただし、遺物の多くが床面上もしくはやや浮いた位置から出土しているにも関わらず、完形、半完形土器の出土はほとんどみられなかった。

(1)は住居址内中央床面上からつぶれた状態で出土した。大型斐形土器の胴下半部で、ほぼ全周するにも関わらず胴上半部等の破片が存在しないことから、最終的には鉢として使用されていた可能性がある。内外面ともに丁寧なハケナデの加えられる土器で、外面上端部には赤彩が認められる。(2)も外面に赤彩の施される土器である。器台口縁部と推定されるが、内面にヘラミガキ・赤彩が施されず、比較的雑な器面調整であることから、脚部の可能性もある。鉢状の張り出しを有し、先端部をわずかに欠損する。(3)は口縁部が外せず、口縁端部のわずかに内湾する器形をとる斐形土器であり、櫛描波状文・簾状文によって飾られる。(8)は埋甕炉に使用された斐形土器で、胴上半部には2帯以上の比較的シャープな櫛描文がめぐる。櫛描文は右回りで、断絶は1回のみである可能性が強い。胴下半には縱方向のヘラミガキが加えられる。(9)～(11)は斐形胴下半部の破片であり、(9)(10)には波状文が、また(11)には円弧文が施される。(12)は、口縁部の強く外半する天竜川水系の斐形土器口縁部破片であり、口縁下には波状文がめぐる。なお(13)～(18)は波状文等の施される斐形土器の口縁部・胴部破片であるが、(13)、(14)については斐形土器の破片である可能性も有する。また、本址からは1点のみではあるが小型打製石斧が出土している(1)。覆土内出土のため、確実に弥生時代の遺物とは断言できないが、剝片を利用した石器であり、片面には自然面を残す。刃部は直線的に造り出される。真岩製である。



第319図 第9号住居址

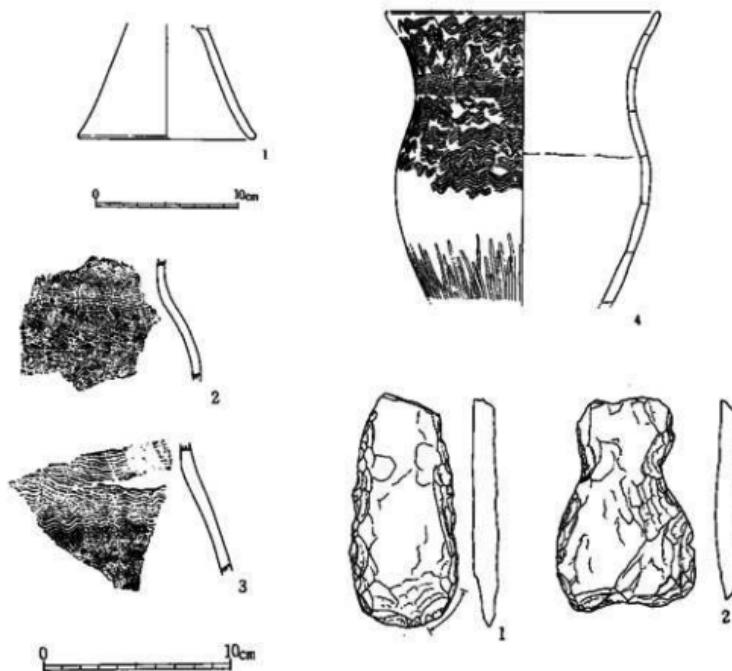


第320図 第9号住居址埋甕

第9号住居址

遺構 本址は、II地の北東隅で検出された住居址である。重機による表土削平後に漆黒色の落ち込みとして容易に検出することができたが、北側が調査対象地からはずれ、また東側が後世の削平で既に床面まで破壊をうけていたため、実際に確認できたのはプランの約2分の1に過ぎない。本址も、第8住と同様に長芋の深耕で搅乱をうけていたが、主柱穴、埋甕は良好な状態で検出されている。

竪穴は隅丸長方形プランを呈する。規模は、長軸方向5.8m以上(7m前後か)、短軸方向5.3を測り、主軸は、第5、6、7号住とはほぼ同じのN-69°-E方向を示す。壁は、東側及び北側ほど削平が著しいため遺存状況は悪いと言えるが、南壁西寄りの観察ではローム層を垂直に近く掘り込まれ、壁高は最高19cmを測り、北側及び東側に向かって壁高は漸減する。床面はほぼ全面にわたり平坦堅緻な床面が確認され、周溝は存在しない。ただし、深耕による搅乱は床面にまで及んでおり、南北方向に何条もの搅乱溝が走る。主柱穴は、4本柱と確定されるうちの3ヶ所の柱穴($P_1 \sim P_3$)が確認された。いずれも 40×25 cm程の椭円形の平面形を呈し、深さは-35~40cmを測る。この他、深さ10cm以下の小ピットが8ヶ所で検出されており、これらの多くは支柱穴としての機能を果たしていたと推定される。炉址は、東壁寄りの内区から、縁石を伴う埋甕が検出された。底部を抜いた甕形土器を正位に埋設して火壺としたものであり、縁石として4個の細長い円礫が石面炉状に配されていた。ただし東壁側のみ縁石の存在は認められず、床面上には焼土及び炭粒が飛び散っているのが観察された。縁石に使用された礫は焼成をうけ変色していたが、炉付近及び炉床の土はほとんど赤化していない。なお、この炉址から約1m東壁寄りの床面では、



第321図 第9号住居址出土遺物

土器観察表

図番号	種類	底径(cm)	高さ(cm)	色	施成	成形調整方法		備考
						外面	内面	
1	高杯	-	12.5	-	赤色	直線	ハケナダ・ミガキ	赤形
2	甕	-	-	暗褐色	高褐色	*	ナダ・間隔文	*
3	*	-	-	褐色	*	ハケナダ・ミガキ・施成文	ケズリ・ミガキ	埠塗灰・表面炭化物
4	*	19.3	---	暗褐色	褐色			

石器観察表

図番号	種別	石質	底径(cm)	高さ(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	
							外	内
1	打製石斧	頁岩	12.2	5.6	1.2	128	刃部に部分的に使用痕がみられる	
2	*	*	10.8	7.2	1.1	130		

20×12×5 cmの板状の蝶が床面に据え置かれる状態で出土しており、台石等に使用されていた可能性を指摘できる。

遺物 遺物の出土量は少なく、埋甕炉に使用される土器以外に固化し得た土器は3点のみであるが、石器として2点の打製石斧が床面よりやや浮いた位置より出土している。

(1)は外面に赤彩の施される高杯脚部で、脚部のみ完存する。また、内面にも赤色塗彩時の汚れが部分的に付着する。(2)(3)は甕形土器の頭部・胴部破片で(2)には彫描波状文と簾状文、(3)には彫

第3節 向陽台遺跡

描波状文が施される。(4)は埋甕炉に使用された甕形土器で、底部が抜かれている。頸部の簾状文帯を挟んで、口縁から胴上半部にかけて描波状文を充填し、胴下半には縱方向のヘラミガキが加えられる。備描文は右回りで複数の断絶を伴う。また、石器(1)(2)は打製石斧であり、この付近には縄文時代の遺物の混入が少ないと想定される。(1)は短冊型・(2)は分銅型を呈し、両者とも頁岩製である。

第20表 向陽台遺跡住居址一覧表

縄文時代早期

住居	場所(グリッド)	プラン	規 模(cm)	壁 高	炉構造	位 置	周溝	内部施設	備 考
1	I, J, K-101・1・2	円 形	東西730×710	23・13・25・22	—	—	なし		
2	J・K-2, 3, 4	隅丸長方形	東西600×510	16・7・14・8	—	—	なし		
3	H・I・J-2, 3, 4, 5	円 形	南北884×856	36・10・15・20	—	—	なし		
10	G-1, 2	椭 圓 形	東西402×(370)	—・9・12・—	—	—	なし		

縄文時代前期

住居	場所(グリッド)	プラン	方 向	規 模	壁 高	炉構造	位 置	周溝	内部施設	備 考
11	C-2・3	隅丸方形	N-62°-W	495×450	29・38・38・23	地床炉	中 央	なし		
12	D, E-3・4	"	N-32°-E	490×485	39・29・37・31	地床炉	中央寄り	なし		
13	B-8・9	円 形	—	445×436	37・23・25・20	地床炉	中 央	全周		追晩
14	F, G-10・11	隅丸方形	N-65°-E	437×468	27・35・29・31	地床炉	中 央	なし		"

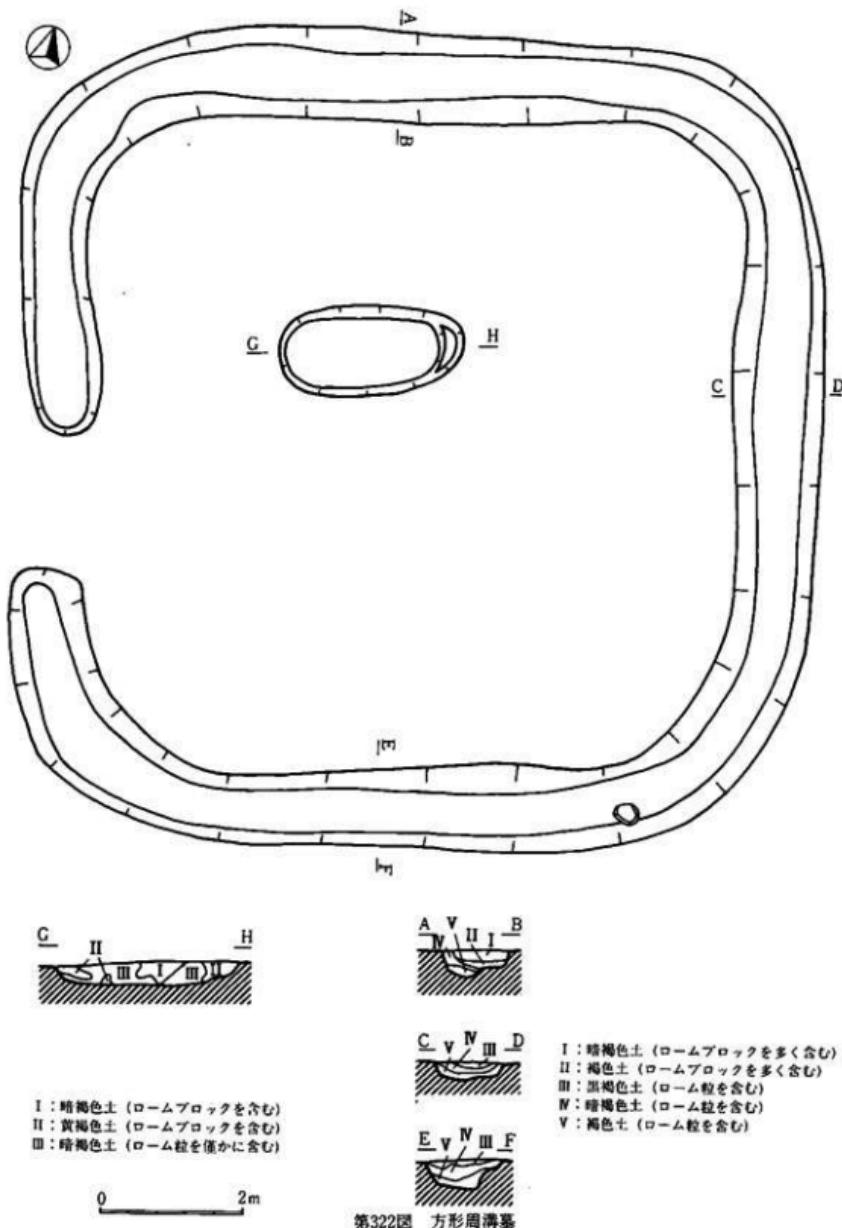
弥生時代

住居	場所(グリッド)	プラン	方 向	規 模	壁 高	炉構造	位 置	周溝	内部施設	備 考
4	H-I-6・7	隅丸長方形	N-14°-W	430×360	21・13・17・18	石窯炉・埋甕炉	南	一部		
5	I-J-K-7・8	"	N-63°-E	620×520	50・39・40・42	埋 甕 炉	西	なし		
6	F-G-H-8・9	"	N-74°-E	615×520	43・27・40・42	埋 甕 炉 2	東	なし		建替
7	I-J-10・11・12	隅 丸 方 形	N-72°-E	640×550	40・26・35・26	埋 甕 炉	西	なし		燒失家屋
8	C-D-E-8・9・10	隅丸長方形	N-38°-W	805×635	—・18・20・18	埋 甕 炉	北	なし		"
9	A-10・11	"	N-69°-E	578×537	—・7・19・—	埋 甕 炉	東	なし		

(2) 方形周溝墓

調査区 I 地区東南に位置し、周溝東隅に縄文前期の第14号住居址が切り合っており調査丘陵上には、北5mの位置に縄文前期の住居址第13号住居址、北西7m下がった場所には同じく縄文前期の住居址の第11号、第12号がそれぞれ検出されている。方形周溝墓検出の結果、年代を決定し得る遺物は出土されなかった。本調査区より西方100m下がったII地区より、弥生の住居址が発見されているので、住居を見下す場所に墓を構築するという墓域の位置関係が示されている。

平面形 北溝は、巾1.2mで確認面からの深さは24~39cmである。壁はほぼ垂直に掘り込まれており、底面は全般的に平坦面をなす。東溝は、巾1.1mで深さは24~30cmで底面は平坦である。南溝



第322図 方形周溝墓

は、巾1.1~1.2m、深さ24~26cmを測る。掘り込みは周溝内側が一部なだらかな部分もあり、東北溝と少し変化が見られる。西溝は、中央部が陸橋部で切断されており巾1.0~1.2mで深さは、陸橋部南側で37cm、北側で36cmを示す。掘り込みは他溝と同じ傾斜である。溝内の土層は5層に区分され下位から第Ⅰ層部はローム粒を多く含む褐色土、Ⅱ層部はローム粒を僅かに混入している暗褐色土、Ⅲ層部はローム粒含有はⅡ層と同じであるがやや黒っぽい黒褐色土である。Ⅳ層、Ⅴ層はいずれもロームブロックを多く含む褐色土及び暗褐色土であるが、周溝部分では下部層にローム粒を多く含まれる傾向にある。

主体部 中央部より北寄りに位置し、主軸方向は周溝とほぼ一致する。土壌は、東西2.6m、南北1.2mの隅丸長方形の平面形態を有し、ほぼ垂直に掘り込まれている。底はほぼ水平で平坦地をなしているが、東側には一段、段差が見られる。覆土は、3層に区分され下部よりローム粒を僅かに含む暗褐色土のⅢ層部、ロームブロックを多く含む黄褐色土のⅡ層部分、Ⅰ層部はロームブロックを含む暗褐色土層であった。

遺物 周溝内より縄文前期の土器片、黒曜石等が出土した。これは付近が縄文前期の住居址によつて占地されているためそちらからの混入かと思われる。主体部からは石錐1点のみ出土しただけであるがこれも同様かと思われる。本周溝の年代は、Ⅱ地区から弥生後期の集落址が検出されていることからほぼ同一時期ではないかと推定された。

6 成果と課題

1) 縄文時代早期

(1) 向陽台3号住居址出土の縄文時代早期土器

1 押型文土器

a 土器製作技術と分類

向陽台3号住居址（以下3住と略す）出土の押型文土器は総数479点（細片を除く）であるが、すべて山形文土器という極めて単純な在り方を示している点は貴重である。また、大部分の土器（84%）に黒鉛が含まれるため、無文部破片でも容易に抽出することができる。ただし、黒鉛を含まない山形文土器の無文部については、胎土、整形が酷似するため完全に抽出できていない。

押型文土器の文様分類、成形技術については先駆の多くの業績があるが、向陽台遺跡に地理的に近い樋沢遺跡の出土資料の分析があるため、ここではそれを基に記述を進めていく。（『樋沢押型文遺跡調査研究報告書』1987年 第5章79頁~107頁 小杉康。以下『樋沢』と略す）

なお、図版下の説明表の記号は、以下の説明中に用いた分類の略記である。

押型文の原体（文様）

3住出土の山形文土器の文様は、次の3種に大別される。

第1種山形文 最も一般的な山形文、比較的小さな山が2山単位で1周に刻まれる例が一般的である。原体を回転押圧して器面に表わされた文様は、押圧の力の差によって若干表現が異なつ

てくるが、一般的には、陽部が細く、連続する山形の各辺は直線的ではなく連弧状を呈し、山・谷の角が丸味を帯びる例が多い。さざ波状を典型例とする。しかし、例外的に一山の幅が9mmを越える大きな山形も存在する（第225図58）。

第2種山形文 大ぶりな山形文、比較的山の幅、高さが大きく、陽部が太くて、連続する山形の各辺は直線的に連なり、山や谷の頂部はきれいに角張っているものが多い。鋸歯状を典型例とする。

第3種山形文 山形のゆるやかなものの、なかには山形文といえないような例もある。波高の低く、波幅の長い波状を典型とする。山が崩れて、かつて山の低いものなどもここに含めて考えていく。

原体端部の処理（第323図）

押型文原体を回転押捺して表わされた文様は、基本的に一条の帯状となることはいうまでもないが、刻まれた文様の形とともに、原体の端部の処理の仕方によってささやかなバリエーションを見ることができる。この端部の表現は代表的な2種に大別できる。波状になるものと直線状になるものとである。前者はさらに鋸歯状と連弧状との2種に分れるが、連弧状のものはまたいくつかの変化が観察される。

第1種(1) 鋸歯状の角張った山（第323図1）

〃 (2) 円弧状の丸味のある頂部に対し谷部が角張って大波状になる（2）

第2種(1) 円弧状の丸味のある谷部に対し、頂部が角張って、第1種(1)とは天地が逆のさざ波状になる（3）

第2種(2) 波状の丸味のある（4）

第3種 直線状になり、山は表現されない、山と端部の間に余白を残す

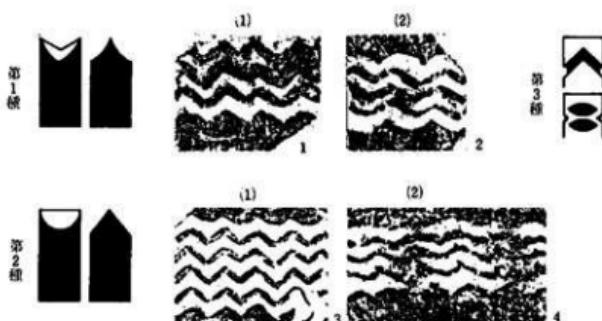
第4種 第3種に同じながら、山と端部の間に余白を残さない

このような器面に表現された端部形状の差は、押型文原体の端部処理の相違を示しているに他ならない。向陽台3住に見られる端部処理は第323図のようになる。

第1種、2種の中の細別は、微細な差であり、特に鋸歯状か波状かという見分けは、やや客觀性を欠く嫌いがある。しかし、実際に端部を削る時には、器面に表われる以上に大きな差があることが注意される。第323図原体模式図に見るように、端部を第2種のように左右から斜（はす）に切り落したままになっているとさざ波状の文様効果を生むが、斜に切った後、切断面に切り込みを入れて、二叉状に削らないと鋸歯状の交差は出でこない。そして、第1種の端部の角がとれて丸味を帶びると(2)の大波状に、同じく第2種の角がとれて丸味を帶びると(2)の波状になる。

これは、従来より言われている山形の割り付けや刻み方と関連することも考えられるが、刻み方の相違と思われる山形文第1種と2種の相違と、端部処理の間に相關性が強く表われていないので、あるいは原体の素材の形状もしくは、彫刻のやりやすい長い棒に刻んだ原体を切り落す作業の切断方法の相違などから生ずるのでないかと考えたい。

端部処理と山形文1～3種の関係は、強い齊一性を示すわけではないが、第2種山形文に大波



第323図 押型文原体の端部処理

状の第1種(2)が多く、第1種にさざ波状の第2種(1)が多い傾向にある。

文様構成

押型文原体の回転押捺によって表わされた帶状の文様（押型文帶）を基本単位に、描き出された文様が、押型文土器の大きな特徴である。いわば直線的な押型文帶を組み合わせて、器面にデザインした土器であり、自由に曲線的に描くことができないため、いきおい単純な、押型文帶の構成——これを文様構成と呼ぶ——となっている。

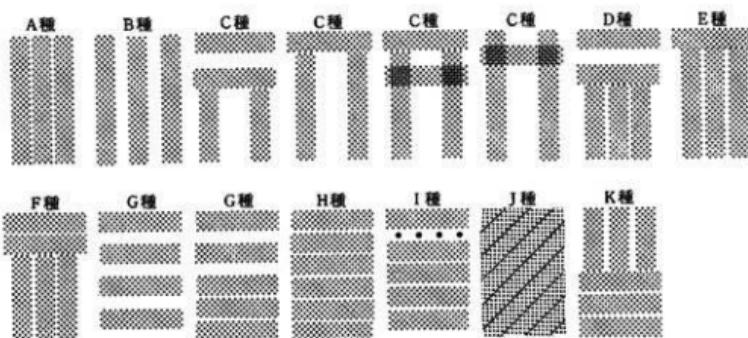
文様構成は、押型文帶を無文部を残さないように方向性をもって密に並べた密接構成、無文部を残して並べた帯状構成、押型文帶があまり方向性を持たず重なって施文されている重複構成がある。前二者は押型文帶の幅と無文部を意識してデザインしている。

これらは、さらに横方向に回転押捺した押型文帶——横位、縱方向に——縱位、あるいは斜め方向——斜位に回転押捺した押型文帶の組み合せによって、種々の文様構成が生まれる。かつて拙著「押型文土器編年の再検討」（信濃23-2）において押型文系土器群の文様構成について示したが、その後の研究の中より整理されたものが小杉康氏によって示されているのでここに掲げた。第324図の樋沢遺跡押型文土器群におけるタイプの認定に必要となる文様構成として示された模式図がそれである。向陽台3住は極めて単純な在り方をしているので、A-K種の説明は『樋沢』を参照されたい。

向陽台3住の文様構成は2・3片のB種（C種4に含めて考えられる）の疑いがあるものを除くとすべてC種の文様構成という単純な在り方を示している。樋沢遺跡では、C種の中のバリエーションは4例が検出されているが、ここではそこに一例を追加して5例となる（第325図）。

文様構成C種 口縁部の横位帶状とこれに直交する縱位帶状とからなる。異方向の直交する帶状構成。

C種(1) 口縁部に横位に2带、重ならないように以下胴部は縱位に何帶か垂下する。縱位帶



第324図 橋沢遺跡の文様構成A種～K種



第325図 向陽台遺跡の文様構成C種(1)～(5)

は間隔が広いものと狭いもの（第228図96）など若干のバラエティーを持つ。大部分が口唇端部に施文をするが、口縁部内面は施文されない。

- C種(2) 口縁部に横位に1帯、以下に重ならないように頸部から脣部は縦位に何帯か垂下する。(1)に比べ頸部の1帯が少ない構成である。(1)と同様に縦位帯の間隔には広狭（第228図86）があるが、65・66のようにかなり間隔が広い例もある。この2点も縦位帯は見られないがおそらく間隔広く縦位帯が垂下すると思われる。口唇端部施文は(1)と同様である。
- C種(3) 口縁部に横位に2帯、その後で、口唇直下の1帯には重ならないように、頸部の1帯は重ねて切断するように縦位に何帯かを垂下させる。口唇端部の施文と口縁部内面の施文が見られるが、3住では個体数が多くない。
- C種(4) 口唇直下に若干の無文部をおいて、横位に1帯、それを切るように重ねて口唇直下から縦位に何帯か垂下させる。ここでは類例が明確ではなく、B種口縁と区別がつかないので、大勢の占めるC種(4)に一応分類した（第226図59～61）。
- C種(5) 口唇直下に広い無文部をとり、頸部あたりに横位に1帯、この横位帯を突き抜けることなく、重ねて施文することなく、以下、縦位に何帯かを施文する。ただし、こ

れについては明確な図上復原個体すらなく、あくまでも予測であることをお断りしておきたい。第224図51は、口縁部破片と胴部破片①-③が接合していない。同一個体破片と思われたためあえて復原を試みた復原想像図である。同62-64、第231図145は、無文部下に明らかに横位帯の端部を見る事ができるので、C(4)とは区別はつかないものの、63のような幅広い無文部の例などは、51の例と合わせて考えないと理解に苦しむため、あえて62-64をC(5)とした。同例は遺構外にも出土している(第298図249・250)。63は黒鉛を多量に含み、薄手の胎土、整形から無文土器ではなく、どうみても押型文土器であり、C(5)に加えることで理解したい。口唇端部の施文はあるものとないものがある。黒鉛を含まないものは、口唇端部施文を普通とするらしい(第298図258)。

土器成形技術

押型文土器は、全体に薄手のものが多いため、無文土器に比べて成形技術の分かれる例は少なかった。

向陽台の押型文土器に成形痕の残る例は第326図にまとめた。3住以外の例も加えてあるが、時期的に大差ないので該期の成形技術と見てよいであろう。第1手法(後述)の例は第326図321、328、329に、第2手法の例は326、第4手法の例は322、324にみることができる。323のような短い幅の積み上げは、むしろ部分的な粘土の貼り付けとみた方がよいと思われる。器壁が薄いためか第3手法については明確ではない。底部の成形は破片が少なくはっきりしない。

口唇部の調整は次の2通りが認められた。(第327図)

口唇部形態1 最後に積み上げる粘土紐を、口唇端部が厚くなるように調整し、広い端部を作り出す。

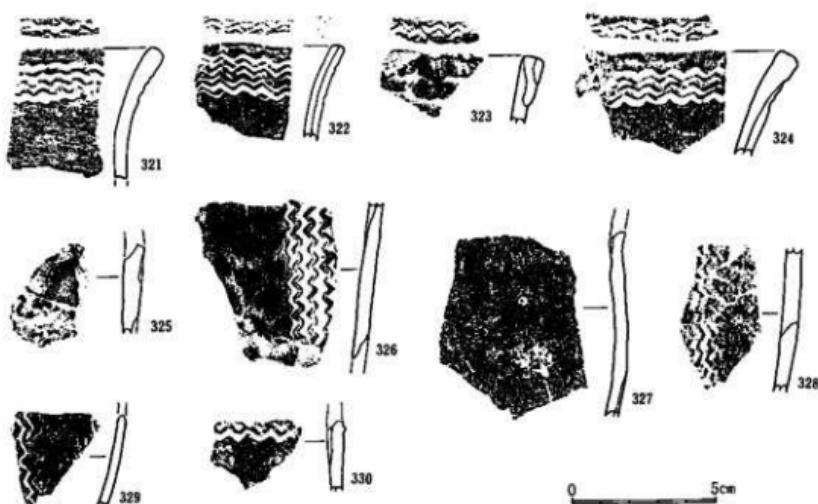
口唇部形態2 最後に積み上げた粘土紐は、下位の器壁と同じ厚さに調整される。

口唇端部に施文する文様構成C種の中にも、口唇部形態1をとる例と2の例と両者がある。端部施文にあまり規制されていないことは第226図62-64のように、施文がなくても肥厚することで明らかであろう。

押型文土器の胎土は、大きく黒鉛を含まないものと含むものに分れる。前者はさらに、白色の粒(長石)、半透明のクモリガラス状の粒(石英)、金色に光る黒雲母、黒く光る細長い結晶状の粒(角閃石か)、透明のガラスのように光る粒を多量に含み、一見して無文土器の胎土と見紛う胎土の一派と、含有物の少ない、とくに雲母や黒くあるいは透明に光る粒を含まない一群とある。前者は厚手で近接する福沢遺跡の土器に酷似する。以下簡単に胎土の分類を示しておく。

胎土1、黒鉛を含むもの 白色、赤色の粒、クモリガラス状の半透明の粒、黒雲母、黒鉛の粒などの含有物を胎土に含む、胎土の新しい割れ口は黒色。

- (1) 含有物が多いが、器面、とくに外面にはあまり目立たず、器面は青黒色を呈する。
- (2) 含有物が多量に含まれて内面にザラザラに露出する。器面は青黒色を呈する。
- (3) (1)に同じながら内外面が山吹色、黄褐色など黒鉛を含まない土器に似た色調になる。



第326図 土器成形技術資料(1)

土器観察表

単位: cm

No.	層位	分類	角数	基部	底体・底轍	底轍	文様	文様	口幅	地土	整形	遺物	地	部位	備考
321	坪型文C2	3	2	4.1 - 12.7	1(2)	山1	C	1	1(1)	1 - 2	21 - 1 H -	1	口縁部		
322	"	4	2	4.8 - 14.0	2(2)	山1	C	2	1(4)	"	257	"			
323	"	-	-	-	-	山1	C5	1	1(3)4		21 - 3 H - 1000	"			
324	円型文C3	3	2	5.3 - 12.0	1(2)	山1	C	1	2(1)	1 - 2	30 - B - K 102 - 3	"			
325	坪型文C2	"	-	-	-	山1	C	1	1(4)	1 - 2	21 - 3 H - 1024	"	頭 部		
326	"	3	2	3.6 - 11.4	2(2)	山1	C	1	1(4)	1 - 1	"	481	"		
327	"	4	-	---	-	-	-	-	1(3)4	1 - 1	"	772	"		
328	"	3-4	-	-	-	山1	C	1(1)	1 - 1	30 - H102 -	25	"			
329	"	-	2	4.7 -	-	山1	C	1(1)	1 - 1	21 - 3 H -	310	"			
330	"	-	-	-	-	1(2)	山1	C	1(1)	1 - 1	"	611	"		

(4) 含有物が少ない。

2、黒鉛を含まないもの

(1) 白色・赤色・灰色の岩片、赤色・透明の光る粒を多く含む。

(2) 含有物が少ない。

器面の整形は、無文部が多く残されているため、内・外面部とも十分に観察できる。全体においていわゆるナデられて、内面は無文土器と極端な差を見せる。I 外面、II 内面に分けて示す。

なお、土器観察表の整形欄は左が外面、右が内形を示す。

整形 I (外面) 1 若干の凹凸を残すが、なめらかに指ナデを行っている。ヘラ研磨はない。

2 若干あるいは部分的に粒子の移動した擦痕が走る。

3 含有物が露出してザラザラになっている。

II (内面) 1 外面と同程度になめらかに整形される。



第327図 口唇部調整と口唇部形態

2 ザラザラに荒れて、整形の痕跡が見られない。

b、押型文土器の分類

桶沢遺跡の押型文土器群は、縄文・撲糸文・無文土器も含め、33タイプに分類して提示された。向陽台3住出土の押型文土器、無文土器は、基本的にそれとかわるところがないので、桶沢遺跡の分類に沿って説明する。向陽台3住には3タイプ、全体でも5タイプと極めて単純である。

なお、便宜的にここでは無文土器は別項に記述している。

山形文Cタイプ1（分類記号C1）

文様構成C種、(3)および(5)が主体的にある。といっても全体の量（個体数）は少ない。第224図50・51を典型例とする。推測される器形は口縁部が強く外反し、胴部はかすかに膨らむ尖底深鉢形である。口唇端部、口縁内面の施文が普通に見られる。波状口縁が1点（51）ある。

胎土は黒鉛を全く含まず、含有物が多い2(1)がほとんどである。胎土は無文土器に似ても内面の整形は大きな違いがあり、含有物のザラつきはあるが、たいらにていねいな整形が普通である。

山形文は第2種を特徴とする。第1種との区別のしにくい山形が多く、実際には胎土によるCタイプ1の分離を行っている。原体の平均値は径5.1mm、長さ12.9mmである。

山形文Cタイプ2（C2）

文様構成C種、(1)と(2)が主体的にある。器形は第225図58、第226図66、2号住居址の出土例になるが、第219図31にみるように、口縁部が強く外反し、胴部がかすかに膨らむ尖底深鉢形である。口縁は平縁が大部分であり、1点だけ、波状というよりは尖起が付く例（第228図87）がある。口唇端部の施文は普通に見られるが、口縁内面の施文は1点もない。

胎土は黒鉛を含むものすべてをこの類とした。山形文は第1種を主体に、第2種も若干みられる。山形文は第1種、必ずしも山形の小さなものではなく、前項で述べたように山形に丸味があり、曲線的で細い。原体の大きさは、最大径6.0mm、最大長19.4mmの第225図58例は例外的である。これを除く平均的原体の大きさは、径4.5mm、長さ13.6mmである。原体の最少は径3.3mm、長さ10.0mmである。原体に刻まれる山形の条数は2条例1点を除けば3条が最も多く、4条もいくつかみられる。5条以上のものはない。

山形文Cタイプ3（C3）

山形文Cタイプ2に準ずるが、大きな相違点は黒鉛を含まない一群ということである。器形もタイプ2に大差なく、口唇端部施文を一般的とし、口縁内面の施文例もある。山形文は第1種

第III章 調査遺跡

であるが、第2種との区別がしにくい山形もある。第231図145はその例である。

胎土は、黒鉛を含まないといつても、Cタイプ1とは明らかに異なり、薄手で、含有物も若干違って、黒色・透明の光る粒はあまり含まれない。整形は内面がザラつくものがやや多い。黒鉛を含むか含まないか、肉眼だけでは少量の場合、厳密な区別ができるが、本タイプには、あるいは少量含まれるものもあるかもしれない。

原体の平均値は、径4.4mm、長さ14.3mm、径の最大～最小は3.6～5.4mm、長さの最大～最小は12.8～16.8mmである。

2 無文土器

a、土器製作技術と分類

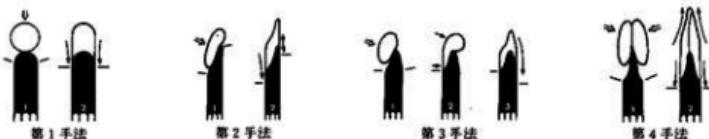
土器の成形技術（第32図～332図）

向陽台3住の多量にある無文土器は、厚手であるためか、粘土のためか、粘土積み上げの接合部分による剥落、剥離が多くみられる。それらは押型文土器同様に桶沢遺跡の成形技術とたいへん類似している。

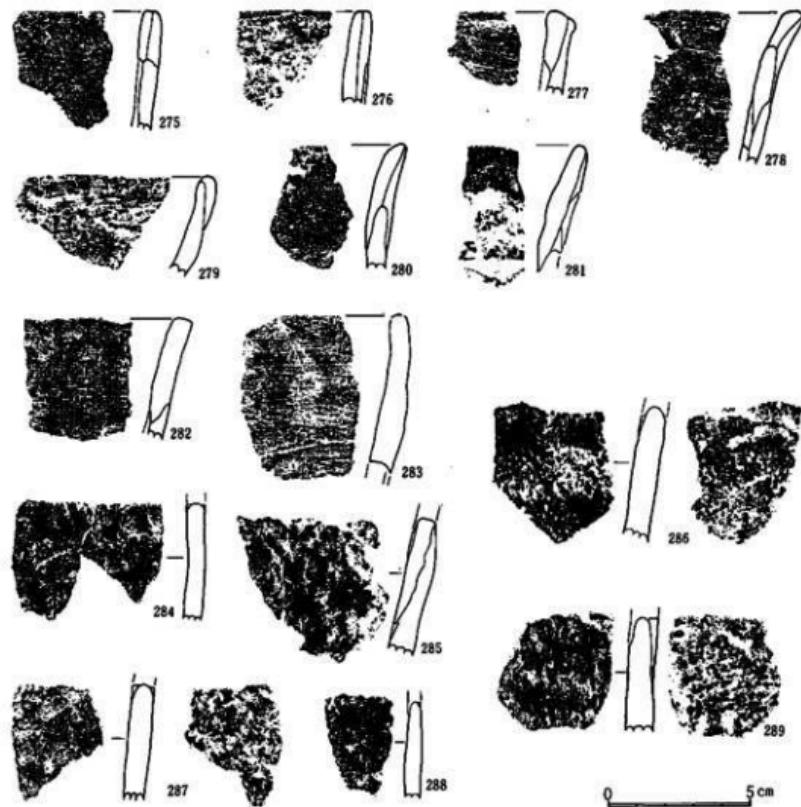
擬口縁 粘土紐の接合部が剥離して口唇部を思わせる破片がいくつか検出された。断面カマボコ状に、厚さ減じることなく、したがって粘土接合部の範囲が小さい例（284～288、290、294、295）、同様に断面カマボコ風であるが、内側の厚味を減じて、接合面を内側に広くさせた例（310、313）、さらに内側をえぐり取るように受け口状（302～305、311、313、316、318）の、あるいは内面に傾斜した尖頭状の例（これは内側に広く接合面を残す。285、298、299）また、尖頭状に内側、外側から厚味を減じて、両側に接合面を残す例（306～309、312、314、315、317、319、320）が特徴的である。

積み上げ順序 擬口縁を示す胴部破片の中には、上下に擬口縁及び擬口縁逆形（へこみ）を残す例（290、294、295）がある。また口縁部破片の下部に擬口縁逆形があること（281、283）、底部近くの破片でも擬口縁が上にあり、逆形が下にあることなどから、底部から口縁部に粘土紐を積み上げていったことは明らかである。縄文土器のはほとんどがそうであるように、向陽台も例外ではない。

底部の成形 底部は14点出土している。破片の数が多い割には底部の量は少ないと思われる。押型文土器と同じ乳房状のものと、あまり尖起が目立たないものとあるが後者がやや多い。底部



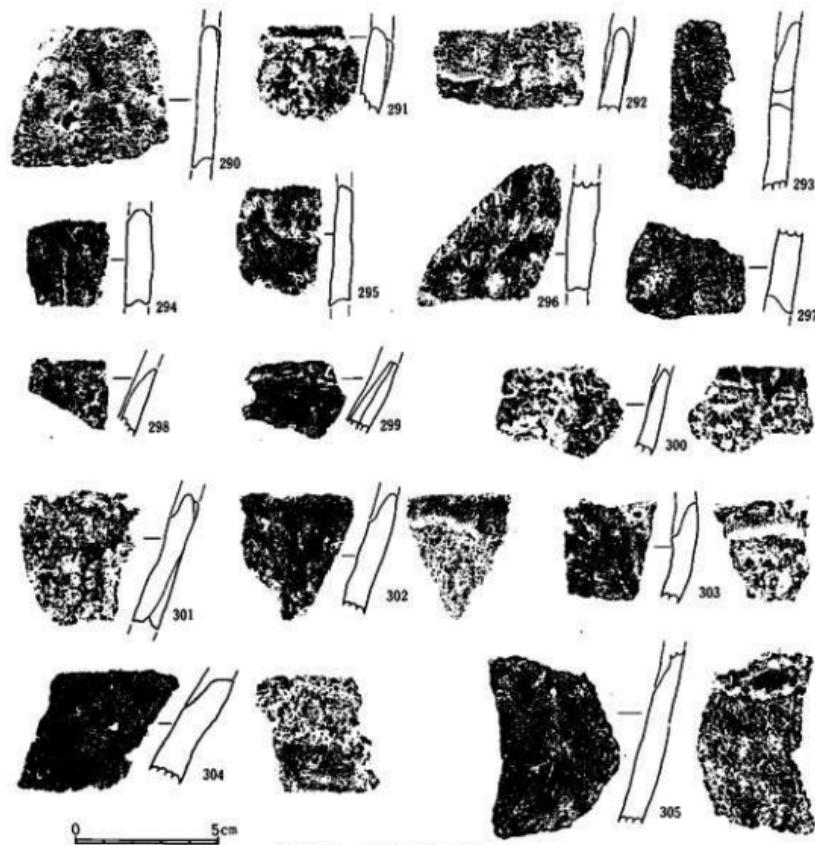
第328図 粘土器の積み上げ手法（『桶沢』より）



第329圖 土器成形技術資料(2)

土器觀察表

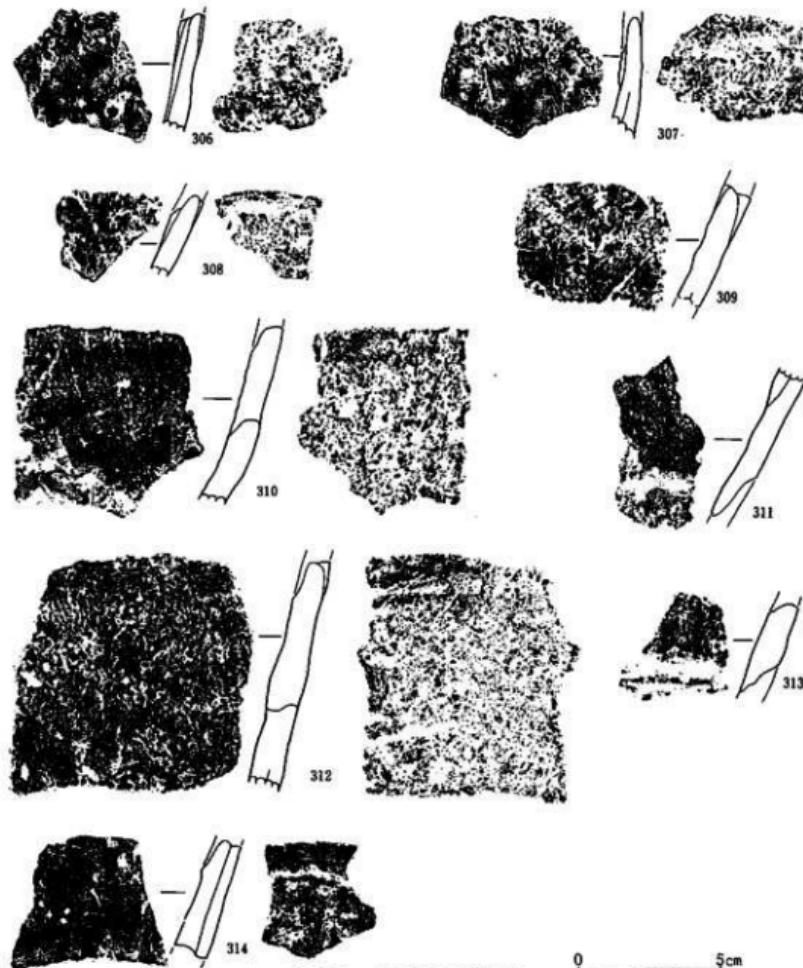
No.	部位	分類	件數	單位	原体・残長	端部	文様	口唇	胎	土	整形	造形	No.	部位	備 考
275		無文A						平	1(1)	1・2	21・3H・	306		口緣部	
276		無文B						平	1(1)	1・2	x	653			
277		x						平	1(4)	2・1	x	888			
278		無文C						九	1(1)	1・2	x	177			
279		無文A						九	1(1)	1・1	x	707			
280		無文B						九	1(1)	1・2	x	449			
281		無文B						九	2	1・1	21・2H・	84			
282		x						平	1(1)	1・2	21・3H・	45			
283		無文A						九	1(2)	2・1	x	1076			
284		x						1(1)	1・2	x	549		頂上部		
285		x						3(3)	1・1	x	1146		頂 部		
286		x						1(3)	1・1	x	582		頂上部		
287		x						1(1)	1・1	x	900				
288		x						1(1)	1・1	x	602				
289		x						1(1)	1・1	x	-15				



第330図 土器成形技術資料(3)

土器観察表

No.	器種	分類	部位	単位	原体・種長	端部	文様	文様	口器	胎土	形形	遺物	No.	部位	備考
290	無文									2(2)	1-2	21・10H	17	胴部	
291	"									1(1)	1-1	21・3H	1001	*	
292	"									3(3)	1-	21・1H	65	*	
293	"									1(1)	1-1	21・2H	65	*	
294	"									3	1-2	21・3H	1777	*	
295	"									3	1-2	"	294	*	
296	"									3	2-2	"	1133	*	
297	"									1(1)	1-1	"	786	*	
298	"									1(1)	1-	"	668	*	
299	"									2(4)	1-2	"	358	胴下部	
300	"									2(2)	1-2	"	12	胴部	
301	"									3	2-1	21・2H	一括	胴下部	
302	"									3(2)	1-1	21・3H	795	胴部	
303	"									2(1)	1-1	"	613	胴下部	
304	"									3(1)	1-1	"	769	*	
305	"									3(1)	1-1	"	583	*	

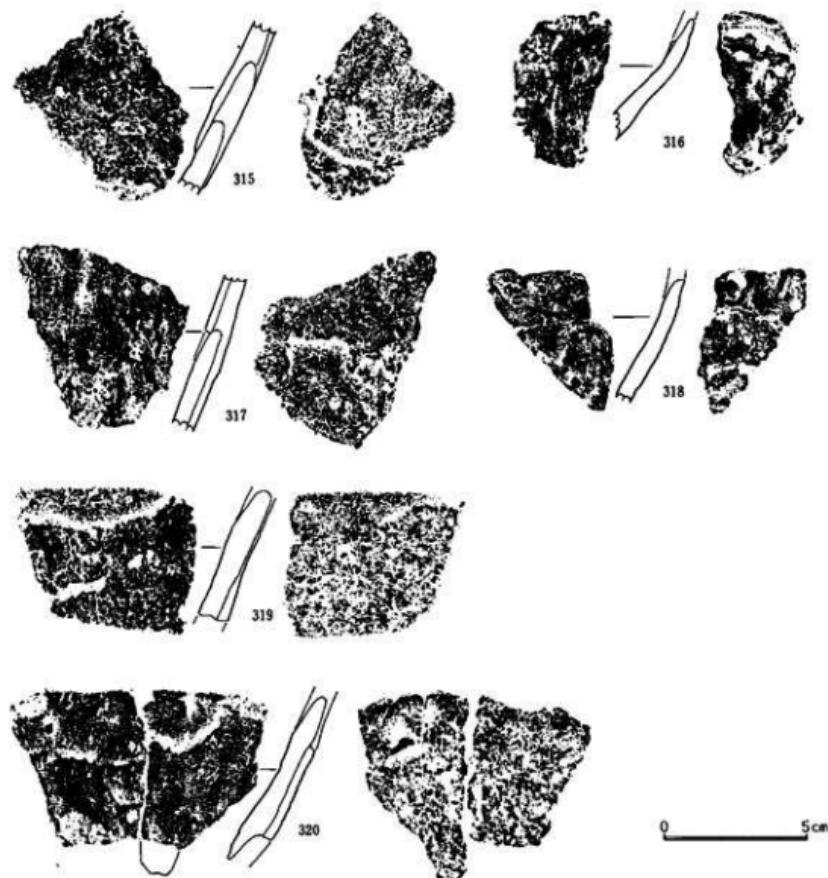


第331圖 土器形成技術資料(4)

0 5cm

土器觀察表

No.	層位	分類	件數	單位	原体・種類	端部	文様	文様	口徑	胎土	形狀	遺物No.	層位	備考
306	黑文	#										1(1)	1-1	21・3H・155 網上部 高強胎土の張り付けによる痕跡
307	#											1(1)	1-1	21・2H・152
308	#											1(1)	1-1	21・3H・495 網 部
309	#											1(1)	1-1	x 1002
310	#											3(1)	1-1	x 797 網下部
311	#											1(3)	1-2	21・2H・861
312	#											1(1)	1-1	21・3H・1001
313	#											2	1-1	x - 119
314	#											2	1-1	x - 15



第329図 土器成形技術資料(5)

土器観察表

No.	層位	分類	枚数	単位	原体・径長	端部	大様	口唇	口唇	胎土	断面	造物%	層位	備考	
315		無文									1(1)	1・1	21・3H・64B	削下部	
		"									2(4)	1・2	"	657	"
316		"									3	1・2	"	930	"
317		"									2(4)	1・2	"	405	"
318		"									1(1)	1・1	"	581	"
319		"									2	1・2	"	549	"
320		"													

の作り方を明瞭に示す例はなく、桶沢遺跡で観察された手法を確認することはできなかった。しかし、平底の土器と違って、一度に底から積み上げるには、尖底を支える受け皿状の入れ物がなくてはできない理屈である。また、仮にそうした場合でも大きく外反して立ち上る底部はある程度粘土を乾かしてからでないと粘土紐をのせて立ち上げることはできない。粘土の重みで垂れ下ったり開いてしまうことは、実際に作ってみると簡単にわかることである。

これを示す破片は、底部近くの破片に、内側をえぐり取るように受け口状にして接合面を広くした例が多いことでわかる。

粘土紐の積み上げ 一般に手捏ねによる輪積み法では、粘土の積み上げは器壁の厚さに関係なく円錐状の粘土紐を重ねて、内外面を上下に擦り上げ（下げ）て粘土を密着させ、指でつまんで厚さを整える。この時、上につまみ上るように薄くすると重ねた粘土紐は一枚の帯状になって積み上がるるのである。粘土紐の太さは、厚さに関係なく、帯の幅（高さ）に関係してくる。つまり、粘土紐が太いと1度に高く積み上るということであるが、技術的にむずかしくなる。また、積み上げていく最中に外側に開いてしまって思うような大きさ（径）にならないのは、粘土紐を下部粘土帯（擬口縁）の外側に積むからである。内側に内側にと粘土紐を積み、上に引き上げていかなくてはいけない。現代の陶工も繩文人も手捏ねの基本は何ら変るところはない。

ある程度乾いた底部（腕状の胴下部）に粘土を積み上げていくには、胴部の膨らみを持たせるために外に傾けていくわけであるから、開きすぎないように、そして、乾きはじめている下部としっかりと密着させるためには、先に記したように受け口状の接合部を広くした状態に作り出しておいて、粘土紐をのせて内外面に擦り付け、場合によっては接合部に内外面から粘土を貼り付けて強度を増していく——桶沢第3手法（第328図）。

手捏では、時間をおきながら少しづつ下部を乾かしながら積み上げていくと、形くずれしない。胴上部の直線的なあるいは内傾する部分では、内側に若干の傾斜をもたせて積み上げる——第2手法。そして、頸部、口縁部まで積み上げがすすむと、それほど嚴重な作りをしなくとも形を保つので、断面カマボコ状の接合面の真上に粘土紐を積んでいけばよい——第1手法。

輪積法では、粘土紐の太さを一様に、器壁の厚さを一定に積み上げないと接合部（擬口縁部分）が同一レベルにならず波状口縁風に凹凸になってしまふ。これでは均整のとれた器形にするためにはたいへんやりにくくなる。こうした技術の稚拙さを補うためには、極端に器壁の薄くなつた部分、高さの足りない接合部、粘土紐の足りなくなつてしまつた凹みなどに、部分的に粘土を補う方法として板状の粘土の貼り付けをしたと思われる——第4手法。向陽台の無文土器では口縁部にこれが顕著であったが、普通、高低のできてしまつた接合部は糸で水平に切り取ってしまうことをするが、そのように高さを減ずるよりは、足りない部分に粘土を補って、平らな口縁を作り出したのであろうか。『桶沢』の第1～4手法は、土器の部位による成形法と思われるがどうであろうか。

粘土を貼り付けた例は、接合部の補強に頻繁に用いられている。この時、含有物の量が極端に異なる粘土、つまり本体を作ったものとは違う粘土を貼り付けた例がある（306～309）。また、粘

第三章 調査 痕跡

土紐を第3手法によって積み上げてからさらに補強しているため、3重に粘土の重ねがみられ、その部分だけ帯状に厚みを増している例がいくつか認められる（312～320）。

胎土と成形

無文土器の胎土は大部分が含有物を多量に含み特徴的である。含有物は白色（石英）、半透明のクリアガラス状（石英）、黒色の光る結晶状（角閃石か）、透明なガラス状などの粒と、赤色、灰色の岩片、金色に光る黒雲母であり、その量の多少によって以下のように分類した。

1 上記の含有物を多量に含む

- (1) 内面にビッシリ含有物が浮き出て見える (2) 半透明、黒色、透明の粒が少ない
(3) 雲母が少ない

2 含有物が少ない

- (1) 半透明、黒色、透明の粒子、雲母を微量に含む (2) 白色の粒を含み他の粒が少ない

- (3) 岩片を含み他の粒が少ない (4) 全体に含有物が微量

3 1と2の中間的な含有量

- (1) 雲母の微粉を多く含む (2) 全体に微細な粒を含む (3) 雲母が少ない

内外面の整形は、胎土中の含有物の量にも関係する。内面の器膚の荒れ具合は、非常に特徴的であるが、向陽台に極立っていることは胎土に無関係ではないと思われる。

整形はI外側とII内側に分け大まかに次のようにとらえた。

I 1 凹凸が若干残るが指ナデがていねいに行われなめらか

- 2 部分的に含有物の移動した擦痕がみられるが、全体にはていねいにナデられる
- 3 擦痕が粗く走り、なめらかな器面ではない

II 1 ザラザラに荒れて、整形時の内面が残っていない。器表面が剥落したかのように含有物が露出する。

- 2 なめらかな面はないが、それほど荒れていない。若干の整形痕が残る。

b 無文土器の口縁部形態

向陽台3住の無文土器は、厚手と薄手、胎土の含有物の差等いくつか分類要件がみられるが、すべて一括して扱い、口縁部破片の断面形状によって以下のように分類した。したがって、これ以外の破片は枠外にはじかれる結果となるが、他に有効な手立ては見つからない。

A 口縁が緩く内湾して開く

- ・口唇端部は丸味をもつもの、平坦面を成すもの、口唇部が薄く尖頭形をなすものの3種がある。（観察表では口唇丸・平・尖と略記している）

B 口縁が緩く外反して開く

- ・口唇端部はAと同じに丸味・平坦・尖頭の3種がある。丸味と尖頭形の口唇端部の例には薄手の無文土器がある。

C 口縁が強く外反して開く

- ・口唇端部が丸味をもつものと平坦なものの2種がある。

3小 結——異方向帶状構成押型文土器の系譜

山形文Cタイプ1の土器

向陽台3号住居址出土の土器群は、山形文Cタイプの押型文土器と無文土器という、たいへん単純な様相を示している。中でも押型文系土器は、主体が黒鉛を多量に含んだ青黒色（鉛色）の桶沢式土器であることが強い印象を与える。類例を求めれば、岐阜県沢遺跡出土の押型文系土器に酷似する。

桶沢式土器については、もう多くの語る必要もあるまいが、桶沢遺跡下層出土の帶状構成の押型文土器を一括して型式設定された土器群である。その後報告された細久保遺跡の押型文土器との係りが整理されないまま今日に及んでいるため、若干の混乱を来たしている。それについては、先学の再検討や新提示もあり、「桶沢」でも語っていることであるため、ここでは繰り返さないが、ただ一つ、そこで課題として強調したように、異方向の帶状構成と異方向密接構成または縦位密接構成について層位的に上・下層に出土した例がないこと、型式学的には、研究者が同一レベルの認識に立っていないことなど問題を残したままになっていた。

向陽台3住においても、残念ながらこの問題について層位学的な知見を得ることはできなかつた。しかし、型式学的に、一、二の非常に注目すべき資料があるので、それについてとくに記して、まとめておきたい。

沢遺跡において、桶沢式土器のうち異方向の帶状施文のタイプを単純に出土したことから、それらを主体に沢式土器が提唱されて久しい。¹¹⁾また、最近では桶沢式土器を古・新の2期に区分してI・II式とする考え方も示されている。向陽台の単純な沢遺跡に比定される内容をみればこうした考え方も出現段階を示す細分として、単純な遺跡の在り方を積極的に捉えていくべきかもしれない。しかし、再三繰り返すが、型式名の混乱を避けるために、沢遺跡と同様に、向陽台3住の押型土器を桶沢式土器の中に理解して、桶沢I期（桶沢最下層）に比定しておきたい。

さて、向陽台の押型文土器の中にあって、特に注意しておきたいのは、山形文Cタイプ1の土器に見られる異質な一群である。第244図の土器はともに図上復原による想定図であるが、50の文様構成は同じC種の中で(1)と違って縦位帯が頸部の横位帯を切断して垂下し、縦位施文の意識が強いという印象をうける。そして、口唇端部と口縁内側に施文され、胎土は無文土器に類似するが、黒色・透明・半透明の光る粒子をあまり含まず、白色の粒子を多く含む。山形文は第2種である。

51の土器は口縁部破片だけを見ているとうっかり見紛い無文土器にしてしまいそうである。あるいはこのまま胴部も無文のままであることも考えられるが、全く同質の胎土であることから図のように予測してみた。胎土は含有物の量が若干少ないが無文土器に酷似する。同じく山形文は第2種である。あえて形容すると無文土器に施文された押型文の土器である。Cタイプ2の黒鉛

を含む土器群の中にも、口縁部に幅広の無文帯を有する例がいくつか見つかっている。仮に、外面に押型文が施された場合、黒鉛の入った無文土器ではないかと思われるような例がある（第226図63）。63は文様構成C種(5)をあててもあるいは現実性を越えているかもしれない。第226図66においても口縁部に1条と、口唇端部の施文だけで終わってしまうのかもしれない。

また、黒鉛の含有が明確ではないため無文土器に加えたとはいっても、薄手で胎土は山形文Cタイプ3に極めて近い第300図271（ただし遺構外の出土）の例もある。異方向の押型文帯が、たまたま極端に大きな間隔をあけている文様構成ということだけでは説得力が弱い。

50・51の土器は、胎土が無文土器に同質か、近似するが、それは一見して立野タイプに共通する胎土である。とくに51の土器は、内面整形も含め近接する福沢遺跡の押型文土器（立野タイプ）に胎土は同じである。

こうした点を総合してみると、山形文Cタイプ1とした土器は、無文土器とも、山形文Cタイプ2とした黒鉛を含む土器とも、立野タイプの土器とも共通する特徴を持つ、すなわち逆説的にいえば齊一性に欠けて、他タイプに対して発展的であるということができる。

密接構成から帯状構成へ

中部山岳地方の押型文系土器において、立野式土器が福沢式土器に先行することが次第に明らかになりつつある。筆者もそれに同調する一人であるが、その推移を土器型式の変遷の中で容認するには、まだ一つ説明の不足に苦慮していた。再三述べているように、異方向の密接構成・縦位密接構成から異方向の帯状構成に発展するには、そこに大きな断絶があるようにみられてきたからである。しかし、向陽台の山形文Cタイプ1を問おることによって、それが解消されるのではないかだろうか。異方向密接構成から山形文の帯状構成へ、その契機は奈良県大川遺跡の異方向に施文され山形文をもつ土器のモチーフである。

福沢遺跡の出土押型文土器を整理する中で、最下層の在り方が異方向帯状・密接が切り離せない関係にあることを検討・指摘してきた。それについて『福沢』の報文中に次のように記述されている。「Ⅰ期前半の在地土器には、メジャー・タイプである山形文Aタイプ1、同Bタイプ1、無文タイプ2の一部と、マイナー・タイプの山形文Gタイプ1とか相当する。本遺跡の始まりを告げる土器群である。山形文Aタイプ2、同Bタイプ2、同Cタイプ1は、立野式土器文化圏からの搬入土器である」と。

これに付け加えるなら、山形文Cタイプ1は立野式土器製作者グループが大川式土器の山形文のモチーフを模倣製作した土器であり、この段階ではイメージの定着がはかれず、したがって原体、文様構成に大きなバラつきを生じていたのであろう。この時ベースになったのは無文土器であった。そして、Cタイプ2・3の土器が作られたが、突如として黒鉛が含有されてくる背景には相当強固な個性的なグループの存在があったのであろう。

ところで、立野式土器と福沢式土器の関係を見る例として、最近、新たな資料の教示を得た。第333図は駒ヶ根市反目南遺跡出土の山形文土器である。文様構成はC種(1)、口唇直下が2条に見えるが、これは口縁が強く外反するため、1本の施文原体の真中が浮いてしまって



第333図 駒ヶ根市反目南遺跡出土の押型文土器

上下の軌跡が記された結果である。山形文は第1種であり、原体には2山単位に6~7条の山形が刻まれ、端部処理は大波状の1(2)、原体径4.4mmに対し長さは26.6mmと長い。胎土には黒鉛を含まず、含有物は半透明の粒子と雲母の微粉を多く含む。そして、なにより、口唇内側に山形を施文するのはよいが、口唇端部に縄文を施文している点が特異である。

この土器は原体の長さがこのタイプの土器として異例の長さであり、したがって条数も多いこと、原体端部処理が第2種山形文に多い大波状1(2)であること、黒鉛を含まない胎土であることなど、桶沢式土器と立野式土器の特徴が混在している好例である。加えて口唇部の縄文は大川式土器との関連すら想像させるのである。

無文土器と押型文系土器

次に、向陽台遺跡で注意されることは多量の無文土器の出土である。押型文土器ばかりに目を向けてはいけない、ここでの出土量はすでに客体という在り方を越えていると見なければなるまい。翻って、隣接する桶沢遺跡に目を向けてみると、第1次調査の出土土器の41%を無文土器が占めているのであり、第3次調査の住居址出土土器も、微量ながらの9点のうち8点が無文土器である。また第3次調査I・II区の63%を、III区の66%を、無文土器が占めている。実に、向陽台と相並ぶ無文土器の量である。

また、同じく隣接する塙尻市高出遺跡のBトレンチでは破片570点のうち押型文土器19%に対し、無文土器が75%と非常に高い率で出土している。これは多分に山形文土器（黒鉛を含まない一群）の無文部や格子目文、縄文土器の無文部がまじるかもしれないという報告者の断りがあるので、いえ注目される。無文土器と類似する胎土の押型文や縄文土器の存在が窺い知れるからである。押型文土器は黒鉛を含む異方向の帯状施文を主体とする。

一方、もう一つ隣接する塙尻市福沢遺跡は、立野式土器を主体的に出土するが、ここでは無文

第四章 調査遺跡

土器はわずかに7点の出土が報告されているにすぎない。ここでは、下層に立野タイプの縦位密接構成の山形文などが出土、それより上層に横位帯状構成の山形文が出土するが、無文土器の出土層位は7点のうち2点が下層に、5点が最上層と、量的に少ないとあって明確に規定できない点が惜しまれる。図上復原されている無文の大形破片は横位帯状構成の山形文より上の、最上層の出土である。

もう少し周辺に目を向けて源訪市細久保遺跡をみると30片の無文土器が出土しており、その量はたいへん少ない。飯田市立野遺跡も少なく10片の出土が報告されているだけである。おおざっぱな把え方であるが長野県下の無文土器は、異方向帯状構成の押型文土器となっていると見てよいようである。

以上、向陽台遺跡の周辺に点在する主要遺跡の無文土器を概観した。文様がないため、押型文を凌駕する量がありながら注目されていない向きがある。向陽台3住では、器形を復原するほどまでは至らないとはいえる、量的には押型文土器の3倍に達するのであり、口縁部破片が比較的多く出土している。そのため長野県周辺地域まで広げて比較・検討を試みたが、無文土器については神奈川県平坂遺跡他内原遺跡など一・二の類例を知る限りであり、十分な分析ができずに終ってしまった。文様がないとはいえる、関東の無文土器と綿密な比較・検討をしなければなるまい。

平坂遺跡以後、最近の無文土器については一・二の論功が示されている。それらを参考に撫糸文系土器第5様式の系譜の中で理解しようとすれば、平坂^b・^c期に比定させて考える他はないが、そこで指摘されている平坂式土器の要素を満たすには、あまりにほど遠いと思われる。確かに口唇端部の平坦化、口縁部の外反、口縁の小突起など類似する事項がないことはない。しかし、反面凹線文などは認められず、縦長の補修孔もない、口縁凸起も古くからある。また強く外反する口縁も量的に微量であり、そもそも、押型文系土器は大川式に見るように強く外反する深鉢形はいわば伝統的器形として持っているのである。

したがって今は中部山岳地方の無文土器と関東地方の無文土器を積極的に結び付けることはできないまでも、異方向帯状構成の押型文土器には無文土器が伴出する事実を踏まえて、押型文系土器と撫糸文系土器の関係を考えいかなくてはなるまい。

参考文献

- (1) 佐藤達夫他 「岐阜県沢遺跡調査予報」 1967年 『考古学雑誌53-2』
- (2) 中島 宏 「中部地方における押型文土器編年の一再検討」 1987年 『埼玉の考古学』
- (3) 駒ヶ根市教育委員会氣賀沢進氏から特別のご教示を得て資料の提示を快諾いただいた。近日中に報告書が発刊される予定にある。
- (4) 野内秀明 「三浦半島における無文土器群の様相」 1984年 『横須賀博物館研究報告』 第28号
原田昌幸 「撫糸文系土器終末期の諸問題II」 1987年 『物質文化』 第48号
- (5) (4)原田論文による

(2) 石器 第3号住居址を中心に一

遺跡に残された石器は、その当時の人々の食生活・生産活動等、暮らしぶりを反映している。それ等を復原し、特徴を知るためにには、時間幅の限られた純粹な資料でなければならない。そういう意味で、向陽台遺跡の資料は、押型文土器を出土する重複のない単一住居址が4軒検出され、非常に恵まれた条件を備えている。特に3号住居址では、総数1300点に及ぶ石器・石片を出土し、押型文土器という限定された時間幅内での石器組成や各石器の諸特徴が分析可能な好資料である。以下では3号住居址を中心に、石器・石片の比較、検討を行い、この時期の特徴を見出していくこととする。

なお、計測基準、分析方法（分類項目）等、全て「岡谷市梨久保遺跡」調査報告書を基に行つた。これは、時間幅に大きなギャップはあるものの、同じ基準をもって比較することで、より客観的に明確な特徴を把握することができるからである。

a. 原石と石核 (242図81、243図82~87)

出土した石器・石片の約95%は黒曜石である。以下は原石・石核に限らず、各石器類における黒曜石石材のあり方を示すものである。

残された原石は、3号住居址のみ、わずか8点である。しかも、 $2.5 \times 1.5\text{cm}$ 前後の非常に小形の利用価値のないようなものばかりである。何故、この様なものばかりが残存したのか、消費された原石はどのように扱われたのかを、原石の残核である石核を交えながら検討した。

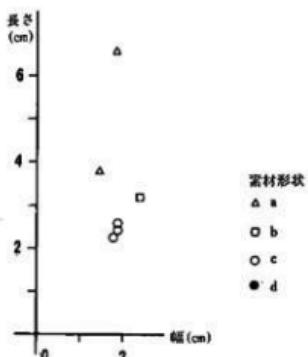
原石は上記で述べたように少量なため分析不能であるが、一応形状に分類した。

- a. 柱状を呈するもの 2点
- b. 板状を呈するもの 2点
- c. 角礫状を呈するもの 4点
- d. 円礫状を呈するもの（転石） なし

a～cは露頭に産するものと思われるが、dは河原等に転がって表現の状態が磨り減って角が取れてしまったもので、露頭以外の所から拾って来たものと思われる。また、原石の大きさについては第334図に示した。大きさは、原石の最大長を長さ、それに直交する最大幅を幅とした。

石核の分類は、剥離作業面の数と打点の位置によって行った。

- I. 剥離作業面が一面だけ設定されているもの
- II. 剥離作業面が二面に設定されているもの
 - A…剥離作業面が石核の表裏二面にあるもの
 - B…剥離作業面が直交するもの
- III. 剥離作業面が三面以上設定されているもの
また打撃の位置については、



第21表 石核類型別組成表

	I					II A					II B					III ⑤	
	①	②	③	④	計	①	②	③	④	計	①	②	③	④	⑤	計	
3 H	5	12	4	2	23	2	3	2		7		3			1	4	1
1 H			1		1	1	1			2				1		1	
2 H				1	1												
10 H		3		1	4		1			1							
遺構外	3	2	2		7					2	2	1	1	1	1	5	1
計	8	17	7	4	36	3	5	2	2	12	1	4	1	2	2	10	2

第22表 素材と類型別組成表

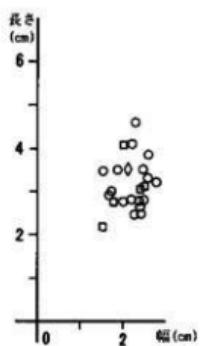
	I						II						III c	
	a	b	c	d	e	計	a	b	c	d	e	計		
3 H		5	17		1	23			3	8		1	12	1
1 H			1			1			1				1	
2 H		1				1								
10 H			4		4									
遺構外			4	1		5								1
計		6	26	1	1	34			3	9		1	13	2

- ① 素材の長側縁に単一の打点を有する
- ② 素材の長側縁に連続する打点を有する
- ③ 素材の短側縁に単一の打点を有する
- ④ 素材の短側縁に連続する打点を有する
- ⑤ その他

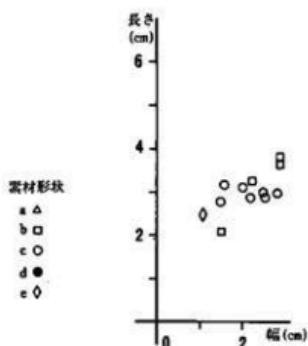
以上のように分類し、各遺構ごとの類型別の組成を第21表に示した。

I類に主体があり、III類は少ない。しかも各分類を通じて②類（長側縁に連続する打点を有する）ものが多く、つまりこれは、縦長の剥片よりも短かい剥片を何枚も必要とした結果である。事実多量に出土した剥片は、チップに近い小さなものが多いことからも伺われる。また、短縁辺側に打点のあるものも少量あるが、これは、単一の剥離作業を行うものが多く、縦長の剥片を剥離した結果である。これ等の結果は、3号住居址に齊一性が見られ、他の住居址では、若干ばらつきがあり、むしろ縦長の剥片を取ろうとする意識が感じられる。

石核には剥離作業面が少なく、その素材を知り得る自然面の残されたものがある。この素材は



第335図 石核I類（長幅分布）



第336図 石核II類（長幅分布）

原石に合わせて a : 柱状 b : 板状 c : 角礫 d : 円礫 それに加えて e : 刺片 に分類できる。素材と分類ごとの組成は第22表に示した。

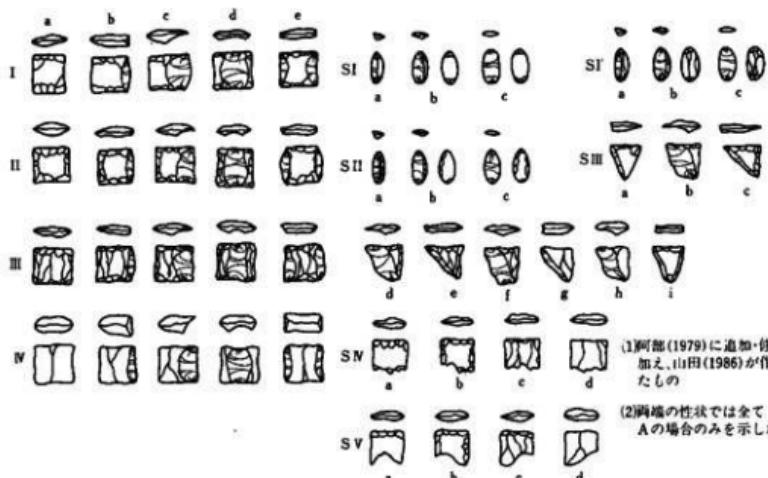
その結果、多量に利用された c (角礫) とそれに続く b (板状礫) とを原石の大きさと比較すると、石核の素材となった原石は、残された原石よりも比較的大形で、残存する原石は利用価値のない原石であったと推察される。分類別の大さき (長幅分布) を見ると (第335、336図)、I類とII類では、そう大差ではなく、I類がII類を包括するような分布を示している。これについては、向陽台の原石・石核が他の同時期の樋沢遺跡や、時期の異なる梨久保遺跡に比べて小形であることからして、剝離作業に限界があり、剝離作業が進行しなかったため、作業面の数と大きさには、関係があまりなかったと推察される。I類が量的に多いこと、逆にIII類は2点しか見られないことからも裏付けられる。

以上の傾向より、原石と刺片生産技術のあり方をまとめると、

- ① 比較的小形の原石を持ち込んでいる (大きいもので 4×3 cm、小形では 2×1.5 cm)。形状は角礫状、板状を呈するものが主体をなす。
- ② 素材の長側縁を利用して、長さの短い小さな刺片を何枚も剝離するものが主体となる。
- ③ 小形の素材が多いため、剝離作業面の進行にも限界が見られる。 $(2 \times 1.5$ cm以下のものは、原石・石核共に見られない。原石がたとえ存在したとしても、利用価値はない。)
- ④ 通常の剝離作業の前後に、両極剝離技術を用いているものがある。

b. ピエス・エスキューと両極石核

バイボーラテクニックが礫の素割りや刺片生産、二次加工という様々な場合に用いられるることは周知の通りである。その一方で、その技法を使って製作される石器、ピエス・エスキュー (楔) の存在がある。前者には、後者と形状、大きさでは便宜的な区別の困難な両極石核 (山田1986)



第337図 両極剥離を有する石器の類型模式図

第338図 両極剥離を有する石器の碎片の類型模式図

が含まれているため、この両者を分離する作業が必要である。ビエス・エスキューの形態学的特徴（阿部1979、岡村1983）が明確になって久しいが、しかし再三指摘されるように、もともと形態的にばらつきのあるものであるため個々の分離は不可能である。幸い本遺跡では、バイボーラテクニックによる石器、或いは剥片が191点と多量に出土し、定量分析によりある程度の分類、属性を知ることができる。まず、両極剥離がその石器の最終剥離となるもののみ選び出して、検討した。

分類と分析

ビエス・エスキューの形態学的諸特徴は、岡村・阿部両氏によってかなり明確にされている。それを再確認しておく。

①大きさは、2~3cm前後のものが多いが、それ以上のものも存在する。

②平面形は、四辺形を基本とし、台形、楕円形、三角形など変異に富む。断面形は、紡錘形を呈す。

③向い合った二辺ないし四辺形の縁辺部には、両極剥離が加えられ、縁辺は通常線状をなす。縁辺には階段状剥離やツブレが顕著に見られる。

④対辺同志を直線的に結ぶ「剪断面」がしばしば特徴的に見られる。

⑤器面が両極剥離面に覆われる程度と、石器の大きさが相関する。すなわち、縁辺部のみ剥離が見られ、作業の初期段階を示すものは大きく、器面全体が両極剥離に覆われ、作業が十分進行したと考えられるものは小さくなっている。ただし、この大きさの変化は連続的である。資料中には、この特徴と一致するものと、特徴の一部を満すものが存在する。これは、ビエス・

第23表 両極剥離を有する石器組成表

	A					B					C					
	I	II	III	IV	計	I	II	III	IV	計	I	II	III	IV	計	
3 H	5	4	11	2	22	5	1	4	9	19			1	3	4	8
1 H	2	2		1	5			2	3	5						
2 H	2				2		1	1	1	3					2	2
10 H	3	1	1	1	6											
遺構外	1		2	1	4	1	1		2	4						
計	13	7	14	5	39	6	3	7	15	31			1	3	6	10

エスキーユと、両極石核或いは両極打法により生じた剥片が含まれている可能性を示唆するものである。これ等の資料が違った属性を持つか否かを、上下両端の性状、両極剥離面の進行程度、剪断面のあり方、石器の大きさ（長幅厚）に注目し検討することとした。なお、両極剥離面を最終的に残す石器を「両極剥離を有する石器」と呼称し（山田）、阿部氏の分類を参考に分類した（第337図）。

両極剥離の進行程度は、

- I類 上下両端のみ両極剥離面が認められるもの
- II類 上下両端の他、左右の方向にも、より古い段階の両極剥離面が見られるもの
- III類 両極剥離面が器面のほぼ全面を覆うもの
- IV類 上下両端を結ぶ大きな両極剥離面が数枚見られるもの。必ずしも器面全体を覆うものではないが、I類の剪断面を持つものとは区別できる。

上下両端の性状は

- A類 上下両端とも線状となる
- B類 一端が線状、他端が面をなすもの
- C類 上下両端とも面をなすもの

更に剪断面のあり方は

- a 剥離面が刃部の縁辺のみに存在し、相対する刃部まで及んでいないもの
- b 剪断面は刃部と上面観で90°或いは、それに近い角度を有する
- c 剪断面が上面観で刃部と平行か45°以下で、平行に近い角度を有し、正面観で石器の側縁に位置するもの
- d 剪断面が上面観で刃部と平行に剥離し、正面観で石器の中央に位置するもの
- e b・c・dいずれか2つの剥離面を有するもの

以上の分類を試みた。この他上下両端に線状の縁辺を持たず、点状になるもの、または小さな面を持つものは、両極剥離を有する石器から欠損した剥片・碎片と考えられるもので、そのバター

ンは第338図の右側「S」と細分の頭につけたものが相当する。

細分した両極剥離を有する石器の形態的な組成を第23表に示した。形態的に一番ピエス・エスキューに近い特徴を持つA類ではIII Aが最も多く、次いでI Aが続いて多い。またA類ほどではないにせよ、ピエス・エスキューになり得るB類ではI B～II Bも存在するが、A類と異なって、IV Bが目立つ。C類では、A類とは全く組成が異なり、I C類は皆無で、反対にIV Cが最も多い。しかし、全体的に見ると、ピエス・エスキューの特徴に近いA類が全体の49%と最も多く見られ、C類は全体の12%と少ない。以上の結果は、聖山遺跡や梨久保遺跡に見られる傾向と一致している。

次にA・B・C類の大きさ（長厚分布）を検討した（第339、340、341図）。なお、長・幅・厚の計測は、両極剥離が加えられた上下縁辺間を長さとし、それに直交する最大長を幅とし、厚さは、側面の最大幅とした。また参考のため、ピエス・エスキューの刃部とする部位の角度（刃部角）を5mm単位で、刃部より5mm内に入った位置を計測した。

各類を比較してみると、A類はまとまった分布を示し、B類は散漫な分布となる。C類は、A類・B類とは異なったまとまりの分布を示し、A・B類よりも大形で厚いものとなっている。大きさではA類・B類・C類の順に大型化する。これを各類ごとに検討すると、

A類 二つのまとまりが見られる。これは梨久保遺跡の傾向と一致している。

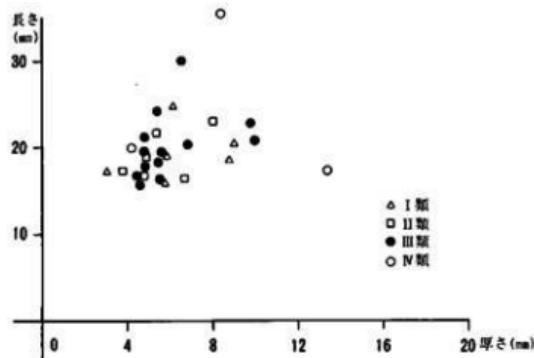
(イ)長さ15～25mm、厚さ4～7mmに集中する。剥離の進行程度（I～IV類）による大きさの差異は認められない。これはピエス・エスキューで捉えられている特徴と異なる結果になってしまったが、原石・石核の項で前述したように、この遺跡では、もともとの素材が小形であったことを考え合わせると、剥離の進行程度が進んでいるものは、より大形の原石を素材として利用したからであり、進行していないものは、素材がより小形で剥離作業に限界があったことを物語っている。進行の程度と大きさについて、ある程度までは比例的に剥離作業が進めば、大きさが小形になっていくという関係が成立するが、もとの大きさがある限界にあると、剥離作業が減退するという理解がされる。また刃部角は、35°～45°にまとまる。

(ロ)長さ18～23mm、厚さ8～10mmに分布する。I・II・III類があるが、III類・II類・I類という順に小形化する。I類が最小である点では梨久保と一致する。刃部角は50°～80°とバラツキがある。

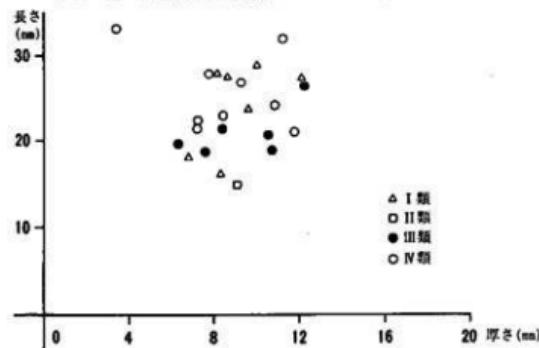
B類 散漫な分布を示し、A類とC類の分布を重ねると中間的な分布を示す。バラツキが著しく明確な傾向にならないので、A類とC類の分布を考慮しながら、まとまりを見ると、

(イ)長さ18～22mm、厚さ6～8mmのもの、A類(イ)の分布と重ねると、大きめのものと重なる分布を示す。B類でも、進行の程度と大きさの差異は認められない。

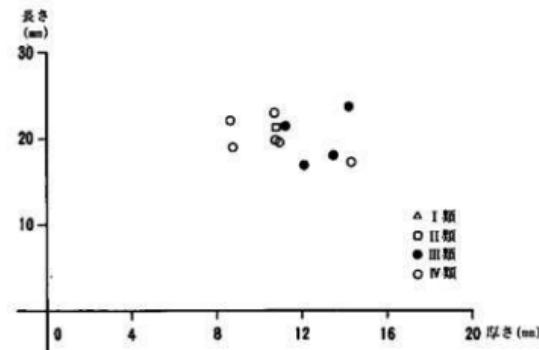
(ロ)長さ18～25mm、厚さ8～12mmのもの。I・IV類からIII類への小形化が認められる。III・IV類が主体をなし、長幅分布ではやや幅広の傾向がある。刃部角は55°～80°とバラツキがある。



第339図 両極削離面を有する石器A〔長厚分布〕



第340図 両極削離面を有する石器B〔長厚分布〕



第341図 両極削離面を有する石器C〔長厚分布〕

第24表 ピエス・エスキュー組成表

	A					B				
	I	II	III	IV	計	I	II	III	IV	計
3 H	4	4	10	2	20	1		2	2	5
1 H		2	1	1	4				1	1
2 H	1				1					
10 H	1	1	1		3					
遺構外	1		1	1	3					
計	7	7	13	4	31	1		2	3	6

(b)長さ27~34mm、厚さ8~12mmに分布するA類では見られないまとまりである。B(o)とは長さに差異があるが、共にI~IV類に主体を置きB(o)と同じ性格を持つ。

C類 A(i)・B(i)類とは全く異なる分布を示し、長さよりも厚さに変化が顕著である。IV類が主体である。また、A(o)・B(o)を包括する分布を示す。刃部角は60°~100°と様々である。

以上の大きさの分布、刃部角の特徴、類型ごとの組成の特徴より考えると、A類(i)、B類(i)は一応ピエス・エスキューとすることができる。そしてC類、A類(o)、B類(o)(i)を前者とは異なる一群で、両極石核と考えられる。また、ピエス・エスキュー、両極石核についても、他遺跡に比べて小形の傾向があり、剥離作業の進行にも影響が表われていることが明確となった。

ピエス・エスキューについて (240図46~51、241図52~56)

ピエス・エスキューには前述したようにA類とB類という2つの類型があり、刃部角は、35°~45°をなす(第24表)。

A類 両端線状の刃部をなすもの。32点。

B類 一端に線状の“刃部”を有し、他端に平坦な面が見られるもの。5点。大きさでは、A類の比較的大形のものと重なる分布を示す。

このB類については、従来ピエス・エスキューのまとまりに含まれていなかったが、梨久保遺跡の報告において、B類の素材に原石が多いことから、これは素材の違いを反映したものであり、一端に平坦な面を持つB類でもピエス・エスキューの一類型として位置づけ、B類は、小形で多様な形状をした原石が利用される条件において見られる類型であるとした(山田1986)。本遺跡の資料についても、素材不明のものが多く傾向はつかみにくいが、小形の原石ばかりを用いているであろう事から察すると、同様に考えられる。

剪断面のあり方について、聖山遺跡では接合資料を用いてa類は「機能中の石器」という可能性があり、b~eは「機能を失ったもの」に区分できると指摘している(阿部1979)。本資料では接合関係を検討する余裕はなかったが、梨久保遺跡同様、その指摘に従いa類の比率を見ると52%

第25表 両極石核組成表

	A					B					C				
	I	II	III	IV	計	I	II	III	IV	計	I	II	III	IV	計
3 H	2	1	2		5	4	1	4	5	14		1	4	5	10
1 H	1				1			1	2	3					
2 H	1				1		1	1	1	3				2	2
10 H	1			2	3				2	3					
遺構外					1										
計	5	1	2	2	10	5	2	6	10	23		1	4	7	12

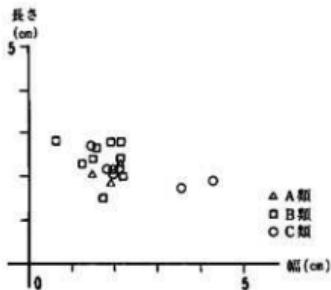
と半数を占め、まだ機能中のものが多いことを示している。

両極石核について (241図57~68、242図69)

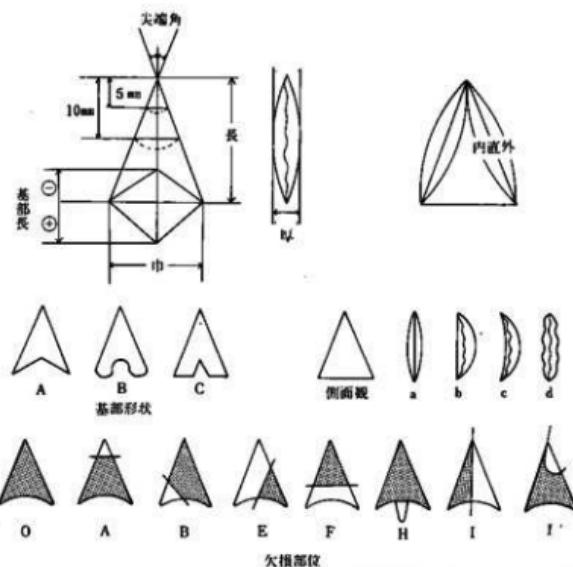
両極石核は45点ある、ビエス・エスキューとは類型別の組成が異なり、IVB、IVC類に主体が置かれる(第25表)。また大きさの分布ではIVB→IIIA・B・C→I A・II Bへの小形化が認められ、これは剥離の進行程度に相関する。また素材については、剥片を素材とした両極石核は少なく、ほとんどが原石或いは石核を素材としている。この点は通常の石核と全く同じ意味を持ち、つまり剥離生産を目指すものである。この両極打法による石核がどのような場合に用いられるのか、原石や通常の石核と大きさについて比較してみた(第342図)。

両極の大きさは通常の石核の長幅分布よりも小さなまとまりを示す。また素材の大きさを想定してみても、両極石核に残された自然面は、通常の石核に残された自然面の状況と似通り、さほど剥離によって小形化していないことから、両極石核の素材となった原石は通常の石核の素材よりも小形であると思われる。従ってこの分布のあり方は、原石の素材が比較的大形のものについては、通常の剥離による剥片生産を行い、小形の原石には、両極打法による剥片生産を行っていたことが理解される。また、石核を素材とした両極石核では、通常の石核が剥片生産によって小形化し、ある剥離作業の限界に達した時、変わって両極打法を利用して、引き続き剥片生産を行ったと思われる。小形の原石を多量に搬入した本遺跡では、両極石核の量は、通常の石核とほぼ同量で、頻繁に用いられていたと言える。

以上、ビエス・エスキューと両極石核の分離と各々のあり方について検討したが、これに伴って作出された剥片・碎片については、70点が認められている。端部の性状や面の構成と大きさの関係を検討してみたが、これと言った属性もなく、ビエス・エスキューや両極石核に対応するよ

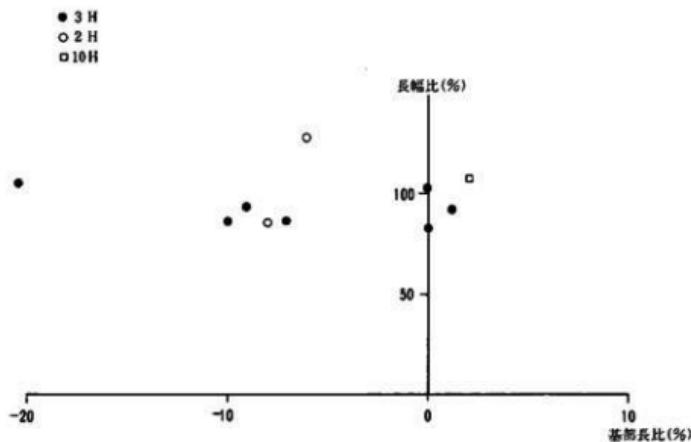


第342 図 両極石核 (長幅分布)



(1)欠損部位の表示は「十二の後追跡」
の報告書に従って修正・付加した。

第343図 石器の計測点と形状基準



第344図 石器 長幅比・基部長比分布

うな結果も得られなかった。

c. 石 錐 (237図1~8)

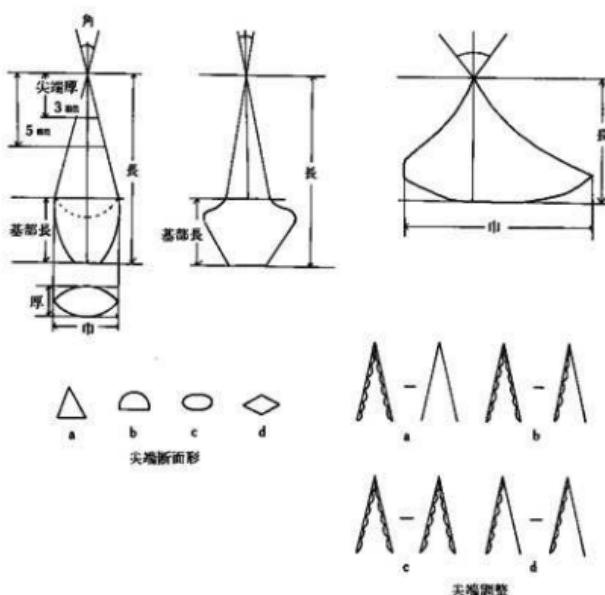
扁平で二側縁調整により尖端を作出した石器を石錐とした。しかし、尖端を作出する石器の中には、石錐の他、石錐が含まれる。本資料は、少量の上、欠損品が多く定量分析による石錐と石錐の分離は不可能である。従って、従来の分類大系に基づいて、ある程度便宜的に分類することとした。

計測点と形状基準については、第343図に示した。加えて補足説明すると、石錐の据え方は尖端角を二等分し、中心軸とした。尖端角は尖端から5mm入り込んだ中心軸で計測、尖端厚は尖端から3mm入り込んだ位置を計測した。側縁形は直線を直、外湾を外、内湾を内、屈曲するものは例えば直直という略称で左右それぞれ表示した。側縁性状は鋸齒状をD、線状をSとして表示した。

押型文土器を伴う石錐の諸形態には、平基無茎錐、凹基無茎錐に主体を置き、また鋸形錐や局部磨製石錐等特徴のある石錐が確認されている。本資料中にも同じ様相を示す石錐が出土している。非常に小形で薄手の正三角形に近いもの（第344図の長幅比100%前後に分布）が7点ある。これ等には基部長比0%（平基錐）のものと、基部長比—8%~-10%（凹基無茎錐）のものの2つのまとまりがある。また後者には局部磨製石錐が1点含まれている。この小形の正三角形の石錐は3号住に齊一的に見られ、他の住居址では、3号住の石錐より若干大形の長脚錐が目立ち、側縁が鋸齒状になるものが多い。

局部磨製石錐の研磨について 唯一1点のみ出土した局部磨製石錐の調整と研磨の前後関係を観察してみると、基部は調整を行った後に研磨、側縁は研磨の前後に調整を行っている。これは、樋沢遺跡の報告で「小形正三角形の底辺の抉りの中央部に逆Y字形石錐と同様の弧状の最終削離が加えられるようになり、更にその底辺中央部から整形を強調するかのように研磨を施すようになる。」という指摘（齊藤1987）と調整順序が一致する。この研磨という作業は何を意識して行われるのかを知るために、どのような調整段階で、どの部位を研磨するのか検討した。しかし、本資料は1点のみであるので、樋沢遺跡の局部磨製石錐の資料を参考に扱った。その結果、16点の資料中、基部については、調整後研磨されているもの7点、他は研磨後調整を行っている。また側縁については、調整の前後ともに研磨を行っている。また研磨が尖端や側縁辺に意識的に施されることではなく、基部から器面中央にかけて縦の擦痕が観察される。また中央部は研磨によつて平坦或いは凹状となっている。

以上のことをまとめると、ある程度石錐の形に整えてしまうと、二次調整と研磨を必要に応じて繰り返し、基部中央から器面中央にかけての厚さを加減し、また側縁の形状を整えていることがわかる。そしてこの研磨による厚みの調整の必要性は、石錐の装着方法と密接に関係することが伺われる。これは、石錐の装着方法が、研磨するものとしないもので異なることを示唆するものである。



第345 図 石錐の計測点と形状基準

d. 石錐 (237図 9~12)

尖端を作出するものの中で、石錐、ポイント、それ等の未製品を除いたものを一括して石錐とした。石錐についても、石錐の項で述べたように点数が少ないため事実記載のみにとどめる。計測点と形状基準については第345図に示した。石錐の据え方は尖端角を二等分して中心軸とし、尖端角は尖端から5mm入った位置を計測、尖端厚は3mmのところで計測した。尖端部と基部との境は、尖端部と側縁が変曲点を持たない棒状の場合は最大幅を、変曲点を持つものはそれを境界とした。分類は尖端の調整方法によって4つに細分した。

- A ほぼ全面調整による尖端作出
- B 二側縁調整による尖端作出（面的な調整は少ない）
- C 一侧縁と他側縁端部のわずかな調整による尖端作出
- D 二側縁とも端部のわずかな調整による尖端作出

その結果、13点中Aは全く皆無で典型的な石錐はない。B類6点、C類3点、D類5点が見られた。B類の中には、他の類型よりも尖端角・尖端厚とも大きいまとまりがあり、これは梨久保遺跡の資料では、石錐からはずして「不定形石器」に帰属させたまとまりである。今回は分析不十分なため、B類には、その可能性があるものも含まれるとだけしておく（第237図9・10）。また、

全体的には、角度の大きい、厚さの扁平なものが主体となる。また基部と尖端部の明確に区別されるものは1つもなく、不整形なものばかりである。つまり剥片の一尖端をわずかに調整することで、尖端を作出する粗製品が押型文土器の時代には存在するのみであったと思われる。同時期の他遺跡でも、典型的な全面調整された棒状の石錐は稀である。

e. 不定形石器（黒曜石・チャート石材を主体としたもの）

一般的に定形性の認められる石錐・尖頭器・石錐・石匙以外の剥片に二次調整を加えた剥片石器を示す。二次調整の種類による分類は、二次加工部位の角度、平面形、側縁形などに注目して①～⑩に分類した。また1つの石器に調整の種類が2種類以上になる場合は調整を組み合わせて表現した。なお長・幅の計測は、最大長を長さ、それに直交する最大幅を幅とした。

- ①類 バルブの発達が少ない、ほぼ同程度の大きさの調整を縁辺に連続的に加えたもの。縁辺は平滑ないし、やや鋸歯状を呈する。刃部の側面觀は直線的である。通常スクレイパーと呼ばれるものである。調整の深さ4mmを境として、A類・B類に分けられる。
 - A類：大きめの調整によるもの。やや鋸歯状となるものは、後述する③類と調整の区分があいまいとなるが、個々の調整が奥深く入り、刃部の角度が大きくなるものは①Aに含めている。また、これ等に見られる鋸歯状縁は刃部全体に及んでいない。
 - B類：小さめの調整によるもの。
- ②類 角度の浅い平坦な交互剥離によって、鋸歯状で側面がジグザグな縁辺を作出したもの。刃部の凹凸は、ほぼ単一の調整ごとに作られる。
- ③類 主に片面加工で、やや間隔のあく平坦な調整を加えて鋸歯状の縁辺を作出したもの。刃部の凹凸は、ほぼ単一の調整ごとに作られる。
- ④類 ほぼ同じ大きさの調整を連続的に加えながら、縁辺を明瞭に鋸歯状にしたもの。刃部の凹凸は複数の調整によって作られる。
- ⑤類 きわめて急角度の調整で縁辺を切り取るようにしたもの。
- ⑥類 素材にもともとある尖端部の一側縁のみにわずかな調整を加えたもの。石錐に準ずる形状である。
- ⑦類 石器の3辺以上に主に面的な調整を加え、形状を四辺形、円形、隋円形にしたもの。縁辺は鋸歯状となる場合が多い。調整は①、②、⑤、⑨類が組み合わせられて行なわれる。調整以前の折面が見られることがあり、折断調整石器の特徴に類似する。
- ⑧類 大きさに規則性の認められない調整を不連続に加えたもの。通常、「二次加工のある剥片」「retouched-flake」とされるものに対応する。
- ⑨類 長さが2mmに満たない調整だけが見られるもの。この場合、調整とは言っても、使用痕が多く含まれている。調整が連続的に見られるものをA、散発的なものをB類とした。通常「微細剥離のある剥片」「utilised-flake」とされるものに対応する。
- 本遺跡では127点が出土している。各類ごとの組成は第26表に示した。

第26表 不定形石器 組成表

	①A	①B	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	計
3 H	6	12	3	2	4	1	5	3	6	15	8	65
1 H	1		3		4	1	4			5	8	26
2 H			1		1							2
10 H		1	1	2	1		1			4	5	15
遺構外	2	1			2		1	1		6	6	19
計	9	14	8	4	12	2	11	4	6	30	27	127

①A (237図13~17) 比較的大きめの剥片を素材として調整が行われている。従って他の分類よりも大形の石器である。調整の加えられる部位は、1点短側縁に調整が見られるのみで、全て長側縁に施される。形状は直線状の片面のみ加工されたものが主体となる。他側縁の一部に⑨調整が行われているものもある。チャート石材が4点ある。

①B (238図18~23) ①Aよりも小形のものが多い。調整の加えられる部位は、長側縁が主体で10点ある。また①Aでは見られなかった長側縁から短側縁、両長側縁に加えられているものがある。形状は外湾するものが主体で8点ある。内湾するものは全くない。全て片面加工で、素材に両側剥片を用いるものもある。

①類の中のA・Bを比べると、異なる特徴を示す。①Aが調整の部位・形状・素材について非常に齊一的であるのに対して、①Bは主体となるものはだいたい①Aと一致するものの、バラエティーに富む傾向があり、別の意識のもとに、製作・使用されていたことがわかる。

② (238図24~26) 点数は少ないが非常に大形で3点中2点はチャート石材である。いずれも長側縁に直線状の形状をした調整を加えている。また他縁辺に⑨調整を加えるものもある。

③ (238図27、28) 全て長側縁に調整が加えられる。

④ (239図29、30) 全て長側縁に調整を加え、形状は直線状6点、外湾2点、不規則なもの3点と様々である。ただし内湾するものは全くない。

③と④では傾向が似通り、調整が連続的ではなく、また部分的に片面のみの調整であったり、両面の調整であったりする。

⑤ (239図32) 1点のみである。片面調整の直線状の形状を有す。

⑥ (239図31) 調整部位、形状とともにバラエティーに富み、一貫性はない。全て片面調整である。調整以前に折れ面が見られる。他側縁に⑨調整が加えられるものもある。

⑦ (239図33、34) 全てが剥片素材である。自然面を多く残すものが多い。尖端の角度は石錐と比較すると、40°~70°で、石錐の角度でも鋭角なまとまりと共通する。断面は全て三角形を呈し、尖端の厚さは2.5mm以下である。点数が少ないため、石錐に準ずる可能性があるとしか言及できない。

⑧ (239図35~38、240図39) 特に大形である。特にチャート石材3点はいずれも大きい。①A、①B、⑥調整が加えられ、他の類はない。

⑨(240図40~43) 長側縁に片面のみ調整されるものが主体となる。形状は直線状22点、外湾4点、内湾3点、不規則4点となっている。素材は原石、石核、剥片、両極剥片と様々である。

⑩(240図44、45) 長側縁に片面のみ調整されているものが主体となる。形状は直線状15点、外湾5点、内湾4点、不規則3点となっている。素材は全て剥片である。中には、肉眼で明らかに使用痕と認められる磨耗した痕跡が残るものがある。

以上、各類型の諸特徴を検討した。全体的にまとめると、小形のものが多い中にあって、①A・②・⑧類調整には、大形の一群が存在する。しかもこの一群にはチャート石材を利用する傾向がある。黒曜石材はそれより小形で、素材の原石や石核の大きさと相関する。チャート石材のものは点数では少量で特異なものと言える。大半は、小形の剥片を素材にわずかな調整を加えたものであり、⑩類の使用による結果(刃こぼれ)として痕跡のあるものが多量にある。

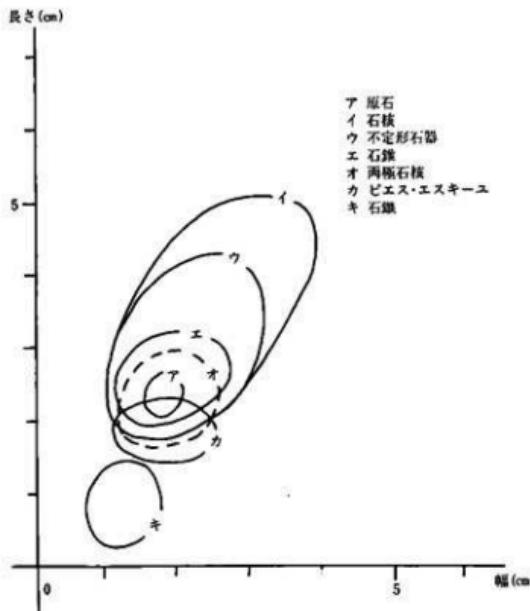
f. まとめ(黒曜石材を中心に)

向陽台遺跡3号住居址で出土した多量の黒曜石材の石器・石片は、押型文土器文化、更に厳密には土器の項で述べられているように桶沢式土器Ⅰ期という限られた時間幅にある純粋な資料であり、黒曜石產出地に近接する遺跡での石器・石片のあり方を分析するのに非常に貴重な好資料で、このような資料に恵まれるのは稀である。

当初この資料から受けた印象は、原石・石核・剥片、そして石器という一連の素材獲得から製作工程を経て製品までの流れを追うことが可能ではないだろうかと思わせるものであった。それほどに多量で、各段階ごとの大きさのバラエティーとまとまりがあったのである。そして個々を分析・検討していくうちに、幾つかの特色を知ることができた。

この遺跡に持ち込まれた原石から石器までの各段階と大きさの関係を剥片と照合して検討した。その関係は第346図と第27表に示した。

- 原石は他の桶沢遺跡・梨久保遺跡に比べて非常に小形で、これをを利用して剥離された回数は、石核と剥片の量的な単純比で1:9、すなわち1点の素材から9回の剥片生産を行う結果が得られた。これは、長原遺跡で山中氏が得た見解とぴたり一致している(山中1982)。この回数が多いか少ないかは、比較できる調査資料がないので不明である。但し、剥片には原石面が大きく残されているものが多いこと、剥離作業面が一面だけ設定されているものが多いことから剥離回数は少なかった(剥片の生産性が低い)と思われる。
- 石核から剥離作業面を検討すると、より大きな縦長剥片を生産することよりも、小さな剥片を生産しようとする意志が感じられる。これは、剥片にわずかな二次調整を加えた不定形石器や剥片の大きさにも相関している。
- この小型の剥片生産或いは石器を作るのに便利な製作技法には、積局的にバイボーラテクニックが用いられている。1つには、両極石核があり、通常の剥離では剥片生産が行いにくい小さな原石をバイボーラテクニックを用いて行っている。一方では、ピエス・エスキューを製作するためにバイボーラテクニックを利用しているらしく、原石面を大きく残すバ



第346 図 各器種の大きさ分布比較

イボーラテクニックによって生じた剝片は、ビエス・エスキューの大きさと重なって集中するものが多く、強い相関性を見せてている。これはビエス・エスキュー或いは両極石核の本体から剝がれた碎片・剝片に相関性が見い出せなかつたとの対象的である。

- (d) 更には、(a)～(c)の作業を凝縮した結果であるかのように、非常に小形の正三角形をした石鎌が主体となっている。これは、樋沢遺跡の第2黒色土下層でこの石鎌が主体となっている点で時期的に一致している。
- (e) (a)～(d)をまとめると、樋沢式Ⅰ期の黒曜石石材の石器製作のあり方は、大形の石器を必要としなかった時期で、小形の原石を持ち込んでは、小形の石器を作っていたように思われる。付加して言えば、より大形の石器はチャート石材によって若干補われていたと推察される。

3号住居址に残された資料は、時間的制約のため、接合関係を見ることを怠ってしまったが、原石から石器に至るまでの各段階の大きさと剝片の大きさが相関性を持っていることからして、接合可能な資料であると予測され、資料を当初見た時の印象は、実証できそうである。今後より一層、慎重な分析・検討を行い、その成果が得られるよう努力したい。なお資料の計測、文献の紹介等、亀割均氏の協力をいただいた。

第27表 3号住居址出土黒曜石剝片の長さと幅 (端数切上げ)

合計	5	19	44	57	75	64	60	57	47	29	16	16	8	8	9	4	2	520
33~34															1			1
31~32																		
29~30															1			1
27~28															1			1
25~26									2		1	1		1				5
23~24									2	3	2	1	2		2			12
21~22								1	5	5		2	3	1	1	1	1	20
19~20					6	9	8	9	6	4	2	1	1	1	1	1	1	49
17~18					11 ₂	10 ₂	9 ₂	8 ₂	8	1	3	2	2	2	1			67
15~16					10 ₂	9 ₂	12 ₂	11 ₂	9	8	4	1	2	1	3	1	1	81
13~14					9 ₂	10 ₂	9 ₂	12 ₂	10 ₂	7 ₂	4	3		2	1			107
11~12		7	8	10 ₂	9 ₂	11 ₂	10 ₂	10 ₂	4	2	3	1	2		2			80
9~10	2	8	10 ₂	11 ₂	8	7 ₂	4	3	3 ₂	1	1	1						64
7~8	3	4	6	2	6	1		3		1								26
~6			1	1	1	2												5
巾mm		11	13	15	17	19	21	23	25	27	29	31	33	35	37	39	41	合
幅mm		1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	計
長さ	10	12	14	16	18	20	22	24	26	28	30	32	34	36	38	40	42	44

① 計測は剥片を立体としてとらえ、剝離方向を無視して最大長、直交する最大幅、最大厚を測定した。

② ○の数字は全体の数量中で2.5%以上を占めるもの。

③ 数字脇の小数字はバイボーラテクニックによる剥片の数量。

g. 砕 石

今回の調査では1号住居址2点、2号住居址2点、3号住居址21点、10号住居址1点、遺構外4点が出土している。従来、縄文時代の遺跡内でまとまって多量の礎石が発見される例は草創期、後晩期が主体で、早期では出土例が少なく県内でも類例を捜すことさえ困難である。そのような状況の中で、本遺跡の3号住居址において一住居内から20点以上の礎石が発見された事実は極めて好例であると言えよう。そこでこの3号住居址の礎石に視点を当て記述してみたい。

3号住居址では第254図-166のように大きな厚みのある、置礎石として使用されたものが4点、それにひきかえ扁平な素材を利用した手持ち礎石とみられる小形の礎石が17点出土している。大形の礎石では図-166のように断面が三角形で全面をツルツルに研磨したものが1点で、他は片面の一部分が平坦に研磨されるが、中には研磨痕が微細なため果たして礎石として使用されたのか疑問のものもある。

小形の礎石はほとんどが破損品で本来の大きさや形状は明確にできないが、平面形はおおよそ長方形で厚さが3~31mmの扁平な素材を利用した手持ち礎石と呼ぶべきものである。第245図-101のように糸巻形を連想するものが注目されるが、樋沢遺跡（塙尻・岡谷市教育委員会1986）に同様の礎石の報告例がある。

小形の扁平砥石については使用痕の状態から次の2者に分類できる。

1類 表面または裏面に研磨による溝ができる有溝砥石と呼ばれるもの。

計5点が出土している。溝の幅が3~5mm程度と7~10mm程度とに分れるが、溝の深さは0.5~1mmと非常に浅く、使用頻度が少ないようと思われる。第244図-91はかなり細い対象物の研磨により線条痕が集中して溝が形成されていると見られる。裏面には明確な擦痕がある。93・96等は溝が先細りで途中で完結するが98・99は破損しており溝が端から端まで完通するかは不明である。これらら有溝砥石は溝以外の面も平滑に研磨されている。

2類 どの面にも溝が無く平滑に研磨されているもの

明確に擦痕または線条痕が見えるもの（第244、245図97・101・105・107・108）とそうでないものがある。

以上の砥石は断面形からさらに3種に分類できる。

(a) 扁平（長方形）な断面のもの

表裏両面を平滑に研磨するものと表裏面、側面とも研磨するものがある。側面は対象物の尖端を研磨したとみられるがほとんどが弧状に内湾し使用頻度が多ければ多いほど内湾はきつくなると思われる（94・96・101）。なお有溝砥石である93は素材が丸みを帯びた楕円形であった可能性もあり側面がなめらかに外湾している。101・102は側面の残存状態が悪いため側面が平坦であるとは言い切れない。

(b) 不整形なもの

側面や棱線（かど）を研磨することによって丸みを帯びたり新しい面を形成する。第245図-105は三角形を呈している。厳密に言えば三角形に近い形で、本来は四角形もしくは不整形な断面を持った素材を研磨することにより原形が著しく変わったものであろう。残存する研磨面を見ると有溝砥石の溝の部分にも似ており細い棒状の対象物を研磨した感がある。

第244図96・97や参考資料としてあげた1号住出土の109などは側面の一部やかどを使用することによって側面がくの字状に屈曲したり細い砥面を形成した例である。静岡県若宮遺跡（富士ノ宮市教育委員会1983）に同様の砥石の報告例があるが、対象物の尖端研磨によるものであろうか。

(c) 扁平でV字状を呈するもの

第245図108のみである。細粒凝灰岩製で厚さ3mmの極薄いものである。側面付近の表裏の研磨により縁がより薄くなっている。他が砂岩製の砥石に対して凝灰岩製のものはこれ1点で、全体がツルツルに研磨され素材も硬質なことから仕上砥的な役割を持つと思われるが、草創期の柄原岩陰遺跡（西沢、1982）で同様の砥石が報告されており擦切石器に類似する可能性もある。

以上3号住居址の砥石を中心に分類を試みたが、同様の砥石は他住居にもある。ただし量的には少なく前述したように1~3点で本址のような多量の出土は目を見張るばかりである。遺物出土総数の多さもあるが、道具を作る工具である砥石が大小伴いしかも扁平砥石と有溝砥石がセットでまとまって出土した点で注目すべき住居である。縄文時代草創期から早期にかけての砥石出土状況を見ると、草創期の多量の骨角器を伴った柄原岩陰、早期の樋沢、林頭、若宮（静岡）等

の遺跡で多量の砥石が出土しているが、大形の柱状砥石を伴わない点で樋沢や若宮遺跡に類似する。3号居住址では磨製石斧と呼べるもののが1点のみ出土しただけで、この柱状砥石が無いことと磨製石斧が見られない事実とは密接な関係があると言えよう。

砥石に関しては宮下健司氏の論文に詳細な分類や考察が成されている（宮下、1978、1985）が、一つの砥石で被加工物の全研磨工程を通すことは不可能で研磨工程や製作物の部位によっていくつかの形態や石材の異なる砥石が用いられることが注目されているように、本址の砥石においても無溝で全面を平滑に研磨されたもの、有溝砥石、断面分類bにあげた側面に新たな細い砥面を形成する例など形態はバラエティーに富む。また石材と形態と密接な関係は今回は見られないが、凝灰岩製の砥石の出土や、同じ砂岩製であっても砥粒の大きい粗粒砂石から砥粒の小さい細粒砂岩まではほぼ同一の割合で含まれている点などからも一加工物を数段階に分けて研磨したことには十分考えられる。研磨対象物については、氏が有溝砥石に着目し、矢柄や木器の尖端あるいは玉類の研磨以上に、主として骨角器の研磨を重視しておられるように、本址の有溝砥石を見ても途中で先細りのまま完結するもの、幅も一定しないもので、中には前述したようにきわめて細い対象物を研磨した痕跡を持つものがあり、多種多様のしかも細くてかたい道具の製作が示唆されるところである。

早期に関してだけなくこれまでの遺跡調査の砥石発見例は他の石器に比較して少なすぎるような感を受ける。これは形も大きく研磨痕も明瞭な砥石は別として、ここで見た扁平砥石と呼ばれるような、しかも欠損する極小さい砥石が遺跡内で見逃されやすく、十分な注意が必要であることを再認識させられる。

以後、該期の砥石や、できれば被加工物である骨角器類の資料増加を待って検討して行きたい。

h. 磨石類

使用痕の観察と分類 本遺跡では、河原転石を素材とした石器を一括して、便宜的に磨石類と総称して扱った。從来より穀殻石、磨石、凹石、敲石と呼ばれてきた石器である。これらは、凹み、磨耗、敲打痕といった使用痕がその名の由来となっているが、時として、一つの石器に使用痕が複数残されている場合が多い。むしろ、凹み、磨耗の単純な使用痕を残す例を探すことの方がむずかしいといってよい。

磨石類は、用途に応じて「形」を作り出すということをしていない石器である。用途に合った形の転石を拾い求めて使用しており、磨耗面、敲打痕等の凹みは、「何んらかの用途に応じて使用された結果残った使用痕」である。ここではそれらをA～Dの面及び部分に分類し、使用痕A～Dの組み合わせをみた上で、分類して呼び名とした。

磨石類に観察される使用痕は、大きく分けて平坦な面を形成するものと、小さなキズの集合した凹みあるいは局部的な磨減部分に分けられる。石器の用途を類推する上で、これらを機能面、機能部と呼び、以下A・B面、C・D部と分けて観察した。実測図中のA～Dの記号はこれを示している。

A 面 石器素材の稜線部分または側面に細長く残る平坦な面である。摺り減ったようなあり方であるため、磨耗痕であると思われる。面は真平ではなく、軽く弓状に湾曲している。面の感触は、ザラザラという表現で表わされ、縁に剥離痕を残すことがある。

B 面 石器素材の平坦面に残された範囲の広い磨耗面である。平坦面とは、三角柱状の、あるいは扁平な素材の平な面であり、扁平な磨石なら実測図の表・裏面にあたる。やはり真平面は少なく、断面凸レンズ状に、あるいは扁球形状に丸味のある面であり、磨り減ってできた磨耗面と思われる。面の感触によって以下の3種が指摘できる。

- (A) 研磨されたようにツルツルな面、光沢をもつ例もある。
- (B) ザラザラな面、A面とよく似ている。
- (C) 擦痕の残る面

風化がひどい場合は観察困難であり、特に側面の磨耗面は、A面とB面の区別が明確ではない。

C 部 石器素材の尖端、縁、側面に残された部分的な磨減面である。尖端では小さな平坦面を形成し、縁、側面では角がつぶれて丸味を帯びる。敲打によって磨減した敲打痕であろう。C部の残る部位によって次の4種に分けられる。

- (A) 尖端部あるいは角が平らにつぶれて平坦面を形成するが、剥離痕が残る例
- (B) 側面が平らにつぶれて平坦面を形成するか剥離痕が残る例
- (C) 割れ口の縁、あるいは平坦面の縁がつぶれて丸味を帯びるか剥離痕が残る例
- (D) 側面に打撲痕が残る例、平坦面を形成するところまではいかない。

D 部 表・裏面（平坦面）、側面に残された局所的な使用痕の集合、すなわち凹みである。鋭い先端の打撲痕・衝撃痕と思われる例が多い。凹みの形状によって6種に分類できる。

- (A) アバタ状の凹み 敲打痕のような小さな凹凸がアバタ状に残り、部分的に深い凹みの中にもアバタ状の小さな凹凸が見える。これはさらにa・bの二つに区分される。
 - (a) 散発的
 - (b) 集中的に凹む部分があるがその周囲はアバタ状
- (B) 穴状の大きな凹み 一ヶ所に集中し周囲にあまりアバタ状の凹凸を見ない。凹みの内面はでこはこでザラザラである。凹みの形によって4種がある。
 - (a) 不整形な凹み 深い凹みと浅い凹みがある。
 - (b) 円形の凹み
 - (c) 梅花形の不整形な凹み 一般にやや深い
 - (d) 舟底形の細長い凹み
- (C) ロート状の凹み 逆三角錐状に凹み、内面はなめらかである。
- (D) 擦痕のような細長いキズが散在または集中している凹み。
- (E) 浅いグラグラとした凹み 凹みの輪郭も不鮮明であり、アバタ状の凹凸がない例である。風化して不明瞭な例も含まれる。
- (F) 深く大きい丸底状の凹み

使用痕の複合と分類名称 四つの機能面・機能部の共有度合、つまり組み合わせは、単独のものを含め14例が認められた。本来ならそれだけ分類項目・名称を用意しなければならないはずである。あるいは総称的な名称（例えば十徳ナイフのように多目的な石器名を考えいかなければならないが、それをここでは1～3類に大別した。理由は単独の機能しかもたない例、つまりA面のみ（穀摺石）、B面のみ（磨石）、D部のみ（凹石）があるからである。この3器種がそれぞれ明確に分離されるのであるから、あとは機能の複合の中からどの機能を優先させて分類するかということである。

これについては、岡谷市梨久保遺跡の磨石類の観察結果から以下のような使用痕の先後が指摘されている（『梨久保遺跡』昭和61年岡谷市教育委員会）。穀摺石が半割れしたその縁に敲打痕C（C）が残る例、A面にD部があとから残された例、半割れした穀摺石の中央にD部が残る、つまり穀摺石が割れてから凹石として使用されたとみられる例、B面形成後にD部が残されたとみられる例などである。

これらを勘案して、各機能面・機能部が複合する例については、A面を優先し、次にB面、そしてD部とした。ここでC部を除外して考えているのは、C部を単独で残す石器には、細長い棒状、あるいは細長い超扁平な転石の尖端に敲打痕を残す例があり、磨石類と同じ転石を用いながら、形状に極めて大きな差をもっているため磨石類と一所に論じられないからである。この種の敲石は磨石・穀摺石としては使用できない形態である。そこで磨石類とは別に、C部だけ単独に残す類は敲石の類として除外して考えた。

1 類（穀） 磨耗面A面を残すいわゆる「穀摺石」と呼ばれている石器である。大部分はB面、C部、D部のどれか、あるいは全部と複合している例が多い。A面を有するものはすべて本類の穀摺石とした。

2 類（磨） 磨耗面B面を残すいわゆる磨石である。A面を残すものを除いて、C部とD部が複合する場合は、B面を優先して本類の磨石とした。この典型的な石器は、側面を含め6面にB面が認められるセッケン形と俗称されている磨石である。

3 類（凹） D部の凹みを有するいわゆる凹石である。A・B面を有するものを除いて、C部と複合してもD部を優先して本類の凹石とした。

凹石と磨石 本遺跡から出土した磨石の数は12点、このうち欠損のない7点についてみると、機能の複合しない例ではなく、C部・D部のいずれか、あるいは両方と複合する。磨石の形状は、概して扁平な楕円形を呈するものが多く、卵形あるいは球形に近いものは3点あるだけであり少ない。この3点も使用痕はあまり明瞭ではない。

凹石は8点あり、うち欠損のない6点についてみると5点がD部のみという単独に機能部を残す類である。欠損品も含めると7点と比率が磨石より高い。凹石として、独立した石器であった可能性が強い。形状はあまり齊一性がなく、不整形なものが多い。凹みの数は1～2個、表・裏面に各1個ある例と片面だけにある例と相半ばする。凹みの形状はアバタ状のA(a)と大きな凹みB(b)、B(d)がほとんどであり、C～Fは認められない点は注意される。

穀摺石 穀摺石は25点が出土しているが、完形品は3点だけである。他に2個が接合して完形になったものが2例ある。從来より指摘されているように $\frac{1}{2} \sim \frac{1}{3}$ に折れた例が多いことは本遺跡でも同じである。そこで、欠損品では推定の域を出ないので、やや量は少ないが5点の完形品から各属性の全体的傾向を見ると、他機能との複合は、いずれもどれかの機能と複合がみられ、単独にA面のみを有する穀摺石だけの機能という例はない(別項石器属性表参照)。平均的大きさは長さ127cm、幅61cm、厚さ58cmの重さ604gである。大人の手で握るには、片手でちょうどよい大きさと重さであろうか。

素材の形状は、穀摺石の特徴として第一にあげられる断面形状が三角形のものが大半を占めている。3住出土の穀摺石は21点のうち15点が断面三角形の角柱状である。残り6点は、断面形が円ないし横円形のもの、扁平で四角なものであり、他に形容のできない不整形なもの1点がある。平面形は両端が丸味をもつコッペパン状、長方形の角柱状、直角三角形に近い変形山形状と、このように断面三角形の細長い角柱状または棒状という典型的な穀摺が主体的にある。

磨耗痕A面の数及び磨耗の程度は、断面三角形が多いにもかかわらず、3段に磨耗痕A面が残された断面六角形となるものは1例もなく、多くて2面にとどまる。A面の幅は最大36mmと全体によく使われているように見える。また、A面の縁には、剥離痕の残るもののが11例ある。

平坦面に磨耗痕B面を残すものは8例とやや少く、磨耗程度が弱いことは注意される。C部の敲打痕は16例に残るが、痕跡の強いものと弱いものと大差がある。第249図135のように割れ口の縁にたくさんの剥離が残る例、半折してから割れ口の縁を敲石として使用したため、角がすっかりつぶれてしまっている例(第250図141、251図143)など、敲打痕が顕著である。

凹みD部は16例に残されるが、一様にA(a)アバタ状の浅い散在する敲打痕の集合ともいえる凹みが大部分を占める。各面に何ヶ所もそうした集中が見られ、多い例は6ヶ所におよぶ。第252図147は大きい凹みB(d)が残る。

3号住居址出土の磨石類

磨石は、例は少ないが先土器時代にすでに存在が知られ、早創期にあってもわずかながら出土が知られている。磨石の在り方が大きく変化するのは撲糸文系土器及び押型文系土器の盛行する時期になってからである。それについて小林康男氏の「縄文時代の磨石」(中部高地の考古学I)に詳しいので参照されたい。

とくに押型文土器に伴出する特徴的な石器として穀摺石の存在が古くから指摘されているが、はからずも向陽台3住は樋沢式土器を単純に出土する住居址であり、3住における磨石の在り方は該期の石器組成を窺い知る上に、貴重な伴出例であることは論をまたないであろう。樋沢式土器の時期に、断面三角形の典型的な穀摺石が多量に存在する事実を明確にしておきたい。

また、扁平な磨石(アバタ状の凹みA(a)を複合する)、球形の磨石があり、凹石も確実にあることがわかった。これまでいくつかの遺跡で出土例が報告されていることではあるが、混在の恐れが多分にある中で、向陽台3住の在り方は今後の該期石器組成を考える上で大きな支柱となることは明らかである。

なお、本類では扱っていない石皿の存在について、磨石類との関連から一言触れておきたい。石皿の一部ではないかとみられそうな磨耗面のある断片が出土しているが、これが仮に石皿であったとしても、穀摺石、磨石に比べ量が少なすぎる。まして、向陽台全体を見ても完形品あるいはそれに近いものがないということは、磨石、穀摺石の製粉具説に一考を要するのではないだろうか。もっと使用痕の観察を通じ慎重な扱いを期すべきである。

参考・引用文献

- 阿部朝衛 1979 「ピエス・エスキュー」「石鎌」「聖山」
- 内原遺跡調査団 1982 「長井町内原遺跡」
- 岡村道雄 1983 「ピエス・エスキュー（楔形石器）」 繩文文化の研究7
- 片岡 駿 1970 「縄文文化の生産活動について」 古代文化22-11
- 後藤秀一 1979 「剥片生産技術の復元」「聖山」
- 斎藤幸恵 1986 「押型文系土器文化の石器群の様相」「越沢押型文遺跡調査研究報告書」
- 筆沢浩他 1975 「十二ノ后遺跡」「長野県中央遺跡報告書—諏訪市その4—」
- 西沢寿晃 1982 「柄原岩陰遺跡」「長野県史考古資料編(2)」
- 樋口喜重子 1986 「二側縁調整により尖端を作出した石器」「梨久保遺跡」
- 富士ノ宮市教育委員会 1983 「若宮遺跡」
- 宮下健司 1978 「矢柄研磨器の再検討」 信濃30-4
- 〃 1985 「日本における研磨技術の系譜」 日本原史
- 〃 1983 「有溝延石」 縄文文化の研究7
- 柳田俊雄 1974 「裁断面のある石器」「ふたがみ一二上山麓石器時代遺跡群分布調査報告」
- 山田晃弘 1986 「原石と石核」「両極石核」「ピエス・エスキュー」「不定形石器」「梨久保遺跡」
- 山中一郎 1982 「サヌカイト製石器遺物」「長原遺跡発掘調査報告II」
- 小林康男 1978 「縄文時代の磨石」「中部高地の考古学I」 長野県考古学会

第28表 繩文時代早期石器属性表

石器の観察表の凡例については詳説ごとに項目が異なるので、本文中の各器種項を参照願いたい。各項目で共通する略号は、
石材では、黒曜石—ob、チャート—ch、計測値の（ ）は残存値を示す。また「焼け」は火を受けていることである。

石核

通 号	石 材	長さ(m)	幅 (mm)	厚 (mm)	断面形状	表面状 態	表面被 覆	表面性 質	欠損部位 と状 況
21.1 H 370	ob	18.1	(12.2)	2.8	-	67°	1.6	(0.2)	S-S
21.1 H 54	ob	15.2	(14.0)	2.4	-	67°	1.3	(0.3)	S-S
21.2 H 100	ob	12.1	14.1	2.9	-	67°	0.2	外-外	S-S
21.2 H 97	ob	21.9	(12.2)	2.7	-	67°	1.3	(0.3)	S-S
21.2 H 97	ob	18.6	14.5	5.1	-	67°	1.7	1.2	外-外
21.2 H 110	ob	(25.7)	18.6	3.8	-	67°	-	(0.6)	内-外
21.2 H 50	ob	(12.5)	16.2	3.0	+4.2	-	-	-	内-外
21.2 H 50	ob	9.1	10.6	2.5	-	55°	1.9	0.2	S-S
21.3 H 528	ob	9.4	10.9	1.6	-	65°	1.6	0.2	内-外
21.3 H 528	ob	12.6	12.0	2.2	-	57°	1.4	0.2	D-D
21.3 H 528	ob	10.9	11.7	1.9	-	57°	1.3	0.1	D-D
21.3 H 1017	ob	16.0	19.3	5.4	0	75°	2.8	1.0	D-D
21.3 H 966	ob	13.3	11.3	2.6	0	67°	2.0	0.3	D-D
21.3 H 200	ob	10.3	11.0	2.2	+1.4	75°	2.2	0.2	S-S
21.3 H 565	ob	15.2	-	2.1	-	55°	1.4	(0.3)	外-内
21.3 H 197	ob	16.2	(10.7)	3.0	0	-	-	-	D-S
21.3 H 256	ob	-	-	3.5	-	-	-	-	D-S
21.3 H 364	ch	(44.1)	-	(6.0)	-	85°	2.9	(4.3)	D-D
21.3 H 1018	ob	9.6	8.9	1.7	+2.8	95°	1.1	0.1	D-D
30. CT 169	ch	24.1	(16.1)	3.4	5.9	95°	1.7	(1.0)	D-D
30. BI 150-1	ob	18.9	4.7	(6.1)	100°	2.0	(1.4)	外-外	B-B
30. BI 109-42	ob	-	-	(7.5)	-	-	(0.3)	-	A-A

石錐

通 号	石 材	長さ(m)	直径 (mm)	厚 (mm)	形 (mm)	実測角・厚 度	測定 角度	測定 厚	被 覆	材 料
21.1 H 363	D	ob	23.1	12.5	4.4	67°	2.3	0	x	片
21.1 H 85	D	ob	21.4	13.2	4.9	118°	2.3	0	S-S	片
21.1 H 58	D	ob	37.4	10.2	2.5	105°	1.8	0.5	S-S	片
21.3 H 967	D	ob	25.6	20.6	6.4	95°	4.1	0.5	S-S	片
21.3 H 735	B	ob	31.7	21.5	8.6	75°	1.8	b	外-外	片
21.3 H -	B	ob	31.7	7.2	105°	3.5	a	0.5	S-S	片
21.3 H 1010	B	ob	26.9	28.5	5.8	90°	1.8	c	内-内	片
21.3 H -55	C	ob	27.8	19.5	6.1	95°	2.0	0.5	D-D	片
21.3 H 1977	C	ob	(18.6)	15.7	3.7	118°	3.6	d	(1.3)	片
21.10H	D	ob	29.3	21.3	7.1	67°	2.6	c	外-外	片
30. G-101-7	D	ob	25.4	12.7	5.0	87°	2.1	b	0.6	片

地名	河川名	河合場	石井場	大	中	小	河	渠	分	渠
30 R. 2 H. 175	B o b	29.7	37.1	4.8	100 ² 2.1	b	—	—	—	—
30 S H	B o b (18.7)	13.8	5.2	—	110 ² 4.8	c	4	1.8	—	—
						c	—	—	—	—
						a	1.1	5.6	S-S	x
							—	D-D	x	—
								大通	渠	片
										片
21 1 H 127	IC	0.6	26.6	20.5	9.6	4.4	—	—	—	—
21 1 H 279	HB?	0.6	24.5	23.8	7.8	4.5	黄	黄	—	—
21 1 H 28	HAe	0.6	39.7	15.3	14.5	—	黄	黄	—	—
21 2 H 66	1b	0.6	21.2	19.5	11.0	3.6	—	—	—	—
21 3 H 304	1b	0.6	4.1	2.0	1.1	9.6	—	—	—	—
21 3 H 454	1b	0.6	3.1	2.4	0.6	6.8	—	—	—	—
21 3 H 318	1b	0.6	2.8	1.8	1.6	4.4	—	—	—	—
21 3 H 367	1b	0.6	2.2	1.5	1.0	5.0	—	—	—	—
21 3 H 467	1b	0.6	3.1	2.5	1.3	7.6	—	—	—	—
21 3 H 365	IC	0.6	2.6	2.3	1.4	6.7	—	—	—	—
21 3 H 237	IC	0.6	2.5	2.4	1.2	5.1	—	—	—	—
21 3 H 129	IC	0.6	3.5	2.5	1.8	5.7	—	—	—	—
21 3 H —16	IC	0.6	3.9	2.6	1.5	15.9	—	—	—	—
21 3 H 468	IC	0.6	4.1	2.2	0.9	6.4	—	—	—	—
21 3 H —16	IC	0.6	4.6	2.3	1.3	11.2	—	—	—	—
21 3 H 364	IC	0.6	3.2	2.8	1.5	9.8	—	—	—	—
21 3 H 281	IC	0.6	2.8	2.2	1.6	8.6	—	—	—	—
21 3 H 1120	IC	0.6	3.5	1.9	1.0	5.1	—	—	—	—
21 3 H 38	IC	0.6	2.8	2.5	1.0	6.5	—	—	—	—
21 3 H 495	IC	0.6	3.3	2.6	1.3	8.0	—	—	—	—
21 3 H 263	IC	0.6	2.8	2.0	1.3	6.7	—	—	—	—
21 3 H 177	IC	0.6	2.5	2.4	1.7	6.5	—	—	—	—
21 3 H 509	IC	0.6	2.6	2.4	1.9	5.9	—	—	—	—
21 3 H 962	IC	0.6	3.0	1.5	1.2	5.2	—	—	—	—
21 3 H 05	IC	0.6	2.8	2.4	1.5	6.5	—	—	—	—
21 3 H 1693	IC	0.6	2.9	1.7	1.0	4.0	—	—	—	—
21 3 H 364	1t	0.6	2.9	1.7	0.9	3.8	—	—	—	—
21 3 H —46	IC	0.6	3.5	2.1	1.4	5.6	—	—	—	—
21 3 H 267	HAb	0.6	2.1	1.5	0.9	3.6	黄	黄	—	—
21 3 H 499	HAb	0.6	3.7	2.9	0.9	9.2	黄	黄	—	—
21 3 H 391	HAb	0.6	3.2	2.2	1.0	7.5	—	—	—	—
21 3 H 237	HAb	0.6	2.9	2.5	1.2	7.5	—	—	—	—
21 3 H 303	HAc	0.6	3.6	2.8	1.7	14.9	黄	黄	—	—
21 3 H 259	HAc	0.6	2.9	2.2	1.6	7.9	黄	黄	—	—
21 3 H 299	HAc	0.6	2.6	1.5	1.4	5.2	—	—	—	—
21 3 H 241	HAb?	0.6	3.0	(2.5)	0.7	(3.0)	黄	黄	—	—
21 3 H 47	HBe	0.6	3.8	2.9	1.1	11.9	黄	黄	—	—
21 3 H 137	HBe	0.6	3.2	1.6	1.4	5.6	黄	黄	—	—
21 3 H 641	HBe	0.6	3.0	2.5	1.5	9.5	黄	黄	—	—
21 3 H 692	HBe	0.6	3.1	2.0	1.5	8.0	—	—	—	—

21. 3. H. 617	II B*	ob	2.5	1.1	1.0	2.8	直	文	-
21. 3. H. 259	III	ob	2.1	1.2	5.5	7.1	-	-	-
21. 10H -	I C	ob	37.1	18.7	14.5	7.1	-	-	-
21. 10H 13	I C	ob	33.5	24.0	18.6	13.8	-	-	-
21. 10H -	I C	ob	23.8	20.3	8.0	3.1	-	-	O
21. 10H 23	I C	ob	27.4	24.1	11.6	4.6	-	-	-
21. 10H 13	II A?	ob	41.0	30.4	8.0	5.7	直	文	-
30. H.101.22	I C	ob	43.2	39.7	21.1	22.7	-	-	-
30. K.103.3	I C	ob	43.6	32.0	8.0	11.9	-	-	-
30. B.H105.4	I C	ob	43.6	24.9	17.6	12.9	-	-	-
30. B.2.H -	I d	ob	32.7	16.6	11.9	6.5	-	-	-
30. B.2.H -	I C	ob	34.3	16.0	9.1	4.4	-	-	-
30. J.103.1	II A C	ob	32.6	32.2	13.8	13.9	直	文	-
30. G.101.39	II A C	ob	28.0	36.3	7.4	4.2	直	文	-
30. B.H104.1	III	ob	41.7	27.8	14.0	10.0	直	文	-

両極制縫を有する石器 (1・2・10号往届題、遺物外)

遺物名	区分類	断面類	断面形	断面	断面(m)	断面(cm)	断面(cm)	断面(cm)	断面(cm)
21. 1. H. 109	I A b	树	片	c/b	27.3	17.3	7.1	3.2	3.2
21. 1. H. 59	I A c	树	片	o/b	21.7	20.8	8.5	3.1	外側に自然剥離す、両端石板
21. 1. H. 76	II A b	树	片	o/b	17.0	13.4	4.8	0.9	ビエス・ズキード
21. 1. H. 287	II A d	—	片	o/b	18.4	15.6	5.4	1.2	ビエス・ズキード
21. 1. H. 117	III A s	树	片	o/b	16.5	15.7	4.2	1.1	ビエス・ズキード
21. 1. H. 108	III B a	树	片	o/b	20.5	20.7	13.1	4.0	片側に自然剥離す、両端石板
21. 1. H. 106	III B a	树	片	o/b	14.4	14.5	5.7	1.0	片側に自然剥離す、ビエス・ズキード
21. 1. H. 81	IV A b	树	片	o/b	23.6	16.8	6.3	2.4	片側に自然剥離す、両端石板
21. 1. H. 86	IV B a	—	片	o/b	22.7	13.4	8.6	2.8	ビエス・ズキード
21. 1. H. 349	IV B a	树	片	c/b	23.1	20.7	6.0	2.2	両端石板
21. 1. H. 43	IV B b	内側を状留	片	o/b	20.5	11.9	11.5	2.8	ビエス・ズキード
21. 2. H. 153	I A s	树	片	o/b	19.2	21.2	5.6	1.4	片側に自然剥離す、両端石板
21. 2. H. 150	I A b	内側を状留	片	o/b	21.5	17.9	10.0	3.0	片側に自然剥離す、両端石板
21. 2. H. 41	II B c	—	片	o/b	26.3	21.0	7.6	3.2	片側に自然剥離す、両端石板
21. 2. H. 82	III B b	石	板	o/b	19.2	13.6	8.0	1.9	片側に自然剥離す、両端石板
21. 2. H. 83	III B a	树	片	o/b	26.8	20.5	6.1	3.2	片側に自然剥離す、両端石板
21. 2. H. 114	IV C b	石	板	o/b	34.6	18.6	11.2	5.7	片側に自然剥離す、両端石板
21. 2. H. 153	I A s	内側を状留	片	o/b	31.4	19.3	11.7	6.7	両端石板
21. 10H. 23	I A a	板	片	o/b	31.2	21.5	13.8	7.6	片側に自然剥離す、ビエス・ズキード
21. 10H. —	I A a	树	片	o/b	19.0	20.1	4.0	2.0	片側に自然剥離す、両端石板
21. 10H. 13	I A b	树	片	o/b	27.5	19.1	8.7	4.5	片側に自然剥離す、両端石板
21. 10H. —	I A s	树	片	o/b	20.7	17.0	4.8	1.6	ビエス・ズキード
21. 10H. 13	IV A d	内側を状留	片	o/b	19.2	20.5	8.3	3.4	片側に受けている、ビエス・ズキード
30. B. G.101.17	I A b	树	片	o/b	20.5	22.0	7.3	3.2	水を含む
30. I. 104. 4	I B a	树	片	o/b	22.3	20.2	8.5	2.0	片側に自然剥離す、ビエス・ズキード
30. I. 105. 4	II B a	树	片	o/b	21.5	17.6	6.7	3.0	両端石板

ピエス・エスキュー(3号住居址)

遺物 No.	組合類	断片	石片	石片	石片	石片	石片	石片	石片	石片	石片	石片
30 B. M113 2 H7	HAA	利 片	0.0	17.0	18.6	6.7	1.6	ピエス・エスキュー				
30 B. 2 H 186 M104 3 B. 1 H ...	IVAb IVBb IVBc	利 片	0.0	14.0	25.5	10.7	6.9	ピエス・エスキュー				
30 B. M113 2 H7	HAA	利 片	0.0	15.0	15.0	5.6	1.2	ピエス・エスキュー				
30 B. 2 H 186 M104 3 B. 1 H ...	IVAb IVBb IVBc	利 片	0.0	25.2	18.4	8.0	3.6	ピエス・エスキュー				
30 B. M113 2 H7	HAA	利 片	0.0	23.0	17.1	8.3	3.0	ピエス・エスキュー				

遺物 No.	組合類	断片	石片	石片	石片	石片	石片	石片	石片	石片	石片	石片
21 3 H 169 3 H 433 3 H 230 3 H 615 3 H - HAA	I A a I A a I A a I B a I B a I B a	利 片	0.0	24.8	30.3	6.2	2.7					
21 3 H 169 3 H 433 3 H 230 3 H 615 3 H - HAA	I A a I A a I A a I B a I B a I B a	利 片	0.0	18.9	23.6	5.9	2.7					
21 3 H 169 3 H 433 3 H 230 3 H 615 3 H - HAA	I A a I A a I A a I B a I B a I B a	利 片	0.0	15.9	17.8	5.8	1.8					
21 3 H 169 3 H 433 3 H 230 3 H 615 3 H - HAA	I A a I A a I A a I B a I B a I B a	利 片	0.0	18.0	18.8	6.8	1.7	利方斜に古い面				
21 3 H 169 3 H 433 3 H 230 3 H 615 3 H - HAA	I A a I A a I A a I B a I B a I B a	利 片	0.0	18.8	14.8	4.9	1.4	利方斜に古い面				
21 3 H 169 3 H 433 3 H 230 3 H 615 3 H - HAA	I A a I A a I A a I B a I B a I B a	利 片	0.0	21.5	22.0	5.4	2.1	利方斜に古い面				
21 3 H 169 3 H 433 3 H 230 3 H 615 3 H - HAA	I A a I A a I A a I B a I B a I B a	利 片	0.0	16.6	22.0	4.8	1.5	利方斜に古い面				
21 3 H 169 3 H 433 3 H 230 3 H 615 3 H - HAA	I A a I A a I A a I B a I B a I B a	利 片	0.0	16.4	15.0	6.7	1.3	利方斜に古い面				
21 3 H 169 3 H 433 3 H 230 3 H 615 3 H - HAA	I A a I A a I A a I B a I B a I B a	利 片	0.0	16.3	15.0	5.6	0.9					
21 3 H 169 3 H 433 3 H 230 3 H 615 3 H - HAA	I A a I A a I A a I B a I B a I B a	利 片	0.0	17.1	11.5	4.7	0.9					
21 3 H 169 3 H 433 3 H 230 3 H 615 3 H - HAA	I A a I A a I A a I B a I B a I B a	利 片	0.0	19.0	15.6	6.4	1.6					
21 3 H 169 3 H 433 3 H 230 3 H 615 3 H - HAA	I A a I A a I A a I B a I B a I B a	利 片	0.0	20.2	13.5	6.9	1.7					
21 3 H 169 3 H 433 3 H 230 3 H 615 3 H - HAA	I A a I A a I A a I B a I B a I B a	利 片	0.0	18.2	13.4	5.5	3.1					
21 3 H 169 3 H 433 3 H 230 3 H 615 3 H - HAA	I A a I A a I A a I B a I B a I B a	利 片	0.0	17.9	17.0	4.8	1.4					
21 3 H 169 3 H 433 3 H 230 3 H 615 3 H - HAA	I A a I A a I A a I B a I B a I B a	利 片	0.0	15.6	16.2	4.6	1.0					
21 3 H 169 3 H 433 3 H 230 3 H 615 3 H - HAA	I A a I A a I A a I B a I B a I B a	利 片	0.0	19.1	15.6	5.7	1.3					
21 3 H 169 3 H 433 3 H 230 3 H 615 3 H - HAA	I A a I A a I A a I B a I B a I B a	利 片	0.0	24.3	10.3	5.4	1.3					
21 3 H 169 3 H 433 3 H 230 3 H 615 3 H - HAA	I A a I A a I A a I B a I B a I B a	利 片	0.0	19.8	15.7	4.2	1.2					
21 3 H 169 3 H 433 3 H 230 3 H 615 3 H - HAA	I A a I A a I A a I B a I B a I B a	利 片	0.0	17.1	13.0	3.7	0.8					
21 3 H 169 3 H 433 3 H 230 3 H 615 3 H - HAA	I A a I A a I A a I B a I B a I B a	利 片	0.0	19.4	14.1	4.8	1.2					
21 3 H 169 3 H 433 3 H 230 3 H 615 3 H - HAA	I A a I A a I A a I B a I B a I B a	利 片	0.0	21.2	15.4	8.8	2.0					
21 3 H 169 3 H 433 3 H 230 3 H 615 3 H - HAA	I A a I A a I A a I B a I B a I B a	利 片	0.0	18.5	14.4	7.6	1.8					
21 3 H 169 3 H 433 3 H 230 3 H 615 3 H - HAA	I A a I A a I A a I B a I B a I B a	利 片	0.0	17.2	13.7	3.9	1.0					
21 3 H 169 3 H 433 3 H 230 3 H 615 3 H - HAA	I A a I A a I A a I B a I B a I B a	利 片	0.0	21.4	17.6	7.3	2.2					
21 3 H 169 3 H 433 3 H 230 3 H 615 3 H - HAA	I A a I A a I A a I B a I B a I B a	利 片	0.0	21.7	18.9	7.3	3.0					

両端削片(3号住居址)

遺物 No.	組合類	断片	石片	石片	石片	石片	石片	石片	石片	石片	石片	石片
21 3 H 621 3 H 637 3 H 644 3 H 47 3 H 110 3 H 206 3 H 1645	SIA a SIB a SIC a SIA b SIB a SIA c SIA d	内4枚状石 片	0.0	29.3	16.0	8.5	3.6					
21 3 H 621 3 H 637 3 H 644 3 H 47 3 H 110 3 H 206 3 H 1645	SIA a SIB a SIC a SIA b SIB a SIA c SIA d	内4枚状石 片	0.0	30.4	12.7	4.0	1.7					
21 3 H 621 3 H 637 3 H 644 3 H 47 3 H 110 3 H 206 3 H 1645	SIA a SIB a SIC a SIA b SIB a SIA c SIA d	内4枚状石 片	0.0	24.3	9.4	7.0	1.2					
21 3 H 621 3 H 637 3 H 644 3 H 47 3 H 110 3 H 206 3 H 1645	SIA a SIB a SIC a SIA b SIB a SIA c SIA d	内4枚状石 片	0.0	29.8	15.4	7.1	2.5					
21 3 H 621 3 H 637 3 H 644 3 H 47 3 H 110 3 H 206 3 H 1645	SIA a SIB a SIC a SIA b SIB a SIA c SIA d	内4枚状石 片	0.0	24.8	9.2	11.0	2.4					
21 3 H 621 3 H 637 3 H 644 3 H 47 3 H 110 3 H 206 3 H 1645	SIA a SIB a SIC a SIA b SIB a SIA c SIA d	内4枚状石 片	0.0	33.0	15.5	7.0	1.4					
21 3 H 621 3 H 637 3 H 644 3 H 47 3 H 110 3 H 206 3 H 1645	SIA a SIB a SIC a SIA b SIB a SIA c SIA d	内4枚状石 片	0.0	35.9	11.4	4.7	1.2					

地図 No.	断面 No.	断面分類	測定	基点	高さ(m)	傾き(m/s)	傾き(°)	標高(m)	標高(m)	標高(m)	標高(m)
21 3 H 21	SIAc	樹 木 片	樹 木 片	0.0	22.4	15.0	8.3	2.5			
21 3 H 767	SHAI-	角 れ キ 状 岩 石	角 れ キ 状 岩 石	0.0	17.5	13.8	4.3	0.9			
21 3 H 237	SHAI	角 れ キ 状 岩 石	角 れ キ 状 岩 石	0.0	21.8	17.1	8.8	2.4			
21 3 H 638	SHAI-	角 れ キ 状 岩 石	角 れ キ 状 岩 石	0.0	22.9	20.3	7.0	2.7			
21 3 H 180	SHAI	—	—	0.0	24.3	9.2	9.0	2.7			
21 3 H 369	SWAb	—	—	0.0	18.4	14.7	5.5	1.1			
21 3 H 66	SWAb	樹 木 片	樹 木 片	0.0	34.4	16.4	7.6	2.5			
21 3 H 319	SWAa	—	—	0.0	26.5	23.3	5.6	2.9			
21 3 H 190	SWAe	—	—	0.0	21.8	7.3	7.0	0.9			
21 3 H 1645	SWAe	—	—	0.0	24.6	12.2	2.4	0.9			
21 3 H 296	SWAe	—	—	0.0	26.9	16.8	6.6	1.6			
21 3 H 269	SWAe	樹 木 片	樹 木 片	0.0	17.5	10.9	4.2	0.5			
21 3 H 259	SWAa	—	—	c.b	20.4	16.2	6.6	2.5			
21 3 H —	SWAe	樹 木 片	樹 木 片	0.0	24.8	12.2	9.0	2.5			
21 3 H —	SWAe	—	—	0.0	21.6	9.7	7.0	1.2			
21 3 H —	SWAf	樹 木 片	樹 木 片	0.0	21.2	8.4	7.0	1.2			
21 3 H —	SWAf	—	—	0.0	19.2	14.0	6.8	1.5			
21 3 H —	SWAf	樹 木 片	樹 木 片	0.0	15.0	7.6	4.8	0.7			
21 3 H —16	SWAf	角 れ キ 状 岩 石	角 れ キ 状 岩 石	0.0	26.5	14.7	12.0	4.5			
21 3 H 719	SMCh	樹 木 片	樹 木 片	0.0	18.9	19.7	9.9	2.9			
21 3 H —16	SMCh	樹 木 片	樹 木 片	0.0	28.0	18.8	7.2	3.2			
21 3 H —16	SMCh	樹 木 片	樹 木 片	0.0	21.0	19.4	6.5	2.6			
21 3 H 488	SMCh	角 れ キ 状 岩 石	角 れ キ 状 岩 石	0.0	25.0	20.2	11.3	5.0			
21 3 H 293	SMCh	—	—	0.0	18.7	11.7	6.3	1.4			
21 3 H —	SMCb	樹 木 片	樹 木 片	0.0	16.5	17.3	6.2	1.7			
21 3 H 762	SMCb	樹 木 片	樹 木 片	0.0	37.3	15.1	7.2	4.7			
21 3 H 107	SMBe	樹 木 片	樹 木 片	0.0	25.1	11.4	6.5	1.4			
21 3 H —16	SMBb	樹 木 片	樹 木 片	0.0	21.0	11.8	3.3	0.8			
21 3 H 1045	SMBa	樹 木 片	樹 木 片	0.0	23.9	7.8	5.5	1.2			
21 3 H 187	SMAr	角 れ キ 状 岩 石	角 れ キ 状 岩 石	0.0	16.0	10.5	10.4	3.4			
21 3 H —	SMBb	—	—	0.0	22.4	25.8	3.0				
21 3 H 759	SMAc	樹 木 片	樹 木 片	0.0	26.0	23.3	9.9	4.1			
21 3 H 705	SIVa	—	—	0.0	22.6	13.9	4.7	1.2			
21 3 H 1143	SIVa	樹 木 片	樹 木 片	0.0	22.7	17.2	17.6	4.6			
21 3 H 617	SMCh	角 れ キ 状 岩 石	角 れ キ 状 岩 石	0.0	19.4	15.3	6.4	1.4			
21 3 H —16	SIVa	樹 木 片	樹 木 片	0.0	27.8	9.8	4.2	1.2			
21 3 H 190	SIVa	—	—	0.0	19.7	7.4	2.9	0.4			
21 3 H 54	SIVb	石 灰 岩	石 灰 岩	0.0	26.0	29.0	8.8	6.6			
21 3 H 186	SIVb	角 れ キ 状 岩 石	角 れ キ 状 岩 石	0.0	22.1	15.3	10.6	2.2			
21 3 H 301	SIVb	樹 木 片	樹 木 片	0.0	26.0	14.9	6.0	2.2			
21 3 H 627	SIVb	樹 木 片	樹 木 片	0.0	26.9	12.4	7.9	1.7			
21 3 H 899	SIVa	—	—	0.0	34.5	12.0	3.3	1.2			
21 3 H 256	SIVa	樹 木 片	樹 木 片	0.0	21.2	20.1	6.1	1.9			
21 3 H 1124	SIVa	—	—	0.0	19.3	13.1	3.3	0.8			
21 3 H —16	SIVd	樹 木 片	樹 木 片	0.0	23.9	19.9	6.6	2.2			
21 3 H 208	SIVb	—	—	0.0	14.7	13.4	6.3	1.2			

遺跡名	組合せ	基盤	基盤	基盤	基盤	基盤	基盤
21 3 H 181	SV	板状葉石	0 b	28.2	22.1	7.4	3.7
21 3 H —	SV	板	0 b	21.4	17.6	4.2	1.5
21 3 H 96	S1Bc	板	0 b	32.5	11.6	9.3	2.7
21 3 H 970	SWC _b	—	0 b	26.3	7.6	6.6	1.5
21 3 H 601	SIVB	—	0 b	21.4	19.3	7.5	2.0
21 3 H 767	SIVB _c	—	0 b	16.5	13.8	4.3	0.7
21 3 H 601	SIVR _c	角	0 b	21.1	18.8	7.2	2.2
21 3 H 8	SMC _b	内レキ板状石	0 b	27.2	15.8	12.1	4.7
21 3 H 163	SIIA _i	角	0 b	17.4	14.0	4.6	0.9
21 3 H 457	SIIA _a	角	0 b	19.9	13.8	6.5	1.6
21 3 H 106	SIC _c	角	0 b	20.9	16.8	6.9	0.8
21 3 H 107	SIVB _d	角	0 b	18.6	31.0	7.3	3.3
21 3 H 48	SIVA	角	0 b	18.1	14.4	3.5	1.1
21 3 H 1154	SIVB _c	角	0 b	73.8	35.4	4.9	1.7
21 3 H 1077	SVC	角	0 b	18.3	22.0	5.4	2.1

両面剥離面を有する石器（ビエス・エスキューと両面石核に分離不能なもの）

遺跡名	組合せ	基盤	基盤	基盤	基盤	基盤	基盤
21 3 H 767	I BAs	角	0 b	26.7	10.7	10.1	4.6
21 3 H 171	I IAs	角	0 b	30.6	14.6	6.6	2.6
21 3 H 192	I VBb	角	0 b	31.8	19.0	11.3	5.3
21 3 H —	I Ba	角	0 b	16.3	13.4	8.4	1.3
21 3 H 34	I VBa	内レキ板状石	0 b	33.1	16.0	3.5	6.0
21 3 H 476	I VAb	板状葉石	0 b	35.4	32.7	8.5	3.2

両面石核

遺跡名	組合せ	基盤	基盤	基盤	基盤	基盤	基盤
21 3 H 146	I Aa	角	0 b	18.4	(10.2)	8.8	3.1
21 3 H 96	I Aa	角	0 b	20.3	14.9	9.0	1.6
21 3 H 520	I Ba	角	0 b	23.5	14.6	9.6	2.5
21 3 H 158	I Ba	角	0 b	27.4	21.2	8.6	4.2
21 3 H 196	I Ba	角	0 b	27.6	6.2	8.7	4.5
21 3 H 138	I Ba	角	0 b	14.8	17.2	9.1	1.8
21 3 H —16	I C	角	0 b	21.4	19.7	10.7	4.0
21 3 H 499	I IAs	—	0 b	22.6	21.1	9.8	3.8
21 3 H 1365	HBa	石	0 b	26.5	15.5	12.3	4.8
21 3 H 497	HBa	石	0 b	20.6	21.6	10.6	3.9
21 3 H —16	WC _a	石	0 b	18.6	42.8	13.5	8.6
21 3 H —16	WC _c	内レキ板状石	0 b	17.2	35.2	12.2	6.6
21 3 H 319	HCd	内レキ板状石	0 b	21.3	18.3	11.0	4.0
21 3 H 627	IVBd	—	0 b	22.6	12.4	7.5	2.0
21 3 H 692	IVBc	内レキ板状石	0 b	26.6	14.7	9.1	4.1
21 3 H 1178	IVBd	板状葉石	0 b	27.7	18.9	6.8	3.3
21 3 H 1023	IVBc	石	0 b	21.2	39.4	6.4	3.0

内側面と同時に内側面削れも
両面とも打痕がつくている

大蛇の子を組入

大蛇の子を組入

バイガーラテクニクにようられ

板石を材料とし、隙間打添で分離両面削れを行なう

遺物名	組合番	種別	形状	直径(cm)	幅(cm)	高さ(cm)	厚さ(cm)	重さ(kg)
21 3 H 384	IVB c	板状灰岩	柱状 石柱	φ b	23.9	21.1	16.9	4.6
21 3 H 174	IVB e	石柱	柱	φ b	26.9	19.5	11.8	4.5
21 3 H 372	1 BB	柱	A	φ b	27.4	13.2	8.2	1.8
21 3 H 256	IVC d	角閃石輝石	柱	φ b	18.4	14.4	6.7	2.3
21 3 H 1293	1BB b	柱	B	φ b	18.3	23.8	16.8	3.2
21 3 H 488	UAc	—	柱	φ b	23.8	21.5	8.0	3.6
21 3 H 500	IMCa	—	柱	φ b	23.9	14.7	14.2	4.9
21 3 H —	IVC a	角閃石輝石	柱	φ b	17.3	25.8	13.4	4.5
21 3 H 625	IVC d	角閃石輝石	柱	φ b	22.7	34.6	16.7	8.2
21 3 H 266	IVC a	—	柱	φ b	22.0	4.8	6.6	1.9
21 3 H 299	IVC c	角閃石輝石	柱	φ b	19.6	19.8	10.9	3.0
21 3 H —	IMA a	—	柱	φ b	20.5	20.4	16.6	3.1

測定例
角閃石輝石柱
柱径φ b = 20.5 cm
柱高さ = 20.4 cm
柱厚さ = 16.6 cm
柱重さ = 3.1 kg

第3節 向陽台遺跡

不定形石器

通 動 №	組分類	石材	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)	機能(部位・形状・性状)	素材	備 考	
21 1 H 145	②	o b	21.9	19.2	7.0	2.2	長握側・直・片、圓	同種側片		
21 1 H 292	③	o b	19.3	18.0	5.3	1.6	長側面・直・外・片	側 片		
21 1 H 175	②	c h	(38.6)	27.3	11.5	(14.7)	長握側・直・外・圓	側 片		
21 1 H 199	①	o b	39.2	18.8	7.0	3.7	長側・外内・片	側 片		
21 1 H 292	④	o b	28.4	15.9	6.9	1.7	長側・直・外内・片	側 片		
21 1 H 12	①	o b	18.2	17.4	4.1	1.2	長握側・直・外内・片	側 片		
21 1 H 117	④	o b	(14.5)	11.8	3.0	(0.7)	長握側・直・片	側 片		
21 1 H 5	⑤	o b	(27.6)	(18.6)	5.9	(2.6)	長側・外内・片	側 片	オレ オレ	
21 1 H 36	⑥+⑦	o b	35.8	13.6	15.8	2.6	同種側・長側・直・内・片	側 片		
21 1 H 84	⑤	o b	26.1	15.9	6.5	2.0	長側・外・片	側 片		
21 1 H 111	⑥+⑧	o b	22.7	16.5	6.7	1.3	短側・同長側・直・内・片	側 片		
21 1 H 230	⑨	o b	16.6	8.8	2.8	0.4	長握側・直・片	側 片		
21 1 H 376	⑩	o b	21.9	13.9	7.2	1.2	短側・直・片	側 片		
21 1 H 28	⑨	o b	(28.5)	(18.3)	11.3	(3.5)	短側・直・片	側 片		
21 1 H 3	⑨	o b	29.7	26.2	9.0	7.2	長・短側・外・内・片	側 片	オレ	
21 1 H 112	⑨	o b	30.8	26.3	5.5	3.6	長握側・直・片	側 片		
21 1 H 111	⑨	o b	34.5	25.9	6.5	4.2	長側・直・片	側 片		
21 1 H 117	⑨	o b	25.2	18.4	8.5	3.3	長側・直・片	側 片		
21 1 H 238	⑨	o b	31.0	15.0	6.8	2.5	長側・直・片	側 片		
21 1 H 123	⑨	o b	23.6	16.8	4.8	1.6	同長側・短側・内・直・片	側 片		
21 1 H 112	⑨	o b	25.8	15.2	7.1	2.1	長側・直・片	側 片		
21 1 H 12	⑨	o b	30.0	14.9	4.2	1.1	長側・内・片	側 片		
21 1 H 346	⑨	o b	22.5	13.6	3.4	1.0	長側・直・片	側 片		
21 1 H 2	⑨	o b	16.5	14.1	3.8	0.7	長側・直・片	側 片		
21 1 H 153	⑨	o b	28.7	21.5	6.6	3.5	長側・内・片	同種側片		
21 1 H 58	⑩A	c h	24.1	13.3	5.9	2.2	後側・直・片	同種側片		
21 1 H 155	⑨	c h	32.5	23.1	8.7	6.5	長・短側・直・片	同種側片		
21 1 H 83	⑨	o b	29.5	15.2	5.9	2.5	短側・直・片	側 片		
21 3 H 601	⑩A	c h	(36.3)	29.4	8.1	(8.7)	長側・直・片	側 片	オレ	
21 3 H 855	⑩A	o b	(26.4)	(21.6)	8.8	(2.4)	一・内・片	側 片	オレ	
21 3 H 760	⑩A	c h	(38.2)	26.2	8.9	(8.8)	長側・直・片	側 片	オレ	
21 3 H 468	⑩A +	o b	38.1	29.7	7.6	8.2	長側・直・片	側片(片面に自然剥離)		
21 3 H 155	⑩A	o b	30.4	14.3	8.0	2.9	長側・直・片	側片(片面に自然剥離)		
21 3 H 1	⑩A	c h	37.1	25.9	6.9	7.7	短側・外・片	側 片		
21 3 H 480	⑩B	c h	21.6	18.6	3.7	1.9	同長側・内・外・片	同種 片		
21 3 H 388	⑩B	o b	24.5	13.8	5.3	1.5	短側・直・片	側 片		
21 3 H 301	⑩B	o b	24.8	18.1	7.9	2.5	長側・外・片	原 石		
21 3 H 833	⑩B	o b	17.9	14.0	3.4	0.7	短側・直・片	側 片		
21 3 H 1	⑩B	o b	17.1	13.5	4.9	0.9	長側・外・片	同種側片		
21 3 H 1	⑩B -	o b	24.7	16.8	4.4	1.6	長側・外・片	側 片		
21 3 H 730	⑩B	o b	24.2	(8.7)	5.0	(0.6)	長側・直・片	側 片		
21 3 H 787	⑩B	枝根岩	35.1	23.9	4.2	3.9	長側・直・片	側 片		
21 3 H 1	—	o b	28.5	(17.5)	5.3	(1.2)	長・短側・直・片	側 片		
21 3 H 1830	⑩B	o b	26.4	18.9	4.7	1.5	長・短側・外・片	同種側片		
21 3 H 586	⑩B	o b	(20.7)	15.6	7.0	(1.8)	胸長側・直・片	側 片		
21 3 H 15	⑩B	o b	(19.3)	(13.4)	5.0	(0.6)	短側・外・片	側 片		
21 3 H 621	⑩B	o b	30.5	21.4	5.9	3.1	長側・直・片	側 片		
21 3 H 796	⑩B + ⑩C	c h	44.9	46.5	13.8	38.7	同長側・直・片	側 片		
21 3 H 1	—	⑩C	o b	59.1	35.4	13.2	25.5	長側・外・圆	側 片	
21 3 H 15	—	⑩C	o b	34.0	25.9	11.6	6.7	長側・直・圆	側 片	
21 3 H 339	⑩D	o b	(34.3)	18.3	7.3	(3.0)	長側・直・片	側 片	オレ	
21 3 H 388	⑩D	o b	(29.4)	14.5	4.3	(1.9)	長側・直・片	側 片	オレ	
21 3 H 648	⑩E	c h	37.6	28.7	7.1	5.6	長側・外・片	側 片		
21 3 H 182	⑩E	o b	20.6	11.7	2.9	0.6	長側・直・片	側 片		
21 3 H 813	⑩E + ⑩F	c h	26.1	29.3	8.8	6.2	同種側・内外直・片	石 槌		
21 3 H 185	⑩E	o b	20.5	19.5	4.3	2.2	長側・直・片	同種側片		
21 3 H 314	⑩E	o b	31.6	19.5	6.5	3.4	長側・外・片	側 片		
21 3 H 406	⑩E	c h	28.1	26.8	9.8	9.5	短側・内・片	側 片		
21 3 H 1196	⑩E	o b	19.9	18.1	3.0	1.2	長側・外・片	同種側片		
21 3 H 795	⑩E	o b	24.3	18.6	10.8	4.0	長側・直・片	同種側片		
21 3 H 580	⑩E + ⑩F	c h	38.4	37.5	7.5	10.8	長側・直・片	側 片		
21 3 H 484	⑩E	o b	22.5	16.4	6.3	1.9	短側・直・片	側 片		
21 3 H 185	⑩E	o b	28.7	9.6	5.3	1.0	長側・直・片	側 片		
21 3 H 644	⑩E	c h	50.5	24.0	11.1	13.4	同長側・外・片	側 片		
21 3 H 1077	⑩E	c h	40.9	34.5	11.5	15.3	長側・直・片	石 槌		

第三章 調査 造跡

造物 No	組分類	石材名	長(m)	幅(m)	厚(m)	重(t)	調整(部位・形状・性状)	石材	備考
21 3 H 1051	③	○ b	22.1	22.0	8.2	2.5	長側・直・片	斜 片	
21 3 H 126	③	○ b	46.0	17.3	12.8	8.4	長側・直・片	原 石	
21 3 H 301	③	○ b	41.9	26.2	7.1	5.2	長側・直・片	斜 片	
21 3 H 809	③	○ b	24.8	11.5	4.9	1.2	長側・直・片	圓 盤	
21 3 H 512	③	○ b	20.4	18.2	10.9	3.0	長側・外・片	斜 片	
21 3 H —	③	○ b	35.3	29.8	11.0	9.0	長・短観・内・片	斜 片	
21 3 H —	③	○ b	28.2	26.4	8.1	4.7	全周・外・直・片	斜 片	
21 3 H 98	③	○ b	31.1	13.6	6.3	2.4	長側・直・片	圓盤片	
21 3 H —	③	○ b	30.7	12.1	5.8	1.7	長側・内・外・片	圓盤片	
21 3 H 526	③	c h	37.2	29.0	10.6	9.7	短側・直・片	斜 片	
21 3 H 627	③	○ b	24.7	17.7	8.8	3.4	長側・直・片	斜片(一面に自然面残す)	
21 3 H 991	③	○ b	30.4	23.8	12.5	5.7	長側・内・片	圓盤石板	ノッチ
21 3 H 67	③	○ b	(32.6)	16.1	6.0	(1.6)	長側・直・片	斜 片	
21 3 H 501	③	○ b	29.4	14.0	3.8	1.8	長側・直・片	斜片(一面に自然面残す)	
21 3 H 232	③	c h	(41.0)	(25.2)	4.6	(4.5)	長側・外・片	斜 片	
21 3 H 478	③	○ b	(29.1)	15.0	7.4	2.1	長側・直・片	斜 片	
21 3 H 701	③	○ b	(25.4)	22.1	9.4	(4.9)	圓長側・内・直面・片	斜板原石	
21 3 H 1195	③	○ b	39.5	19.4	13.1	(10.6)	長側・直・片	角レキ原石	
21 3 H 641	③	○ b	(21.1)	(14.6)	4.6	(1.4)	短側・直・片	斜 片	
21 10H —	③	○ b	16.7	16.5	4.8	1.5	長側・直・片	圓盤片	
21 10H 9	①-B	○ b	27.6	20.2	8.7	4.5	長側・外・片	斜 片	
21 10H —	①+②	c h	(51.5)	(35.5)	12.7	(20.9)	圓長側・外・片	斜 片	オレ オレ
21 10H 22	③	○ b	(37.0)	22.6	7.0	(6.0)	長側・外・片	斜 片	
21 10H —	①	○ b	22.1	19.9	7.4	3.2	長側・直・片	圓盤片	
21 10H 13	③	○ b	15.5	11.7	5.2	0.9	長側・直・片	斜 片	
21 10H 16	③	○ b	12.2	(12.0)	4.9	(0.9)	長側・直・片	斜 片	
21 10H —	③	○ b	26.5	13.6	5.1	1.3	長側・直・片	斜 片	
21 10H —	③	○ b	37.6	21.5	8.4	5.2	長側・直・片	斜 片	
21 10H 13	③	○ b	24.4	7.3	3.2	0.8	長側・直・片	斜 片	
21 10H 16	③	○ b	21.2	12.0	6.3	1.6	長側・内・片	斜 片	
21 10H 38	③	○ b	24.5	13.8	3.6	1.1	短側・直・片	斜 片	
21 10H —	③	○ b	23.9	22.1	5.9	2.0	短側・外・片	斜 片	
21 10H 42	③	○ b	16.8	16.2	4.0	1.0	長側・直・片	斜 片	
21 10H —	③	○ b	22.5	13.1	3.0	1.1	長側・外・片	斜 片	
30 H102 15	①A	c h	32.6	25.9	8.1	8.1	長側・内・片	石 板	
30 G102 5	①B	c h	44.4	26.2	11.2	15.0	長側・外・片	圓盤片	
30 B 1-103 2	③	○ b	32.0	16.5	3.7	1.5	圓長側・内・外・片	斜 片	
30 I 11H —	④	○ b	(24.0)	19.3	5.5	(2.0)	長側・直・片	斜 片	オレ
30 K 2 3	③	○ b	25.0	(14.8)	4.4	(1.6)	長側・外・片	斜 片	オレ
30 BC 100	③	○ b	19.5	15.2	4.2	1.3	長側・直・片	圓盤片	
30 J1032	③	○ b	(24.1)	22.8	8.0	(3.7)	長側・内・片	斜 片	オレ
30 F104 1	③	○ b	27.0	22.0	4.1	2.6	長側・内・片	斜 片	オレ
30 BG1051	③	○ b	22.5	18.2	6.0	2.5	短側・外・片	斜 片	
30 BM1134	③	○ b	26.5	15.3	6.8	1.9	長側・直・片	斜 片	
30 C 1-V 36	③	○ b	(55.0)	43.0	9.0	(17.5)	長長側・内・外・片	斜 片	オレ
30 H107 7	③	○ b	21.6	20.5	5.6	2.4	短側・直・片	斜 片	
30 B 2 H 36	③	○ b	25.9	20.0	14.1	4.1	長側・直・内・片	斜 片	
30 B 2 H 36	①A	○ b	31.5	(12.8)	4.6	(2.0)	長側・外・片	斜 片	
30 BG10211	③	○ b	23.5	14.4	4.9	1.1	長側・外・片	斜 片	
30 H104 10	③	○ b	22.8	19.0	4.7	1.5	長側・直・片	斜 片	
30 H104 11	③	○ b	23.6	15.9	6.8	2.0	長側・直・片	斜 片	
30 B 2 H —	③	c h	(26.6)	(18.5)	5.3	(3.0)	長側・外・片	斜 片	オレ

造物 No	組分類	石材名	長(m)	幅(m)	厚(m)	重(t)	調整方法	石材	備考
21 3 H —	③	○ b	35.0	15.2	8.8	2.8	40°	背・a	斜 片
21 3 H 762	③	○ b	36.6	15.6	14.3	2.5	40°	背・a	斜 片
21 3 H 625	③	○ b	27.8	22.5	6.8	3.0	65°	背・a	斜 片
30 BG 081	③	○ b	37.2	20.8	8.3	5.0	70°	背・a	斜 片

造物 No	組分類	石材名	長(m)	幅(m)	厚(m)	重(t)	調整方法	石材	備考
21 3 H —	③	c h	49.6	25.6	11.5	5.8	全周面調整	斜 片	
21 3 H 622	③	c h	69.3	42.6	14.9	35.6	石材の割折る3辺に①A調整	斜 片	
21 3 H 13	③	c h	69.0	31.3	32.2	27.7	2辺に②B調整	斜 片	
21 3 H 468	③	○ b	32.5	18.8	8.3	3.3	石材の表面が、片面①A調整	石 板?	
21 3 H 293	③	○ b	34.5	25.2	6.1	4.5	石材の表面が、片面①A調整	板状原石	造物有り
21 3 H 146	③	○ b	16.7	13.2	4.9	1.2	全周①B調整	斜 片	

第3節 向陽台遺跡

原石

遺物No.	細分類	石材名	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	分割	備考
21 3 H 484	板状	o b	6.6	1.9	11.3	10.3		
21 3 H 291	板状	o b	3.8	1.5	9.8	3.6		
21 3 H 142	板状	o b	(2.1)	1.8	9.6	(2.2)		折れ
21 3 H 629	板状	o b	3.2	2.4	0.6	3.8		
21 3 H —	直角レキ状	o b	2.2	1.7	1.2	6.3	○	板状に近い小形のものである。
21 3 H 291	直角レキ状	o b	2.6	1.9	1.0	4.9	○	板状に近い小形のものである。
21 3 H 1023	直角レキ状	o b	2.4	1.9	1.1	3.7	○	板状に近い小形のものである。
21 3 H —	直角レキ状	o b	2.3	1.8	0.8	3.6		板状に近い小形のものである。

不定形石器 (ob, ch)

遺物No.	石材名	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	備考
21 1 H 169	頁岩	95	56	8	44.1	板刀(片刃)隣辺に微調整あり
21 1 H 87	安山岩	98	83	38	463.7	チヨットマー
21 1 H 95	頁岩	90	59	15	90.6	
21 1 H 63	頁岩	101	66	16	112.9	
21 1 H 117	頁岩	100	71	36	368.3	石材の長辺と短辺に打撃による大きなお距
21 1 H 89	頁岩	96	73	17	168.2	
21 1 H 81	頁岩	92	42	9	28	(板刀)石材の長辺わざかに調整
21 2 H 86	頁岩	83	72	28	191.8	
21 2 H 96	頁岩	(70)	(36)	(16)	(39.7)	残片
21 2 H —	頁岩	78	36	8	28.2	板刀?
21 2 H 129	頁岩	69	66	22	136.6	
21 2 H 28	頁岩	88	69	29	143.9	大きな剝離のみ、微調整は見られない
21 2 H 133	頁岩	75	61	29	108.3	
21 2 H 2	頁岩	106	81	35	311.8	
21 2 H 149	頁岩	76	55	19	90.9	両方向からの大きな剝離で、ヤリ先形の先端を作出している。わずかに微調整がみられる。
21 10 H 7	頁岩	79	43	13	45.4	
21 16 H 43	細粒凝灰岩	85	35	7	20.5	
30 B E 102	頁岩	71	60	34	151.4	
30 B K 1.6	頁岩	82	64	18	122.9	
21 3 H 512	頁岩	85	57	36	224.5	石材端片に敲打による大きな剝離あり
21 3 H 538	凝灰質砂岩	106	85	44	383.5	断面の大きな剝離のみ。
21 3 H —	頁岩?	77	51	10	38.5	板刀
21 3 H 304	頁岩	87	73	17	131.7	
21 3 H 37	頁岩	101	64	16	133	板刀
21 3 H 183	頁岩	107	56	19	119.5	板刀
21 3 H 775	頁岩	90	70	2.1	161.4	短辺に大きな剝離のみ。
21 3 H 627	粗粒砂岩	87	67	34	176.5	チヨットマー
21 3 H 1136	頁岩	97	56	16	77.2	板刀
21 3 H —	粗粒砂岩	142	44	14	98.3	2面削に調整あり
21 3 H —	中粒砂岩	64	57	14	74.3	
21 3 H 1161	細粒凝灰岩	90	55	17	95.5	板刀
21 3 H —	頁岩	84	61	23	112.8	
21 3 H 956	頁岩	92	40	12	59.8	板刀
21 3 H 661	頁岩	76	32	12	29.2	板刀
21 3 H —	頁岩	83	62	18	84.7	
21 3 H 1170	頁岩	74	48	13	52.1	板刀
21 3 H 428	頁岩	93	60	22	121.2	板刀
21 3 H —	頁岩	74	33	9	23.1	
21 3 H 538	頁岩	109	83	21	207.8	
21 3 H 18	頁岩	126	96	30	377.6	
21 3 H —	頁岩	127	83	39	432.3	

砾石

遺物No.	基材の形状	石材	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	使用箇所	備考
21 1 H 219	板状 ばら巻	中粒砂岩	66	39	15	29.7	6	表面に細い縦状の擦痕がある。底面側とも平らに研磨。表面は研磨により細い凸状の面を形成する。
21 1 H 77	板状 横円 形	細粒凝灰岩	67	47	11	44	(1)	
21 2 H —	板状 長方形	細粒砂岩	35	25	8	9.6	1	表面はわずかに研磨
21 2 H 153	不整 形		(112)	(96)	(68)	(1180)	2	なめらかに平らに研磨
21 3 H 408	板状 長方形	中粒砂岩	(590)	(27)	0.9	(14.5)	3	表面側とも細い擦痕がある。表面は抜く乳状に研磨し、表面中央に溝状の擦痕あり

第三章 調査 遺跡

遺物 No.	石材の形状	石材	長(m)	幅(m)	厚(m)	重量(t)	使用箇数	備考
21 3 H 1114	板状長方形	中粒砂岩	(46)	(40)	14	(35.8)	6	全面ともなめらかに研磨されている。裏面中央に研磨による溝が残る。側面は研磨により、滑い面を形成し、板状に摩耗する。
21 3 H 626	板状長方形	中粒砂岩	(36)	(1.9)	9	(7.6)	4	全面とともに滑らかに研磨されている。裏面は研磨により、ツルツルしている。
21 3 H 289	板状長方形	粗粒砂岩	(52)	(3.3)	13	(24.0)	4	全面ともツルツルに研磨されている。一辺はV字状に尖る。
21 3 H 359	うすい板状長方形	粗粒砂岩	(41)	(3.5)	3	(4.5)	2	なめらかに平らに研磨。浅い溝状の研磨痕が残る。
21 3 H 320	板状長方形	粗粒砂岩	(34)	(3.0)	9	(13.9)	3	全面なめらかに平らに研磨。側面は板状に摩耗する。
21 3 H 420	板状長方形	粗粒砂岩	(55)	(3.5)	12	(26.2)	5	側面、やや板状に摩耗する。
21 3 H 320	板状幾片	中粒砂岩	(22)	(1.4)	8	(2.3)	(2)	裏面にわずかに擦痕が残る。表面弧状に摩耗する。
21 3 H -	板状幾片	粗粒砂岩	(18)	(1.4)	9	(3.3)	(2)	三角形の石材の2面を弧状に研磨。
21 3 H 423	板状幾片	粗粒砂岩	(19)	(1.6)	7	(2.4)	(1)	1箇面の研磨により丸みを呈す。表面に深い溝状の研磨痕が残る。
21 3 H 48	板状長方形	粗粒砂岩	(23)	(2.2)	9	(7.1)	(2)	全面なめらかに研磨。
21 3 H 312	板状長方形	粗粒砂岩	(32)	(2.4)	8	(8.4)	3	側面や弧状に摩耗する。
21 3 H 459	無面三角形	粗粒砂岩	(28)	(2.2)	14	(8.1)	(3)	裏面にわずかに擦痕が残る。表面弧状に摩耗する。
21 3 H -	板状長方形	粗粒砂岩	(46)	(3.0)	13	(21.1)	4	側面の石材の2面を弧状に研磨。
21 3 H 805	断面長方形の仮方形	粗粒砂岩	(41)	(2.9)	14	(23.2)	5	全面なめらかに研磨。
21 3 H 725	三角形	粗粒砂岩	(29)	(2.5)	9	(7.5)	4	側面や弧状に摩耗する。右端と同一個体。表面弧状なめらかに平らに研磨。
21 3 H 1034	断面三角形	粗粒砂岩	167	129	90	2400	5	表面、側面とも擦痕が残る。表面、研磨のため縦い溝を形成。
21 3 H 777	板状長方形	粗粒砂岩	(53)	(34)	18	(38.4)	(4)	表面弧状に摩耗あり。裏面は、わずか。
21 3 H -	板状長方形	中粒砂岩	(78)	(73)	31	(226.7)	1	摩耗痕は、わずか。
21 3 H -	不整	中粒砂岩	(134)	(101)	47	(1064)	1	部分的に研磨。
21 3 H 121	不整	安山岩	(17)	(78)	(68)	(1640)	1	研磨痕は、わずか。
21 3 H 1035	不整	花崗岩	(102)	(83)	(71)	(866)	1	表面面と、なめらかに平らに研磨。表面に研磨による3本の溝があり。表面に、明確な擦痕あり。
21 10 H 20	板状長方形	粗粒凝灰岩	(56)	(54)	10	(39.3)	3	表面面と、なめらかに平らに研磨。
30 H 10・118	板状長方形	粗粒砂岩	29	22	10	8.8	3	表面面中央に研磨のため凹む。
30 F 102・10	板状長方形	粗粒砂岩	(47)	(43)	11	(27.2)	4	表面面ともツルツルに研磨。
30 B 2 H 176	板状長方形	粗粒砂岩	74	56	1.3	62.2	3	
30 B L 101・2	不整	中粒砂岩	99	46	23	138.2	2	

打製斧

遺物 No.	石材名	長(m)	幅(m)	厚(m)	重さ(t)	備考
21 3 H 6	頁岩	(50)	(57)	17	(71.7)	斜れ
30 C T 62	頁岩	97	43	15	76.2	
30 B I 104-6	頁岩	(62)	(48)	(18)	(62.2)	
30 B I 1-6	頁岩	105	56	23	126.0	
30 B K 112-6	頁岩	93	50	12	63.7	

磨石

遺物・トレンチまたはグリッド・遺物の名	細分類	石材名	欠損程度	長(m)	幅(m)	厚(m)	重(t)	A面面数	B面平面・側面	C部	D面凹凸数
1 H - 196	板	細砂	%	(75)	54	58	(303)	1	-	C	1
1 H - 40	板	細砂	%	(75)	(74)	(55)	(272)	1	-	-	-
1 H - 96	板	細砂	0	70	59	34	181	-	AB・-	B	2
1 H - 88	板	中砂	0	130	93	48	860	-	A・B	-	2
1 H - 369	板	細砂	0	88	67	43	382	-	A・-	A	3
1 H - 243	磨	安	0	112	77	39	504	-	B・B	-	2
1 H - 332	砂	粗粒	0	58	53	27	100	-	-	-	1
3 H - 563	板	細砂	%	(82)	(72)	(79)	(640)	1	-	-	-
3 H - 1182	板	細砂	%	(80)	52	(61)	(316)	1	-	A・C	2
3 H - 661	板	細砂	%	(105)	56	66	(535)	2	A・A	A・C	5
3 H - 216	板	細砂	%	(100)	74	59	(566)	2	-	A・C	4
3 H - 1116	板	細砂	%	(110)	(73)	(70)	(697)	2	-・A	A・C	3
3 H - -	板	細砂	%	(93)	(62)	(72)	(454)	1	-	A	-
3 H - 690	板	細砂	%	(100)	(59)	(65)	(489)	2	-	-	1
3 H - 1180+1120	板	粗粒	0	157	66	74	1098	2	-	A・-	1
3 H - 434	板	細砂	%	(97)	69	75	803	2	A・-	-	3
3 H - 817	板	細砂	%	(79)	(66)	(55)	(324)	1	-	-	1
3 H - -	板	細砂	0	129	50	65	481	1	-	A	6

第3節 向陽台遺跡

造物・トレンチまたは グリッド・遺物の地	細分類	石材名	欠損程度	長(m)	幅(m)	厚(m)	重(t)	A面面数	B面平面・側面	C部	D面凹み数
3 H - 1011+1113	板	砂	0	130	39	57	492	2	-	C	-
3 H - 625	板	粗砂	½	(85)	(45)	(54)	272	1	A·-	C	3
3 H - 753	板	粗砂	½	(96)	(54)	(75)	(541)	2	-	A·C	5
3 H - 730	板	粗砂	残	-	-	-	(182)	2	-	-	-
3 H - 228+50	板	安	½	140	61	69	910	2	A·A	-	4
3 H - 915	板	安	½	(81)	(54)	(59)	(400)	2	A	-	4
3 H - 1013	板	粗砂	0	110	81	44	609	1	A·A	A·B	4
3 H - 790	板	安	0	110	73	49	434	1	-	A	1
3 H - 1616	板	粗砂	残	-	-	-	-	-	A·-	B	-
3 H - 255	板	粗砂	残	-	-	-	-	-	-	-	-
3 H - 1012	板	粗砂	0	194	81	37	520	-	A·B	A·A	4
3 H - 1125	磨	粗砂	0	91	81	39	419	-	A·B	A	5
3 H - 1123	磨	残	½	-	82	53	(442)	-	A·-	-	-
3 H - 570	磨	粗砂	0	73	58	49	225	-	B·-	D	-
3 H - 1197	磨	安	½	-	-	-	(290)	-	B	-	-
3 H - 779	磨	硬砂	½	-	-	-	(205)	-	A·B	C	1
3 H - 538	磨	粗砂	½	(58)	(78)	(45)	(320)	-	A·B	A	2
3 H - 538	凹	安	½	-	63	33	(165)	-	-	-	2
3 H - -	凹	粘	0	87	72	39	372	-	-	-	1
3 H - 659	凹	粗砂	½	-	-	-	(345)	-	-	-	2
3 H - 188	凹	砂岩	0	74	57	44	279	-	-	-	2
3 H - 1009	凹	粗砂	0	90	51	43	233	-	-	-	2
3 H - -	凹	安	0	84	63	29	206	-	-	-	2
10H - 15	磨	残	½	(74)	(89)	(64)	(548)	-	A·-	-	-
C T 65	板	中砂	½	(66)	(71)	(47)	(258)	1	-	A	-
B L 102 1	板	中砂	½	(104)	(77)	(69)	(612)	1	-	C	-
B K 102 5	凹	粗砂	0	95	58	48	320	-	-	-	2

敲石

遺物 No	細分類	石材名	欠損程度	長(m)	幅(m)	厚(m)	重(t)	備考	
B L 1 5	扁平	粗砂	0	113	69	31	250		
C T 41	扁平	中砂	½	(73)	63	29	192		

鑿製石斧

遺物 No	石材名	長(m)	幅(m)	厚(m)	重(t)	備考
21 3 H 632	蛇纹岩	(40.2)	31.2	9.3	(17.6)	刀部角(240°)
21 3 H 1141	蛇纹岩	(37.7)	(30.6)	(9.6)	(10.3)	刀部角(240°)

擦り切り用石器

遺物 No	石材名	長(m)	幅(m)	厚(m)	重(t)	備考
21 3 H 69	砂岩	(35.6)	(48.8)	8.0	(13.6)	

注 磨石の石材名は次のように略した

細粒砂岩→細砂、細粒凝灰岩→細凝、中粒砂岩→中砂、粗粒砂岩→粗砂、粗粒凝灰岩→粗凝、硬砂岩→硬砂、凝灰質砂岩→凝砂、砂質凝灰岩→砂凝、安山岩→安、粘板岩→粘、砾岩→砾、玢岩→玢

第III章 調査遺跡

(3)押型文期の堅穴住居

今回の向陽台遺跡の調査で、最も大きな成果の1つは縄文早期押型文期の集落址が調査されたことであろう。その4軒の住居址は、規模の巨大さ、豊富な出土遺物によって從来、押型文期の集落に対して抱いていたイメージを一変させるものであった。

そこで、ここでは今までに報告されている押型文期の住居址の集落を試み、この時期の住居の特色を抽出し、まとめとしたい。

集成できた住居址は28表に示すとおり、22遺跡65住居である。緊急発掘調査の報告書という時間的制限があり極めて不充分な集成である。後日、その欠を補いたいと思っている。

なお、集成資料を検討するあたり縄年の観点での分析は加えていない。それは押型文式土器の縄年がまだ確定していないこと、伴出土器が小片で時期を確定することが困難な住居が多いこと、出土土器に時間幅があり、ある一時期に特定できないことによる。

住居について

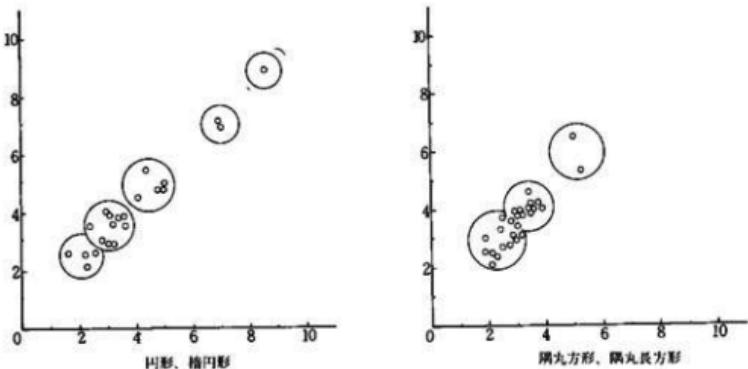
平面形態、押型文期住居址の平面形態は、大きく分けて円形、楕円形、隅丸方形、隅丸長方形の4種類がある。しかし、形の整った典型的なものは少なく、むしろ円形と隅丸方形、楕円形と隅丸長方形との中間形態を示すものの方が一般的である。円形を呈するものには大川、池の本3、向陽台1・3、林頭3があり、楕円形には尾上イラウネ、池の本1・2、橋沢、鍋久保が、隅丸方形には若宮6~8、金塚3~4が、そして隅丸長方形には若宮1・5・10・12・15~17・20~23、尾上イラウネ2~4、向陽台2をそれぞれ典型例としてあげられよう。量的には、円、隅丸方形は少なく、楕円、隅丸長方形が多く、縱長の楕円、隅丸長方形を主流とする。時期差が余り認められない時期の住居が複数発見されている若宮、尾上イラウネ、向陽台、石割などの例をみると、異なる形態のものが同一集落内に存在していることから時間差によって形態差が生じる。

第29表 押型文期堅穴住居址一覧表

番号	住居名	所在地	伴出土器	規模	形態	柱穴	施設	炉	備考	文献	
1 2	大 川	奈良県山添村 *	大 川	3.86×3.4 3.83	不整円 形 円	4~5 *	— —	無 無		11	
3	橋 ノ 井	三重県大宮町		3.6×3.0	楕 圓 形	5	—	—		22	
4	沢	岐阜県吉田町	沢	3.9×3.5	不整円 形	2	—	無	圓柱、支柱が壁に沿う	1	
5	大 日 向	中津川市		径4.8	円		—	無		4	
6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20	若宮 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20	静岡県富士宮市		3.3× 3.65×2.4 2.2×2.1 3.15×2.75 3.65×2.8 2.8×2.75 3.05×2.9 2.9×3.05 2.75×2.65 2.6×2.15 2.6×1.7 4.15×3.05 2.7×2.25 2.25×2.15 2.5×2.3	隅丸長方 不整円 形 隅丸方形 楕円 形 隅丸長方 隅丸方形 無 無 楕 圓 形 隅丸長方 楕 圓 形 無 無 無 無 無 無 無 無 無 無	— —	無 無	— —	— —	柱穴状ビット4 3 2 1 2 2 2 2 柱穴状ビット1 柱穴状ビット1	16

第3節 向陽台遺跡

番号	住居名	所在地	伴出土器	規格	形態	柱穴	周溝	炉	備考	文献
21	16			2.6×1.9	*	*	*	*		
22	17			3.5×3.05	*	*	*	*		
23	18			3.1×3.1	隅丸方形	*	*	*		
24	19			4.0×3.45	*	—	*	*	柱穴状ビット4	
25	20			3.45×2.45	隅丸長方形	—	*	*	*	
26	21			3.9×3.5	*	無	*	*	*	
27	22			3.5×3.05	*	—	*	*	柱穴状ビット2	
28	23			2.0	*	無	*	*		
29	24			3.75×3.25	不整圓形	—	*	*	*	4
30	尾上イクラホ1	静岡県沼津市		3.06×3.28	椭円形	9	*	*		
31	2			4.6×3.3	隅丸方形	7	*	*		
32	3			3.7×2.5	*	5	*	*		
33	4			3×1.9	*	無	*	*		
34	三武西原	伊豆川町		—	*	—	—	—		26
35	+			—	椭円形	—	—	—		
36	迄の木1	静岡県修善寺町		径5.05	椭円形	無	無	無		
37	2			4.83	*	*	*	*		
38	3			3.01	円形	*	*	*		
39	地之元1	山梨県富士吉田市		—	—	—	—	—		13
40	2			3.9×3.0	椭円形	無	無	地床炉	南寄りに炉	19
41	小出山原	郡留町		—	*	—	—	—	2軒棲出	
42										19
43	石割1	長野県塩尻市	細久保	4×3	隅丸方形	13	無	無		
44	3			4×3.6	*	12	*	地床炉	やや北寄り60cmの隅丸方形の炉	7
45	5			4×3.15	*	10	*	*	北寄りに炉	
46	宮崎A4	糸魚川市	立野・高崎	3.9×3.5	不整圓形	無	*	石田炉	中央部に炉	3
47	三つ木7	伊那市	立野	2.5×3.2×2	不整圓形	0	*	無		
48	8			*	3.2×2	*	*	*		18
49	植沢	御谷・飯尾市		2.6×2.2	椭円形	5	*	*		24
50	向陽台1	塩尻市長坂	沢	7.2×6.9	円形	31	*	*		
51	2			6.0×5.0	隅丸長方形	20	*	*	地土あり	
52	3			8.8×5.5	円形	49	*	*		
53	10			4.0×(3.1)	不整圓形	4	*	*		
54	八種2	伊那市		5.5×4.45	椭円形	2	*	*		26
55	3			7×7	*	*	*	*		
56	林	小谷村	立野	2.5×2.0×2.5	*	1	*	地床炉	伊に地土	
57	2			*	不整圓形	*	*	*		
58	3			*	円形	*	*	*		
59	細久保	大間村	細久保	4×3	椭円形	*	*	*	北半に炉が投入	10
60	男女倉F	和田村		4.5×4.1	不整圓形	4	*	地床炉		5
61	金裏3	望月町		4.15×3.85	隅丸方形	無	*	—		
62	4			5.1×	*	*	*	—		
63	5			4.3×3.8	*	(7)	*	—	9 壁外に柱穴、東南隅に地土	
64	新水5	望月町		3.8×3.2	*	2				8
65	丸原	伊那市				3				23



第347 図 押型文期住居規模

たのではないといえる。では、348図の分布図から地理的な相違によって形態差が生じたのか検討してみよう。奈良・三重・岐阜・静岡・山梨・長野の6県で住居の発見があり、円・楕円形は奈良・三重・岐阜・静岡・山梨・長野の全県で検出されているのに対し、隅九方形・隅丸長方形は静岡・長野に偏在して検出されている。静岡・長野以外の各県の資料は余りに貧弱すぎて不確定な要素が大きいが、この資料をみる限りでは中部高地から伊豆半島にかけての地域に円・楕円・隅九方形・隅丸長方形の全ての形態が揃う多様な在り方を示し、とりわけ隅九方形・隅丸長方形が多数ある若宮を有する静岡県では方形系統の率が高い。このように巨視的に見た場合、奈良・三重・岐阜を含む西日本を中心とする地域は円形系統を示し、長野・静岡の中部高地から東海地方には円・方面系統が分布し、中でも伊豆半島周辺では方形系統の比率が高いといえる。縄文前期に顕著な方・円形態の分布差は、この押型文期にその萌芽が認められるといえよう。

なお、住居の堀り込みは浅いものが主体を占め、壁は垂直にきれいに立ち上がるものは少なく、傾斜をもったグラグラとした堀り込みが大半である。これも後の住居と異なる点である。

規模 住居規模を347図により検討する。まず全体的な傾向であるが、円形・楕円形は径2mの小形から向陽台3号の径8.8mの大形まで大小のバラエティーが著しいのに対し、隅九方形・隅丸長方形は一辺2~4mにその大半が納まってしまい比較的小形である。円・楕円形は、径9m前後、径7m前後、径5m前後、径3~4m、径2~3mの5段階に分けることができ、最も量的に多いのは2~3、3~4mのものである。一方、隅九方・長方形は、一辺5~6m、3~5m、2~4mの3段階に分けることができ、2~4、3~5mが量的には多い。以後の住居址と比較し小形主流であることが分かる。

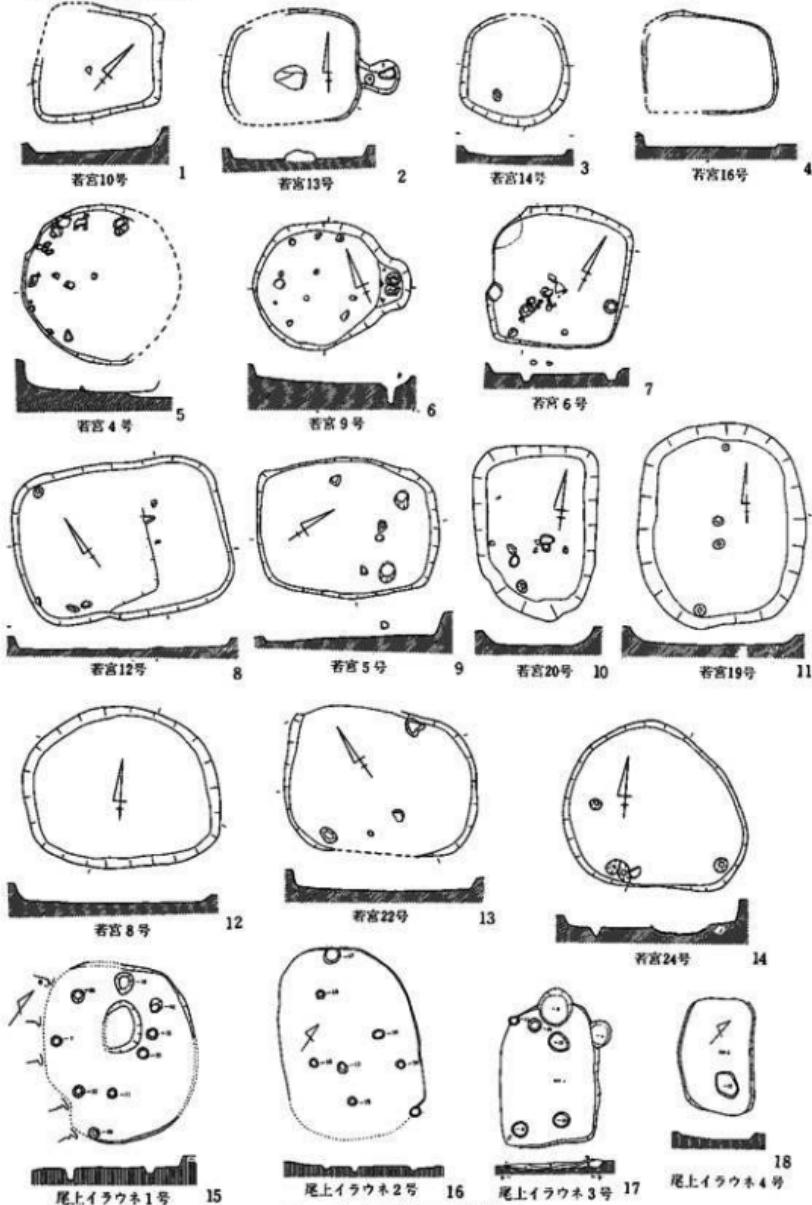
押型文期の住居規模を考える場合、量的には僅少であるがすでに径7~9mにも達する大形住居が出現していることは注目に値する。押型文土器と一定期間対峙する関東地方の燃糸文期においても大形住居の出現が注目されている。村田文夫氏は縄文時代の集落をとりまとめた「縄文集



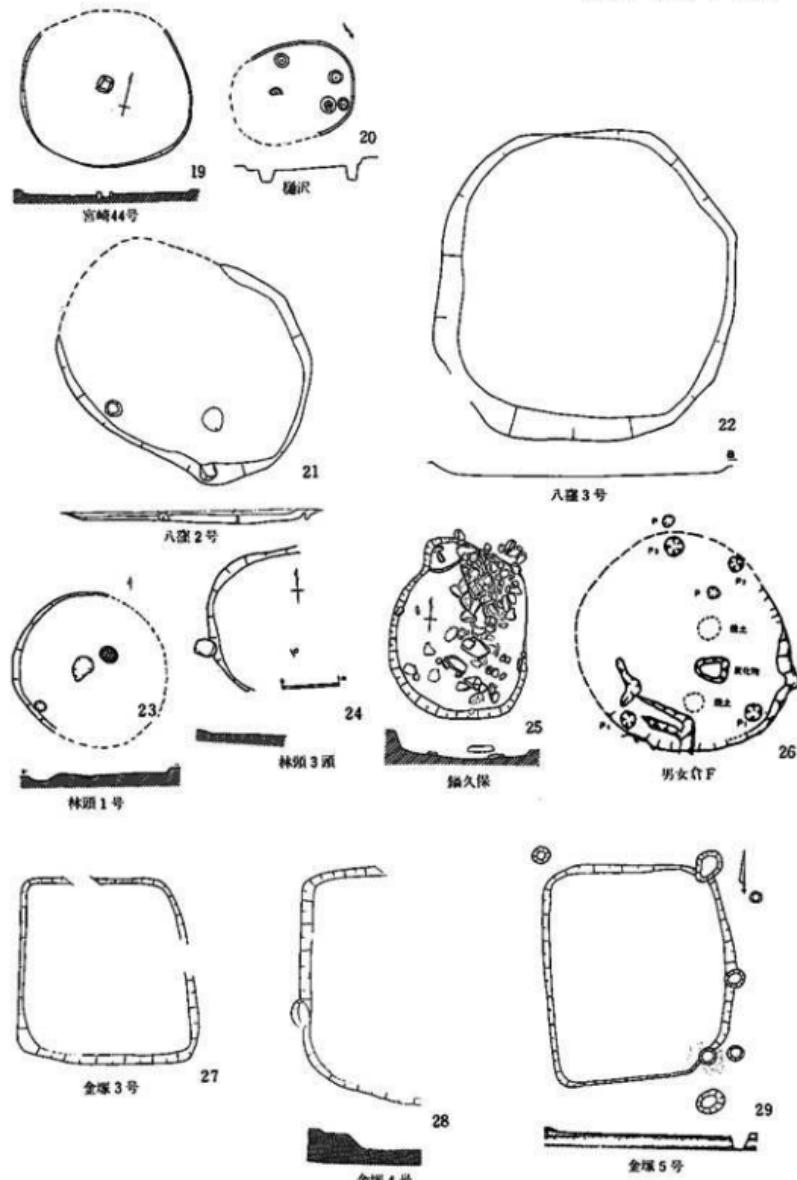
第348 図 押型文期住居分布図

落」(1985)で、「撫糸文期の竪穴住居は、比較的大形だ。もちろん、これは傾向としての問題があるが、それにしても後につづく縄文住居に較べて、いわゆる大形の部類に属するものが多いのは事実である。」と述べている。おそらく関東においても押型文期の住居の分布する地域においてもこの縄文早期前半の時期は、住居構築技術の進展および住居を取り巻く社会環境面に大きな飛躍があり、住生活の一画期をなしていると考えられる。

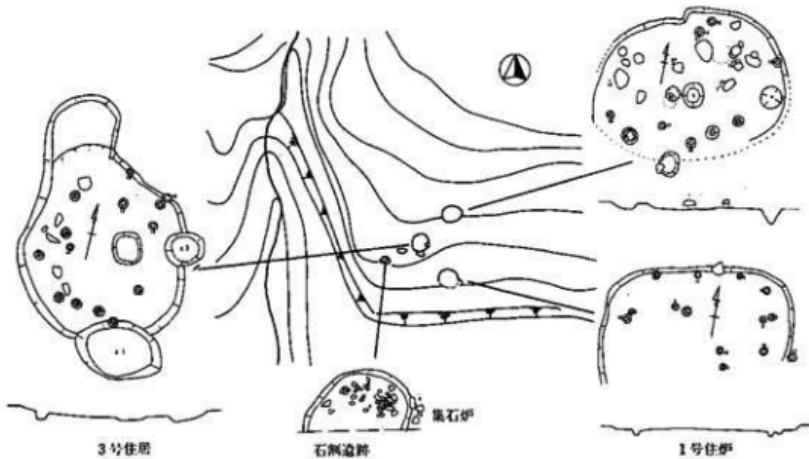
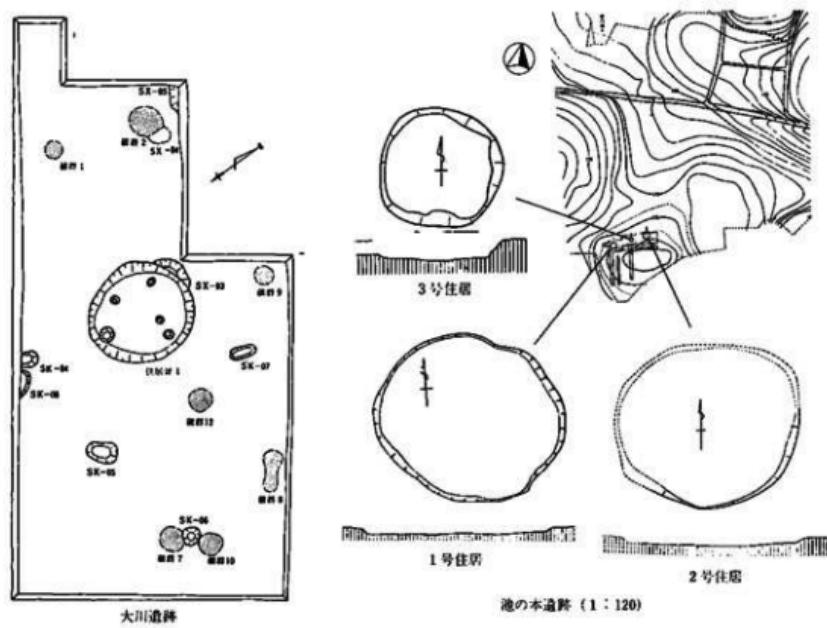
柱穴 住居内およびその住居に付属すると思われる住居外から何らかのピットが検出された住居は、65軒中35軒、(報告書に記載なしが5軒)で、約53%の住居でピットがみられる。検出されたピットが全て柱穴に該当するとは限らないが、その大半は柱穴と考えてよいものと思う。径5~10cm、深さ10cm前後の痕跡的なものが大半を占め、後の時期の住居に認められるような主柱穴状のものはほとんどない。本数は2~10本が一般的であるが、向陽台例のように49、31、20と多くのピットを有する例も比較的多い。一柱穴の場合、一辺の壁際に偏している場合が多く(若宮3・7・8)、2柱穴では若宮5・9・13、沢のように長辺の壁下にあることが多い。沢遺跡での報告でも述べているように、2柱穴の場合「主柱上に棟木を渡し、主柱から中間柱と側柱を連ねる横木で受けけるという骨組みであったよう見える。屋根は円錐形よりもむしろ方錐形ないし四往造に近かったのではないか」と推定されている。また3柱穴が三角形状に配されている見據、若宮24号の例は、「三本の丸太材を頂部1点にまとめて三脚をつくり棟木を支持したものである」(宮本1960)とされ、この形は関東地方では稻荷台期にすでに見られ、寄棟形に屋根をかけていたと考えられている(宮本1982)。そして多柱穴の場合は、若宮15・16号、向陽台1・2・3号、石割5号、尾上イラウネ1・2号を典型例とするように、壁から一定の間隔をもって現状に並ぶ形をとる。向陽台3号は、稻荷台期の東京天文台構内遺跡3号の柱穴の在り方と類似する面があり、



第349図 押型文期住居集成図(1)

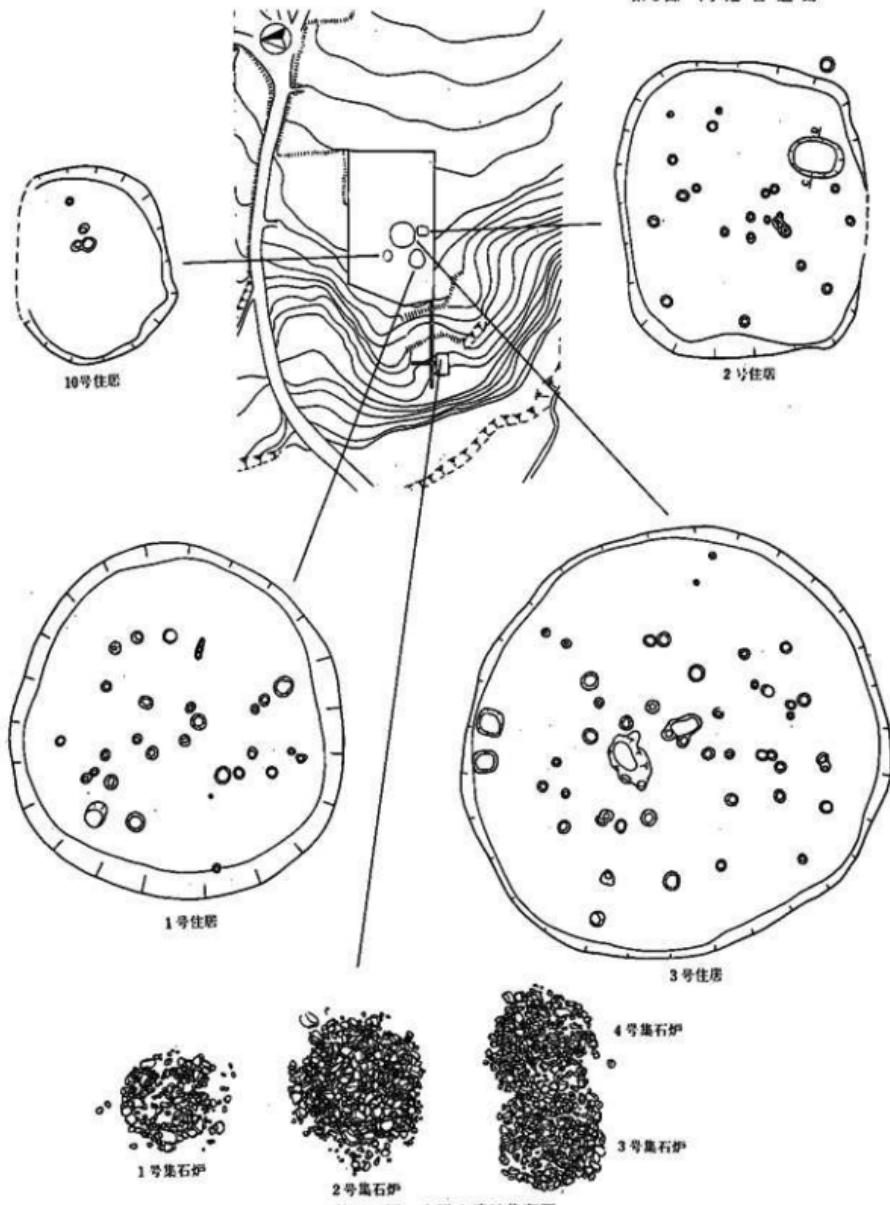


第350圖 押型文期集落集成圖(2)



第351図 押型文期集落図

第3節 向陽台遺跡



第352圖 向陽台遺跡聚落圖

第三章 調査遺跡

「おそらくこの時期では、上屋を架構する建築技術がまだ未発達だったので、大形の住居の場合、いわゆる総柱形式の構造で上屋を支えるしかなかったのであろう」(村田1985)と推定される。このように柱穴の在り方は縄文早期前半の撫糸文分布範囲内の在り方を極めて類似した状態を示している。

炉 調査された65例の住居中、明らかな炉を有するを認定された住居は、池之元2、石割3、宮崎A4、林頭1、男女倉Fの5例にすぎない。その保有率は7%である。炉をもつ住居の分布は、中部高地の長野・山梨に限られている。地域的特性としてよいかもしれない。撫糸文を伴う住居の炉普及率に比較し、押型文期のそれは低率である。炉形態は地床炉を石囲炉とがあり、この時期にすでにしっかりした石囲炉が出現していたことは注意を用しよう。

周溝、検出された住居で周溝の認められたものは1例もない。

集落構成

以上のような特色をもつ住居を基礎資料として集落について概観したい。

住居がある程度の集落規模で発見されているのは大川、若宮、池の本、尾上イラウネ、石割、向陽台の諸遺跡である。

これらの集落の立地の在り方をみると、狭小な台地ないし丘陵上の先端に位置することが多く、遺構の分布は散在せず塊状を呈することを特色とする。

まず各遺跡での具体的な内容をみてみよう。

大川遺跡(351図)は2棟の竪穴住居址と炉と思われる12基の集石遺構があり、住居1棟に数基づつの集石が対応する。若宮は6500m²の中に数期にわたって竪穴住居、炉穴、集石土壙、集石、土壙が3~4のグルーピングを作りつつ継続的に展開している。池の本(351図)は、3軒の住居址が10m間隔に並存し、南側の丘頂部および丘陵南西斜面に計3ヶ所の屋外炉と考えられる焼土が残されていた。3軒の住居には屋内炉ではなく、屋外炉がそれぞれの住居に付属するのではないかと推定されている。尾上イラウネは、緩傾斜する台地上の平坦面に重複関係の認められる4軒の住居と1基の土壙が検出されている。石割(351図)では、台地端に3軒の住居が5m間隔で存在し、住居からはずれた台地末端に215×125cm、深さ50cmの巨大な集石炉が設けられている。向陽台(352図)では、台地末端に3号の大形住居を中心に3軒の住居が隣接して造られ、台地下mのテラスにこの4軒の住居に対応するかとも考えられる集石炉が4基設けられている。また住居群周囲には小竪穴群があり、その幾つかはこの集落に付属したものとしてよいであろう。

これらの例を通していえることは、押型文期の集落は、一時期2~3軒の住居と、それに対応する屋外炉(集石炉)、そして小竪穴、集石をその構成要素としていたことが分かる。大川遺跡を分析した泉拓良は、「住居内には炉がないことから、これらの礫群が炉ないし調理場と関係していたと推定することができよう。このように考える住居は、それぞれ炉ないしは調理場を独自にもっていたと考えることができ、一住居に住む人々の独立性は強かったと考えることもできよう」(泉19)と評価している。また若宮を考察した岡本東三は、「縄文時代初頭にみられた単位集団分散居住型も、早期になると集合居住型に変化する。径100メートル範囲に40数軒の住居跡が発見

された押型文化期の若宮遺跡では、単位集団の共通の屋外炉である集石炉や炉穴のまとまりから、3~4つの単位集団の結合体から集団が構成されていたと考えられる」(岡本1982)と考えている。

押型文期の集落についての評価は、「現状を見る限り、資料的に燃糸文系土器に伴う住居跡に比べ、その定着性が稀薄である」(原田1983)とするものもあるが、集落施設の整った在り方、大型住居の出現、ある程度の継続性を示す若宮例などからは、押型文土器に伴う集落はすでにある程度定着性の高い村落を営んでいたといえそうである。こうした意味で、押型文期の集落は、集落の発展上、大きな画期をなすものであったといえよう。

参考文献

- 1 大野政雄・佐藤達夫「岐阜県沢遺跡調査予報」考古学雑誌53—2 1967
- 2 笹津徳洋・白石竹雄「池の本」修善寺町史料4 1969
- 3 神村透「宮崎A遺跡」長野県中央道埋蔵文化財公庫地発掘調査報告書—阿智・飯田・宮田地区—1971
- 4 安達厚三他「岐阜県史」 1972
- 5 森嶋稔他「男女倉」 1975
- 6 須川裕一郎他「尾上イラウネ遺跡発掘調査報告書」 1981
- 7 佐藤賛信「石割遺跡」 1980
- 8 福島邦雄他「新水」 1981
- 9 同 「金坂」 1982
- 10 森嶋稔「鍋久保遺跡」長野県史考古資料編2 1982
- 11 松田真一「奈良県大川遺跡」日本考古学年報32 1982
- 12 岡本東三「縄文時代1」日本の美術189 1982
- 13 山本寿々雄「日本の古代遺跡14 山梨」 1984
- 14 辰巳和弘「同 I 静岡」 1982
- 15 原田昌幸「燃糸文期の竪穴住居跡」土曜考古7 1983
- 16 馬飼野行雄他「若宮遺跡」 1983
- 17 神村透「林頭遺跡」長野県史考古資料編2 1983
- 18 林茂樹「三つ木遺跡」 同
- 19 小野正文「山梨県」縄文時代集落の変遷発表要旨 1984
- 20 長崎元広・宮下健司「長野県」同
- 21 村田文夫「縄文集落」 1985
- 22 伊藤久嗣「橘ノ谷遺跡」日本考古学年報35 1985
- 23 宮本長二郎「縄文時代の竪穴住居」信濃37—5 1985
- 24 戸沢充則他「桶沢遺跡」 1985
- 25 泉拓良「縄文時代」図説発掘が語る日本史4 近畿編 1985

第三章 調査遺跡

26百瀬久雄「八窓遺跡」長野県埋蔵文化財センター年報1 1985

27中嶋部夫「静岡県」日本考古学年報37 1987

2) 繩文時代前期

(1) 向陽台遺跡出土の中越式土器について

本遺跡からは中越式土器を伴なう住居址が4軒検出された。

中越式土器については、分布の中核をなす伊那谷の標式遺跡である中越遺跡の資料提示が少ないと、不明確なのが実体で、基本となる分類は藤沢宗平氏の中越(西原)遺跡出土の4分類(藤沢、1957)、型式としての区分案は林茂樹氏の3区分案(林、1965)であった。中越式が提示されると様々な研究者により東海地方の土器との関連等から追求がなされた。1970年代には、中越式土器分布の外核地域と考えられる諏訪地方で、千鹿頭社遺跡、十二の后遺跡、阿久遺跡と良好な資料の出土が相次ぎ、佐藤信之氏が阿久遺跡出土資料を中心に検討し、3区分案(佐藤、1982)を提示した。現在のところ、この佐藤氏の3区分案が、藤沢分類、林型式区分案等を含み加味したものである。本文でも佐藤氏3区分案(阿久IIa、b、c期)を踏襲し、これを林氏の中越I～III式の呼称に合わせ、阿久IIa期を中越I式期、阿久IIb期を中越II式期、阿久IIIc期を中越III式期と仮称したい。^(註1)

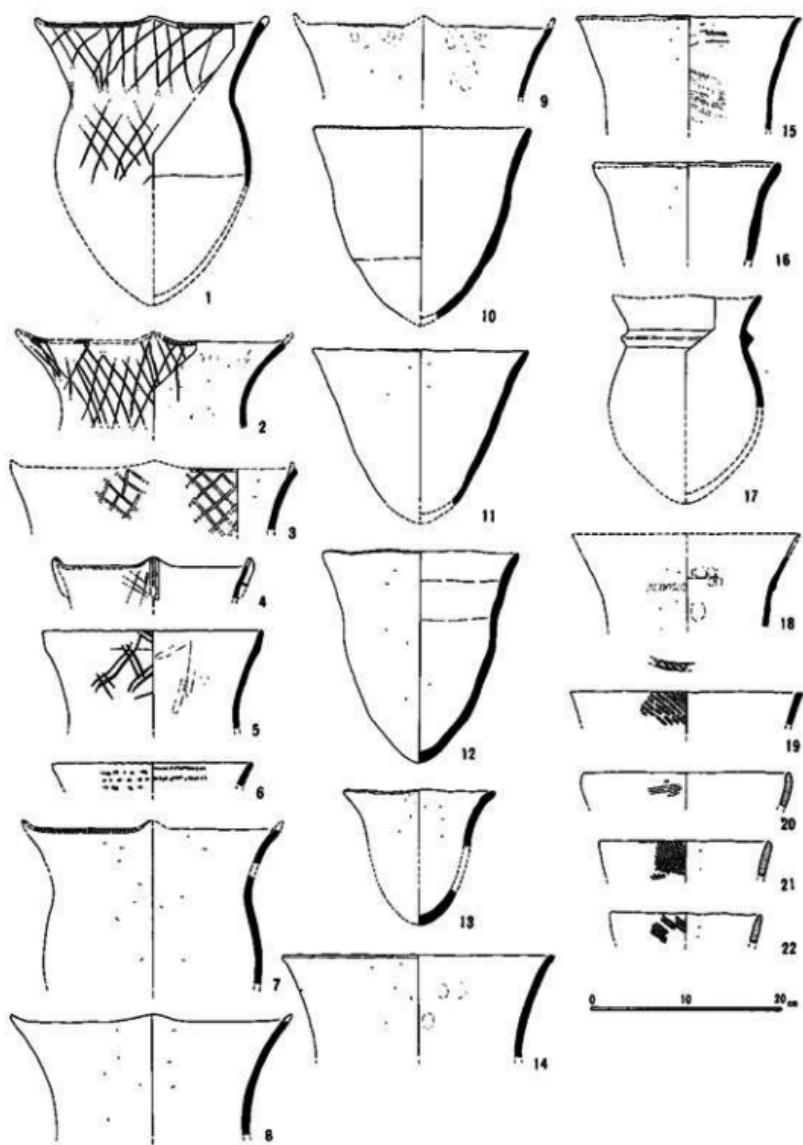
1、出土土器の検討

4軒の住居址から出土した土器群のはほとんどは胎土に纖維を含まないものがほとんどで、纖維を含むものは極少量である。また文様でも、無文、沈線による格子文、細沈線、やや太い細沈線(2種ともヘラ状工具、半截竹管、植物の茎を使用)の2種が見られる。口縁部に垂下する貼付文、縄文の4種に分けられ、縄文を除く3種はすべて無纖維尖底の所謂「中越式土器」の文様である。

11号住居跡の土器群は無纖維の縄文土器がわずかに1片見られるのみで、他は無纖維尖底の土器群である。本住居跡の無纖維尖底土器は他の3軒の土器群に比べ、口縁部が波状となるものが多く、平口縁のものは少ない。また、他の3軒に比べ細沈線、やや太い細沈線の格子文の施される土器片が多く見られる。3の土器は東海系、清水の上I式類似の土器である。

13、14号住居跡の2軒はほぼ出土土器群の構成が似ており、無纖維尖底土器群のはほとんどは平口縁である。また格子文の施された土器のはほとんどはやや太い細沈線である。また縄文が施される土器も少く見られる。13住、14住の纖維を含む縄文施文の土器片は、関山式ではなく、阿久II期I群cの纖維を含む縄文施文の土器に類する土器である。

12号住居址の出土土器群は、縄文施文の無纖維が量的には少ないが、4軒の中では多い方で、羽状となるものも見られる。総じて、阿久II期I群Eに近似する。無纖維尖底土器は平口縁が主で器壁や口縁端部ははつたりとしており、他の住居址のものと比べ、器壁がやや厚いものも見られる。無文、平口縁で口縁部に簡単な垂下する貼付文が施されるものも見られる。格子文の施される土器は4軒の中で最も少ない。



第353図 大町市長平遺跡出土中越式及び伴出土器

以上、簡単に4軒の土器群を見てみたが、11号住居跡は波状口縁がまだしっかりとしており、格子文もめだつことから中越II式期(阿久II b期)、12号住居跡は阿久II c期に見られる平口縁で口縁部に簡単に垂下する貼付文の器壁がやや厚い土器、羽状繩文の施される土器に近似する土器が見られることから中越III式期(阿久II c期)、13・14号住居跡は前者2軒の中間的土器群で、中越II式の終りか、III式の初めが当てられると考える。このことから11住→13・14住→12住といった変化が考えられる。

2、松本平における中越式土器の分布

阿久遺跡報告書発刊当時1981年までは松本平において中越式土器は、舅屋敷遺跡(藤沢、1973)に見られるのみで、天竜川流域と諏訪地域に限定される(佐藤、1981)とされていたが、これ以後に松本平において中越式土器、それに併行し近似する清水の上I式類似の土器が本遺跡を含め、4遺跡で確認、検出され、北は松本平北端、大町市まで分布することが確認された。本遺跡を除く3遺跡をあげると次のようである。

①、南安曇郡奈川村黒川渡 学問遺跡(1966年発掘調査)——松本平西部、犀川支流梓川上流の山間部にある遺跡で、清水の上I式に類似する土器が出土している。^(註2)

②、大町市大町 長平遺跡(1982年発掘調査)(第353図)——松本平北部、犀川支流高瀬川中流の段丘上にある遺跡で、遺構は竪穴と土壙・集石のみであるが包含層を主体に中越II～III式期の土器が出土した。無繊維尖底土器に伴なって、本遺跡11号住居跡と同様な清水の上I式に類似する土器(18)、神ノ木式土器とはやや異なるが無繊維で繩文施文、口縁端部に爪形文を施す土器(19)等が検出されている。20～22は胎土に繊維を含む繩文施文の土器である。

③、東筑摩郡生坂村下生坂 八幡原遺跡(1987年発掘調査)——松本平北東部、犀川中流の山間部の段丘上にある遺跡で、中越式期の住居が2軒検出されており、中越I～II式期の無繊維^(註3)尖底土器が見られる。

このように松本平の端々で検出されているということは中越式土器が松本平ほぼ全体に渡り分布していることを想定させ、中越式土器分布圏の外核に松本平が確実に加わり、中・南信のほぼ全体に分布圏が及んでいることが確実であるといえよう。

3、他地域土器との関係

今回の調査では、他地域の土器として11号住居址の3が東海地方の清水の上I式に類似する土器として1点出土しているにすぎないが、大町市長平遺跡でも清水の上I式類似の土器が共伴して出土しており、阿久遺跡(藤沢、1981)の検討を加えるならば、中越I、II式期は清水の上I式期と併行し、中越I、II式土器と清水の上I式土器は共伴関係にあるといえよう。今回、関東地方の関山式土器が伴出せず、^(註4)関山式との関係は追求できないが、阿久遺跡での佐藤氏の検討を踏まえ、併行・共伴関係を見るならば表のような編年関係になると思われる。

第30表 併行・共伴関係表

(仮称・案)	中越Ⅰ式	中越Ⅱ式	中越Ⅲ式	神ノ木式
阿久遺跡時期区分	阿久Ⅱa期	阿久Ⅱb期	阿久Ⅱc期	(+)
林・1965 3区分	中越Ⅰ式		中越Ⅲ式	
東海地方編年		清水の上Ⅰ式		清水の上Ⅱ式
関東地方編年	花積下層式	関山Ⅰ式		関山Ⅱ式

(註)

註1、中越Ⅰ式期の土器については、中越式土器がオセンベ土器（細線文指痕薄手式土器）の影響下に生まれた土器であることから、無繊維尖底の薄手土器=オセンベ土器の影響の強いものであり、林氏の中越Ⅰ式とはほぼ同じく佐藤氏は阿久Ⅱa期を考えておられ、中越Ⅰ式期についてはほぼ確定的であろう。しかし、林氏の中越Ⅱ、Ⅲ式については、特にⅢ式の要素は神ノ木式と同じであり、所謂「中越式土器」には、直接的に関係するものではない。ただし、阿久Ⅱc期の土器群の中にも神ノ木式類似の古いタイプの土器が一要素として含まれているが、佐藤氏は中越式最終段階として捉えておられる。またこの段階が関東系の関山式Ⅱ式が、この段階から併行していることを共伴関係から指摘している。阿久Ⅱc期は、中越式と神ノ木式とを結ぶ、時間的流れを捉える上で重要であり、成立し得るものであろう。阿久Ⅱb期については、Ⅱa期とⅡb期を結ぶ時期として関山Ⅰ式の土器が共伴すると報告書文中で述べられている。

本遺跡を含む松本平、阿久遺跡を含む源訪地方（外核地）と中越遺跡を含む伊那谷（中核地）ではやや土器様相を異にしており、特に中越Ⅰ式期ではより東海地方に近いタイプの土器群が伊那谷では多く見られるが、これは、時間的差か、地域差であるか、現在のところははっきりとしない。中核地の大遺跡である中越遺跡での中越式土器の様相については、本報告がないのがおしまれる。しかし、現在提示されている、中越遺跡出土土器（友野1982、1983）を見るかぎり、中越遺跡の中越Ⅰ式に含むと思われる細線文指痕薄手式土器に近似する土器は清水の上Ⅰ式（木島式の新しい時期を含む）に近く、それ以前上の山Ⅱ式（木島式を含む）とはやや様相を異にすると思われ、中越式土器の成立自体、東海系のオセンベ土器の影響下で生まれた土器であることから、東海地方に近いか、遠いかの距離的な地域性と考えたい。ただ、これは確かなことではない。今後、このことについては、追求していきたいと思う。

註2、会田進 1970「長野県南安曇郡奈川村学問遺跡発掘調査報告」（「信濃」、第22巻第2号）の第II群の土器。小林康男氏の御好意により実見させていただいた。

註3、未発表資料であるが、発掘調査時の見学の際、三村雅氏の御好意により実見させていただいた。

註4、中越ⅡとⅢ式期の土器が混在しており、どちらに共伴するかは確かではない。

註5、松本平において中越式と関山式が共伴して出土した例はまだない。松本平自体、関山式の資料も少ない。

第III章 調査遺跡

参考文献

- 藤沢 宗平 1957 「宮田村中越西原遺跡について」 「伊那路」第1巻第9号
- 林 茂樹他 1965 「上伊那郡誌」 上伊那郡誌編纂会
- 藤沢 宗平他 1973 「東筑摩郡・松本市・塙尻市誌 第2巻上」 東筑摩郡・松本市・塙尻市誌編纂会
- 山下 勝年他 1976 「清水／上貝塚」 南知多町教育委員会
- 増子 康真 1977 「いわゆるオセンベ土器の研究」 「信濃」第29巻第4号
- 笠沢 浩・佐藤信之他 1982 「長野県中央道報告書—原村その5—〈阿久遺跡〉」 長野県教育委員会
(笠沢・1982) と (佐藤・1982) は同文献)
- 友野 良一他 1982 「宮田村誌 上」 宮田村誌編纂会
- 増子 康真 1982 「木島式土器の検討」 「中部高地の考古学II」
- 友野 良一 1983 「中越遺跡」 「長野県史」考古資料編主要遺跡篇(中、南信)

(2)松本平における縄文前期住居

向陽台遺跡からは縄文時代前期の遺構として中越期に属する4軒の住居址が発見された。そこで松本平で今までに検出された前期住居址を概観し、向陽台遺跡発見の住居についてその性格を考えておきたい。

長野県内における縄文前期住居址研究の業績としては、樋口昇一「中部山岳地帯における前期縄文時代住居址」(信濃9-11、昭32)、長崎元広「中部地方における縄文前期の竪穴住居」(同31-2、昭54)、宮本長二郎「縄文時代の竪穴住居—長野県一」(同37-5、昭60)があり、前期の住居址について詳細な考察が加えられている。しかし、松本平で取り扱われている資料は比較的少く、しかもここ数年の開発の増加を原因とする発掘調査例の急増により、再度検討を加えるための資料が整いつつある。以下、その在り方を検討する。

前期初頭の花積下層期に属するものは今のところ発見例がない。

神ノ木・中越期 塙尻バイパス関連の調査で、北原、向陽台で8軒の住居が発見されたことにより前期の住居址中最も検出軒数が多く、その内容を良く知ることができる。

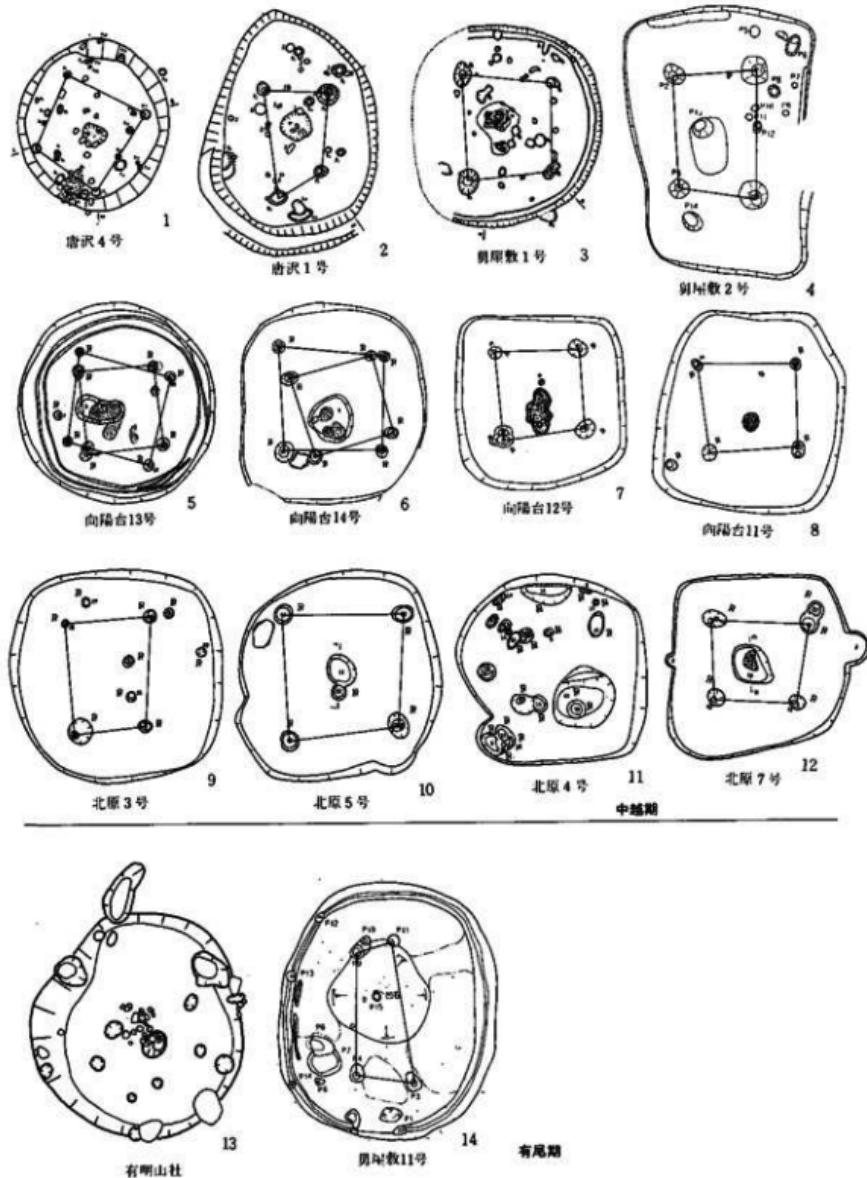
平面形態は、ほぼ正円を呈するもの(唐沢4号、向陽台13号)、不整円形・橢円形を呈するもの(舅屋敷1号、唐沢1号第1次面)、方形ないし隅丸方形を呈するもの(舅屋敷2号、向陽台11、12、14号、北原3、4、5、7号)の3形態がある。方形、隅丸方形を呈するものは、定形的なしっかりものは少く、円形に近づきつつある姿を示している。方形を基本とするものは、筑摩山地東麓の舅屋敷、向陽台、北原に集中し、円形を基本とするものは松本平西側の西山山麓を主とする。地域差か、時間差か問題となるところである。前期の大集落址、阿久遺跡ではこの時期を3細分しており、住居形態の変化がII-a期、平面台形状、II-b期、方形状、II-c期、小判形状と見えられている。この時期に、松本平では円形への過渡的様相を示す隅丸方形が主体を占める点は、阿久での在り方と共通するものがある。

第3節 向陽台遺跡

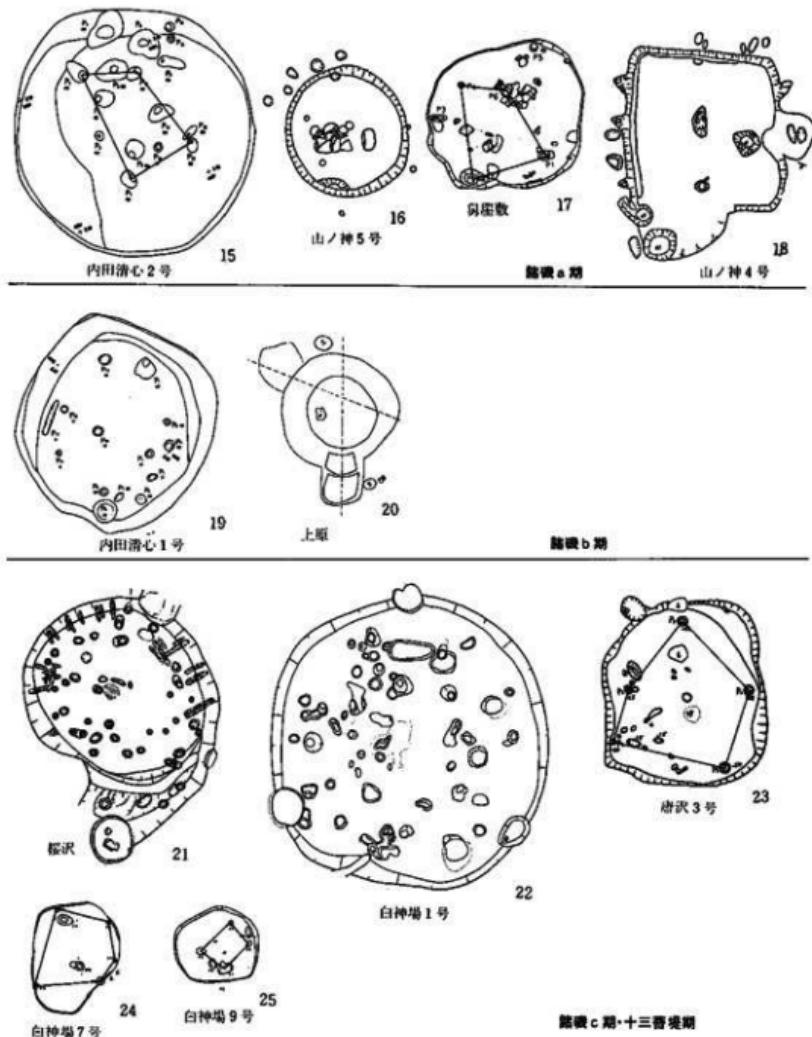
第31表 松本平における縄文前期住居址一覧表

造構名	所在地	平面形	規模	炉地	柱穴	周溝	時期	備考
男屋敷1号	塩尻市片丘	円形	4.65×4.36	地床	4	全周	神ノ木中越	
唐沢1号	山形村	不整橢円	4.6×3.4	"	4	なし		3回建て直し
" 4号	"	円形	3.9×3.45	"	4	なし		6本柱の可能性あり
男屋敷2号	塩尻市片丘	方形						
向陽台11	"	隅丸方形	4.95×4.5	"	4	"		
" 12	"	"	4.9×4.85	"	4	"		
" 13	"	円形	4.45×4.36	"	4	全周		建て直し
" 14	"	隅丸方形	4.37×4.68	"	4	なし		"
北原3号	"	"	4.35×4.35	"	4	"		
4	"	"	3.95×3.85	"	4	"		
5	"	円形	4.15×4.10	"	4	"		
7	"	方形	3.65×3.65	"	4	"		大形石辺
女夫山ノ神								
有明山社	松川村	円形	7.5×7.5	地床	不明	なし	黒浜尾	
男屋敷11号	塩尻市片丘	橢円形	5.4×4.7	"	4	全周		
竹ノ花	"	円形	40×	"	不明	なし		壁に支柱
田川端55号	" 中西条	円形	5.2×	不明	(6)	(全周)		半掘
								半掘
内田清心2号	松本市内田	円形	5×5	不明	4	なし	諸a	
山ノ神4号	塩尻市洗馬	方形	4.54×3.24	"	不明	有	南大原	
" 5号	"	円形	2.64×2.64	"	"	なし		
男屋敷4号	" 片丘	不整円形	3.4×3.0	地床	4	なし		
" 13号	"	"	"	"	不明	"		
田川端50	" 中西条	円形	4.2×	不明	(4)	"		
56	"	"	4.9×4.5	"	(6)	"		
57	"	"	5.3×	"	不明	"		
58	"	"	6.2×	"	"	一部		
内田清心1号	松本市内田	不整円形	3.9×9.2	なし	14	なし	諸b	14の柱穴
細野上原	白馬村 大町市	" 円形	5.5× 2.5×2.5	石圓 地床	なし	なし	上原	
男屋敷3号	塩尻市片丘	不整円形	不明					
唐沢1号								
唐沢2号	山形村	不整方形	4.0×3.8	地床	5	なし	諸c	
白神場1号	松本市小赤	不整橢円	4.7×3.9	地床	5	なし	下馬ナシ	
5号	"	円形	2.7×(2.7)	"	不明	"		
6号	"	橢円	4.2×3.8	"	"	"		
7号	"	円形	6.0×6.0	"	40			
8号	"	橢円	3.5×3.2	"	4	"		
女夫山ノ神2号	塩尻市片丘	"	7.1×5.4	赤石野	5		支柱5	
桜沢	松川村	橢円形	4.1×3.6	"	40	なし		建て直し

第三章 調査 遺跡



第354図 松本平の縄文前期住居址集成図(1)



第355 図 松本平の縄文前期住居址集成図(2)

第三章 調査遺跡

住居の規模は、直径4～5ないし一辺4～5mを一般とし、主柱穴は4本で、前期の他の時期に比較し最も整った姿をしている。主柱穴の並びは、円形・橢円形プランでは台形を、方形・隅丸方形プランでは長方形、正方形を呈する。炉は地床炉で、堀り込みは浅く10cm前後である。

集落内での住居形態を検討するには資料に乏しい。時間差の有無が問題となろうが向陽台での円・方形の混交は、同一集落内での2系統の住居形態が存していた可能性を示している。

なお住居付属施設として注目されるのは、唐沢4号住居で発見された「南西部周縁外部より幅1mを底辺として炉址方向に約1mの間三角形上に径2～15cmの自然石が50個くらい平らに敷詰められ」、特にP₉～P₁₁間に緻密であったというものである。報告者は、「床面一部の砾群中に存するP₉、P₁₀は、床面及び側壁の敷石の緊結状態からして、本址の入り口の柱と考えし、敷石面は現在の玄関の土間にあたると推定するのが妥当のように思われる」と述べている。

中越期は、住居発達上、「中越期は、前期でも最も堅固で整然とした定型化した住居が出現する点は、住居形態のうえからもこの時期に一つの画期が求められる」（長崎・宮下 1984）と評価されている。この評価は、松本平でもそのままあてはまり向陽台・北原の8軒の住居址はその好例であるといえる。

黒浜・有尾期 この時期は資料に乏しく、しかも完掘されたものが2軒しかないと正確に時期的性格を把握できない。

住居の平面形態は、前代の中越期に主流を占めていた方形、隅丸方形は姿を消し、円形（有明山社、竹ノ花、田川端55号）、橢円形（舅屋敷11号）のみとなり、とりわけ円形が多く主体を占める。松本平においては住居形態上の画期を中越期と有尾期との間に求めることができるかもしれない。規模は、円形で直径5～7m、橢円形で長径5mと大型化する。主柱穴は、舅屋敷11号で4本主柱穴が確認された以外、有明山社・竹ノ花・田川端55号とも主柱穴を認定できていない。舅屋敷11号の主柱穴位置は中央に台形に設けられ、定形的であった中越期の柱穴の在り方と大きな相違を示している。また、中越期には余り例のなかった支柱が出現し、舅屋敷例では中央と西壁下に、有明山社でも壁に沿った支柱がみられる。炉は、中央ないし、やや北寄りに地床炉が設けられている。

舅屋敷11号では、橢円形の長径頂部（南端にあたる）に2本の支柱穴があり、この部分だけ周溝が切れている。おそらく出入口部であろう。

このように有尾期は、平面形態、規模、柱穴などあらゆる面で、前代とは異なり、大きな変換期であったといえる。

諸磯a・南大原期 この時期も資料が乏しい。

平面形態は、円形（内田清心2号、山ノ神5号、舅屋敷4・13号）を主とし、方形（山ノ神4号）も例外的に存在する。規模は、内田清心2号のように直径5mのものがある一方で、直径2～3mの山ノ神5号、舅屋敷4号のような小形のものが出現し、規模の面で2分される。小形のものは以後、前期末まで系譜をたどることができる。柱穴は、4本主柱が台形に並ぶものと、主柱が見当らないものとがある。概して不規則で、定形化していない。炉は、不明瞭なものが大半

で、しっかりした炉は設けられていない。

松本平のこの時期の住居は、退化し、貧弱な印象を強く受ける。

諸磯b、上原期 前期後半の文化的発展期である時期としては最も資料が貧弱で、時期的特性を把握することが困難である。

形態は、円形を基本に、楕円形を主体とするようである。規模は、諸磯a期の傾向を継承して直径5m前後のもの（細野）と、2~3mのもの（内田清心1号、上原）との大・小2グループが存する。柱穴は、多柱穴といえるものが主となり、内田清心1号では中央に支柱を設け、壁寄りに並ぶ14ヶのピットが柱穴に該当すると思われる。これは諸磯A期の柱穴の在り方を発展させたものである。多柱穴が定着しつつあるといえよう。炉は地床炉が主体であるが、細野で当地方としては初めて石囲炉が出現する。

諸磯c、十三菩提期 松本市白神場での調査により調査例は飛躍的に増加した。

平面形態は、円形（白神場5・7・8号）、楕円形（白神場1・6・9号、女夫山ノ神2号、桜沢）、不整方形（唐沢2号）があり、楕円形が主体を占める。規模は、長径6~7mのもの（女夫山ノ神2号、白神場7号）と、長径3~4mのもの（白神場6・9号、桜沢）とに2大別でき、白神場では両者が混交して検出されていることからセットをなすことも考えられる。柱穴は、4・5本主柱が多く、桜沢は40もの多柱穴例である。5本柱穴はこの時期から出現する。柱穴が不明瞭なものも多いが、前代に比較し再び定形化する徵候が見い出せる。炉はほぼ中央に設けられ、地床炉が主であるが、女夫山ノ神では炉脇に石を添えた添石炉が設けられている。

以上のように、松本平の縄文前期住居址は、平面形は中越期（方・円混交）→有尾期（円・楕円）→諸磯a、b期（円・不整円）→諸磯c、十三菩提（円・楕円）と変化し、中越期と有尾期に大きな画期が存する。規模では、諸磯a期からc期まで大・小2系統の住居が存在し、セットをなす可能性もある。炉は地床炉を主に、わずかではあるが添石炉、石囲炉が存在する。柱穴は、中越期4主柱、有尾期不明瞭・4主柱、諸磯a期4主柱、多柱、諸磯b期多柱、不明瞭、諸磯c4・5本主柱、多柱と変遷する。

縄文時代の住居の中で、短期間にこのように変化する時期は前期において他にはないであろう。このような動きは集落の定着・確立期である前期という住生活の変革期の様相を具現したものといえよう。

3) 弥生時代の遺構と遺物

1 土器について

今回の調査では、弥生時代の6軒の住居址と方形周溝墓1基が検出されたが、埋甕炉に使用された土器以外に出土した土器の量が極めて少ないため、出土土器の時期的な細分是不可能であった。出土した弥生土器は、いずれも弥生時代後期の箱清水式の時期には限定される時期の遺物であり、朱塗の土器も出土しているが、主体は模描文を施す瓈形土器であり、他に壺形土器・高

第Ⅲ章 調査遺跡

壇等の器種が存在する。

出土遺物の大半は千曲川水系の箱清水土器であり、当方では珍らしい朱塗の壺形土器や高壇等の破片がどの住居址からもわずかながらではあるが出土した。特に、8号住では、朱塗の大型壺形土器の胴下部も出土しており、壺形土器のなかでも朱塗土器の存在がかなり普遍的なものであったと想定される。また、壺形土器を見てもその大半は千曲川水系の土器であり、天竜川水系の土器は、あくまでも客観的な存在であったといえる。こうした傾向は、過去に調査の行われた市内の中島遺跡・田川端遺跡等でも看取された傾向であり、天竜川水系の土器や、タタキ目を施す甕など他地域の土器が流入する複雑な様相を呈しながらも、松本平南半部はやはり箱清水式文化圏に属するものと捉えることができる。

2 住居址について

6軒検出された住居址のうち主柱穴の配置が確認できたのは、第4号住居址を除く5軒の住居址であり、いずれも4本柱の上屋構造であったことが判明している。第4号住居址のみは4.3×3.6mの小型の住居址であり、明確な主柱穴を捉えることはできなかった。ところで、これらの6軒の住居址のうち、第4号住居址と第6号住居址では炉の造り替えが認められ、第6号住居址においては建て替えの事実も判明している。そして、第6号住居址の建て替え前の主柱穴内に、砾石2点の埋置が認められた。砾石は、建て替え時に人为的に埋置された可能性が強く、建て替えに際しての祭祀等の存在を想定することも可能である。現在のところ私見の範囲ではこのような遺物の埋置例を他遺跡では確認できておらず、その性格については判断しかねるが、類例の増加が期待される。

また、これら6軒の弥生時代後期の住居址には、主柱穴以外に特異な配列を示す小ピットの存在が認められる住居址も多く、間仕切り等の支柱穴や、出入口施設として捉えることの可能なピットが数多く検出された。このうち、出入口施設と想定される遺構は、第5号、6号、8号の3軒の住居址で確認されている。第5号住居址の場合2ヶ所に深部を有しその1つは柱穴状をなすピット（土塙）が検出された。柱穴状のピットは壁から約1m程離れるが、若干外方に向けて埋り込まれており、梯子固定用のピットとして捉えることが可能である。また、第6号住居址の場合、0.8間隔の一対のピットが壁際より検出されており、出入口施設の支柱穴となる可能性が強い。なお、第8号住居址では、南壁下中央より双円形のピットが検出されている。これら3例の遺構は、いずれも炉の反対側の壁際中央に位置している。

炉は、全ての住居址から検出された。埋甕炉が大半を占めるが、4号住のF₂は綠石を伴う地床炉であり、9号住の埋甕炉も綠石を伴っている。配置としては、いずれも主軸ライン上のどちらか一方に偏った位置に存在し、主柱穴の判明している5軒の住居址のうち、主柱穴に囲まれる内区に存在するものが4軒で大半を占める。第7号住居址のみ、主柱穴を結ぶライン上から埋甕炉が検出された。

3 集落構成について

今回の向陽台遺跡の調査では、弥生時代の遺構として住居址6軒と方形周溝墓1基が検出され

た。調査区が幅40mの道路予定地に限られ、また集落の東側がかつての土取りによって大規模な破壊を受けていたため、今回調査を行ったのは向陽台の弥生集落の一部に過ぎないが、遺跡東端のやや標高の高い尾根上では方形周溝墓も検出され、生活域と墓域の位置関係を明らかにすることができた。残念ながら、I地区とII地区の中間の空白地帯の様相が明らかにできないため、生活域と墓域を区画するような施設が存在したかどうかは不明であるが、向陽台遺跡から北に約1.3km離れた上木戸遺跡では、弥生時代末期から古墳時代初頭にかけての環溝の可能性を有するV字溝が検出されており注目される。(唐木1985)また、向陽台遺跡の西側の田川の対岸に存在する中挿遺跡(第2節参照)では、弥生時代後期の方形周溝墓と住居址群が隣接して検出されているが、特に両者を区画するような遺構は存在していない。いずれにせよ、向陽台遺跡では、生活域の東方のやや標高の高い生活域を見下ろす尾根上に方形周溝墓が築かれており(第360図)、生活域と墓域の位置関係を知り得る貴重な資料を提供することができた。

次に6軒の住居址の構成をみると、切り合いが全く認められないことから、集落の存続時期は比較的短期間のものであったと推察される。第6号住居址に建て替えが認められることや、住居址が相互にかなり近接して存在することから2時期程度に分離することも可能かと思われるが、出土土器が少なく縦年的な分離が不可能なため、向陽台遺跡の弥生集落の変遷は明らかにし得なかった。ただし、主軸方向を見ると、一般的な規模の第5、6、7、9号住居址と、規模の小さな第4号住居址や規模の大きな第8号住居址とでは主軸が異なっており、特に第4号住居址は支柱穴も確認されていないことから、特殊な性格を有する住居址として位置づけられる。

参考文献

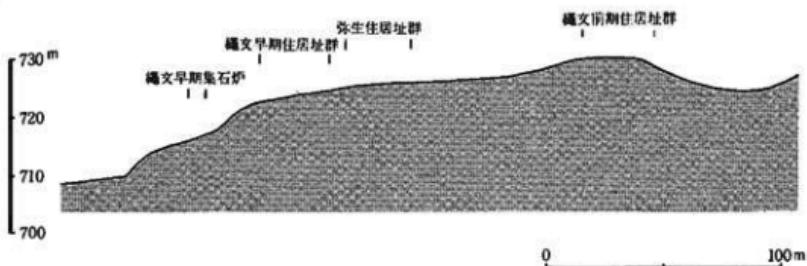
唐木孝雄 1985 「上木戸遺跡」(『長野県埋蔵文化財センター年報』2)

4) 遺跡の変遷

向陽台遺跡は、筑摩山地東麓に発達した小舌状台地の先端部に立地する。台地下には鉄物師屋川が掘取り巻くように北流し、この小河川をはさんだ西側の小台上には中挿遺跡が占地する。また、台地奥部には、400m東方に北原遺跡が展開する。中挿遺跡は縄文時代中期の住居址、弥生時代後期の住居址、方形周溝墓が発見され、北原遺跡では縄文時代前期、中期の住居址、小竪穴が検出されており、同時期の遺構、遺物が存在する向陽台遺跡を考えるうえで、この両遺跡との関連性が重視される。

本遺跡は、すでに詳細に報告がなされたように先土器時代～弥生時代後期にかけての長期におよぶ集落址である。ここでは、舌状台地への各時代ごとの占地の流れ、その背景について概観する。

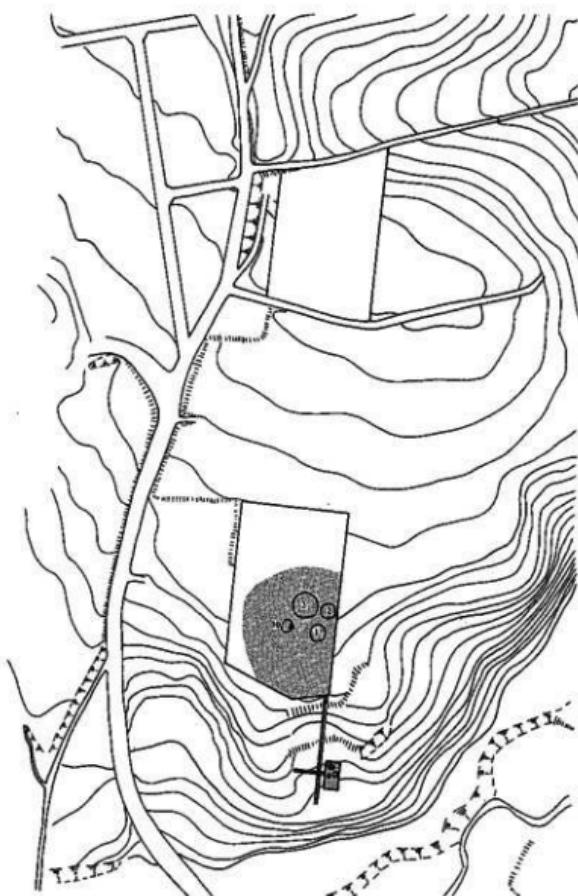
先土器時代 先土器時代に属する遺物としてはナイフ形石器が10号住居址覆土から一点出土している。台地先端から30mほど内奥にあたる。先土器時代包含層の有無を確認するため台地端から30m内奥までの範囲にかけてローム層下60cmまで掘り下げてみたが全く遺物の出土は認められなかった。居住なしし一定期間にわたる活動のために遺された遺物ではなかったということであ



第356図 遺構垂直分布図

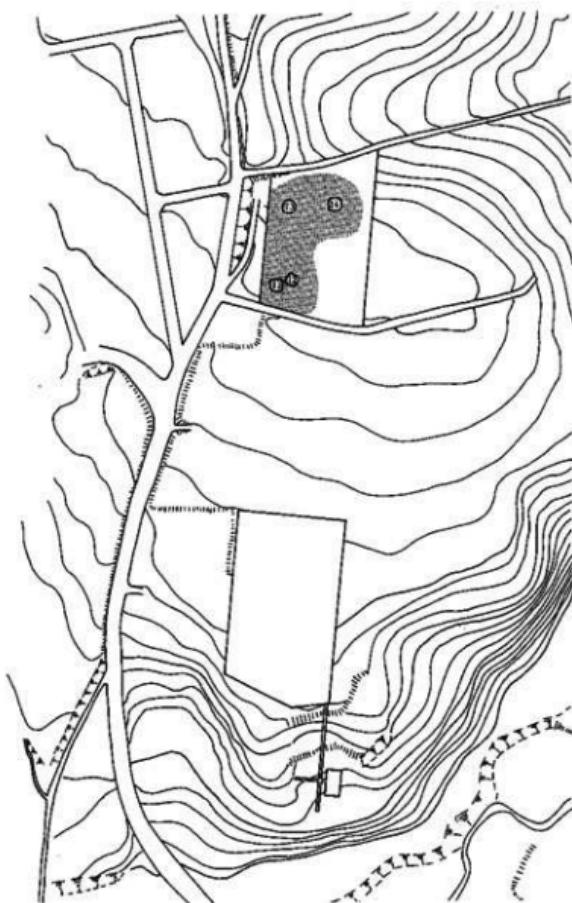
ろう。松本平での先土器時代の遺跡は、田川流域に集中する傾向がある。高出遺跡群の丘中学校・北ノ原、柿沢、青木沢での遺物の複数出土を除き、大部分は遺物一点のみの単独出土の遺跡である。ナイフ形石器は、丘中学校、北ノ原、青木沢で出土があり、これらの遺跡は複数の遺物出土からも知られるように提点的な性格を有する遺跡と考えられる。一方ではこうした遺跡と関連をもった一時的な活動のための小遺跡があり、向陽台遺跡は後者のような性格をもった遺跡であろう。

縄文早期 縄文時代に入り、早期になるとII地区西半部の台地端および台地下の小テラス上に遺構と遺物の散布が認められる。立地的には先土器時代遺物の出土地と重複している。この時期は沢式の時期と細久保式の時期の2期に分けられる。最初の沢式を主体とする押型文期には、台地上に1、2、3、10号の四軒の住居と台地下に4基の集石炉が構築され、遺物の散布は南側の未調査地区外にまでおよび、およそ2000m²の広範囲にわたると推定される。四軒の住居は近接して存在することから考えても全てが同一時期に存在したのではないことが分かるが、未調査地区での住居の存在も考慮に入れればおそらく2~3軒程度の住居群によって構成された集落であったと推定できる。住居内にはいまだ炉は持っていない。台地上から8mほど下位に形成された400m²ほどの小テラスに径1~1.5mの巨大な集石炉が4基発見されている。伴出土器から住居群とはほぼ同時期と考えられることから、住居に付属した施設と考えられ、風を避けるのに都合のよい台地下に屋外炉が設けられたのであろう。住居群を中心とし、主として西側の台地端にかけて、小豎穴群が展開している。縄文中期のものも多く、全てを早期に属するものとはいえないが、幾つかからは押型文土器が出土していることから早期に属させ得るものも含まれていると推定できる。このことから住居群の周囲には小豎穴が付随していた様相がうかがえる。直徑8.8mという大形住居を含めた住居群と小豎穴、集石炉によって構成された集落の有り様は、出土遺物の豊富さ、その広範囲な散布とともに、貧弱で単期間の集落という従来の押型文期集落のイメージに転換をせるものといえよう。



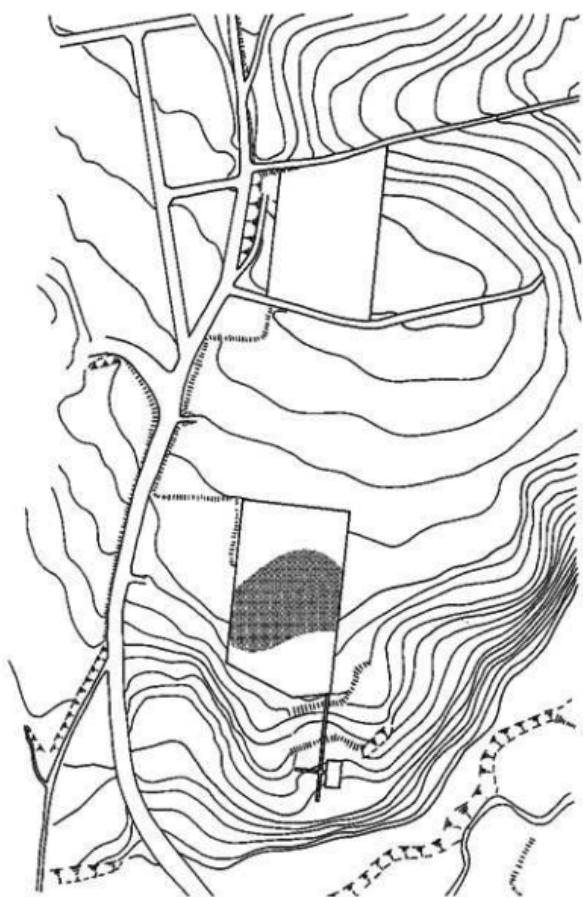
第357図 变遷図（先土器・縄文早期）

この沢式期に後出する細久保式期なると台地上には全くその痕跡が認められず、台地上から8mほど下位に形成された400m²ほどの小テラス上にのみ遺物が存在する。出土遺物の量は極めて僅少で、長期にわたる滞在ではなかったことを示している。広い台地上を活動拠点とせず、急崖を一段下がった小城を活動拠点に定めた背景には、環境、生活様式の変化があったのかもしれない。他地域での同期遺跡の在り方とともに検討すべき課題である。



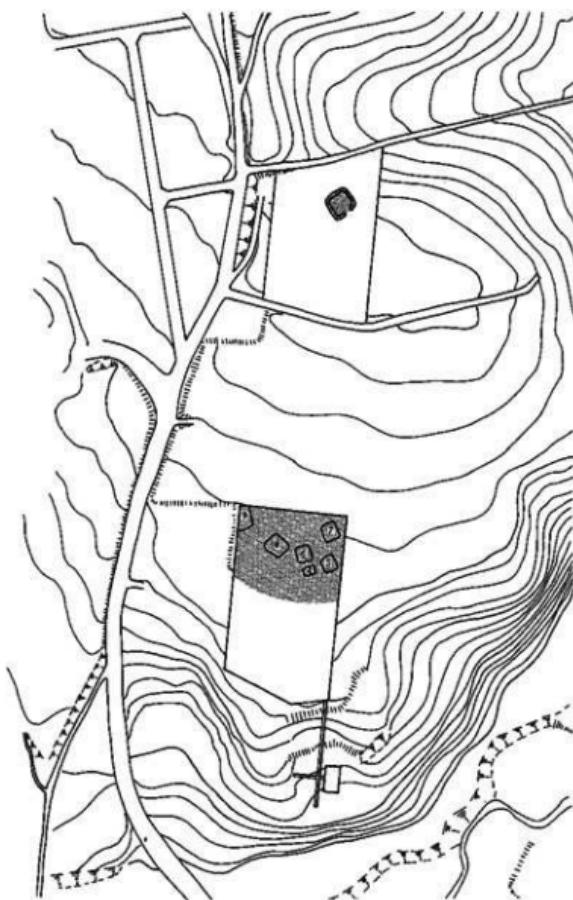
第358 図 変遷図（縄文前期）

鉄物師屋川流域には縄文早期の遺跡が多い。本遺跡より時期の逆上る立野式期の集石址が完形土器とともに発見された福沢、早期後半に属する6軒の住居が検出された堂の前、やはり早期後半の良好な土器群を出土した栗木沢などの諸遺跡は、鉄物師屋川の上流に展開する遺跡である。同じ水系内的一小地域内を舞台として、福沢→向陽台→栗木沢→堂の前と一連の遺跡が継続的に生起し、まとまりある地域を形作っている。



第359 図 変遷図（縄文中～後期）

縄文前期 先土器、縄文早期に活動の対象地域となったII地区は、次の縄文前期になると全く顕みらず、崖端から150m内奥のI地区に中心を移す。狭小な先端部から、より広い平坦地を有する内奥への進出は、集落規模の拡大化に対応した動きともいえる。11、12、13、14号の4軒の住居は、11、12号と13、14号の2軒づつが大きく東・西に分かれ、16mの間隔をもって対峙し、配列する。こうした住居群に取り囲まれた広場とも考えられる空間は、縄文早期には今だ出現せ



第360 図 変遷図（弥生後期）

す、この前期に至り出現するといわれている。松本平においては、おそらくとも中越期には本格的な集落が発生したことが分かる。県内での動きはどうかというと、阿久、十二ノ后、中越などの例からも知られるように、馬蹄形ないし環状を呈する大規模集落はやはり中越期に至り出現し、集落形成上の画期となっている。

松本平における中越期の集落は、男屋敷、北原が知られる程度で今まで発見例に乏しかった。

向陽台、舅屋敷、北原とも筑摩山地東麓にあり、近距離に位置していることから、この時期の集落を考えるうえで貴重な例となろう。

縄文中期 縄文中期には再びその占地がI地区に限られる。中部高地は縄文中期の遺跡が激増することを大きな特徴とするが、松本平でも例外ではなく、とりわけこの筑摩山地東麓では西に向って張り出す台地上はことごとくが中期の遺跡であるといつても過言でないほど該期の遺跡が稠密である。各台地上には100軒単位の住居群をもつ祖原、小丸山、上木戸のような大集落が形成されていると思われる。こうした中にあって、この向陽台では住居は一軒も発見されず、小豎穴とわずかな遺物を散布するのみの特異な在り方を示している。小豎穴は、台地末端の40×35mの狭い範囲に密集して存在し、多くは円形ないし横円形で、浅いタライ状を呈している。遺物の散布もこの小豎穴の分布と一致し、狭小な範囲である。貯蔵穴か基壙か、あるいは他の用途か判断しかねるが、いずれにしてもこれを構築した人々の集落は他に求められる。ほぼ同時期で、最も近い集落は鉢物師屋川の対岸にある中挟遺跡、そして東方400mの北原遺跡、やや距離的に離れるが台地1つ南の堂の前遺跡がある。このような近隣に所在する拠点的な集落を支えるための何らかの役割を担った遺跡であったといえる。

縄文後期～晩期 縄文後期～晩期には、中期と重複する地域に遺物の散布が認められる。今のことろこの付近では住居の発見がなく、このような遺物のみの散布地が各所に点在する。堂の前、福沢、舅屋敷などをその代表例としてあげることができる。その性格付けは今後の課題である。

弥生後期 弥生時代に入り後期になると、I・II地区とともに活動の範囲に含められ、さらに調査区域外の南側地域にも広範囲に遺物の散布が濃厚に認められることから、この台地上全面を活動の対象地としていたと考えられる。この時期の遺構には、4～9号の6軒の住居址と方形周溝墓が1基発見されている。住居はII地区に塊集し、I地区には及ばず、代わりにI地区に方形周溝墓が造られている。方形周溝墓が本遺跡の最高所に構築されていることは、図を見れば良く分かる。住居群は低位に、方形周溝墓が高位にという居住域と墓域の関係をよく示している。近隣で該期集落が発見されている遺跡に、中挟・上木戸・大原・中島がある。中挟遺跡は、方形周溝墓を取り囲むように住居群がめぐり、上木戸・大原では住居群からやや離れて方形周溝墓が造られている。ともに居住と墓域とを地区設定し、計画的な集落構成をなしている。近時、田川流域では集落構成を論じ得る資料が次第に蓄積しつつあり、本遺跡も貴重な一例を加えたことになる。

向陽台に弥生期の集落が営まれた背景には、鉢物師屋川によって形成された低湿地における水稻耕作、そして台地上の畑作を基礎に発達したものと思われる。ほぼ同時期の中挟遺跡も鉢物師屋川が作り出した低湿地を食料生産の場としたであろうから、この河川が両村の境界の役割を果し、川より東が向陽台、西が中挟の生活領域であった可能性が高い。

この弥生後期を境に、向陽台を居住の場、活動の場とすることはなくなり、長い空白の時を迎える。

7 まとめ

鉄物師屋川を臨む台地上に位置する向陽台遺跡は、縄文早期～弥生後期にわたる集落址である。縄文早期の押型文期に属する4軒の住居址は、いずれも台地末端に位置し、互いに隣接して営まれている。1・2・10号地は径6mほどの円形を呈し該期住居としては大形に属するが、3号は径9mを測るさらに大形を呈していた。この時期の住居としてはおそらく最大級の規模を有するものと思われる。規模・軒数ともこの時期としては希有の資料で、該期の集落研究に寄与するものは甚だ大きい。また土器は沢式を主体とし、多くの無文土器を伴っており、押型文土器の構年的位置づけを論ずる際の第一級の資料となろう。石器群も豊富で、押型文期の一住居の石器群の様相を知るための格好の一括資料である。押型文期の遺構、遺物は最重要の成果となろう。なお、この集落に付属する集石炉は、その特異な立地とともに今後問題となってこよう。

縄文前期の4軒の住居址は、中越式の良好な一括資料を出土している。台地の一番高い地域に営まれ、住居は円形ないし方形を呈し、4本主柱、地床炉をもっている。松本平では從来この時期の資料に乏しかっただけにその空白部分を埋めるものとなろう。

縄文中、後期には小竪穴とわずかばかりの土器片が得られたのみである。他の台地上にある大集落に付属する墓ないし貯蔵用地域であったかもしれない。

弥生後期には、6軒の住居址と方形周溝墓が発見された。住居址は台地端近くに密集し、方形周溝墓は台地の最高所に位置する。居住址と墓域とが地域を異にして画然と分かれ配置して検出されたことは、該期の集落構成を把握するうえで貴重な成果であった。田川流域では、今まで田川端、中島、北原、上木戸、大原など数ヶ所しか住居の発見例がなかったため集落規模で遺構が把握されたことは重要である。鉄物師屋川低地での水田地域、台地上の集落、その上方の墓地という生産、居住、墓域の想定、把握は弥生集落の実態に迫り得る成果である。

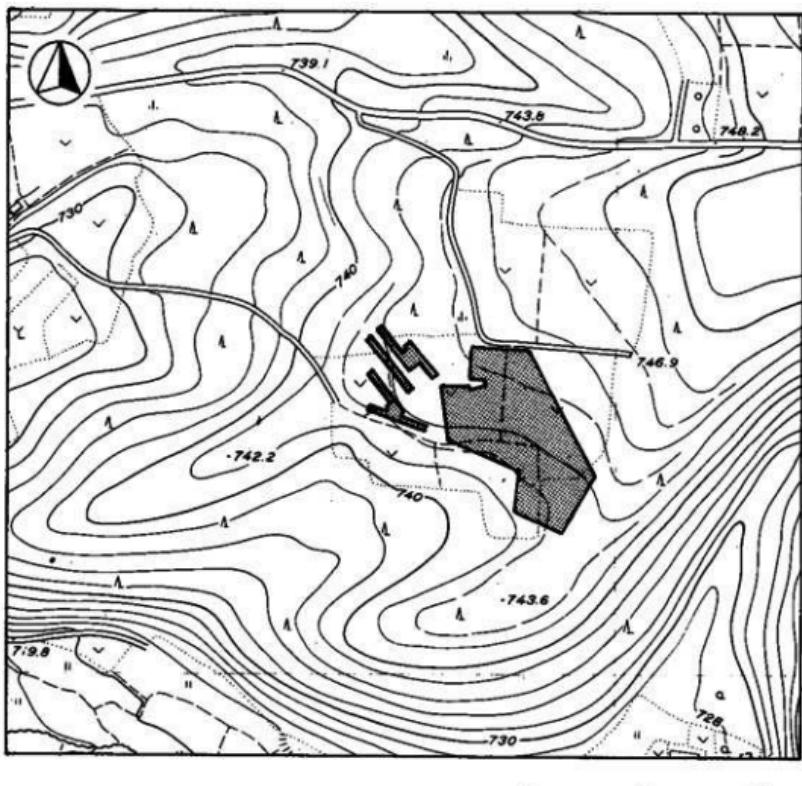
以上のように向陽台遺跡での調査は、極めて大きな成果をあげることができた。

第4節 北原遺跡

1 位置と地形

北原遺跡は桙敷地区の東方に位置する丘陵上にあり、標高は745mである。

前節の向陽台からさらに道を400m程登るとテラス状の尾根部へ出るが、ここが北原遺跡であり、中央道長野線塩尻インターへ連絡するバイパスインター建設場所でもある。付近は片丘丘陵の南端に位置し、群小の河川により東西方向の小支谷が発達しており、本尾根部も例外ではない。東側および南側は急斜面をもって谷間に臨んでおり、後節の高山城跡が占有する尾根(785.3m)が東側に対峙している。



第361図 北原遺跡調査地区図

第三章 調査遺跡

ここは総じて西向きの山麓斜面となっているが、中央道インター付近から分岐して西へ長い尾根を延ばしており、現在の五千石街道が通る付近で鎌倉市街地によって切断されている。向陽台遺跡はこの尾根の末端部に位置し、西側に急斜面をもつて鎌倉市街地を展望している。これに対しこの尾根のいわゆる首部にあたる本遺跡の占地する付近はやや平坦地となっているため、東を除くさまざまな方向に対して小支谷が発達しており複雑な微地形を形成している。調査区域も東西側にある小支谷の影響を受けて緩やかな南北傾斜になっており、微視的にみるとほぼ同時代の向陽台遺跡とは立地的にやや異なる環境を有する。なお調査区付近の平均勾配は3.5°である。

本遺跡は今回のバイパス建設に先立つ事前調査により新たに発見された遺跡である。遺跡の大半が山林地であったため表面採集ができず、僅かに一角の畠地において黒曜石フレーク数点が採取されたのみで、今回の発掘調査にはいるまで規模や時代など遺跡の性格についてはほとんど不明であった。なお遺跡名には付近の小字名をもって命名された。

2 調査概要

北原遺跡は鎌倉市大字桜敷地籍にあり、片丘丘陵の南端に位置する展望の開けた丘陵上を占地している。本遺跡はバイパス建設に先立つ現地調査によって確認された新発見の遺跡であり、従って時期や規模等の性格付けは今回の発掘調査によって初めて明らかにされた。今回発掘調査の対象となったのは畠と山林の一部で、調査面積は2.250m²に及ぶ。

調査の結果、遺構としては竪穴住居址7軒、竪穴状遺構1基、小竪穴44基が検出された。また遺物としては縄文前、中期の土器、石鏃、ビエス＝エスキュー、打製石斧、直刃式片刃石斧、横刃型石器、凹石、石錐、石匙、スクレイパー、石皿が出土している。

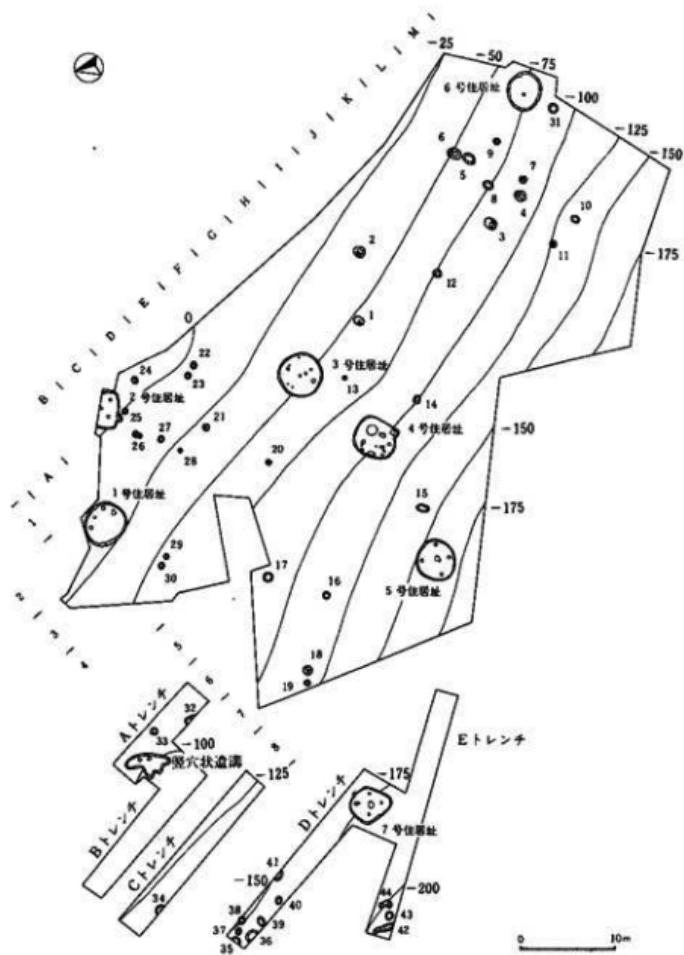
住居址は7軒中4軒が縄文前期の中越期に属し、残る3軒は縄文中期中葉の新道期に属する。分布としては前期中越期の住居址が尾根方向には直線的に並び、中期新道期の住居址がそれを挟む形で対峙している。中越期の住居址についてはこれまで市内では発見例がなかったが今回、偶然にも本遺跡で4軒、隣りの向陽台遺跡でも同じく4軒の検出があり、両遺跡の集落の関連性が注目される。

小竪穴は調査区の北側、東側、西側の3ヶ所に集中しており、中央域の前期住居址の付近には少ない、またそれぞれの群によって規模に異なる傾向がみられることも特筆されよう。

以上、市内では稀有な2時代の集落が所在する遺跡であることが判明し、貴重な資料を数多く提供する調査経過となつた。

3 発掘区の設定

事前の現地踏査では期待に反して僅少な遺物を確認したにとどまり、遺跡の性格を把握することはできなかった。そこで調査に先行して土層の堆積状態と遺物の保存状態を把握するために8ヶ所に試掘坑を入れた。その結果、標高が最も高い北隅においてローム面が最も高く、表土は僅か15~20cmの薄層で被覆していた。このローム面は南側の崖へ向かって緩く傾向しているが、それ



第362図 北原遺跡全体図

第三章 調査遺跡

に伴い表土も漸次層厚となり、調査区の南縁付近では深さ50cmでまだかなりローム面まで隔たりがあることを確認した。このことは尾根状台地上方部の表土がおそらく畑地造成などで下方へ押し出されてきたことによるものと思われる。試掘坑より若干の縄文土器片の出土があり、また現地路旁においても黒曜石フレークの採取のみであったため本遺跡が縄文の單一時代の遺跡であると判断してローム直上で遺構を捉えることとした。

調査はまずバックホーとブルドーザーによる表土除去を行ったのち、グリッドを設定した。耕作等による搅乱が比較的浅かったため遺構検出面付近はかなり保存状態がよく、この段階で容易に遺構のプランを確認することができた。

グリッドは5m間隔で北西から南東方向、すなわちバイパス路線方向に沿ってA～N、それらと垂直に1～9を設定した。また調査過程で当初、予定にはなかった西側に発掘区を拡張し、幅2.5mのトレンチA～Eを設定した。発掘総面積は2,250m²である。

4 土層

遺跡の土壤は森林土壤起源の安定した堆積を呈しており、砂や礫の混入がほとんどみられないところから表流水の影響は極僅かであったと考えられる。

基盤のロームは鮮明な褐色を呈し、塊状緻密な一次堆積のものである。ローム面の傾斜はほぼ地表面の傾斜と一致するが、僅かに後者より急勾配を示すところから近年の地表改変（畑地造成など）が伺える。ローム層を覆って下位から黄褐色土、暗褐色土、黒褐色土が堆積しており、このうち黄褐色は上下層の漸移層と把えてよいだろう。遺物包含層は中間の暗褐色土層であり、これは調査地区全域にわたって共通している。

5 遺構・遺物

1) 住居址

(1) 縄文時代前期

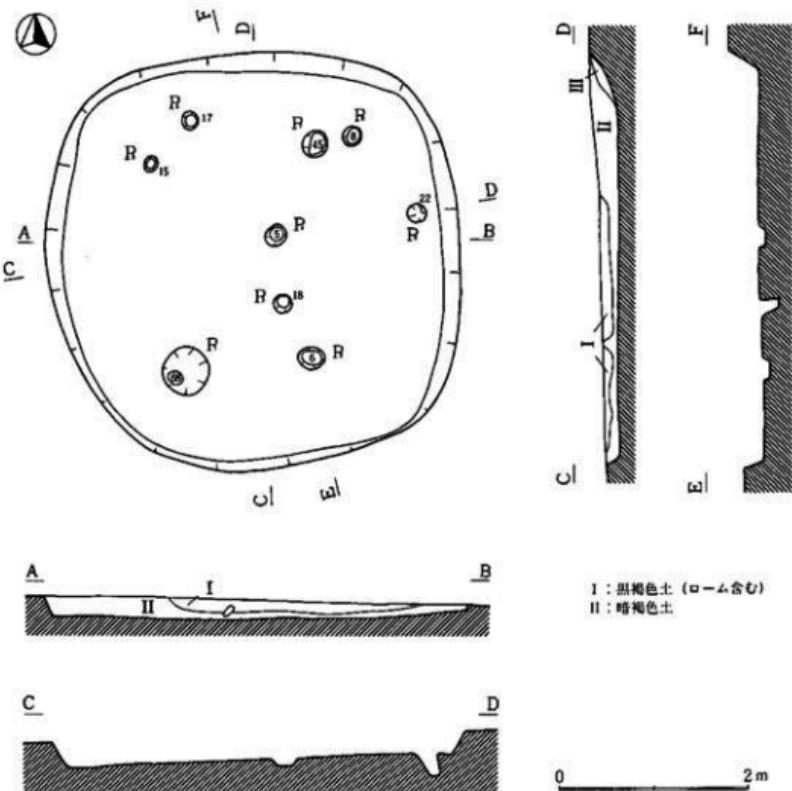
第3号住居址

遺構 本址は、調査区域のはば中央に位置し、隅丸方形のプランを呈する。壁はロームを掘り込んであり、壁高は、北壁32cm、南壁14cmであり、北壁から南壁にかけ壁は低くなる。全体的に壁はなだらかに傾斜し、軟弱である。床はやや軟弱であり、南に向いやや傾斜している。ピットは9ヶ所確認できた。 P_1 以外は、口径が14cm～28cmであり、深さは、 P_2 が6cm、 P_4 5cm、 P_8 8cmであり、 P_3 、 P_5 、 P_6 、 P_7 は、15cm～22cm、 P_9 は45cmであり、テラス状の段を有する。 P_1 は、口径48cm、底は南寄りにあり底径12cmと小さい。焼土、炭化物など覆土にみられず、炉と思われるピットは確認できなかった。

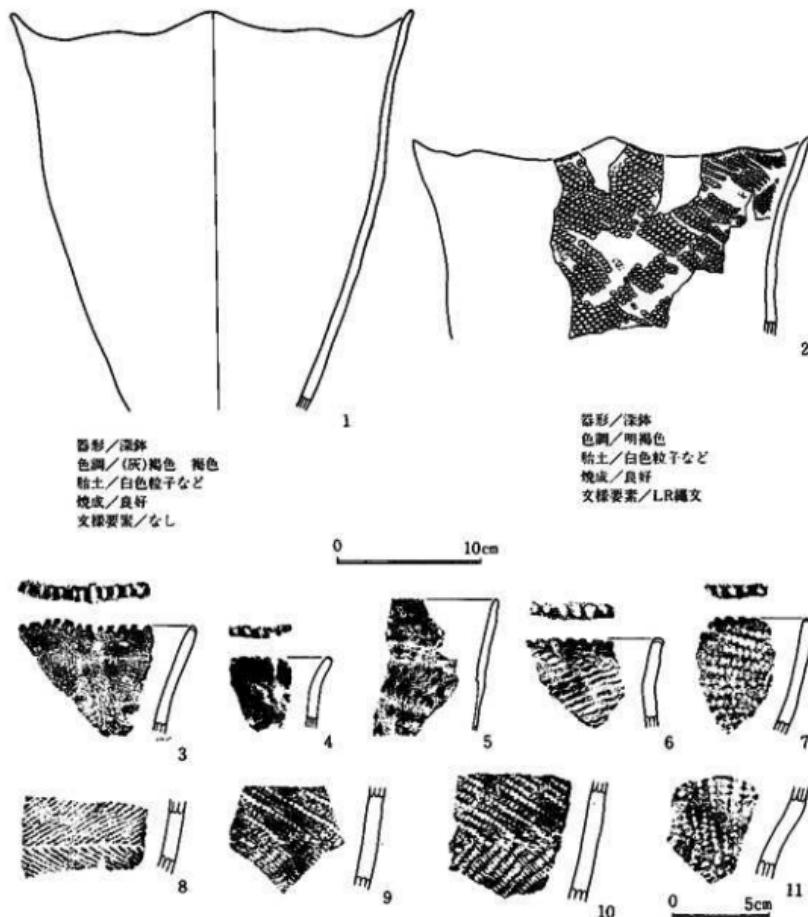
遺物 土器は無文と縄文の施されたものに大きく分かれる。まず、無文の土器を(A)～(D)に分類して説明を加えていく。(A)器厚が6mm以上で軟質、焼き色は赤みがかった褐色のものが多い。外面あるいは外面を磨いたものが9～12個体ある。(B)器厚は(A)と同程度で表面にハケ状工具の軌

跡が明瞭に残るもの4個体。この中には焼き色が灰色っぽく硬質になるものがある。(C)器厚が5mm以下となるもののうち、軟質で、焼き色は赤みのかかった褐色を呈するもの。表面が風化しており整形は不明である。(D)器厚が5mm以下、硬質に仕上げられており、裏面に指頭圧痕が明瞭に残るもの。焼き色は灰褐色である。2個体存在し、図示しなかった胴部細片は胎土に石英・雲母を含み他と異なっている。

縄文の施された土器には薄手のものはみられず、軟質で焼き色は赤みのかかった褐色を呈するものが多い。他に灰褐色のものがある。縄の種類によって以下のように分類した。(A)無筋縄文は6~8個体あり、結束第1種(山内1979)による羽状構成をとるものも存在する。(B)単筋縄文は14~17個体存在し、2は明らかにRL縄文であるが、羽状構成をとるものは9個体ある。結束第1種によるものがほとんどで、RLとLR縄文を結束したものである。



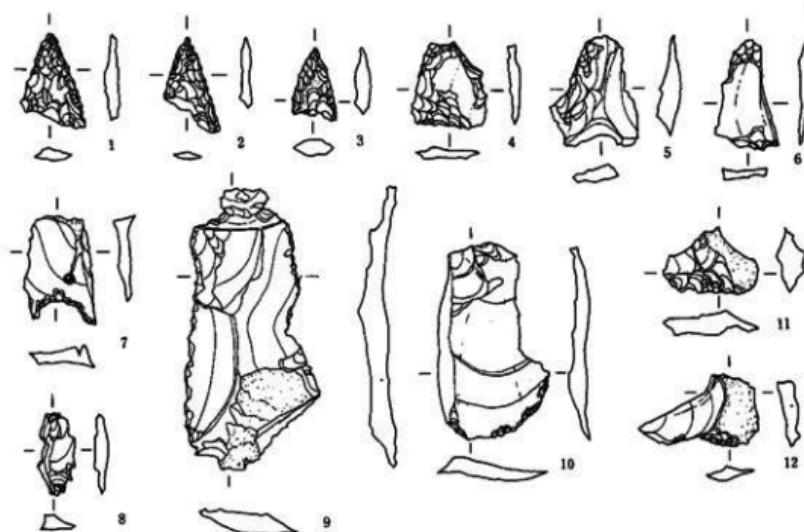
第363図 第3号住居址



第364図 第3号住居址出土土器

土器観察表

番号	発掘区	器形	部 位	文様構成要素	表面装飾		胎 土
					外/内	内/外	
3	3H45	深鉢	口縁部	キザミ	ハケ状工具痕/ミガキ		白色粒子多量
4	3H27	×	×	キザミ	ミガキ		白色粒子など
5	3H25	×	×	な し	ミガキ、ミガキ		*
6	3H2	×	×	施墨し繩文	繩文/ミガキ		白色粒子・石英
7				施墨し繩文	* / *		白色粒子など
8	3H56	×	胴部	施墨施墨第1種繩文	* / *		白色粒子など
9	3H32	×	胴部	施墨施墨第1種繩文	* / *		白色粒子など
10	3H42	×	×	*	* / *		*
11	3H30	×	×	施墨施墨繩文	* / *		*



第365図 第3号住居址出土石器

石器観察表

番号	発掘区	種別	石質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	回収号	備考
1	33	石核	黑曜石	(2.5)	(1.7)	0.4	1.1	1	
2	3	*	チャート	2.4	(1.5)	0.2	0.5	2	
3	51	*	黑曜石	1.9	1.2	0.4	0.7	3	
4	47	*	チャート	(2.2)	2.0	0.4	2.3	4	
5	32	*未製品	黑曜石	(2.8)	(2.9)	0.5	2.1	5	
6	*	チャート	2.8	(2.1)	0.3	1.5	6		
7	15	*	黑曜石	2.7	1.8	0.7	2.2	7	
8	32	ビエス	*	2.1	1.0	0.4	0.6	8	
9	60	石器	*	7.3	3.7	0.8	17.0	9	
10	55	小刺離痕	チャート	5.0	2.9	0.7	7.4	10	
11	*	*	黑曜石	1.7	2.5	0.9	2.4	11	
12	*	*	*	3.2	1.8	0.5	2.0	12	
13	31	石核	*	3.0	2.2	1.0	5.7		
14	32	石核	*	2.6	2.7	1.4	7.9		
15	25	*	*	3.0	3.0	1.2	8.0		

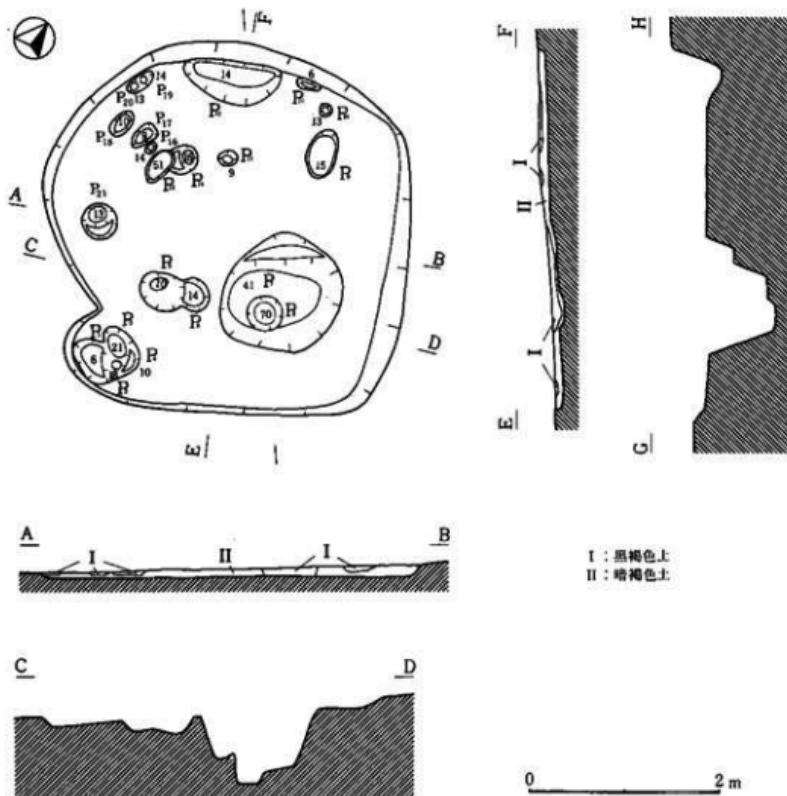
時期は前期・中越式土器の時期と考えられる。

小形石器では、石鎌5点、ビエス＝エスキュー1点、石匙1点、小刺離痕のある剥片61点（うちチャート2、他は黒曜石）、この他黒曜石の石核2点（15.9g）剥片はチャート2点（1.9g）、黒曜石59点（88.3g）である。石鎌には未製品が3点含まれている。大形石器の出土はない。

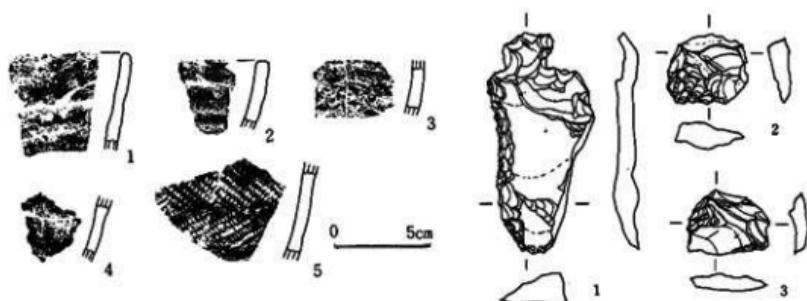
第4号住居址

遺構 本址は、調査区域中央部に位置し、径4m弱のほぼ円形のプランを呈し、南側に突出部を有する。壁はロームを掘り込んでおり、壁高は9cm~15cmと低く、東壁、西壁はやや傾斜し、北壁、南壁はほぼ垂直である。床面は、軟弱で西側から東側にむかひ傾斜し、やや軟弱である。ピットは、全部で21ヶ所確認できた。 P_8 は、口径36cm、深さ70cm、 P_{15} は、口径30cm、深さ51cmあり、本址に占める位置関係から主柱穴と思われる。 P_7 は、本址に伴うピットというより、本址埋没後に掘られた小豎穴としたほうが妥当だろう。他のピットは、深さ6cm~22cmと浅い。

遺物 分類は3号住居址のものを踏襲する。無文の土器(A)は4個体あり、また灰褐色で硬質なものが1点存在する。この時期の土器は輪積み痕の判別しやすいものが多いが、特に1・2は明



第366図 第4号住居址



第367図 第4号住居址出土遺物

土器観察表

番号	発掘区	器形	部位	文様構成要素	基盤質外観/内面	胎土	備考
1 4H1-2	環状	口縁部	なし	ナメ/ミガキ	白砂質土		
2 4H2	P	x	x	ミガキ/ミガキ	粘土		
3 4H7	P	側部	x	x	白砂質土		
4 4H13	P	x	x	ナメ/ミガキ/ミガキ	白砂質土		
5 4H4-5	P	x	底面	ミガキ	x		

石器観察表

番号	発掘区	種別	石質	W(=)	G(=)	H(=)	備考
1	No.3	石匙	チャート	5.7	3.0	0.8	12.0
2	No.4	小剝離痕の ある剝片	黒曜石	1.7	2.2	0.7	2.7
3		剝片	チャート	1.7	2.2	0.5	1.7

療である。(B)は1点のみである。繩文の土器は、器面が荒れて明確ではないが無節(A)が2個体認められる。また単節(B)は結束第1種によって羽状構成をとったものが1点出土している。

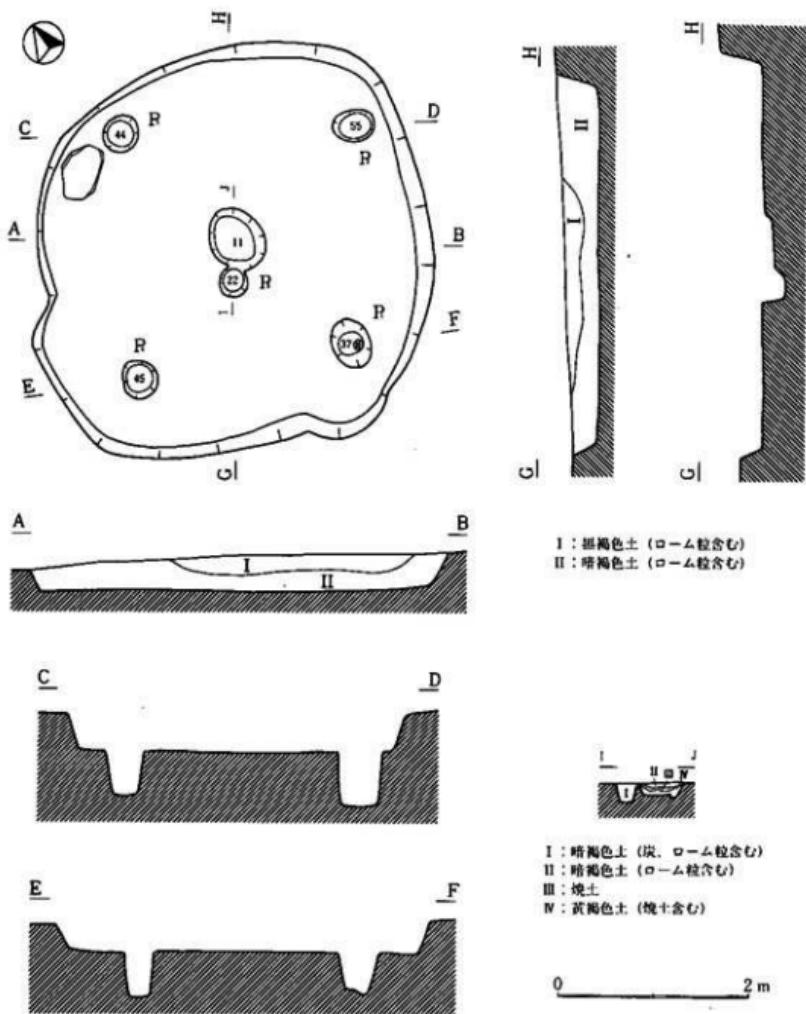
時期は前期・中越式土器の時期に比定される。

石器は石匙1点、小剝離痕のある剝片2点である。この他黒曜石の剝片14点(23.3g)が出土している。

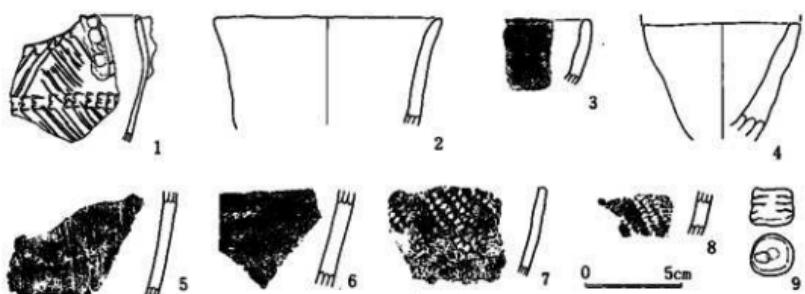
第5号住居址

遺構 本址は、調査区域の南側に位置し、径4m強のはば円形のプランを呈する。壁はロームを掘り込み、壁高は北側から東側にかけては、40cm前後あり、南側から西側にかけては20cm前後と低くなる。全体的にはほぼ垂直に近い壁である。床面はやや堅硬で平坦である。ピットは、5ヶ所確認できた。P₁～P₄、主柱穴であり、口径40cm前後、深さ40cm前後あり、ほぼ垂直に掘り込まれている。炉は、本址のはば中央に位置に南北に長軸をもつ梢円形で、長軸63cm、短軸54cm、深さ14cmである。P₅の南側の壁際の床面上に石皿が使用面を伏せて出土した。

遺物 装飾の施されたものが1個体出土しており、無文の土器(D)に近い胎土・焼き色・整形技法を示している(1)。無文の土器は(A)が9～12個体。3は輪積み部で欠損し擬口縁を見せていく。Bに分類されるもの7～8個体。(C)に近似するが、裏面に指頭圧痕を残さないものが1点あ



第368図 第5号住居址



第369図 第5号住居址出土土器・土製品

土器観察表

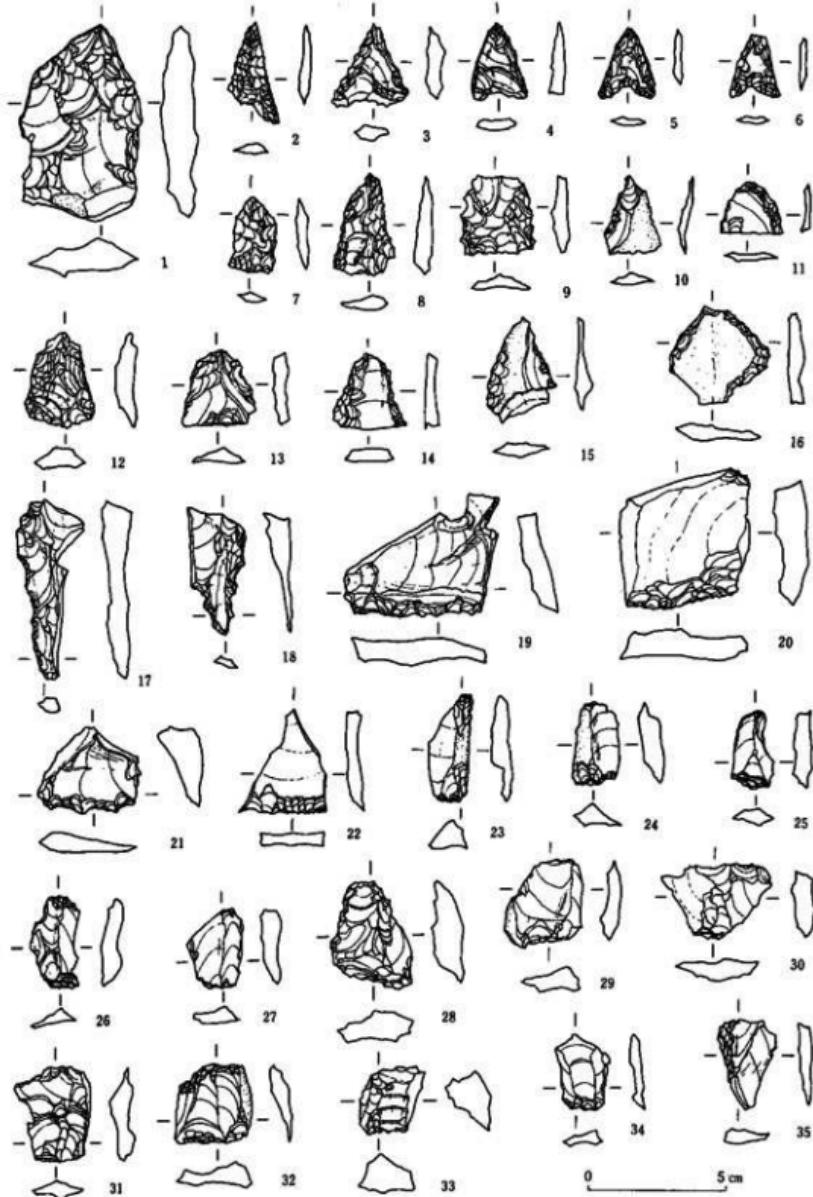
番号	発掘区	断面	部位	文様構成要素	器形	外觀/内面	地	土
1	5 H21	深鉢	口縁部	棒状點付文・刺突文・北緯文	ミガキノミガキ	石英、白色粒子		
2	5 H22	×	×	なし	西いミガキノミガキ	白色粒子ほか		
3	5 H2	×	×	×	ミガキノミガキ	粘選		
4	5 H16	×	側部	ミガキノミガキ	白色粒子・織縫	粘選		
5	5 H1	×	×	×	ハケ状JL具痕ノミガキ	×		
6	5 H22	×	×	×	× / ミガキ	×		
7	5 H61	×	×	R.L.縄文	縄文ノミガキ	×		
8	5 H	×	×	×	× / ×	×		

り、これには若干の雲母が混入している。R.L.縄文の施された土器が2~3個体認められるが、羽状構成をとるか否かは不明である。

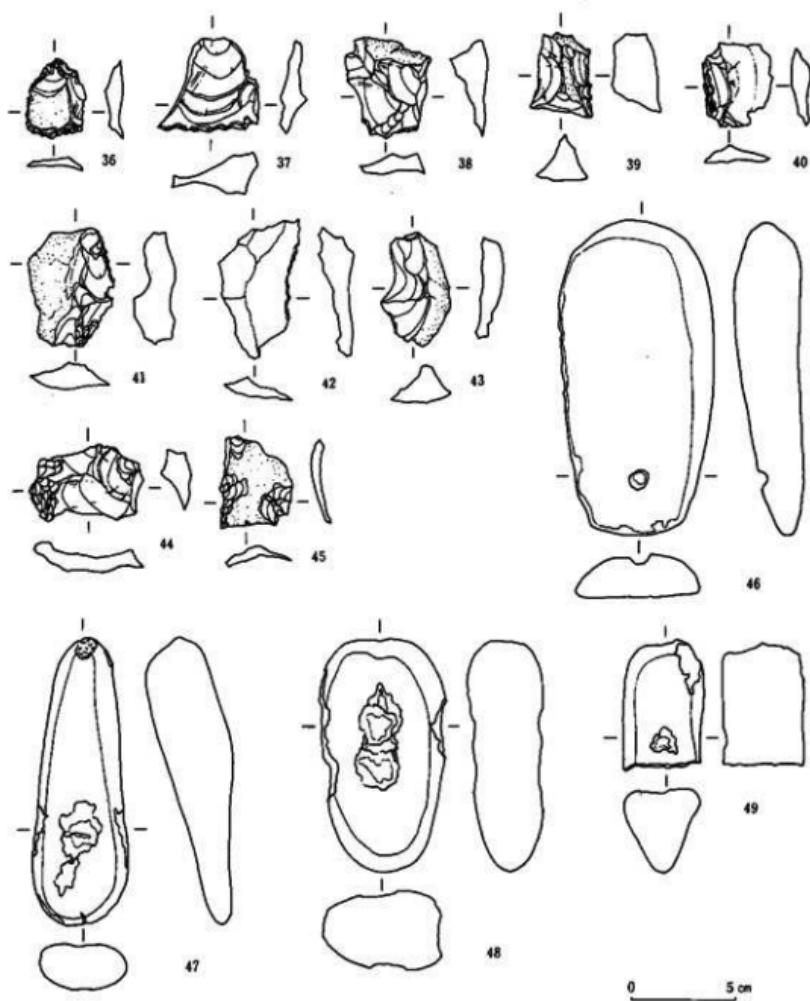
時期は前期・中越式土器の時期である。

石器は他の住居址に比べ多量の出土を見た。小型石器では、石錐15点、ピエス＝エスキュー16点すべて黒曜石である。このほか石錐3点、スクレイパー3点(チャート2、黒曜石1)、小剥離痕のある剥片31点(黒曜石30、チャート1)を数える。さらに、黒曜石の剥片が227点(360.1 g)チャート他4点(10 g)が出土している。大形石器では、床面に設置された石皿1点と凹石が4点認められる。

多量の剥片と石錐の未製品が6点も存在することから、石器製作時の廃棄物を多く含んでいるものと考えられる。



第370図 第5号住居址出土石器(1)



第371図 第5号住居址出土石器(2)

第三章 調査遺跡

番号	発掘区	種別	石質	大きさ(mm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	回収号	備考
1	19	尖頭器	閃輝石	5.0	3.2	1.1	17.5	1	
2	61	石鉤	+	2.5	(1.4)	0.3	0.7	2	
3	3	+	+	2.1	(1.9)	0.5	1.5	3	
4	63	+	+	1.9	1.5	0.4	0.9	4	
5	34	+	+	1.7	1.4	0.3	0.6	5	
6	7	+	+	1.6	1.3	0.2	0.4	6	
7	37	+	+	1.9	(1.2)	0.3	0.9	7	
8	2	+	+	2.6	1.6	0.5	1.7	8	
9	35	+	+	2.0	1.9	0.4	1.8	9	
10	65	+	+	2.0	1.5	0.3	0.7	10	
11	56	+	+	(2.2)	1.6	0.2	0.5	11	
12	69	+	+	2.4	1.8	0.5	2.3	12	
13	50	+	+	(1.9)	(1.9)	0.5	1.6	13	
14	31	+	+	(1.9)	(1.9)	0.4	1.6	14	
15	36	+	+	2.7	1.8	0.5	1.5	15	
16	69	石錐	チャート	(2.5)	(2.6)	0.4	3.3	16	
17	18	+	黒曜石	4.6	1.9	0.7	33.4	17	
18	45	+	+	3.4	1.6	0.8	2.7	18	
19	32	石錐	+	3.2	4.4	0.8	10.3	19	
20	61	スクレイパー	チャート	3.6	3.4	0.8	15.7	20	
21	65	+	黒曜石	2.3	2.7	0.9	4.0	21	
22	54	+	チャート	2.7	2.4	0.4	2.6	22	
23	31	ビース	黒曜石	2.7	1.0	0.6	1.7	23	
24	24	+	+	2.1	1.3	0.5	1.2	24	
25	29	+	+	2.0	1.1	1.1	1.0	25	
26	24	+	+	2.4	1.2	0.6	1.3	26	
27	69	+	+	2.1	1.4	0.5	1.4	27	
28	42	+	+	3.0	2.1	1.1	5.2	28	
29	69	+	+	2.2	2.0	0.6	2.4	29	
30	36	+	+	2.0	3.0	0.6	3.5	30	
31	50	+	+	2.4	2.0	0.7	2.9	31	
32	25	+	+	2.7	1.9	0.6	2.7	32	
33	50	+	+	1.6	1.6	1.2	2.9	33	
34	81	+	+	2.0	1.5	0.4	1.2	34	
35	41	小剣頭状	+	2.3	1.6	0.4	1.1	35	
36	60	+	+	2.0	1.5	0.4	1.1	36	
37	69	+	+	2.5	2.6	0.9	4.1	37	
38	29	+	+	2.5	2.2	0.8	33.7	38	
39	2	+	+	2.3	1.6	1.2	3.2	39	
40	60	+	+	2.1	1.8	0.6	1.7	40	
41	54	+	+	3.1	2.3	1.0	5.4	41	
42	81	+	+	3.6	2.1	0.9	4.9	42	
43	33	+	+	3.0	1.8	0.8	3.3	43	
44	47	+	+	2.9	2.0	0.9	2.8	44	
45	50	+	+	2.4	1.9	0.4	2.0	45	
46	田石	+	+	16.2	8.0	3.2	680g	46	
47	+	+	+	34.9	5.0	3.8	340g	47	
48	+	+	+	12.0	6.2	4.0	450g	48	
49	+	+	+	(6.2)	4.1	4.1	160g	49	
50	42	ビース	黒曜石	2.7	2.1	0.5	1.5		
51	59	+	+	2.5	1.3	0.4	1.3		
52	36	+	+	2.0	1.0	0.9	1.5		
53	61	+	+	2.0	1.6	0.7	1.6		
54	69	+	+	2.0	1.2	0.4	1.0		
55	小剣頭状	+	+	3.9	2.1	1.3	5.8		
56	69	+	+	2.8	1.9	0.7	4.3		
57	42	+	+	2.9	2.4	0.8	3.0		
58	18	+	+	2.8	2.1	0.8	2.1		
59	27	+	+	2.7	1.5	0.9	3.0		
60	36	+	+	2.2	1.8	0.3	1.3		
61	17	+	+	2.6	2.1	0.8	3.2		
62	+	+	+	2.7	2.5	0.6	3.1		
63	14	+	+	3.1	1.8	0.8	2.7		
64	+	+	+	3.4	1.6	0.7	2.5		
65	+	+	+	2.9	1.2	0.5	1.7		
66	+	+	+	2.9	2.1	0.5	1.9		

番号	発掘区	種別	石質	長さ(㎜)	幅(㎜)	厚さ(㎜)	重量(g)	図巻号	備考
67	24	*	*	2.1	1.4	0.4	1.1		
68	69	*	*	2.3	1.9	0.7	2.2		
69	89	*	*	2.4	1.3	0.6	1.2		
70	14	*	*	2.0	1.4	0.5	1.3		
71	14	*	*	2.7	1.7	0.4	11.2		
72	40	*	*	2.3	1.6	0.5	1.5		
73	61	*	*	2.0	1.9	0.4	1.5		
74	14	*	*	2.4	1.2	0.3	0.8		
75	15	*	*	1.7	1.6	0.5	1.3		
76	24	*	*	1.9	1.4	0.2	0.5		
77	37	*	*	1.7	1.1	0.2	0.4		
78	42	*	チャート	1.7	1.6	0.6	2.0		

第7号住居址

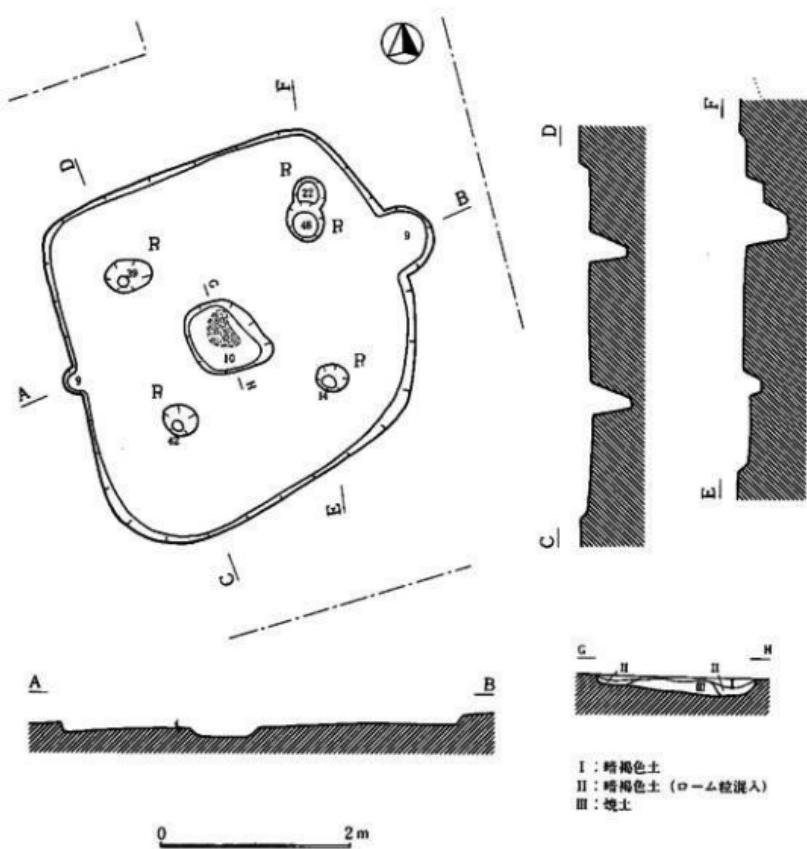
造構 本址は調査区南西に位置し全体から見ると標高が低く、覆土が一部黒褐色で他住居址の土層と異なっていたため検出には困難を極めた。壁高も低く床面もやや軟質な部分もあり初期の段階では、住居址と判断しかねた訳であったが、検出が進むにつれ、中央部に焼土、4本の柱穴の検出で住居址と判定するに至った。

プランは東西3.6m、南北に3.7mの方形型の住居址と推定される。壁高はいずれの箇所も5~8cmを測る。掘り込みは鋭い。床は部分的に軟質を呈してはいたが全体的に平坦で、良好に遺存している。炉は住居址の中央に存在し、緩やかな斜面を呈する地床炉である。炉の大きさは40×50cm、深さ9cmの不整形をしており炉内には焼土が検出されている。ピットについては4隅に5ヶ所、そのうち主柱穴は4本確認された。いずれも深さ40cmである。本址は出土遺物の様相から縄文前期に属する住居址と思われる。

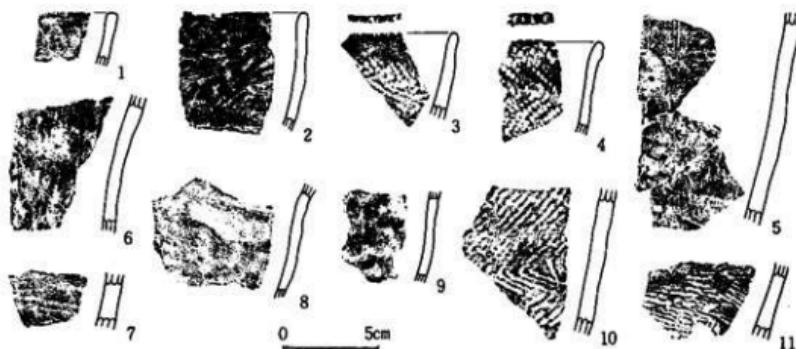
遺物 浮線文を半截竹管で整えたものが2点出土しているが非常に細かいため図示しえなかつた。無文の土器(A)は8~10個体、(B)は3個体で硬質のものだけである。(C)に属するものは2個体で、褐色のものと(1)、灰褐色で軽い軟質の土器がある。(C)は1~2個体で、胎土に石英と雲母が目だつものである。縄の施されたものは(A)無節が3個体あり、うち1個体は結束第1種による羽状構成をとっている。(B)単節のものが3個体あり、結束第1種の羽状構成である。

時期は前期・中越式土器の時期に相当する。

小形石器では石鏃7点、ビエス=エスキュー2点、小剝離痕のある剥片5点であり、すべて黒曜石である。この他黒曜石の石核2点(28.6g)、剥片74点(143.7g)、チャートの剥片1点(6.3g)が出土している。



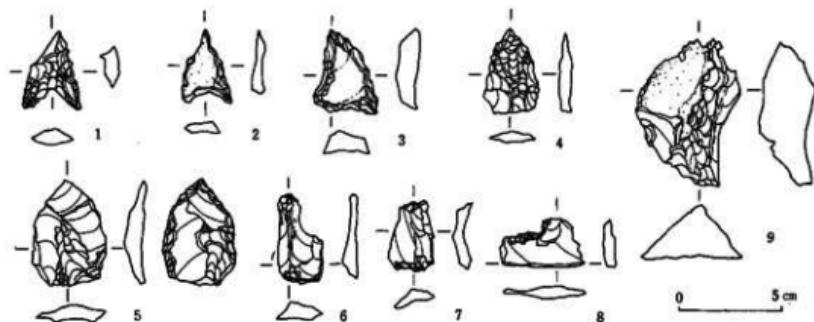
第372図 第7号住居址



第373図 第7号住居址出土土器

土器観察表

番号	発掘区	種類	部位	文様模或要素	器面調査 外/内	胎 土	備 考
1	7 H13	浅縁	口縁部	なし	ミガキ／ミガキ	白色粒子ほか	
2	7 H20	×	×	なし	ハケ状工具／ミガキ	*	
3	7 H23	×	×	单面輪廓第1種織文	織文／ミガキ	*	
4	7 H24	×	×	单面輪廓第1種織文	織文／ミガキ	*	
5	7 H17	×	腹	なし	深いミガキ／ミガキ	*	
6	7 H7	×	×	*	ハケ状工具／ミガキ	*	
7	7 H13	×	×	*	ハケ状工具／ミガキ	*	
8	7 H21	×	×	*	ミガキ／ミガキ	石英・碧璽ほか	
9	7 H22	×	×	*	ハケ状工具／ミガキ	オレンジ粒子ほか	
10	7 H15	×	×	無織輪廓第1種織文	織文／ミガキ	白色粒子ほか	
11	7 H11	×	×	無織輪廓文	織文／ミガキ	*	



第374図 第7号住居址出土石器

石器観察表

番号	発掘区	種類	石質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	図番号	備考
1	No.2	石斧	黒曜石	(2.1)	1.5	0.4	0.7	1	
2	No.11	〃	〃	1.9	1.3	0.3	0.7	2	
3	No.1	〃	〃	2.1	1.7	1.6	2.3	3	
4	No.1	〃	〃	(2.1)	1.5	0.3	1.0	4	
5	No.12	〃	〃	2.7	2.0	0.5	2.4	5	
6	No.12	ピエス	〃	2.2	1.2	0.3	0.6	6	
7	No.16	〃	〃	1.7	1.2	0.3	0.6	7	
8	No.4	小柄鎌状	〃	1.2	2.2	0.3	0.9	8	
9	No.1	〃	〃	4.0	2.6	1.6	11.1	9	
10	No.6	〃	〃	4.0	1.8	0.7	4.8		
11	No.14	〃	〃	2.2	1.7	0.5	1.9		
12	No.6	〃	〃	1.8	1.8	0.6	1.8		
13	No.3	〃	〃	1.7	1.2	0.3	0.4		
14	No.4	〃	〃	1.8	0.9	0.5	0.9		
15	No.11	〃	〃	2.3	1.0	0.5	0.5		
16	No.12	石核	〃	3.5	2.3	2.7	14.2		
17	No.8	〃	〃	3.0	2.9	1.8	14.4		
		刮片	黒曜石		74.0		143.7		
			チャート		1		6.3		

(2) 繩文時代中期

第1号住居址

遺構 本址は調査区域の北端に位置し、A・B-2グリッドに位置する。住居址の落ち込みは表土除去の段階で確認され、住居址北側が調査区壁外へ潜っていたため、全容が現れるようやや拡張した。

プランはほぼ円形の平面形態を有し、径4.10mを測る。

壁はロームをほぼ垂直に掘り込み、起伏の少ない良好な面を保存している。壁高は北壁37cm、東壁26cm、南壁25cm、西壁27cmを測る。北西壁沿いに約1.5mにわたり中間の段が見られる。床面との比高差は北側が25cm、南側が12cmでやや南へ傾斜している。

床面は非常に良好でよく踏み固められている。全体的には水平で平坦域をなしている。床面上のピットは全4基で東半域に密集している。周溝は確認されなかった。

住居址中央域や直線上に焼土の堆積が確認されたが床面には痕跡もなく、炉を確認することはできなかった。

遺物 土器は大きく4系統に分かれ、そのほか無文の筒形土器(7)が1個体出土している。

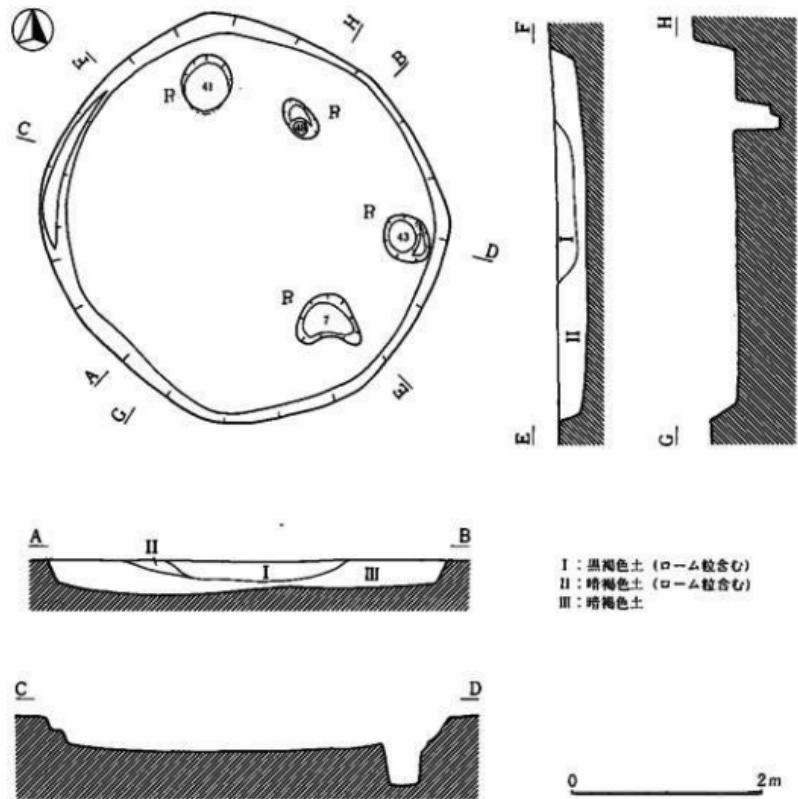
(1)勝坂式土器系統が8個体(1、6、8~11)、(2)斜行沈線文土器を代表する長野県中・北部に主体をもつ系統(2、3、12)が3個体である。(3)平出第三類A土器系統は1個体と少なく、しかも焼き色は赤褐色で、胎土中の石英の混入が少なく純粹なものとは異なっている。また、(4)及び13は本地域に小数存在する類型である。

ここでは、この最後の類型について詳しくみておこう。その基本的な特徴は、半截竹管による平行沈線と連鎖状隆線にある。幅の広い口頭部形態は勝坂式土器に、また胴部以下の形態は平出第三類A土器に近い。口頭部の区画文はぎこちない作りではあるが、意図するところは勝坂式土器の区画とみられる。文様施文の主体は半截竹管であり、区画を形成する連鎖状隆線の下書きも

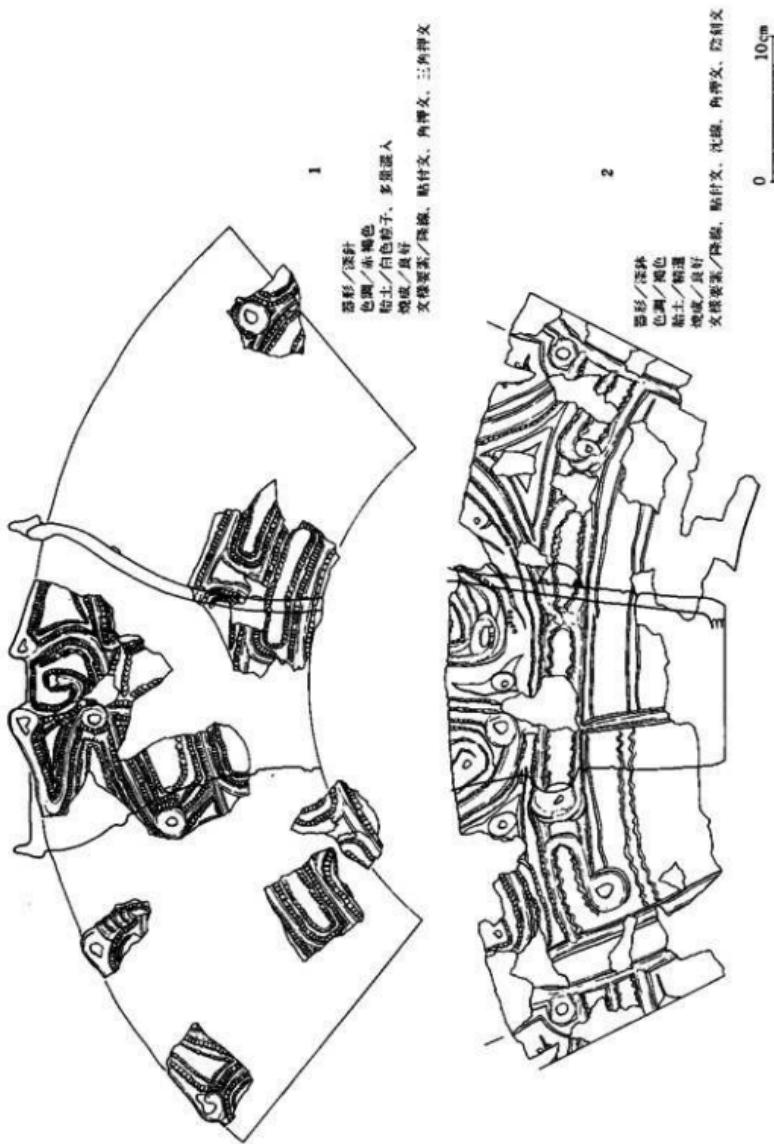
この沈線でなされている。この半截竹管の利用は平出第三類A土器のものに酷似する。しかし、胎土や焼き色は平出第三類A土器とは異なっている。以上の特徴からこの土器は、本地域の粘土を使用し、平出第三類A土器の施文手法を会得している作者が、勝坂式土器の一部特徴を採用して独自に作り上げたものと考えられよう。

時期は中期中葉で、勝坂式土器系統はすべてII式（新道式）の範囲で捉えられる。他の系統もそれに併行する時期の所産と考えられる。

出土石器の内訳は、小形石器が石鏃1点、ピエスニエスキーユ1点、小剣離痕のある剥片・石核3点で、すべて黒曜石である。この他同じく黒曜石の剥片が29点（59.9g）出土している。大

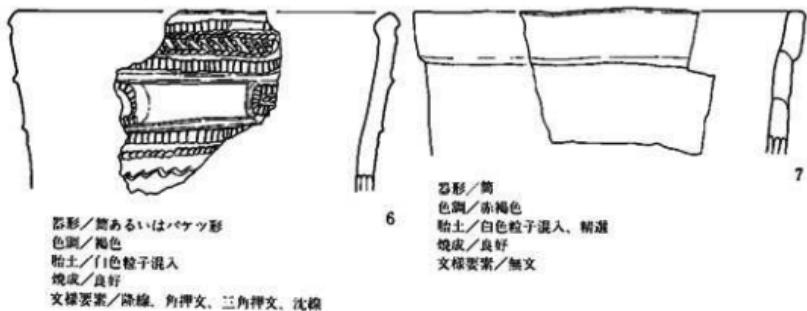
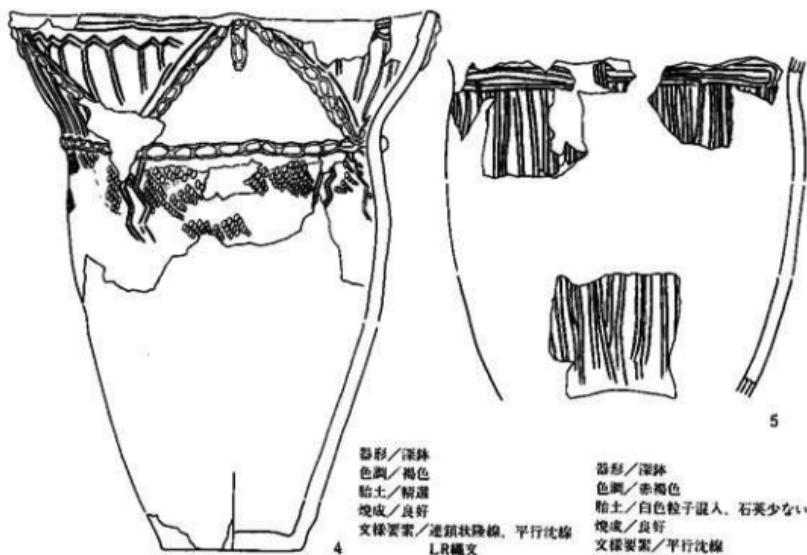
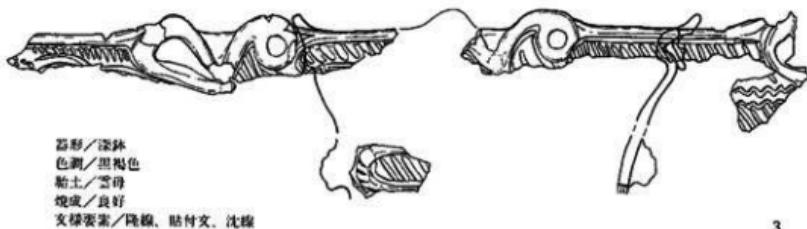


第375図 第1号住居址



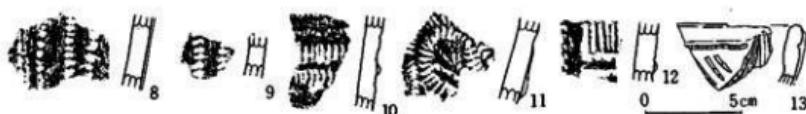
第376图 第1号住居址出土土器(1)

第4節 北原遺跡



0 10cm

第377図 第1号住居址出土土器(2)



第378図 第1号住居址出土土器(3)

土器鉢表

番号	発掘区	種類	部位	文様模様	鉢面調査	外面/内面	胎 土	備 考
8	1H37	直鉢	脇部	陰線/角押文・三角押文	ミガキ	白色粒子・石英		
9				陰線/三角押文	×	・		
10	1H39			陰線、キャタピラ文、角押文	×	白色粒子・黑雲母		
11	1H17			抽象文、キャタピラ文、角押文	×	・		
12	1H31			陰線・北緯、斜突文	×	苔母など		
13	1H90		口縁部	道頭状陰線、角押文	×	白色粒子など		

形石器では、打製石斧1点、直刀式片刃打製石斧(いわゆるトランシェ様石器)1点、横刃型石器1点、凹石1点である。

第2号住居址

遺構 本址は、調査区域の北端、1号住の東側に位置する。南側半分だけを検出し、北側半分は調査区域外であった。プランは南側半分の形状から方形を呈するだろう。南西角に突出部を有し、底面は住居床面よりやや高く、深さ22cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は20cm~24cmある。床面はほぼ平坦でやや柔らかい。ピットは3ヶ所確認でき、P₁は深さ41cm、やや斜めに掘り込まれている。P₂は深さ21cm、P₃は北側半分を欠くが、深さ16cm、住居址内の位置関係から炉に相当するだろう。覆土は2層に分かれ、第1層は炭化物混りの暗かっ色土で、東寄り床面上から炭化材がかたまって出土した。南東隅のほぼ床面上に20cm大の平らな石が出土し、その石の上の覆土から50片あまりの黒曜石片が集中して出土した。

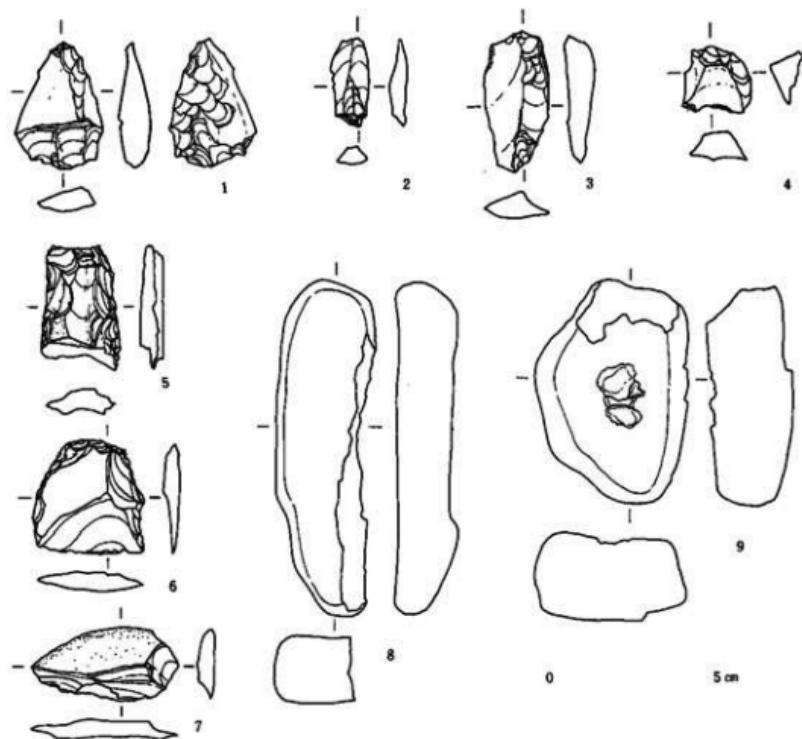
遺物 土器の出土は非常に少なく、勝坂II式(新道式)土器1個体、平出第三類A土器2個体、五領ヶ台式併行の土器が1個体、そのほか前期の土器がわずかに混入している。すべて細片である。

小形石器では、石錐4点、石錐3点、ビエス=エスキュー2点、小剝離痕のある剝片8点で、この他の剝片が、130点(179g)、石核6点(104g)を出土している。すべて黒曜石である。大型石器では、石皿片が1点出土したにとどまる。

第6号住居址

遺構 本址は調査区の南東端に位置し、東斜面に接した住居址である。遺構の一部が開発で搅乱を受け一部検出出来なかった柱穴を除けば、ほぼ円形の完全な住居址である。

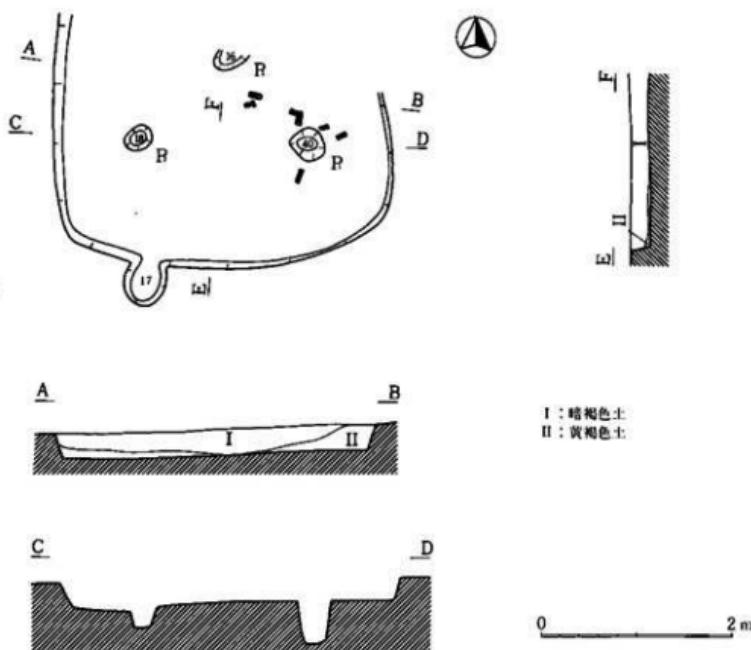
中央部に、埋廬として使われたと思われる平出第三A式の埋設土器により、時期は縄文中期



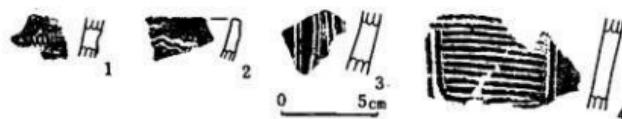
第379図 第1号住居址出土土器

石器観察表

番号	発掘区	種別	石質	長さ (mm)	巾 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	図番号
1	No44	石核	黒曜石	3.2	2.2	0.8	5.0	1
2	No29	ビエス・エスキュー	"	2.2	1.0	0.5	0.9	2
3	No41	小剣頭のある剥片	"	3.6	1.6	0.9	4.1	3
4	No44	"	"	1.6	1.7	0.8	2.1	4
5	No57	打製石斧					34.5	
6	No46	直刃式片刃打製石斧					35.0	
7	No45	直刃型石器					29.4	
8	No3						480	
9		凹石					660	
10		ビエス・エスキュー	黒曜石	1.5	1.2	1.2	1.2	
11	No18	石核	"	3.6	3.1	1.9	18.2	
		剥片	黒曜石	31点			計 59.9 g	
							黒曜石 91.4 g	



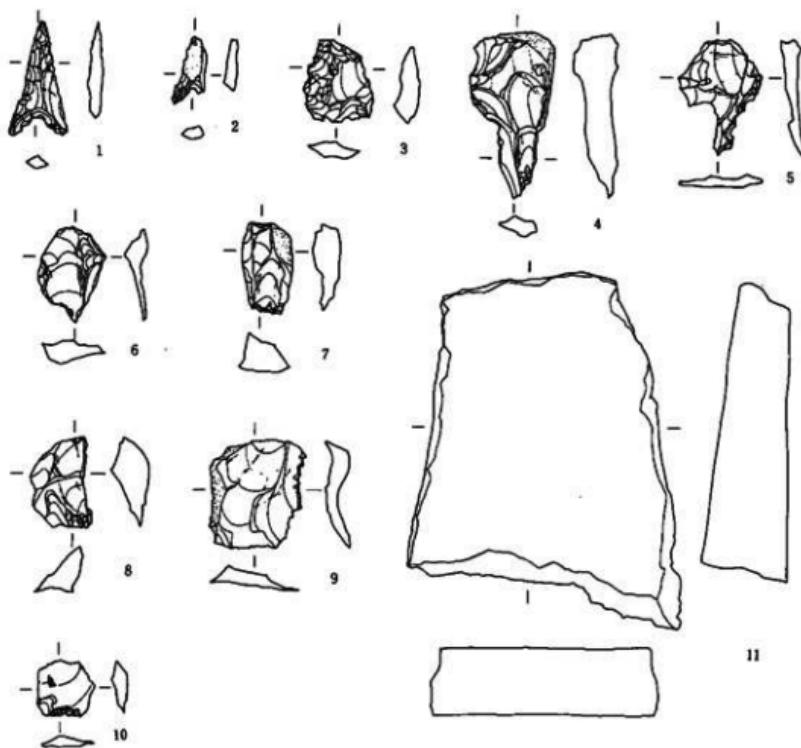
第380図 第2号住居址



第381図 第2号住居址出土土器

土器観察表

番号	発掘区	器形	部位	文様構成要素	表面調査 外面/内面	胎 土	備 考
1	2 H 6	深杯	肩部	角神文	(風化) / ミガキ ミガキ / ミガキ	白色粒子ほか 石英、赤鐵、白色粒子	
2	2 H 5	*	口縁部	平行波状文	*		
3	2 H 5	*	肩部	平行波継	*		
4	2 H	*	*	平行波継 B字文	*	白色粒子ほか 石英ほか	



第382図 第2号住居址出土石器

石器観察表

番号	地層区	種類	石質	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	図版号
1	No. 9	石核	麻理石	2.9 (1.8)	1.6 (0.9)	0.3 0.3	0.9 0.3	1
2	No. 9	"	"	3.0 (3.2)	1.9 2.4	0.6 1.3	2.3 7.7	2
3	No. 2	石核	"	4.2	2.4	1.3	2.1	4
4	No. 3	"	"	3.9	2.3	0.6	2.1	5
5	No. 2	"	"	2.3	1.9 (1.9)	0.6 0.6	1.8 2.5	6
6	No. 2	"	"	2.3	1.3	0.8	2.5	7
7	No. 2	ビエス	"	2.4	1.8	1.0	2.7	8
8	No. 2	"	"	3.0	2.6	0.7	4.0	9
9	No. 2	小剝離痕のある剝片	"	1.6	1.5	0.4	0.8	10
10	"	"	"	"	"	"	171.0 g	11
11	No. 2	石核	"	(1.1)	(1.2)	(0.3)	0.6	
12	No. 2	石核	"	3.1	2.6	1.1	7.7	
13	No. 2	小剝離痕	"	1.8	2.1	0.6	2.5	
14	"	"	"	1.5	1.9	0.5	1.2	
15	"	"	"	1.7	1.5	0.2	0.6	
16	"	"	"	1.2	1.0	0.2	0.3	
17	No. 9	"	"	4.1	4.0	3.2	39.0	
18	No. 2	石核	"	3.2	3.5	2.4	19.9	
19	"	"	"	4.4	3.2	2.0	22.4	
20	"	"	"	3.2	2.6	1.7	11.4	
21	"	"	"	2.9	2.9	1.5	11.3	
22	"	"	"	"	"	"	170.0 g 320.0 g	

第三章 調査 遺跡

前半の住居址と推定される。

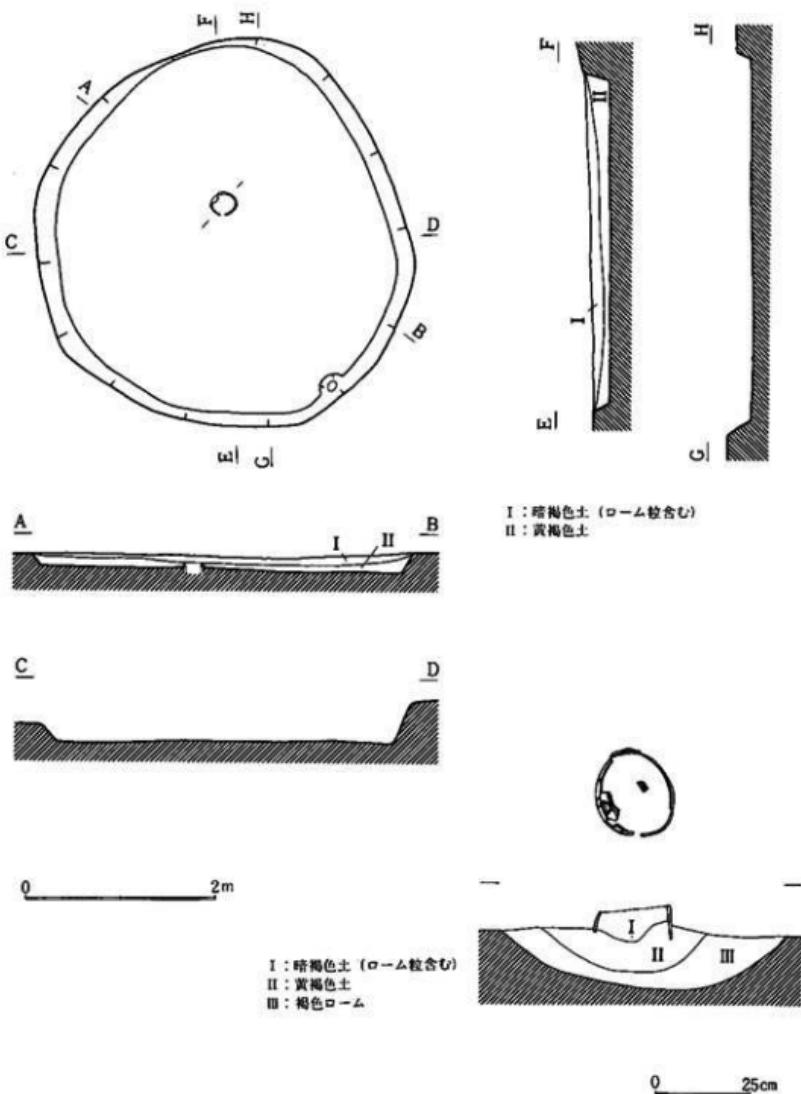
本住居址は、直径4.0mとやや小型の円形プランを呈し、主軸方向は先に述べたように主柱穴の配列状態が確認出来なかったため不明である。壁は北壁で43~37cm、南西壁で12~18cmと傾斜地を利用した住居に見られる斜面削状住居である。いずれの壁も掘り込みは緩斜である。床面はやや堅いローム層で平坦となっている。中央より西に埋設された埋塗炉周辺は、やや盛り上がりを見せている。出土遺物は無文土器数片と、埋塗炉を収集したのみであった。

遺物 平出第三類A土器が1個体あるほか、細片が数点出土しているに過ぎない。時期は第1号住居址に併行かやや早い段階のものであろう。

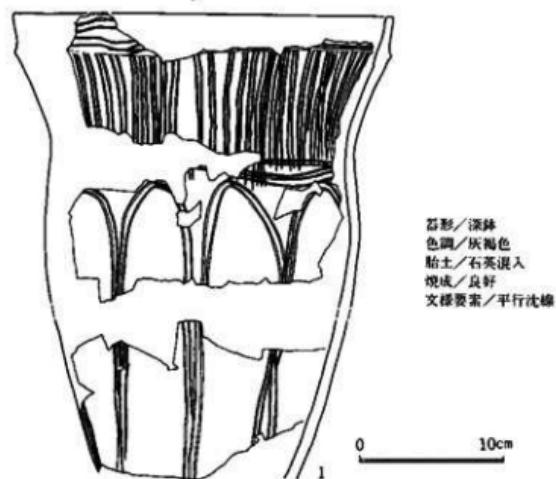
石器では、小刻離痕のある剝片6点（うち黒曜石4）のみで、この他黒曜石の剝片11点（22.7g）が出土している。

第32表 北原遺跡住居址一覧表

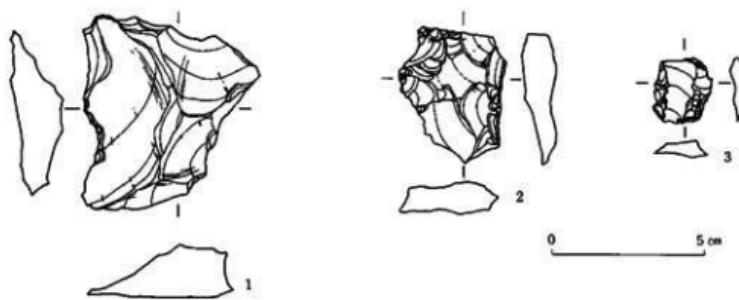
住居	グリッド	時期	プラン	規 模	壁 高	炉構造	位置	周溝	主柱穴	備 考
1	A・B-2	中期新道	円形	4.10×4.00	26, 27, 25, 37	—	—	なし	(4)	北西壁に段差あり
2	C-1	中期新道	方形	3.50×(2.40)	24, 25, 25, —	地床炉	中央	なし	(4)	
3	F-3	前期中越	隅丸方形	4.35×4.35	23, 25, 19, 32	—	—	なし	4	
4	F・G-5	前期中越	隅丸方形	3.95×3.85	15, 10, 6, 15	—	—	なし	4	
5	E・F-8	前期中越	円形	4.15×4.10	44, 22, 39, 23	地床炉	中央	なし	4	大形石皿
6	N-2	中期新道	円形	4.00×3.90	24, 12, 12, 37	埋甕炉	中央	なし	—	
7	Dトレンチ	前期中越	方形	3.65×3.65	10, 6, 6, 8	地床炉	中央	なし	4	



第383図 第6号住居址



第384図 第6号住居址出土土器



第385図 第6号住居址出土石器

石器観察表

番号	発掘区	種別	石質	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	回収号
1	No. 7	小剣形石	細粒砂岩	5.1	4.7	1.4	28.0	1
2	No. 2	"	黒曜石	3.6	2.8	0.9	7.8	2
3	No. 3	"	"	1.6	1.4	0.5	1.3	3
4	No. 1	"	"	4.1	2.3	1.3	9.2	
5	No. 15	"	"	2.4	1.0	0.7	1.2	
6	No. 5	"	"	4.1	3.0	0.4	6.1	
剣片			黒曜石		11点 2点		22.7 14.5	

2) 小竪穴

遺構 今回は調査では全部で44基の小竪穴が検出された。分布はほぼ調査区全域にわたるが密度は一定ではなく、調査区北側に集中するもの、調査区東側に集中するもの、調査区西側に集中するものの3グループに大別することができ、調査区中央域、すなわち第3、4、5号住居址付近には僅かに分布するのみである。

規模は最大220×104cmから最小50×40cmに至るまで多様であるが、概して径50~90cmのグループと径120~160cmの大型グループに大別される。このうち前者には北側のグループのものが多く、逆に後者には東側のグループのものが多く属する傾向がある。また西側のグループには両者が属し多種に富む。

形状は平面形が円形、橢円形、不整円形で、断面形はタライ状、擂鉢状のものであるが、このうち橢円形でタライ状断面のものが最も一般的である。深さは大型グループが50~70cm、小型グループが15~30cmのものが多く、いずれもローム層へ掘り込んでいる。

出土遺物は、とくに西側の拡張トレンチ内に所在する小竪穴にあり、縄文前期、中期の土器片と打製石斧、黒曜石フレークが出土している。

遺物 4号から前期無文土器が3点、8号からは五領ヶ台式に比定されるものが2点と無節縄文が1個体分認められる。11号でも五領ヶ台式土器が1点と前期の無文土器1点。32号からは前期の無文土器2点。33号からは五領ヶ台式土器2個体に前期の無文土器1点。36号には前期無文土器3点、38号では前期の単節の結束第1種縄文1点。40号も同じく単節の結束第1種縄文1点と無文1点。41号にも単節の結束第1種縄文1個体分。42号には前期の無節縄文1点。43号からは前期の無文土器が1点出土した。

出土した石器は図示したものが全てである。比較的まとまった出土状況を示すものに10号小竪穴がある。

3) 竪穴状遺構

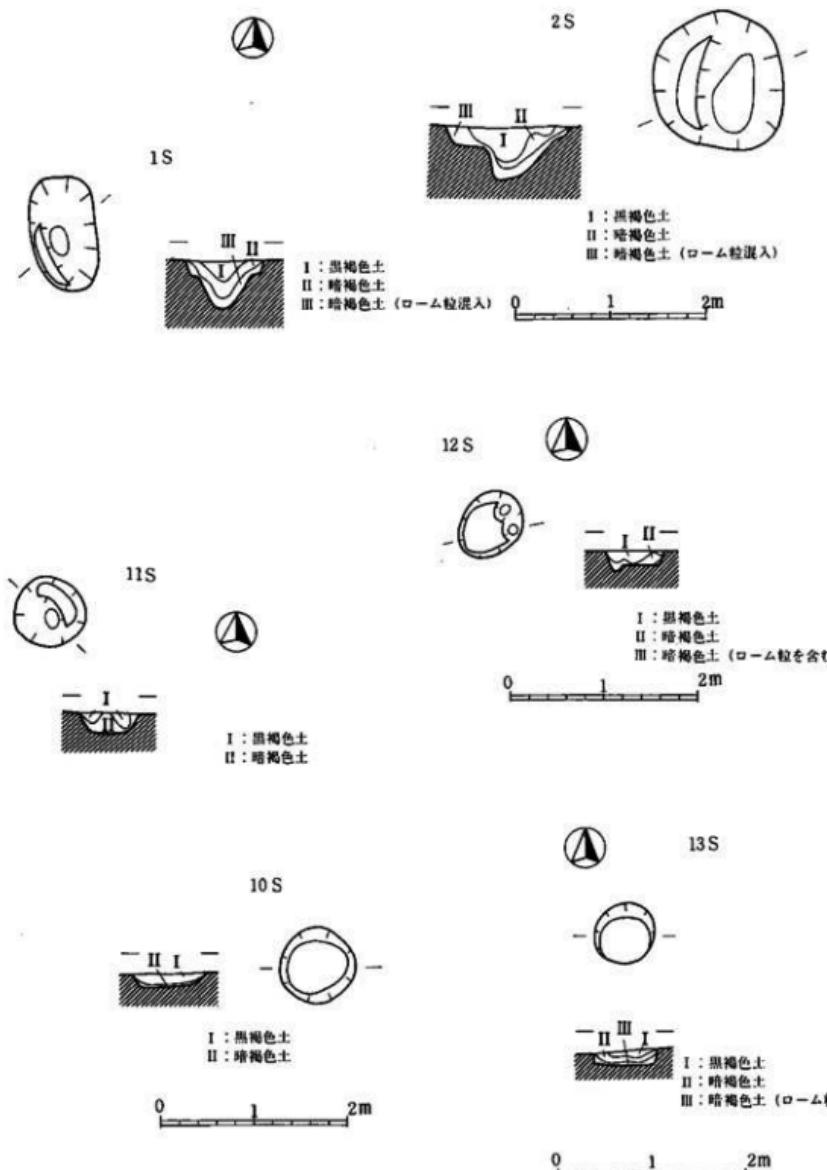
遺構 本遺構は拡張のAトレンチ西端に検出された。検出段階では小竪穴かと思われたが底がよく踏み固められた硬化面をなしていただけ住居址の可能性も考え、南側へ拡張し全容を露呈させた。その結果、壁および底はかなり良好であったが、平面形態が実測図でも明らかなように規則性のない不整形を呈していたため竪穴状遺構としたものである。

壁は良好な掘り込みではほぼ垂直に掘り込まれて、壁高は東壁22cm、西壁20cm、南壁16cm、北壁33cmを測る。

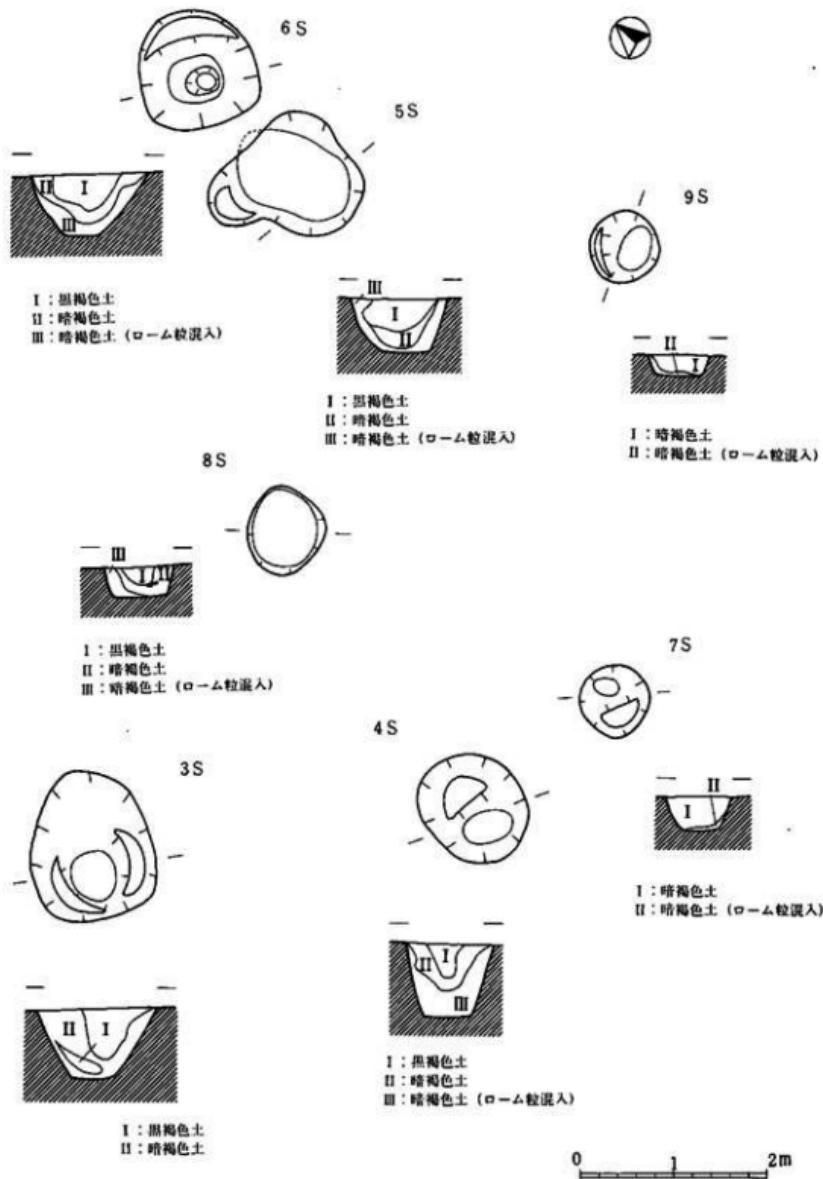
底は水平な平坦地をなし、よく踏み固められている。北側の壁沿いにはピットが2基あり、それぞれ、深さ23cm、16cmを測る。

出土遺物としては無文の縄文土器片と石錐が出土している。

遺物 無文11点、無節縄文2点が出土しており、このうち5と7は同一個体である。これらは全て縄文前期の中越式土器の時期に比定されるものである。なおほかに近世陶器の混入が認めら

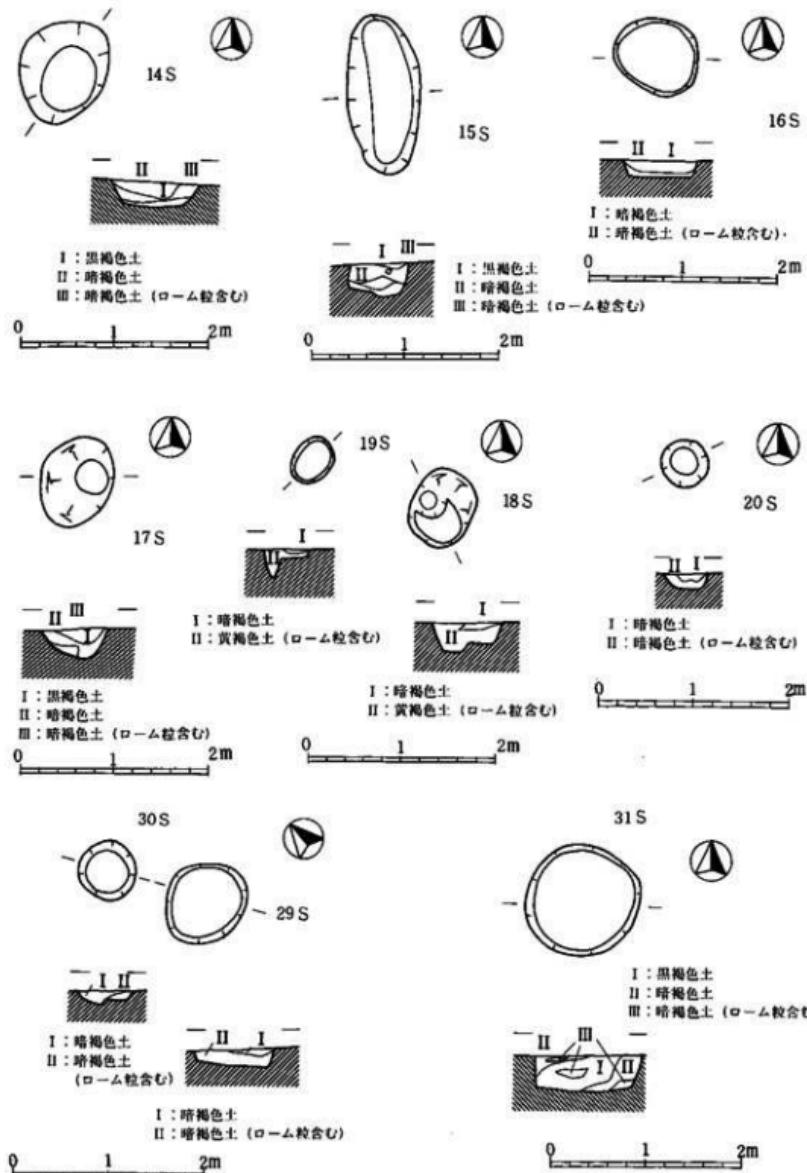


第386図 小堅穴群(1)

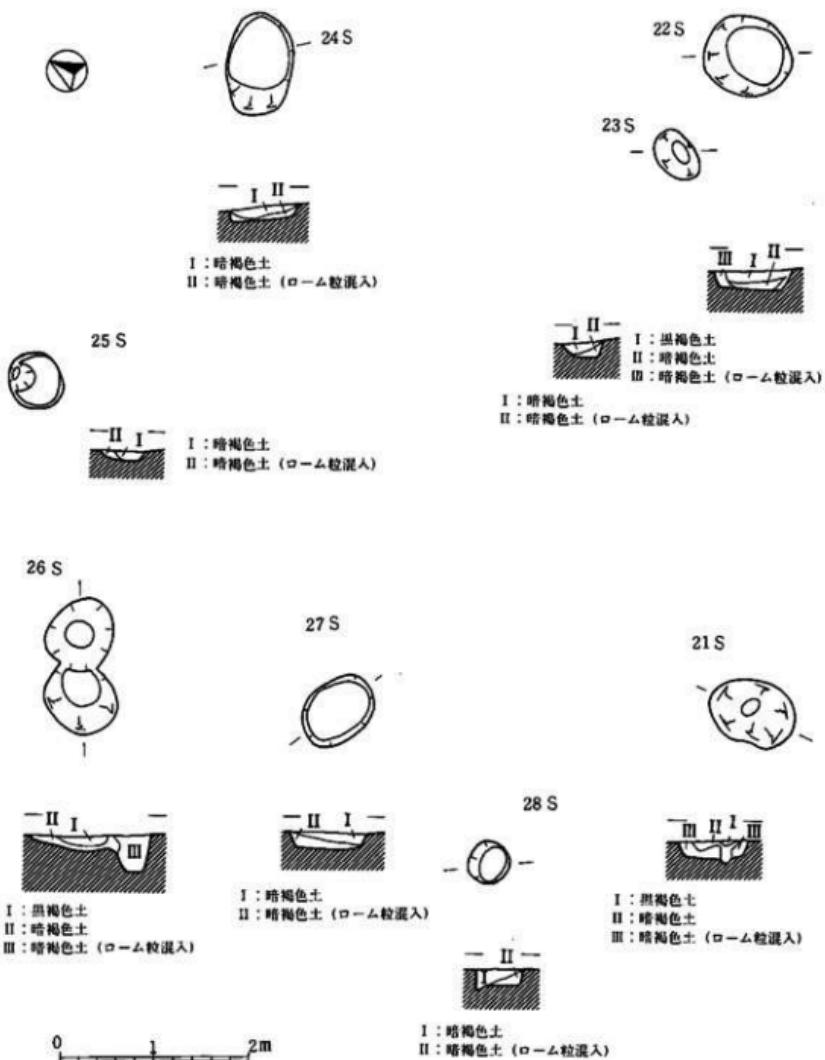


第387図 小堅穴群(2)

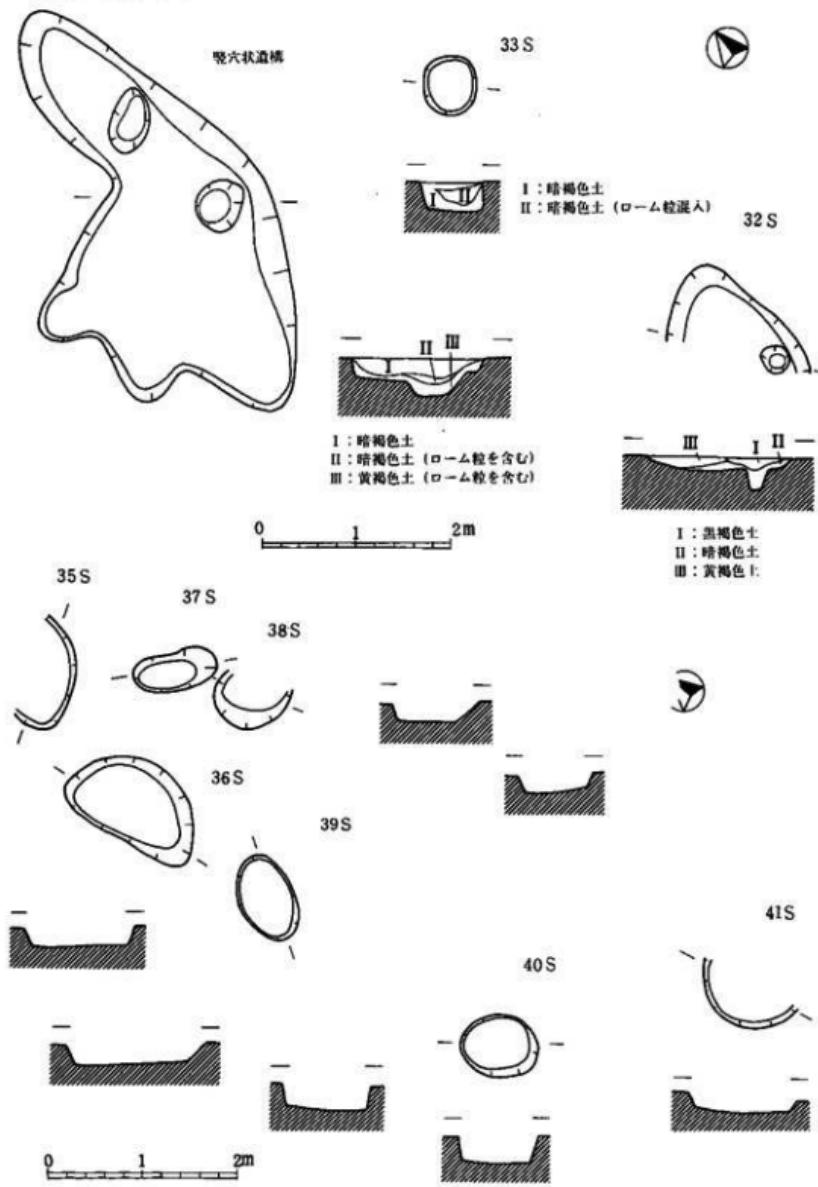
第三章 調査遺跡



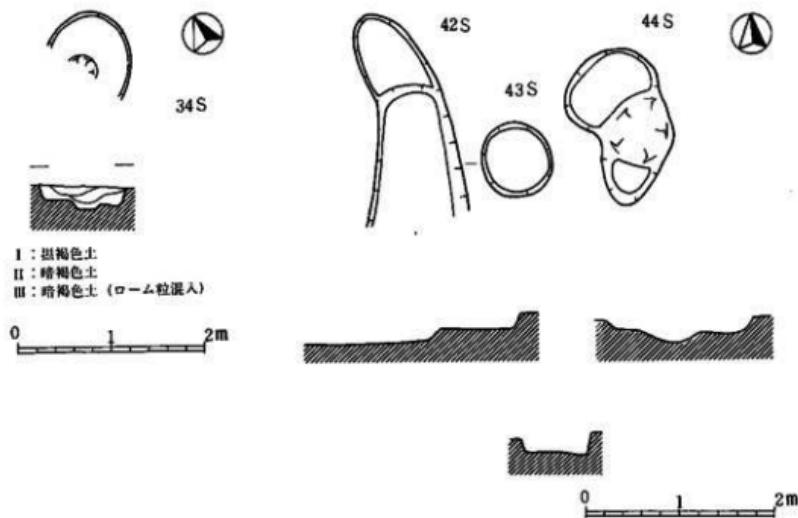
第388図 小型穴群(3)



第389図 小豎六群(4)



第390図 小堅穴群(5)



第391図 小豎穴群(6)

第33表 北原遺跡小豎穴一覧表

No.	確認規模	平面形	主軸方向	断面形	底面規模	底面	深さ	備考
1	122×68	椭円	N-5°-W	擂鉢状	32×20	丸底	50	
2	152×142	"	N-60°-W	"	80×43	二段	54	
3	158×130	"	N-15°-E	"	54×46	平底	74	
4	122×104	"	N-13°-W	タライ状	58×34	"	76	
5	154×142	不整円	E-W	"	130×89	"	55	
6	144×130	椭円	N-13°-W	擂鉢状	22×18	やや丸底	64	
7	77×75	円形	—	タライ状	28×18	平底	34	
8	94×80	椭円	N-15°-E	"	82×68	"	33	
9	76×76	円形	—	"	48×39	"	22	
10	80×78	"	—	"	64×53	"	14	
11	78×72	椭円	N-43°-E	"	46×34	"	13	
12	74×62	"	N-36°-E	"	60×50	平底 (小穴1)	13	
13	64×62	円形	—	"	52×46	平底	17	
14	111×95	椭円	N-28°-E	"	66×54	"	25	
15	164×76	"	N-4°-E	"	148×42	やや丸底	34	
16	90×75	"	N-87°-W	"	81×68	平底	14	
17	98×76	"	N-15°-E	擂鉢状	36×32	丸底	29	
18	79×66	"	N-12°-E	タライ状	56×44	二段	30	

第三章 調査 遺跡

No	確認規模	平面形	主軸方向	断面形	断面規模	底面	深さ	備考
19	50×40	"	N-25°-E	"	44×34	平 圓 (小穴1)	29	
20	50×50	円 形	—	"	29×28	やや丸底	18	
21	90×68	楕 円	N-5°-E	"	44×14	平 圓 (小穴1)	23	
22	90×81	"	N-20°-E	"	65×58	平 圓	23	
23	55×36	"	N-64°-E	鑿 鋸 状	22×12	やや丸底	18	
24	106×69	"	N-76°-E	タライ状	74×62	平 圓	13	
25	56×56	円 形	—	"	15×6	"	10	
26	140×70	楕 円	N-80°-E	"	28×24	二 段	38	
27	84×61	"	N-47°-W	"	79×52	平 圓	15	
28	44×42	"	N-57°-W	"	49×28	"	20	
29	94×82	"	N-53°-E	"	89×71	"	18	
30	62×60	"	—	"	45×44	二 段	14	
31	124×119	楕 円	N-20°-E	"	110×106	平 圓	36	
32	(160)×(104)	"	N-15°-E	"	(140)×(78)	平 圓 (小穴1)	34	縄文無文土器、黒曜石フレーク
33	63×58	"	N-85°-E	"	53×49	平 圓	30	縄文前期土器、打製石斧
34	96×62<	"	—	"	90×57<	二 段	24	
35	(125)×(74)	"	N-3°-E	"	(112)×(64)	平 圓	20	
36	90×38	"	E-W	"	62×31	"	18	縄文無文土器
37	84×67	"	N-82°-E	"	68×(44)	"	17	
38	150×86	"	N-47°-W	"	124×70	"	17	縄文無文土器
39	93×59	"	N-12°-W	"	83×53	"	27	
40	84×65	"	N-72°-W	"	71×56	"	30	縄文無文土器
41	110×(50)	"	—	鑿 鋸 状	96×(44)	やや丸底	19	縄文無文土器
42	(220)×104	"	N-2°-E	タライ状	(214)×84	二 段	30	縄文無文土器
43	77×73	"	N-S	タライ状	64×63	平 圓	18	縄文無文土器
44	158×100	"	N-10°-E	鑿 鋸 状	36×36	二 段	28	

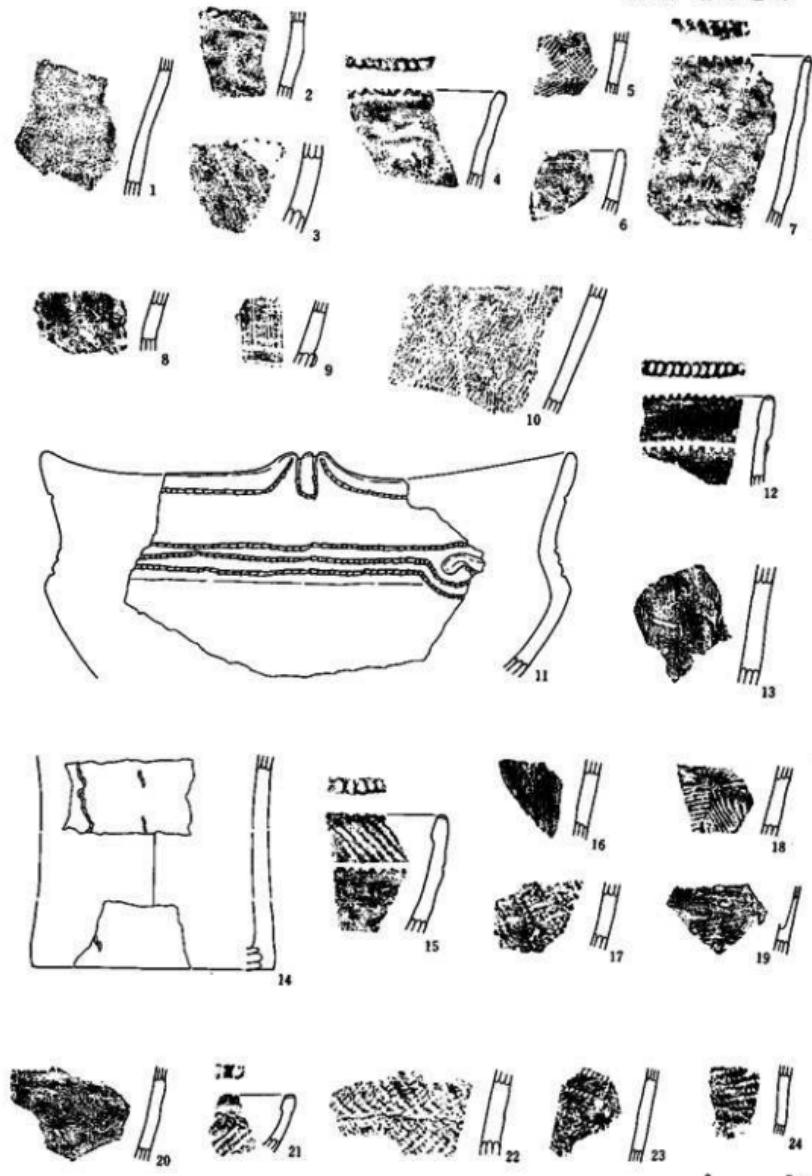
れる。出土した石器は図示したものが全てである。

4) 遺構外遺物

出土土器は数が少なくすべて細片である。前期の無文土器が15点。無節縄文が3点。単節縄文が7点。条線のみのもの1点。また中期の斜行沈線文土器が1点見られる。

石器の出土点数は少なく、図示したものが全てである。

第4節 北原遺跡



第392図 坂穴状遺構・小豎穴・遺構外出土土器

第三章 調査遺跡

堅穴状造構出土土器観察表

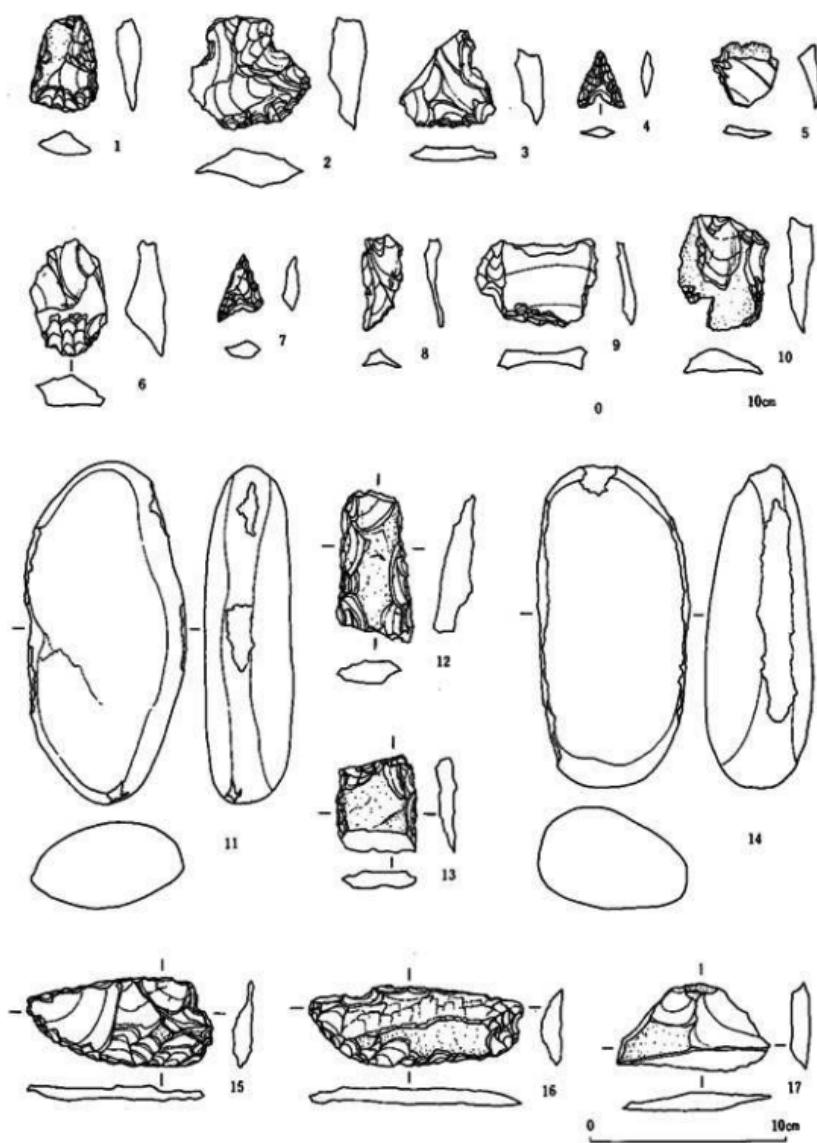
番号	発掘区	器形	部位	文様構成要素	器面調整	外面/内面	胎土	備考
1		深鉢	胴部	な し	風化	白色粒子・石英颗粒		
2		"	"	"	ミガキ	石英・雲母		
3		"	"	"	ミガキ/風化	白色粒子ほか		
4		"	口縁部	口唇部キザミ	ミガキ	"		
5		"	胴部	無筋R纏文	内外とも繩文とミガキ	"		
6		"	口縁部	な し	ハケ抜項痕/指痕痕	"		
7		"	"	口唇部キザミ	ミガキ	石英・雲母	堅穴の石英と混合	

小堅穴出土土器観察表

番号	発掘区	器形	部位	文様構成要素	器面調整	外面/内面	胎土	備考
8	S 4	深鉢	胴部	な し	ミガキ	白色粒子ほか		
9	S 8	"	"	沈線	"	石英ほか		
10	"	"	"	直前段反擦L L	繩文/ミガキ	"		
11	"	"	口縁部	舟押文・貼付文	ミガキ	"		
12	S 11	"	"	沈線・キザミ	"	白色粒子ほか		
13	S 32	"	胴部	な し	"	石英ほか		
14	S 33	"	胴・底部	結束第2種繩文	"	白色粒子・石英		
15	"	"	口縁部	L R 繩文・沈線・キザミ	"	"		
16	S 36	"	胴部	な し	"	白色粒子		
17	S 41	"	"	結束第1種繩文	"	"		
18	S 42	"	"	無筋R纏文	"	"		
19	S 43	"	"	な し	"	"		

造構外出土土器観察表

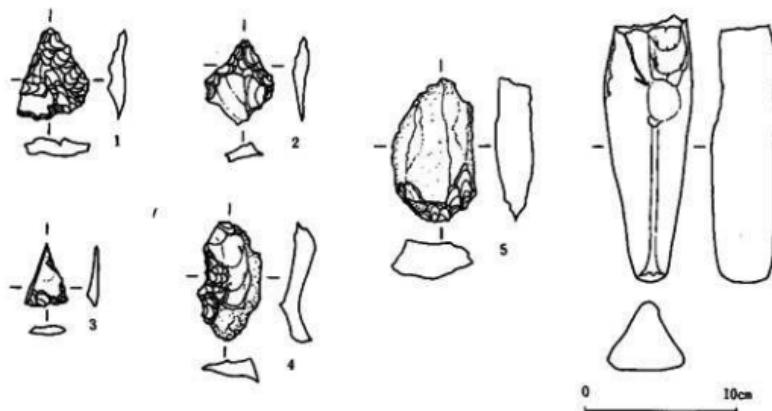
番号	発掘区	器形	部位	文様構成要素	器面調整	外面/内面	胎土	備考
20	Dトレンチ	深鉢	胴	な し	ミガキ	石英多い		
21		鉢	口縁部	沈線・無筋し繩文	繩文/ミガキ	白色粒子ほか		
22		深鉢	胴	結束第1種・半跡繩文	" / "	"		
23		"	"	"	" / "	"		
24		"	"	L R 繩文	" / "	"		



第393図 穴状遺構・小空穴出土石器

石器観察表

番号	発掘区	種別	石質	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	回収号
1	祭1		黒曜石 チャート				2.5	1
2	#1	石 起		2.5	2.5	0.9	8.0	2
3	#2	"		1.4	1.2	0.7	3.3	3
4	#3	石 鋸	黒曜石	1.7	1.7	0.2	0.1	4
5	#5	小剣頭痕	"	1.7	1.7	0.5	1.0	5
6	#7	"	"	3.1	2.0	1.0	5.2	6
7	#10	石 鋸	"	1.7	1.2	0.3	0.4	7
8	#10	小剣頭痕	"	2.5	1.3	0.4	0.8	8
9	#"	"	"	2.4	3.2	0.6	4.2	
10	#10	"	"	3.0	2.2	0.8	5.4	9
11	S5	磨 石					900	
12	S7	打斧石斧					56.2	
13	S7	"					34.4	
14	S10	磨 石					1,015	
15	"	雙刃形石器					50.3	
16	"	"					60.6	
17	"	刮 片					29.1	



第394図 造構外出土石器

石器観察表

番号	発掘区	種別	石質	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	回 収 号
1	B-8 №19	石頭(末)	黒曜石	(2.2)	(2.1)	0.4	1.7	
2	F-3 №7	" (末)	"	2.1	1.7	0.4	1.3	
3	G-4 №11	" -	"	1.6	(1.1)	0.2	0.3	
4	G-7 №17	小剣頭痕	"	3.1	1.8	0.7	3.2	
5	Dトレ5 №21	" ?	"	3.6	2.2	1.1	10.2	
6		磨 石						
7	H-4 №10	小剣頭痕	"	2.0	1.5	0.6	1.7	
		刮片はか	"	25.0			78.6 g	

6 まとめ

北原遺跡は、西に向かって張り出した台地上にある。今回の調査は台地中央から南、東側と浅谷によって画された崖端にかけての2,250m²にわたる。

調査の結果は、縄文前期住居4、中期住居3、小竪穴44が検出され、縄文前期、中期の2時期にわたる集落址であることが判明した。

縄文前期に中越期に属する3、4、5、7号の各住居は、時期的に若干の先後関係はあるものの、浅谷を背にして台地奥部の平坦面に向かって弧状に配列する。各住居は重複することもなく5~10mの空間を保ちつつ構築されている。北側の未調査地区の状況がはっきりしないが、環状ないし馬蹄形状になる可能性もある。住居は隅丸方形を基本形とし、ほぼ床面中央に地床炉を設け、柱穴はしっかりと4本主柱である。住居址周辺には小竪穴が散在し、その全てがこの時期に属するとはいえないが、住居と小竪穴とが一つのセットをなした集落址を考えることができよう。5号址では北壁沿いに固定式石皿が据えられており注目される。阿久遺跡で初めて注意されたこの石器は、中越期に特有のものであるとされており、用途とともに時期的・地理的分布の検討が必要である。中越期は縄文集落発展の一つの画期をなす時期であるといわれ、住居形態の定形化、縄文集落特有の環状ないし馬蹄形状の住居配列から縄文集落の確立、定着期とされる。北原遺跡の様相もその一端を示しているものと考えられる。

松本平での縄文前期集落址の調査例は、山形村唐沢、松本市白神場、内田清心、塩尻市男屋敷、女夫山ノ神、山ノ神、向陽台があるが、大半は前期後半に属するもので、前半期の中越期に属するものは男屋敷2、向陽台4の住居が発見されているにすぎない。このうち向陽台は、400mの距離をもって同一台地上に立地し、住居形態・土器の在り方に類似点が多い。しかし、石器の面では、北原が極めて貧弱であったのに対し、向陽台では多量の石器が出土しており好対照を示している。なぜこうした生産用具の差が生じたのかの検討も必要となつてこよう。

北原遺跡の前期集落の発見は、不明確であった住居形態、集落形態、建物類にまとまった資料を提供することとなり、筑摩山地山麓における前期集落の発展過程を研究する基礎的資料として重視されよう。

縄文中期の住居1、2、6号は、ともに中期初頭に属する。1、2号址は近隣して発見され、6号址は50mの空間を置いて対峙する。1・2号と6号との間には、北に大きく未調査区域が広がっており、この未調査区で住居が発見される可能性は高い。前期中越期の集落とは逆に、浅谷に向かって開く弧状を呈するとも考えられる。遺構間の重複もなく、単期間のうちに廃絶した集落であったといえる。松本平東に位置するこの地域では、各台地上に縄文中期集落が発達し、中期初頭から未葉まで継続するものが多い。そうした中にあって初頭の単期間に幕を閉じた本遺跡はやや特異である。今後、近隣集落との補完関係を通して考えていくべき問題である。

検出された3軒の住居は、円形、方形を呈し、前期末に一たん姿を消した方形が再び出現していく。柱穴は4主柱で、これも前期後半に不明確になっていたものが再びしっかりと定着化してきている。一方、出土石器は石鎌、石錐、不定形石器を主体とし、打製石斧、石皿、凹石の類は

第四章 調査遺跡

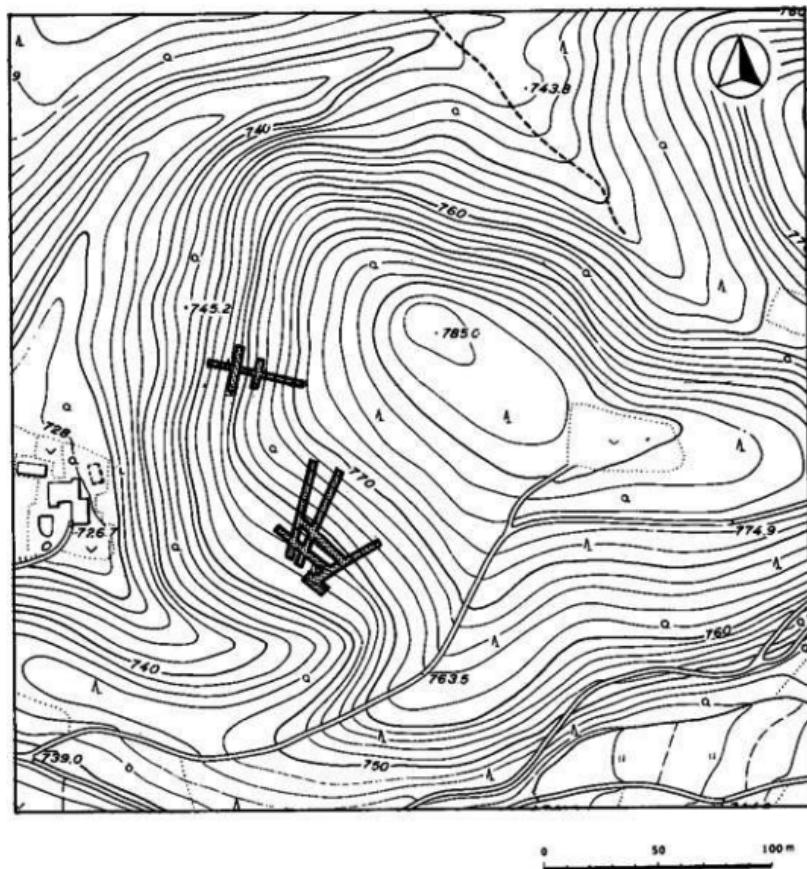
極めて少量の出土にとどまっている。いまだこの地域では中期的石器組成が確立していなかったことを示しているのであろうか。松本平において、中期初頭の集落地調査は例に乏しく、北原での調査はその空白を埋めるものとして重要である。

以上のように、本遺跡は遺構の数こそ少なかつたが、この地域の縄文前、中期文化を解明するために貴重な資料を提供してくれた。

第5節 高山城跡

1 位置と地形

高山城跡は、塩尻市大字長歎字高山に所在する。南北に約300m、東西約400mのやや不整橢円形をした小山が城跡とされており、調査の対象となった。東山山麓から西へ向かって発達した幾筋もの尾根上の1つにあり、北に隣接する形で、北原遺跡、向陽台遺跡の存在する尾根が、ま



第395図 高山城跡調査地区図

第Ⅳ章 調査遺跡

た南側には100mほどの水田地帯と鉢物師屋川を挟んで樋口遺跡、ヨケ遺跡の存在する尾根がそれぞれ横たわっている。

城跡の大部分は山林となっているが、山頂のわずかな平坦部の一部は畑として利用されている。山頂の標高は785mを計り、西で60m、北と南で45m、東で30mの比高差をもつ。東には筑摩山地の山塊が広がり、西では一旦落ち込んだ後、再度立ち上がって小規模な尾根が500mほど続き、先端は「前山公園」として市民の訪れる場となっている。

山は別名「あく山」と呼ばれ、その名の示すごとく石灰岩により形成されている。西側斜面には、かつて石灰岩を掘削した跡が、今にその痕跡を残している。またこの近く、山のふもとでは鉱泉が湧き、「塩沢の湯」として広く利用されていた。山頂からの眺望は西に向かって開き、塩尻市街地からその北の広丘方面へと広がる松本平南半を一望のもとに見わたすことができ、北アルプスの峻峰と相まってみごとな景観を呈している。しかしながら他の3方向に対しては眺望に恵まれず、特に東および南方向は山麓と尾根に視界を遮られ、まったく遠望の不可能な場所となっている。

高山城跡付近は、塩尻バイパスと中央道長野線が最も接近する場所の1つであり、塩尻バイパス用地の東にわずか50mほどを中央道長野線が建設されている。結果として、高山城跡の西側山腹を塩尻バイパス、東側山腹を中央道長野線が深い掘り割りの道路として開通することとなった。国道20号線から分岐し、北進して来た塩尻バイパスは、高山城跡通過後西へ向きを変え、広丘高出の国道20号線終点へと向かう。

2 過去の調査経過

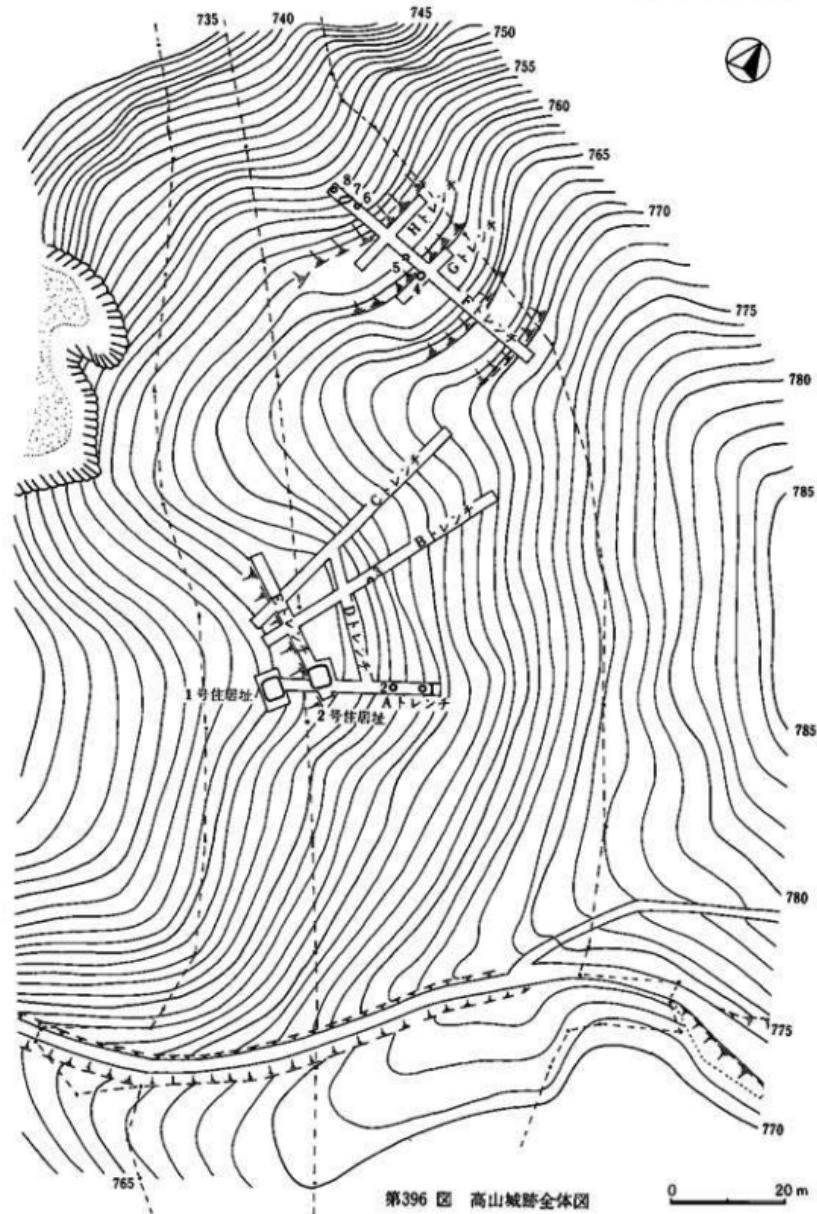
高山城跡の城跡としての過去における記載は、「塩尻地史」(1924)中にみられる。城跡形態としての記述は以下のとおりである。

「長戸塩沢鑓泉浴舎のすぐ後の山嶺にあり 城は西向し大手らしき所に数段の土階あり、又左隅に隙地を説く 其より北側は濠水堀なり 西南方面を掘鑿せる崖痕あり 基処をおぬけ屋敷といふ 近年石灰岩を掘鑿す 城後の尾上に二三丁穴を隔てて三棟の大なる塹壕あり 城後に櫻清水あり 但し山嶺に人工の痕を見ず 盖し臨時の一一小砦ならん 或いは前期甲軍防禦の為めにて高須城の出丸ならんか」

また、歴史的叙述には次のような下りがみられる。

「……天文十四年以後式・笠岡家（注一武田・小笠原両家）の戦線の境界は實に塩尻峠なり 武田方多田三八は東麓四ツ屋附近に駐屯し以て其隙を覗ふ 若し比天險にして頗れんか 直ちに小笠原氏の命脈に關す 是を以て其防衛亦嚴密ならざるべらかず 盖し西條城は寶徳年間築造以来伊那、諏訪両地方防禦の要鎮にして當時小笠原頼貞之を守り各支城を統ぶと雖も其位置西偏し塩尻連嶺を守るに足らず 益に於てか老將犬飼半左衛門は東山附近に屯營し 更に中腹に高山城を築き 五百渡 合圓の峯及焼基に烽火台を構へ成兵を配置し兼て此等の各營を連絡し 且つ軍需兵站共用の為に中央棧敷に高須城を築き以て首尾相策應し此天險を拒守せり」

第5節 高山城跡



第396図 高山城跡全体図

0 20m

第三章 調査遺跡

しかしながら、明治初期に各町村によってまとめられた「長野県町村誌」(1936年刊行)、あるいは享保7年(1722)から松本藩により編纂された「信府統記」などに、これに類する記載は皆無であり、遡及させることはできなかった。

発掘による調査は、中央道長野線が高山城跡東側に計画されるに伴い、長野県埋蔵文化センターによって昭和59年9月中旬から20日余りかけて、4,180m²が行なわれた。その成果について、「長野県埋蔵文化財センター 年報1」(1985)に概要が示されているのでここに抄録したい。

遺構は、時期、性格ともに不明の土壙2基が検出された。遺物は、縄文早中期の土器片約30点、石鎌5点、打製石斧、乳棒状摩製石斧、石匙、石核各1点、黒曜石片数十点、及び平安期の須恵器片2点が出土した。

城跡に関する遺構、遺物は皆無であった。

3 調査概要

調査は、城跡に伴う遺構確認を目的として、段郭の可能性を指摘された西側斜面の4段小平坦部および、南西斜面の比較的大規模な平坦部を中心に2m幅トレンチを延250mにわたり設定して行なった。

トレンチを掘り下げた結果、平坦部については、一定に傾斜する地山斜面に人工的な盛土がなされたものとして明確に把えることができた。しかしながら、空濠、土塁等の施設は検出されず、また該期の遺物も得ることはできなかった。平坦部分についても、後述するような諸条件の中で山城に関連する構築物として位置付けることはできなかった。

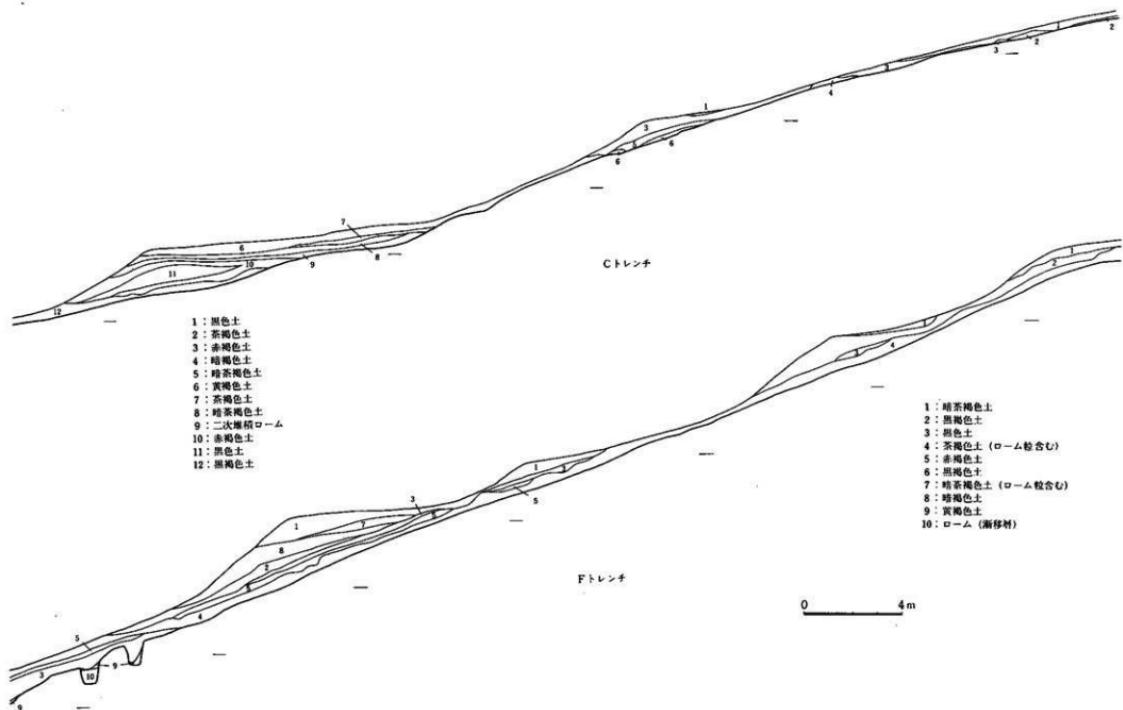
調査を進める中で、他時期の遺跡の存在が確認され、予想外の成果を得ることとなった。遺構は、平安時代の住居址2軒と小竪穴8基が検出された。住居址2軒は光ヶ丘に比定されるもので、該期山櫻み集落の一例として位置付けられる。2軒とも焼失家屋であったが、概して遺物の出土量は少なかった。遺物は、土師器の壺、甕、小型甕、鉢、須恵器の器台、灰釉陶器の椀、鐵鎌等が出土した。小竪穴8基はいずれも深い掘り込みで、内2基については底部中央に直径10cm程の小穴が確認された。小竪穴からの出土遺物はなく時期決定には至らなかったものの、形状的に縄文時代早期の落し穴とされるものと類似しており注目された。

このほか、遺構外出土遺物として、縄文中期後半の土器、石鎌、横刃形石器、小玉を穿った玉が出土した。流れ込みと考えられるため、山頂平坦部になんらかの遺構が存在する可能性が伺えた。

4 発掘区の設定

塩尻バイパス道路用地は、高山城跡とされる小山の南斜面中腹の山林を南北に計画された。このため、主郭とされる山頂平坦部を東に残して南斜面のほとんど全域と、これに続く東側および西側斜面の一部が調査の対象となった。

調査に先立って行なわれた現地踏査において、南向きに1段と西向きに4段の小平坦部が確認



第397 図 高山城跡トレンチ内土層断面図

された。これについて奈川小学校教諭山田瑞穂氏により、段郭もしくは帯郭の可能性を示唆させたため、この部分を中心に調査を実施することとした。

調査は、確認されたテラス状平坦部に2m幅トレンチを設定して行なった。南向き斜面にみられた1段のテラスは比較的大きなものであったことから、傾斜に沿う形で3本のトレンチを設定し、東側からA～Cとした。さらにテラス平坦部上の遺構確認のため、テラス付け根部分と先端部分にそれぞれ東西トレンチ1本を設定し、北側からD、Eとした。各トレンチの長さは、A—31m、B—47.5m、C—48.5m、D—24m、E—28mとなった。また、西向きに確認された4段の小平坦部については、これを切る形で斜面沿いに東西トレンチ1本を設定しFトレンチとした。平坦部については、下段ほど規模が大きくなることから、下の二段について横にトレンチを設定し、上からG、Hとした。トレンチの長さは、F—44m、G—12m、H—16mである。また、調査を進める中で、Aトレンチ下部において平安期の住居址2軒が検出されたため、住居の規模が確認できる範囲で拡張を行なった。

発掘調査総面積は、520m²である。

5 土層

調査地区内は全体図から判断されるように地形の勾配が著しいため表土内に複雑な様相を示している。遺構、遺物の所在とともにこの複雑な地層形成を確認するために調査に当って斜面方向の複雑なトレンチを設定したが、その中でも最も土層の発達が顕著なCトレンチおよびFトレンチの層序について第397図を参照しながら考えてみたい。

両トレンチに共通する現象として斜面が単調な勾配を示さず、侵食による薄層部と再堆積による厚層部の繰り返しがみられる。

Cトレンチではこのような段地形が2ヶ所見られるが、このうち上方の小規模なものについては単に表土である第3層赤褐色土の押し出しによるものであるが、これに対して下端の段地形については第10層赤褐色土、第11層黒色土の堆積構造から容易に判読されるように大規模で、しかもおそらく短時間に形成された崩積によるものであり、このことは直上に乗る第9層の二次堆積ロームの存在からも裏づけられる。Aトレンチ下端で検出された平安時代の2軒の住居址は第12層を覆土しているところから、この事件が極最近発生したことが推察される。

一方、Fトレンチでも顕著な段地形が4ヶ所見られる。下方のものほど大規模な段になることはCトレンチと同傾向にあるが、土層において大きく異なる点に注目したい。すなわち段の形成に関与する土層が最下段こそ第1層と第8層から形成されてはいるが、仮にこの第8層を下位からの一連の自然堆積層とすれば總て表面の一層（2段目を除き第1層が該当する）により段形成がなされており、これは明らかにCトレンチ下端の段地形とは形成も異なる。急勾配を考慮すると自然の堆積過程も一概に単調なものとはみなせないが、逆に山城の段郭という観点から考えるとこれは明らかに人為的な段形成の裏付けにもなることである。

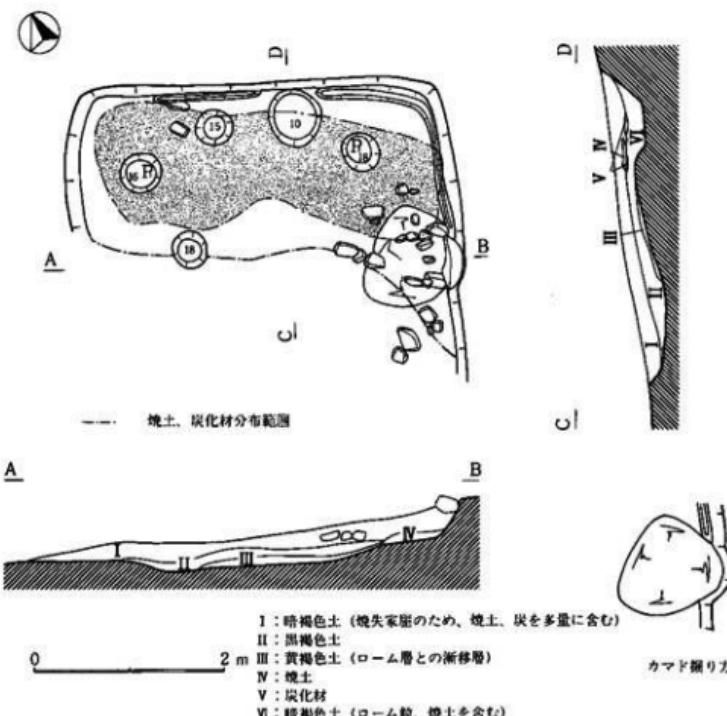
6 遺構・遺物

1) 住居址

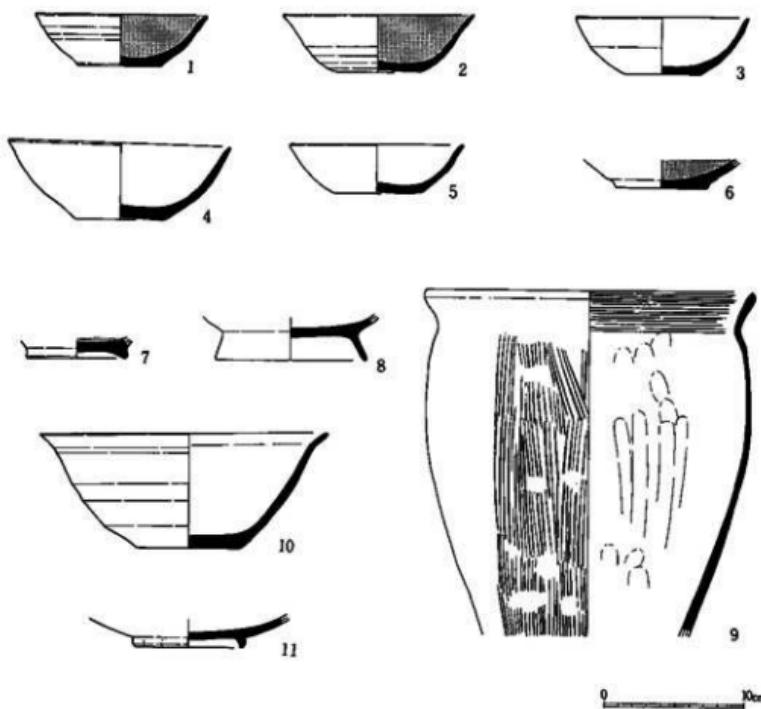
第1号住居址

遺構 本址はAトレンチの最南端にあり、最も低所に位置する。付近は西向きの小テラス状地形になっており、約22°の急勾配で降りてきた斜面はここで一転して6°緩傾斜となる。斜面上方からこの小テラスの変わり目までに設定されたAトレンチをローム面まで掘り下げたところ、小テラスにかかる最下端において予想外の住居址らしき黒色土の落ち込みを検出する。この落ち込みの性格を明らかにするために付近を拡張し、検出面を精査したところ、南側を斜面によって流失する隅丸方形プランが確認され第1号住居址とする。中央にセクションベルトを残し落ち込みを掘り下げたところ、おびただしい量の焼土と炭の堆積があり、遺物の散在がみられた。

南半部を斜面により流失しているため住居址の全容を把握することはできないが、残存する壁より東西4.02mを測る隅丸方形プランを呈すると推察される。



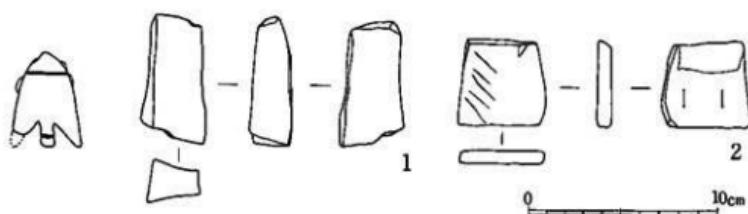
第398 図 第1号住居址



第399 図 第1号住居址出土土器

土 器 観 察 表

No.	種別	器形	寸 法 (cm)			色 調		成 形・調 整 の 特 徴	備 紙
			口径	底径	高さ	外 色	内 色		
1	土器	平	12.2	5.8	6.1	明褐色	黒	ロクロナデ、体部内面ミガキ、圓軸系切り	黑色處理
2	"	"	13.4	5.8	4.0	茶褐色	暗褐色	*	* (不完全)
3	"	"	12.2	5.6	4.0	*	茶褐色	*	
4	"	"	15.5	5.5	6.4	*	暗褐色	*	
5	"	"	12.2	5.8	3.4	明褐色	明褐色	*	
6	"	"		6.4		*	灰	*	
7	"	"		6.6		*	*	*	
8	"	"		10.4		茶褐色	明褐色	*	
9	"	甕	23.0			赤褐色	赤褐色	体部外表面ケメ、内面カキメ、ヘラナデ、削痕	カマド内灰土
10	"	平	20.2	7.2	8.2	茶褐色	茶褐色	ロクロナデ、圓軸系切り	*
11	灰陶	埴		7.4		灰白	灰白	*	圓軸ヘラケズリ*



第400図 第1号住居址出土鐵鎌・砥石

壁はロームをほぼ垂直に掘り込んでおり、壁高は東壁40cm、西壁12cm、北壁38cmを測る。

床は北半部のみ良好に残されており、よく踏み固められた堅緻な床面である。同溝は北壁から東壁のカマド付近までは壁下に沿って連続しており、幅10cm、深さ3~5cmを測る。ピットはP₁(16cm)、P₂(18cm)が主柱穴と思われる。

カマドは東壁中央に構築された石組み粘土カマドで、間口34cm、奥行40cmを測る。袖石は上部のものが崩壊し周囲に散在しているが、下部は遺存状態がよく、また掘り込みの焼土も厚く堆積していた。

上述のように本址の覆土および床面には多量の焼土・炭が堆積しており、また遺物も多量にそれらの中に混入していたことから、本址が焼失した家屋であることは容易に推察されよう。

遺物 本址より土師器の壺、甕、鉢、須恵器の甕、灰釉の塊が検出された。壺は8点検出され、ロクロ成形後、(8)を除く7点は内面にミガキが施されており、(3)、(4)、(5)以外は、やや不十分なものもあるが黒色処理されている。底部には回転糸切り痕が認められる。(8)は底径10.4cmを計る大型の高台付の壺である。大きさの割に薄手のつくりをしている。甕(9)はカマド内およびその周辺から破片が検出された。胴部外面はハケメ、口縁部内面はロクロ回転を用いたカキメによって調整されている。胴部内面は指圧、縱方向のヘラナデによって成形されている。鉢(10)もカマド内およびその周辺から検出され、ほぼ復元可能であった。ロクロ成形され、底部には回転糸切り痕が認められる。灰釉の塊(11)はロクロ成形され、底部は回転ヘラケズリによる。須恵器の甕は胴部の破片のみで図示できなかった。

鉄器については、鐵鎌が1点出土している。

石器については、砥石が2点出土している。(1)は細粒砂岩製で重さ64gを計る。使用痕が3面に認められる。(2)は粘板岩製で重さ38gを計る。使用痕が両面に認められる。

出土遺物の様相から、本址の所属時期は光ヶ丘に比定されよう。

第2号住居址

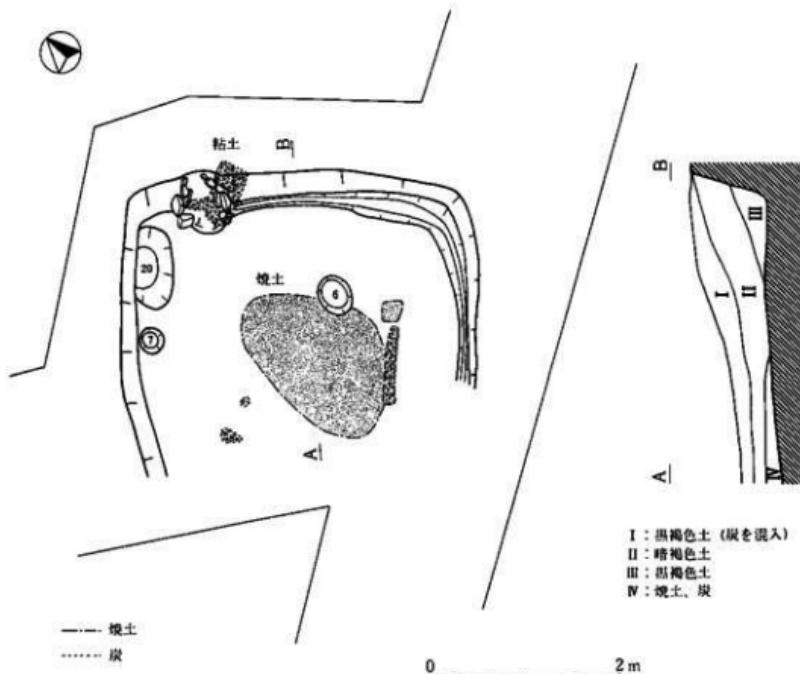
造構 本址はちょうどAトレンチとEトレンチの交点に位置し、西向きの急斜面上に平坦地を設けて構築している。このため西側に隣接する第1号住居址とは距離にして僅か6mの隔たりで

あるが、比高差では3.5mの高い位置にある。トレーナーを掘り下げていったところ多量の焼土と大形の炭化材が數本、ローム面直上より出土し住居址の存在を伺わせた。焼土、炭化材を取り除きはばローム面で精査したところ、第1号住居址と同じく南半部を斜面により流失してはいるが隅丸方形の平面プランを呈する黒色土の落ち込みを確認し第2号住居址とした。落ち込みの回り具合からトレーナー北西隅をやや拡張し、住居の全容を露呈させた。

プランは第1号住居址よりやや残存部が多く、確認できる規模は東西3.76m、南北2.74m以上とやや後者より小規模である。

壁はローム層中にはば垂直に掘り込まれており、壁高は東壁、西壁が41cm、北壁が27cmを測る。床面は平坦でよく踏み固められており、中央付近には焼土・炭が厚く堆積している。同溝は北壁および東壁下に回っており、幅10~30cm、深さ2~4cmと変化に富む。ピットは3基みられるが、いずれも主柱穴とは考えられないものである。

カマドは北壁西寄りに壁をやや抉って構築している石組み粘土カマドで遺存状態は良好である。間口30cm、奥行60cmで掘り込みは良く焼けており、また袖石部は厚さ10cmの粘土に覆われていた。

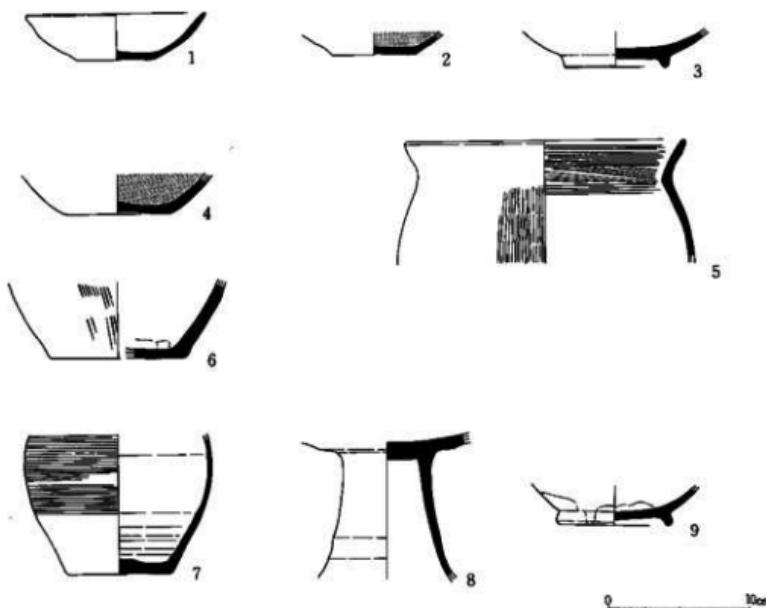


第401図 第2号住居址

第Ⅳ章 調査遺跡

遺物 本址より土師器の壺、甕、小型甕、須恵器の器台、灰軸の塊が検出された。壺は4点検出され、ロクロ成形後、内面にはミガキが施されている。また、(1)以外は黒色処理されている。底部にはいずれも回転糸切り痕が認められる。甕(5)はカマド付近の炭化材にまじって出土した。胴部外面はハケメ、口縁部内面はカキメによって調整されている。小型甕(7)もカマド付近から出土した。胴部外面はカキメ調整されており、内面にはロクロナデ痕が認められる。底部は回転糸切りによる。須恵器の器台(8)はロクロ成形されている。全体的に大変摩耗が激しい。灰軸の塊(9)はロクロ成形され、底部は回転ヘラケズリされている。

出土遺物の様相より、本址の所属時期は光ヶ丘に比定されよう。



第402図 第2号住居址出土土器

土器類表

No.	種別	特徴	寸法(cm)		色調		成形・調整の特徴	備考
			口径	底径	高さ	外腹		
1	土器	壺	12.6	5.2	3.2	暗褐色	暗褐色	ロクロナデ、体部内面ミガキ、回転糸切り
2	*	*		5.8		明褐色	黒	*
3	*	*		7.0		暗褐色	*	*
4	*	*		7.0		浅褐色	*	*
5	*	甕	19.4			暗褐色	体部外面ハケメ、口縁内面カキメ	黒色処理、摩耗激しい
6	*	*		9.2		*	基底	*
7	*	小型甕		7.2		カキメ	カキメ、ロクロナデ	(不完全)
8	須恵	器台				基底	ロクロナデ	*
9	灰軸	塊		7.4		灰白色	灰白色	カマド内出土
								摩耗激しい

第5節 高山城跡

第34表 高山城跡住居址一覧表

住居	トレンチ	平面形	方 向	規 模	壁 高	床 面	カマド構造	位 置	周 溝	備 考
1	A	隅丸方形	N-58°-W	402×(320)	40・12・--38	南半部流失	石組	東壁中央	一部	焼失家屋
2	A	隅丸方形	N-52°-W	376×(274)	41・41・--27	南半部流失	石組	北壁西寄	(半周)	焼失家屋

2) 小豎穴

今回の調査で小豎穴は全部で8基検出された。分布としてはAトレンチに2基、Bトレンチに1基、Fトレンチに5基で、いずれも急勾配の斜面上にある。

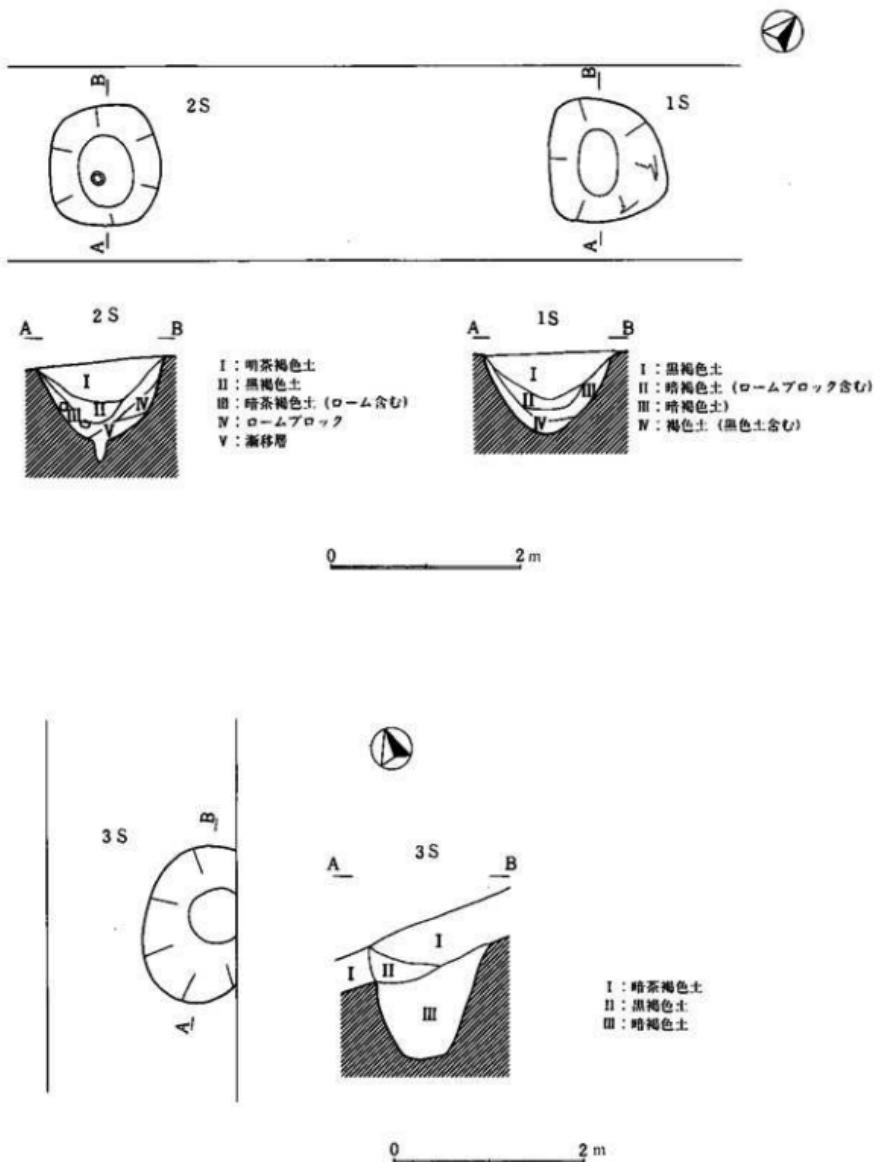
形態としては全てに共通的な次の特徴がある。平面形は円形もしくはそれに近い橢円形を呈する。断面形は擂鉢状、コップ状の2形態にわけることができるが、これは底面形態によるものであり、いずれも「深い穴」という印象では共通している。半堀の第8号では確認できなかつたが、他の7基は全てかなりの深さを有し64cmから最高100cmを計る。また第2号、第5号では底の中心部に、もう一段小穴が穿たれている形態が明瞭に表われている。

このような形態的な特徴、また立地の特異性から考えると、今回の調査で確認された小豎穴は全て「縄文早期の落とし穴」に類似したものであり、可能性は大いに伺える。

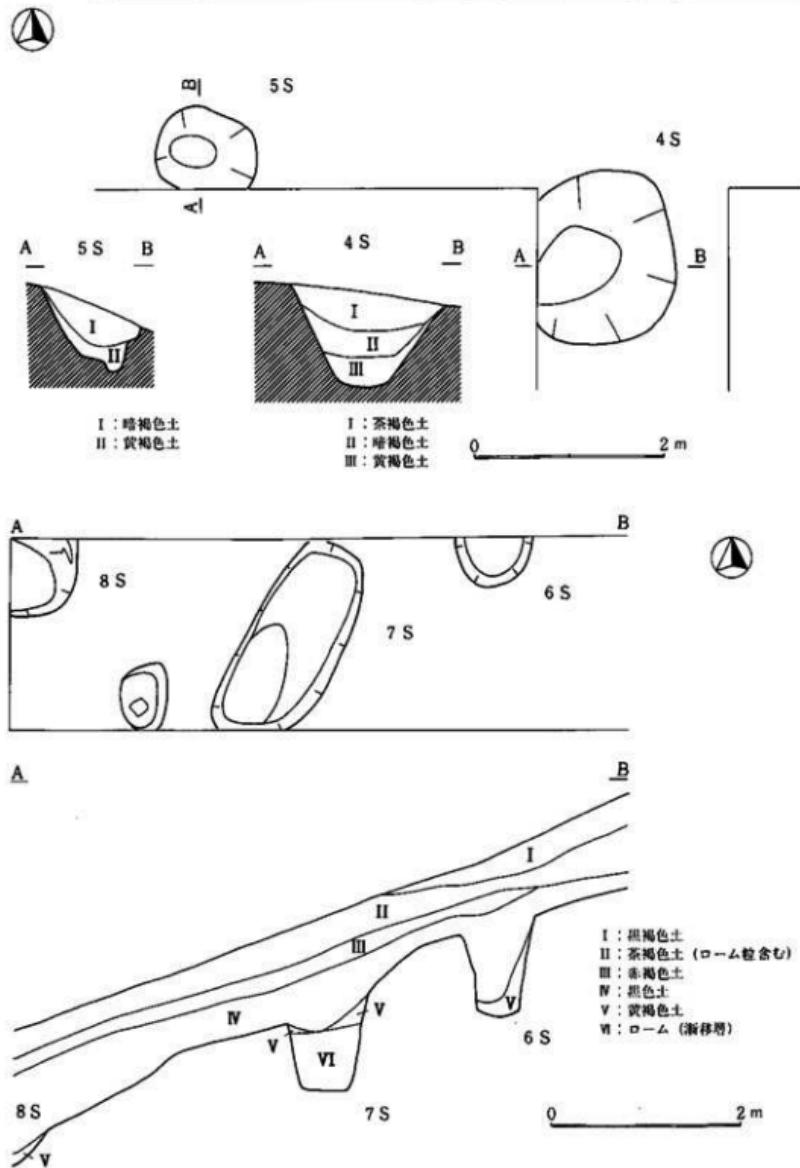
なお覆土内から時代や性格を伺い知るものは何も出土しなかつた。

第35表 高山城跡小豎穴一覧表

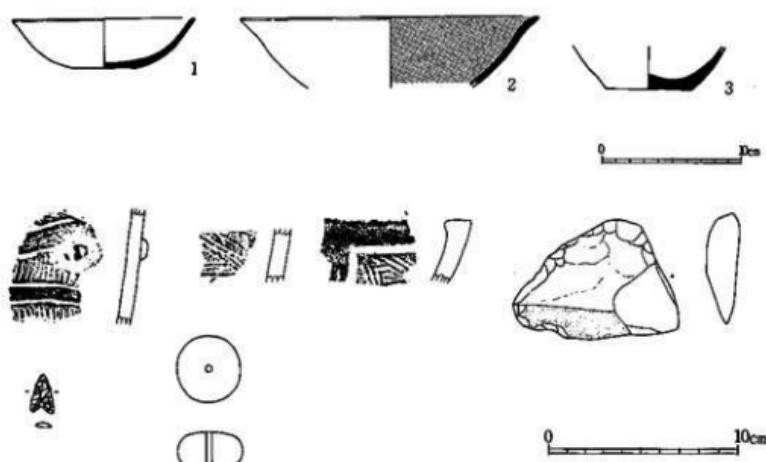
No.	確認規模	平面形	主軸方向	断面形	底面規模	底 面	深 さ	備 考
1	125×124cm	不整円形	N-30°-W	擂鉢状	70×40cm	丸底	82cm	
2	123×114	円形	N-22°-W	"	76×56	(丸底)	80	
3	165×120	橢円	N-35°-E	コップ状	58×58	平坦	100	
4	176×160	円形	N-30°-E	擂鉢状	105×70	やや丸底	97	
5	110×90	橢円	N-70°-W	"	52×32	(丸底)	64	
6	82×(50)	"	—	コップ状	62×(42)	平坦	95	
7	230×100	"	N-30°-E	"	204×82	"	80	
8	(82)×(72)	—	—	擂鉢状	(75)×(45)	丸底	15	



第403図 小豈穴群(1)



第404 図 小塹穴群(2)



第405図 遺構外遺物

土器観察表

No.	種別	器形	寸法(cm)			色調		成形・調査の特徴	備考
			口径	底径	高さ	外面	内面		
1	土器	杯	12.8	4.2	3.4	黒褐	茶褐	ロクロナギ、体部内面ミガキ、回転糸切り	Aトレ出土
2	"	"	21.0			茶褐	黒	" "	Bトレ出土、黑色処理
3	"	小切縫		6.2		暗褐	明褐	" "、回転糸切り	Aトレ出土

3) 遺構外遺物

平安時代 遺構外の遺物は大変少なく土師器の杯3点が図示できたのみである。(1)、(3)は住居址が検出されたAトレ出土である。(1)は内面にミガキが施されている。底部はいずれも回転糸切りによる。(2)はBトレより出土した。口径21.0cmを計る大型のものである。内面は黑色処理されている。

7 成果と課題

1) 平安時代の住居址について

中世の城跡であることの立証を主目的とした今回の発掘調査において、当初、予想もされなかつた2つの大きな発掘成果があった。その1つは検出された小豎穴のうち数基が繩文時代早期の落とし穴の可能性を持ち得ていたことである。おそらく尾根下に存在する該期の堂の前、福沢遺跡の集落にとって、ここは背後の急斜面の地形を生かした適地であったものと推測される。これに対しAトレ下端に発見された平安時代の2軒の住居址は逆に立地条件が問題となり、このよ

うな山奥のしかも急斜面に構築されていること自体、疑問視されたのである。

従来の市内における平安時代の遺跡立地を分類すると4タイプに区分されよう。

A型—田川の運搬・堆積作用によって造られた自然堤防上の遺跡で、分類域としては丘中学校付近から北側が該当する。主な遺跡としては高田、野村、花見、吉田向井、吉田川西遺跡がある。このタイプの遺跡には平安單一時期の大集落をなすものが多い。

B型—田川の河岸段丘面上にある遺跡。丘中学校、丘中南、黒崖、北ノ原、一夜塚、北海渡、古屋敷、文教場西、上村、裏の原、社宮寺、五郎治郎、和手、中挾、中島、田川端などの遺跡がある。このタイプには弥生時代との複合遺跡が多い。

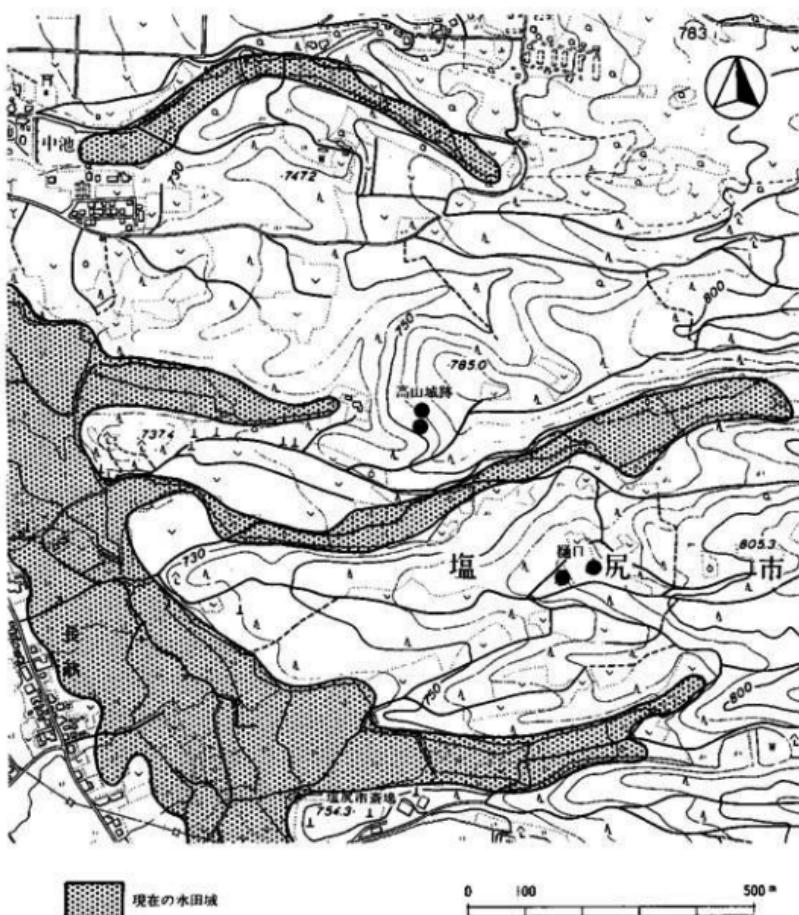
C型—扇状地上に立地する遺跡。平出、小丸山、内田原、君石、別方、新田、狐塚、下境沢、日向、二本木、渋沢遺跡などがあげられる。

D型—山麓から流下する群小の河川によって開拓された舌状台地、谷あいの小平坦域などに立地する遺跡。小規模ながらこのタイプに属する遺跡は多く、片丘の今泉、舅屋敷、中原、俎原、女夫山ノ神、菖蒲沢、牛亮沢、五千石、横町、宮村、上木戸、山ノ神、竜神平、長歎の堂の前、福沢、樋口、ヨケ、塙尻町の栗木沢、下西条の久野井、柄久保遺跡などがこれに該当しよう。このC型、D型には弥生時代は少なく、繩文と平安時代の複合遺跡になることが多い。

上記のような区分を拡大してもまだ当遺跡の立地がかみ合わないのは、住居址が占地する空間（平坦域）があまりにも狭いことによるものだろう。この類の住居址は従来、市内に検出例が多く、極めて特異的な存在となった。近年、このような山間地の遺跡について新知見が述べられていることもあり、それらを踏まえながら当遺跡の立地環境を検討してみたいと思う。

前項でも述べたように住居址は高山城跡の占有する山の南西側へ落ちる急斜面の、ほぼ中間地点に立地する。北側と南側には頂上の平坦域から分岐した尾根が延びており、それらに三方を囲まれ西へ開口する様である。おそらく第1号住居址の存在する小テラス状台地は、このような谷地形に特にみられる、上方からの崩落、押し出しによって形成されたものと思われる。2軒の住居址は高さをやや異にして斜面方向に並んでいるが、両者のプランは共通して斜面下方側の半壇を崩れにより欠損している。斜面の崩落により住居の一部が流れた可能性もありうるが、第1号住居址の立地する約6°の緩傾斜は強い否定を与えるものである。しかも住居址の山側はロームの斜面を掘り込んで平坦域を構築しているところから、おそらく欠損部は土盛りにより平坦域を設けたため軟弱な補充部分が流れたと考えられる。従って本住居址の特異的な立地は、居住後の自然災害などの地形変化によって偶発的に形成されたものではなく、敢えて斜面上に構築されたものと推察される。

両住居の共通した点として今一つ注視すべきものに多量の焼土、炭化材の出土がある。住居址の床面から覆土にかけてかなりの厚層で堆積しており、床面下のピットの覆土にさえ多量の混入がみられた。炭化材の出土は特に第2号住居址が目立ち、最大で径15cm、長さ1mのものをはじめとしてかなり大形のものが多く、生々しい焼け跡となっている。また出土遺物は焼土や炭化材に埋もれた完形品が多く、これらを搬出できなかった突然の出来事を物語っている。このような



第406 図 平安時代の住居址

焼失家屋は該期の遺跡にとりわけ珍しいものではなく、市内の遺跡の中でも内田原、勇屋敷、俎原など数例が報告されている。しかしこれらの遺跡はいずれも立地分類のD型に属する遺跡に限られ、平地の大集落を構成するA～C型の遺跡には1軒すら見あたらない。この現象はさらに近隣地域の遺跡を分析しても該当する傾向があることから何らかの相関関係をそこに伺うことができよう。

次にこのような特殊な立地環境にある当集落の経済的基盤について考えてみる。第406図は高山城跡と樋口遺跡から検出された住居址と現在、水田に利用されている地域の位置関係を示したものである。水田域は台地前の平地部と台地を開析する群小の河川沿いに入り組む険峻な谷間にみられ、とりわけ鉄物師屋川や栗木沢の谷ではかなり奥まで開墾の手がはいり、標高770mの高さまで水田に供されている。

従来、このような山間地遺跡は一般に水田を伴わない特殊な生業の集落とされ、交易あるいは手工業生産を中心に行っていたことを基本的な前提としていた。しかしこれに対し、山間地遺跡の中にもその経済的基盤が谷水田や小沢川に水利を求める狭い水田にあると指摘があり、地域（山間地）的な限界はあるが比較的安定した水田経営が可能であったことが述べられている（笹沢浩、「善光寺平における古墳時代以降の集落立地の基礎的研究」、『信濃』24—4、1972）。確かに農耕社会における水田指向にはかなり強いものがあり、水田耕作の限界を越えて存在すること自体、政治的・社会的な組織から逸脱したことにつながる。換言すれば当時の支配体制からの逃亡であり、消極的な集落組織（厳密な意味での山櫻み集落）とも言える。水田耕作による生活の安定により初めて手工業生産を営む集団力が生まれてくるといつてよいだろう（能登 健他、「山櫻み集落の出現とその背景」『信濃』37—4、1985）。

河川の開析により形成された舌状台地上を占地する勇里敷、俎原、樋口などの平安集落は立地から明らかにこのような手工業生産と農耕を兼ね備えた集落の遺跡と推察される。もちろん農耕には狭小の谷水田を利用した限界のある水稻耕作のほかに、集落の立地する台地奥の緩斜面を利用した畠の果たす役割もみのがせない。

塩尻市内には今のところサトから隔離された所謂、山奥の平安集落というものが発見されてなく、厳密な意味での山櫻み集落というものは存在していない。高山城跡の占有する山は地形こそ険しいが谷間との比高差はあまりなく、西側と南側に降りた谷（塩沢と鉄物師屋川）は生活圏内といってさしつかえないだろう。従って当遺跡の例はむしろ前記のD型に近く、当時の水田可耕地がどの程度の高さまで上がっていたかという問題は残るにしろ単にサトや水田との位置関係から概観すると樋口、ヨケ、栗木沢の各遺跡と同格といえよう。住居を山の斜面に構築したという問題はむしろもっと個別的原因によるものと考えたい。

2) 高山城跡について

「長野県の中世城館跡 分布調査報告書」(1983)によれば、塩尻市内の中世城館跡に係る遺構としては、36ヶ所が調査確認され、高山城跡もその1つとされている。県下においても山城の発掘調査はあまり例がなく、今回の長野県埋蔵文化財センターおよび塩尻市教育委員会により行なわれた高山城跡発掘調査は、塩尻市内では始めての本格的な山城調査となった。城館跡遺構の調査という特殊性から、発掘調査に入るにあたり、事前調査として再三にわたる現地踏査が行なわれた。

中央道長野線および国道20号線塩尻バイパス両線建設の計画により、高山城跡発掘調査が具体

化した昭和59年7月には、長野市文化財保護審議会長米山一政氏、長野県埋蔵文化財センター、塙尻市教育委員会により、同年9月には、国学院大学城郭址研究会上代純一氏、長野県埋蔵文化財センター、塙尻市教育委員会により実施されている。これらにより、西側山腹において4段の段階状小平坦地のはか、南西部および北西部の尾根部と谷部で2、3の小平坦地が確認され、また、南西部および北西部の山麓付近が崖状になっていることが認められた。こうした中で、以下のようない点で一致をみ、統一的な見解が出された。

- (1) 西側の段階状小平坦部は、段郭の可能性を有するものの、傾斜が少し急すぎる。
- (2) 南西部に帯郭らしい平坦部が認められるものの、部分的であり、帯郭としての機能をはたしえない。
- (3) これら平坦部に敵きが認められない。
- (4) 土壘を周辺部に構築する等の防禦施設がまったくみられず、城としての機能を考えられない。
- (5) 山城であるならば主郭になると思われる小頂平坦部の周囲についても、土壘を含めた人工構築の形跡が認められない。
- (6) 尾根の連なる東側に堀切りが認められない。
- (7) 崖状の部分についても、人工的でなく自然決壊の可能性が強い。
- (8) 水の手がない。
- (9) 位置的にも、山奥に入りすぎている。

唯一人工的と思われた平坦部については、(1)～(3)の観点により、郭としての機能性に欠けており、堀などの可能性が強いとされた。こうして、識者を交えた発掘前の現地踏査では、城址としての可能性はほとんど否定されたのである。

昭和59年9月から10月にかけて実施された、長野県埋蔵文化財センターによる高山城跡北側での発掘調査では、城跡に関連する遺構、遺物は確認されなかった。この調査結果をうけた上で、塙尻市教育委員会では、昭和61年5月、奈川小学校教諭山田瑞理氏に依頼し、発掘調査方法の指導も含めた現地踏査をさらに行なった。ここにおいて、調査区西側斜面の段階状小平坦部ならびに南西側斜面の比較的大規模な1段の平坦部について調査が必要旨指摘され、ここにトレントを設定、段郭、空堀、櫓列等、城跡に伴う遺構の確認調査を行なうこととした。この結果、すでに詳細に述べた如く、それぞれの平坦部については、一定の角度で傾斜する地山面に人工的な盛土を行なうことにより構築したものであることが判明した。しかしながら、上部平坦部の利用を目的になされたものとは推察されたものの、積極的に城跡と関連する遺構とする確証は得られなかった。また、土壘、空堀等他にあるべき施設については、その痕跡すら見い出すことはできず、遺物も該期のものについては皆無であった。

高山城跡について、最も詳細な既出資料は、前掲した「塙尻地史」(1924)である。(538頁参照。)ここにみられる、「城は西向し大手らしき所に數段の土階あり」とは、今回調査されたF、G、Hトレントによる西斜面の段階状小平坦部とみてほほ間違いない。確かに、ここを山城とした場合、城の構え方向としては西以外に考えられず、大手方向の構築物として注目される所以である。こ

れについての現地踏査における否定的見解は、前述(1)～(3)で記したとおりであるが、発掘調査を進める中で、当初行なわれた立木中での踏査では明確にしえなかつた事実が明らかになった。立木伐採により、調査された平坦部すべてが谷筋に沿って造られていることが判明したのである。この点について山田瑞穂氏より、段郭が構築される場合、尾根筋稜線に沿って行なわれるのが常である旨指摘をうけ、これら平坦部が城に関連する構築物である可能性にさらに大きく疑問符が付されることとなった。

また、同じく「塩尻地史」中の「西南方面を掘鑿せる崖痕」について、調査が行なわれた2ヶ所のトレンチ調査区の中間山麓部にその跡を確認することができた。現在も石炭岩が露呈する切り立った崖となっており、同文中にみられるとおり、「近年石炭岩を掘鑿」した跡であることが明白であった。しかしながらこれも、その横方向への規模は小さなものであり、たとえ「塩尻地史」で言う「近年」以前に手が加えられていたとしても、空堀に類する施設としては目的を達し得ないと考えられる。これについての現地踏査による見解は、前述(7)のとおりである。

(6)および(8)については、「塩尻地史」中に記されたものとして、「城後の尾上に二三丁宛を隔てて三條の大なる壘塹あり、城後に櫻清水あり」が概当する。いずれも山頂平坦部から東へ続く尾根部に関するもので、今回の調査区の反対側山腹部にあたる。現地踏査でも確認されず、長野県埋蔵文化財センターにより山頂東側約170mにわたって行なわれた発掘調査でも関連する遺構は認められなかったことから、城後の備えについての可能性は薄いと思われるものの、「城後の尾上二三丁」とあることから、当該発掘調査区のさらに東側において、當時なんらかのそれらしい痕跡が認められた可能性は、ここに残しておくべきかと思われる。発掘調査終了後行なわれた塩尻市教育委員会による踏査では、山頂東方約400mの尾根部において幅2m、深さ1mほどの人工的な掘り込みが南北に1本認められた。しかしながら、「三條」を確認することはできず、「大なる壘塹」に相当するか否かは不明であった。

以上みてきたように、高山城跡に対する様々な角度からの調査検討と大規模な発掘調査の中で城跡と関連付けられるものは現在のところ皆無である。このことからも、有事に対処するための軍事的拠点として、山城が持つべき機能を備えて構築される常駐的性格を持った山城がここに存在するという点については、すでに否定されたとみるべきであろう。しかしながら、地元においても高山城としての伝承がなされている背景には、この地がなんらかの歴史的経験を持っている可能性は残されており、あるいは、「臨時の一一小砦ならん 或は前記甲軍防禦の為にて高須城の出丸ならんか」と「塩尻地史」中にみられるように、甲斐の武田信玄が松本平進出の機を伺った時期における、小笠原軍の駐屯地程度の役割は果たしたものかもしれない。ただし、同じく「塩尻地史」中の、「天文十四年以後……中略……犬飼半左衛門は東山附近に屯營し 更に中腹に高山城を築き……」の記述については、塩尻市誌編纂室小松克己氏によれば、傍証に欠け、史実としての正否を論ずることはできないとのことである。

塩尻バイパスおよび中央道長野線の建設により、高山城跡山腹部は大部分がその痕跡をとどめていないものの、山頂平坦部は完全に残されており、今後調査の機会があるとするならば、なん

第三章 調査遺跡

らかの成果を期待できるかもしれない。また、山田瑞穂氏の指摘から、位置的、構造的に城としての機能をより充分に備えているとされたこの尾根先端部に位置する「前山公園」をも含めての検討も今後必要かと思われる。

8 まとめ

「塩尻地史」、「塩尻町誌」に中世山城として記載されている高山城は、中央道長野線およびバイパスの2路線によってその東・西側部分の一部が破壊されることになり、事前調査が実施された。

このうち塩尻市が調査したのは西側部分で、地史等で段郭を指摘されている部分を中心にトレーニングを入れた。

まず、城郭としての調査結果であるが、中央道用地内での知見も加味すると否定的な結果となつた。当初段郭とされていた部分は明らかに人工的な土盛りがなされ何らかの施設であることは明確になったが、その場所は山城としては不自然な谷部分に位置することと、桑が自生し桑畠であった可能性が捨てきれないことなどから山城の付属施設と断定することができなかつた。また土壘・空濠の痕跡も見い出しえず、この位置が城としては山奥すぎる点など城郭とする積極的な成果が得られなかつた。この場所を城郭と断定するには慎重さを要しよう。

今回の調査では思いがけなく平安時代の住居址が2軒発見された。急な山の斜面に、2つの住居がへばり着くように構築されており、このような場所に住居が造られるとは思ってもみないことがあつたので、その特異さが注目された。発見された住居はともに焼失しており、土師器、灰陶器が出土した。近時、平安時代の集落において平地に営まれた大集落と山間地に営まれた小集落とが相互補完的関係にあるとの集落論が展開されつつある。今回の本遺跡発見住居は山間地小集落の典型といえる。平安時代の社会を考えるうえで貴重な資料といえる。

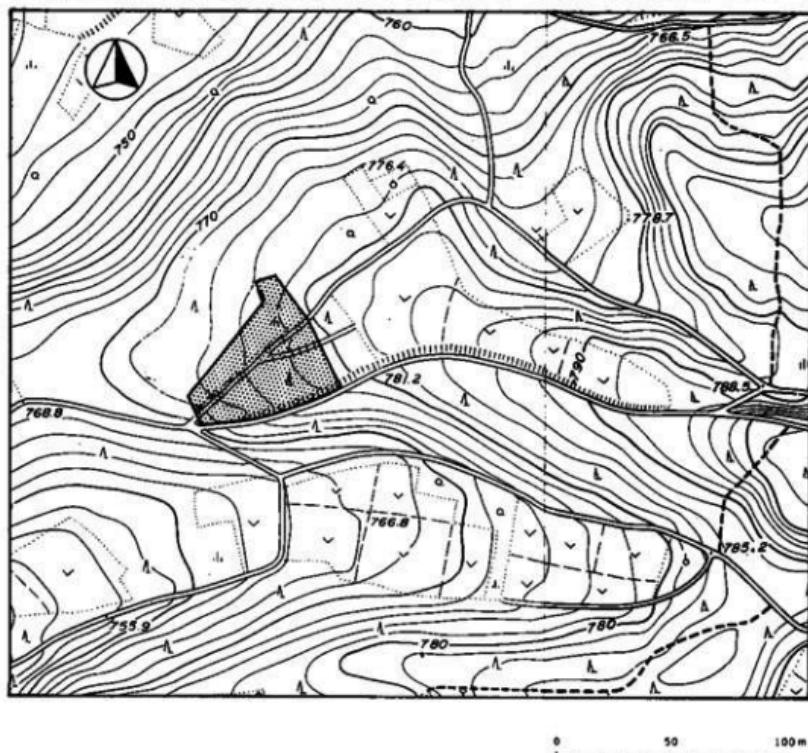
以上のような成果のほかに縄文時代に属すると思われる小竪穴8が検出された。上面円形で、底面長方形を呈する深い小竪穴には、底面に小さなピットが穿れており、「おとし穴」と考えられる。尾根上ないし尾根からやや下がった斜面におとし穴が設けられる例は関東を中心に中部高北でも最近類例を増しつつある。このような斜面での発見は市内で初めてであり、縄文期の生産活動を考えるうえで大きな成果であった。

本遺跡の調査は以上のように興味深い多くの成果を得ることができた。

第6節 横口遺跡

1 位置と地形

横口遺跡は、塙尻市大字長歛字横口地籍を中心として、東山山麓から西に延びた細長い小規模な尾根上に位置する。北側の谷は、比高差30mをもって水田が広がり、200m先には高山城跡とされる小山を有する尾根が横たわっているのが臨まれる。この下を田川の支流「鉢物師屋川」が流れ、約2km先で田川に合流している。南には、比高差10mほどをもって谷底幅50mの小谷が眼下に臨まれ、ヨケ遺跡の立地する場となっている。さらに南方には、横口遺跡が在する尾根に比してより小規模の尾根が二筋横たわり、この南側で栗木沢と呼ばれるやや大きな谷となっている。この横口から栗木沢に至る約400mの間に存する3本の小尾根と狭隘な2本の小谷は、東山山麓下に放射状に発達した他の尾根筋に比して起伏に乏しく、1本の比較的大規模な尾根上に、長い年



第407図 横口遺跡調査地区図

月の中で2本の開析が進行したものと想えうる。

樋口遺跡が立地する台地上の標高は775~790mで、東西に200m、南北に数十mの細長い範囲が遺跡として考えられている。ここは、東西に発達した尾根のほぼ中間に位置し、西の尾根先端部まで約700mを計る。尾根の西半はほとんど山林となっているが、東側では、比較的平坦な場所は畠地として利用されており、当該遺跡の確認もこうした畠地でなされたものである。またこの付近は、塙尻バイパスと中央道長野線が並行して走る地点になっており、両者の間はわずかに30m程である。台地上からの眺望は、両側の尾根に視界を阻まれ、必ずしも、すぐれたものではないが、北西側正面に臨む穂高連峰が、陽光を一身に受けたかのような雄姿は一見の価値がある。

2 過去の調査経過

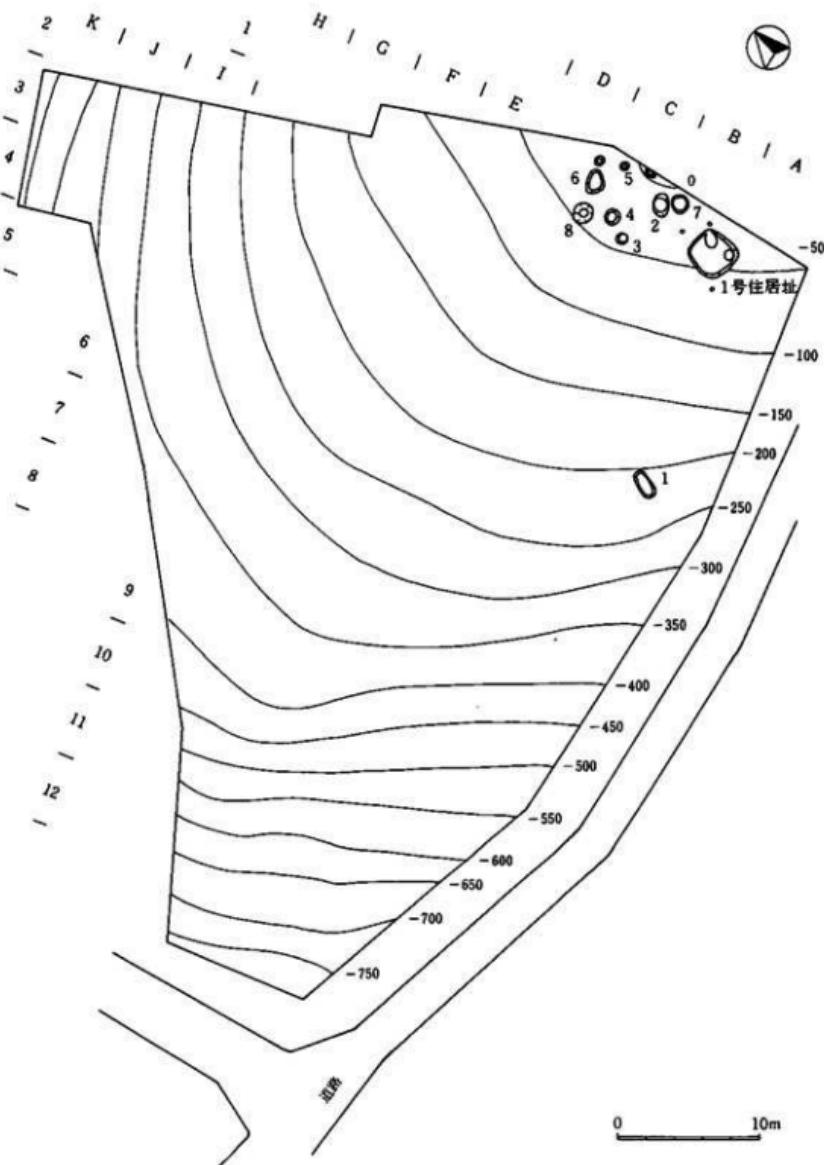
樋口遺跡は、この区域に中央道長野線建設が計画されたことに伴い行なわれた、昭和58年10月の現地踏査により発見された、比較的歴史の浅い遺跡である。これにより、中央道長野線用地内について、昭和59年6月中旬から8月下旬にかけて、長野県埋蔵文化財センターにより2,900m²の緊急研究発掘調査が行なわれた。その成果について、「長野県埋蔵文化財センター 年報1」(1985)に概要が示されているので、ここに抄録したい。

遺構は、平安時代後期の竪穴住居址1軒と時期不明の土壙3基が検出された。住居址は、尾根部で検出されたが、耕作による削平、搅乱と、3分の1が調査区外であったため、全容を確認するには至っていない。プランは一辺約5mの隅丸方形が想定され、東壁中央やや南寄りに石組みカマドが設置されていた。遺物としては、土師器の壺、小型甕、灰釉陶器の椀、皿、刀子、紡錘車等が出土している。土壙は、尾根部で1基、谷底部で2基確認された。尾根部のものは平坦面の先端付近で検出され、開口部0.8×1.5m、底部1.5×1.2mの断面長靴状を呈し、底部は硬くしまっていた。谷底部のものは、調査区南西寄りに2基並んで検出され、両方とも直径約0.5m、深さ約0.3mである。3基とも遺物の出土はない。この他、谷底部では、遺構外出土遺物として、石鎌、打製石斧、土師器片、灰釉陶器片が多数得られているが、明確な遺構は検出されていない。

3 調査概要

調査は、遺跡の中心部と推察される台地上平坦部西側の傾斜地で実施された。また、調査に先立って行なわれた元の地権者との話し合いの中で、調査区が以前、畠地としての利用を目的に開墾されている旨を指摘され、その成果について当初疑問を持たれていた。しかしながら調査の結果、以下のとおりある程度の成果を納めることができた。

遺構は、住居址1軒、小竪穴8基が検出された。住居址は平安時代後期に比定され、南北2.9m、東西1.5mを計る小型の方形プランで、北東隅に石組み粘土カマドが確認された。調査区東南端部で検出され、台地東側で実施された中央道長野線建設に伴う発掘調査でその西端において同時期の住居址が検出されていることから、この範囲が該期集落址の範囲であることが判明した。住居址からは、土師器の壺、甕、小型甕、灰釉陶器の椀が出土した。小竪穴8基の内、7基は住



第408図 横口遺跡全体図

第Ⅳ章 調査遺跡

居址北側に集中して検出され、このうち3基から縄文中期の土器片が出土した。また、住居址西側にやや離れて検出された1基の小竪穴は、長方形プランを持つ比較的深いもので、その位置、形状とともに注目される。当該小竪穴の覆土中からは平安期の土師器片が出土した。

遺構外出土遺物としては、縄文時代中期の土器、石器と、平安時代の土器が出土した。縄文中期の土器は、該期初頭九兵衛尾根II式期に比定されるものを主として、井戸尻田ないし曾利I式期に属するものを少量確認できた。石器は、石鏃、不定形石器、磨製石斧、打製石斧、凹石、磨石が出土した。遺構は確認できなかったが、該期の遺跡としての痕跡をとらえることができた。平安時代に属するものとしては、土師器、灰釉陶器の壺が出土した。

4 発掘区の設定

遺跡は、小規模な尾根上の平坦部を中心に展開する遺跡で、塩尻バイパス道路用地は、遺跡範囲西端部のやや西斜した山林部分に設定された。道路用地東側は、現在畠地として利用され、遺跡の表面採取も可能な平坦部となっており、地形的にも遺跡の中心部分と推察された。このため今回の調査は、遺跡西側の縁辺部について実施されることとなった。

調査は、松の切り株が全面に及んでいるため、表土除去の段階から人力で行なうこととした。調査区東側から中央部にかけては、表土即ローム土となり、開墾時の削平による影響が顕著に伺われた。調査区西側では、地山ローム土との境が判然としない程ローム土を混入した搅乱土が、西斜面へ向かうほど厚くなり、東側で削平された部分が西側へ運ばれ盛土されていることが判明した。北側斜面においてのみ、暗褐色土の自然堆積が上方で20cm、調査区最下方で50cmの深さに確認された。

発掘調査は5×5mのグリッドを設定して行なわれた。グリッドは、南から北へ向かってA～K、東から西へ向かって1～13が設定された。発掘調査総面積は、2,200m²である。

5 遺構・遺物

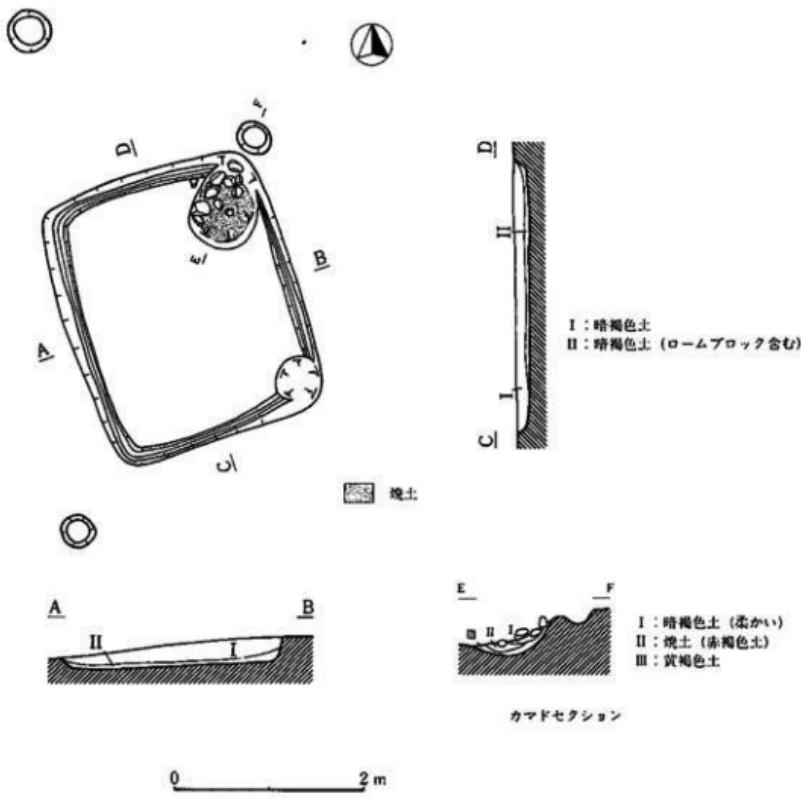
1) 住居址

第1号住居址

遺構 本址は調査区東縁部にあり、調査が実施された斜面上方の尾根部に位置する。ここは調査区の中でも比較的平坦な場所にあたり、加えて表土が残っているため遺構の遺存状態はよく、本址の他にも北側に数基の小竪穴が検出された。助簾による遺構検出の段階でローム面に暗褐色土の落ち込みが認められたが、落ち込みが浅く、また両者の色相が似か寄っていたため当初はプランが明瞭に把握できず小竪穴扱いにしていたが、床面を最初に確認したことから逆に壁を追いプランを把えることができた。

住居址の平面形態はN-10'-Wの主軸方向をもつ小形方形プランで、規模は南北2.90m、東西2.50mを測る。

壁はロームをほぼ垂直に掘り込んでおり、良好な壁面を残している。壁高は東壁27cm、西壁11



第409図 第1号住居址

第36表 桶口遺跡第1号住居址

住居	平面形	方向	規模	壁 高	床面	カマド構造	位 置	周溝	備 考
1	方 形	N-10°-W	290×250	27・11・12・15		石組	北東隅	全周	

cm、南壁12cm、北壁15cmを測る。

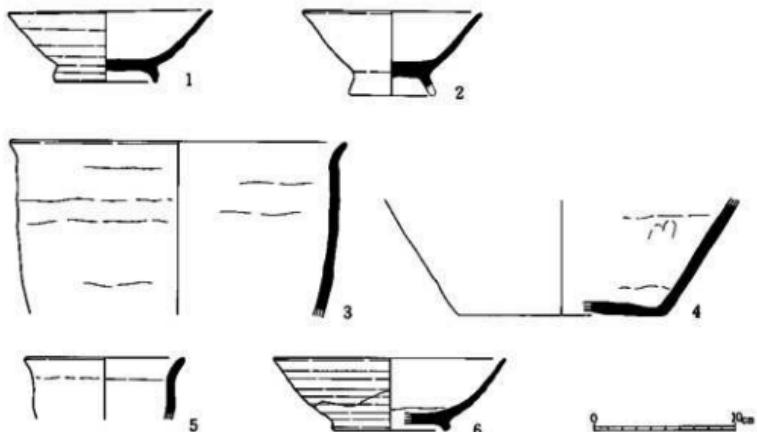
床面は遺存状態が良好でよく踏み固められている。ほとんど平坦域であるが、斜面に沿って床面も若干傾斜しており、東西両端では約9cmの比高差がある。周溝は壁下に沿って全周しており、幅10cm、深さ2cmで整然と設けられている。柱穴は床面上に認められず、ピットとしては唯一、

第III章 調査遺跡

南東隅に周溝を切って深さ5cmの掘り込みがみられる。中におびただしい量の焼土が堆積しており12cmの層厚を有する。

カマドは住居址の北東隅に石組み粘土カマドが構築されているが、礫は崩壊し原形はとどめていない。口径45cm、奥行65cmを測り、掘り込み部もよく焼けている。

遺物 本址よりカマド周辺を中心に土師器の环、甕、小型甕、灰陶の碗が検出された。环(2)は高台部が摩耗しているが、足高高台を有する。甕(3)は内外面に輪積み痕が認められ、特に外面は凹凸している。口縁部は横ナデされている。甕(4)はカマド内出土である。内面には指圧痕、輪積み痕が認められる。灰陶の碗(6)はロクロ成形され、底部は回転ヘラケズリされている。



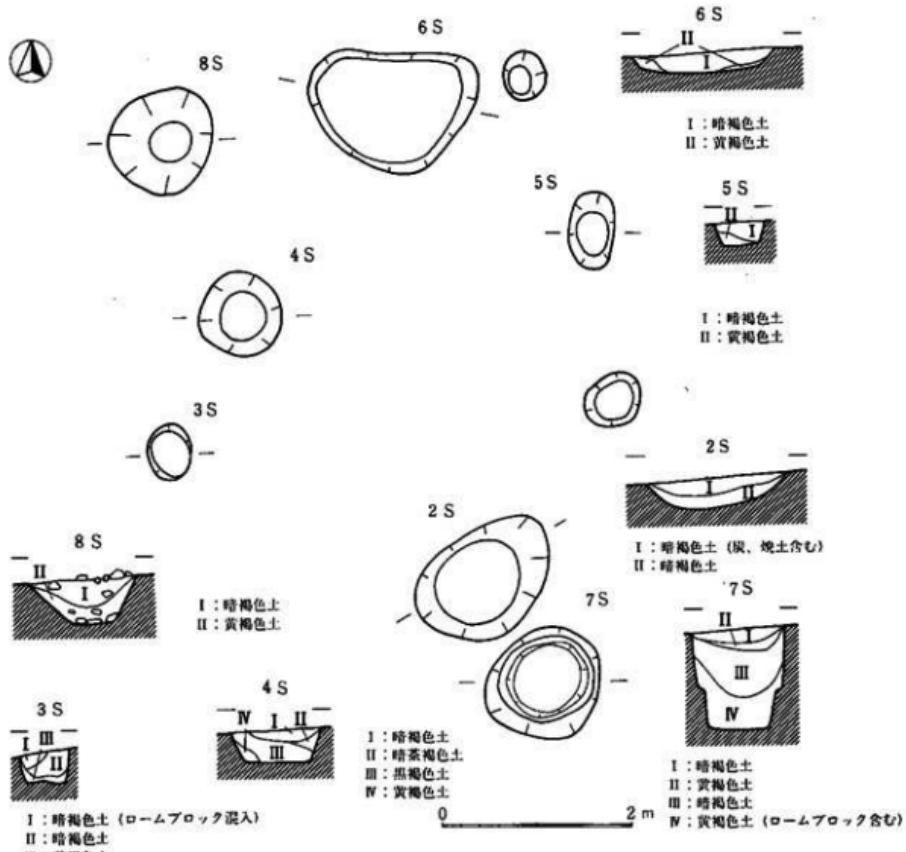
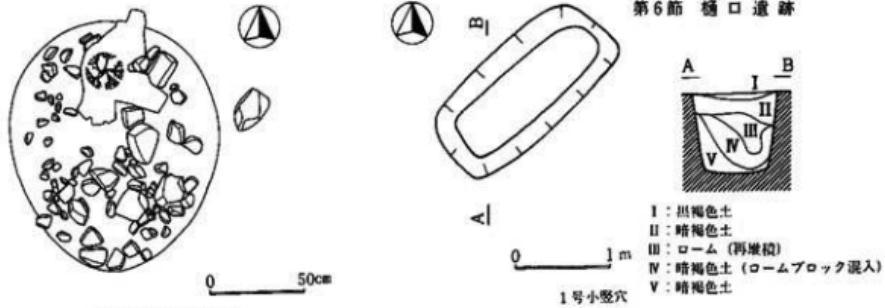
第410図 第1号住居址出土遺物

土器観察表

No.	種別	器形	寸法(cm)			色調		成形・調節の特徴	備考
			口径	底径	器高	外面	内面		
1	土師	环	14.4	7.0	5.0	茶褐	茶褐	ロクロナデ	少々摩耗
2	"	"	12.6			"	"	"	"
3	"	甕	23.4			明褐	明褐	口縁部横ナデ、内外面に輪積み痕	内面にスス付甕
4	"	"			14.4	"	"	外葉ヘラナデ	カマド内出土
5	"	小型甕	11.0			"	"	ロクロナデ	
6	灰陶	甕	16.4	7.8	5.8	灰白	灰白	"	

2) 小豎穴

小豎穴は全部で8基検出されたが、いずれも調査区東端の尾根部に集中している。このことは住居址と同様の遺存条件が考えられるが、小豎穴の場合、特に群から単独で隔絶する第1号小豎穴の存在が異質である。おそらく周囲もかなり表土除去が行なわれたものと思われるが、深さがか



第411図 小豊穴群

なりあるため消滅を逃れたものと推察される。その他の小竪穴はまとまって第1号住居址の北側に位置している。

規模は最大205cmのものから最小58cmのものまで多様であるが、比較的大型のものが多い印象を受ける。深さは1号の84cm、7号の103cmを除くと他は全て20~30cmと浅い。この1号と7号は形態的に特異なものであり、1号は長方形の平面形態のままほぼ垂直に掘り込まれており、検出面が斜面で傾斜しているのにもかかわらず底は水平を保っている。また7号は2重の掘り込み構造で、ほぼ中間に同じ円状の段を有している。

また8号は中に多量の礫と焼土、炭を含有していた。礫径は10~20cmのものが多かったが、陶片はあまり良くなく、手当たり次第投げ込んだ感を受ける。興味深いことに底は6枚の扁平石が敷き詰めてあった。

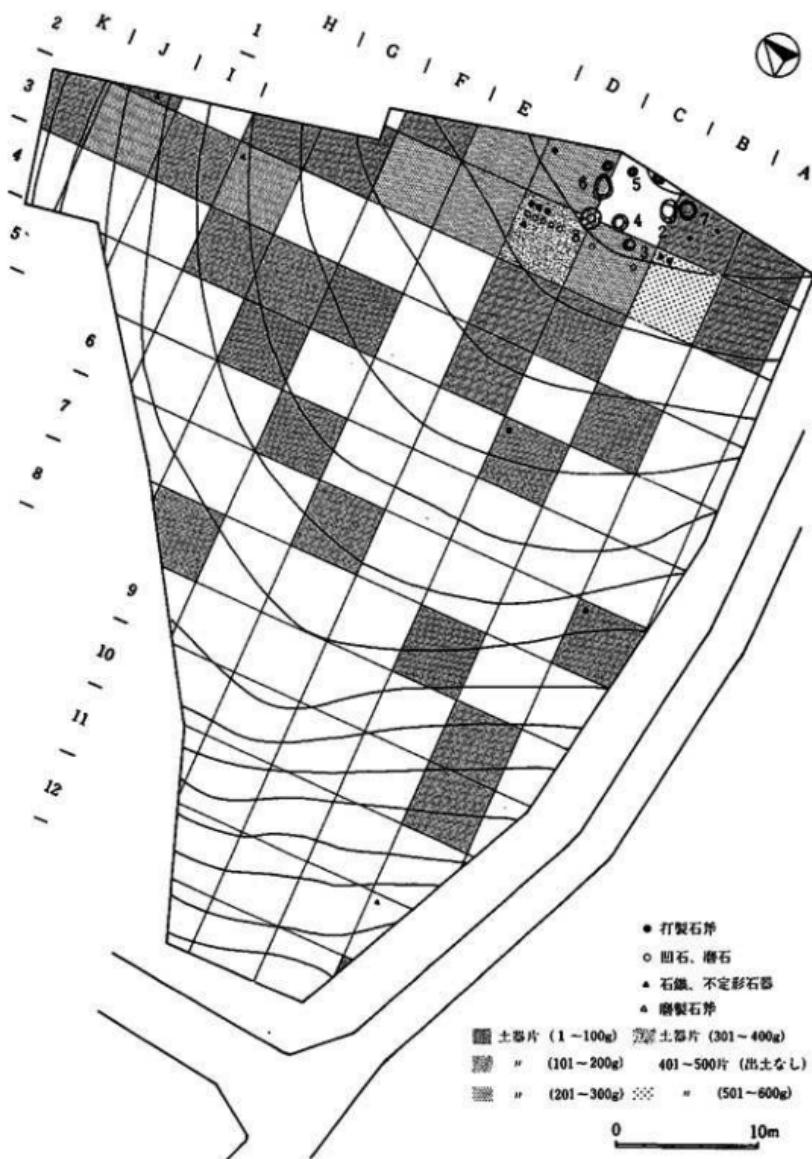
第37表 橋口遺跡小竪穴一覧表

No	確認規模	平面形	主軸方向	断面形	底面規模	底面	深さ	備考
1	205×100	長方形	N-40°-E	タライ状	174×57	平坦	84	
2	155×108	橢円	N-37°-E	擂鉢状	88×78	丸底	30	
3	58×47	"	N-20°-W	タライ状	50×38	起伏あり	33	
4	88×84	円形	—	"	49×46	平坦	35	
5	78×48	橢円	N-20°-W	"	47×35	"	24	
6	178×126	不整円	N-70°-E	"	153×108	"	22	
7	126×115	橢円	N-30°-E	コップ状	72×66	二段	103	
8	116×103	"	N-23°-E	タライ状	42×41	平坦	46	集石、焼土、炭

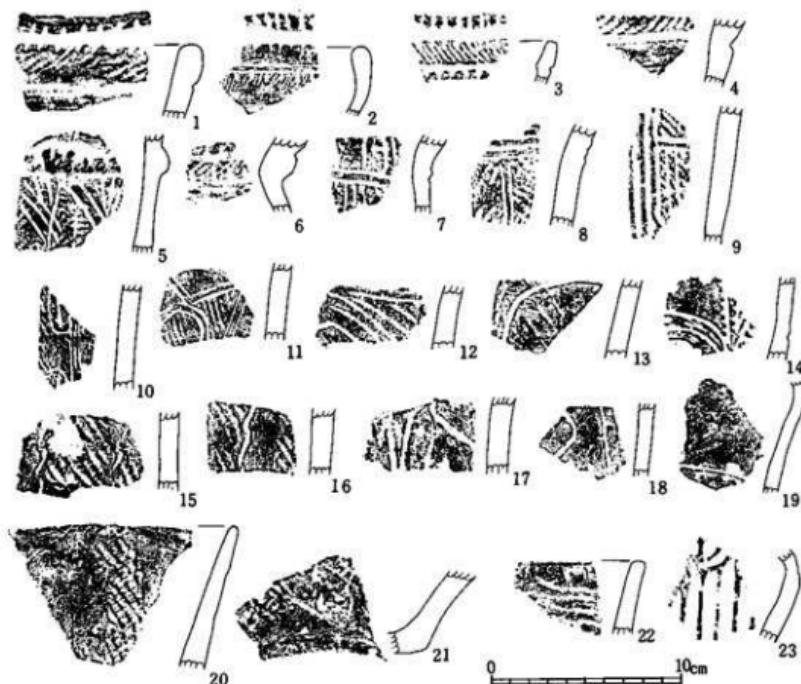
3) 遺構外遺物

縄文時代 縄文時代に属する遺物には、土器、石器がある。出土状況は、図に示すように、調査区最高所のB・C・D-1・2区に集中して出土し、とりわけ小竪穴群周辺に顕著である。住居址を伴わない小竪穴群のみの遺跡の性格を明らかにするうえで参考となる遺物の出土状況を示している。

出土した土器は極めて少量で、図示したものが資料化できる全てである。1~3は、口縁部破片で、2はやや内反し、1・3は直線上に立ち上がる。ともに口唇部に刻みを施し、口縁に縄文を施し、刺突を加えている。4は、頭部破片で、縄文、伏線文と施文。5・6は隆帯を横位にめぐらし、隆帯上に縄文、刺突を加える。7~13は、縄文を地文とし、沈線による区画を幾何学的に配する。15・16は蛇行状線と縄文とを施文。17~19は、沈線のみのもの。20・21は縄文施文の土器で、20は口縁部、21は底部の破片である。22は、撚糸文施文の口縁部破片。23は、隆帯に



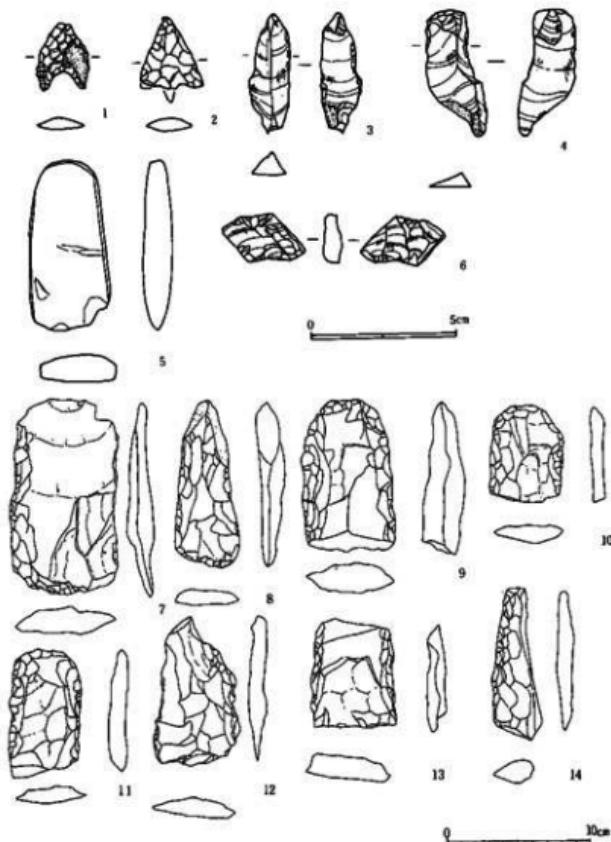
第412図 遺物出土状態



第413図 繩文時代遺構出土土器

土 器 類 約 表

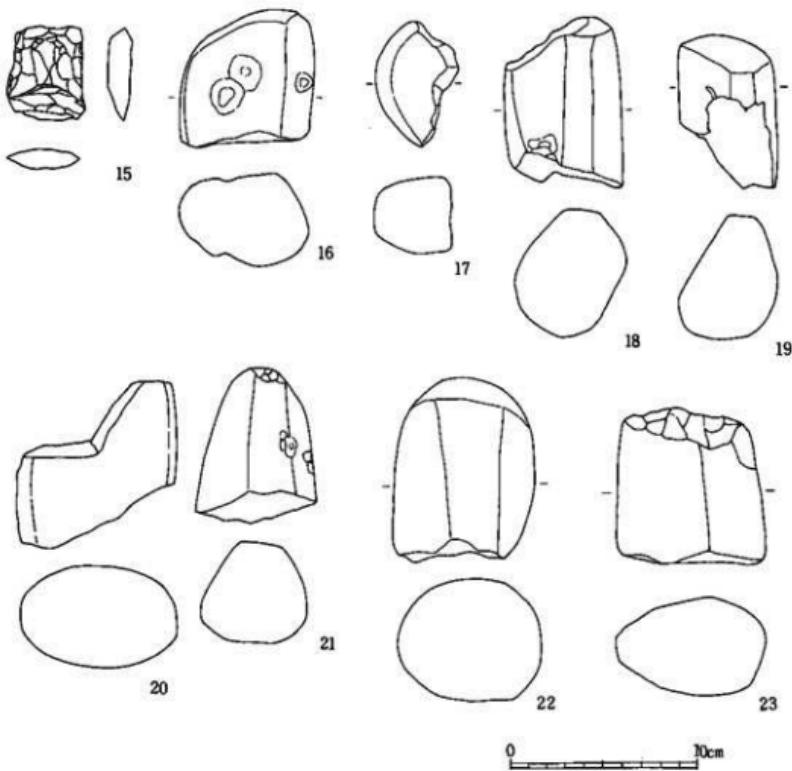
番号	調査区	器形	部位	文様構成要素	器面調査 片/内	地 土	備 考
1	D-2	帶鉢	口縁	縄文・北轍・利矢	/ナテ	長石、石英	
2	D-1	+	+	+	/ "	*	
3	K-2	+	+	+	/ "	*	石英
4	F-2	+	口縫	+	/組	*	
5	6 S	刷		+	/ナテ		
6	C-2	+	+	+	/ "	長石、黒曜石	*
7	D-2	+	+	+	/ "	*	
8	E-1	+	+	+	/ "	\ 石英	
9	B-2	+	+	+	/組	*	
10	2 5	+	+	+	/ "	*	
11	4 5	+	+	+	/ナテ	*	
12	D-2	+	+	+	/組	*	
13	H-3	+	+	+	/ "	*	岩片
14	D-1	波線・利矢			/ナテ	長・石	
15	C-2	+	-	縄文・波線	/組	長石、石英	
16	F-1	+	+	+	/ "	*	岩片
17	F-6	沈 瓶			/ "	長石、石英、岩片	
18	G-5	+	+	+	/ "	*	
19	F-4	+	+	ナテ/ナテ	"	*	
20	C-8	口縫	縄 文		/組	長石、岩片、網紋	
21	F-1	底			/ナテ	*	石英
22	K-2	口縫	燃余文		/ナテ		
23	F-4	+	+	縄 線	/ "	長石、岩片	



第414図 遺構外出土石器(1)

石器観察表

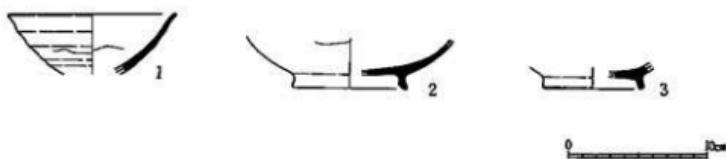
番号	造 構	種 別	石 質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重 量(g)	特 性
1	H-3	石 細	黑曜石	22	17	4	1.5	
2	J-14	*	地質灰岩	24	20	4	1.7	
3	C-13	不定形	黑曜石	40	14	8	3.7	
4	D-1	*	"	43	17	5	2.9	
5	J-2	研製石片	砾状岩	58	28	9	21.6	
6	B-2	不定形	黑曜石	17	28	6	2.6	
7	C-13	打製石片	頁岩	103	73	18	200	
8	D-2	*	"	112	44	11	98	刃部磨耗
9	D-2	*	"	105	65	21	185	刃部穴
10	B-2	*	"	65	50	12	60	網下半欠
11	A-7	*	"	83	50	12	70	*
12	D-2	*	"	58	103	13	88	網部欠
13	C-5	*	"	74	58	15	80	網下半欠
14	D-1	*	"	26	104	13	45	半欠



第415図 遺構外出土石器(2)

石器観察表

番号	遺構	種別	石質	長さ(㎜)	幅(㎜)	厚さ(㎜)	重量(g)	特徴
15	B-2	打製石片	頁岩	48	40	11	35	
16	D-2	圓石	中粒砂岩	70	78	48	345	
17	C-2	磨石	安山岩	54	44	38	85	
18	D-2	?	細粒砂岩	88	51	66	400	特殊磨石
19	D-2	?	?	79	51	63	255	?
20	D-2	?	?	86	82	52	370	
21	B-13	?	?	85	64	44	320	特殊磨石、敲石用
22	D-2	?	安山岩	95	74	51	545	
23	D-2	?	?	88	79	49	490	敲打痕



第416図 平安時代遺構外遺物

土器観察表

No.	種別	器形	寸法(cm)		色調		成形・調査の特徴	備考	
			口径	底径	器高	外壁			
1	灰釉	塊	12.0			灰白	灰白	ロクロナマ	B-9出土
2	x	x	8.0			x	x	x 回転ヘラケズリ(?)	C-2 "
3	x	x	6.6			x	x	x 回転糸切り	F-1 "

より消文を施したキャリバー状口縁の土器片である。1~21は、中期初頭九兵衛屋根II式に比定でき、23は井戸尻IIIないし曾利Iに属しよう。22は時期不詳。

石器は、石鎌2、不定形石器3、磨製岸斧1、打製石斧9、凹石1、磨石7の計23点である。石鎌1は、基部への折り込みの大きな大形品。2は、有茎で、粗雑な作り。不定形石器3・4は、縦長剝片の側縁に使用痕が認められるもの。二次調整は施していない。6は両端に使用痕がある両極石器。磨製石斧5は、小形の定角式で、製作は丁寧である。打製石斧7~15は、8次外破損品である。7は、幅広扁平で、加工は左刃および刃部にわずか施したのみの粗雑品。8は撥形を呈し、刃部に磨耗痕あり。9~11、13は刃部を欠き、短冊型を呈しよう。12は頭部を、14は石刃を、そして15は刃、頭部を欠いている。8~15とも製作は比較的丁寧である。磨石18、19、21は河原石の長辺・頂部に幅の狭い磨面をもつ特殊磨石である。18、21は小打痕の集中した凹石との兼用で、21はさらに先端部に打痕が認められ敲石としても用いられたことを示している。17、20、22、23は断面円ないし略円形を呈する礫を用いた磨石。

石器、中でも打製石斧、磨石、凹石は、小豎穴群の外縁部にあたるB-2、D-2区に集中している。これらの石器が小豎穴の機能と関連するとすれば、植物質食糧貯蔵に関連した作業工程の中で使用されていたのではないかとの推定が可能となってくる。

平安時代 遺構外の出土遺物は大変少なく灰釉の碗が3点図示できたのみである。これらは住居址周辺より出土した。底部の整形は(2)は回転ヘラケズリ、(3)は回転糸切りによる。

6 まとめ

横口遺跡は、標高778mの高所にある狭小な尾根上に立地する。今回の調査地域の東側40mには中央道長野線建設に伴った調査がなされている。

今回の調査では、尾根の頂部付近で平安時代の住居址1と縄文時代に所属すると思われる小豎穴が検出され、遺構を中心として少量の平安時代土師器、灰釉陶器、縄文時代中期土器片、石鎌、

打製石斧、凹石などが出土した。隣接している中央遺用地内の調査では、平安時代の住居址1が土師器の壺、小型甕、灰釉陶器の椀、皿、刀子、紡錘車とともに検出され、小竪穴も3基発見されている。まだ未調査区域には数軒程度の遺存の可能性が強い。平安時代の住居数は5~6軒ほどが営まれていたものと思う。平安時代には、山地にまで開発が及び、山中に小集落が営まれることが多くなるが、本遺跡もそうした山間地小集落の一例といえる。近隣には、高山城、栗木沢の2つの類似遺跡があり、この地域への積極的な開発はこの平安期から開始されたことを物語っている。低平地に所在する和手、中挾、福沢のような長期にわたる大集落との関連性追求が大きな課題となろう。また山間地集落の経済的背景の解明も重要な研究課題である。

縄文中期は、その初頭に中心をおく土器が、小竪穴とともに出土している。周辺には該期の住居址の発見はなく、集落とは異なった性格を有する。他地域に所在する集落に伴う貯蔵用のための遺跡であったとも考えられる。小竪穴の周囲からは植物質食糧の加工工具である凹石、磨石、そして採集具の打製石斧が比較的豊富であった。小竪穴と背景とした採集、貯蔵、加工の活動が行なわれていたのかもしれない。

なお尾根下にはヨケ遺跡が展開し、本遺跡と類似した遺物が出土している。両遺跡は統一的に把握されるべきかもしれない。

以上のように、検出された遺構、出土した遺物は僅少であったが、この地域の縄文中期、平安時代の様相を解明するうえで欠くことのできない貴重な資料を得ることができたといえる。

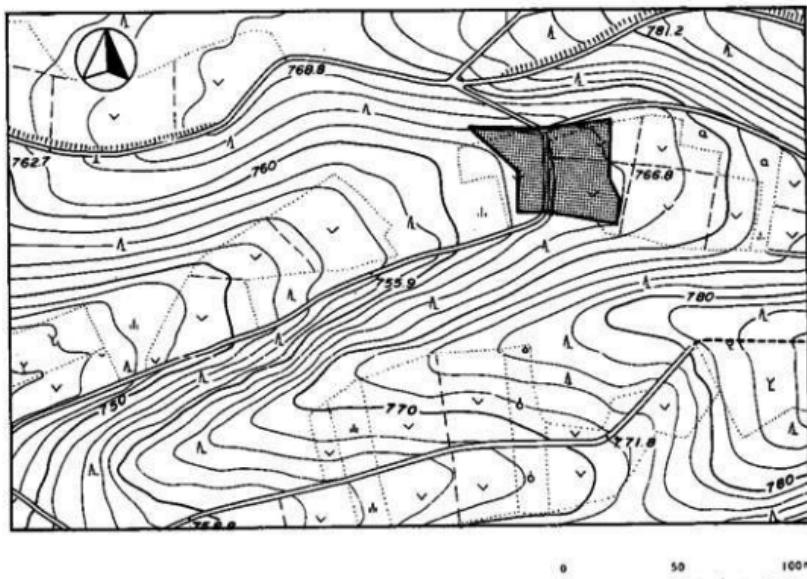
第7節 ヨケ遺跡

1 位置と地形

ヨケ遺跡は、塩尻市大字長歛字栗木沢地籍から大字堀ノ内字南ノ窪地籍にかけての谷部に所在し、今回の調査区は字栗木沢にある。大字長歛字ヨケ地籍は、北側の尾根を反対方向北側へ降りた所にあり、遺跡命名時に混乱されたものと思われる。塩尻峠を下った国道20号線が、市内柿沢地籍で分岐して始まる塩尻バイパスが継続する最初の遺跡であり、分岐点から約1km北に位置する。塩尻市営の「斎場」から400mほど東へ入った山間部である。

遺跡は、東山山麓西に細長く発達した尾根上をさらに開析した狭隘な小谷の谷頭部に立地する。南北両側を比高差10m前後的小規模な尾根が横たわり、北側の尾根上には文字通り隣接する形で桶口遺跡が存在している。さらに北側は比高差30mの谷となり、田川の支流「錫物師屋川」の流れを伴う水田地域が約100m続いた後、高山城跡を有する尾根を眼前に臨んでいる。南側では、山林として利用される小規模な尾根が二筋、比高差10m程の谷を挟んで横たわり、200m先で栗木沢の比較的大きな谷筋へ落ち込んだ後、再度立ち上って次の尾根へと続く東山山麓特有の地形が続いている。

ヨケ遺跡が存在する谷部はゆるやかに西斜し、畑地として利用される肥沃な土地である。標高



第417図 ヨケ遺跡調査地区図

第Ⅲ章 調査遺跡

は760~780mを計り、東西に250m、南北に50mほどの細長い範囲が考えられる。調査区付近までは谷底幅50m以上を確保しているものの、これ以西は一層険峻となり、谷づたいに下る小道が通じる以外は山林となっている。遺跡の西側を塩尻バイパスが通過し、約80m隔てた谷頭部を中央道長野線が並行して建設されている。

2 過去の調査経過

ヨケ遺跡は、比較的古くから縄文期の遺物が採取される遺跡として知られていた。ここに中央道長野線が計画されるに伴い、昭和59年5月上旬から6月上旬にかけて、長野県埋蔵文化財センターにより、1,490m²の緊急発掘調査が行なわれた。その成果について、「長野県埋蔵文化財センター 年報1」(1985)に概要が示されているので、ここに抄録したい。

遺構は、覆土中から出土した土器片により縄文時代前期のものと思われる土壙1基が検出されたにとどまっている。平安時代の遺物の量が比較的多かったことから、該期の遺構の存在が推測されるものの、耕作中に失われた可能性もあるとしている。

遺物は、縄文時代、弥生時代、平安時代のものがそれぞれ出土している。縄文土器では、早期の押型文、前期、中期、後期のものが少量出土している。石器は、打製石斧、石鎌等が出土し、特に破損品、未成品を含めて80点余を数える打製石斧の出土が注目されている。弥生時代の土器片は數片程度である。平安時代の遺物は、いずれも破片で、土師器の壺、灰釉陶器の碗、皿、壺などが出土地で出土している。

3 調査概要

調査は、遺跡の西側縁辺部と思われる谷底平坦部で実施された。

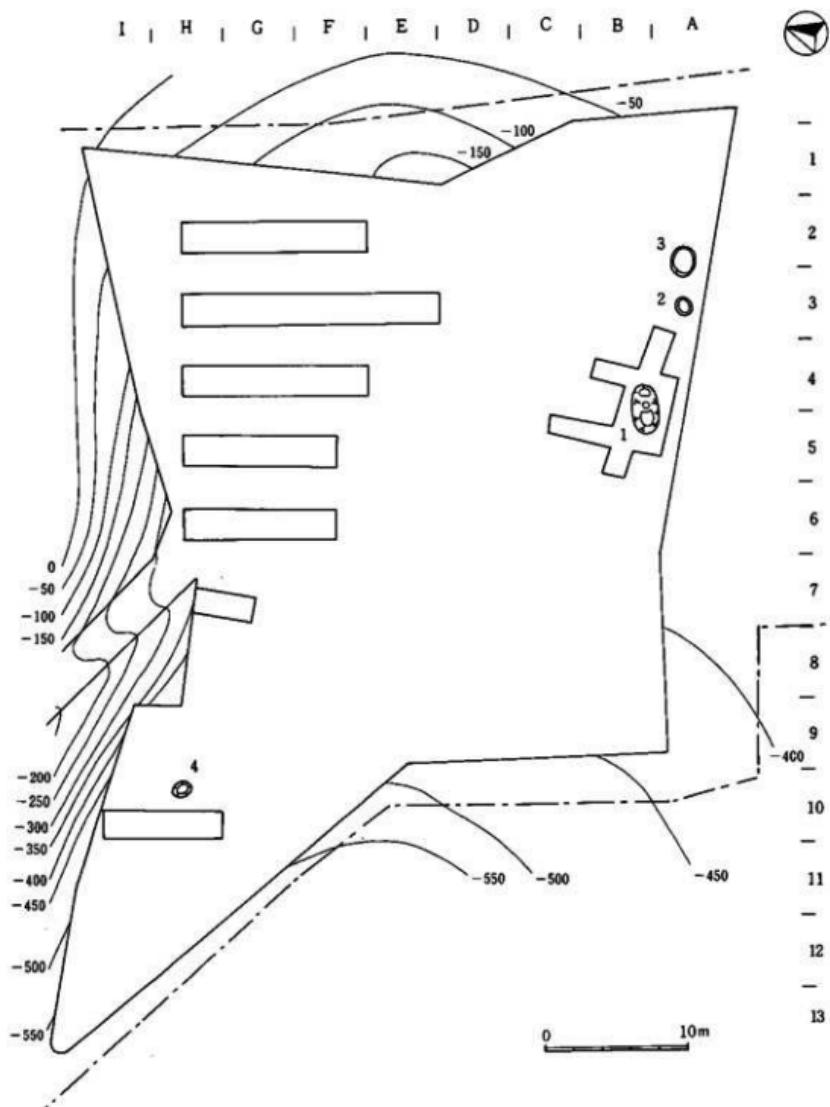
遺構は、小竪穴が4基検出された。調査区南側で3基、北西側で1基確認されたが、出土遺物はなく、時期、性格ともに不明である。

遺物については、遺構外遺物として縄文時代と平安時代に属するものが少量出土した。縄文時代では、中期後葉と後期前半に属する土器片と、打製石斧、横刀型石器、黒曜石およびチャートのフレークがあげられる。少量しか得られなかった遺物の中で、10点の打製石斧の出土は注目すべきもので、東側で行なわれた中央道長野線に伴う発掘調査で出土した80点余の打製石斧とともに特筆される。平安時代では、土師器の壺、灰釉陶器の碗がそれぞれ小片で出土した。

4 発掘区の設定

小規模な尾根に挟まれた、ゆるやかに西斜する小谷部分が調査の対象となった。谷底部は畑地として利用されており、その開墾のために削平、盛土がなされ、西に向かって段が造られている。南北に通過する塩尻バイパスにより、畑2枚が道路用地となるため、ここに調査区が設定された。畑2枚の比高差は約1mを計った。

調査は、開墾による搅乱が大きく想定されたため、バックフォーおよびブルドーザーによる



第418図 ヨケ道路全体図

第三章 調査 遺跡

耕作土の除去から始められた。谷底部両側の尾根に立ち上がる付近では、約10cmで褐色のローム層が確認され、以前の削平による結果と思われた。しかしながら中央部へ向かうにしたがって深くなり、調査区東側の最深部では、耕作土と同じ疊をほとんど含まない暗褐色土の堆積が1mに達していることが確認された。開墾あるいは耕作による搅乱の範囲は、当該層中では確認できず、また遺物の出土もまったくみられなかった。この層下で、大小の疊を多量に含む黒褐色土ないし黒色土の固くしまった層が認められたため、第I層までを重機による表土除去範囲とした。

表土除去後の調査を行なうにあたり、南から北へ向かってA～I、東から西に向かって1～13の5m幅グリッドを設定した。その後調査を進めるに伴い、調査区中央やや南寄りに東西に走る暗渠水路が検出された。これにより、中央部付近ではこの深さまで搅乱が及んでいることが判明したため、調査区北側に7本、南側に3本のトレーニングを1.5mないし2m幅で設定し掘り下げた。この結果、地山ローム層は、調査区中央部の谷底へ向かって傾斜する、より深い谷地形を形成し、流水の影響が認められる砂疊層を最下部に有することが確認された。大小の疊を多量に含む粘性の強い黒褐色土層は、この層と表土耕作土間に最厚部50cmほどの凸レンズ状の層として見えられた。

発掘調査総面積は、1,800m²である。

5 遺構・遺物

1) 小竪穴

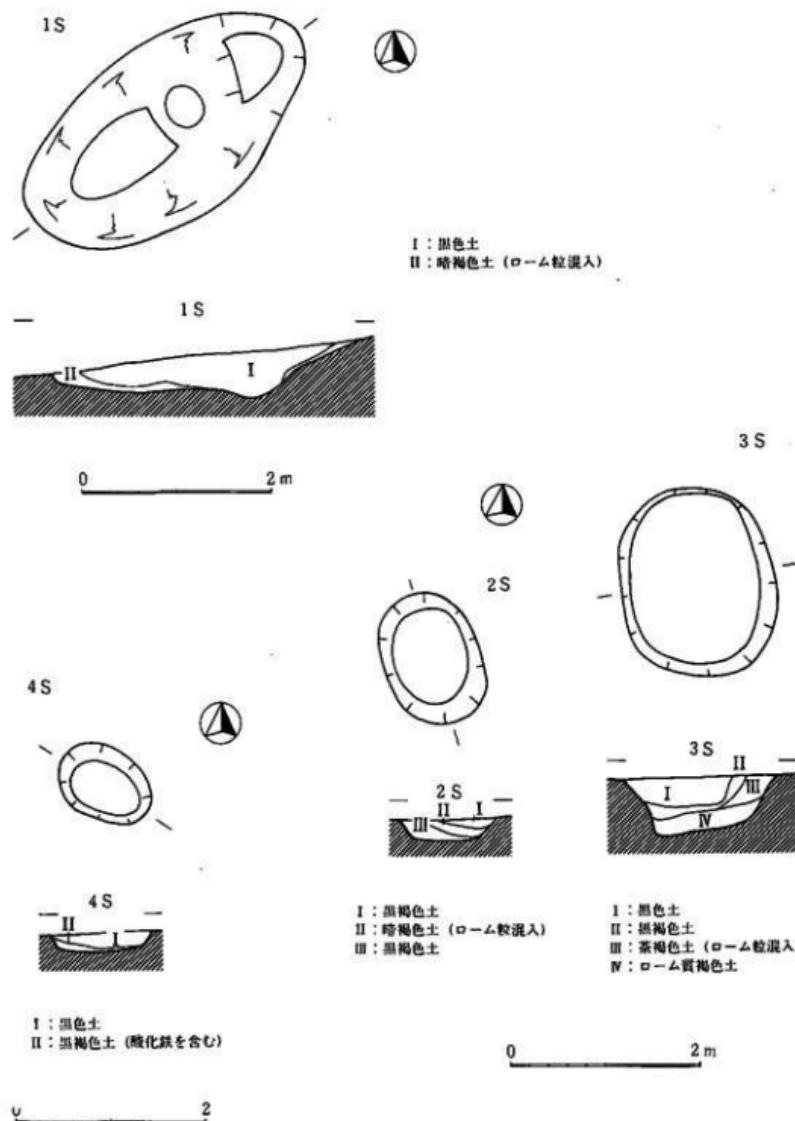
小竪穴は計4基が検出された。1～3号は、調査区南側においてローム層に掘り込まれて検出され、4号は、調査区北西部で暗褐色土に掘り込まれた黒色土の落ち込みとして検出された。平面形はいずれも楕円形で、1号が336×184mで最大規模を計った。断面形は、1号が擂鉢状、他はタライ状であった。

保存状態が良かったものとしては、第3号小竪穴があげられる。ローム層を深く掘り込んであり、確認規模200×163cm、底面規模182×136cm、深さ59cmであった。

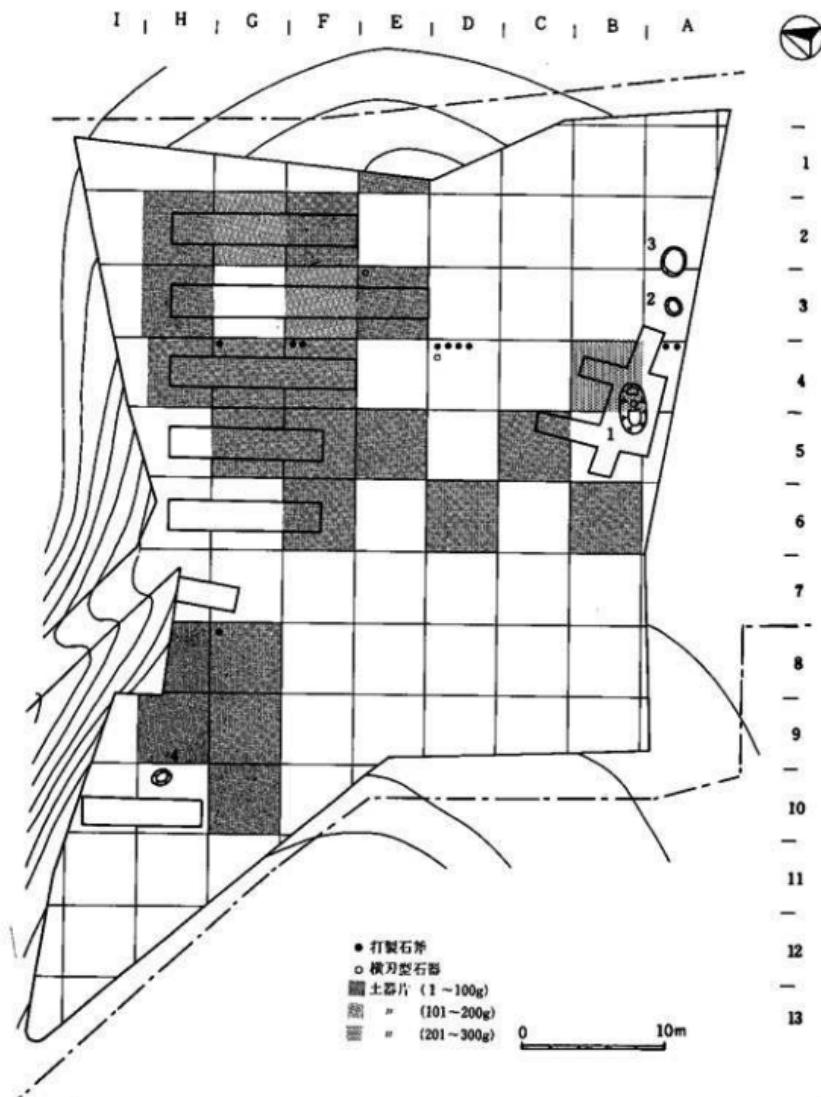
覆土はいずれも黒色土を主体とする。遺物の出土はみられず、時期、性格ともに不明である。

第38表 ヨケ遺跡小竪穴一覧表

No.	確認規模	平面形	主軸方向	断面形	底面規模	底面	深さ	備考
1	336×184	椭円	N-67°-E	擂鉢状	44×39cm	二段丸底	48cm	
2	140×101	"	N-30°-W	タライ状	99×77	やや丸底	21	
3	200×163	"	N-3°-W	"	182×136	平坦	59	
4	101×75	"	N-43°-W	"	74×47	やや丸底	18	



第419図 小竪穴



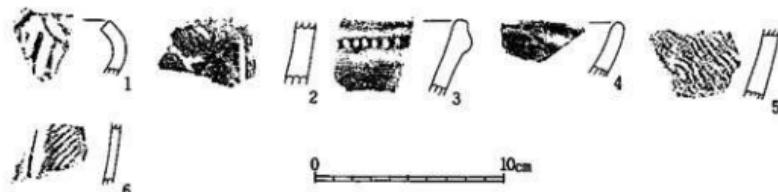
第420図 遺物出土状態

2) 遺構外遺物

縄文時代 縄文時代に属する遺物としては、土器片と打製石斧・横刃型石器の石器類がある。石器片は、少破片が少量出土したのみで、極めて貧弱である。図示可能のものは、図の6片にすぎない。1は、キャリバー状を呈する口縁部の破片で、細い隆線を用いて渦巻を施している。2は、蛇行沈線に、斜行する沈線文を施したものである。1、2とも中期後葉に属するものであろう。3は、口縁部破片で、口唇部下に隆帯を一条巡らし、隆帯上に刺突文を加えている。後期前半に属するだろう。4は、無文の口縁部破片。5・6は縄文施文の土器片で、6は垂下する細隆線がみられる。以上の6片は、調査区域内の4・8区を中心に出土している。

石器は、12点が得られ、打製石斧10、横刃型石器2がその内訳である。このほかに黒曜石片が少量出土している。1~3は、ほぼ完形の短冊形で、1・3は原石面を大きく残す。刃部は、1・3が直、2が円である。4は、頭部を欠く。5~7・9は、撥形を量する。周縁に細かな加工を施し整形しているが、中央部は第一次刺離痕を大きく残している。9は、刃部を欠く。6は直刃状、7は円刃状を呈する。8は、すんぐりとした重量感あふれた石斧で、加工は粗雑。10、11は横刃型石器である。10は、背部が大きく山形をなし、11は円弧状の背部を呈す。周縁にわずかな加工を加えるだけで、第一次刺離の際得られる鋭い縁を刃として利用している。10は部厚く、11は薄平、軽量である。12は、刃片の縁にわずかな加工を施したもので、石斧状を呈するが、横刃型石器とも考えられよう。石器は、D~Fの4区に特に集中した出土が認められる。

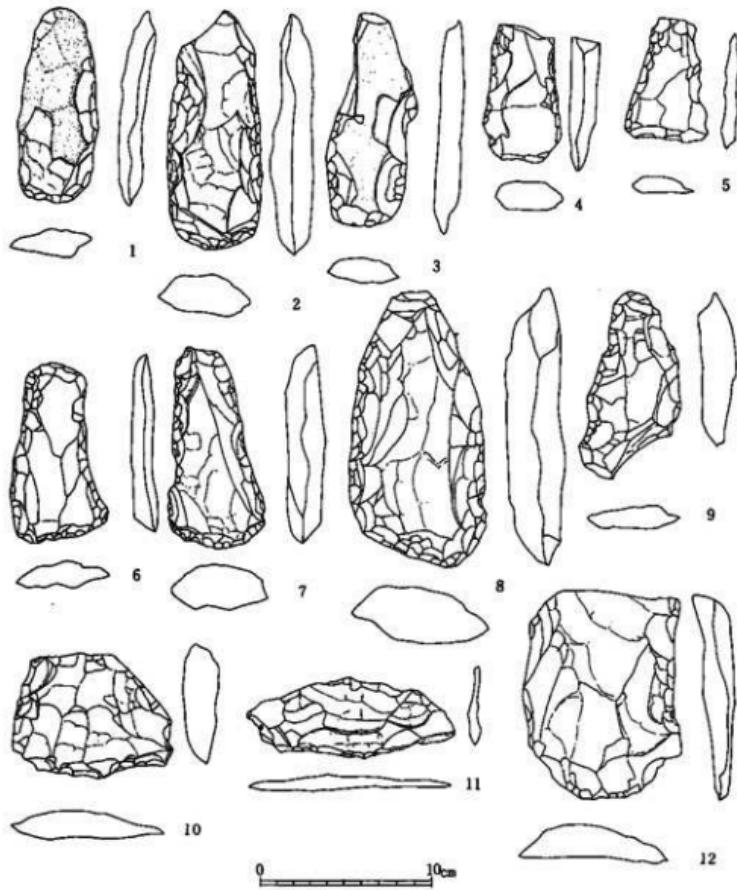
今回調査した調査区域から 80m 東方には、中央道長野線の工事に関連して調査が実施されている。そこで得られた知見は、縄文早期押型文、前記・中期・後期の土器片がわずかと、80点余りの打製石斧と石鎌などが出土し、前記の土壤が1基検出されている。住居址の未検出、出土土器の様相、打製石斧の多量出土は、バイパス部分での調査結果と同じであり、広範囲にわたる遺物の散布は、集落遺跡とは異なる性格の遺跡であることを示していく。



第421図 縄文時代出土土器

土器観察表

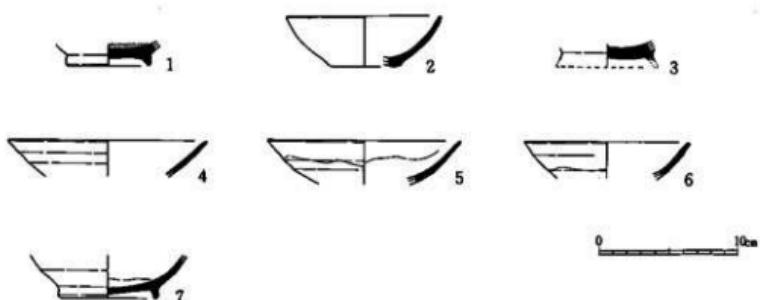
番号	調査区	種別	部位	文様構成要素	表面調整外/内	地	備考
1	F-4	深鉢	口縁	ねじれ	/ナナ	長石・岩片	
2	F-6	×	斜	沈線	/ナナ	*	
3	H-8	×	口縁	隆帯・刺目	BL/ナナ	*	
4	G-8	×	×		ナナ/ナナ	*	
5	G-4	×	腹	縄文	/ナナ	石英・長石	
6	F-4	×	×	隆縁	/ナナ	*	岩片



第422図 出土石器

石器観察表

番号	遺構	種別	石質	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	特徴
1	G-8	打製石斧	頁岩	110	47	16	90	
2	F-4	#	"	135	56	21	210	
3	D-4	#	細粒凝灰岩	121	47	14	130	
4	G-4	#	頁岩	78	44	16	65	
5	A-4	#	"	47	79	9	30	
6	F-4	#	"	102	54	15	80	
7	D-4	#	"	116	56	26	190	
8	D-4	#	"	157	77	31	530	
9	D-4	#	"	106	48	12	85	刀部欠
10	E-3	橢円型石器	細粒凝灰岩	71	93	18	1,000	
11	D-4	#	頁岩	46	121	9	50	
12	A-4	打製石斧	"	113	92	19	260	



第423図 平安時代出土遺物

土器観察表

No.	種別	器形	寸法(cm)		色調		成形・装飾の特徴	備考
			口径	底径	脚高	外面		
1	土師	片	5.6			黒	ロクロナデ、回転糸切り、体部内面ミガキ	黒色処理、F-2出土
2	*	*	10.8	4.8	3.5	茶赤褐	*	G-2出土
3	*	*				茶褐	茶褐	G-2
4	灰釉	塊	14.0			灰白	*	G-4
5	*	*	13.6			*	*	G-2
6	*	*	11.6			*	*	G-2
7	*	*	6.6			*	回転ヘラケズリ	G-2

平安時代 土師器塊、灰釉陶器塊が少量出土した。これらの遺物は調査区北側の斜面の下に位置するG-2グリットに集中しており、黒色土中より出土した。(1)、(3)は土師の高台付塊で、いずれも体部内面にはミガキが施されており、また(1)は黒色処理されている。底部には回転糸切り痕が認められる。(4)～(7)は灰釉の塊である。(7)は底部に回転ヘラケズリ痕が認められる。

6まとめ

ヨケ遺跡は、南・北側をそれぞれ台地にはさまれた谷底にある。谷は西に向かって開き、北側台地上には樋口遺跡があり、急な斜面をもって本遺跡と接している。

調査では、小豈穴4と、縄文中期・後期土器片、打製石斧、横刃形石器、黒曜石・チャート片、平安時代の土師器塊、灰釉陶器塊の破片が少量づつ出土した。ヨケ遺跡は、すでに中央道長野線建設工事に先立ち、今回調査地点から80m東方の地点が発掘調査されている。この時の調査では、縄文早期・前期・中期・後期の土器片・打製石斧・石鎌・弥生時代土器片・平安時代土師器塊、灰釉陶器塊・皿・壺が出土し、縄文前期に属すると思われる小豈穴1が検出された。

出土遺物、検出遺構は両地点とも類似性が強く、この遺跡は少なくとも東西に延びた谷底80m以上にわたる広範囲をその領域とする大きな遺跡であることが知られる。現在でも小河川が流れ、河川敷のように荒れた谷底であり、とても居住には適さず、また出土遺物は小片、少量である点などから流れ込みの可能性が強い。台地上の樋口遺跡方面からの流れ込みであるかもしれない。

第三章 調査 遺跡

出土遺物では、中央道調査区を含めて90点以上の出土をみた打製石斧の多量さは注目される。縄文中期に属すると思われるが、この区域を対象とした生産活動の結果であろう。そうした意味では近隣の中期集落との関係追求が今後の課題となろう。

第IV章 結 語

国道20号線塩尻バイパス建設に伴う発掘調査が、市内桟敷区の向陽台・北原両遺跡で同時に開始されたのは昭和60年4月のことでした。以来、3ヶ年にわたる発掘調査も長歴区のヨケ遺跡を最後に7遺跡すべて終了し、今こうして調査報告書が刊行されることになりました。発掘された遺跡の中には以前から注目されていたものもありましたが、今回の調査は、当初の期待を遙かに上まわる多くの新知見を提供してくれました。特に向陽台遺跡から確認された縄文時代早期押型文期の大形住居址、集落址、集石炉と伴出遺物はこれまでの常識を覆すべき大発見となり、やはり同遺跡から出土した縄文時代前期中越期の一括資料や弥生集落址とともに今後の関連研究に大いなる新風を吹き込むことになります。また台地下の中挾遺跡では縄文時代から中世に至るまでの集落址が克明に露呈され、田川を挟んで対峙する奈良時代を中心とした和平遺跡の集落址とともに付近が当時、絶好なる経済環境に、そして交通の要衝にあったことが判明されました。さらに現在、県を中心として調査が進められております東山道の物的証拠として、今回、ほぼ同時期に発掘調査が実施された中央道長野線の成果と併せて意義ある一資料を投げかけることになると思われます。

現在、バイパスも今春の工事完成と供用開始を目指して最終段階に来ており、本報告書が刊行される頃には真新しいアスファルトの上を車の流れが往来していることと思いますが、対照的に道路下に埋もれた今回の遺跡はすでに消滅の運命をたどりました。塩尻市内では今までに240余の遺跡が確認されており数字的に決して少なくありませんが、これらの遺跡にしてももちろん永久的なものとは言えません。近年の急激な開発によって恐ろしい速さで減少しており、しかも調査をされることなく消えていく遺跡さえ数多くあります。先行して実施される発掘調査も万全ではありません。調査も遺跡から見れば破壊者に変わりないからです。一度調査された遺跡は完全に元に戻ることはなく、かろうじて記録が残され遺物が再び私たちの目の前に触れる程度です。私たちの共有の財産として守り、未来へ受け渡していくためにも、関係者の十分なる理解と安易な妥協によらない埋文保護行政が要求されることになるでしょう。

最後になりましたが、本調査に御尽力いただいた市教育委員会並びに調査員の方々、御指導や御助言をいただきました多くの先駆者、発掘に直接御協力いただきました地元作業員、出土品整理に従事していただいた諸氏をはじめ、発掘・整理等に深い御協力と御理解をいただいた建設省関東地方建設局長野国道工事事務所の関係者の皆様に厚く御礼申し上げ謝意をいたします。

図 版



和
平
路

向
馬
古
道



和手遺跡



和手遺跡調査区全景(Ⅰ期、東側から)

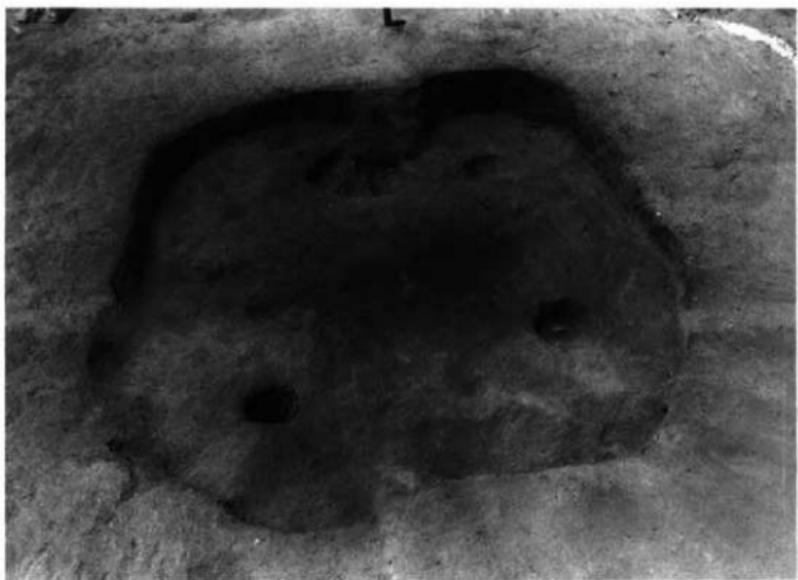
図版 4



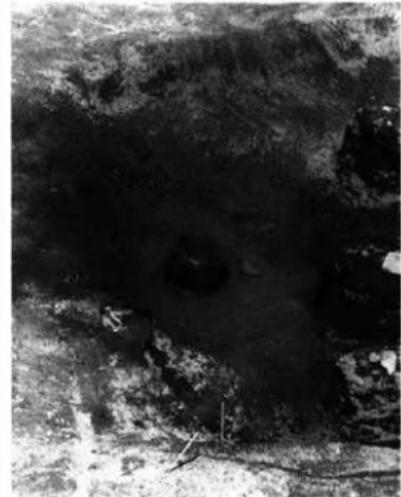
和手遺跡調査区全景(Ⅰ期、西側から)



和手遺跡調査区全景(Ⅱ期、東側から)



第12号住居址



第12号住居址土器出土状態

図版 6

第12号住居址出土櫃



第12号住居址出土土器



第12号住居址出土土器





第13号住居址

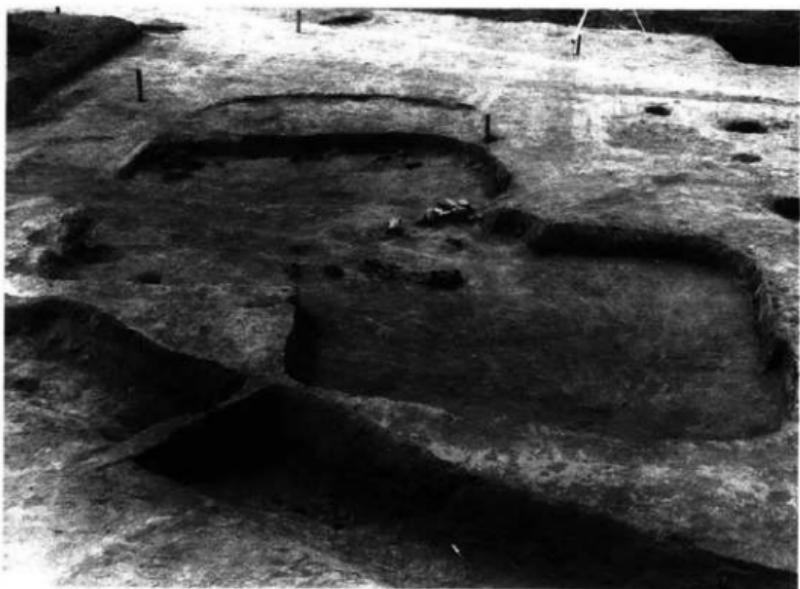


第14号住居址



第14号住居址出土土器

図版 8



手前から15・16・17号住居址



第16号住居址カマド

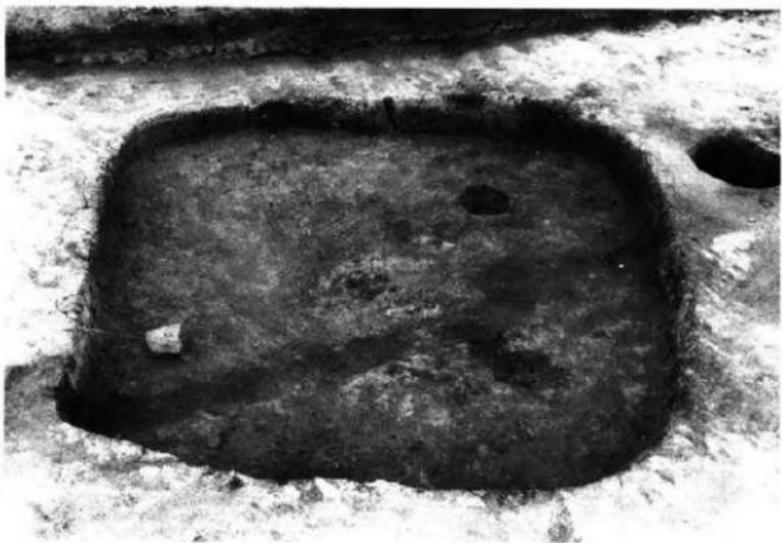
第16号住居址出土土器



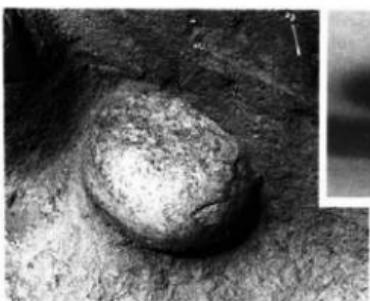
第16号住居址出土土器



図版 10



第18号住居址



第18号住居址出土土器

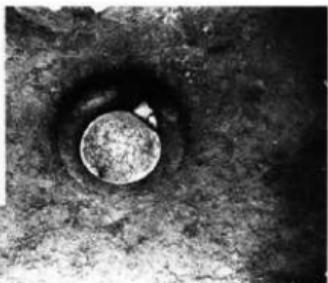




第19号住居址



第19号住居址出土土器

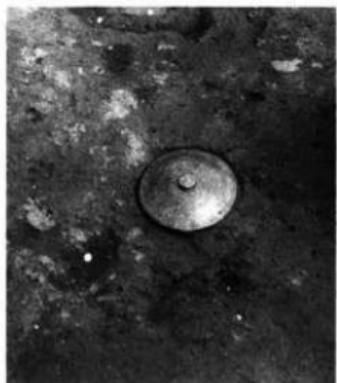


図版 12



第20号住居址





第20号住居址環蓋出土状態



第20号住居址縄物用石錐出土状態



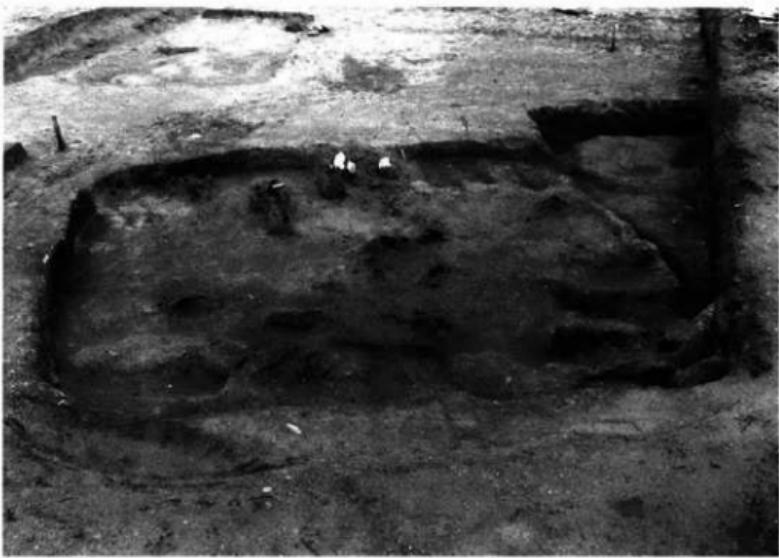
第20号住居址出土土器



図版 14



第21号住居址



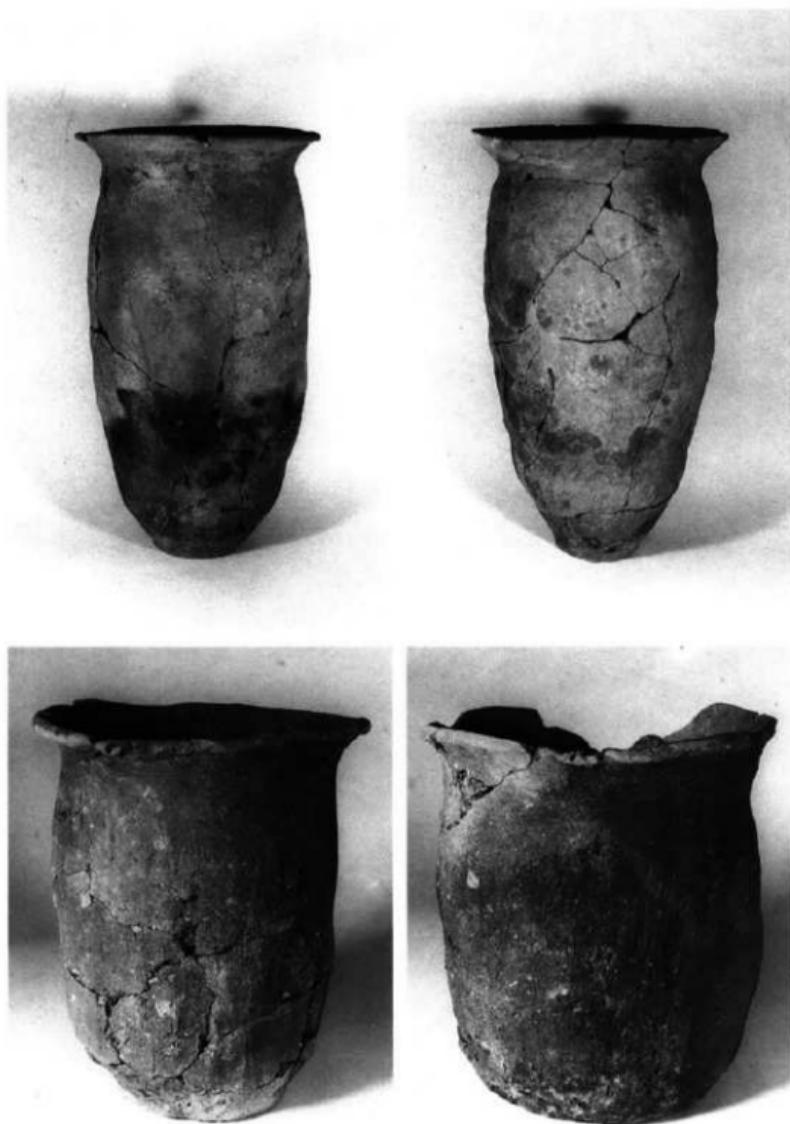
第22号住居址

図版 15



第22号住居址炭化材、遺物出土状態

図版 16



第22号住居址出土土器



第22号住居址出土土器

図版 18



第23号住居址



第23号住居址 カマド



第23号住居址出土織物用石錐



第23号住居址出土土器

図版 20



第24号住居址



第24号住居址遺物出土状態

第24号住居址出土土器

